大正十四年八月一日發行（每月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

1-1925

八月號

第四十年　第九號　第四百五十一號


朝と食後のクラブ歯磨
クラブ煉歯磨
歯の爲に一番よい
クラブ歯刷子
CREAM
MARK
食後の含嗽用
クラブ水歯磨



月　　　小杉未醒筆

大正十四年

中央公論

八月一日發行

八月號

第四十年第九號

第四百五十一號

不景氣の國民的意義

一七八八年の佛に、その翌年の佛を讀みえた者は恐らくは一人もなかつた。一九一四年初夏の伯林城廓の内外に、それの五年足らずの將來を夢想だにしえた者が一人もなかつたよりさへも、これは考察を挑む現象だ。

社會變化――それの最も望ましい唯一形が社會進化だ――の行く先きは、往々にして、時人の無知を極度に殘酷に證據立てる。比較的に早く、そして理由の意識を具備したかたちに於て、それの必然または必要を知る人々があつた場合に、われらは、かれらを、先覺者だつたと追稱する。

わが國の不景氣は、それのいはば勃發以來、五年を經た今日、漸くにして、總體的重壓を實感的に國民に與へ始めた。いまは、國民は、それの意味を自己に問ひ、隣人に問ふ興味を、公私論談の世界を特徴的に賑はせても、決して病的と診斷することは出來ない實事情にある。

しかし、事實として、不景氣は、單純に實感されつゝある概景が餘りにいちじるしくはないか。進んでそれの理由を問ひ、意味を尋ねる興味は、殆ど索然としてそれの形象を示さない。これは甘心すべき狀態でないと考へる。不景氣そのものよりも、この理由的、意味的無關心狀態の方が、遙かに寒心すべき性質を帶んでゐると考へる。

政治家や論客によつてすでに發表された程度の不景氣研究は、原因論として、隨つてまた理想論として、概しては、最も重要な點を無視したものであるやうに略解される。それは、技術に於て長脚であり、原則の反省と創造に於て短脚である遺憾さを、われらの欲想にむかつては與へる。

經濟組織及び政治組織の改善の餘地を餘りに不充分に意識してゐる種類の政策と意見とに對しては、われらは、綜合的方法の見地からして適當の感謝を獻げることに躊躇しないが、その適當さは、幸か不幸かは別問題として、未發現の政策と輿論が早く充分に發現することを、この問題の解決のための最も生命的な要件として豫想する性質のものだ。眞實に國民生活的、社會的意義ある各種生產者に、國內的機會の全部、すくなくとも代表的部分を所有された日本が、進化的新日本であつて、この目途が明確に意識されてゐない對策には、われらは、國民として、極めて細い信賴を繫げうるに過ぎない。

社會進化は、いつでも、社會的生產主義者が社會的消費主義者に取つて代はることによつて可能にされた。

支那問題がわが國民に與ふる試錬

恐らくは地理的環境に因る習性の遺存に制せられて、われら日本國民は、自國の國際的環境に對して全然新たな注意と絕對的に必要とする現代に及んで、なほかつ、全く不釣合に、その注意に於て缺乏してゐる。目下の支那問題の場合が、また不幸にしてこれを例證する。

世論の概全を見るに、支那が、從來の國際的卑屈狀態から、國際的自由狀態へ進化することには贊成だといふ、またそれは、日本自身のためにも必要だといふ見解をば敢て否定しないながらに、最近に支那が採用し始めた方法に對しては、良心的にか、多少それにそむいてか、英國の普通の男女でゝもがいひさうなことを苦もなげに言ひ散らしてゐる。深慨をあたひしないわけにゆかない現象だと考へる。

不釣合になまぬるい、不適切な一例として、私は、曾てアメリカは、英國から獨立したことが善かつたか、さうだつたとすれば、事實アメリカが採用した方法よりも平和的な方法がありえたか否かを、一問として新たに考察して見ることの價値を想はずにはゐられない。上の例は、實に物足らない一例だ。十八世紀末の歐洲の或部分、わが社會の最近の或部分、そのほか、あれ、これと、同一原則の適切な例は數限りもなく想起される。

平和はたつとい。しかし、最もたつといかたちの平和を實現するために必要な方法が、時あつてか、いはば外科療方的なものであるほかなかつたことは、人類の歷史が不幸にしてこれを炳示する。人類の性質が、いはゆる現代の最高文明國民の性質でさへもが、絕對に强制を不必要とする完全道德質のものだとは、事實がいはさない。いまの場合、支那の方法に對する批判力、評價力がなにであるかを見ることは、その人の對支觀念構成力の一至要所を見ることだ。日本は、いく多の意味に於て、國際的卑屈支那が、早く國際的自由支那に進化することを、わが事の如くにも切實に欲すべき特殊の位置にある。理性人としては、なに國、なに民族のなに人もそれを欲すべき理由をつひに自己に發見しないことは出來ないが、日本は、最もその事業と意思に對して眞に道德的な友意を、隨つて實援を、傾倒してこそ有望國民と見ることの出來る事情を持つ。

日本自身の進化的再生が、しかしながら、この問題の場合にも、一とつの先行的至要件であることを、いかに考索を重ねてもつひに否定することは絕望的難事だ。——杉 孝次郎——

中央公論



第四十年第九號
八月號
第四百五十一號

政費の膨脹と稅制整理

法學博士 渡邊鐵藏

(一) 稅制整理の由來

歐洲大戰爭に依つて關係列國の政費が驚くべき膨脹を來した事は人の知る如くであるが、之等の政費の增加に對しては、英國の如く出來得る丈け租稅に依る方針を執つたものと、獨逸の如く公債に依つたものとの間には、戰後の財政狀態に就いても大なる相違が生じて居る。戰後孰れの國も軍事費の縮少に依つて、政費は急に或程度迄減少し、且つ大正

九年以後の物價下落に依つて自然に減額もした。乍併獨逸の如きは、ベルサイユ條約に基く賠償履行の爲め、政費は殆んど減少せざるのみか、增加の傾向があり、佛蘭西の如きも戰爭に依つて破壞された地方の恢復のために巨額の經費を要し、これに對しては獨逸の賠償金を充當することになつて居るが、事實は不足であつて、矢張佛國民の負擔となり、戰爭終了後と雖も膨脹した政費は減退する模樣はない。戰時、戰後の列强政費金額の增加は、軍事費の增加の外、通貨の膨脹に依る貨幣價値の下落が此數字を大ならしめたものである事は云ふまでもないが、殊に獨佛、就中獨逸の如く貨幣價値の激烈な下落を來した國に於ては此影響は最も著るしい。從つて政費の緊縮は、軍事費の減少、其他の政費の節約に依つても生ずるが、物價の下落、貨幣制度の恢復に依つて寧ろ著るしく數字的の減少を來し得る國もある。併し戰後疲弊した國民に對して、財政の負擔を減ずる爲めには、寧ろ出來得る限り軍事支出の減少を計ると共に、戰時の特別負擔を除き、猶進んでは一般的負擔の減少均衡を圖る必要がある。貨幣制度の恢復、公債の整理は、經濟取引と財政を安定ならしめる手段であるが、他方に租稅改革を行つて、戰後の各國の狀況と國民の資力に應ずる如く負擔の輕減、均衡を計る事は各國政府の急務とする處であつて、各國共に戰後直ちに之れに從事し、英國は果斷的な豫算大引策を執り、租稅負擔の減少を圖り、獨逸は戰後社會主義的政府の成立すると共に、直ちに根本的の租稅改革を行つて、戰後の國情の變化と財政の負擔に適應せんとして居る。

我國も亦歐洲戰爭に參加した結果、軍事費の膨脹を來し　他方に一般物價の騰貴に伴ふ政費の膨脹を見て、其結果中央政府の歲出豫算は、開戰當時の五億七千萬より、最高大正十年度には約十六億に達し、其後政府は極力政費節約、豫算緊縮を行はんとし　數回の財政整理、行政整理を行つたが、戰後經濟界の不況に加ふるに、大正十二年の大震災は只に罹災地のみならず、全國の經濟力に重大な打擊を加へたのであるから、一層中央、地方の財政に對して緊縮の手段を

中央公論



第四十年第九號
八月號
第四百五十一號

政費の膨脹と税制整理

法學博士 渡邊鐵藏

(一) 税制整理の由來

歐洲大戰爭に依つて關係列國の政費が驚くべき膨脹を來した事は人の知る如くであるが、之等の政費の增加に對しては、英國の如く出來得る丈け租税に依る方針を執つたものと、獨逸の如く公債に依つたものとの間には、戰後の財政狀態に就いても大なる相違が生じて居る。戰後孰れの國も軍事費の縮少に依つて、政費は急に或程度迄減少し、且つ大正

九年以後の物價下落に依つて自然に減額もした。乍併獨逸の如きは、ベルサイユ條約に基く賠償履行の爲め、政費は殆んど減少せざるのみか、增加の傾向があり、佛蘭西の如きも戰爭に依つて破壞された地方の恢復のために巨額の經費を要し、これに對しては獨逸の賠償金を充當することになつて居るが、事實は不足であつて、矢張佛國民の負擔となり、戰爭終了後と雖も膨脹した政費は減退する模樣はない。戰時、戰後の列强政費金額の增加は、軍事費の增加の外、通貨の膨脹に依る貨幣價値の下落が此數字を大ならしめたものである事は云ふまでもないが、殊に獨佛、就中獨逸の如く貨幣價値の激烈な下落を來した國に於ては此影響は最も著るしい。從つて政費の緊縮は、軍事費の減少、其他の政費の節約に依つても生ずるが、物價の下落、貨幣制度の恢復に依つて寧ろ著るしく數字的の減少を來し得る國もある。併し戰後疲弊した國民に對して、財政の負擔を減ずる爲めには、寧ろ出來得る限り軍事支出の減少を計ると共に、戰時の特別負擔を除き、猶進んでは一般的負擔の減少均衡を圖る必要がある。貨幣制度の恢復、公債の整理は、經濟取引と財政を安定ならしめる手段であるが、他方に租稅改革を行つて、戰後の各國の狀況と國民の資力に應ずる如く負擔の輕減、均衡を計る事は各國政府の急務とする處であつて、各國共に戰後直ちに之れに從事し、英國は果斷的な豫算天引策を執り、租稅負擔の減少を圖り、獨逸は戰後社會主義的政府の成立すると共に、直ちに根本的の租稅改革を行つて、戰後の國情の變化と財政の負擔に適應せんとして居る。

我國も亦歐洲戰爭に參加した結果、軍事費の膨脹を來し　他方に一般物貨の騰貴に伴ふ政費の膨脹を見て、其結果中央政府の歲出豫算は、開戰當時の五億七千萬より、最高大正十年度には約十六億に達し、其後政府は極力政費節約、豫算緊縮を行はんとし　數回の財政整理、行政整理を行つたが、戰後經濟界の不況に加ふるに、大正十二年の大震災は只に罹災地のみならず、全國の經濟力に重大な打擊を加へたのであるから、一層中央、地方の財政に對して緊縮の手段を

中央公論



第四十年第九號
八月號
第四百五十一號

政費の膨脹と税制整理

法學博士　渡邊鐵藏

(一)　税制整理の由來

歐洲大戰爭に依つて關係列國の政費が驚くべき膨脹を來した事は人の知る如くであるが、之等の政費の増加に對しては、英國の如く出來得る丈け租税に依る方針を執つたものと、獨逸の如く公債に依つたものとの間には、戰後の財政狀態に就いても大なる相違が生じて居る。戰後孰れの國も軍事費の縮少に依つて、政費は急に或程度迄減少し、且つ大正

九年以後の物價下落に依つて自然に減額もした。乍併獨逸の如きは、ベルサイユ條約に基く賠償履行の爲め、政費は殆んど減少せざるのみか、增加の傾向があり、佛蘭西の如きも戰爭に依つて破壞された地方の恢復のために巨額の經費を要し、これに對しては獨逸の賠償金を充當することになつて居るが、事實は不足であつて、矢張佛國民の負擔となり、戰爭終了後と雖も膨脹した政費は減退する模樣はない。戰時、戰後の列强政費金額の增加は、軍事費の增加の外、通貨の膨脹に依る貨幣價値の下落が此數字を大ならしめたものである事は云ふまでもないが、殊に獨佛、就中獨逸の如く貨幣價値の激烈な下落を來した國に於ては此影響は最も著るしい。從つて政費の緊縮は、軍事費の減少、其他の政費の節約に依つても生ずるが、物價の下落、貨幣制度の恢復に依つて寧ろ著るしく數字的の減少を來し得る國もある。併し戰後疲弊した國民に對して、財政の負擔を減ずる爲めには、寧ろ出來得る限り軍事支出の減少を計ると共に、戰時の特別負擔を除き、猶進んでは一般的負擔の減少均衡を圖る必要がある。貨幣制度の恢復、公債の整理は、經濟取引と財政を安定ならしめる手段であるが、他方に租稅改革を行つて、戰後の各國の狀況と國民の資力に應ずる如く負擔の輕減、均衡を計る事は各國政府の急務とする處であつて、各國共に戰後直ちに之れに從事し、英國は果斷的な豫算天引策を執り、租稅負擔の減少を圖り、獨逸は戰後社會主義的政府の成立すると共に、直ちに根本的の租稅改革を行つて、戰後の國情の變化と財政の負擔に適應せんとして居る。

我國も亦歐洲戰爭に參加した結果、軍事費の膨脹を來し　他方に一般物貨の騰貴に伴ふ政費の膨脹を見て、其結果中央政府の歲出豫算は、開戰當時の五億七千萬より、最高大正十年度には約十六億に達し、其後政府は極力政費節約、豫算緊縮を行はんとし　數回の財政整理、行政整理を行つたが、戰後經濟界の不況に加ふるに、大正十二年の大震災は只に罹災地のみならず、全國の經濟力に重大な打擊を加へたのであるから、一層中央、地方の財政に對して緊縮の手段を

執る必要の增加した事は疑を容れぬ。

我國の租稅體系は、元來獨逸の制度を模倣して來たものであつて、地方政費は附加稅主義を基本として居る故、一時の急場凌ぎに附加稅率を增加して姑息の策を執つた事も多い。又地方の戸數割、其他國稅にも不合理な租稅が一時の急に應ずる爲め設定されたものも多い。僅か二十年の間に日清、日露の兩戰役を經て、其軍費支辨に財政上臨機の負擔を課する必要が多く、又產業、教育、衞生、土木等の維新以後の目醒しき發達に伴ふ政費の增加は著るしいものであるから、急激な政費の膨脹に對して、財政計畫上、就中租稅の賦課に於ても、多少の無理の生ずる事も止むを得ない。變化が急激であれば、之れに對する對策が常に合理的であり得る事は固より困難な事である。殊に今回の歐洲大戰爭の經濟界及び財政に及ぼす大攪亂を見たのであるから、只さへ根本的の改革の必要の痛感せられて居た我國の租稅制度は、既に一應臨機の財政行政整理を終つた今日、特に根本的改革を加ふべき時期に在る。租稅制度の根本的改革論は、大震災前に於ても既に發生し、臨時財政經濟調査會の如きは鋭意其方針の樹立に努力して居た。大震災は其實行を頓挫せしめたが、小康を得た今日は寧ろ此根本的大改革の必要を痛感せしむる原因となつて居る。租稅政策、租稅制度の基礎の大變革を斷行をするが如き事は、革命政府でなければ能くし得ない事であつて、又政治上それ程の大變革を必要としなかつた國に於ては、多年の歷史的進化に應じて、新たな情勢に應ずる合理的の改革を行へば足りるのであつて、稅制の根本的改革とは云へ、國稅、地方稅の體系を根本的に覆す如き事は實行不可能であり、又其必要もない。但し現下の我國の情勢は單に姑息の稅率、課稅標準等の變更を要求するに止まらず、負擔の輕減、負擔の均衡、中央、地方の租稅體系の整理等の目的を到達するため、可なりの英斷を以て大改革を加へるべき必要が迫つて居る。

(二) 世界的政費の增加

歐洲大戰爭以來、列强の政費の激增した事は前に述べた通りであるが、其以前と雖も政費の增加は世界的の大勢である。ナポレオン戰爭後佛蘭西政府の大臣ヴ井レール氏は、當時初めて十億法に達した豫算の承認を求めるに當つて、斯くの如き巨額の豫算の計上されることは今後決して之れを見る事を得ないであらうといふことを豫言した。併しながら事實は之れに反して、孰れの國の政府も其後豫算の減少を見たものはなかつた。更に回顧すれば今日に至るまで、約二世紀の間に亘つて、各國の政費は間斷なき增加を生じて居る。農業時代に於ては國民の經濟活動も、政府の事業も單純であつて、恐らく今日の如き政費の多端を豫想し得たものはなかつたに相違ない。然るに產業革命後の經濟と文明の發達國家統一に依る政治的變化は俄然として政務と政費の增加を來し、他方に不斷の人口增加、富源の開發、都市の繁榮、國家の對立は、一方工業と商業を發達せしむると共に、從來農業時代に見なかつた多端の政務と巨額の中央、地方の政費を要求するやうになつた。而て最初は之等の政費は主として商工業、其他產業の發達の爲めに用ひられた處が多かつたが、二十世紀に入つては更にデモクラシーの爲め、即ち國民福利のために巨額の政費を必要とするやうになつた。歐洲大戰爭後に至つて、特に此國民福利のため、即ち社會政策のために巨額の政策が費されることになつたことは、單にヨーロツパのみならず、世界の大勢である。政治的組織の上に於けるデモクラシーの普及より少し遲れて國家施設、財政の上に於けるデモクラシーが擡頭して來た次第である。即ち昔の單純なる內治、外交の政務に加ふるに、敎育、衞生、公共事業、殊に產業助長の重要な政務が加り、更に國民利福のための政務が加つたのである。我國に於ても明治、大正の間に此變遷を來して居る事は何人も認める處であらう。元來中央、地方の官吏はデモクラシーや社會政策

を口にすることさへ忌むだが、歐洲に勞働省が起つた如く、我國の中央、地方の行政にも社會局、社會課等が出現し、之れに附隨して各種の同趣旨の團體が出來て、公費又は半公の經費が益々此方面に増加せんとして居る。要するに産業、文化の發達と、其缺點の除却、双方のために各國の政費は近來益々増加する傾向がある。

封建制度が廢れて、統一された立憲國家が成立すれば、各國民の軍事費負擔は當然減少すべき筈であるやうだが、寧ろ反對に軍事費は國家主義（ナショナリズム）の發達と共に増加して居る。其後多くの國には政治組織にデモクラシーが發達して來たが、政治上のデモクラシーは決して軍國主義（ミリタリズム）を衰退せしむるものではない。或國ではデモクラシーの勝利に依つて、王侯の宮庭に於ける豪奢の費用を減ずる事を得たかも知れぬが、産業の助長と軍事に關する費用は從來と同じやうに必要である。否、加ふるに絶えざる人口の増加と、通貨の膨張は自然的に政費を増加せしむるものであるから、政治上の組織如何を問はず、近代各國共に著るしき政費増加の事實に直面して居る。

乍併政費の増加は必しも直ちに國民に對する負擔の程度の増加となり、國民を苦しめるものとは云ひ得ない。固より同一金額を國民に課しても、賦課の方法如何に依つて國民に對する苦痛の程度は大差あるが、近年は所得に應じて負擔を課する傾向が著るしい故、個人的の所得又國民的所得の増加が之れに伴へば、政府の政費の増加は必しも負擔の増加とならず、又一個人當り政費賦課の數字は増加しても、之れを負擔するに就て苦痛が増加する譯ではない。一例を擧げて見れば、北米合衆國の如きは千八百五十年より千九百十二年に至る期間に於て、中央政府の經費は十六倍に増加して居る。乍併同一期間に於て國の富は二十七倍に増加して居る。然らば政費の増加必しも國民の苦痛とする處ではない。斯くの如き状態は程度に於てこそ差異はあれ、英國や獨逸、佛蘭西其他ヨーロッパ諸國に於て同一の事情であると思はれる。

我國に於ても明治維新以後、産業の發達に伴つて、個人所得、國富の增進は歐米人を驚かすものがあるのであるから、政費の增加は勿論、國民負擔の程度の增加を來したものと見る事が出來ない。明治二十六年度の一般會計歳出豫算は八千萬圓强に過ぎないが、之れに對して近年の歳出豫算は約二十倍に達して居る。此間に於て我國富が幾倍の增加を來したかは數字材料を求めるのに苦む次第であるが、一端の材料として、我國の農業、工業、商業、鑛山業、交通業等に投ぜられた國民資力の變化を見るに、明治三十年に於ては之等の事業會社の拂込資本及び積立金の總計額は五億九千四百萬圓に過ぎなかつたが、大正十一年に於ては百十二億三千萬圓に達して居る。即ち此期間に十九倍の增加を見て居る。又我國の全國銀行に於ける預金の總額の增加を見るに、明治三十年に於ては三億五千萬に過ぎなかつたものが、大正十年末には百四億一千萬圓に達して居る。即ち此間に約三十倍の激增を示して居る。勿論之等は國民資力の一端を示すに過ぎず、個人所得、國富の總額を示すものではないが、單に上記の政費の增加に對する國民負擔力の存在を示す材料としては十分であらうと思ふ。要するに國富の增加さへあれば、政費の增加は必しも憂ふべきことではない。

今歐洲戰爭前十年即ち千九百三年の會計年度に於ける各國政府の人口一人當りの政費を比較して見ると、中央政府、地方行政區域、自治體等の政費を一切合して、米國は四十四圓、英國は七十八圓、佛國は四十六圓、伊太利は二十八圓、獨逸は八十八圓、日本は十圓になる勘定である。而して開戰前年の千九百十三年に於ては、米國六十六圓、英國八十圓、佛國六十五圓、伊太利四十四圓、獨逸百三十二圓、日本十七圓となつて居る。勿論之等の數字の中には中央政府より地方政府に與へられた金額等が重複して居る點もあり、又中央政府、地方公共團體の企業に關する數字も含まれて居る故、比較に不正確な點もある。殊に政府企業に關する支出は、獨逸の如き公營企業の盛な國に於ては、此國の一人當り政費負擔額を著るしく高める結果になつて居る。

（三）政費に對する戰爭の影響

歐洲大戰爭は軍事專門家と雖も殆んど想像することの出來なかつた、計算を超越した驚くべき經費を要せしめた。其の影響は全世界を通じて經濟組織に重大な破壞的な影響を與へ、將來數十年の間其影響が繼續するに相違ない。戰爭に依つて破壞された資本及び富はもとより全世界民が毎年貯蓄し得たものより遙かに大であつた故、全世界は今日明らかに戰爭前より貧しくなつて居る。然るに他方各國政府の要する政費は千九百十四年に比較して多く、戰爭終了數年後の今日に於ても數倍に止つて居る。戰時中に於ては、各國政府は努めて地方政府の支出を抑制して中央財源の涵養を計つた。而て戰爭終了直後の千九百十九年度に於ては各國の中央地方の政費を合したものゝ國民一人當り金額は米國は三百五十七圓、英國は五百八十八圓、佛蘭西は五百四十六圓、伊太利は三百五十二圓、獨逸は四百九十圓、日本は二十六圓當りになつて居る。戰爭當初に比して各國政費が斯くの如き激增を來したことは、勿論大部分は通貨膨張、物價騰貴に原因するものである。此故に今戰爭前の購買力を基礎として一人當りの負擔を計算すれば（前の數字を開戰當時の物價指數を基礎とした卸賣物價指數を以て除して得たもの）右の數字は次のやうになる。即ち一人當り政費負擔は米國百七十五圓、英國二百六十圓、佛國百六十八圓、伊太利九十二圓、獨逸二百二十七圓、日本十二圓となる。（註）――以上の數字又以下の參考表は米國の國民産業協議會（ナショナル、インダストリアル、コンファレンス、ボード）から出た租稅と國民收入といふ冊子に基くもので、各國の政費を平時の平價（パー）で弗に換算したものを、更に私が便宜のため假りに弗を二圓と計算して引用したものである――戰爭終了後に於ては各國各自の貨幣に依つて計算された政費は、米國及び英國に於ては著るしく減少して居るが、佛蘭西に於ては殆んど其減少を見ない。それは戰爭に依る荒廢地復興に關する重い負擔のためである。獨逸に在つては驚くべき通貨膨張に伴つて公共的生

活管理、公營企業等に對する補助金、及び各種の復舊費等が馬克計算に於ける政費を驚くべき數字に達せしめて居る。

戰後財政に於て一つの著るしい現象は地方政府の政費の巨額の增加である。殊に米國、英國、佛國、伊太利等に於ては其狀態が著るしい。地方の公共的改良事業は、戰時の緊急の必要に應ずるため一時放棄されて居たが、今や再び此方面に對して各種の事業が計畫されるやうになつて、既に貧窮に陷れる各國の經濟的資力に對して更に重い要求を爲すやうになつたのである。乍併戰爭終了後に於ては物價の下落、軍事費の減少、政費節約等に依つて、多くの國は政費が減少して千九百二十年――千九百二十一年の會計年度に於ては、國民一人當り負擔は、平價で換算して、米國、百七十四圓、英國、三百二十八圓、佛國、五百三十圓、伊太利、三百二十四圓、日本三十六圓、となつて居る。更に之れを戰前の購買力を基礎として換算すれば一人當り政費、米國は九十圓、英國は百二十一圓、佛國は百五十四圓、伊太利は五十一圓、獨逸は百十二圓、日本十六圓といふ計算になる。(別表參照)

列强ノ政府歲出表

第壹表　北米合衆國　單位百萬

會計年度	合衆國政府	洲政府	市(人口參萬以上)	其他	總計	邦貨換算 總額	邦貨換算 一人當り
年	弗	弗	弗	弗		圓	圓
一、九〇三	六一六	一八五	四六八	五〇一	一、七七三	三、五四六	四四
一、九一三	九五二	三八二	九五九	三八五	三、一七九	六、三五八	六六
一、九一四	一、〇一八				三、三八一	六、七六二	六八
一、九一五	一、〇四七	四九〇	一、〇五七		三、五六五	七、一三〇	七〇
一、九一六	一、〇四八	五〇五	一、〇四三		三、五六二	七、一二四	七〇
一、九一七	二、四〇五	五一三	一、〇八一		四、九九一	九、九八二	九六
一、九一八	九、三一二	五六一	一、一四四		一二、〇四二	二四、〇八四	二三〇

年 一、九一九	弗 一五、七四〇	〃 六三五	〃 一、二〇一		一八、六三七	圓 三七、二七四	圓 三五七
一、九二〇	六、一一二				九、九二〇	一九、八四〇	一八六
一、九二一	四、八四九				九、三七三	一八、七四六	一七四

註　空欄ニ記入スベキ數字ハ推定ノ上總計中ニ計上サル以下皆同ジ

第貳表　英國　單位百萬

會計年度期末三月卅一日	中央政府	地方政府 イングランドウエールス	地方政府 スコットランド	地方政府 アイルランド	總計	邦貨換算 總額	邦貨換算 一人當り
年 一、九〇三	磅 一九四	〃 一二八	〃 一七	〃 六	〃 三四六	圓 三、三七〇	圓 七八
一、九一三	一八八	一五八	二〇	八	三七六	三、六六四	八〇
一、九一四	一九七	一六九	二二	八	三九七	三、八六八	八二
一、九一五	五六〇	一七五	二二	八	七六七	七、四六八	一六二
一、九一六	一、五五九	一六五	二二	八	一、七五五	一七、〇八八	三七〇
一、九一七	二、一九八	一六一	二二	八	二、三九一	二三、二七四	五〇四
一、九一八	二、六九六	一七三		九	二、九〇一	二八、二四〇	六一二
一、九一九	二、五七九			一〇	二、七九二	二七、一七六	五八八
一、九二〇	一、六六五				一、九九五	一九、〇三六	四〇四
一、九二一	一、一九五				一、五九五	一五、五二八	三二八

第參表　佛國　單位百萬

會計年度	中央政府	地方政府 縣	地方政府 自治體	總計	邦貨換算 總額	邦貨換算 一人當り
年 一、九〇三	法 三、五九七	〃 三五一	〃 七八四	〃 四、七三二	圓 一、八二六	圓 四六

年	磅	〃	〃	〃	円	円
一、九一二	四、七四二		九九七	六、二八〇	二、四二四	六〇
一、九一三	五、〇六六	六一四	一、〇三九	六、七二〇	二、五九四	六四
一、九一四	一〇、三七一	五五九	一、〇九三	一二、〇二四	四、六四二	一一六
一、九一五	二二、一二〇	五一五		二三、七八三	九、一八〇	二三〇
一、九一六	三六、八四八	五三〇		三八、五七一	一四、八八八	三七四
一、九一七	四四、六六一			四六、四六三	一七、九三四	四五二
一、九一八	五六、六四九			五八、五二一	二二、五九〇	五七〇
一、九一九	五四、二一三			五六、一五五	二一、六七六	五四六
一、九二〇	五八、一四三			六〇、一五五	二三、二二二	五九二
一、九二一	五二、〇二三			五四、一〇五	二〇、八八四	五三〇

第四表　獨國　單位百萬

會計年度	中央政府	各國政府	地方政府	總計	邦貨換算 總額	邦貨換算 一人當り
年	マルク	〃	〃	〃	圓	圓
一、九〇四	二、三五七	四、八二九	三、六七〇	一〇、八五六	五、一六六	八八
一、九一三	二、八九三	七、五一二	八、四二五	一八、八三一	八、九六二	一三二
一、九一四	二、五三七	八、五〇七	八、五〇七	一九、五五二	九、三〇六	一三六
一、九一五	八、六五三	七、八八六	八、七二三	二五、二六三	一二、〇二四	一七六
一、九一六	二五、七〇八	七、〇三四	八、四〇三	四一、一四五	一九、五八四	二八八
一、九一七	二七、七四〇	六、九七一	九、九七〇	四四、六八二	二一、二六八	三一四
一、九一八	五二、〇一五	七、五三二	一一、九四五	七一、四九三	二三、〇三〇	五〇八
一、九一九	四四、〇三〇	九・六三四		六九、〇七〇	三二、八七六	四九〇
一、九二〇	七四、四〇五			一二二、〇〇〇	五八、〇〇〇	九六〇
一、九二一	一〇二、五七五			一八〇、〇〇〇	八五、六〇〇	一、四〇二

第五表　日本　單位百萬

會計年度	中央政府	縣	郡	市	町村	總計 總額	總計 一人當り
一、九〇三	二八九	五六		二五	六八	四四五	一〇
一、九一三	五九三	九三	一〇	一〇五	一二二	九二四	一七
一、九一四	五七三	九五	九	九三	一一一	八九四	一七
一、九一五	六四八	一〇二	一〇	八二	一二四	九六八	一八
一、九一六	五八三	一〇一	一〇	七六	一二二	八九四	一六
一、九一七	五九〇	九七	一〇	九〇	一三〇	九一八	一七
一、九一八	七三五	一〇四	一二	一一八	一四三	一、一一三	二〇
一、九一九	一、〇一七	一四一	一四	一三八	一五一	一、四六三	二六
一、九二〇	一、一七二	一九五		一六五	二〇六	一、七五五	三一
一、九二一	一、二三四	二一四		二四九	三二二	二、〇四四	三六

第六表　戰前ノ購買力ニ換算シタル一人當リ政費

會計年度	北米合衆國	英國	佛國	獨國	日本	伊國
一、九〇二—〇三	四四、六八	八一、二四	四七、五六	八八、一四	九、九二	二七、八二
一、九一二—一三	六六、三八	七九、八〇	六一、〇六	一三三、八四	一七、二六	四三、六〇
一、九一三—一四	六九、五六	八〇、一六	六五、三八	一三七、三〇	一六、六〇	四三、〇四
一、九一四—一五	七二、七〇	一五三、一八	一一四、九二	一六八、七〇	一八、八〇	六二、九四
一、九一五—一六	六三、四二	二七九、二四	一六五、一八	二〇三、七〇	一六、八八	七四、七二
一、九一六—一七	六六、〇六	二九七、六四	一九九、九八	二〇七、七二	一四、三八	八六、〇四

一九一七—一八年	一二三、九八円	二八九、五八円	一七二、八六円	二八九、四〇円	一二、四〇円	七六、九〇円
一、九一八—一九	一七五、二四	二六〇、五四	一六八、二八	二二七、一八	一二、八〇	九二、六四
一、九一九—二〇	七七、二四	一五四、七八	一五三、七六	二三三、〇八	一一、八〇	五一、〇八
一、九二〇—二一	八九、六四	一二一、一六	一一六、三八	一一二、一八	一五、六八	五一、〇六

(四) 我國政費の膨脹

我國の政費の近年著るしく膨脹したる事實は、既に各國の例と共に論じた處であるが、維新以來産業の發達、教育の振興、土木、衛生費の增加、國防費の增加等は其主なる原因であつて、人口增加、物價騰貴の趨勢も亦我國に於ても政費膨脹の一原因となつて居る。殊に僅か數十年の間に日淸、日露、歐洲の大戰爭に參加したことであるから、國費の膨脹は止むを得ず、日淸戰爭後國費は直ちに倍加し、日露戰爭後數年にして再び倍加し、今回の大戰中に更に又倍加して居る。戰爭每に我國の國家的地位の向上することは喜ぶべきことであるが、今や或は五大國の一と云ひ、又三大國の一として誇り得るに至つた一方、戰爭每に政費が倍加する事實が存在して居る。

之れを明治二十四年以來の狀況に就いて見るに、當時の國庫歲出を百とすれば、戰前大正二年には既に六倍以上に達し、大正十年には最高限に達して十八倍弱となつて居る。其後少しの減少があつたに過ぎない。他方、地方歲出の方を顧みれば明治二十四年の歲出を百とすれば戰前大正二年には七倍强となり、其後引續き增進して大正十三年に至つて三十倍といふ驚くべき增加である。更に大正二年を基礎として考へれば國庫歲出は現在までに二倍三分の一增加し、地方歲出は四倍の增加を示して居る。左記の數字を見れば此變化が明かとなる。

政費增加ノ狀況

	國庫歳出 單位百萬圓	指數	地方歳出 單位百萬圓	指數
明治二十四年	八三	一〇〇	四三	一〇〇
大正二年	五七三	六八七	三二七	七四六
大正十年	一、四九〇	一、七八二	一、〇九二	二、四九〇
大正十三年	一、三四七	一、六一二	一、三一九	三、〇〇六

右の歳出中大分部は國民の租税に依つて負擔せらるるものであるが、右の期間に於ける租税負擔の變化を見るに、明治二十四年を基礎とすれば、國税は戰前、大正二年、五・六倍となり、大正十一年に最高點に達して十四倍となつて、地方税は大正二年に六倍となり、最高大正十一年には約二十倍となつて居る。而て戰前大正二年に對して大正十三年には國税、地方税を合したものは二・三倍になつて居る。詳細は左表の示す通りである。

國税と地方税の比較（大正十三年度）

	實數 單位百萬圓		指數		一人當 單位錢	
	國税	地方税	國税	地方税	國税	地方税
明治二十四年	六四	三〇	一〇〇	一〇〇	一、五一	七五
大正二年	三六六	一八一	五六八	六〇三	六、五七	三、三四
大正十一年	八九六	五九八	一、三九〇	一、九九〇	一六、〇一	一〇、六八
大正十三年	七一一	五七一	一、一〇四	一、九〇三	一二、七二	一〇、二二

右の如く三十餘年間に政費總額が二十一倍となり、租税總額が十三倍となつたことは驚くべき變化であるが、最初に述べた如く、國富及び個人所得が此期間に於てそれに相應する增加を示して居れば、國民の負擔に對しては苦痛を感ぜ

じめる程度に至らぬ。此期間に我國の各種産業會社に投ぜられた資金が約二十倍となり、國民の總預金が約三十倍となつた事既記の如くであるとすれば、之れを全般的にいへば、一般國民が負擔の過重を苦しむ必要がないやうにも考へられる。乍併全體として負擔の増加が財産、所得の増加と相伴ふとしても、負擔の公平が期せられないかぎりは、金額の多い丈け或方面に於て苦痛を感ずる者を生ずる。玆に租税負擔の公平を計る實際上の必要が存在する。又歐洲大戰終了の際迄は、國富、所得の増進を見た事は明かであるが、大正九年以後に於ては其増加を來すべき理由なく、況んや大正十二年の大震災後に於ておや。

元來英米の如く土地、各種の富源が豐富であつて、我國民に對して或物は數倍、或物は數十倍、數百倍に上る重要物産を有する國に於ては、資本の蓄積が容易であつて、個人の財産所得の増加も驚くべきものがある。從つて其擔税力は異常の速度を以て増進したのである。斯かる惠まれた歐米諸國すら米國を除くの外は、大戰爭の影響に依つて破壞されたる國民經濟は、財政の負擔に困難を感じて、果斷なる減縮方針を執つて居る。況んや我國の如く資本の蓄積力弱き國に在つて、大戰の好況より戰後の不況と震災の打撃を被つては歐米以上の緊縮方針を執るのが當然の事である。殊に富源に乏しく、能率、經營の劣れる我國に於て金利、勞銀、物價等が戰後外國に對して著るしく高く止つて居る現狀に於ては、産業の振興は當分望み得ない事である。然らば今後國民所得の増加は當分停滯するものと考へねばなるまい。之等の點より考へれば國民負擔の輕減は切實な要求に迫られて居る。然るに前に述べた如く大戰終了後列強の國民負擔は直ちに輕減されて居るに拘はらず、我國に於ては國民の負擔は大正十一年に至る迄引續いて増加して居た。之れ他國に其例を見ざる處である。勿論戰後加藤友三郎内閣は財政の緊縮に着手し、現加藤内閣も亦既に一應の財政、行政整理を行つたが、未だ徹底的に負擔の輕減を計る手段を執るには其暇がなかつた。此故に税制の大改革は嘗て計畫せられ、震災

のため挫折したが、今や正に之れを斷行すべき最後の時期に到達して居る。

（五）　稅制整理の必要

稅制整理の必要なる事は今や繰返して說く必要はないが、目下我國の稅制を整理するに當つて着目すべき要點は、第一に負擔の輕減を計る事、第二に負擔の公平を計る事、第三に中央と地方との租稅體系を整理することにある。負擔の輕減を計る必要のあることは前述した事に依つて明かであるが、租稅體系中にある缺點を矯正し、同時に貧富所得の懸隔の益々大ならんとする今日に當つては、新らしき租稅政策を用ひて負擔の公平を計る事が更に重要である。殊に我國の實際問題としては、既に述べた如く地方稅の負擔の增加が頗る急激であつて、寧ろ租稅改革の起つた眞因を探れば、地方附加稅負擔の過重にあるとも云ひ得る。此故に政治的に見れば一方普通選擧の實施に伴つて國稅收入の體系に、新時代に適應する色彩を加へ、他方地方附加稅に對して或程度の整理改革を施す必要がある。又一時の財政上の緊急に迫られて、姑息の手段として課した所謂惡稅と稱せられるものも此機會に於て整理せらるべきは當然の事である。

稅制整理に就いては既に臨時財政經濟調査會の有力な報告書があり、全國商業會議所、各種の研究團體等の意見が發表されて居り、新聞紙上にも種々の意見が發表され、現內閣又稅制調査會を設けて、周到なる議論の後に今や將に其成果を得んとして居る。而も世上傳へられる政府の整理案なるものは、大體に於て時勢の要求に合して居るものと認められるが、玆に簡單ながら稅制整理の要點に就いて私見を述べたいと思ふ。

租稅中賦課すべき根據のなきものは固より之れを廢止すべきものであるが、國稅中通行稅、織物消費稅、醬油造石稅、石油消費稅、賣藥營業稅、賣藥印紙稅等は負擔力なき者、又は必要品、或は工業用品に課稅する惡稅として諸方面

より非難されて居るが、政府が通行税、綿織物消費税、賣藥印紙税、自家用醤油税に就いては廢止の意志がある如くであつて、其當を得たものと思はれる。併し近來税制整理の中心問題となつたものは營業税の廢止、又は地方移讓の問題である。今租税制度に關する理論を喋々する餘裕を有たぬが、營業税が所得税に對する補完税であるに拘はらず、之れに地方附加税が加はる結果として其の負擔かなりに重く、殊に外形的課税標準に依るため收益のなき場合にも徴税される事が納税者の苦痛、不平の聲となつて現れるに至つたものであらう。營業税は國税に於ては其税額所得税の三分の一であるが、地方税に於ては所得税附加税の二倍強に當つて居る。即ち國税額を見れば所得税に對しては補完税として適當の割合にあると云ひ得るが、地方税に於て寧ろ補完税である營業税が多い事は、只に負擔の過重を感ぜしむるのみならず、收益のない場合に於て外形的課税標準に禍せられる納税の苦痛とは即ち營業税反對の聲を生ぜしめた原因であらう。從つて實際問題としては、營業税の地方税額を二分ノ一或は三分ノ一に減ずるか、若くは外形的課税標準を改めれば、營業税廢止若くは地方移讓の聲も起らなかつたのであらう。營業税は所得税と異なり、地方税とすべき性質を多分に有するものであるが、徴税技術上、營業所々在地の關係、工場と販賣所との關係、其他徴税に煩鎖困難を感ずるならば必しも地方に移讓する必要はない。所得税に對する補完税として不動産所有者に地租あり、營業所得者に營業税あり、といふ見方で國税として存置するもよからう。問題の要點は國税、地方税が二重に課せらるゝ結果として、過重に陷らざることゝ、外形的標準に依る結果として、收益なきに虐課税して所得税に對する補完の作用を營むといふ作用を外れて苛斂誅求に陷らざる用意さへあればよい事と思ふ。最近傳へられる政府の整理案に於て、營業税の外形標準に依る課税方法を廢し、各營業者の申告に依り營業所得を認知し、之れに依つて課税するとの事が事實であれば、大體穩當なる整理方法といふ事が出來やう。勿論將來所得税の徴税技術が完全になれば營業税の全廢も亦可能であらうが、各國の税制

には各々發達の沿革がある故、機熟さヽれば重要なる國税の改廢は容易には決行し難い事であらう。營業税を收益税として見る時は所得税と全然重復するとの議論もあるが、重復課税、附加税等も限度さへ守れば勿論是認すべき事である。二重、三重の抵當が行はれるのと同じ理屈であらう。營業税と相對して重要なる問題となつて居るものは、地租の輕減又は移讓の問題である。孰れの租税と雖も輕減が出來れば之れに越した事はない。地租に關して特に輕減の必要ありや否やは他の租税に對しての比較的の徴税額と納税者の負擔力の問題を考慮せねばならぬ。既掲の數字に依ると大正十一年頃には我國の產業に投ぜられた會社資金約百十億圓、銀行預金百億、之れに個人企業の資金を併せて合計二百五十億と概算出來るが、之れに對し平均八分の收益ありと見れば約二十億圓の純所得があると見做し得る。之れに對して大正十三年度に於ては國税地方税合して約一億九千萬圓の所得税と同じく併せて一億一千萬圓の營業税がかゝつて居る。即ち合計三億の税がかゝつてゐると見做し得る。純所得に對し約一割五分の負擔と見得る。他方我國の農產物價格は如何に少く見ても二十億圓以上である。之れより生ずる純所得は二割と見ても四億圓である。之れに對して國税、地方税合して大正十三年には一億九千萬圓の地租がかゝつて居る。之れは主として農地の負擔である。農家の純所得に對し半額近くにも相當する。勿論右の國税と收益資源の對照は錯綜した關係にある故、當座の思ひつきで斯かゝる比較をすることは不正確ではあるが、一應の試みとして計算して見た次第である。殊に農產價格、農家の純所得は之れを知る事困難である。併し右の試みで見ても農地に對する負擔は餘り輕くないことだけは感ぜられる。但し直接國税は直接税とは云へ、納税者の經營と計算が正確であれば、通常の場合には個人所得に對するものの外必ず最後の消費者に轉嫁せられるのが當然である。地租に於ても農業者の商人に對する取引上の勢力が強力であり、且つ原價計算に精密であれば、一地租は當然常に米價の中に計上されて消費者の負擔となるべきものである。乍併主要農產に就いては、價格は定期取引

市場に於て公定せられ、價格成立に關する生産者の勢力弱く、且つ又農業には豐凶の差があつて、税を負擔すべき收穫物の減少を見る事さへある。勿論凶作に對する減税の緩和はあるにしても、價格成立に關する農業生産者の不利益な立場と、農産物は一年多く一回の收獲であつて、資力なき農家は處分を急ぐ關係上益々商人に對し不利益な立場に立つ。此故に農業者は農産に係る純所得の少いのみならず、租税の轉嫁も思ふまゝに行ひ得ない事情があらう。之等の點は農家の所得が不十分であり、地租に對する負擔が重大に感ぜられる理由であらうと思はれる。此故に、或は田畑地租の輕減、地租免税點の設置等は相當の意義あることゝ思はれる。

之れに反して都會の宅地に就いては、我國に於ては法定地價が甚だ低く、甚しきものは實際地價の數十分の一に足らざるものもある。從つて極言すれば、我國には都會地としての地價には課税がないと云つてもいゝ。此地價を修正して相應の課税をすれば、巨額の收入を增加することが出來る。東京、大阪等の大都市の地租收入を見れば何人も之れを感ずるであらう。東京市のみにても五百萬圓以上の地租收入を增加することは何等の負擔を感ぜしめずして實行し得る。同時に土地投機の弊を抑壓する事も出來る。乍併都市の地價に對する課税は當然之れを其都市の收入に歸屬せしむべきものである。此故に地租を地方に移讓することが、何等徴税の技術上差支ない場合に於ては、之れを地方に移讓することも適當である。土地に對する課税が地方收入となれば、各地方共事情に應じ、必要に從ひて、土地の評價、課税率の決定を行ひ、必要なる收入を擧げることが出來る。土地に改良工事を行ふために巨費を要する都市に在つては、土地に對して合理的の課税權を得ることは絶對的必要の事であると思ふ。但し農地に關しては特に之れを地方税とせねばならぬといふ強い理由もなく、殊に地籍、地價の決定に關して劃一的の制度を必要とする理由が強ければ、強ひて地租を一般的に地方に移讓する必要もなからう。乍併彼の地租の地方移讓は國民精神に害ありと云ふが如き議論は殆んど我

々の了解し難き事實である。此變更に依つて國民精神の統一が阻害される事は想像し難い。要するに現在の實際問題としては強いて地租を地方に移譲する必要もないのであつて、殊に大正十二年度豫算編成に際して政府の地租輕減計畫に反對したる政友會が、議會開會劈頭に於て、憲政會が地租二分減の法案を提出したるに驚いて、當座の對策として農村振興、地租地方移譲の建議案を提出するに至つた如き、無責任な政黨の政略に此重大問題を擔き出されては國民は甚だ迷惑である。殊に營業税の移譲を主張せずして地租の移譲を主張する事は全く其意味を成さぬ。斯くの如く政黨の政略に地租移譲を振廻す如き事は以ての外の事であるが、目下税制整理に面して此問題を如何に解決すべきかと云へば、他に都會地の土地に對して自治體が課税し得る特別市街地租法其他適當な課税の方法さへ認められるならば、地租を移譲する必要もなく、農地の地租は國税として之を存置し、出來得べくんば何等かの輕減を行へば宜しい。乍併此際非常の勢を以て膨脹する都市の土地に對しては、何等か課税の方法を執ることは絶對的必要である事を忘れてはならぬ。此點が從來等閑に附せられたる事は、都市の道路、下水、其他收入なき土地の改良事業に對する適當な財源を失はしめ、都市の改良を阻害したのみならず、他方、他の税目に依つて市民に對して不合理な負擔を課する事にもなつた所以である。

(六) 地方税の整理

今回の税制整理に當つては國税整理よりも寧ろ地方税整理が國民の實際の要求に適合するものであらうと思ふ。大正十三年度に於て國税地租に對して地方税地租は十六割に當つて居る。營業税は國税と地方税と殆んど同額になつて居る。從つて之等の直接税に關して生じた税制整理論も主として地方附加税の過重に原因するのである。加之地方税に在つては戸數割及び同附加税の如く、二億圓餘の巨額に上るものがあつて、これこそ最も地方民の頭上に殆んど堪え難き負擔

を課して居るものである。戸數割は十三年度に於て一戸當り、道府縣、五圓八十錢、市十四圓、町村十九圓八十錢の割になつて居る。地方税總額は一戸當り五十二圓であるが、戸數割は殆んど其半額を占めて居る。而も此戸數割たるや大部分は認定に依つて徴收せられ、最も不公平と見做されて居るものである。地方税總額五億七千萬圓中二億一千萬圓が戸數割に依つて法律の正確なる課税規定を離れて殆んど任意に徴收せられる事は納税者の負擔の苦痛は勿論、立憲政治の精神及び徴税の制度上から云つて看過すべからざることゝ思はれる。今左に最近の内國税中の主要なるもの及び地方税收入の數字を掲ぐる故、之れを對照すれば國民の租税負擔に關する現狀は自ら明確になることゝ思ふ。

内國税 (單位百萬圓)

	大正十一年	十三年
總額	七九八	六七八
地租	七四	七四
所得税	二三五	一六六
營業税	七八	五七
相續税	一二	八
交通税	一〇	九
酒税	二二二	二一七
砂糖消費税	七五	六八
織物消費税	六一	五四
取引所税	一二	九

地方稅歲入　（大正十三年度）

單位百萬圓

	道府縣	市	町村	合計
總額	二二二	八八	二六〇	五七〇
同一人當(單位錢)	三、九六	八、二〇	五、七四	一〇、〇三
地租附加稅	七五	四	三九	一一九
國稅營業稅附加稅	二〇	一九	一一	五一
所得稅附加稅	五	一〇	八	二三
戶數割及同附加稅	四八	九	一五三	二一〇
同一戶當(單位錢)	五、八三	一四、一五	一九、八〇	
家屋稅及同附加稅	八	一二	八	二九
道府縣營業稅及同附加稅	八	二	五	一六
雜種稅及同附加稅	四八	一四	二七	八九
其他諸稅	八	一七	七	三二

次に地方稅中巨額を占めるものは雜種稅及び同附加稅であるが此稅も所謂弱い者いじめの感があつて、自轉車稅、車稅、遊興稅、不動產所得稅、藝妓稅、法人建物稅、演劇稅、興業稅、自働車稅、電柱稅、其他百種類に亙る名儀通りの雜種の稅目が揭げられて居る。此中には勿論課稅目的として好適なものも多いが、稅種餘りに雜多に亙る事と、負擔過重に陷入りやすき弊害がありと思はれる。斯くの如く地方廳がはきだめの隅を漁るが如く、零細餘す處なく名儀のつきそうなものを拾ひ出しては勝手に課稅をするやうな苦しいやり方をするに至つた事は一面に於て地方に纒りたる收入を與ふべき獨立の大きな租稅が與へられて居ない事に原因すると云ひ得る。此點より考ふれば營業稅の如きものを地方に

移譲すると云ふ實際的の理論も立つ。更に又都市の土地に對する特別の土地税を附加する必要も一層強く感ぜられる次第である。

既掲の表に依れば大正十三年度に於ては、國庫歳出に對して地方歳出は殆んど將に同額に達せんとして居る。歐洲戰爭後、交戰諸國に於て國庫歳出が縮少したに反して、地方歳出は寧ろ增加の傾向に在つた如く、我國に於てはそれ以上に地方歳出增加の勢が著るしい。而て現在の如く國庫歳出と地方歳出が同額となる如き狀態に於ては、地方歳出に關する研究は、事務の輕重は扨て措き、財政上より見れば國庫歳出の研究と同一の重要さがあるものと云はねばならぬ。猶又納税者より云へば地方歳出、地方税の研究こそ當面の實際問題として、一層の利害を感ずべきことであらうと思ふ。從來地方財政、地方税に關する政府、政治家、國民の研究、主張の比較的微弱であつたことは寧ろ奇異と云はねばならぬ。

地方歳出額が國庫歳出額に追及し、而も最初に掲げた歐米の國庫歳出と地方歳出の割合に比較すれば、我國の地方歳出が著しく大きいからと云つて、直ちに地方費の濫費を叫ぶことは出來ない。此地方の歳出が如何なる費途に充てられて居るかに依つて判斷が異らねばならぬ。大正十三年度の地方歳出總額十三億二千萬圓中、三億五千六百萬圓は教育費に充てられ、二億三千萬圓は土木費に當てられ、其他公債費、電氣及び瓦斯事業費、役所及び役場費として夫々一億數千萬圓宛使はれて居る。即ち地方歳出中最も巨費を要するものは教育費と土木費、就中前者であると云ひ得る。重要なる直接税を全部國税とし、國家は其他酒税、煙草專賣益金、砂糖消費税、織物消費税等の五千萬、乃至二億圓以上の大收入を生ずる税源を擁し乍ら、重要なる國民教育の費用を大部分地方費に負擔せしむることは地方財政の困窮を誘ひ、收入を掃溜に漁る如き苦勞をしても、猶足らざる狀態を生ぜしめたのではなからうか。此點より見れば教育費の大部分を

地方負擔とする限り、營業税其他の遍りたる税源を、地方に移讓せよといふ相互的議論が立ち得る。從つて營業税は租税の體系上地方に移讓し難いといふならば國家は宜しく國家教育費の大部分を國庫負擔とするか、或は少くとも國民教育に對して更に巨額の國庫補助を地方に分與すべきものであらうと思ふ。それは私の見る處では數千萬を以て數ふべき金額に止まらず、現在の租税制度を以てするならば、國民教育費の二分の一以上を國庫より補助すべきであらうと思ふ。國庫より二億圓の國民教育補助費が支出されても、それは合理的の事であり、又國庫は必要とあれば、それに應ずる財源を求め得る事と考へる。元來が國民教育ではないか。原則として其費用は少くとも大部分國費を以て、支辨すべきではないかと云ひたくなる。政黨者流に非ずとも少くとも如上の地方歳入と事業との關係を見れるものは、教育費國庫負擔の增加の必要を痛感するに相違ない。地方附加税は何故に近來激增するか。戸數割は何が故に怨嗟の聲を顧ずして誅求せられるか。雜種税は何が故に鵜の目鷹の目漁り取られるか。六億圓に近からんとする教育費、土木費を地方費から負擔せねばならぬことを思へば、其依つて來ることは明かである。土木事業を緊縮すべきか、教育費を節約すべきか、前者に就いては多少の繰延を行ひ得るとしても、教育費は之れを許さざるものである。況んや就學難、入學難の聲は到る處に其響を絶たない。國家は宜しく斷呼として自ら國民教育の衝に當るか、若くは地方が無理をせずして、教育を完全にし得る丈けの充分の費用を當然の義務として補助するか、二者孰れか一途に出でなければなるまい。

(七) 新税設定

政府は惡税の廢止、負擔の輕減、負擔の均衡、地方税の整理などを行ふ上に就いて、或場合に於いては右に基く財政上の缺陥を補ふために、他の租税の增徵、若くは新税の設定を行はねばなるまい。又政治上に普通選擧が實行される

に至つたため、財政上に於ても、漸次に此社會の新趨勢に伴ふデモクラチックな租税政策を加味する必要も生じやう。

私は嘗て大震災の復舊に要する臨時財源として、短期間の特別所得税及び別に酒造税收入、煙草益金の一割增收を以て其一部に充てることを主張したことがある。今回の税制整理には勿論震災の影響に依る財政上の必要も伴つて居るが、併し、形式は通常時の税制整理である。從つて普通の議論を以て之れに向はねばならぬが、それでも酒と煙草の値上に依つて一年間三千萬圓の增收を得ることは最も適當の財源であると云はねばならぬ。化粧品に對しても幾何の收入を擧げ得るかは知らぬが、最も適當な税源であることは當時論じた通りである。麥酒税、清涼飲料税等又同様である。近年、社會政策的の租税方針が執られるに從つて、累進率、財產課税、資本課税の論は漸次勢力を得るが、消費税に對しては更に負擔を加へることに就いて理論的に反對する人が多いやうである。又それは一應尤もである。殊に普通選擧の實施されるに及んでは、政治上から云つても消費税を增加することは政府として又政黨として不利益な立場に立つ恐れもある。乍併消費税と雖も生活の必要品と云ひ難きもの、或程度迄其消費の節約を希望すべきものなどに就いては、財政上の必要あれば時にとつて其負擔を增加するも敢て不可はない。寧ろ合理的と云ひ得るものも多い。震災地の復舊を一日も早からしめんがためには酒や煙草の値段が少々高くなる位のことは國民として我慢し得ると考へたのが、之れを以て右の財源に充てることを主張した私の趣旨である。露西亞や米國の例を考へれば斯かる消費に對して多少の負擔の重くなることは現在の我國情に於て當然國民が忍ぶべきことであらうと思ふ。普通選擧後の議會に於て酒や煙草の値上げに反對すれば、或は選擧民から喜ばれるかも知れぬ。併しながら選擧民に對する皮相的の阿諛の精神より政策に對する態度を決せられては國家のため甚だ憂慮すべきことである。酒、煙草の値上を主張する一人として、若し政府が英斷を以て議會に之れを提案した場合に於ける實際の成行を恐れ、或は又政府が提案の勇を缺きはしないかといふことを恐れ

て此言を爲すのである。

次に私の主張したいことは郵便料金の値上げである。之れに對しては識者の間に反對の多いことを不思議に思ふ。勿論通信機關、實業社會等に於ては利害の關係が重大であるから反對の實勢力が多いことであらうが、理屈から云へば當然値上げの理屈はある。端書を二錢、信書を四錢、或は五錢にしたとて一般の公衆はそれ程苦痛を感じない。殊に大戰以來物價、賃金が騰貴したに拘はらず、多大の勞務を要する郵送料が昔のまゝであることは計算上不當の事である。安いが故に濫用される。市内特別配達便の如きは其例である。實例として私の受取る郵便物の幾割は開封せずして反古籠に投入する種類のものである。猶財政上の必要あれば財産税、或は資本利子税を設定すべき必要を生じやう。之等に關しては學者の間に既に、種々の議論あり、又政府數度の調査會に於いても愼重な審議がせられた樣子である。財産税は、財産より生ずる所得は勤勞所得よりも殊に擔税力のある事と、財産を收益なき狀態に於て放置することを防止することゝ、且又財産の自然增加より生ずる不勞所得に對して課税し得る等の理由に依つて主張せられるのであるが、一方財産税は財産の原本を減縮する缺點があり、且又如何なる種類の財産に課税するか、其範圍が困難であり、勢不動産に對して偏重の負擔を課する結果となる惧れもある。又課税價格の決定に於ても種々困難な點を生ずる。此種の租税は貧富の懸隔、財産の所有の程度餘りに烈しき徑庭を生じて社會組織上看過し難き實情を認めた場合に行ふか、或は又戰時非常の際に於て行ふか、孰れにしても特殊の狀況の認められる場合に課税すべきものであつて、非常時の負擔力の彈力を殘す點から云つても、輕々しく之れを設定すべきものではないと思ふ。乍併適當な課税物件に對して極く低い比例率を以て此種の税の賦課を試みに行ふことは將來の參考にもなるかと思はれる。

元來租税進化の沿革から云へば、最初農業時代には人頭税が課せられ、次いで産業發達、資本の增加と共に有形財

產に對して課稅されるやうになつたが、それには富豪を抑壓するに足る丈けの政治上の實力を必要とした。次いで人口の增加と共に各個人のポケットより支出される消費に對して課稅することが、最も好財源と見做され、消費稅が發達し、他方に又財貨を生產する資源に課稅することが正當であるとして土地に關する課稅が發達し、最後に各種の財產及び勤勞より生ずる所得こそ負擔を課するに最も合理的のものであり、又それに堪へる力があるものであると考へられるやうになつて、漸次所得課稅主義が普及するやうになつた。但しこれらの各種の課稅方法は幾分發達の前後はあるが、常に或る程度まで混用され、現在に於ては所得及び財產に課稅する方針が漸次多く行はれ消費稅が之れに加味されてゐる。

右の如く租稅發達の沿革から云へば各人平等より能力に應じて賦課する方針になり、更に收益に依らず負擔能力に應ずる精神が加味され、所得稅、相續稅等に於て累進率が適用されるのみならず、進んで資本課稅、財產課稅が實行されんとするやうになり、資本集中を防止する精神、進んでは財產の再分配（レディストリビューション）を期圖する租稅が加味されるやうになる。

但し我國の目下の狀況に於て勿論內容にもよるが直ちに財產稅を課するや否やは考慮の餘地がある。言葉をかへて云へば、財產稅は其內容如何によつて其贊否を云ひ得る。乍併資本利子稅は有價證券銀行預金等の增加著しき我國の現狀に於て所得稅以外に明確に補足し得るものとして適當の課稅をするも可であらうが、餘りに之れを重課すれば資本の投資蓄積を阻害し、或る場合には之れを祕藏する恐れもある。財產稅、資本利子稅共に新しい理想ではあるが、從來の我國の所得稅其他の內容と其進化の經路とも考へ併せて之れらの新稅の設定については十分の考慮を拂ふべきである。

英米諸國の如く資本の蓄積が容易であり、廣大なる不動產を所有するものと、我國の如く資本の集積それ程でない國柄にあつては稅制の進化に於ても自ら遲速があらう。又社會の狀況、國家の必要に應じては如何なる徵稅を必要とする

に至るやも計られぬが、我國の現狀に於ては大體に於て所得を中心として歲入を計る方向に進むべきが、自然の途ではないかと思はれる。近時政府の復案として世間に傳へられる財政整理案を見れば其行方が殆んど大部分我々の意見と合致するものであるから、聲を大にして呼號すべき點も尠い。

「自由」の歴史的哲學的考察

澤田謙

一

一七八九年のフランス革命が、『自由』と『平等』と『博愛』とをモットーとして、達成されたといふことは、社會史の上で、また社會哲學史の上で、おほくの暗示的意義をふくむ事實である。

第一に、この三つの警語によつて表出された、フランス革命の精神が、近代社會の嚮導觀念として、近代文明の基調をなすものであるといふことは、すでに、おほくの社會學者、社會史家が、明らかにしたところである。こゝに、多言をもちふる必要は、ないかも知れない。しかし、一定の『モットー』が、社會思想として、もろもろの社會現象を嚮導するためには、一定の緊密度において、一體化されてゐなければならない。そこで、フランス革命の、この三つの警語を、近代社會の嚮導觀念として考察するためには、『自由』と『平等』と『博愛』とが、いかなる關係において、交錯し癒着するかといふことを、明らかにしなければならない。

第二に、現代の社會が、内的に分裂する傾向を有し、それから生ずる社會不安にもとづいて、社會改造といふことが、力強く叫ばれるやうになつた。これもまた、縷説をまたざる社會事實である。しかしながら、もし、近代社會をつくり、近代文明を推し進めたものが、フランス革命の精神であるとするならば、この社會内的分裂傾向の思想的背景は、その基調的觀念の内的破綻――すなはち、『自由』と『平等』と『博愛』との背馳――に、求むべきものではなからうか。これが第二の問題となるのである。

私觀をもつてすれば、『自由』と『平等』と『博愛』との三原則は、社會觀念として、かならずしも一體化されらるべき、本然的な癒着關係を有するものではない。それが一體化されるか否かは、その時代の正義觀念または倫理思想の、如何によつて決するのである。いふまでもなく、近代は、個人主義と功利主義の時代である。

そして、その個人主義的・功利主義的なる、倫理思想をもつてするときは、『自由』と『平等』と『博愛』とは、どうしても分裂せざるをえない。すなはち、フランス革命の精神は、內的破綻を、曝露せざるを得ないのである。

たとへば、個人的、功利的な『自由』と、個人的、功利的な『平等』とは、いかにしても、一致しえない背叛觀念である。おの〳〵の『個人』に、功利的な『自由』を與へるといふことは、結局、社會統制原理として、『自由競爭』を認めるといふことであるが、自由競爭は、自然にまた必然に、おの〳〵の『個人』の、功利的『不平等』を豫定するのである。これは、社會を組成する個人の能力が平等でなく、また與へらるゝ社會的機會が、偶然によつて支配さるゝ限り、止むをえない結論であらねばならぬ。

つぎに、個人的・功利的『博愛』といふことは、それ自體が、一つの矛盾概念であるばかりでなく、それは、『自由』とも『平等』とも、はなはだ緣遠い社會觀念である。『平等』なる個人が、『博愛』を要求するはづもないし、個人に『博愛』を要求するといふことは、功利的『自由』の一部を、『個人』から剝奪することで、あらねばならぬ。

しからば、なにゆえ、フランス革命は、かゝる背叛的な三つの原則を、一つの標語として、樹立したのであらうか？に、フランス革命が目途したのは、たゞ『自由』であつたかも、個人的・功利的な『自由』であつた。しかるに、『自由』といふ原則は、もし、個人主義的にまた功利主義的に發達すれば、その『普遍性』と『社會性』とを、全部否定してかゝらなくてはならぬ。しかも、普遍性と社會性とのない社會思想は、嚮導觀念としては、どうしても、不完全たるを脫れない。そこで、妥協的に、別の觀念たる『平等』と『博愛』とを、勝手にもつてきて、『自由』のあとにくつつけたものである。すなはち、近代文明は、『自由』といふ社會思想を建立するために、『平等』によつて普遍性を、『博愛』によつて社會性を、補足することによつて、鼎足的に、觀念の安定を、はからうとしたものである。

ところが、元來、『合せもの』は、『離れもの』である。かういふ次第で、不自然に癒合されてゐた『自由』と『平等』と『博愛』は、時代理念たる個人主義と功利主義との壓力のもとに、繼ぎ目をはなされて、それぞれ、ばら〳〵な獨立觀念になつてしまつた。つぎに起つたことは、この三つの獨立觀念の相關である。そして、結局、本來の主者たる『自由』が、從者たる『平等』と『博愛』とを壓倒して、ひとり社會觀念の王座を獨

占することになつたのである。かくして、近代の文明は、その當然にゆきつくべきところへ、ゆきついたわけであるが、革命主義者の無意識に豫期したであらうところの、三原則の妥協的・鼎足的發達は、つひに實現されないでしまつた。そのことは、同時に、『自由』が、本然の形態としては、內在的にもたねばならぬところの、『普遍性』と『社會性』とを、失つてしまつたことを、意味するものである。――これが、現代社會の內的分裂傾向の、思想的背景である。

わたくしは、この『自由主義の破產』といふ歷史的事實を、率直に認めたい。そして、以下、この『破產』の經過を、やゝ詳細に檢討しつゝ、『自由』の失はれたる普遍性と社會性とを恢復することによつて、文明將來の歸趨に、一考察を加へたいとおもふ。けだし、近代文明の內的破綻は、『自由』の無考察なる發達に所因するものなりと信ずるがゆえに、『自由』に對して、歷史的・哲學的考察をくはふることは、將來文明を建立すべき、重要な礎石をなすべきであると、信ぜざるをえないのである。

しからば、『自由』とは、そもそも、何であるか？その內容は時代によつて、變遷する。これ、『自由』について、歷史的考察を、くはへんとする所以である。そして、かく內容の變遷する『自由』の、本質は何んであるか？ これ、『自由』について、哲學的考察を、くはへんとする所以である。」

二

『自由よ自由よ。いかほどおほくの罪惡が、汝が名によつて行はれし！』にもかゝはらず、われらは、依然として、『自由』に對する欲求を、やめないのである。なにゆえであらうか？われわれ人類は、いくたびか、『自由』といふ美名に、欺かれてゐる。その苦い經驗にもかゝはらず、人類の『自由』に對する憧憬は、すこしも減退しないのみならず、ますます増大してゆく。それは、なにゆえであらうか？――わたくしは、それを、人類のもつ、やむなき『原始』への憧憬の、一つであると解してゐる。

すべて、人類は、一方において、『進化』の法則を信じ、無限の發達を、將來に望洋するにもかゝはらず、他方において、『原始』に對する盲目的な熱愛をたゝないものである。それは、あきらかに、矛盾であらねばならぬ。しかし、その人類の矛盾性は、人類の合理性とおなじく、人類心性の重大なる眞性をなす。そして、人類は、矛盾的に、たへず『原始』を憧憬するのである。『天賦の人權』とか、『自然の法則』とか、『先天的理性』とか――、さういふ超批判的な原理は、これをその根元まで遡つ

てみれば、すべて、人類の原始愛に歸着することを、われ等は發見するであらう。そして、われらの『自由』を愛する心も、またその一つである。

したがつて、その『原始』とは、一つの神話的な樂園である。――神がこの世を創られたとき、『天には光あり、地には平和あり、』人々は、神の園にみのる豐饒から、『自由』にして『平安』なる生活を、享樂してゐたのである。ところが、アダムとエバとが、禁斷の木の實をくつてから、人類はつひに原罪の重荷を負はされて、永遠にその樂園を失つてしまつた。そして、はてしない受難の旅路を、たどることになつた。――さういふ神話的樂園に對する、盲目的な憧憬である。

こゝで重要なことは、この『原罪』の比喩が、單なる『比喩』にとゞまらないで、人類の『信仰』を形ち作つてゐるといふことである。ことに、それは、信仰あつきオウガスチヌスばかりでなく、異端者の異端者たる、チャン・チャック・ルッソーの信仰であるといふことである。かれが、『自由と平等とは、天賦の人權である！』と叫んだとき、人々の胸に描かれたのは、『自由』と『平安』の樂園に、赫々として、日光のごとく戯るゝ、原始人の姿であつたのではなからうか。そして、人類の憧憬する『自由』とは、かゝる『原始』の自由なのである。『自由』の根強さは、そこに出發する。

しかしながら、人類が、原始的自由に對して、盲目的な信をもつてゐるといふ事實は、人類の『自由』に對する欲求の起原を説明するのみであつて、人類進化の努力が、この『原始』への復歸を目標とする、といふ意味では決してない。それは、不可能であるばかりでなく、また社會史的事實に反する。もとより、『社會前』に、かゝる『自由』を想定することによつて、その想定から、『進化の復歸性』を、抽象的に論斷することは、思索的に可能である。（高田博士『社會學原理』一二七三――一二七六）しかしながら、社會現象を對照とする社會學においては、その社會史を、かゝる神話的『自由』にまで、遡らすことはできない。なぜなら、現代の社會史の遡りうるかぎりにおいては、われらは、いづれの時代にも、またいづれの民族にも、かゝる『原始的自由』を、發見することが出來ないからである。かへつて、社會の發達史は、――したがつて、『自由』の發達史は、――『個人的自由』といふ意識が、いまだ發生せざりし、『氏族社會』――シュモラー、ビュッヒャー、ブレンタノなど、歴史派經濟學者の表出をもちふるならば、『經濟單位』と『經濟組織』とが、いまだ分離せざりし、『家属共産體』（Haus-gemeinschaft）または、『血族共産體』（Geschlechtsgemein-

ること）——から、出發しなければならない。

　さらに突つこんで考へるならば、かゝる『原始的自由』を想定するといふこと、それ自體が、すでに近代的であることである。近世の文明が、『個性』の自覺に出發し、『個性』の發展によつて推し進められたといふことは、こゝにあらためて説く要のないほど、それほど學的に明らかな事實である。そして、この個性中心の文明、——概していへば、個人主義文明——が、つねに『個人』を中心として思索するといふこと、そのゆえに、『社會』を組成する『單位』は、つねに『個人』であらねばならぬはづであると獨斷したこと、そして、事實においても、社會單位はつねに個人であつたと誤想したことは、いづれも自然な獨斷・誤想であるといはねばならぬ。然かも、この誤想と獨斷との上に立つかぎり、『原始』は、かならず個人自由の社會でなくてはならぬ。なぜなら、『社會』は、いづれの時代、いづれの國においても、『個人』を單位として、存在すべきもの、また存在したるものであるから、——（これが、個人主義の幻想である）——そして、『社會』は、歴史上、しだいに發達したものであるから、——（これは、或る意味で、眞實である）——したがつて、『原始』には、個人がいまだ社會を組織せざりし時代が、あつたにちがひない。そして、その『原始』の社會的拘束なき『個人』は、絶對的に、『自由』でなくてはならぬ。

　しかしながら、これは、個人主義の幻想であつて、歴史的の事實ではなかつた。そして『事實』によつて、個人主義の『幻想』を破り、正當なる『理論』によつて、個人主義の『獨斷』を倒したものは、歴史派經濟學の功業である。

　この意味で、いまだ『個性』自覺の光に浴せざりし、ギリシヤやローマの哲學者の方が、（おなじく獨斷的であつたとはいへ）、近世の學者よりも、個人の萬能を——といふよりも、個人單位の不滅性を——信じなかつたといふ點においては、たしかに、歴史的事實に近い説を、立てゝゐた。プラートンの『ユートピア』や、アリストテレスの『ホリティックス』を讀むものは、そこに、社會組織を中心とする『社會性』——個人の社會性でなくて、社會の社會性——が、力強く强調されてゐて、『個人を單位とする社會』といふ觀念は、片影だにないといふ事實を、發見するであらう。プラートンが、人種の徳（公正）を、『知慧』と『勇氣』と『節度』とにわかつて、その各個の徳を、社會を組織する三つの階級——『哲人』と『武人』と『勞人』と——に分賦せしめ、はじめて、理想社會の觀念に到達しえたといふことは、『個性』の自己完成と自己目的とを信ずる、近世の個人主義倫理よりすれば、明らかなる妄想であるが『個人』——

或ひは、個性の自己完全――を、單位としなければ、『社會』は成立しえないものであるかの如く、妄想する近世學說よりも、『社會』の有機的『自己目的』を信ずる點において、歷史的事實に近いものと、いはねばならぬ。

アリストートルが、『人は生れながらにして、政治的動物なり』といつた、あの有名な言葉は、近世の個人主義的眼孔からすれば、單に、『個人』のうちに內在する『社會性』を、宣言したものとみえるであらうが、さらに、かれが、その職分論において、武人判官の『支配階級』と、工人生產者の『被支配階級』とを對立せしめ、その關係においてのみ、はじめて、社會生活の運行を認めたといふこと、そして、『社會』の獨自的イデオロジーにおいてのみ、手段として個人行爲を推測しえたといふことは、その理念において、（プラートンと同じく）、いまだ、『社會生活』と『社會行爲』との、分岐を明確に意識しなかつたものと、いはねばならぬ。

プラートンやアリストートルが、かくの如く、社會の有機的自己目的に立論したことは、その私有財產否定論とともに、かれらをして、『共產主義の先驅』なるがごとくに、誤解せしめた理由となつたのであるが、その私有財產の否定論は、近世社會主義のやうに、經濟行爲の『不平等』に基いて主張されたのではなくて、むしろ、經濟行爲そのものの『否認』にある――『經濟生活』の內部に、『經濟行爲』の分立を、認めえないことにある――のであつて、したがつて、その理想社會の形態は、近世社會主義のやうな、個人單位的社會を目標とするのでなく、社會自體の內有的目的の完成を、目標とするものである。この點で、兩者の間には、本質的な差異があり、その差違がまた、時代の社會思想の差異を、闡明してゐるのである。

三

『個人』の自由と『單位』の自由とを識別することは、『自由』の發達史を明確にする上においても、また『自由』の本質を追求する上においても、最も必要なことであるが、この『個人』と『單位』との差別相を明らかにする機緣――すなはち、社會を組織する『單位』は、不易的に『個人』であつたし、また本質的に『個人』でなくてはならぬといふ、個人主義的幻想を破つた機緣――は、意外なところから發足した。

それは、丁度、十九世紀の中葉であつた。西歐の學者が、スラヴ民族の社會經濟制度を研究して、ミール（土地共產制）アルテル（手工業組合）ツアドルガ（家族共產制）などの特質を、あきらかにするに至つて、かれらは、一つの意外なる事實

に逢着したのである。すなはち、これらの諸制度が、『個人』を『單位』とすることとなしに、成立してゐるといふ事實の『發見』であつた。別の言葉でいへば、なんらの『個人性』を要求することゝなしに、一つの共同態の存立が、人類のあいだに、すくなくとも可能である。といふ發見である。

しかしながら、『個人』すなはち『社會單位』といふことを、不易的にまた本質的に、盲信してゐた個人主義時代の學者は、この『發見』から、まだ大きな『發明』を齎らすことはできなかつた。すなはち、かゝる個人を單位とせざる共同態をもつて、社會制度の『變態』となし、かくのごときは、たゞ個人單位不易本質學説の原則に、一二三の例外をなすにすぎぬと、信じてゐたのである。したがつて、この『變態』は、スラヴ民族特有の『民族性』より起るものであつて、この民族性こそ、スラヴ諸國が、近世文化に對應するに無能力なる所以なれと、西歐の學者が罵れば、ロシアのスラヴォフィレンは、この民族的美點こそ、厭はしき社會問題より、ロシアを安全地帶となせる寶玉なれと、自誇して、非科學的なる討論に、耽つてゐたものである。

しかるに、その後の研究は、かゝる愛國的討論が、まつたく不要であるといふ事實を、暴露した。なぜなら、この共有共産制が、『民族性』の問題ではなくて、『時代性』の問題であるといふこと、それが一の民族的『變態』ではなくて、時代的『常態』であるといふことが、事實によつて、立證されたからである。すなはち、サア・ヘンリー・メーンが、この種の村落共産制の遺物を、インドに發見したばかりでなく、古代イギリスにも、ブレオン・ローの下に、かゝる個人を單位とせざる共同態が、發達してゐたといふ事實を、古書によつて證明した。つゞいて、大陸諸國にも、同一の社會制度が存在してゐたことが、オルフゼン、ハンセン、ラムプレヒト等の研究によつて、ます〳〵明らかになつたとともに、ギリシアのエコスに關するロードベルトスの研究、ローマの社會制度に關するクーランジュの研究などによつて、これらの『共有共産制』が、社會制度の『變態』ではなくて、すべての民族が、その發達の經路において、かならず經過せねばならぬところの、『常態』であるといふことが動かすべからざる事實となつたのである。

かくして、シュモラー、ビュッヒャー、ブレンタノなどの、いはゆる歴史派經濟學は、これらの『發見』に基礎をおき、ロシアの『ツアドルガ』のためには、ギリシアの『ゲノス』、ローマの『ゲンス』、ケルト民族の『クラン』、ドイツ民族の『ジッペ』などを伴侶として加へ、これらはすべて、個人を單位とせざ

る社會狀態における家族共產體として、社會制度發達史上の、同一階段における經路的制度であることを、明らかにしたのみならず、さらに進んで、『アイゲン・ロイテ』（中世ドイツにおける土地隸屬民）、『アグラリウム』（フランク王朝の田租制）、『アマースメント』（中世イギリスの上納金制度）、『タイス』（中世イギリスの十分ノ一稅）、『タイユ』（中世フランスの兵役免除稅）、『カウフ・ハウス』（大陸十四世紀ごろの問屋制度）『タイシング』（中世イギリスの十人組制度）『コレギア』（共和時代ローマの隣保組合）『ツンフト』（中世ドイツの職人組合）『ギルド』（封建時代ヨーロッパの職人組合）などの、中間的社會制度の研究によつて、社會制度の發達理論を、完成したのである。それは、諸生物の分立的原始說をくつがへしたところの、ダーウインの『生物進化論』とも比すべき、社會科學上の大發見であつた。

　それでは、これら古代、中世の社會制度の『事實』は、いかなる『理論』を、歷史派經濟學にあたへたか？　歷史派は、これらの研究のうちから、いかなる社會制度發達理論を編みだしたか？

　これを要約するならば、その理論は、『社會制度の發達の經路は、經濟單位の縮小と、經濟組織の擴大とにある』といふにある。ゾムバアトの言葉をかりれば、『經濟行爲分岐の度は、經濟生活社會化の度を決定する。――分化の度は集成の度を決定する』といふにあるのである。すなはち、經濟單位（經濟行爲の主體）が、原始の『血族共產體』『家族共產體』から、共同耕作、强制耕作の『大家族』（Grossenfamilie）となり、さらに、『タイシング』『ギルド』の如き、拘束的經濟活動制を經て、今日の『個人制』『特殊家族制』にまで發達したるに對して、經濟組織（經濟生活の主體）は、自給自足の『孤立經濟』から、『村落經濟』、『莊園經濟』、『都府經濟』、『領域經濟』を經て、今日の『國民經濟』にいたつたものである、といふのである。これを究極すれば、原始社會において、『單位』と『組織』とが、渾然と存立せしものが、しだいに分岐作用をおこして、一方には、單位が『個人』にまで、縮小するとともに、他方には、組織が『國家』にまで、擴大さるゝにいたつた、といふのである。

　そこで、つぎに起る疑問は、かくのごとくに發達しきたれる社會制度の、各階段において、われらの考察の對象たる『自由』は、いかに取り扱はれたか『自由』といふ社會觀念は、これらの社會制度のうちで、いかに發達しきたつたか。といふにある。そして、歷史派經濟學は、この點において、おほくの基

礎的概念をあたふるものである。なぜなら、その研究は、『單位』の自由と、社會單位の組成者たる『個人』の自由とを、峻別することによつて、觀念の混雜を、防止するからである。

四

個人主義哲學は、すべて『個人』を中心として思考する。かるがゆえに、その意味する『自由』とは、すべて、個人の『自由』でなくてはならぬ。しかるに、最も皮肉なことには、『個人』を觀點とするときは、『原始』の社會は、個人主義的近世人の夢想したやうな、樂園的自由の社會ではなくて、かへつて、最も『自由』ならざる社會であつたのである。

尤も、原始社會において、今日考へるやうな、『法律』や『政治』の制度的拘束が强烈であつたといふ意味ではない。原始においては、『單位』と『組織』とが、まだ分岐してゐなかつたゆゑ、法律とか政治とかいふものの、必要がなかつたのである。しかし、かれらは、法律や政治よりも力强いところの、社會的紐帶で、その行爲と生活とを束縛されてゐた。近代的の言葉でいへば、『習慣』とか、『傳統』とかいはれるところのものの、萬能的支配の時代である。

原始共產體において、最も著るしい現象は、『財產』が、個人に所屬しないのみならず、今日いふところの意味では、『財產』といふ觀念すらなかつた、といふことである。すべての『富』が『財產』といふ形態に分立することなく、一體として、共同態に所有されてゐたばかりでなく、『個人』は、共同態のためにのみ、その富を使用してゐたのである。それのみでなく、原始において、各個人が、いはゆる『人格』をもつてゐたか否かすらも、はなはだ疑はしい。婚姻の自由や、言論の自由や、信仰の自由は、もとよりなかつた。それはみな、共同態のものである。個人は、たゞ、共同態の一分子として、共同態の考ふるがごとくに思考し、共同態の行ふがごとくに行動したにすぎない。

『アメリカ・インデイアンの一人を見ることは、その總人を見ることである』といふ、ユロアの有名な言葉は、原始時代の『個人』の無個性を、最も雄辯に物語るものである。原始同質說については、タルドが、有力に、形而上的反對を發表せるにもかゝはらず、デュルケュムは、人種內の頭蓋容量の各個人のあいだの差が、低級人種ほど小に、文明進めるほど大なること——すなはち、一センチメートルを單位として觀れば、同族內の各個人の頭蓋容量の差は、ゴリラが二〇〇、インドの賤民が一八〇、オーストラリアの土人が三一〇、古代エジプト人が

三五〇、十二世紀のパリ市民が四七〇、現代のパリ人が六〇〇、ドイツ人が七〇〇であること――によつて、生物學的に、原始同質說を證明したのである。そして、原始人が、かくのごとく同型的であつたといふことは、かれらの間に、その『社會單位』――そして同時に『社會組織』の桎梏を破つて『個性』の獨立を要求するほどの、個人的異質性がなかつたといふことを意味する。『社會意識』と、『個人意識』とは、ほとんど共通の內容を有するまでに、それほど原始人は、同質的であつたのである。

しかしながら、原始社會に、『自由』が欠如してゐたといふことは、さきに述べたるところのごとく、全然個人主義的な見解であつて、眞の『行爲』の主體たる『社會單位』について觀れば、かれらは、絕對の『自由』を享樂してゐたものである。なぜなら、原始においては、『單位』と『組織』とが、いまだ分岐してゐなかつたがゆえに、單位を拘束する組織といふものが、全然なかつたからである。すなはち、原始社會においては、『行爲』と『生活』とが一致してゐたゆえ、『單位』の行爲は、生活による拘束を全然うけなかつたものである。(この意味において、原始樂園の傳說は、『個人』については、神話にすぎないのであるが、『單位』から觀れば、儼たる學的事實であつたと、いふことが出來るであらう。)

やゝ降つて、『單位』と『組織』とが、やうやく分岐しはじめた、上古の『氏族制』を考察してみやう。この制度の下において、氏族を組織する『個人』が、嚴密なるトオテムと、頑強なるタブウとによつて、束縛されてゐたこと、土地を共有し、勞作を共有し、外部に對しては、單一人格として作用してゐたことは、わが國の上古史においても、明らかなことであつて、概して言へば、『個人の自由』は、はなはだ稀薄であつた、といはねばならぬ。しかしながら、これを『單位』について觀るに、おの〳〵の『氏族』を拘束するところの、『組織』の統制力は、すこぶる緩漫であつたといはねばならぬ。おもふに、大化改新以前の日本は、原始共產體が崩壞して、各別氏族といふ『單位』が、その『大單位』(同時に組織)から、分裂した時代であらうが、そして、觀念的には、これらの氏族は、天皇家といふ大氏族に繫留するものであるといふ信念によつて、組織上の統制を蒙つてゐたにちがいないけれども、大連とか大臣とか、そのほか種々の氏族は、相當に自由な活動をしてゐたやうである。(佛教傳來當時の、各別氏族の態度と、これを統制すべき組織活動とを想起せよ!)この意味でわが國の大化の改新は、微弱なりし『組織』の統制力を、嚴密にせんとする過程であつたと、觀るべきであらう。しかも、大化改新の制定した、田制や

税制や位階制が、今日の國家ほど、嚴密に行はれえなかつたことは、後世の日本史が、これを證明してゐる。

その後の日本史が、一方において、社會的統制力の範圍の擴大であり、他方において『單位』の縮少と、その『自由』の喪失であつたことは、莊園すたれて諸侯おこり、職人『座』の權威が、國家的統制の下に、壓倒し去られたる歴史を回顧すれば、おのづから明瞭であらう。『組織』が擴大するとともに、その統制力をかため、『單位』が縮小するとともに、その自由を失ふといふことは、一種の物理法則としてすら立證が可能である。

かるがゆえに、わたくしは言ふ。『單位』の自由と、『個人』の自由とは、正反對な方向にむかつて、進行すると。『個人』の自由が、絶對小の極限から相對大へ向つて、發展したるにかゝはらず、『單位』の自由は、絶對大の極限から、相對小へ向つて、進行するのである。

五

この機會において、わが國の忠孝道徳について、一瞥を加へることは、意味あることであらう。ことに、個人主義的近代において、『忠』と『孝』とは、とうてい二致的なる觀念であるにもかゝはらず、それが一致的に唱道されるといふところに、學的な興味がある。けだし、『忠』とは、『社會組織』に對する道徳であり、『孝』とは、『社會單位』に對する道德である。そのむかし、『組織』と『單位』とが、いまだ分岐せざりし時代においては、『忠』と『孝』とが、一致的觀念であつたことは、いふまでもない。そして古典的回顧主義者が、現代において、なほ忠孝の一致を説くのは、自然でさへある。にも拘らず社會の發達とともに、『組織』と『單位』との分岐は、ますます激しくなり、それにしたがつて、『忠』と『孝』との溝渠は、いよいよ深められるのである。この意味で、現代は、最も忠孝不一致なる時代と、いはねばならぬ。

楠正行が、父正成の遺訓を奉じて、一族郎黨——大家族制の變形——を引き具して、君に『忠』をつくしたことは、『孝』の極致とされてゐる。しかし、この忠孝の一致は、幸なる偶然であつたと、いはねばなるまい。なぜならば、當時の道徳の側には、その家に『孝』をつくしつゝ、なほ『不忠』なる——孝心深ければ深きほど、ますます不忠なる——おほくのものがあつたといふ事實は、この忠孝一致の一例に、普遍性を拒絶するからである。それのみならず、正行の時代においては、『孝』の範圍がまだ廣かつた。現代の如き、個人主義社會においては、その『孝』とは、單に、直系父母に對する特殊的義務にとどま

り、その特殊的義務さへ、しだいに範圍を縮小しつゝあるのである。

それにも拘らず、『忠道』が、ます／＼榮えゆくことは、これを認めなくてはならぬ。試みに、主君内匠頭に對する、四十七士の『忠』と、一天萬乘の大君に對する、日露戰爭時代の『忠』とを、比較して考察しみよ。もし徳川氏の治世が、封建制より近世國家制を、捻出せんとするにありしとすれば、當時の諸侯に對する『忠』を、徳川家に對する『忠』にまで、擴大しえざりし點において、明らかなる失敗であつた。そして、明治維新は、この『忠』の擴大過程——割據的なる諸侯への『忠』から、全國的なる大君への『忠』へ、範圍を擴大していつた社會過程——であつて、それに伴つて、『孝』の範圍は、特殊家族にまで、切り下げられたのである。この意味で、『考道ますます衰へて、忠道いよ／＼榮ふ』といふことが、できるであらう。『忠』と『孝』とは、かくの如くに、歷史的に背叛的傾向を有するものであつて、『忠』の範圍——『社會組織』の活動原野——が擴大することは、『孝』の範圍——『社會單位』の活動原野——が縮小することは、社會發達のやむなき必然である。近來の忠孝一致論者が、個人の修身立身をもつて、同時に忠たり孝たるものなりと、詭辯するに至つたのは、ます／＼個人主義道德が、社會の人心を風靡するにいたつた證左であつて、その他觀念においては、古典的回顧主義者と、正反對の立場に立つもの——同じく忠孝一致を説くにもかゝはらず——といはねばならぬ。

『自由』といふ社會觀念も、また、近世においては、『個人』を中心としてのみ、考察さるゝことになつてゐる。しかし、これは、公平をえた考へ方ではない。もし『個人』が、不易的本質的な『單位』でないとするならば、そして、『忠』と『孝』とが、結局において、逆作用的に發展するものであるならば、『自由』もまた、『忠』と『孝』との兩面から——『個人』の自由と、『單位』の自由とを識別して、考察されなければならないものである。

楠正行の例にみるごとくに、『忠』と『孝』とが一致するのは『單位』の行爲と、『組織』の生活とが、一致した場合に、かぎるものである。しかも、『孝』はしだいに衰へて、『忠』はますます盛である。すなはち、『組織』は、しだいに『單位』を壓迫する傾向がある。そこで、『自由』は、孝道を除外した『個人』の自由と、孝道によつて結ばれた『單位』の自由と、この兩面から觀察されねばならぬのである。しかも、『個人』の自由は、孝道いよ／＼廢れて、ます／＼擴大し、『單位』の自由は、忠道いよ

いよ盛んにして、ます／＼縮小する『自由』といふ社會觀念が『個人』を中心として考ふれば、絶對小の極限から、相對大へ向つて發展しつゝあるにかゝはらず、『單位』を中心として考ふれば、絶對大の極限から、相對小に向つて進行するといふのも、この意味にほかならない。現代を『自由主義時代』とよぶのは、その個人主義的社會觀が、かくいはしめるのであつて、これを『單位主義的社會觀』――もしかゝる命名がゆるさるゝならば――よりすれば、最も『非自由』なる社會であらねばならぬ。

この斷案は、あるひは、ソフィスティックな詭辯として、映ずるかもしれない。しかし、現代が、最も『非自由』な社會であることは、事實がこれを證明してゐる。そればかりでなく、理論がこれを立證してゐる。事實の證明は、のちに詳しく說くであらう。こゝには、理論上の檢討を、さきに試みる。

六

たとへば、『所有』の自由について、考へて見やう。

いはゆる所有權が、フランス革命の生んだ自由權のうちで、最も重大な權利であることに、疑ひはない。しかしながら、なにゆえに所有權は、權利として觀念されるのであらうか。いはゆる『所有權』として、法律上規定されてゐるものを、社會的に檢討して行くと、その內容はすこしも『權利』ではなくて、かへつて、組織內の個人全部に對する『義務』を規定したものであるといふことを、發見するのである。すなはち、所有權に關する法的拘束といへば、ことごとく、所有の事實の消極積極の制限であるばかりでなく、『各人はその所有物を自由に使用し處分する權利がある』といへば、いかにも積極的な權利規定であるやうに觀えるが、その實質は、所有の權利內容を規定するものは一つもなく、かへつて、『所有』といふ事實に對して、他人の干涉を制約する規定によつて、成立してゐるのである。碎いていふならば、一定の個人に、一定の事物の所有權を認めるといふことは、他の幾億の個人に、その使用と處分を禁止するといふことである。いはゆる所有權の法律規定とは、社會的には、これら幾億の個人の義務を規定したものにすぎない。個人主義學說が、これらの、特定個人の特定事物に對する社會一般の義務を、特定個人と特定事物との制約的觀點から、『權利』であり『自由』であると說くのは、或ひは當然の歸結であるかも知れないけれども、これを社會的觀點から觀るならば、その特定個人を除く社會一般に、特定事物に對する『自由』を束縛したものにすぎない。この事實は、原始共產體の所有『自由』と、近代社會のそれとを對比するならば、おのづから首肯さる

るであらう。

『所有』の自由について言つたことは、『契約』の自由についても、同樣に言ふことが出來る。尤も、所有權の場合においては、その法律關係が、aといふ特定個人と、a'といふ特定事物との關係であるゆゑに、aを除く社會一般の自由型態は明確であるが、契約の場合においては、aといふ特定個人と、bといふ特定個人との、a'といふ特定事物を繞る關係であるために、ab以外の社會一般の自由型態は、やゝ複雜である。しかしながら、それはたゞ複雜であるといふにとゞまり、本質においては、『所有』も、『契約』も、a'に對する特定個人の特定利益に對し、社會一般の自由を束縛するものであつて、その間に差別があるのではない。要約して言ふならば、契約とは所有といふ靜的利益の動的延長である。いふまでもなく、『所有』は單なる『占有』ではなく、それが使用處分されることに、利益を見出すものである。ところが所有權は、その本來の形態において靜的である。しかもそれが靜的にとどまる限り、所有は利益を齎らさない。そこで、所有の動的延長として、契約の自由が發生し、契約によつて、その利益が增殖されるのである。この理は、現代社會において最も重要な、『資本』の所有について考察すれば、たゞちに明瞭となる。資本の本質は、それが利潤を生むところにある。しかるに、資本は單なる所有からは利潤を生じない。すなはち、所有されたる資本が契約によつて、運轉されたとき、はじめてその本質を發揮するのである。aの所有するa'がbに移轉し、bの所有するbがaに移轉するといふのが、契約の最も簡單な、そして、最も原型的な型態であるがこの場合に於ける『所有』と『契約』との差は、一が靜的であり、他が動的であるといふにとゞまり、本質的な差異はない。したがつて所有の自由について言つたことは、契約の自由についても、同樣に言ふことが出來るのである。

かくの如く、個人主義學說が、『自由』と稱するところのものは、社會を組織する特定の『單位』が、特定の『行爲』(靜的動的)についての自由であつて、社會的な、『生活』の自由ではない。かゝる自由は、これを與へられた『單位』にのみ、極大性を賦與することによつて、その『單位』以外のものに、極小性を與ふることとである。したがつて、一社會內の單位の數が增加するに從ひ、社會生活の自由が縮小することは、自然の勢であるといはねばならぬ。

しかるに社會の發達は、まへにも述べたところの如く、組織の擴大と單位の縮小とにある。そこで、組織內の單位數は、立體的に增加することになる。すなはち、一方において、『組織が擴

大することにより、その包容する單位數は、增加するとともに他方において、『單位』が分裂することによつても、單位數は增加するのである。たとへば、こゝに五十の個人を單位即組織とせる『原始共産體』が、二千萬の人民を有する『國家組織』にまで發達して來た經路を考ふるに、もし『單位』が停止的で、『組織』のみが擴大したと假定すれば、組織内の單位數は、四百萬倍したにすぎず、『組織』が停止的で、『單位』のみが縮小したと假定すれば、組織内の單位數は、五十倍したにすぎないであらうに、兩者が異る方向に同時に進行したために、組織内の單位數は、四百萬の五十倍、すなはち二千萬倍となつたのである。

かくの如く、社會の發達が、組織内における單位數を、立體的に增加するといふことは、その社會單位の『自由』を、立體的に縮小するといふことになる。なぜなら、上述のごとくに、一單位の『行爲の自由』を認めることは、その一を除ける一千九百九十九萬九千九百九十九單位に、『生活の自由』を束縛することになるからである。これ『單位主義觀』によれば、社會の發達は、自由の縮小であるといふことの、數學的證明である。

現代の社會が、『社會生活』といふ上から考へれば、最も『非自由』な社會であるといふことは、かゝる理論的證明なくとも、率直に思想するものが、率直に感得する眞理である。われらの有する自由は、行爲の自由だけである。それは生活の自由ではない。行爲の自由とは、經濟的に觀れば貨幣價値に換算された上の自由である。それはたゞ斷片的に、貨幣といふ物質と交換して、與へられるゝ自由である。眠るに一枚の布團も、食ふに一粒の米も、歩むに一足の下駄も、これ貨幣をにへられた自由である。われらは、すべての事物が、レッテルを張られてあるを觀る。そのレッテルは、求るものを拒む。そこに生活の自由はない。現代の社會生活に自由がないといふことは、單なる理論ではなく、厳たる事實である。これと同時を、現代社會の基礎をなせるフランス革命が、『自由』をモットーとして達成されたといふことも、動かすべからざる事實である。それでは、この事實と事實との矛盾、その錯誤はいづこにあるのであるか？これが重要な點である。

七

自由の喪失を、自由の獲得と誤認するといふことは、重大な錯覺であらねばならぬ。しかもこの重大な『錯覺』を生ぜしめたのが、個人主義的功利主義であることは、さきにしば〳〵暗示したところである。わたくしはこれをさらに撤底するために、いかにして『自由』が、個人的に要求され、また發達した

結果が、單位的に喪失さるゝことになつたかといふことを、經濟上と經濟學上とから、研究して見ようと思ふ。

近代文明が、文藝復興や宗教改革やの、『個性』の自覺運動から端を發したところの、個性解放の所產であることは、すでにおほくの學者の說いたところである。それゆえに、近世を歷史家は個人主義文明の時代とよぶ。それは個人がもろもろの桎梏を破つて、獨立の權威者となつたことである。しかしながら、その『桎梏』とは何であつたか？それを瞭らかにすることは、結局において、現代の『自由』の特質を、確かめることであらねばならぬ。

近代文明の祖先が打破したところの『桎梏』とは何であつたか？この質問に對して、個人よりほかに單位はないといふことを確信してゐる個人主義學說は、たゞちに答へる。それは國家といふ『社會組織』の拘束から、『個人』を解放せんとする運動であると。しかしながら、この答へは、二つの誤解を孕むものである。第一は、個人の解放によつて齎らされた個人主義的社會組織なるものが、その拘束力において、解放前の封建主義的社會組織よりも、はるかに强力であるといふ事實を、否定することである。そして第二に、封建社會において、個人自由の桎梏となつてゐたものは、『社會組織』自體ではなくて、その組織のよつて建てる『社會單位』であつたといふ事實に、眼をふさぐことである。もとより、近代社會は、封建社會を崩壞することによつて、建立されたものである。しかしながら、『個人』が、個性自由の名において、解放を要求した直接の對象は、『組織』ではなくて『單位』であつた。それが社會組織に叛逆の矢を向ける結果になつたのは、『組織』が、かゝる『單位』の殘存勢力を、援助したからである。これを產業革命によつて齎らされた經濟的個人主義について觀れば、產業革命の直接の仇敵は、封建的ギルドといふ『經濟單位』の桎梏であつて、このギルドの桎梏に叛逆した結果が、ギルド制の上にたてる封建的社會組織そのものの崩壞に、反射したにすぎないのである。したがつて、その革命的變化から生じた新社會組織は、その社會的統制力において、封建的社會よりも、より力强いものとなつたのである。『個人』は、いまだかつて、『社會組織』の統制から、『自由』にされたことはない。普遍的にまた社會的に、『自由』はまだ與へられてはゐない。われらの有する『自由』とは、組織力から斷片的に與へられた、特定個人の特定自由だけである。

かくのごとく、近代文明の基礎たる個人の解放とは、第一に、社會組織の桎梏からの解放ではないといふこと、第二に、それは社會單位の桎梏からの解放であるといふこと、この二點

を、アダム・スミスの學説を解剖することによつて、瞭らかにしてみやう。

産業革命の精神を體得して、經濟的個人主義を、學的に樹立したものは、アダム・スミスである。そして、アダム・スミスは、その有名な『自然的自由の制度』を樹立することによつて、經濟的個人主義を確立せんとしたものである。それでは、その『自然的自由の制度』は、いかにして樹立されるか？かれは曰ふ、そのためには「保護または干渉のすべての制度」を除去しなければならぬ。そしてその組織の下においては「世の主權者は……私人の産業を監督し、これをば、社會の利益に最も適合せる方面に指導するといふ任務から、まつたく免れうる」ものであるといふのである。すなはち「自然的自由の制度の下においては、主權者の任務は、たゞ三つあるだけである」といつて『國防』と『司法』と『公共事業』の名をあげてゐるのである。

この、スミスの思想の根本をなすべき『自然的自由の制度』が、輕卒なる評論家をして、スミスの排除せんとする『干渉』が、すべて『國家』または『主權者』となづくるところの『社會組織』の束縛であつたかのごとく、誤解せしめた原因である。これまでもまた、さう信じられてゐた。しかしながら、われらは、かゝる皮相なる觀察に停止してはならない。もつと深くその眞相をさぐらねばならぬ。

第一に、スミスが國家の任務としてあげた三つの事項、ことに第二の『司法』として説明したところを、注意深く讀んで見やう。それは「できうるかぎり、社會の各員をば、社會の他の人々の不正また壓制から保護する任務、いひかふれば、正確なる正義の支配を樹立せしむる任務」である。『正義の支配を樹立する！』これほど廣い、そして包括的な社會組織の統制があらうか。この例外は、事實において『社會組織』の統制力の、絶對性を要認したものである。しかも、スミスの自らいへるごとく「正義の目的は、毀害に對する保護である。」そして『保護』さるゝところの『毀害』とは、何であるか？所有權である。契約である。企業である。いはゆるもろ／＼の『自由權』である。かゝる『所有權』や『契約』や『企業』は、社會組織の統制力以外のものでは、保護さるゝことをえない。そこでスミスは、その『自然的自由の制度』において、國家の例外的任務といふ假面のもとに、これらの特定個人の特定利益を、絶對性の社會組織の統制力によつて、保護せんとはかつたのである。スミスは「正義の支配を樹立する任務」を、例外的な任務であるといふが、スミスの意味するやうな『正義』――すな

はち、所有や契約や企業などといふ、特定個人の特定利益——は、社會組織の『强制』なしには、樹立されえない。これを『自然的自由の制度』となづくることは、スミスの自由である。しかしこの命名のゆゑをもつて、それが『自由』の社會であるといふことは、許されない。この意味で、スミスは、自由放任論者であるといふよりも、むしろ組織强制論者であると、いはねばならぬ。

それでは、第二に、スミスが、その『自然的自由の制度』において要求したところの、眞の『自由』とは何であつたか？それは、『個人』が、『封建的單位』の内的束縛より脱却せんとするところの、その自由であつたのである。このことは、かれが『自由』を説明して、「他の何人の事業および資本たるをとはず、自分の事業及び資本をもつて、これに競爭するの自由」である、といつたことによつても窺知せらるゝごとく、中世的ギルドの桎梏を破つて發生したところの、新興資本家の企業の自由を主としたものであつた。そして、かれが、「自然的自由の明白なる侵害」であり、「人類の最も神聖なる權利に對する侵害」であるとして、極力排斥したところのものは、「製造業者が小賣商を營むことを禁ずる法律」とか、「農業者を强制して穀物商のする商賣をさせやうとする法律」とか、勞働者が「隣人を害することなしに、その適當とする方法に從ひ、その力および熟練を使用せんとするに際して、これを妨害する」法律などの、中世ギルド的な、『單位』の『個人』に對する壓迫であつた。すなはち、かゝる『單位』の束縛を取り除くことが、スミスのいはゆる『自然的自由の制度』を確立する所以なのである。この意味において、少くともスミスの關するかぎり、第一にその『自由』とは、『單位』の自由ではなくて、『個人』の自由であり、第二にその『壓制』とは、『組織』の壓制ではなくて、『單位』の壓制であつたのである。

しかしながら、このことは、中世において、『個人』がいかなる壓迫を『單位』から加へられてゐたかといふ事實と、産業革命がいかにして、この壓迫を取り去つたかといふ事實を、明らかにすることによつて、よりよく理解さるゝであらう。

八

すべて社會組織の形態は、その社會生産力に適應して、構成さるゝものである。したがつて、社會の生産力が急激に膨脹し、從來の組織がこれを容るゝ能はざるにいたるときは、社會組織は自發的に崩壞して新たなる組織形態をとるにいたる。この變革を社會革命といふ。十八世紀の中葉から始まつた産業革

命は、まさにこの意味の社會革命であつた。

産業革命の原動力たる、生産力の急激なる發達は、イギリスの紡績業からはじまつた。すなはち、産業革命前においては、主として、農家の婦人や小供が、手挽車をつかつて、一本づつ絲を引いてゐたものである。この仕事は、賃機屋が自らするほかは、賃挽專門の農家で生産されてゐた。また賃機屋も、おほくは農業を兼ねてゐた。ところが、一七六四年にいたつて、ブラックバーンの機屋の、ジェームス・ハーグリーヴスといふものが、有名な『ヂエニー紡機』といふ紡績機械を發明した。これは、從來農家の手挽車が、絲を一本づつ挽いてゐたのを改良して、同時に八本づつ挽く小形の機械である。すなはちこの發明のために、木綿紡績の生産力は、非常に發達せざるをえなかつた。この『ヂエニー紡機』が、産業革命の發端であると、稱せらるゝものである。

ところが、それから五年後の、一七六九年にいたつて、リチャード・アークライトといふ散髪屋が、これを改良して、大規模の紡績機械を發明した。しかも、この紡績は、ヂエニーのやうな小形なものではないので、人間の力では動かない。すなはち動力として、水力を利用することとなり、その名を『水車紡機』ととなへた。そして、その仕事は、個人の住宅ではできないので、住宅のほかに工場を設けて、これに機械を据えつけ、數百人の勞働者を動かして、多量の綿絲を紡ぎだすことになつたのである。これが、工場制度の嚆矢であると、稱せられてゐる。

これと同時に、動力の方でも、ヂェームス・ワットの蒸汽機關が發明されて、大規模の機械の運轉を可能ならしめた。さらに、紡績業生産力の發達に應ずるために、織布の方面でも、エドマンド・カートライトといふ牧師が、蒸氣で運轉する織布機械を發明したので、紡績織布の工場制度は、ます〱發達するにいたつたのである。『プロレタリヤの歴史は、蒸汽機關と、木綿紡績機械の發明にはじまる。これらの發明が、全社會の形態を、一變せしめた』と、フリードリッヒ・エンゲルスが言つたのは、このゆえである。

しかしながら、これらの『發明』による社會生産力の發達は、木綿紡績にのみ局限されてはゐなかつた。それと二三十年おくれて、毛織物の紡績が、機械化すなはち工場化された。それから機械をつくるための鐵、鐵をつくるための石炭。これらの工業もまた、機械の急激な需要に應ずるためには、その生産力を發達せしめなければならなかつた。すなはち、これらの方面においても、必要は、重要なる發明を促し、その發明によつて、機械的生産は、そしてまた『再生産』は、ます〱發

ることとなつたのである。

かくのごとく、木綿紡機から發足した生産力の急激なる膨脹は、たちまちにして全産業に蔓延した。いたるところに、工場が立つた。その工場を經營する、『資本家』といふ新らしい階級が發生した。農民の副業として行はれた家内工業は、專門的な製造工業となつた。そこには、機械と運命をともにする、『勞働者』といふ新らしい階級が發生した。社會の重要は、大地主から資本家へ、農民から勞働者へと、移つていつた。すべての生産が、かくのごとく大規模に行はれることになると、社會組織もまた激變せざるをえない。

たとへば、毛織や木綿などの、纖維業について觀るに、從來は、ロンドンその他の都會地に、『元織屋』といふものがあつて、これが原料を地方の農民に貸出し、農家副業として賃機を織らせて、その製品をロンドンに送り、仲買や小賣の手を經て、全國の消費者に供給するといふ組織になつてゐたのである。なかには、毎週一定の日に『市』を開いて、獨立の小生産者が自ら織つた品を、賣りに出る仕組になつてゐたところもある。ところが、生産方法が一變して、家内工業が工場制度となり、資本家が大規模な生産品を供給することになると、かゝる中世的な制度は、自然に衰微せざるをえない。これに適應するために、新たなる『商業組織』が發達した。『元機屋』に代つて、『大會社』ができた。工場や會社に金融をはかるために、『銀行』ができた。工業生産品のために、『取引所』が發達した。これらの『工業組織』と『商業組織』、それから、生産品を運搬するための、汽車汽船などの『運輸組織』、これが産業革命のもたらした總勘定である。

中世の都市における産業は、主として家内工業であつた。なに人も、一定の『徒弟奉公（アプレンテイスシツプ）』を經なければ、いかなる職業をもはじめることはできなかつた。『親方（マスター）』といふ獨立の生産者になるためには、永い期間を『徒弟』として勤めなくてはならぬ。フランスでは、南京玉の生産者たる資格をうるために、十二年かゝつたといふ事實がある。かゝる制度が、新たに發達した『工業組織』や『商業組織』に、適應しないことは明らかである。これを個人主義的に觀れば、當時『ヴアレツト』と稱せられた勞働者には、ほとんど『經濟行爲の自由』はなかつたのである。徒弟制度は、この意味において、『自由勞役といふ形で、一般に約束された現金の謝禮以上に、一の謝禮を強奪するための一の形式』（ゲラル教授）であり、『かれらは、ギルドの一に屬する一定のマスターにのみ、その勞役を提供することを許されてゐたので、一般公衆のために働らくことは、禁じられてゐ

た」（デル教授）のである。こういふ社會制度、こういふ經濟單位の壓迫が、新らしい生産力の發達と、その結果たる新工業組織、新商業組織の進展に、障碍することはいふまでもない。そこで、近世の個人主義的な『自由』の思想が、この『單位』の壓迫に對して、猛烈な抗議を提出するにいたつたのである。

生産力の發達が、――すなはち『工場制度』の確立と、『商業組織』の發達とが――自然にまた必然に、かゝるギルド的な商工業制度を破壞したるごとくに、個人主義的『自由』が、ギルド的壓迫を破つて出現することは、自然でもあり、また必然でなくてはならぬ。事實的に、工場制度とその附隨者が、ギルド制度を破壞せるに呼應して、個人主義的『自由』の思想が、思想的に、ギルド的思想の桎梏をやぶり、資本家および勞働者と稱する新階級に、活動の倫理的基礎を與へたのである。近世的『自由』思想の背後には、かゝる事實的な背景がある。

この意味において、アダム・スミス等が、その『自然的自由』を提唱したのはギルドといふ『經濟單位』の壓迫を除去せんとしたものであつて、それがたまたま『組織』――國家または主權者――に對し、叛逆的な態度に出でたのは、舊制度の餘力を排斥することが、餘力を支持せんとする『舊組織』に反射したものにすぎぬ。決して、絶對的に、『社會組織』の統制力を否定するものでもなければ、『個人』を『組織』の制御から解放しやうといふのでもない。なぜなら、この新單位たる『個人』の發達は、新組織たる『國家』の發達を前提するからである。この理は、すでにスミスについて、理論的に檢討したるところのごとく、その後の社會組織の發達が、この理論を裏書きしてゐる。この意味において、封建國家から近世國家への變轉期に發達した、かのマーカンティリズムなるものは、スミスの自由主義の先驅をなすものであつて、スミス主義は、マーカンティリズム轉覆の上に立つと一般に信じられてゐるにかゝはらず、そはかへつて、その合理的發達の上に立つものである。おだかも、歴史進化上正當なる社會主義が、資本主義の延長なるべき理と同樣に。」

九

かくのごとく、近世の『自由』とは、『組織』の統制力によつて、『單位』の壓迫を破り、かくして『個人』の『行爲』の自由を獲得したものである。そして、同じ『組織』の統制力によつて、社會的に、『生活』の自由を奪つたものである。すなはち、近世的自由の三大特色とは、第一に『社會組織』の絶對性といふことであり、第二に特定個人の『社會行爲』の自由といふこ

とであり、第三に一般個人の『社會生活』の非自由といふことである。これを具體的にいへば、新興階級たる『資本家』に、行爲の自由を與ふるため、社會組織の威力が、社會生活の自由を否定したことである。

『自由』と『平等』と『博愛』とを、三大モットーとしたるフランス革命も、決してこの三大特色を、忘却してはゐなかつた。「人は出生および生存において、自由および平等の權利を有する」と、その冒頭に喝破したる『人權宣言』は、その第十七條において、「所有權は不可侵にして且つ神聖の權利である」と、つけ加ふることを忘れなかつた。すなはち、フランス革命の自由平等とは、所有權の不可侵といふことをコロラリーとしてのみ、有意義なのである。さればこそ、一七九一年六月十四日の法律は、「同一の職業、技術または手工業を營む市民たちが同盟して、その産業または勞働にたずさはることを拒絶するのは違憲であつて、自由および人權宣言に對する加害と看做される」と規定して、その意味を明確にしたのである。なにゆえに、「出生および生存において、自由および平等の權利を有する」ものが、「同盟して、その産業または勞働にたづさはることを拒絶する」のは、『違憲』であり、『自由に對する加害』であるのか？それは、あきらかに、新興資本階級の特定行爲――『企業』――の自由を迫害するからである。『行爲』のためにする特定個人の所爲は自由である。しかし『生活のためにする一般個人の行爲は自由ではない。そこにフランス革命の精神はある。フランス革命は、この原則をば、社會組織の威力をもつて『强制』した。かくして『自由』は特定的、個人的となり、自由のうちに内在すべき、『普遍性』と『社會性』とは、失はれてしまつたのである。

このことは、代表的なる功利的・個人的學說の理論體系が、みな有力に曝露してゐる。かれらもまた、『社會思想』を標榜するかぎり、『活生』の自由といふことを、――かれらの思想からすれば、社會的な『功利』または社會的な『幸福』といふことを――目標とせざるをえぬ。また實際さうした。しかもそれと同時に『生活』の自由と『行爲』の自由とが、つひに一致的な觀念であることをも、また認めざるをえぬ。そこにかれらの學說體系の矛盾があり、またその自己破壊性がある。そこで、かれらは、『平等』とい原理を考へついた。個人的な『行爲』の自由を、社會的に公正化するためには、各個人を『平等』にするよりほかかない。しかしながら、そこにもなほ暗礁がある。それは、個人的『自由』と個人的『平等』とが、とうてい一致的であるといふ事實である。そこで最後に、かれらは、『安固』とか『正義』とかいふ社會觀念を借りてくることになる。『安固』または

『正義』とは、究極において、『社會組織』の統制力である。そしてこの組織の『强制』によつて、『自由』と『平等』との優劣を判定せしめ、『平等』を否定して『自由』の絶對性を高調するのである。そしてその結論たる『自由』が、『行爲』の自由にして『生活』の自由でないことは、いふまでもない。

ここにおいて、われらは、功利的・個人的學説の、循環論法を見るであらう。かれらは最初から、『行爲』の自由を提唱してゐるのである。しかるにその不備を蔽はんがため、それと關係なき『社會的功利』といふ『生活』の自由を樹立し、その矛盾を解くために『平等』を想定し、さらに『自由』と『平等』との相關に堪へずして、『正義』をもちだし、最後に、最初の出發點たる『行爲』の自由に復歸するのである。かくしてかれらの理論體系は、循環して永世たゆるときはない。

わたくしは、この循環理論の一例證を、經濟的自由主義の始祖たるアダム・スミスに、つぎに近世功利主義の完成者たるヂエレミー・ベンタムに、例證するであらう。

一〇

アダム・スミスが『自然的自由の制度』の提唱者であり、その提唱する自由が、行爲の自由であつて、生活の自由ではないことは、すでに述べた。しかし、かれは、社會思想家として立つとき、これのみで滿足することはできなかつた。曰く『政府のすべての組織は、ただ、その下に生活せる人々の幸福を增進するに役立つに比例して、價値づけらるるのみである。』すなはち、この場合におけるかれの目標は、特定個人の特定利益ではなくて、一般社會の一般利益なのである。

しかしながら、特定個人の『行爲』の自由といふことと、一般社會の『生活』の幸福といふこととは、はじめから、連絡のない企案にすぎない。そこで、この二つの思想は、いかにして連鎖されるか。特定個人の行爲の自由の不平等化！それよりほかありえない。かれは、かるがゆゑに、『不平等』を說く。曰く『その大多數の人々が貧乏であり困窮してゐるやうな社會は、たしかに榮えてゐないし、また幸福でない。……人民の全體を養ひ、かれらに衣服と住家とを與へるところの人々（勞働者）が、自分たち自身もかなり良き食衣住をうることができるように自身の勞働の生產物の或る分前を受くべきであるといふことは、公平の要求するところであるにすぎない。

スミスのこの理論は、『生存權』の要求、さらに徹底しては、『勞働全收權』の主張の、根底をなすものである。しかし事實問題として、かれは、生產上における『資本』と『土地』

威力を忘却することはできなかつた。そして、資本に對しては『利潤』を、土地に對しては『地代』を、勞働に對しては『賃銀』を、分配することを主張したのである。かくすれば、富の分配は、自然『不平等』とならざるをえない。しかしながら、これは止むを得ざる不平等である。なぜなら、かれの思想にしたがへば、「社會の存在には、仁慈よりも、正義の方が、より本質的である」からである。勞働者の生存や福利は、かれの眼からは、『仁慈』にすぎぬものと見えたであらう。そして「正義の最も神聖なる諸法則――その侵犯に對しては、最も強く報復と所罰とが要求さるゝがごとくであるところの諸法則」の一つは、「かれの財産と所有物とを獲るところのそれ」であるのである。

かくしてスミスは、最初に設定したところの原理、『行爲』の自由に復歸しきたつた。この循環論法を自ら辨解するために、かれは言ふ「上にのべた五つの事情は」――五つの事情とは、賃銀や利潤に高低を生ずべき原因である――、勞働に對する賃銀と、資本に對する利潤との上に、たとへいかに著るしき不平等を起すとも、その全體の利益および不利益の上には、實際上または想像上のものたるをとはず、まつたくなんらの不平等をも惹き起すものではない。」この樂觀說が、眞であるか否かはしばらく問はず、スミスが結局において、特定個人の特定利益の上に、『行爲』の自由を提唱するものであることは、詳說せずしてあきらかである。

ベンタムにいたつては、さらに理路明白である。かれが、『最大多數の最大幸福』といふ、有名な功利原則の創定者であることは、哲學史の上に顯著な事實である。しからば、『最大多數の最大幸福』は、いかにして達せられるか？かれは『個人』については、個人に『行爲』の自由をゆるすことが、その個人を最も幸福ならしむべき方法であることを信じた。なぜなら、かれの思索によれば、「何が快樂であるかは、各人が知つており、何が苦痛であるかも、各人の知つてゐるところであるから畢竟何が幸福であるかは、各人の知つてゐるところである」からである。しかも、「社會とは、いはゞ、その成員を構成しつゝありと考へらるゝところの、個々の個人より成りたてる擬制的團體である」から、「だから、社會の利益とは何かと言へば、――それを構成せる各成員の利益の總和である」にすぎないのである。すなはち、各個人に、『行爲』の自由を許すことが、社會において、『最大多數の最大幸福』を齎らす所以となるのである。」

こゝまでは、かれの理論は、すくなくとも矛盾的ではない。」しかるに、社會思想家としてのかれは、一方において、「富の不平等なる分配」が、多數者にとつて、『不幸』の原因となりつゝ

ある事實に、眼を閉ぐことはできなかつた。この事實は、たゞちに、かれの理論の現實性に、不安を與ふる原因となる。こゝにおいて、かれは、「一定量の富が、幸福に及ぼす結果について」考察するを餘儀なくされた。そしてその結果は、富の分配は、「その現實の配分比が、平等に近づけば近づくほど、幸福の總量は、ますく大となる」といふことを、認めざるをえなかつた。かくしてかれは、『平等』の原理を樹立する。曰く、「最大多數の最大幸福を目的として、まさに設立されんとする、新らしい組織を假定するならば、最も富める人より富の素財を取つて、これを貧しい人々に渡し、かくてつひに、萬人の財産を平等ならしむるといふことには、十分理由があるであらう」

ベンタムはまた、かうも言つた。「その結論はこうである。……社會の成員の間に於ける財産の問題について、法律のなすべき分配は、平等に近ければ近いほど、最大多數の幸福をより大ならしむるものである。したがつてこの命題は、………すべての時すべての所において、樹立され且つ維持さるべきところのものである。」

これらのベンタムの所説は、かれをして、完全なる平等論者なるかのごとく観せしむるものである。しかしながら、この『平等』理論は、最初に設定した『自由』理論と、牴觸しないであらうか？明らかにそれは牴觸する。そこでかれは、いかなる態度に出でたか？ベンタムは、スミスが『正義』といふ社會統制力をかりて、『平等』を一蹴し去りたると同じく、『安固』といふ社會原理をもつて、『自由』に軍配を擧ぐるのである。わたくしは、事實、かれの『平等論』中に、重要な二句を、故意に取りはずしたことを、白状しなければならぬ。それは、第一に、「その安固と兩立しうるかぎり」といふ條件であり、第二、「苟しく安固を妨げずして行ひうるかぎり」といふ條件である。かれの『平等論』は、たゞその條件の下にのみ、可能なのである。

かれは、この理を、さらに徹底的に論じてゐる。曰く、「安固と平等とが衝突するときは、なんら躊躇の必要はない。平等は撤退しなくてはならぬ。前者は生活の――生存の――豐富の――幸福の――基礎であつて、すべてのものがこれに依存してゐる。平等とは、單に、一定分の幸福を生むものにすぎない。加ふるに、たとへ平等が創り出されても、それは常に不完全であらう。たとへ一日の存在をかち得たとしても、次の日の革命はこれを攪亂するであらう。平等の設立は妄想である。なしえらるゝ唯一の事柄は、不平等を減少することである。」

かくして、一旦ベンタムの手によつて建設された『平等』は、かれ自らの手によつて覆へされた。のこるところは、「行

爲』の『自由』のみである。そしてかれの循環論法は、スミスと同樣に、最初の環にかへり來るのである。そして、かれの眞意は、「安固と自由とが、産業の要求するすべてである」といふ點にある。「安固と平等と、この二つの敵の間には、不斷の對立、永遠の戰ひがなければならぬか？或る點までは、二者は調和しうべからざるものであるが、しかし少しの忍耐と熟練とを以てすれば、次第にこれは一致せしむることができる」といふ樂觀說で、その循環論を糊塗し去らんとするにいたつては、アダム・スミスと異曲同巧。深く論ずるの要はあるまい。

二

アダム・スミスや、チェレミー・ベンタムは、まことに學界の巨匠である。しかるに、なにゆえ、かゝる『巨匠』が、かゝる自殺的理論や循環理論に陷らねばならなかつたか？思ふに、それは、スミスやベンタムの罪ではない。行爲の自由のうちに內在する『自己破壞性』にもとづくものである。

『行爲』は、作爲と不作爲とを含む。すなはち、行爲の自由とは、自己に對する他人の干與を排除するのみならず、或る事物に對する支配と、その事物を中心として、他人の支配とを要求するものである。ジムメル教授は、この理を說いて、「自由は、これをその內容の方面より觀るも、他人との關係の拒絕や、自己の活動範圍に對する他人の不關與や、だけにとゞまるものではない。それは、人が、單に自由たらむと欲するのみならず、その自由を行使せむと欲するものであることを想ひ合するならば、瞭らかである。この行使は、主として、他人の支配と行使にほかならぬ」と、說いてゐる。

この意味の自由は、それが絕對に觀念せらるゝとき、その自由を與へられたるものをして、『絕對君主』たらしむるものでなくてはならぬ。かれが完全に自由たるためには、その意欲するがまゝに、行爲せしめなくてはならぬ。しかも、人間の意欲は無限である。この無限の意欲は、人間が孤立なる間は、可能概念であらう。しかし、社會內に、二以上の意欲が存するとき、そこに意欲と意欲との相鬪、行爲と行爲との衝突、自由と自由との爭鬪が、おこらざるをえぬ。これ『自由』が、社會原理として立つときの、危險性である。

『自由競爭』の理論は、かくして發生する。すなはち、すべての個人を、自由にするといふことは、自由普遍の原理の要請であるがゆゑに、こゝに、各人の絕對の自由が與へられたと想定する。そして、この想定社會內における、個人對個人の自由の爭鬪を、不可避の社會現象とあきらめて、これに、『自由競爭』

なる名を下すのである。しかも、自由競爭といふことは、結局において、強者の『自由』が弱者の『自由』を虐げるものであることは、最も見易き道理である。すなはち、強者は、相對大の『自由』を享くるに反して、弱者は相對小の『自由』をもつにすぎない。世に言ふ『自由主義』とは、畢竟するに、かゝる『自由競爭主義』を意味するにすぎない。

こゝにおいて、われらは、個人的、功利的學説の意味する『自由』とは、『自由競爭』といふことに過ぎざる所以を觀た。しかも、自由競爭の制約の下にある『自由』とは、これを相對的に觀察するとき、『自由の獨占』といふことにあらねばならぬ。それは、一つの矛盾概念である。しかしながら、行爲の自由の自己破壞性は、そこに内在する。なぜなら、社會原理として、個人の行爲の自由とは、他の諸個人の行爲の自由を破壞してのみ、社會的に存立しうるものであるからである。

この自由の自己破壞性は、歴史的事實として、ある程度まで現實化されてゐる。現代が、或る意味において、有産階級の自由獨占時代であるといはれるのは、このゆえである。尤も現代においても、資本家が資本行使の自由を有するごとく、勞働者は、勞働行使の自由を有するものと、想像されてゐる。なるほど、勞働者に勞働を禁ずるの一般的法律は、どこにも制定されてはゐない。それにもかゝはらず、『勞働權』が確立されざるかぎり、事實において、勞働の自由といふものは、ありえない。なにゆえであるか？これ、アダム・スミスが、あれほど神聖化したところの、『見えざる手』――價格原理――の必然の結果であることは、ほどなく瞭らかにするところであるが、すくなくとも、現代に、『自由の獨占』といふ現象が、相當に色强くあらはれてゐることは、事實として、これを認識せざるをえない。

フランス革命の樹立したところの『自由』とは、實にかくのごときものであつた。尤も、フランス革命は、かならずしも、單立に『自由』を要求したのではなく、その緩和劑として、『平等』と『博愛』とをこれとならべて、モットーとしたことは、上述のごとくである。また、自由と平等とが、並立的なモットーとして要求されえたといふことには、特別な史的關係があつた。それは、『革命原理』としては、自由と平等とが、結局、同一要求の二面觀にすぎないといふことである。すなはち、フランス革命とは、當時壓迫されてゐた第三階級の解放運動であるが、この際、革命大衆たる第三階級にとつては、古き壓迫より解放さるゝことが『自由』であり、かくして壓迫階級と同一の水準に上ることが、すなはち『平等』であつたのである。この意味において、特定の階級が、その階級運動のモットーとし

爲』の『自由』のみである。そしてかれの循環論法は、スミスと同様に、最初の環にかへり來るのである。そして、かれの眞意は、「安固と自由とが、産業の要求するすべてである」といふ點にある。「安固と平等と、この二つの敵の間には、不斷の對立、永遠の戰ひがなければならぬか？或る點までは、二者は調和しうべからざるものであるが、しかし少しの忍耐と熟練とを以てすれば、次第にこれは一致せしむることができる」といふ樂觀説で、その循環論を糊塗し去らんとするにいたつては、アダム・スミスと異曲同巧。深く論ずるの要はあるまい。

二

アダム・スミスや、ヂェレミー・ベンタムは、まことに學界の巨匠である。しかるに、なにゆえ、か丶る『巨匠』が、か丶る自殺的理論や循環理論に陷らねばならなかつたか？思ふに、それは、スミスやベンタムの罪ではない。行爲の自由のうちに内在する『自己破壞性』にもとづくものである。

『行爲』は、作爲と不作爲とを含む。すなはち、行爲の自由とは、自己に對する他人の干與を排除するのみならず、或る事物に對する支配と、その事物を中心として、他人の支配とを要求するものである。ジムメル教授は、この理を説いて、「自由は、これをその內容の方面より觀るも、他人との關係の拒絕や、己の活動範圍に對する他人の不關與や、だけにとゞまるものではない。それは、人が、單に自由たらむと欲するのみならず、その自由を行使せむと欲するものであることを想ひ合するならば、瞭らかである。この行使は、主として、他人の支配と行使にほかならぬ」と、説いてゐる。

この意味の自由は、それが絕對に觀念せらる丶とき、その自由を與へられたるものをして、『絕對君主』たらしむるものでなくてはならぬ。かれが完全に自由たるためには、その意欲するがま丶に、行爲せしめなくてはならぬ。しかも、人間の意欲は無限である。この無限の意欲は、人間が孤立なる間は、可能概念であらう。しかし、社會内に、二以上の意欲が存するとき、そこに意欲と意欲との相鬪、行爲と行爲との衝突、自由と自由との爭鬪が、おこらざるをえぬ。これ『自由』が、社會原理として立つときの、危險性である。

『自由競爭』の理論は、かくして發生する。すなはち、すべての個人を、自由にするといふことは、自由普遍の原理の要請であるがゆえに、こ丶に、各人の絕對の自由が與へられたと想定する。そして、この想定社會內における、個人對個人の自由の爭鬪を、不可避の社會現象とあきらめて、これに「自由競爭」

なる名を下すのである。しかも、自由競爭といふことは、結局において、强者の『自由』が弱者の『自由』を虐げるものであることは、最も見易き道理である。すなはち、强者は、相對大の『自由』を享くるに反して、弱者は相對小の『自由』をもつにすぎない。世に言ふ『自由主義』とは、畢竟するに、かゝる『自由競爭主義』を意味するにすぎない。

こゝにおいて、われらは、個人的、功利的學說の意味する『自由』とは、『自由競爭』といふことに過ぎざる所以を觀た。しかも、自由競爭の制約の下にある『自由』とは、これを相對的に觀察するとき、『自由の獨占』といふことにあらねばならぬ。それは、一つの矛盾概念である。しかしながら、行爲の自由の自己破壞性は、そこに內在する。なぜなら、社會原理として、個人の行爲の自由とは、他の諸個人の行爲の自由を破壞してのみ、社會的に存立しうるものであるからである。

この自由の自己破壞性は、歷史的事實として、ある程度まで現實化されてゐる。現代が、或る意味において、有產階級の自由獨占時代であるといはれるのは、このゆえである。尤も現代においても、資本家が資本行使の自由を有するごとく、勞働者は、勞働行使の自由を有するものと、想像されてゐる。なるほど、勞働者に勞働を禁ずるの一般的法律は、どこにも制定されてはゐない。それにもかゝはらず、『勞働權』が確立されざるかぎり、事實において、勞働の自由といふものは、ありえない。なにゆえであるか？これ、アダム・スミスが、あれほど神聖化したところの、『見えざる手』――價格原理――の必然の結果であることは、ほどなく瞭らかにするところであるが、すくなくとも、現代に、『自由の獨占』といふ現象が、相當に色濃くあらはれてゐることは、事實として、これを認識せざるをえない。

フランス革命の樹立したところの『自由』とは、實にかくのごときものであつた。尤も、フランス革命は、かならずしも、單立に『自由』を要求したのではなく、その緩和劑として、『平等』と『博愛』とをこれとならべて、モツトーとしたことは、上述のごとくである。また、自由と平等とが、並立的なモツトーとして要求されえたといふことには、特別な史的關係があつた。それは、『革命原理』としては、自由と平等とが、結局、同一要求の二面觀にすぎないといふことである。すなはち、フランス革命とは、當時壓迫されてゐた第三階級の解放運動であるが、この際、革命大衆たる第三階級にとつては、古き壓迫より解放さるゝことが『自由』であり、かくして壓迫階級と同一の水準に上ることが、すなはち『平等』であつたのである。この意味において、特定の階級が、その階級運動のモツトーと

て、自由と平等とを標示するといふことは、かならずしも、矛盾的二原理を追求するものと、いふことはできない。しかしながら、それは『革命原理』としてのはなしである。一たび自由と平等とが、『社會原理』として存立せんとするごときは、その相関は不可避である。これ、行爲の自由に內在する『自己破壞性』の、必然的所産であると、いはねばならぬ。」

二

『自由』――行爲の自由――の『自己破壞性』は、それが生産關係に入つて、『獨占』といふ社會現象を發生せしめるとき、最も顯著な表現をうるものである。なぜなら、『獨占』は、それ自體において、『自由』の背叛觀念なるがゆえである。

近世の個人主義經濟は、『奴隸』といふ形態における『勞働力の獨占』を否定した。すくなくとも、その否定理論を樹立した。原始經濟においては、勞働力は一種の家産であつた。當時の經濟單位は、その單位を構成せる個人の勞働力を、一種の家産とみなしたばかりでなく、そのほかに、牛馬の勞働力とともに、奴隸の勞働力をも、財産として所有したのである。しかるに、社會の生産力が發達して、生産行程が複雜化するに及び、『奴隸』は變じて『農奴』となつた。その『農奴』が解放されて、『自由農民』となつたのは、さらに一段の生産力發達の結にほかならぬ。これは、勞働者が、『ギルド』の拘束から解放されて、賃銀勞働者となつたのと、同系の變化である。かくして、勞働者は、その好むところにしたがつて、市場にその『勞働力』を販賣するの『自由』をえたのである。これを、勞働力獨占の廢止といふ。

近世の個人主義經濟は、かくして『自由』の名の下に、『勞働力の獨占』を否定した。それと同時に、同じ『自由』の名の下に、『資本力の獨占』を樹立したのである。フランス革命が、『自由』のコロラリーとして、『所有權』を樹立したことは、まへに述べたとほりであるが、所有權の靜的形態を『財産』といひ、その動的形態を『資本』といふ。すなはち、原始經濟において、勞働力の獨占より擧げたる『利潤』を、近世經濟においては、資本力の獨占より擧ぐることになつたのである。

個人または特定個人の集團が、生産主體となるためには、一定生産機能の獨占を要する。もし『資本力』が、『勞働力』と同じやうに解放されたならば、そこに生産關係の統制はなく、そこに『利潤』といふ現象はおこりえない。そこで、個人主義經濟は、新らしき生産關係を樹立するにあたり、勞働力解放の代償として、資本力の獨占を完成したのである。資本力は、こ

において、その『獨占』を利用し、もろもろの生產關係を統制するとともに、そこに『利潤』といふ現象を發生せしめた。これを勞働者の方面から觀るならば、『奴隷』といふ人格的鐵鎖から自由になつて、『資本力』といふより力強い新たな鐵鎖に、束縛さるゝこととなつたのである。勞働者は、『自由』になつたといふ。しかし事實は、鐵鎖の形態がかはつたばかりで、決して自由になつたのではない。

勞働者が『自由』であるといふ意味は、經濟上、特定の『行爲』の自由――『勞働力』を市場に販賣するの自由――を、獲得したといふ意味である。しかしその販賣は、名義上自由であつて、事實上自由ではない。たとへそれが『自由』であるとしても、それは『賣る』だけの自由であつて、『賣つた』瞬間――すなはち、生產關係に入つた瞬間――その自由は消滅する。そして、生產關係においては、かれらは、奴隷と同じく拘束されねばならぬ。

もとより、個人の社會的意義は『生活』にある。したがつて、その社會的『自由』とは、『生活』の自由でなくてはならぬ。農奴は解放されたといふが、それが『自由』であるためには、土地耕作の自由を得なければならぬのに、かれらはたゞ肉體を解放されたゞけで、生產關係においては、封建諸侯に貢じた『租稅』や『勞役』が、一定の『地代』となつて、地主に强取される。それでは、形態變化以外に、なにものもおこつたとは言ひえない。勞働者とても同樣である。かれらは、その主人公が『資本家』にかはつたといふこと以外、生產關係の主體たりえざる點では、なんらの變化をもえない。世にこれを『賃金奴隷』と稱するのは、このゆえである。蓋し勞働者に『生活』の自由なきの謂である。

かくのごとく、資本は『獨占』であり、その獨占的資本こそ、生產關係の統制者なのである。しかし『獨占』は、觀念上『自由』と背叛する。そこで、個人主義經濟學は、この矛盾を糊塗するために、リカードをして、有名な『地代學說』を樹立せしめた。それは、地代とは、耕作限界の劣勢土地に對する優勢土地の差額であるといふこととの立證によつて、地代の『剩餘價値』であり、『獨占價値』であることを、明らかにしたのである。これに對して、『資本』より生ずる『利潤』については全生產價値のうちから、需要供給の原理に支配さるゝ『賃銀』と、この剩餘價値たる『地代』とを差引きたる殘額であると稱した。これは、土地の獨占性を說明することにより、反面から、資本の非獨占性を、暗示しやうとの奸策である。しかしながら、土地は結局において、一種の資本である。したがつて、土地に加へら

れたる筈は、當然資本の頭にも加はらねばならぬ。そして、その鞭を土地から奪つて、リカード說の發展により、資本の剩餘價値說を完成したのが、かのカール・マルクスの『資本論』であることは、あまりに有名な學的事實である。

まことに、『資本』とは、『獨占』である。利潤とは、獨占價値である。しかしながら、現代社會は、この『資本の獨占』を、自由理論と一致せしめなければならぬ。そのため、スミスが『正義』を主張し、ベンタムが『安固』を提唱したことは、まへに述べたところである。しかしこれらの社會組織統制の原理は、生產關係以外のところから、突如として輸入されたるの觀を免れない。そこでかれらは、『獨占』と『自由』とを調停するために、資本の勞働起原說といふのを建立した。それは「資本は蓄積されたる勞働なり」といふのである。しかしながら、翻つて考ふるに、勞働が結局賃金以外のなにものをも生ずるものでないことは、かれらの說明するところである。或ひは、時として、賃銀の一部が、資本化されることはあらう。しかしそれは決して『勞働』が『資本』に轉化したのではない。『資本』といふ形態のみが、『利潤』を生むのである。そして利潤は資本の增殖形態である。この『資本』の自己增殖のみが、資本の本體であつて、資本以外に資本を生むものはない。マルクスの學說は、おほくの欠點あるべきにもかゝはらず、この資本の循環行程を明らかにして、『資本』の『獨占』なる所以と、利潤の剩餘價値なる因緣とを說明したことは、學界における一偉業であるといはねばならぬ。

一三

かくのごとく、近世的自由は勞働者の勞働力販賣の自由とともに、資本家の資本增殖の自由を確立した。しかも、勞働者の自由とは、實のところ非自由であり、資本の自己增殖が、一種の獨占よりなることは、すでに說明したるところである。この『資本』と『勞働』——非自由と獨占——との對立が、現代の社會不安の根原をなすものである。

こゝにおいて、われらは、近世文明最後の堅壘に達する。それは、その自由放任論の根據をなす思想にして、その學理の社會的妥當を、立證せんとするものである。アダム・スミスは、この根據を示すために、不拔の金言をのこして死んだ。曰く、——「かれは、一般に、公共的利益を增進せしめやうといふつもりもなければ、またどれだけそれを增進してゐるかをも知らない。……そして、その生產物が、最大の價値を有するやうな風に、家業を導くことによつて、かれは、かれ自身の利益を目的

としてゐるのみである。しかも、かくすることによつて、かれは、他の多くの場合におけると同様、見えざる手に導かれて、かれの目的以外の目的を成就しつゝあるのである。……かれ自身の利益を追ふことによつて、かれはしばしば、かれが眞に社會の利益を増進せしめようと目論む場合よりも、より有効に社會の利益を増進する。」――すなはち、自由競爭の社會においては、ただ『見えざる手』が指導するのみで、そのほかに、なんらの強制も行はるゝことなきにもかゝはらず、この放任的な社會進行が、かへつて「社會の利益を増進する」といふのである。

　この個人主義學説の辨明は、或る意味において、眞實を曝露してゐる。なるほど、近代社會においては、なに人も、生産に土地を提供せよと命ずるものはない。しかし土地は開拓される。なに人も地代を決定するものはない。しかし農民と地主とは、自發的に地位を協定する。なに人も、水呑百姓となれと強制するものはない。しかしかれらは、自由意志によつて、寒天に暑氣に、牛馬のごとく、報はれざる勞働をなす。(若しかゝる苦役が、なに人かの強制によつたならば、その百姓たちは、その壓制者を、いかに恨むことであらう!)なに人もその資本を生産に投ぜよと命ずるものはない。しかも資本家たちは、かならず利殖に腐心し、その結果として、工場は建ち會社は經營される。なに人も、貧民窟に住居せよと命令するものはない。しかし、幾百萬の勞働者は、犬猫と食を共にしつゝ、塵埃のなかに苦役する。(この勞働者の苦役を、なに人かゞ、意志的に命令したとしたら、どうだらう!いかにかれらは、憤りを發することであらう!)

　すなはち、個人的自由制の下においては、生活の不平等はある。しかしながら、それについて、なんらの『責任者』がない。いかに悲惨な生活に、無産階級者が追ひ落されても、その責任をもつものはない。それが個人的自由制の特色である。なぜなら、もしそれが社會的に罪惡であるとするならば、その『罪惡』の責任者は、『見えざる手』であるからである。

　しかしながら、われらは、こゝに二つの抗議を有する。第一は、この自由制の結果が、すべて「社會の利益を増進する」ものであるとの斷案である。それが、『持てるもの』の利益であつても、『持たざるもの』の利益でないといふこと、それはすでに説明した。第二に、そしてより重大なことは、この自由制において、なんらの『強制』が行はれないといふ思想である。それは、法律や政治の強制以外に、『強制』はないといふ、謬想に根底してゐるものである。

　アダム・スミスは、自由制における唯一の『強制』を、『見えざ

る手』であると言つた。この『見えざる手』――この經濟的强制――ほど、世におそろしい强制があらうか？　それは唯一である。したがつて絶對である。行爲の自由の許されてゐる社會においては、『價格』が絶對君主である。それは、すべての『生活』を束縛する。價格をはなれては、われらは『衣』することも『食』することも『住』することもできない。『汝無産者なれ、そして苦役せよ！』と命ずる法律は、どこにもない。その意味において、かれらは自由である。しかし、より强い拘束力をもつて、『經濟』はかく命ずる。『價格原料』はかく强制する。したがつて、價格力を無限にもてるものは、絶對の自由をえ、價格力が有限なるものは、相對の自由をもち、それが皆無なるものは、絶對の『非自由』である。しかも、『價格力』――それは、しだいに『資本化』し、『獨占化』する傾向を有する――は、しだいに少數者の手に收められ、したがつて、そこに大衆の非自由が現出することになるのである。すなはち、『見えざる手』こそは、なに人もよくせざる『强制』をなすところの、社會威力である。

一四

以上、わたくしは、『自由』がいかにして要求せられ、いかにして發展し來りしか、すなはち、現代社會の思想的背景としての『自由』の發展と本質とを、詳らかにしえたと思ふ。要れば、それは『行爲』の自由であつて、『生活』の自由ではい。その結果として、最も强制なき『自由』であるべき筈のものが、最も强制的なる『非自由』となつた、といふことである。しからば、當來社會においては、『自由』はいかに發展すべきか。すなはち、當來社會の思想的背景としての『自由』は、いかなるものなるべきか？　これが、われらに與へられたる最後の問題である。

この問題に對して、絶對的自由否定論の主張は、最も明確である。すなはち、自由の名によつて行はれた社會的罪惡は、すでに明らかである。ゆえに「自由主義を葬り去れ。その時はすぎ去つた」といふのである。これは、一派の共産主義者の言説である。意識的なる社會統制組織によつて、完全なる『自由』の撤廢を斷行し、「生産および分配の完全なる國家的計算と國家的管理」の下に、强制生産と强制分配の制度を設けんとするもので、現代のロシアが、大規模な社會的實驗を行ひ、そして、これが當來社會のかならず經過すべき、正常制度であるといふ思想の下に、世界的宣傳を行ひたるものである。

私見によれば、この極端論は、眞實ではない。第一に、誤られたるは「自由」の功利的、個人的解釋であつて、『自由』そ

のものではない。それは『自由』の名の下に、自由ならざるものを、敢行したものである。ゆえに、過去の罪惡をもつて、自由を否定するとにはならぬのみか、これによつて、ますます眞の自由を追求すべき理由になる。第二に、なに人が、自由を撤廢せんと試むるも、『自由』は人類の原本的本性である。それを撤廢しうると信ずるのは、科學的社會主義なると否とをとはず、社會心理學的に妄想である。この二つの點から、わたくしは、當來社會の思想的背景として、更正されたる『自由』が立たざるべからざる理を、確信するのである。

それでは、『自由』の意義の内的更正とは、なんであるか？これを概論するならば、失はれたる『普遍性』と『社會性』との恢復である。ふたゝびフランス革命のモットーにたち歸ることである。『自由』と『平等』と『博愛』とは、功利的個人主義思想の下においては、たしかに背叛的であつた。しかし、現代は、すでにその時代を經過しつゝある。『自由』が、理想的にまた社會的に考察さるゝとき、この三つの標語は一に歸し、はじめてその本色を發揮するのではあるまいか？

わたくしは、『行爲』の自由を排して、『生活』の自由を要求する。特定個人の自由のかはりに、一般個人の自由を要求する。消極的自由のかはりに、積極的自由を要求する。自由とは、かならずしも、『功利』に立脚するものではない。それは人間性の理想である。自由とは、かならずしも、個人的考察ではない。それは社會的理念である。自由が生活に則して、理想的に且つ社會的に理念されたとき、はじめて當來社會の思想的背景は、完成するものではあるまいか？　わたくしは實にかく信ずるものである。

しからば、理想的にまた社會的に考察された生活の自由の上には、いかなる社會が建立されるか？　その内容と形態とは如何？　そは次に解かれざるべき、最も重要なる問題であるとともに、最も困難なる問題である。いまこゝに、それを解決するほどの時と力とをもたないことは、わたくしの最も遺憾とするところである。或ひは、本稿が、破壞に急にして、建設に疎なるを罵らるゝであらう。わたくしは、それを甘受せねばならぬ。たゞかゝる學的大事業は、學界全部の共同事業として、しだいに建設さるゝに値するほどの、重大事業なるを知るがゆえに、不備をもかへりみず、その理論の端緒を、こゝに公表したのである。すくなくとも、その思索の出發點は、そしてその道標は、本稿によつて、やゝ明らかになつたと信ずる。次の問題に對する私見にいたつては、將來機會を得て、また教へを乞ふことがあるであらう。

滅びゆくものの道

――既成諸政黨の迷妄――

大山郁夫

一

普選實施後に於て當然增加するものと期待されてゐる約一千萬人の新所有權者を中心としての諸政黨間の爭奪戰が、この次の總選擧を機會として、我國の政界の上に如何に烈しき激動を卷き起すべき可能性のあるものであるかは、今のうちから一般公衆に依つて、充分に感知されてゐることである。それに、その時には、現在着々と擡頭の機運に向ひつつある無產階級の政黨が、如何なる程度かに於て、その政爭の中へ割り込んで行くに違ひないことが確實なものとすれば、それに伴ふ大小の波瀾が、更らに一層收拾し難いほどの紛亂狀態に導かれるであらうといふことも、大體に於ては、誰れにも見當がつけられてゐることである。

しかも、かうした豫想が愈よ現實問題となるのは、さして遠い將來のことであるまいといふ懸念さへも、今日既に多くの政界の觀察者たちの考へを充たしつつある。そこに、現政界の不安の直接の大原因がある。そして、それが殊に、現內閣の足場となつて居る所謂政・憲二派の協調の箍にただならぬ緩みが來てゐるところから筋を引いて來てゐるものであるといふことも、別に取り立てて指摘するまでもないことであらう。

既成諸政黨がこの局面を前にして、如何に痛烈に煩悶してゐるかは、何より殊に、彼等の政治的行動の諸相が明白に實證してゐる。先づ第一に、さほどまでに協調の箍の緩んでゐる政・憲二派は、この際思ひ切つて手を別たうとしてゐるのかと思ふと、必ずしもさうではないやうにも見える。が、さればといつて、それも徹底的にさうでないやうに見える譯では決してなくて、見方に依つては、隨分さうでもあるやうにさへ見える節所もある。別れるつもりでゐるのか、それとも別れない積りでゐるの

か。それは恐らく、その當事者である兩黨が一番迷つてゐる點であらう。彼等は依然として、to be, ―― or not to be の岐路の前に立つてゐる。かうした進退兩難の惱み。それから來た焦燥氣分。――さうしたものが、外部の傍觀者たちの視野に、この頃の梅雨空のやうな、重苦しい陰鬱な空氣を漂はせてゐるのである。けれども、當事者である彼等に取つては、それどころの騷ぎではなく、それは實に彼等の死活問題――といふほどではなくとも、少くとも彼等のそれぞれの黨勢の將來の消長に關する重大問題の繫かつてゐる樞機であらう。彼等がいつまでも決斷しかねてゐるのも、決して根據のないことではないのである。

そこへ持つて來て、唯一の在野黨である政友本黨の地位が、ますますこの紛糾狀態を加重してゐる。第五十議會で、無力の在野黨としての特質を遺憾なく發揮した本黨も、今では却て『政本合同』とか『憲本合同』とかの噂の中心點に納つて、悠然として落ち着き拂つてゐるやうに、少くとも外觀の上だけは見える。かうした噂が――縱し一片の噂だけに止まるにせよ――一時でも立てられたといふことは『憲政の常道』を泣かせることにもなり、議會政治に泥を塗ることにもなり、從つてこれらの諸政黨のすべてを公衆の前に不信用たものに見せる結果にもなることは、言ふまでもないことである。がしかし、飽くまで『現實政治』の囚となつてゐる彼等は、さうしたことに對しては、驚くべき鈍感さを示してゐるのである。殊に、その政治思想に於て、極端な保守的分子である樞密院や貴族院の水準より餘り高くは出來てゐない政友本黨に取つては、寧ろ『憲政の常道』に逆行することが、恐らく『善政』か何ぞの常道とでも見えてゐるらしくさへあるのである。

だが、その政友本黨にしたところで、決して純粹に愉快な日ばかりに惠まれてゐる譯ではない。どの政黨が、『無力な在野黨』の地位に居ることを得意がることが出來よう！　いくら政界に氣狂ひ日和がつづいたところで、政本合同とか、憲本合同とかの機運が、噂ほど容易に熟する筈のものではない。加藤――田中――床次の三角關係の下に統括されてゐる黨界の情勢の動きは、誰れにも推測が出來る通りに、複雜でもあれば、微妙でもある。それに、これらの諸政黨の内外にも、幾多の惑星が縱橫に飛行して、盛にそれに働き掛けてゐる。かういふ形勢の下に於ては、まだしも憲政會の單獨内閣の方が、より多分の可能性を持つてゐるものとすら見られることも出來るのである。

か、政友本黨に取つての最大の痛手は、彼等が從來終始一貫して、普選に反對する運命の上におかれて來たといふことであ

る。政界に於ても、因果應報の理法が働かない譯には行かないものだとすれば、彼等は自ら播いた種からの收獲を、自ら刈り入れなければならない日の來るのを、當然のこととして期待してゐなければならない筈である。もとより彼等は從來彼等を支持して來た有權者らの投票の大部分を、尙ほ依然として自黨に引寄せることが出來るかも知れない。けれども、若し彼等が、普選後の新有權者らの多くをも容易に抱き込むことが出來るものと考へてゐるならば、それは餘りに選擧區民を見縊りすぎた樂觀的打算に過ぎるものだとしなければならぬ。

二

かうして、三黨が三樣の地位に居り三樣の態度を持してゐる。がしかし、最も多くディレンマに陷つてゐる政友會から、幾分か有利の地位におかれてゐる憲政會に至るまでの諸政黨が、漏れなく不安に脅かされ、不斷の惡夢におそはれてゐることは一つである。一千萬人の新有權者らの嚮背、――それは全然未知數である。が彼等の輕視すべからざる大部分が、その生活上の利害關係上、無產階級政黨に對して、或る程度の親和力を示す嫌れのあるといふことは、寧ろ確實に遠いとするよりは、近いとする方が正當である。

もとより彼等既成諸政黨は、少くとも表面上は、近き將來に於ける無產階級政黨の勢力を極度に低く評價することに依つて、幾分かは自ら慰める餘地を發見してゐる。彼等はかくて、本來實力の薄弱な無產政黨は、或は數箇所の工業都市に於てこそは多少の地盤を開拓し得ないにも限らないが、――それも大したことにはなるまいけれど、――しかしそれが、その他の方面、殊に農村地方に於て著るしく延びて行きさうな徵候は見えないから、今のところ別に意に介するに足るほどの敵ではないとして、一應は高を括くつてゐるのである。

さうだ！　彼等は一應さう考へて安心してゐる。けれども、その一應は畢竟一應である。しかもそれは、彼等の意識の上層に浮び出てゐる考へだけにすぎないものである。若しくは、彼等はさう『理解』することに依つてわづかに、ともすれば擾されがちの彼等のたましひを鎭めようとしてゐるだけにすぎないのである。

しかし、彼等のたましひは、果してさうした『理解』を通して安定を得たであらうか？　どうして！　彼等のたましひが安定を得ようと焦慮すればするほど、それは益々安定から遠ざかつて行く傾向を示すのである。若し人々がそれを疑ふならば、人々は第五十議會以來の彼等の行動を見るがいい。それの上に

は、どこに魂の安定の姿を反映した影が見られたか？　また現に見られてゐるか？

彼等はまず第一に、普選法そのものを散々に切りさいなんで、それを甚だ普選法らしからざるものにした。このことは、私が本誌に於ても屢々論述したとであるから、今はそれに言及しまい。が、彼等が不覺にも、それの上にブルショアジーの階級的臭氣を過度に匂はしてゐることには、玆で再びただ一言だけでも觸れることを許されたい。就中彼等が平氣で、所謂『貧困にして生活のため公私の救恤を受くるもの』を缺格者として有權者中から除外したことなどは、この點に關して最も典型的なものである。彼等は一方に於ては、選擧權は『國民の權利』だなどと稱してそれに金箔をつけ、そしてそれを民衆に與へた彼等の功勞を極度に吹聽しながら、他方に於ては、貧困階級の一部にそれを拒んでゐるところを見ると、彼等は今尙ほ依然として、『貧困』を以て怠惰とか無能とかの結果とし、それを貧困者自身の個人的責任に歸せしめようとするブルショア哲學一流の舊思想の堅殼の中に立て籠つてゐるものであることは明かな事實である。けれども社會現象を幾分でも科學的立場から觀察したものに取つては、一般的現象としての貧困は、現代社會制度の缺陷から來たものであつて、そして個々の貧困者は、この社會惡の負擔者であることは、いふまでもないこととして見られるものである。殊に『生活のため救恤を受くる』必要を感ぜしめるやうな貧困の境地は、資本主義的經濟組織の生産樣式に對して形影相伴ふ關係におかれてあるところの『失業』の現象から來ることが最も多いのである。けれども彼等は、頻りに失業者の救濟を叫ぶ――實行意志とは無關係に――ことはするが、失業の原因を取り除かうとは無論しないのである。のみならず彼等は、そこから更に一步を進めて、この社會惡の負擔者らを選擧格上の缺格者とすることによつて、彼等の頭上に更らに一層殘忍なる不公正を積み累ねようとさへしてゐるのである。そこに、表面上如何に僞善の假面を冠ぶつても、その本質上ブルジョアジーの利害の政治的表現機關だといふことに變りがない既成諸政黨が、ふとした不用意の間に於て、思はずその地金を露はさないでは濟まない約束に縛られてゐることの一端が現はれてゐるのである。

しかも彼等は、斯樣に普選法の上に樣々の小刀細工を加へただけでは滿足が出來ないで、まだその上に、近頃の『惡法』である本質の隱せない治安維持法の制定に努力しなければならなかつたのである。この治安維持法が、社會的に當然のこととして不可抗的に發生する思想及び運動に對して不當な權力の壓迫

を加へようとしてゐるものであることに關しては、既に各方面から詳論されて來た。そして私自身もまた、私の立場から、それに對して屢々攻擊の弊を擧げて來た。既成諸政黨にしたところで、そこに氣附いてゐない筈はない。殊に彼等は、それがその立法の精神に於て、如何に普選法と矛盾する外觀を示してゐるものであるかを、充分に知り拔いてゐたに違ひはない。にも拘らず、彼等は彼等の制止的意志で防ぎ切れない彼等の內部からの衝動から、遮二無二その治安維持法制定の暴擧に向つて疾走して行つたのである。滅び行くものの辿る道には、避けなれない蠱惑性があり、拒まれない牽引力がある。さればこそ既成諸政黨は、焦れば焦るほど、踠けば踠くほど、益々豫期以外の方向へ引きづられて行つてゐるのである。かくて護憲三派は、折角普選法の成立に努力しながら、その功勞を相殺するに充分な治安維持法を無理押しに押し通さなければならなかつたし、また普選法反對といふ不利益な地位へ逐ひやられたやうな惡因緣に附き纏はれた政友本黨は、更らにこの惡法に贊成することに依つて、まだその上に民衆の面前に罪惡を重ねなければならなかつたのである。

三

既成諸政黨は、かうした諸障壁をその周圍に築きあげて、無產政黨の襲擊に備へた。が、それでも彼等のたましひが、まだ最後の安息を發見することが出來ないで居るのは、何といふ因業な宿緣であらう！　しかし我々は、ありふれた運命論者の態度を學んで、それを免れがたき宿緣と觀ずるだけに止まつてはならない。我々は今尙ほ一步を進めて、それの原因をはつきりと突き留めなければならぬ。

この事を試みようとすると、我々はまづ最初に、既成諸政黨が自らその魂の安息のために設けたかうした堅固に見える諸障壁が、却つて一々薄氣味のわるい眼を見開いて鋭く彼等を見返し、この上彼等の魂の不安を誘つてゐるやうにも見られ、また彼等の未來の運命を暗示してゐるやうにも見られるといふ事實に直面するのである。それは何故か？

それは畢竟、私から見れば、治安維持法の制定に於て最高潮にまで登りつめた權力の赤裸々なる表示の如きものは、既成諸政黨及びその背後の支持力である支配階級の政治意識の倫理性の缺乏を、餘りにも赤裸々に露出してゐるものだといふところから來てゐるのである。

社會生活は、ホッブスの自然狀態のやうに、萬人の萬人に對する戰ひばかりから成立つてゐるものではない。そこには、さ

うした相互闘爭の原理に反對して作用してゐる他の幾多の原理もある。殊にそこには、クロポトキンの所謂『相互扶助』の原理も、それの全面を浸透して現實に働いてゐるのである。無論一時的現象としては、相互闘爭と相互扶助とが相互に表裏の關係に立つてゐることも、極めて普通に目撃し得られることである。がしかしながら、幾分永續的見地に立つて觀察すれば、群居動物の社會生活に於けると同樣に、人類の社會生活に於てもまた、相互扶助の原理が相互闘爭のそれに對して優越性を示してゐることを指摘するクロポトキンの所説が、決して的を外れてゐるものでないことが見られるのである。そして私から見れば、相互闘爭に必然的に伴ふ一條件であるところの權力の社會生活上に於ける行使が、最も多くそれの服從强制力としての効果を擧げてゐる場合に於てすら、常にそれの行使者に絶對的安泰感を與へることが出來ないのは、畢竟するに、それがあらゆる場合に於て社會生活上の他の、より高き一條件であるところの相互扶助の原理と衝突する危險に曬らされてゐるところから來てゐるのである。

かうした問題は、私が玆で序ながらのこととして觸れるよりは、寧ろ獨立的に取扱ふのを便宜とする。それに、私自身は、既に發表した一二の論文に於てそれを幾分か細論したし、尙ほまた、將來に於ても更らにその考察を進めようとしてゐるとであるから、玆ではこれ切りのこととするが、要するに、我國の支配階級が、一方に於て普選法の制定によつて從來よりは一層廣き範圍の社會層の生存上の利害感の政治的表現の通路を開いたと同時に、他方に於て治安維持法に依る權力の脅威の表示を通してそれを閉塞する必要を感じたのは、彼等が民衆の上に課して來た傳統的政治意識が、新たに政治的活動要素として加はつて來ようとしてゐる多數の民衆に對して、政治生活上の規範としての拘束力を缺いでゐることを感じたからのことでなければならぬ。で、彼等の傳統的政治意識が多數民衆に對して政治生活上の規範としての拘束力を缺いてゐるといふことは、それがそれに對する多數民衆の政治的義務感から來る服從意志を喚び起す力を缺いてゐるといふことであり、從つて結局それは、それが多數民衆の眼に倫理性を缺いてゐるものとして映ずることを意味するといふことに歸着するのである。で、若し我々が、政治意識の或る體系の倫理性の有無の標準を、神意とか超生活的指導原理とかの上に求めるといふやうな非科學的立場を排して、それを現實の民衆の意識生活の裡に求めるといふやうな實證的經驗論的立場を取るならば、我國の支配階級が我々の上に課して來た傳統的政治意識が、今や次第にそれ自身の倫理

性を喪失しつつあることは、疑ふことの出來ない事實である。

支配階級も、たしかにその點を認知してゐる。であればこそ、彼等はその缺陷を補塡するために、あの際に業々しくも、治安維持法に依る權力の脅威を表示しやうな手に出たのである。苟くも彼等が多數民衆の上に課してゐる政治意識そのものに、それ自身の倫理性に依つて多數民衆の政治的義務感から來る服從意志を喚び起す力がある限りは、彼等は今更ら何を苦んでか、明かに彼等の立場を政治倫理的に不利益なものにするに決まつてゐる權力の脅威を高々と揭げるやうなことをしよう！

ところが、社會生活の現狀の下に於ける必然的産物として不可抗的に發生する思想及び運動に對して權力の脅威を以て臨むことは、そのこと自身が、今日の多數民衆の政治倫理意識の裡に於て、段々と强硬に否認される傾向になつて來てゐることも、一般に周知されてゐる通りである。世界大戰中にデモクラシーや社會主義的思想やが相次いで勃興しかけたときから『思想は思想を以て戰へ』といふ標語が、各社會層の中へ急速に廣まつて行つたのは、一體何を物語るものであるか？　それは明白に、新生の思想及び運動の壓迫のための權力及び暴力の行使に對する、民衆の或る部分の倫理意識からの反抗を反映したものである。で、かうした傾向が一度現はれてからは、これは々顯著なものになり續けて、今日までに及んだのである。

支配階級は、このことを認識しないで居られない境遇におかれてゐる。それ故に、彼等は周圍の事情の勢に驅られて、一旦は治安維持法を制定してみたものの、しかしそれは決して、彼等に取つて無條件に使ひ心地のいい武器ではなかつたのである。從つて、それを非常に重寶がつてゐる彼等の心理も、多少ともそれを持ち扱ふ氣分に依つて裏附けられてゐるやうに見られるのである。その點は、私から見れば、第五十議會終了後の地方長官會議に於ける若槻內相の訓示中の、治安維持法適用の件に關しての注意深き言葉の裡に、驚くべき明瞭さを以て浮び出てゐるのである。もとより、內相のその訓示も、該法が多數民衆に對して持つ危險性を毫も緩和してゐるものではないが、しかしながら、支配階級が自ら作つた護身具に自ら怯えてゐるその間の消息は、そこにも、ありのままに物語られてゐるものがあるやうに、私には感じられるのである。

四

支配階級がそれの傳統的政治意識の倫理性の缺陷を補塡するために採用してゐる手段は、單に權力の行使だけではなく、金

力の誘惑もまたこの方面に於て絶大な働きをしてゐることは、今更ら事新らしく發ばき立てるまでもないことである。立憲政治の支配の下に於ても、政治の局面を動かして居る最後の力は、ブルジョアジーの政治觀念の中心的項目をなしてゐる自然法や自然權でもなければ、三權分立主義とか責任內閣主義とか、二大政黨主義とかといつた樣な一切の政治的方便を包む大風呂敷ともいふべき『憲政の常道』ではなくて、或は權力であり、或は金力であり、或はこれらの兩者の結合であり、若しくは更らに突き込んでいへば、今日これらのものの背後に潜んでゐるブルジョアジーの階級的生存上の利害感である。最後に擧げたブルジョアジーの階級的生存上の利害感こそ、表面上幾多の尤もらしい政治觀念で飾り立てられてゐる支配階級の政治意識の源泉である。

この政治意識が、直接の政治的活動要素としての多數民衆の政治的義務感からの服從意志を喚びさますことが出來なくなつた場合に、——換言すれば、それがそれの客觀的倫理性を缺くやうになつた場合に、——支配階級が權力の行使に依つてさうした服從意志を强制する常套手段を取ることに關しては、既に前に述べた。が、同樣の場合に於ける金力の行使は、その服從意志を强制する目的から行はれるよりは、寧ろそれの倫理的根源であるべき筈の政治的義務感を溷濁せしめることに依つて、同樣の效果を擧げようといふ目的の下に行はれるのを常として來たものである。が、いづれの場合にせよ、さうした政治的方便が、本來支配階級が課する政治意識の倫理性の缺陷を補塡する必要から生じて來ながら、しかもその結果に於て、却て一層徹底的にそれの倫理性を破壞する役割を演ずるやうな傾向を示す必然性があることには、毫も偷はりがないのである。

政治に於けるマンモニズムの跳梁は、從來の政治の歷史と年代を同じくしてゐるものだといへる。そして近代の立憲政治の支配の下に於ては、その點が幾分でも救はれたといふよりは、寧ろ一層加重されたといふ方が正しいのである。封建的專制政治の下に於ける權力の露骨なる表示と、立憲政治の下に於ける金力の放肆なる行使から來た一切の弊害は、從來の支配階級に奉仕して來た政治學說の上に與へられてゐる幾多の巧妙に組みたてられた政治觀念で隱蔽するには、餘りに大袈裟に行はれて來たものである。かの有名なるオストロゴースキーのデモクラシーと政黨組織に關する大著が公にされてから以來の實際政治の科學的硏究者たちの注意の主要なる一部分は、常にこの問題の上に集中されて來た觀がある。現代に於て、一切の犯罪の蔭には女性があるといふことが縱し幾分言ひ過ぎであるにせよ、

一切の political scandals がマンモンの魔の手に依つて操つられてゐるといふのは、決して誇張的な言ひ方ではない。模範的立憲國といはれてゐるイギリスの代議政治が帶びて居る銅臭もしくは黄金臭の病源は、近年に於ては、私の知つてゐる限りでは、ヒレアー・ベロックのメスのやうに鋭い觀察眼に依つて、最も痛烈に抉ぐり出されてゐる。で、幾分か皮肉にいふと、それほど腐敗した政治が比較的に表面上の破綻なしに行はれてゐるところが、模範的立憲國の模範的である所以だともいへるのである。少くともそれはブルジョアジー式立憲政治の模範的典型だといふことだけは、間違のないところである

しかし、黄金政治の魔の手の實例は、それを遠く諸外國に仰ぐまでもなく、我々の周圍にも縱横無盡に活働してゐる。短き我國の憲政の歴史の上に於ても、官僚及び既成諸政黨は、この點に關する教課を、餘りに勤勉に、餘りに忠實に學びすぎた。彼等の慣行の待合政治とか、利權交換政治とかは、この點に於ける彼等の成績の優秀を記錄する。殊に諸政黨の手に依る貴族院の諸派の操縱とか、地方的利權の誘惑を通じての地盤の開拓とか、選擧區民の腐敗化とかなどは、彼等の技術が益々堂に入つて來たことを示す。その他、官界若しくは官民の接壤的地點に於ける一切の腐敗事件——たとへば寺内内閣時代以來頻々として連續的に摘發されて來たところの多種多様の公人的背徳事件若しくは腐敗事件の如き——に對しては、どれかの政黨が掛り合ひになつてゐないことがなかつたことは、いふだけ野暮にさへ聞えることである。

多年鹿爪らしく「憲政の常道」といふ莊重な響きを持つ叫びを擧げて來た既成政黨が、その實際上の政治的活働に於て、時の進むに從つて、益々マンモニズムの方へ趨りつつあることを示す最近の實例としては、我々は舊自由黨の傳統を誇る政友會が、日頃攻撃の標的にしてゐた軍閥の一巨頭を黨首に押し戴くに至つた來歴や、その政友會へ、曾て既成政黨打破の看板の下に起つた革新クラブが合同して行つた經過などを擧げることが出來る。あの際に於て、何十年かの苦節を賣物にしつつ、終始一貫して後者を統率して來た老政客が、政黨と金力との宿縁に關して漏らした苦しげな告白は、割り切つたことを言つたにすぎないものではあつたが、それが言はれた場合が場合だけに、またそれを言つた人が人だけに、それに或る一種の悲痛味が伴つてゐた事は事實である。

かうした告白を政黨政治家自身がしなければならなくなつたことは、非常に深い意味のあることである。それは何よりも殊に、政治に於ける金力の放肆なる行使が、民衆の政治倫理意識に

於て、本然的に強硬に否認される特質を持つてゐることを示してゐるものである。黨弊打破の聲が數年前に既成諸政黨の内部から起つたのも、これと同じ原因から來たものであることは、いふまでもあるまい。即ちそこで黨弊といはれたものは、主として政治に於けるマンモニズムの活躍の産物である。尤も、時としては、所謂幹部專制の弊がそれの主要なものとして擧げられることもあるが、しかし幹部專制の慣行は、政黨と富豪階級との間の金錢授受の關係が避けられないものである限りは、――そしてその關係が秘密に保たれなければならないものである限りは、――それが形式的にと共に、實質的にも徹底的に打破される譯に行くものではない。さうすることは、政黨の政黨としての生存を脅威することになるものである。

かういふ譯で、既成諸政黨の内部から出る黨弊打破の要求は、如何なる場合に於ても、彼等が自分たちの手で積んで來たものを、自分たちの手で破壊しようといふ要求に歸着するものである。のみならず、黨弊打破の斷行が、縱し政黨の今後の生存のために必要とされるものだといふことを主張し得る有力な根據があるにもせよ、實際上それを徹底的に斷行することは、必然的に既成諸政黨を政黨でなくする結果に導かれなければ已まないものである。そこから、彼等の生存のために必要なものが同時に彼等の生存を脅威するものになるといつたやうな、彼等に取つては極めて不吉なパラドクッスが生じて來るのである。

だが、既成諸政黨が黨弊打破を叫ばざるを得ないやうになつた原因の一面は、彼等の實生活にもつと近接してゐる或る實際問題から來てゐるものでもある。殊にそれから筋を引いてゐる選擧費用の無際限なる漸増の傾向は、次第に彼等の負擔力に餘まるものと感ぜられるやうに、今日ではなつて來てゐるのである。第五十議會に於ける普選法の討議に際して、選擧費用制限の問題が相當に重大視せられたのも、少くともその或る重要なる部分に於て、この問題に關して既成諸政黨が一樣に懷いてゐる不安の念慮を反映したものである。もともと、次第に空虚な響きを増しつゝある幾多の政治觀念に依つて外面を糊塗してゐる彼等の政治意識を、この上引續いて實際政治の上に活躍させて行くためには、權力及び金力の支持の必要が、益々加重されて行く傾向があるのは、是非もない成行きである。そのうち權力の表示の問題は姑く措くが、金力の行使による誘惑の必要の加重の傾向は、このまま打捨てておくと、殆んど止め度がなく進み續けて行きさうにさへ見えてゐるのである。しかるに、一方に於て、彼等が用ひ得る金力は、何と言つても、決して無

一切の political scandals がマンモンの魔の手に依つて操つられてゐるといふのは、決して誇張的な言ひ方ではない。模範的立憲國といはれてゐるイギリスの代議政治が帶びて居る銅臭若しくは黄金臭の病源は、近年に於ては、私の知つてゐる限りでは、ヒレアー・ベロックのメスのやうに鋭い觀察眼に依つて、最も痛烈に抉ぐり出されてゐる。で、幾分か皮肉にいふと、それほど腐敗した政治が比較的に表面上の破綻なしに行はれてゐるところが、模範的立憲國の模範的である所以だともいへるのである。少くともそれはブルジョアジー式立憲政治の模範的典型だといふことだけは、間違のないところである

しかし、黄金政治の魔の手の實例は、それを遠く諸外國に仰ぐまでもなく、我々の周圍にも縱橫無盡に活働してゐる。短き我國の憲政の歷史の上に於ても、官僚及び既成諸政黨は、この點に關する教課を、餘りに勤勉に、餘りに忠實に學びすぎた。彼等の慣行の待合政治とか、利權交換政治とかは、この點に於ける彼等の成績の優秀を記錄する。殊に諸政黨の手に依る貴族院の諸派の操縱とか、地方的利權の誘惑を通じての地盤の開拓とか、選擧區民の腐敗化とかなどは、彼等の技術が益々堂に入つて來たことを示す。その他、官界若しくは官民の接壤的地點に於ける一切の腐敗事件――たとへば寺內內閣時代以來紛々として連續的に摘發されて來たところの多種多樣の公人的背德事若しくは腐敗事件の如き――に對しては、どれかの政黨が掛り合ひになつてゐないことがなかつたことは、いふだけ野暮にさへ聞えることである。

多年鹿爪らしく『憲政の常道』といふ莊重な響きを持つ叫びを擧げて來た既成政黨が、その實際上の政治的活働に於て、時の進むに從つて、益々マンモニズムの方へ趨りつつあることを示す最近の實例としては、我々は舊自由黨の傳統を誇る政友會が、日頃攻擊の標的にしてゐた軍閥の一巨頭を黨首に押し戴くに至つた來歷や、その政友會へ、曾て既成政黨打破の看板の下に起つた革新クラブが合同して行つた經過などを擧げることが出來る。あの際に於て、何十年かの苦節を齎物にしつつ、終始一貫して後者を統率して來た老政客が、政黨と金力との宿緣に關して漏らした苦しげな告白は、判り切つたことを言つたにすぎないものではあつたが、それが言はれた場合が場合だけに、またそれを言つた人が人だけに、それに或る一種の悲痛味が伴つてゐた事は事實である。

かうした告白を政黨政治家自身がしなければならなくなつたことは、非常に深い意味のあることである。それは何よりも殊に、政治に於ける金力の放肆なる行使が、民衆の政治倫理意識に

於て、本然的に强硬に否認される特質を持つてゐることを示してゐるものである。黨弊打破の聲が數年前に既成諸政黨の内部から起つたのも、これと同じ原因から來たものであることは、いふまでもあるまい。即ちここで黨弊といはれたものは、主として政治に於けるマンモニズムの活躍の産物である。尤も、時としては、所謂幹部專制の弊がそれの主要なものとして擧げられることもあるが、しかし幹部專制の慣行は、政黨と富豪階級との間の金錢授受の關係が避けられないものである限りは、――そしてその關係が秘密に保たれなければならないものである限りは、――それが形式的にと共に、實質的にも徹底的に打破される譯に行くものではない。さうすることは、政黨の政黨としての生存を脅威することになるものである。

かういふ譯で、既成諸政黨の内部から出る黨弊打破の要求は、如何なる場合に於ても、彼等が自分たちの手で積んで來たものを、自分たちの手で破壞しようといふ要求に歸着するものである。のみならず、黨弊打破の斷行が、縱し政黨の今後の生存のために必要とされるものだといふことを主張し得る有力な根據があるにもせよ、實際上それを徹底的に斷行することは、必然的に既成諸政黨を政黨でなくする結果に導かれなければ已まないものである。そこから、彼等の生存のために必要なものが同時に彼等の生存を脅威するものになるといつたやうな、彼等に取つては極めて不吉なパラドックスが生じて來るのである。

だが、既成諸政黨が黨弊打破を叫ばざるを得ないやうになつた原因の一面は、彼等の實生活にもつと近接してゐる或る實際問題から來てゐるものでもある。殊にそれから筋を引いてゐる選擧費用の無際限なる漸增の傾向は、次第に彼等の負擔力に餘まるものと感ぜられるやうに、今日ではなつて來てゐるのである。第五十議會に於ける普選法の討議に際して、選擧費用制限の問題が相當に重大視せられたのも、少くともその或る重要なる部分に於て、この問題に關して既成諸政黨が一樣に懷いてゐる不安の念慮を反映したものである。もともと、次第に空虛な響きを增しつゝある幾多の政治觀念に依つて外面を糊塗してゐる彼等の政治意識を、この上引續いて實際政治の上に活躍させて行くためには、權力及び金力の支持の必要が、益々加重されて行く傾向があるのは、是非もない成行きである。そのうち權力の表示の問題は姑く措くが、金力の行使による誘惑の必要の加重の傾向は、このまま打捨てておくと、殆んど止め度がなく進み續けて行きさうにさへ見えてゐるのである。しかるに、一方に於て、彼等が用ひ得る金力は、何と言つても、決して無盡

滅びゆくものの道

——既成諸政黨の迷妄——

大山郁夫

一

普選實施後に於て當然增加するものと期待されてゐる約一千萬人の新所有權者を中心としての諸政黨間の爭奪戰が、この次の總選擧を機會として、我國の政界の上に如何に烈しき激動を卷き起すべき可能性のあるものであるかは、今のうちから一般公衆に依つて、充分に感知されてゐることである。それに、その時には、現在着々と擡頭の機運に向ひつつある無產階級の政黨が、如何なる程度かに於て、その政爭の中へ割り込んで行くに違ひないことが確實なものとすれば、それに伴ふ大小の波瀾が、更らに一層收拾し難いほどの紛亂狀態に導かれるであらうといふことも、大體に於ては、誰れにも見當がつけられてゐることである。

しかも、かうした豫想が愈よ現實問題となるのは、さして遠い將來のことであるまいといふ懸念さへも、今日既に多くの政界の觀察者たちの考へを充たしつつある。そこに、現政界の不安の直接の大原因がある。そして、それが殊に、現內閣の足場となつて居る所謂政・憲二派の協調の箍にただならぬ緩みが來てゐるところから筋を引いて來てゐるものであるといふことも、別に取り立てて指摘するまでもないことであらう。

既成諸政黨がこの局面を前にして、如何に痛烈に煩悶してゐるかは、何より殊に、彼等の政治的行動の諸相が明白に實證してゐる。先づ第一に、さほどまでに協調の箍の緩んでゐる政・憲二派は、この際思ひ切つて手を別たうとしてゐるのかと思ふと、必ずしもさうではないやうにも見える。が、さればといつて、それも徹底的にさうでないやうに見える譯では決してなくて、見方に依つては、隨分さうでもあるやうにさへ見える箇所もある。別れるつもりでゐるのか、それとも別れたい積りでゐるの

か。それは恐らく、その當事者である兩黨が一番迷つてゐる點であらう。彼等は依然として、to be, ―― or not to be の岐路の前に立つてゐる。かうした進退兩難の惱み。それから來た焦燥氣分。――さうしたものが、外部の傍觀者たちの視野に、この頃の梅雨空のやうな、重苦しい陰欝な空氣を漂はせてゐるのである。けれども、當事者である彼等に取つては、それどころの騒ぎではなく、それは實に彼等の死活問題――といふほどではなくとも、少くとも彼等のそれぞれの黨勢の將來の消長に關する重大問題の繋がつてゐる樞機であらう。彼等がいつまでも決斷しかねてゐるのも、決して根據のないことではないのである。

そこへ持つて來て、唯一の在野黨である政友本黨の地位が、ますますこの紛糾狀態を加重してゐる。第五十議會で、無力の在野黨としての特質を遺憾なく發揮した本黨も、今では却て『政本合同』とか、『憲本合同』とかの噂の中心點に納つて、悠然として落ち着き拂つてゐるやうに、少くとも外觀の上だけは見える。かうした噂が――縱し一片の噂だけに止まるにせよ――一時でも立てられたといふことは、『憲政の常道』を泣かせることにもなり、議會政治に泥を塗ることにもなり、從つてこれらの諸政黨のすべてを公衆の前に不信用なものに見せる結果にもなることは、言ふまでもないことである。がしかし、飽くまで『現實政治』の囚となつてゐる彼等は、さうしたことに對しては、驚くべき鈍感さを示してゐるのである。殊に、その政治思想に於て、極端な保守的分子である樞密院や貴族院の水準より餘り高くは出來てゐない政友本黨に取つては、寧ろ『憲政の常道』に逆行することが、恐らく『善政』か何ぞの常道とでも見えてゐるらしくさへあるのである。

だが、その政友本黨にしたところで、決して純粹に愉快な日ばかりに惠まれてゐる譯ではない。どの政黨が、『無力な在野黨』の地位に居ることを得意がることが出來よう！　いくら政界に氣狂ひ日和がつづいたところで、政本合同とか、憲本合同とかの機運が、噂ほど容易に熟する筈のものではない。加藤――田中――床次の三角關係の下に統括されてゐる黨界の情勢の動きは、誰れにも推測が出來る通りに、複雜でもあれば、微妙でもある。それに、これらの諸政黨の内外にも、幾多の惑星が縱横に飛行して、盛にそれに働き掛けてゐる。かういふ形勢の下に於ては、まだしも憲政會の單獨内閣の方が、より多分の可能性を持つてゐるものとすら見られることも出來るのである。

が、政友本黨に取つての最大の痛手は、彼等が從來終始一貫して、普選に反對する運命の上におかれて來たといふことであ

る。政界に於ても、因果應報の理法が働かない譯には行かないものだとすれば、彼等は自ら播いた種からの收獲を、自ら刈り入れなければならない日の來るのを、當然のこととして期待してゐなければならない筈である。もとより彼等は從來彼等を支持して來た有權者らの投票の大部分を、尙ほ依然として自黨に引寄せることが出來るかも知れない。けれども、若し彼等が、普選後の新有權者らの多くをも容易に抱き込むことが出來るものと考へてゐるならば、それは餘りに選擧區民を見縊りすぎた樂觀的打算に過ぎるものだとしなければならぬ。

二

かうして、三黨が三様の地位に居り三様の態度を持してゐる。がしかし、最も多くディレンマに陷つてゐる政友會から、幾分か有利の地位におかれてゐる憲政會に至るまでの諸政黨か、漏れなく不安に脅かされ、不斷の惡夢におそはれてゐることは一つである。一千萬人の新有權者らの嚮背、——それは全然未知數である。が彼等の輕視すべからざる大部分が、その生活上の利害關係上、無産階級政黨に對して、或る程度の親和力を示す虞れのあるといふことは、寧ろ確實に遠いとするよりは、近いとする方が正當である。

もとより彼等既成諸政黨は、少くとも表面上は、近き將來に於ける無産階級政黨の勢力を極度に低く評價することに依つて、幾分かは自ら慰める餘地を發見してゐる。彼等はかくて、本來資力の薄弱な無産政黨は、或は數箇所の工業都市に於てこそは多少の地盤を開拓し得ないにも限らないが、——それも大したことにはなるまいけれど、——しかしそれが、その他の方面、殊に農村地方に於て著るしく延びて行きさうな徵候は見えないから、今のところ別に意に介するに足るほどの敵ではないとして、一應は高を括くつてゐるのである。

さうだ！　彼等は一應さう考へて安心してゐる。けれども、その一應は畢竟一應である。しかもそれは、彼等の意識の上層に浮び出てゐる考へだけにすぎないものである。若しくは、彼等はさう『理解』することに依つてわづかに、ともすれば擾されがちの彼等のたましひを鎭めようとしてゐるだけにすぎないのである。

しかし、彼等のたましひは、果してさうした『理解』を通して安定を得たであらうか？　どうして！　彼等のたましひが安定を得ようと焦慮すればするほど、それは益々安定から遠ざかつて行く傾向を示すのである。若し人々がそれを疑ふならば、人々は第五十議會以來の彼等の行動を見るがいい。それの上に

は、どこに魂の安定の姿を反映した影が見られたか？　また現に見られてゐるか？

彼等はまず第一に、普選法そのものを散々に切りさいなんで、それを甚だ普選法らしからざるものにした。このことは、私が本誌に於ても屢々論述したとであるから、今はそれに言及しまい。が、彼等が不覺にも、それの上にブルショアジーの階級的臭氣を過度に匂はしてゐることには、玆で再びただ一言だけでも觸れることを許されたい。就中彼等が平氣で、所謂『貧困にして生活のため公私の救恤を受くるもの』を缺格者として有權者中から除外したことなどは、この點に關して最も典型的なものである。彼等は一方に於ては、選擧權は『國民の權利』だなどと稱してそれに金箔をつけ、そしてそれを民衆に與へた彼等の功勞を極度に吹聽しながら、他方に於ては、貧困階級の一部にそれを拒んでゐるところを見ると、彼等は今尙ほ依然として『貧困』を以て怠惰とか無能とかの結果とし、それを貧困者自身の個人的責任に歸せしめようとするブルショア哲學一流の舊思想の堅殼の中に立て籠つてゐるものであることは明かな事實である。けれども社會現象を幾分でも科學的立場から觀察したものに取つては、一般的現象としての貧困は、現代社會制度の缺陷から來たものであつて、そして個々の貧困者は、この社會惡の負擔者であることは、いふまでもないこととして見られるものである。殊に『生活のため救恤を受くる』必要を感ぜしめるやうな貧困の境地は、資本主義的經濟組織の生産樣式に對して形影相伴ふ關係におかれてあるところの『失業』の現象から來ることが最も多いのである。けれども彼等は、頻りに失業者の救濟を叫ぶ――實行意志とは無關係に――ことはするが、失業の原因を取り除かうとは無論しないのである。のみならず彼等は、そこから更に一歩を進めて、この社會惡の負擔者らを選擧格上の缺格者とすることによつて、彼等の頭上に更らに一層殘忍なる不公正を積み累ねようとさへしてゐるのである。そこに、表面上如何に僞善の假面を冠ぶつても、その本質上ブルジョアジーの利害の政治的表現機關だといふことに變りがない既成諸政黨が、ふとした不用意の間に於て、思はずその地金を露はさないでは濟まない約束に縛られてゐることの一端が現はれてゐるのである。

しかも彼等は、斯樣に普選法の上に樣々の小刀細工を加へただけでは滿足が出來ないで、まだその上に、近頃の『惡法』である本質の隱せない治安維持法の制定に努力しなければならなかつたのである。この治安維持法が、社會的に當然のこととして不可抗的に發生する思想及び運動に對して不當な權力の壓迫

を加へようとしてゐるものであることに關しては、既に各方面から詳論されて來た。そして私自身もまた、私の立場から、それに對して屢々攻撃の烽を擧げて來た。既成諸政黨にしたところで、そこに氣附いてゐない筈はない。殊に彼等は、それがその立法の精神に於て、如何に普選法と矛盾する外觀を示してゐるものであるかを、充分に知り拔いてゐたに違ひはない。にも拘らず、彼等は彼等の制止的意志で防ぎ切れない彼等の內部からの衝動から、遮二無二その治安維持法制定の暴擧に向つて疾走して行つたのである。滅び行くものの辿る道には、避けなれない蠱惑性があり、拒まれない牽引力がある。さればこそ既成諸政黨は、焦れば焦るほど、跪けば跪くほど、益々豫期以外の方向へ引きづられて行つてゐるのである。かくて護憲三派は、折角普選法の成立に努力しながら、その功勞を相殺するに充分な治安維持法を無理押しに押し通さなければならなかつたし、また普選法反對といふ不利益な地位へ逐ひやられたやうな惡因緣に附き纏はれた政友本黨は、更らにこの惡法に贊成することに依つて、まだその上に民衆の面前に罪惡を重ねなければならなかつたのである。

三

既成諸政黨は、かうした諸障壁をその周圍に築きあげて、無產政黨の襲擊に備へた。が、それでも彼等のたましひが、まだ最後の安息を發見することが出來ないで居るのは、何といふ因業な宿緣であらう！　しかし我々は、ありふれた運命論者の態度を學んで、それを免れがたき宿緣と觀ずるだけに止まつてはならない。我々は今尙ほ一步を進めて、それの原因をはつきりと突き留めなければならぬ。

この事を試みようとすると、我々はまづ最初に、既成諸政黨が自らその魂の安息のために設けたかうした堅固に見える諸障壁が、却つて一々薄氣味のわるい眼を見開いて鋭く彼等を見返し、この上彼等の魂の不安を誘つてゐるやうにも見られ、また彼等の未來の運命を暗示してゐるやうにも見られるといふ事實に直面するのである。それは何故か？

それは畢竟、私から見れば、治安維持法の制定に於て最高潮にまで登りつめた權力の赤裸々なる表示の如きものは、既成諸政黨及びその背後の支持力である支配階級の政治意識の倫理性の缺乏を、餘りにも赤裸々に露出してゐるものだといふところから來てゐるのである。

社會生活は、ホッブスの自然狀態のやうに、萬人の萬人に對する戰ひばかりから成立つてゐるものではない。そこには、さ

うした相互闘爭の原理に反對して作用してゐる他の幾多の原理もある。殊にそこには、クロポトキンの所謂『相互扶助』の原理も、それの全面を浸透して現實に働いてゐるのである。無論一時的現象としては、相互闘爭と相互扶助とが相互に表裏の關係に立つてゐることも、極めて普通に目撃し得られることである。がしかしながら、幾分永續的見地に立つて觀察すれば、群居動物の社會生活に於けると同樣に、人類の社會生活に於てもまた、相互扶助の原理が相互闘爭のそれに對して優越性を示してゐることを指摘するクロポトキンの所說が、決して的を外れてゐるものでないことが見られるのである。そして私から見れば、相互闘爭に必然的に伴ふ一條件であるところの權力の社會生活上に於ける行使が、最も多くそれの服從强制力としての効果を擧げてゐる場合に於てすら、常にそれの行使者に絕對的安泰感を與へることが出來ないのは、畢竟するに、それがあらゆる場合に於て社會生活上の他の、より高き一條件であるところの相互扶助の原理と衝突する危險に晒らされてゐるところから來てゐるのである。

かうした問題は、私が玆で序ながらのこととして觸れるよりは、寧ろ獨立的に取扱ふのを便宜とする。それに、私自身は、既に發表した一二の論文に於てそれを幾分か細論したし、尙ほまた、將來に於ても更らにその考察を進めようとしてゐるとであるから、玆ではこれ切りのこととするが、要するに、我國の支配階級が、一方に於て普選法の制定によつて從來よりは一層廣き範圍の社會層の生存上の利害感の政治的表現の通路を開いたと同時に、他方に於て治安維持法に依る權力の脅威の表示を通してそれを閉塞する必要を感じたのは、彼等が民衆の上に課して來た傳統的政治意識が、新たに政治的活動要素として加はつて來ようとしてゐる多數の民衆に對して、政治生活上の規範としての拘束力を缺いでゐることを感じたからのことでなければならぬ。で、彼等の傳統的政治意識が多數民衆に對して政治生活上の規範としての拘束力を缺いてゐるといふことは、それがそれに對する多數民衆の政治的義務感から來る服從意志を喚び起す力を缺いてゐるといふことであり、從つて結局それは、それが多數民衆の眼に倫理性を缺いてゐるものとして映ずることを意味するといふことに歸着するのである。で、若し我々が、政治意識の或る體系の倫理性の有無の標準を、神意とか超生活的指導原理とかの上に求めるといふやうな非科學的立場を排して、それを現實の民衆の意識生活の裡に求めるといふやうな實證的經驗論的立場を取るならば、我國の支配階級が我々の上に課して來た傳統的政治意識が、今や次第にそれ自身の倫理

性を喪失しつつあることは、疑ふことの出來ない事實である。

支配階級も、たしかにその點を認知してゐる。であればこそ、彼等はその缺陷を補塡するために、あの際に業々しくも、治安維持法に依る權力の脅威を表示しやうな手に出たのである。苟くも彼等が多數民衆の上に課してゐる政治意識そのものに、それ自身の倫理性に依つて多數民衆の政治的義務感から來る服從意志を喚び起す力がある限りは、彼等は今更ら何を苦んでか、明かに彼等の立場を政治倫理的に不利益なものにするに決まつてゐる權力の脅威を高々と揭げるやうなことをしよう！

ところが、社會生活の現狀の下に於ける必然的產物として不可抗的に發生する思想及び運動に對して權力の脅威を以て臨むことは、そのこと自身が、今日の多數民衆の政治倫理意識の裡に於て、段々と强硬に否認される傾向になつて來てゐることも、一般に周知されてゐる通りである。世界大戰中にデモクラシーや社會主義的思想やが相次いで勃興しかけたときから、『思想は思想を以て戰へ』といふ標語が、各社會層の中へ急速に廣まつて行つたのは、一體何を物語るものであるか？ それは明白に、新生の思想及び運動の壓迫のための權力及び暴力の行使に對する、民衆の或る部分の倫理意識からの反抗を反映したものである。で、かうした傾向が一度現はれてから々顯著なものになり續けて、今日までに及んだ

支配階級は、このことを認識しないで居られなれてゐる。それ故に、彼等は周圍の事情の勢に驅られて一旦は治安維持法を制定してみたものの、しかしそれは決して、彼等に取つて無條件に使ひ心地のいい武器ではなかつたのである。從つて、それを非常に重寶がつてゐる彼等の心理も、多少ともそれを持ち扱ふ氣分に依つて裏附けられてゐるやうに見られるのである。その點は、私から見れば、第五十議會終了後の地方長官會議に於ける若槻內相の訓示中の、治安維持法適用の件に關しての注意深き言葉の裡に、驚くべき明瞭さを以て浮び出てゐるのである。もとより、內相のその訓示も、該法が多數民衆に對して持つ危險性を毫も緩和してゐるものではないが、しかしながら、支配階級が自ら作つた護身具に自ら怯えてゐるその間の消息は、そこにも、ありのままに物語られてゐるものがあるやうに、私には感じられるのである。

四

支配階級がそれの傳統的政治意識の倫理性の缺陷を補塡するために採用してゐる手段は、單に權力の行使だけではなく、金

力の誘惑もまたこの方面に於て絶大な働きをしてゐることは、今更ら事新らしく發ばき立てるまでもないことである。立憲政治の支配の下に於ても、政治の局面を動かして居る最後の力は、ブルジョアジーの政治觀念の中心的項目をなしてゐる自然法や自然權でもなければ、三權分立主義とか責任內閣主義とか、二大政黨主義とかといつた樣な一切の政治的方便を包む大風呂敷ともいふべき『憲政の常道』ではなくて、或は權力であり、或は金力であり、或はこれらの兩者の結合であり、若しくは更らに突き込んでいへば、今日これらのものの背後に潜んでゐるブルジョアジーの階級的生存上の利害感である。最後に擧げたブルジョアジーの階級的生存上の利害感こそ、表面上幾多の尤もらしい政治觀念で飾り立てられてゐる支配階級の政治意識の源泉である。

この政治意識が、直接の政治的活動要素としての多數民衆の政治的義務感からの服從意志を喚びさますことが出來なくなつた場合に、――換言すれば、それがそれの客觀的倫理性を缺くやうになつた場合に、――支配階級が權力の行使に依つてさうした服從意志を强制する常套手段を取ることに關しては、既に前に述べた。が、同樣の場合に於ける金力の行使は、その服從意志を强制する目的から行はれるよりは、寧ろそれの倫理的根源であるべき筈の政治的義務感を涸渇せしめることに依つて、同樣の効果を擧げようどいふ目的の下に行はれるのを常として來たものである。が、いづれの場合にせよ、さうした政治的方便が、本來支配階級が課する政治意識の倫理性の缺陷を補塡する必要から生じて來ながら、しかもその結果に於て、却て一層徹底的にそれの倫理性を破壞する役割を演ずるやうな傾向を示す必然性があることには、毫も偸はりがないのである。

政治に於けるマンモニズムの跳梁は、從來の政治の歴史と年代を同じくしてゐるものだといへる。そして近代の立憲政治の支配の下に於ては、その點が幾分でも救はれたといふよりは、寧ろ一層加重されたといふ方が正しいのである。封建的專制政治の下に於ける權力の露骨なる表示と、立憲政治の下に於ける金力の放肆なる行使から來た一切の弊害は、從來の支配階級に奉仕して來た政治學說の上に與へられてゐる幾多の巧妙に組みたてられた政治觀念で隱蔽するには、餘りに大袈裟に行はれて來たものである。かの有名なるオストロゴースキーのデモクラシーと政黨組織に關する大著が公にされてから以來の實際政治の科學的研究者たちの注意の主要なる一部分は、常にこの問題の上に集中されて來た觀がある。現代に於て、一切の犯罪の陰には女性があるといふことが縱し幾分言ひ過ぎであるにせよ、

性を喪失しつつあることは、疑ふことの出來ない事實である。

支配階級も、たしかにその點を認知してゐる。であればこそ、彼等はその缺陷を補塡するために、あの際に業々しくも、治安維持法に依る權力の脅威を表示しやうな手に出たのである。苟くも彼等が多數民衆の上に課してゐる政治意識そのものに、それ自身の倫理性に依つて多數民衆の政治的義務感から來る服從意志を喚び起す力がある限りは、彼等は今更ら何を苦んでか、明かに彼等の立場を政治倫理的に不利益なものにするに決まつてゐる權力の脅威を高々と揭げるやうなことをしよう！

ところが、社會生活の現狀の下に於ける必然的産物として不可抗的に發生する思想及び運動に對して權力の脅威を以て臨むことは、そのこと自身が、今日の多數民衆の政治倫理意識の裡に於て、段々と强硬に否認される傾向になつて來てゐることも、一般に周知されてゐる通りである。世界大戰中にデモクラシーや社會主義的思想やが相次いで勃興しかけたときから『思想は思想を以て戰へ』といふ標語が、各社會層の中へ急速に廣まつて行つたのは、一體何を物語るものであるか？　それは明白に、新生の思想及び運動の壓迫のための權力及び暴力の行使に對する、民衆の或る部分の倫理意識からの反抗を反映したものである。で、かうした傾向が一度現はれてからは、それは益々顯著なものになり續けて、今日までに及んだのである。

支配階級は、このことを認識しないで居られない境遇におかれてゐる。それ故に、彼等は周圍の事情の勢に驅られて、一旦は治安維持法を制定してみたものの、しかしそれは決して、彼等に取つて無條件に使ひ心地のいい武器ではなかつたのである。從つて、それを非常に重寶がつてゐる彼等の心理も、多少ともそれを持ち扱ふ氣分に依つて裏附けられてゐるやうに見られるのである。その點は、私から見れば、第五十議會終了後の地方長官會議に於ける若槻内相の訓示中の、治安維持法適用の件に關しての注意深き言葉の裡に、驚くべき明瞭さを以て浮び出てゐるのである。もとより、内相のその訓示も、該法が多數民衆に對して持つ危險性を毫も緩和してゐるものではないが、しかしながら、支配階級が自ら作つた護身具に自ら怯えてゐるその間の消息は、そこにも、ありのままに物語られてゐるものがあるやうに、私には感じられるのである。

四

支配階級がそれの傳統的政治意識の倫理性の缺陷を補塡するために採用してゐる手段は、單に權力の行使だけではなく、命

力の誘惑もまたこの方面に於て絶大な働きをしてゐることは、今更ら事新らしく發ばき立てるまでもないことである。立憲政治の支配の下に於ても、政治の局面を動かして居る最後の力は、ブルジョアジーの政治觀念の中心的項目をなしてゐる自然法や自然權でもなければ、三權分立主義とか責任内閣主義とか、二大政黨主義とかといつた樣な一切の政治的方便を包む大風呂敷ともいふべき『憲政の常道』ではなくて、或は權力であり、或は金力であり、或はこれらの兩者の結合であり、若しくは更らに突き込んでいへば、今日これらのものの背後に潜んでゐるブルジョアジーの階級的生存上の利害感である。最後に擧げたブルジョアジーの階級的生存上の利害感こそ、表面上幾多の尤もらしい政治觀念で飾り立てられてゐる支配階級の政治意識の源泉である。

この政治意識が、直接の政治的活動要素としての多數民衆の政治的義務感からの服從意志を喚びさますことが出來なくなつた場合に、——換言すれば、それがそれの客觀的倫理性を缺くやうになつた場合に、——支配階級が權力の行使に依つてさうした服從意志を强制する常套手段を取ることに關しては、既に前に述べた。が、同樣の場合に於ける金力の行使は、その服從意志を强制する目的から行はれるよりは、寧ろそれの倫理的根源であるべき筈の政治的義務感を涸渇せしめることに依つて、同樣の効果を擧げようといふ目的の下に行はれるのを常として來たものである。が、いづれの場合にせよ、さうした政治的方便が、本來支配階級が課する政治意識の倫理性の缺陷を補塡する必要から生じて來ながら、しかもその結果に於て、却て一層徹底的にそれの倫理性を破壞する役割を演ずるやうな傾向を示す必然性があることには、毫も僞はりがないのである。

政治に於けるマンモニズムの跳梁は、從來の政治の歴史と年代を同じくしてゐるものだといへる。そして近代の立憲政治の支配の下に於ては、その點が幾分でも救はれたといふよりは、寧ろ一層加重されたといふ方が正しいのである。封建的專制政治の下に於ける權力の露骨なる表示と、立憲政治の下に於ける金力の放肆なる行使から來た一切の弊害は、從來の支配階級に奉仕して來た政治學説の上に與へられてゐる幾多の巧妙に組みたてられた政治觀念で隱蔽するには、餘りに大袈裟に行はれて來たものである。かの有名なるオストロゴールスキーのデモクラシーと政黨組織に關する大著が公にされてから以來の實際政治の科學的研究者たちの注意の主要なる一部分は、常にこの問題の上に集中されて來た觀がある。現代に於て、一切の犯罪の蔭には女性があるといふことが假し幾分言ひ過ぎであるにせよ、

一切の political scandals がマンモンの魔の手に依つて操つられてゐるといふのは、決して誇張的な言ひ方ではない。模範的立憲國といはれてゐるイギリスの代議政治が帶びて居る銅臭もしくは黄金臭の病源は、近年に於ては、私の知つてゐる限りでは、ヒレァー・ベロックのメスのやうに鋭い觀察眼に依つて、最も痛烈に抉ぐり出されてゐる。で、幾分か皮肉にいふと、それほど腐敗した政治が比較的に表面上の破綻なしに行はれてゐるところが、模範的立憲國の模範的である所以だともいへるのである。少くともそれはブルジョアジー式立憲政治の模範的典型だといふことだけは、間違のないところである

しかし、黄金政治の魔の手の實例は、それを遠く諸外國に仰ぐまでもなく、我々の周圍にも縱横無盡に活働してゐる。短き我國の憲政の歴史の上に於ても、官僚及び既成諸政黨は、この點に關する教課を、餘りに勤勉に、餘りに忠實に學びすぎた。彼等の慣行の待合政治とか、利權交換政治とかは、この點に於ける彼等の成績の優秀を記錄する。殊に諸政黨の手に依る貴族院の諸派の操縱とか、地方的利權の誘惑を通じての地盤の開拓とか、選擧區民の腐敗化とかなどは、彼等の技術が益々堂に入つて來たことを示す。その他、官界若しくは官民の接壤的地點に於ける一切の腐敗事件――たとへば寺内内閣時代以來頻々として連續的に摘發されて來たところの多種多樣の公人的非若しくは腐敗事件の如き――に對しては、どれかの政黨が合ひになつてゐないことがなかつたことは、いふだけ野暮にさへ聞えることとである。

多年鹿爪らしく「憲政の常道」といふ莊重な響きを持つ叫びを擧げて來た既成政黨が、その實際上の政治的活働に於て、時の進むに從つて、益々マンモニズムの方へ趨りつつあることを示す最近の實例としては、我々は舊自由黨の傳統を誇る政友會が、日頃攻撃の標的にしてゐた軍閥の一巨頭を黨首に押し戴くに至つた來歷や、その政友會へ、曾て既成政黨打破の看板の下に起つた革新クラブが合同して行つた經過などを擧げることが出來る。あの際に於て、何十年かの苦節を寳物にしつつ、終始一貫して後者を統率して來た老政客が、政黨と金力との宿縁に關して漏らした苦しげな告白は、判り切つたことを言つたにすぎないものではあつたが、それが言はれた場合が場合だけに、またそれを言つた人が人だけに、それに或る一種の悲痛味が伴つてゐた事は事實である。

かうした告白を政黨政治家自身がしなければならなくなつたことは、非常に深い意味のあることである。それは何よりも殊に、政治に於ける金力の放埒たる行使が、民衆の政治倫理意識に

於て、本然的に强硬に否認される特質を持つてゐることを示してゐるものである。黨弊打破の聲が數年前に既成諸政黨の内部から起つたのも、これと同じ原因から來たものであることは、いふまでもあるまい。即ちそこで黨弊といはれたものは、主として政治に於けるマンモニズムの活躍の産物である。尤も、時としては、所謂幹部專制の弊がそれの主要なものとして擧げられることもあるが、しかし幹部專制の慣行は、政黨と富豪階級との間の金錢授受の關係が避けられないものである限りは、必そしてその關係が秘密に保たれなければならないものである限りは、——それが形式的にと共に、實質的にも徹底的に打破される譯に行くものではない。さうすることは、政黨の政黨としての生存を脅威することになるものである。

かういふ譯で、既成諸政黨の内部から出る黨弊打破の要求は、如何なる場合に於ても、彼等が自分たちの手で積んで來たものを、自分たちの手で破壞しようといふ要求に歸着するものである。のみならず、黨弊打破の斷行が、縦し政黨の今後の生存のために必要とされるものだといふことを主張し得る有力な根據があるにもせよ、實際上それを徹底的に斷行することは、必然的に既成諸政黨を政黨でなくする結果に導かれなければ已まないものである。そこから、彼等の生存のために必要なものが同時に彼等の生存を脅威するものになるといつたやうな、彼等に取つては極めて不吉なパラドックスが生じて來るのである。

だが、既成諸政黨が黨弊打破を叫ばざるを得ないやうになつた原因の一面は、彼等の實生活にもつと近接してゐる或る實際問題から來てゐるものでもある。殊にそれから筋を引いてゐる選擧費用の無際限なる漸増の傾向は、次第に彼等の負擔力に餘まるものと感ぜられるやうに、今日ではなつて來てゐるのである。第五十議會に於ける普選法の討議に際して、選擧費用制限の問題が相當に重大視せられたのも、少くともその或る重要なる部分に於て、この問題に關して既成諸政黨が一様に懷いてゐる不安の念慮を反映したものである。もともと、次第に空虚な響きを増しつゝある幾多の政治觀念に依つて外面を糊塗してゐる彼等の政治意識を、この上引續いて實際政治の上に活躍させて行くためには、權力及び金力の支持の必要が、益々加重されて行く傾向があるのは、是非もない成行きである。そのうち權力の表示の問題は姑く措くが、金力の行使による誘惑の必要の加重の傾向は、このまま打捨てておくと、殆んど止め度がなく進み續けて行きさうにさへ見えてゐるのである。しかるに、一方に於て、彼等が用ひ得る金力は、何と言つても、決して無理

識だとは言へない。そこに彼等の苦悩がある。もとよりそこから來る最後の破綻が、必ずしも差し迫つた問題だとは言へないことは事實である。だが、それが早晩到來しないで已まないであらうといふ豫言は、他の如何なる豫言もが有理に許され得る限りに於て、許され得る種類のものである。だが、彼等は究極に於て、どうしてこの難關を切り拔けようとしてゐるのであらうか？ それは恐らく誰にも見當がつかない通りに、彼等にも確かな成算のないことであらう。

曾て既成諸政黨が、その生存上の必要から否應なしに採用した金力の行使は、今日に於ては段々と彼等の負擔力を超過しようとする一點にまで達しかゝつてゐる。が、若しこの傾向がまだこの上無際限に增進して行くものとするならば、この單一の原因だけからでも、彼等の最後の崩壞の運命は、到底免かれられないものになるであらう。それは恰度、舌切雀の昔噺の老婆が慾張つて擔いだ葛籠の內容が、却て彼女の身を破滅に導く妖怪の群れであつたやうに。――

五

新興の一政治的勢力とならうとしてゐる無產階級政黨の弱味は、その物質上の資力の薄弱な點にあるといふことは、餘りに屢屢指摘されて來たことである。そして、或る重要な一面に於ては、それは確かにさうに違ひない。それは、白を白といひ、黑を黑といふことほど、それほど判り切つたことである。けれども、無產階級政黨の勢力の基礎が、全然物質的資力の上にばかり存してゐるものとすることは、恐らく誰れにも異論があることであらう。假りに若しさうだとすると、普選法の議會通過の徵候の現はれと相前後して開始された無產政黨組織運動が、この點からだけ見ては意外といふより外はない程の速度を以て、現在着々と進捗しつゝある事實が、どうして完全に說明ができよう？ 否、この問題の論究に關しては、私は社會心理的考察が必要であることを主張する。殊に、新興の無產政黨が提げて立つてゐる新政治意識、及びそれから生ずる要求及び主張の、政治的活動要素としての多數民衆に對する政治生活の規範としての拘束力――即ちそれの客觀的論理性――に關する社會心理的考察が、私から見れば、何よりも最も大切な仕事だと思はれるのである。

私は今、それを試みるための時間の餘裕を持ち合はせて居らない。のみならず私は、それの幾分を既に他の論文で試みた。けれども、無產政黨の出現を促進した新政治意識、及びそれから當然發生するものとして、これが愈よ組織された曉に於て

榜するであらうと豫期される要求や主張やが、普選實施後に於て加つて來る筈の多數の新有權者らの意識生活に於て、如何に多分な倫理性を帶びたものとして見られるに至るであらうかに關しては、今日に於て既に多くの徴證が歴然として見られる。

既成諸政黨も、既に夙くから、その點に心附いてゐた、であればこそ、彼等が、將來の無產政黨の綱領及び政策中に取入れられるであらうところのものとして指摘されて來た各種の項目を、彼等の事情の許す範圍内に於て、一と足先廻りして、彼等が新に塗り替へた看板の上に、筆太に書き加へた譯である。

けれども既成諸政黨が如何なる項目をその新看板の上に書き加へようとも、彼等は竟するにその本質に於てブルジョアジーの階級的生存上の利害關係の政治的表現の機關であることには變りがないのであるから、彼等から期待され得るとには、自ら限界がある。この點は多數民衆の政治意識の眼ざめが進めば進むほど、益々明白に、そして益々一般的に、認識されて行く傾向に赴かないでは已まないところのものであらう。しかし彼等は、例の治安維持法に依つて、彼等の階級的立場を一層顯著にした樣な失策を演じたのである。この治安維持法が無產階級中の諸集團の政治的大同團結を促進する動因の一つとして、どれほど有効な働きを働いたものであつたかは、あの頃からの無產政黨組織運動の進行を直接に見て來た人々には、餘りによく知られてゐることである。

無產政黨が物質上の資力に於てあらゆる弱點に圍繞されてゐることは、自他共に認識してゐることである。けれども、無產政黨は、その代りに、少くとも、それが因つて以て立つところの新政治意識の客觀的倫理性の一點に於ては、あらゆる强味を藏してゐる。で、若し我々が、あらゆる政治的勢力の消長は、究極に於ては、それが政治的活働要素としての多數民衆の政治的義務感に呼び掛けることが出來る活きた力を持つてゐるか否かに依つて決せられるものだといふやうな、社會心理的考察から出た一主張を承認するならば、我々は少くとも、右の一點に關する無產政黨の强味を、決して輕視することが出來ないのである。

この新興の敵手に直面せざるを得なくなつた既成諸政黨の今後の道が、果して如何なる方向に導かうとしてゐるものであるかは、終極に於て『時』が審判するであらう。けれども、將來に向つての我々の推測がとどく限り、滅亡の深淵がその大きな口を開いてそれを待ち受けて居るといふことを豫言することが、必ずしも全然根據のない譯ではないといふことが、我々に考へさせられるのである。

西園寺詣で論

西園寺參り

石川半山

近頃政治家の西園寺公爵を訪問することが流行して居る、苟くも當代第一流の政治家にして、西園寺公を訪問しない樣では、政界の實際勢力でない樣に、世間で見られて居る、勿論公爵を訪問する分子は、決して一樣ではない、隨分廣汎なる範圍に渡り、政黨政派の如きも、各派を網羅して居る、その目的やその關係や、固より千差萬樣で有て、公爵が彼等に應對する所、復た固より一樣でない。

政友會の人々

政友會の人々は、最も多く往く樣だ、公爵は久しく政友會の總裁で有て、今以て少からぬ愛着心を此の政黨に懸けて居るから、政友會が困まると、誰れも彼れも、その前途を如何にすべきやに付て、公爵の教を請ひに往くのだ、近頃田中義一氏が彼れを訪問して、教を請ふたら『自重』の二字を與へられたさうで有る、極めて簡單なる二字だが、意味の深い、政友會に取ても、田中氏に取ても尊い教訓で有ると思ふ、然かし西園寺公から、かゝる尊い教訓を得て來る者は、實は極めて少いのである、公爵はいくら無遠慮に押しかけても、餘り面會しない、假りに面會しても時間が至つて短かい、客の言ふことをフーム／＼と云ふて聞き流すばかりで、なか／＼意見など語る人ではない、その肚裏は、決して人に示さない人だ、横田千之助氏は原内閣時代に度々原氏の使者として、公爵を訪問したので、重要

問題に關して、原氏への答を聞いて來た者だが、それでも原氏へ直接に語る何分の一に過ぎなかつた、然かしとに角時々でも重要問題に關して、その意見を漏らした關係が有つたので、原の沒後、横田が大に賣り出してから、公爵を訪問した際は、フームフームと聞き置くばかりでなく、時としては極めて簡單なる意見も漏らされたことが有る樣だ、現代では岡崎農相あたりが、面會謝絕を食うことの少ない方で有らう、時として政局に關する意見の一端を聞くことも出來るで有らう、野田商相は西園寺公よりも、比較的に、山縣公の方に取り入つて居た樣だ。

政友本黨の人々

政友本黨の人々は、貴族の足輕となり、昨年の總選擧に、一敗地に塗れて以來、民衆に向て、何等云ふべきことを知らないので、東に奔りては、遠く盛岡の大慈寺に赴き、原敬氏の靈前に愚痴を並べ、西に向ては、代る〲西園寺公を訪問して、高橋、横田の横暴を訴へた、元田肇氏が往て、例の涙を流して說くかと思へば山本達雄氏が往て、ネッチリ〲と論ずる、續て床次竹二郎、中橋德五郎諸氏が出かけるが、それは政友本黨が政友會の正系で有ることを、天下に誇示するには、どうしても本尊の西園寺公が自家の味方でなくてはならぬ、少くも世間に對して、公爵が本黨の味方たることを廣告しなくてはならぬ、その廣告の一手段として、代る〲絕えず訪問するのだが、この連中に對しては、公爵は大概何も言はない、フーム〲と聽くばかりで有る、然かしこの會見が、新聞に現はれる時は、非常に意義の有る會合でも有つたかの如く。仰山に書き立てられ、公爵が本黨の有力なる味方の如く見られるので、さうなると、政友會も捨て置けず、又競爭して代る〲公爵を訪問して、一時間でも三十分でも長く公爵と會見しようと試みる樣になつて居る、愚かなる競爭をする者だ。

憲政會の人々

憲政會は久しく政友會の正面の敵で有つたから、この兩黨の戰へる間、憲政會員にして西園寺公に接近した者は至て少かつた、唯若槻内相は官僚時代から西園寺公に知られて居た、往年公爵が微行で、滿洲を巡遊された時、若槻氏は大藏省から隨員となつたが、その旅行の間に、スッかり公爵の信任を得たので有る、僕は日本に於ても、種々の席で、公爵に御目にかゝつて、多少その性格を知つて居るが、大正八年巴里會議の時と、その歸途、新嘉坡から神戸迄、十二日間熱田丸の船中に於て親しく敎を受けたので、公爵の性格は、大體分かつた、勿論偉人

の性格の全部は、容易に知れる者でないが、考へて見ると、若槻氏は公爵に愛重さるべき資格の有る人だ、第一に佛語が出來る、第二に巴里の事情に通じて居る、第三に酒が強い、夜を徹して飲んでも、ビクともしない、而して人物が堅實、頭腦は明晰、内外の政務に通じて、議論が要領を得て居るのだから、公爵の氣に入つたわけだ、松方公は若槻氏を用ひて、信任が厚かつた、桂公も同じく若槻氏を用ひて、その有用の材なるを認め、之を大藏大臣に拔擢された、若槻氏が松方公や桂公の信任の厚かりしは、何人も怪しまないが、僕が驚いたのは山本權兵衞伯が大に若槻氏を推重して居たことだ、震災の前年の冬、僕が山本伯に會見した時、伯は『若槻君の財政意見は、自分の意見に一致して居る所が多い』と言はれ、大分褒めて居られた。其の外樞密院でも貴族院でも、若槻氏の信用は優くれて居るが、西園寺公も亦若槻氏が訪問すれば、能く胸襟を開いて、談話の有る方だ、それ故に、あの多忙なる時間を割いて、時々興津訪問に出かけて居るので有る、恐らくは若槻氏が西園寺公の信任を博收して居る程度は、政友會にも政友本黨にも、その比を見出し得ざる程、深いものだ。

加藤首相と山縣公

加藤首相は世間からよく傲慢だと言はれる、僕等は永い間交て見て、曾てあの人の傲慢を感じたことがないが、とかく諸方面から傲慢の非難が有るのは、一は餘り先輩を訪問しないからだ。政界に立て、憲政會總裁を引受けてから、所謂苦節十年の間に、山縣公をも訪問しなければ、西園寺公をも訪問しなかつた、これ傲慢の批評の起つた一因で有る、尤も加藤子が民間黨の首領として、絶えず巨彈を閥族元老と政友會に放つて居る頃、あんな風では、とても加藤子に政權の來る時は有るまいと評された、大正五年十月、大隈侯が内閣を退く時、その後繼者として加藤子を推薦した、それを山縣公が主唱者となり、松方、大山、西園寺諸公の元老會議で、加藤子を排斥し、寺内伯を推薦し、寺内内閣が成立した、その時山縣公は『日本は國内の紛爭を避くるが爲めに、政黨員に非る首相を推して、舉國一致の政治をなさゞる可らず』との理由を作つた、それなら加藤子が憲政會を率ゐて、寺内内閣に反對を聲明した時、寺内内閣はもはや舉國一致でないから辭すべきで有つたが、山縣公の頭腦は、そんな論理的な者ではなかつた、然かし大隈侯が推薦した者を排斥して、自分の子分の寺内伯を出したのだから、山縣公も頗る氣の毒に感じたと見え、加藤子に會見して、種々その理由を辯疏する所あり、今後政黨内閣でも良いと云ふ時代

は、必ず又何とかすると云ふ様なことを言つた、あの狡猾無比にして、用心深い山縣公の事だから、加藤子に豫約の言質は、與へなかつたにしても、その言つた所を綜合すると、次の政黨内閣の時は、加藤子を推薦する意味が、十分に含まれて居たのだ、然るに寺内内閣の後には、依然として加藤子を排斥して、原敬氏を推薦した、それは原敬氏が今の田中義一氏を抱き込み、彼れを陸軍大臣にすると云ふので、山縣公の心を動かしたのだ。山縣公の原氏を嫌忌することは、加藤子を嫌忌すると同じ程度で有つたが、原氏が田中氏を陸相に迎へると云ふ條件は、山縣公が早く田中氏を出世させたい希望に一致して、原内閣が出來た。それから後、山縣公と加藤子の間は、全く隔絶したので、加藤子の友人中には、加藤子が速やかに山縣公を訪問して、その感情を融和するの必要を說いた者も有つたが、そこは加藤子だ、頑として首肯しなかつた、山縣公が小田原に健在せる間、政界の中心は、公に在ること、猶今日政界の中心が、西園寺公に在るが如き者で、政界の巨星、爭ふて公に參詣して、その意を迎へ、有象無象、群を成して、小田原へ押しかけたが、一人加藤子だけは誰れが勸めても、その膝を屈しなかつた、そこで加藤子と山縣公との間隔は、年を逐うて遠くなつた、公は時として『一度は加藤にもやらせさアなるまい』と言つて居た者が、いつの間にやら、全く不信任になつた、歐洲の平和克復後間もなく、大石正巳氏に向て、犬養毅氏は『山縣の方では、加藤の脉が、全く上がつたさうだ』と言つたことが有る、僕はその原因も知つて居る、山縣公へ加藤子のことをウンと惡るく吹き込んだ男が有るので、その吹き込み方も、亦なか〳〵巧妙で有つた、この時代に或る一派では、加藤子に憲政會を脫めさせて洋行させる計畫も有つたが、何しろ本人が一本調子で、外の者に頓着せず、苦節を守り、誰れが何と云ふても、小田原へも往かなければ、自分の所信に向て邁進したが、これは出來ないことで、僕等が加藤子に敬服した所で有る。

加藤首相と西園寺公

山縣公永眠の後、政界の中心は、西園寺公に移つたので、又もや加藤氏に向つて、西園寺公訪問のことを勸めた者も有つたが、依然として訪問しなかつた、原氏沒後、内閣は度々更迭したが、今度は加藤子に大命が降下するか、此の次は大丈夫だらうと、國民は鶴首して待つて居たが、高橋是清、加藤友三郎、山本權兵衛、清浦奎吾と意外な人へばかり、札が落ちて、加藤子へは大命が降下しなかつた、これ一に元老に對する運動、宜しきを得ざるが爲めで、主として加藤子が頑として元老を訪問

しない結果であると言はれた、而して憲政會員の間にさへも、加藤子が少しくその膝を屈して、元老の門を叩かんことを望む者を生じたが、加藤子は決して之に應じなかつた、その頃西園寺公に出入する或る人が、僕に向つて『西園寺公は容易に喜怒を面に現はさず、各政治家の愛憎のことなどは、決してその言に出す人ではないが、その心の底に於て、最も喜ばざる者が二人有る、それは一人は加藤子で、他の一人は上原元帥で有る、その理由は、加藤子は第一回西園寺内閣に外相として、鐵道國有に反對して退閣し、自分の所管でもないのに、頻りに硬論を主張して、内閣を動揺せしめた、上原元帥は第二回西園寺内閣の陸相として、例の二箇師團擴張を主張して、遂に西園寺内閣の瓦解を招くに至つた、そこでこの兩氏のことは、肚の底で面白く思つて居らない、若し上原元帥でも加藤子でも、その後西園寺公を訪問して、その感情を能く融和して置いたならば、あれ程憎惡の情も有るまいが、兩氏共に決して訪問しないので、困つた者だ、そこへ西園寺公へ取り入らんとする連中が、頻りに此の兩氏の非難攻撃をするので、この讒誣中傷は皆有効に、西園寺公の胸に入つて行く』と言つたことがある。

組閣後の加藤首相

然るに加藤子が昨年六月、内閣組織の大命を拜するや否や、一その頑固なる態度は、全く一變した。先づ自ら高橋是清、犬養毅兩氏を訪問して、入閣を勸告したのは、平生傲慢の評ある加藤子の行動として、世人の驚いた所である、而して西園寺公爵に對しても、最も重きを置き、自ら公爵を訪問して、政務の進行を報告し、尙政策に關しても、その懷抱する所を述べて、公爵の意見を求めて居る、公爵が京都に居られる時、首相がその地方を旅行すると、必ず立寄つて懇談をなし、公爵が御殿場に居らるゝ時は、ワザ／＼列車を急行列車から普通列車に乘り換へて、御殿場へ下車して、公爵を訪問し、興津へも度々訪問して居る、若し自分で重要政務の報告をするために、公爵を訪問することが出來なければ、若槻氏を送つて、西園寺公の耳に入れて置くべき問題だけは、確かに之を報告して居る、これでは政友會や政友本黨の有力者が如何に度々西園寺公を訪問し、如何に讒誣中傷を試みても容易に公爵を動かすことは困難であらう。

宣傳專門の小政治家

政友會や政友本黨の或る代議士は、新聞に自分が西園寺公を訪問したと云ふ記事の出でることが、唯一の目的で、公爵を訪

問するものが有る、こんなのが格別の用事もなくて、興津へをしかける者だから、公爵の訪問者の列に、時々變テコな名が見える。或る人の談に、これ等賣名的訪問者の中には、折角公爵を訪問しても、玄關傍の一室に一時間餘も待たされ、いよ／＼奥の座敷へ通されても、又三四十分待たされ、漸くにして出で來りし公爵は、至つて我儘な人だから『この頃はドウだ、ソームさうか、今日は少しく氣分も良くない、又お出で』と言つてその儘奥へ消えることが有る、然るにかくの如く僅かに三四分の面會で追拂はれても、その翌日の新聞には、西園寺公と談論二時間に及ぶなどと宣傳したのも有る。各派にこの類の賣名に熱心にして、宣傳專門の政治家が多いので、興津はとかく賑やかになるのだ、西園寺公は定めしウルさいことであらう。

憲政の基礎

然かし考へて見ると、日本はイツ迄、かゝる愚かなる、低級の政界を續けて往くので有る乎。元老、樞密院、貴族院、政府も政黨も、此等の機關に、十分の注意を拂はねば、その地位を保つことが出來ず、その黨の運命を發展させることが出來ないとは、誠に嘆ましいことではない乎、西園寺公へ伺候して宜しく其の御機嫌をとり結んで置かないと、次の內閣更迭に際し、推薦がして貰らへないと、各派の領袖は思ふて居る、少くも加藤內閣を倒すには、先づ西園寺公を訪問して、その非行を訴ふることが、一番有力なる手段と考へて居る。今や普選も既に通過した日本ではない乎、憲政の基礎は國民に在り、何故に先づ國民に訴へない乎、一千二百萬人の有權者よりも、一人の元老西園寺公に重きを置くとすれば、これ日本は依然として專制政治の陰謀政治で有る、公爵は千八百七十年代に佛國に學び、巴里の自由の空氣を十分に呼吸した人で有る、日本の憲政の發達の爲めに、陰謀政治の排斥すべきは、萬々承知せらるゝ所だ、山縣公は民衆を無視したる政治を、政治と考へて居られたが、西園寺公は山縣公とは教育も違へば、又自ら政黨の總裁ともなつて、その思想は餘程進歩して居る、政界の有象無象が、如何に興津へ參詣して、下らないことを並べて見ても、西園寺公が彼等の捕虜となる様なことは萬々有るまいが、唯かゝる時勢の甚だ幼稚なるを嘆息せざるを得ない、公爵自ら此の圈外に逸すべく、公爵たる者、此の際、彼の有象無象の訪問を、一齊に謝絕し、我が憲政をして自由奔放の新天地に伸展せしむる様に盡力あるべき事と僕は思ふ。

唾棄すべき黨人

前田蓮山

一

『西園寺公は政憲協調を希望して居るさうだ。』『イヤ政本合同を希望して居るさうだ。』『イヤ元老がそんな事を言ふ筈がない。』『イヤ確かに言つた。』『言はなくとも顏色で判つて居る。』何んだかんだと噂がやかましい。そんな噂を大活字で眞面目に報道する新聞紙の不見識にも呆れる。

チヨツト政界に問題が起れば、忽ち元老詣が盛んになる。『元老は此方の味方だ。』『ナンノ、おれの方に同情して居るんだ。』『勝手なことを申すな。貴公は玄關で追拂はれたと言ふぢやないか。吾輩は晝飯を御馳走になつたワイ』『自惚れるな。貴公は長尻で困ると老公が眉を寄せて居たと云ふぜ。』斯んなことが黨人間では大問題である。

何故斯ように彼等は元老を恐れ或は元老に賴らうとするのか。正々堂々と憲政の常道を踏んで行きさへすれば、元老決して恐るゝに足らず、元老に賴る必要もないわけであるが、而かも彼等が元老を恐れ元老に賴らうとするのは、憲政の常道を歩まないで、裏道傳ひに政權を維持し或は政權を獲得しようと思ふからである。

故原敬氏の如きは決して元老に賴らうとはしなかつた。山縣公とは常に反目し、親しかつた井上侯とも絶緣の姿となつた位だ。彼は元老に賴る代りに黨勢を擴張した。彼は元老の御機嫌を取る代りに民衆の投票を取ることに努めた。彼は政黨が實力を備へさへすれば元老は戰はずして亡ぶると信じ切つて居た。果然彼が實力の充滿するや、さすがの山縣公も彼には口出しが出來ず、西園寺公は彼がためにパリに使ひしたではないか。

不幸にして彼は死んでも、今は山縣公もなく松方侯もない。而して西園寺公は時勢が見へる人だ。政黨がシツカリしてさへ居れば、何の面倒もないのである。一體全體護憲運動當時の元氣は何うしたのだ。

如何にも西園寺公が清浦子を推薦したのは誤つて居た。其れだから彼も其の非を悟つて、加藤子を推薦したのだ。其れでモウ憲政はレールに載つたわけだから、政黨自身が之を運轉さへすれば何の心配もないのである。西園寺公は再び之をレールから脱出させようとはしないと云ふことは請合つてもよいのだ。

二

元老も樞密院も貴族院も、今では政黨内閣制を否認する考へはない。否認しようとしても否認し得られないと云ふことを悟つてゐる。其れは原内閣の時から定まつて居たのだ。

原氏の死後、政黨が屢々無視されたのは、政黨の自業自得と云ふ方が適當である。原内閣時代には憲政會はタツタ百個の議席を有しながら、元老を口説き廻つたり、貴族院と策應したりして多數黨内閣を轉覆せんと圖つた。政友會の高橋内閣は自ら支持し得ざる醜態を暴露したに拘はらず、貴族院の研究會に泣付いて加藤友三郎内閣を作つて貰つたのだ。

バジョットは政黨内閣制の危機に關して二つの場合を擧げて居る。即ち彼は曰く「政黨内閣制の危機は三黨併立の時である……各政黨分立して變動常なき時に於ては、君主は隨意に内閣組織者を選擇する機會を有する。甲の政治家を召して内閣組織を命ずるも、乙の政治家を召して之を命ずるも、全然君主の隨意である」と。又た曰く「多數黨にしてその首領たる人物に就て一致せざる時は、政局は大に困難とならざるを得ない。君主制の國に於ては、此の場合君主は實際に内閣組織者を選擇することが出來る。非君主制の國に於ては何人が選擇權を行ふべきや大政黨は必ず黨内の内會議を開くであらう。果して然らば黨内の少數者に對する多數者の壓制が起らねばならぬ。千八百五十九年ラツセル卿が首相たるの希望を捨てゝ、パーマーストン卿の下に副總理たるに滿足せるは即ち其の一例である。斯ような場合に於ては、政權を望む所の政黨は、自黨を一致せしむる能はざる領袖に對して、壓迫を加ふるに違ひない。此の如き政黨が首相として最善の人物を選擇するを得べきやは頗る疑問である」と

原氏死後の吾政界は、右の二つの場合の連續であつた。原氏死後の政友會は高橋總裁に一致せず、爲めに議會に多數を有しながら内閣を維持し得なかつた結果、元老の推戴によりて加藤友三郎、山本權兵衛兩首相が現はれたが、彼は之に對して何等の異議を申出で得ず、清浦内閣の出現となつて遂に分裂し、爾來三黨併立の狀態となつたのである。

小黨分立の國では、議會自身内閣を選擇し得ない。比較多數

黨に内閣を組織せしむるのが常道であると言ふ者もあるが、少數の數黨が聯合すべき可能性を有して居る場合には、或小數黨に内閣組織を命ずべきであつて、比較多數黨に内閣を組織せしむるのは却つて常道に反する。

フランスは小黨分立の國であるから、大統領は上下兩院議長に諮問して内閣組織者を選擇する慣例になつて居る。併し多くの場合、政黨の聯合が自然に成立するのであつて大統領は其の取捨に苦しまぬが、要するに是れは英國の内閣の如く議會自身が選擇するのではなく、實際に大統領が兩院議長と相談して選擧するのである。

三

日本の元老は、右のフランスの上下兩院議長のようなものである。政黨が立派に發達して、議會自身が容易に内閣組織者を選擧し得さへすれば、元老は樂になつて喜ぶであらう。少くとも西園寺公は然う思つて居るであらうと信ずる。

抑も日本に元老と云ふものが現はれたのも、彼等が權勢を振はうがためではなく、事情止むを得なかつたのである。明治十八年内閣制度が出來てから、第一次伊藤内閣、黑田内閣、第一次山縣内閣までは、當然の順序として、人選に何の面倒もなかつたが、第一次山縣内閣辭職後、今度は薩州から總理大臣を出す順序であつたけれども黑田は先年條約改正で大紛擾を惹起し、其の手腕の程が危まれてゐたので、長州の先輩は彼を好まず、黑田を除けば後に西郷、松方、大山などと云ふ同格の人物ばかりで、チツト人選に困つたので、陛下は黑田、伊藤等の數人に對し、首相選定方を御命じになり、彼等は會議の結果、松方を推薦した。是れが元老に首相選定方を御下問になつた始めである。當時世間では之を黑幕會議と呼んだ。即ち黑幕會議が起つたのは、大久保とか岩倉とか云ふような中心勢力がなくなつたからである。

松方内閣が辭職して第二次伊藤内閣が出來る際には、黑田、伊藤、山縣、井上、西郷を御前に御召になつて、後任首相を御下問あらせられた。前回には正式の御下問と云ふ程ではなかつたが、今回は正式に御召になつたのである。

第二次伊藤内閣が辭職して第二次松方内閣が出來た際には、黑田、山縣、西郷、井上の四人を御召になつた。其の結果松方に大命が下り、松方は内閣組織に着手したが、なか／＼閣僚の顔が揃はず、大命拜辭の旨を奏上したけれども、陛下の御慰撫によりて辭意を飜へし、黑幕連の會合を求めて閣僚の顔を揃へようと努めたが、何しろ松方は進歩黨と提携して、大隈を入閣

せしむる約束があるので、長州の連中は其れを嫌つて何んとしても入閣を承諾しないので、松方は又た參內して大命を拜辭した。

そこで陛下は改めて黑幕連に對し、內閣組織に盡力するよう勅命を賜はつたので、やつと黑幕連も松方の內閣組織を援助し、所謂松隈內閣卽ち松方と進步黨の聯立內閣が出來上つた。

松隈內閣が瓦解して、第三次伊藤內閣が出來る際には、黑田、山縣、西鄕、井上、大山、伊藤の六人が召されたが、此の時は御前に於て直ちに伊藤を推薦し、內閣は造作なく組織された。

第三次伊藤內閣が辭職した時は大騷動で、黑田、山縣、井上、西鄕、大山、伊藤の六人が御前に召されて會議を開き、結局大隈、板垣兩人に內閣組織の大命が下さることに決し、憲政黨の內閣が出來た。

憲政黨內閣が倒れて第二次山縣內閣が出來る際には、伊藤は支那旅行中で、先づ樞密院議長たる黑田が召されて御下問を拜し、翌日山縣、大山、西鄕、松方の四人が召されたが、彼等は卽坐に山縣を推薦した。

第二次山縣內閣は、伊藤が政友會を創立するや否や直ちに辭職し、山縣は後任として伊藤を推薦したので、元老に御下問なく、陛下は井上、松方の兩人を召されて、伊藤に大命を傳へしめられた。

第四次伊藤內閣が倒れて第一次桂內閣が出來る際は頗るゴタ付いたが、此の時御下問を拜したのは、山縣、西鄕、松方、井上の四人であつた。

第一次桂內閣が辭職して第一次西園寺內閣が出來た際には、特に元老への御下問と云ふ形式なく、桂が西園寺を推薦して退いた。但し元老と打ち合はせの上であることは言ふまでもない。

第一次西園寺內閣辭職の際は、前任者たる西園寺が桂を推薦したが、陛下は直ちに桂に大命を下されずして遙に朝鮮に勅使を遣はされ、朝鮮統監として京城に居た伊藤に御下問があつた。

第二次桂內閣が辭職して第二次西園寺內閣が出來る際には、桂が西園寺を推薦し、何人への御下問もなかつた。

斯くて元老は自然消滅の形となつたが、明治天皇の崩御で元老が復活し、やつと原氏の出現によりて元老の必要がないようになつたかと思ふと原氏が殺され、中心勢力が無くなつた結果、又々元老を煩はすことになつたのであるが、是れは元老が權勢を振はんとして乘り出したわけではなく、全く政黨がイクヂがないからである。

四

冷靜に考へて見ると、元老は大なる誤まりはしなかつた。過去三十餘年間、國家を負擔し得べき立派な大政黨が無視されたと云ふ例は少ないのである。偶々憲政黨と云ふ大政黨が出來たと云ふので內閣を組織させて見たらあの通りの有樣で、自ら土崩瓦解した。桂、西園寺時代の如きは、西園寺の方が辭職しなくともよいのに辭職して桂に讓つたのであつて、寧ろ政黨の無氣力を責めねばならぬ。高橋內閣の後に加藤、山本、淸浦の三超然內閣が出たのは、あまりに亂暴のようではあるが、當時の政友會は首領たる高橋氏に一致して居なかつたのであつて、バチョットの議論を參照すれば、元老の處置も全然誤まつて居たとは言はれぬ。

政黨自身がしツかりして居て、憲政の常道を踏んで進まうと云ふ誠意を有してさへ居れば、決して元老は邪魔にならぬのである。又た元老には政黨內閣を邪魔しようと云ふ氣はないのだ。

而かも黨人等は憲政の常道を踏むまいとするから元老に賴らうとするのである。憲政會はマサカの時は政友會を追ひのけて單獨內閣を作りたいから、元老の御機嫌を取り結んで置かうとする。政友會は憲政會と喧嘩分れをして自黨で政權を取りたいから、元老にすがらうとする。本黨は少數黨で政權を取りたいのだから元老を賴るより外はないと云ふことになるのだ。

皆んなが無理なことをしたいから元老の御機嫌を取る。元老はさぞおかしいだらうと思ふ。元老は彼等が思ふよりも公平であるに違ひない。若し公平でないならば再び憲政擁護運動を起すばかりではないか。

黨人間の根本の心得違ひは、民衆を基礎としないで、元老に取り入らうとすることである。選擧では負けても陰謀で政權を取らうとすることである。小泉策太郎君は『議會解散は天下の一大事で、最も謹まなければならぬ』と新聞記者に語つて居るが、議會解散を恐れるのが憲政の墮落の始めだ。英國の如きは多數を有して居る政府ですら解散することがあるではないか。實はレフエレンダムを希望する時勢だ。

議會解散はイヤだ。少數黨でも政權は慾しいと云ふのだから、政界に策士と云ふ者が重用され元老が擔ぎ出されるのである。凡てを總選擧に問はう、民衆に訴へようとする覺悟さへあれば、元老はいらぬわけである。

新政治家は新天地に新活躍を求めよ

文學博士　三　宅　雪　嶺

西園寺公が唯一の元老となり、朝野の政治家がその別莊に伺候するなど、誰が豫期したらうか。公の生涯は平穩なやうで、隨分變化して居る。公の眼には自身で變化するよりも周圍が變化し來つたと見えよう。公は維新の際に白粉を塗け、總督の任を帶び、前原一誠が參謀役を勤めたりした。前原の家に額があり「退藏于道」と書いたのは、公の手になつてゐる。恐らく前原が鄕里に退く時、書いて貰つたものであらう。間もなく佛國に留學し、十年を經て歸り、東洋自由新聞に關係し、岩倉公始め一同驚愕し、兄なる德大寺公及び其の他から說得するに努めた。留學の惡影響を示すの例として、西園寺を擧げるに定まつて居り、近衞公が英國に留學を申出した時、西園寺のやうになつては大變、獨國に留學させるがいゝと云ひ、漸く獨逸に留學する事になつた。西園寺と云へば鼻つまみであつた。それが後に技倆を認められ、伊藤公が政友會を組織し、その總裁となつた時、事實的副總裁の格で働き、後總裁の後繼者となり、二度も首相職に就いた。

伊藤と西園寺と種々の點で靈犀相通ずる所があり、益友ともなり惡友ともなつた。惡友と云へぬならば、道樂仲間とも云へよう。着眼や趣味や似た所があり、知識上英佛で互に相補つたらう。一方が始めに熱して早く冷えるに對し、一方が熱せず冷えず徐ろに事を處置するのも、助け合ひになつたらう。それには明治天皇の後光がないでもなく、何と云ふても西園寺は幼な友達と申すべき形があり、駄々を揑ねて叱られもせぬといふ所がある。伊藤は身分こそ違へ、才能を以つてお引き立てになり、何かにつけ西園寺と話が合ひ易い。伊藤の政友會創立は山縣派で好まず、正面より妨げぬならば、何とでもやつて見よとの調子で、失敗を望まぬ許りであり、それをば御思召を承け新政黨組織に取掛つた所、微妙な關係がないとせず。伊藤と西園寺との關係はいよいよ深くなつた。然し伊藤は西園寺で便宜を得たものの、西園寺が居らなくても、伊藤たるを失はなん

えであらう。西園寺は判りが好く、伊藤の腹心になつても、伊藤の後繼者として、種々の方面に重きを爲し、政黨の運動に離るべからざるものとなつたので、伊藤が居らなんだならば、山縣派及び其の他に推し除けられ、風流を玩んで世を送る事になつたらう。何分にも山縣公の見解が時代の傾向と共に變改するを余儀なくされた。山縣は露帝戴冠式に臨み、天皇の尊榮もかくせねばならぬと云ひ、反對の聲を聞いて頗る不機嫌であつた。其の露帝が禍害を被つたとあつては餘り目先きが利かぬと思はれても仕方がなく、露都で山縣に相鎚打つた者も、大きな口を利く事が出來なくなつた。それだけ前に危險視されたものが案外眼が利いて居るかに思はれる所がある。

政友會は伊藤の豫想と違ひ、幾多黨弊を釀したけれど、政黨なしに何の方法で議會に對するか。政黨を必要とする以上、政友會に重きを置かねばならず、之れに重きを置いては、前總裁で政友會の大御所と云ふべき西園寺の機嫌を伺はずには居れない。政友會は原氏の手で絶對多數を制し、高橋氏の代に二分し、次いで田中男と床次氏と各一方の總裁となつたが、双方共に盛岡まで原の墓詣でに出かける程であり、生き佛の西園寺の別莊に伺候するは云ふまでもない。政友會が一時絶對多數を制し、後に二分しても、合同しさへすれば何時でも絶對多數を恢復し得ると云ふ事が、政界に於ける自然の勢であつて、西園寺の力でも何でも無けれど、既に政友會系の議員が多くては、西園寺詣での多くなる事、順序の當然とする。貴衆兩院議員は一樣に云へぬが、働き手と呼ばれるのは、常にあちらこちら飛び廻つて居る連中で、西園寺と口を利かぬとあつては信用に關し、幅が利かない。西園寺公と話したらば斯く斯くであつたといふ事が、折紙をつけたと同樣になる。

政友系の總裁が二人あつて、互に本家爭ひする限り、西園寺との直系を競はずに居れぬ。特別の効能ないと知つても、他の幹部員が承知せず、一般黨員が承知しない。幹部員で西園寺と入懇の間柄といふので、重寶がられるのもある。ひら黨員で幹部に入らうとするには、西園寺との間柄を見せびらかさうともする。誰にも會はないのに、俺が行つていろいろ話しして來たと云ふ事が、鬼の首を切つたと同樣に思はれる。西園寺公は大隈侯と違ひ、誰にでも會ふといふのでなく、自づと撰り好みするので、お目通りするのが一段の光榮であるかに感じられる。政友系の黨員が生佛に會ふつもりで面會の機會を得やうとするが、公は少くとも表面上政友系の政黨と關係なく、元老として優詔を蒙つてゐるので、政友系の反對に立つ政黨員も捨てて置かない。憲政會の加藤總裁は西園寺公より特別の利益を受けよ

うと思はなくても、既に内閣首相たる以上、元老に相當の敬意を拂はねばならず、重大の問題は一應耳に入れるを要する。官僚は何でも權力關係より遠ざかつてならず、腹に一物あれば勿論、なくても忘れられぬのは、何かの爲めになるので、何かの緣故を作つて出掛ける。政治家は國家の政務に頭を惱ますよりも、有力者と關係をつゞけるのが重になつて居り、之を專務とするのが少くない。朝から晩まで人を訪問し、それで急がしくて堪らぬと稱して居り。事實上急がしいに相違ない。急がしいけれど、誰が何と考へ居るとか、此が不平な口吻であつたとか、消息通となるが爲めに忙殺されて居る。興津へ出掛けるには、一日全潰し、或ひは二三日又は一週間潰さねばならず、それで何かの消息を得るにせよ、中外の形勢を詳かにし、適當の方法を考へるなど、及びもつかず、考へてもとんでもない間違ひする事がある。それでも押すな押すなで西園寺公の假り住ひする所に出掛けずに居れぬ。今の政治家はさう云ふものと云はゞ言へ、藩閥時代の殿樣の御機嫌を伺つた習慣の遺つて居るのを打消す譯に行かぬ。

其處で西園寺公の了簡は何うかと云ふに、眞に國家の事を憂ふる所もあり、相手欲しさに人を待つて居る所もあり、人に會ふのが嫌ひでなく、人が伺候して來れば、機嫌がよい。本來特權階級で育ち、いくら平民風にしても、特權趣味を除く事が出來ず、一段高く止まらずに居れぬ。百姓上りの伊藤公さへ、自ら打融けて話しながら、他人が平等に挨拶するを好まず、恭く下手に出るので機嫌がよかつた。西園寺公は誰人でも話し得ながら、面倒でもあらう、誰とでも話せず、豫め相手を極めずに置けぬ。人によつてそれ〳〵挨拶し、相談にも應じ、相談甲斐がないでなけれど、道樂氣分の漂ふ事多く、政治家を相手にしても役者や藝者を相手にする趣がないではない。時局に必要な人物として語り合ふのでなく、隙潰しの話相手とする所がある。自身の知らぬ事を聞かうとするよりは、自身が知り拔いて暗示又は明示を與へ、聰明を玩ぶやうな所がある。生れつき聰明であつても、頭から押へつけられた所が少く、若し押へられたとすれば、留學より歸朝後幾年かであつて、それが餘程の藥になつた。然し押へつけられたとて知れたもので、不自由なく、野放樂に育つた跡がある。オイ貴樣と云ふ調子で話し掛けられたならば、何ういふ調子にならうか。定まり通りに御機嫌を伺ひ、胡亂な者は警察で取締るといふので、如何に聰明でも、聰明が鍛錬されて居らぬ。一通りの事は何でも明るく、打ては響くと云つても、つまり聰明な殿樣たるを免かれない。才智があり、知識があり、金に事缺かず、位尊くして特別に野心ない所、

英國のローズベリー卿に比ぶべきであつたが、ローズベリーは政界を引退したも同様になつた。偶々貴族院で外交關係の演說すれば、人の傾聽するところとなつても、平素政界と沒交渉で過ぎ來つた。西園寺公は引き込んで居つても、目ぼしい政治家が我も我もと出かけて行く。之れと云ふのも、元老といふことが少からず與つて居らう。元老の肩書を除いて西園寺の境遇が何の狀態になつて居らうか。或ひは門外雀羅を張りはせぬか。それとも別の方面に發展し、看板かけた幇間を相手にするか。ローズベリー卿は政界より退いて著書で立派なのがある。西園寺公は生前に繁昌する割りに、將來も重んぜられるか。それでも官歷が輝やきもせず、二回首相職に就いたとて、云ふべき程の事蹟なく、ヴェルサイユ會議にも員に備はつたのみで、唯一の元老と崇められる所は、特殊の性格を備へて居るによらう。功名に焦らず、淡白水のやうで、功名の絕頂に居るは身を處するの妙とせねばならぬ。求めずして得る所であらうか。前原に退藏千道と書いたのが、頭腦の何處かに潛み、身を指導して居ると云へぬでない。とはいへ、舊新政治家は西園寺侯に伺候すると否とで區別するも面白からう。要するに公に伺候するものは舊政治家であつて、新政治家は新天地に新活躍の道を求めねばならぬ。

元老政治の發生に對する責任の所在と政黨の自覺

安部磯雄

元老政治に對する攻擊は從來盛んに行はれて來たが、恐らく今日では何人と雖も元老政治に贊意を表する者はないのであつて、之れは國民の輿論と云つても差支へない。元老政治の如き變態政治は出來得る限り之れを一日も早く廢止せしむることが必要であるが、併し今日の形勢に於ては、元老政治なるものも次第に終焉に近づいて來たやうに思はれる。今では元老と稱せ

られる者は西園寺公一人であつて、今後新らしい元老が出來るか何うかは疑問である。近頃の新聞紙に西園寺公一人丈けでは足りないから、元老の後繼者として今の政治界に於て最も功勞ある者を二三人推薦することになるかも知れぬといふことが傳へられて居たが、元老の政治上に於ける地位は今日迄それ程に重要視されて來たのであつた。各政黨の主なる人物が西園寺公を頻りに訪問することは或意味に於て甚だ滑稽であるが、其爲めに新聞紙などに於ても西園寺詣でなどゝいふ造語が使はれるやうになつた位である。それにも拘はらず近頃西園寺公が或人に告げた感想に依れば、我國に於ては元老政治は最早や長續きはしないであらうといふことが豫想せられる筋があるのである。西園寺公の考への要點は、出來得るならば我國の政治が恰も機械の運轉するが如く、所謂政權の授受の場合に於てもそれが何等の故障なく自動的に行はれることが望ましいといふことにあつたのであるが、それは西園寺公の本當の心持を云つたのだと推測される。從來元老政治は譯もなく攻撃されて來た觀があつた。換言すれば如何なる理由に依つて元老政治が起り、其起つて來たことに對する責任は誰れに在るかに就いては餘り考へないで、只元老其物を攻撃する傾向があつた。乍併斯かゝる變態政治が起つて來たのは、決して元老丈けがそれに對して負ふべき責任ではないのである。勿論元老も此責任の一斑を分たねばならぬことは爭はれぬが、又同時に我國の政黨もそれに對する責任を免かれることは出來ぬ。若し政黨がしつかりして居て、堂々たる態度を執ることが出來たならば、元老政治などの行はれる餘地がなかつたに相違ない。屢々私共は超然内閣などの出來た時に、元老の勢力を憎むよりも寧ろ政黨の不甲斐なさを嘆じた場合が多いのであつて、今日の我國の政黨を世界中のそれに比較すれば其性質が極めて不純であり、甚だ無力である。併しそれを押詰めて考へれば、今日の政黨の無力は其原因が有權者に在ることを知るのである。大多數の現在の有權者は政治の何たるかをさへ殆んど辨へぬ位無能なのであるから、其有權者を土臺として出來た政黨が無力であることは怪むに足らない。斯くの如く元老政治の責任は、一方に於て元老、一方に於て政黨及び有權者が分擔しなければならないものであるが、更に他の一面に於て元老政治が行はれて居る根本的な原因は、それを一口に云へば制度其物に在るのであつて、それが又政黨を無力ならしめ、元老と云ふ階級を生ずるやうになつたのであるが、歸着する所は制度其物である。今少しくそれを説明するために先づ元老といふものに就いて考へて見れば、元來元老は如何なる役目を務める者であるかといふに、主として政變の行はれる時

に、後繼內閣の總理大臣を選定することが職責の一つであつた。換言すれば元老は選擇者であり、審判者たる地位に在る者である。然るに元老は從來公平なる審判者であり、選擇者であつたかといふに、それは甚だ疑問である。恰も運動競技に於ける審判者が極めて公平なる態度を以て審判を行つたならば、運動競技者はそれに滿足すると同じく、若し元老がいつも公平なる審判者で在り得たならば國民全體も滿足したであらうし、其結果政變が自動的に行はれ、遂には審判者の必要もなくなつたかも知れぬ。運動競技に於ては審判の規則があり、其規則に準據して審判が行はれるのであるが、元老が若し審判者であるならば、必ず一定の原則に依つて審判を下すべき筈である。それが完全に行はれたならば國民の不幸は除かれるのであるが、さういふ原則は我國に於ては明かに存在して居るのである。それは元老は、政變に際して常に後繼者を選定するに議會內で最も多數を占むる政黨の首領を推すといふことであつて、此一つの原則を固く守つて行くことが必要なのである。その結果、暫くそれを繰返して行く中に、機械の運轉が自動的になり、結局元老夫れ自身が必要でなくなるのである。然るに從來の遣り方を見れば元老は決して公平なる審判者ではなく、往々情實に驅られて審判の原則を破つたことがある。此點が大きな問題なのであつて、何故に元老が日本の政治を純理に依つて指導することが出來なかつたかと云ふとは、それは結局日本の政治が純理で押し通すことが出來ない事情が存してゐたからであつて、其處に又元老といふ審判者の存在が必要となる理由があつたのである。元來我國の衆議院はそれ自身決して獨立した存在ではない。衆議院と對立して貴族院が在り、若し貴族院が衆議院の議決に贊成しなかつた場合には、國民の代表者たる衆議院は自己の意志を貫行することが不可能である。これは我國の政治に於て悲むべき事實であるが實際に於て衆議院は常に貴族院に依つて牽制される心配があるのである。從つて歴代の內閣の總理大臣は貴族院の操縱に關して非常な苦心を拂はなければならなかつたのであるが、此大なる障害物があつたゝめに我國の政治機關は自動的に働くことを妨げられて居たのである。政變に際して、今迄多數を擁して居た政黨が、解散をして、總選擧を行つた結果、小數黨となつた場合には、反對に多數を占めた政黨の首領が內閣の後繼者に推薦さるべき筈であるが、若し貴族院に於て其政黨の受けが好くない時には、譬え其政黨が新らしく內閣を組織しても、政策の遂行に當つて貴族院の反對に會ふことが豫想され、從つて政治の安定を缺く惧れがある事情が、從來斯かる場合に元老をして公平なる審判を下さしめなかつたのであつて、それが

原則に反することを知りながら情實に驅られて貴族院と折合の好さゝうな政黨の首領を推薦することになるのである。之等の事情が總て我國の政治が圓滑に行はれない原因となつて居るのであるが、此純理を以て押し進むことの出來ない政治的事情が元老政治を必要とする一つの有力なる理由となつて居るのである。若し元老が非常に公平な考へを以て、如何に貴族院の反對があつても、內閣は必ず衆議院に於ける多數黨に依つて組織せしめる原則を嚴守することが出來たならば、元老の力を以て我國の政治を自動的に働かしめることが出來る。併し元老がそれを爲さぬことになれば、其處に元老の責任があるが、併しそれを爲さぬことに依つて生ずる事情に對する責任は、現在の貴族院對衆議院の制度の力が與つて多いといふことを考へなければならない。故に之れを換言すれば、元老政治の責任の一部は、其最も根本的なものとして制度夫れ自身に歸さなければならぬことになるのである。

更に顧つて現在の政黨に就いて考へるならば、凡そこれほど腰の弱い、無力なものはないと云つても差支ないのである。時には國民を背景にして居るやうなことを云ひ、護憲運動の如き賑かな活動振を示すこともあるが、元來日本の政黨が弱腰なことは爭はれない。其原因は全く今日の政黨が金力に結びついて居ることに依るのである。政黨は總選擧毎に何百萬といふ運動費を要するが、又平時に於ても多くの金を必要とするのであつて、其資金は總て之れを有力なる資本家から仰がねばならぬ。斯くの如き事情が存在するために、政黨が餘り長く在野黨である場合には、資金を出して吳れた資本家に返禮をすることが出來ないために、なるべく早く自分の手で內閣を組織し、資本家に相當の返禮が出來れば今後も末長く金を引き出すことが出來るといふ理由から、如何なる政黨も政權にありつきたい欲で一杯である。要するに政黨の腰弱の原因は金力を資本家から仰ぐ必要があるために、早く政權を獲得したい焦燥が、返つて政黨をして思ひ切つた態度をとらしめないのである。解散は政黨の最も恐るゝ處である。若し政黨が解散を恐れないならば、元老や貴族院を向ふに廻して戰ふことは少しも困難ではない。政治上の事に元老が容喙をしたり、貴族院が衆議院の議決に反對をするやうなことがあれば、內閣は議會を解散して國民の輿論に問ふことが出來るのである、斯くて二度でも三度でも同じ政黨が總選擧の結果多數を占めることになれば、元老や貴族院と雖も必ず閉息するに相違ない。それが衆議院が持つ唯一の武器であつて、幾度解散をしても、最大多數を占むる政黨が固い勢力を有することが、それに依つて元老や貴族院を押へて行くので

ある。然るに現在の總選擧に於いては政黨は多額の資金を必要とするので、譬へば一國全體を通じて總選擧に費される金額は二千萬圓にも上るが、各政黨は平常に於ても困つて居るので、度々總選擧をやると忽ち資金に窮するに至る事情が又現在の政黨の弱味となつて居るのである。故に政黨が口に元老政治を非立憲なりと攻撃するも、實は政黨それ自身の無力なることが、却つて元老政治の行はれ、時に貴族院が横暴を極める所以なのである。從つて將來政黨が全然金力と絶縁する時期――それは一面に於て政黨が僅少なる費用を以て總選擧に臨むことの出來る時期――が到來しない限りは容易に元老政治は滅亡するに至らない。併し前にも述べた如く之れは必しも政黨丈けの責任ではなく。溯ればそれは有權者の負はねばならぬ責任でもある。各有權者にして眞に政治に理解を有して居るならば、總選擧に於て候補者は法外な金を使ふ必要はないに相違ない。昨年行はれた英國の總選擧に於いては、一人の候補者の要せし費用は僅かに二千圓位に過ぎぬ。ロイド・ジョージの如きは六百八十圓で當選した。選擧が斯くの如く行はれるためにはどうしても有權者の自覺に俟たなければならぬ。此意味に於て今日の我國の有權者の無自覺は間接に政治腐敗の原因となり、延いては其事が元老政治出現の結果となつたことに依つて、それに對する重大なる責任の一部分は有權者が負ふべき筈のものである。

そこで西園寺公の意見として傳へられる、政權の授受が自動的に行はれるといふことに就いては、英國の政治に於て實現されて居る政權の授受の有樣を見て、多分西園寺公が我國に於てもあゝいふ風になることを理想として考へたものであらうと推測される。併し英國は長い立憲政治の歴史を有し、多少の例外はあつても大體に於て二大政黨の對立に依つて、一方が野に下れば一方が政權を執るといふ風に、交々政權の授受が行はれること甚だ簡單明瞭であるが、それを直ちに移して我國に實行され得るか否かは疑問であつて、少くとも今後五年や十年の歳月を俟つたのではそれは眞似するとも出來ないと考へる者があるかも知れぬ。然しながら政權の授受が自動的に行はれて居るのは必しも英國丈けの例ではない。譬えば佛蘭西にしろ、獨逸にしろ、白耳義にしろ、政黨は小黨分裂の有樣であつて、只斯かる國に於ては政權受授の際には英國に於けるが如くそれが簡單に行はれない相違があるが、それにしても元老政治の如き變態政治は起り得ないのである。之れを機械に譬えれば其廻轉の速度は鈍くとも矢張りそれが自動的に動いて居ることに變りはなく、之等の國に於ける政權授受の事情は英國の如く圓滑には行かないがそれは同じく自動的なのである。之れが白耳義であるならば、

內閣が瓦解した場合には皇帝は後繼者を物色して內閣を組織することを命じ、獨逸や佛蘭西ならば大統領がそれを命ずるのであるが、斯かる場合にも其目標は常に議會の中心たるべき多數黨の首領に置かれるのである。斯くして命ぜられたる首領は直ちに內閣の組織に着手するが、それが不成功に終れば、又次の政黨に命令は下るのであるが、而も如何なる場合にも命令は政黨以外のものに決して下らないのである。日本は今直ちに英國のやうになることを望まないが、少くとも佛蘭西や獨逸、白耳義の如く行くことが出來るならば、政權は議會の政黨以外に渡らないといふ原則に依つて、政權の授受は必ず自働的に行はれるに相違ない。但し政權授受の形式に就いては我國に於ては特殊の事情もあり、特に考慮を費さねばならぬ點もあるであらう。譬へば天皇の命を受けて內閣の組織に着手し、其結果それが失敗に終つても、之れを辭退することが不都合であるならば、最初の內閣組織の命は直接天皇から出さず、先づ宮內大臣からでも下相談をして其結果內閣の組織の出來た處で初めて天皇が命を下すといふやうな別の形式もあり得るであらう。斯かる形式の如何は別問題とするも、政權の授受が、假令それが多少の圓滑を缺くとしても、自働的に行はれるといふ其內容は今は直ちに我國に於てもそれを移して實行することが決して不可能ではないのである。只一つの問題は、前にも云つた如く、元老政治の起れる所以は、單に元老や政黨丈けの罪ではなく、寧ろ制度其物が根本的な原因であるといふことであるが、若し西園寺公が存命中に我國に於ける政權の移動が自働的に行はれることを望むならば、それには制度の改革に就いて出來得る限り努力しなければならぬ。制度とは玆に貴族院對衆議院の關係を指すものであるが、之れは必しも憲法を何うするといふのでなく、云はゞ貴族院の權限に對して或意味に於て習慣法ともいふべきものを作ることである。英國の立憲政治は非常に圓滑に行つて居るが、假りに英國の上院が我國のそれの如くであつたならば、英國の政治が立憲的に行つて居たかどうかは疑問であつて、恐らくは英國に於てもさうは行かなかつたに相違ない。其證據には英國に於ては、上院と下院が政治上の問題に就いて衝突するとは立憲政治の上に於て面白くないから、下院は終に憲法を改めて上院は下院の決議に對して否決する權力を持たないやうにしたから、英國の政治は全く下院の手に依つて行はれて居るのである。私は貴族院を廢止するといふ憲法上の改正を唱ふるものではないが、今の貴族院が持つて居る所謂貴族院內閣を出現せしむる如き種類の勢力を、貴族院の反省に依つてか、或は衆議院の力に依つて阻止するやうになることを望むのであ

つて、又一面に於て其結果内閣の組織は必ず衆議院に於ける多數を占むる政黨が之れを組織するといふ一つの原則が確立すれば、我國に於ける政權の移動は自働的に行はれるに至るに相違ない。故に西園寺公が最後の思出として、我國に於ける政權の授受の形式が自働的に行はれるといふことに對して努力するならば、先づ貴族院と衆議院の關係に就いて考慮することが最も大切である。同時に又政黨も大に反省して、金力と絶緣し、僅少なる費用を以て總選擧に臨む意氣と、議會の解散を恐れぬ勇氣を持つに至れば、政黨は力を以て貴族院を反省せしむるに足るのであつて、之れに成功すれば元老政治は自ら消滅し、一國の重要なる地位にある政治家が切々と西園寺公を訪問することの馬鹿らしい光景を見ないで濟むやうになるであらう。

偶像を迷信する者の醜態

高島米峰

國家に於ける、元老の發生及び存在は、畏くも、陛下が、功臣を待遇し給はむとするの、聖旨に基くものなる以上、吾等が、論議批判の外にあるべし。されど、政界に於ける元老の發生と存在とは、その、何の理由に基くものなるやを詳にせず。しかも、その威力と功果との强大なるは、眞に、奇とし怪とせざるべからず。

　世界に國は多く、政體亦、必ずしも同じからず。されど、國の元首と政府との中間に介在して、實際政治の指導者なるが如く、顧問なるが如く、相談役なるが如く、監督役なるが如き、日本の元老なるもの丶如きを有する國家は、蓋し、これあらざるべし。獨り、日本に在りては、この種元老なるものありて、平時に在りては政府をして、その意に滿つるの施設を爲さしめむとし、政變に際しては、その意を迎ふるものをして、政府を組織せしめむとす。數人の元老なりし時は、元老個々、互に相牽制して、必ずしも、一人の欲するところ、能く他を壓倒すること能はざりしも、伊藤、井上先づ逝き、山縣松方尋いで歿

し、今や、僅に、一西園寺公を存するのみとなつては、この翁の一顰一笑は、直に、日本の實際政治に、何等かの影響を與へずむば已まざらむとす。こゝに於てか、人をして、日本の政治は、立憲政治と言はむより、國民政治と言はむより、政黨政治と言はむより、官僚政治と言はむより、寧ろ元老政治と言ふの、最も當れるを思はしむ。

元老と稱するものが、政府の上に位して、政府を鞭撻し、策勵するといふ程に、積極的に活動し來らずとするも、政府が、絶えず、その御前に伺候し、その鼻息を窺ふことに依つて、辛くも、その命脈を保ち、施政の方針を樹立して、之れを實現することを得るものなりとせば、これを『院政』に比するは、甚だしく倫を失するとするも、少くとも、これを『大御所政治』に比するは、必ずしも、過當ならざるが如し。而して、その時代錯誤たるや、言を俟たざるところなりとす。

人は言ふ、英國の政治は、實に公明正大なりと。然り、公明正大なるが故に、英國の政治は、英國々民、擧つてその歸趨を知ること容易なり。否、啻に、英國々民が、その國の政治の歸趨を、容易に知悉し得るのみならず、遠く隔りたる日本の吾等と雖も、英國政界の推移する事情は、寧ろ、日本の政界の推移する事情を知るよりも、容易に、且つ、明白に知ることを得るなり。これ果して、何に依りて然るか。勞働黨が、内閣を組織したる英國政界の事情、而して、今や、保守黨が取つてこれに代りし英國政界の事情、それ等は、英國々民の何人と雖も、これを知り得べき、公明正大の過程にして、自國の政府が、思ひがけなく、山本權兵衛伯に依りて組織せられ、清浦奎吾子爵に依りて組織せられ、加藤高明子爵に依りて組織せられたる、事情を知ることの困難なる吾等日本人さへ、遙に、これを知ることを得る所以のもの、一に、英國の政治が、眞に立憲政治たり、國民政治たり、政黨政治たるに存し、元首と政府との中間に介在して、政府を壓迫し驅使する底の、大御所なく、元老なく、政府は、自己の所信に向つて赤裸々、露堂々、毫末の狐疑するところなく、情理、進むべくば進み、退くべくば退き、出所進退、擧げてこれを、國民の批判に委するがためならずむばあらず。これもとより、英國々民が、過去數百年間の、政治的訓練の賜なりと雖も、顧みて、我が元老政治に想到する時、その前途の、尚、甚だ遼遠なるを、悲しまざる能はざるなり。

元老の存在は、如何ともすること能はずとするも、これをして、實際政治に容喙せしむると否とは、政府若くは政治家の、見識と勇氣とに依つて、これを處置し得べし。然るに底事ぞ、歷代の政府及び政黨中、全然、元老の力を借ることなくして、事

を成したるものこれなきのみならず、或者は、公然、元老の政治的存在に反對し、これに伺候するものを痛罵しつゝしかも、いよ〱政變來らむとするに際するや、自ら、暮夜窃にその門を叩きて憐を乞ふといふが如き無恥醜陋の態は、從來屢々これを見聞するところなりき。殊に、近時に至つては、政府も、野黨も、敵も味方も公々然として、一意専心、元老一佛の悲願に縋つて、甲は飽くまで政權に喫りつかむとし、乙は是が非でも政權に有りつかむとし、丙は丁との合同を要望する等、一にも元老、二にも元老、元老を離れて政治なきが如き、日本政界の現狀は、轉々元老の威力の强大なるに驚かしめられざるを得ざるなり。

元老の實力、果して、しかく强大なるものなりや否やは、これを問はず。鰯の頭も信心からと言へば、信じて參るものゝ、主觀的滿足は、有り得べしとせむ。されど、元老の慈悲、如何に廣大無邊なりとするも、全く相背反する二個の願望を、同時に滿足せしむることは、到底不可能なるべし。要は、念力の强弱に在り。こゝに於てか、强行參拜を餘儀なくし、日參も辭せず、お百度も厭はず、遂に、理性を無視して、感情の盲動を恣にす。かくて、元老は偶像となり、黨人はこれを迷信す。憐むべく、笑ふべし。

迷信の害や甚だ大、その重きは、遂に人を殺す。丙午生れを氣にして、自殺せる婦人の、今年に入りて、已に四五にして足らざるは、何等の悲慘事ぞ。元老萬能の迷信より覺醒し來つて、眞に、立憲的に、政黨政治を運用するにあらずむば、黨人は、遂に、政治的に自殺せざるべからざるに至らむ。今や、普選の實行期に入らむとす。政治は、いよ〱ます〱公明正大ならざるべからず。公明正大にして、多數國民をして、容易にその實相を領會せしめむと力めざるべからず。謂はゆる元老訪問の如き、立憲政治の本義より言ふも、政黨政治の眞諦より言ふも、全く、有害無益の事に屬し、これに意義を見出さむとするが如きは、單に、徒勞なるのみならず、寧ろ、その人の恥辱たるべし。（大正一四、七、一五）

貴郎は

緊張を御感じになりませんか
若しお疲れでしたら
最非サナトーゲンを召上りなさい
すぐと身心がシャンとなさいます



眞正の强壯食料品

サナトーゲン

貴郎は青年の元氣と精力とを消磨することを防ぐことは出來ぬと御考へになりますか、決して否らず、いくらでも之を豫防することが出來ます。青年時の奮闘的生活に於て最も大切なるものは神經と頭腦とです。若しも貴郎がサナトーゲンを御常用になるならば、事業の成功を期すべき力と元氣とは絶えず貴郎の身邊に湧き出るでせう

サナトーゲンは心身の氣力を確實に增進する唯一の强壯食料品です世界中幾百萬の人々が此を常用してゐるといふの事實、及びその人人の中には最も著名なる人士を含んでをるといふことは、サナトーゲンの强壯食料品としての效果が眞に卓越してをるといふことを雄辯に物語る一つの確かなる事實であります。

又、二萬四千人以上の醫家がサナトーゲンの效力を證明してをるといふの事實を御考へ下さい。每日規則正しくサナトーゲンを召上りになる御方は　く可きほど精神の力と肉體の健康とを增進します。つまりサナトーゲンを召上りになれば直ぐと、無精な、疲れた心持を回復して活動的能力に無限の價値を賦與する元氣と忍耐力との源泉を創建いたします、サア、今サナトーゲンを召上つて、活動場裡に御出懸けなさい。

サナトーゲンは眞に强壯食料品として稀有の逸品です。

サナトーゲンが貴郎の心身を健やかにすることは云ふまでもありませんが、又貴郎の御兒樣や御家族の方々の御爲めにもなります。

サナトーゲンは健康に且圓滿なる家庭生活を建設するものであります。

◉全國到る處の藥店に販賣してゐます

興味津々
る小册
子御要求
次第無代
謹呈

サナトーゲン日本一手輸入元
神戸市海岸通一丁目英三番
ゼー、エル、タムソン株式會社
（神戸三宮郵便私書函二十二號）



續曲亭馬琴についての夜話

眞山青果

夜話　その第一

馬琴はその家居の生活に於ても、惠まれてはゐなかつた。彼の如く、終生齷齪として一家の經營にこゝろを苦しめながら、彼は終生一日も、その家庭にやすらひの臥所を見出すことは出來なかつた。日記にも絶えず家族の不和合を慨いてゐるやうに、彼の一生は、始終引續く家内の紛擾に苦しんでゐた。殊に晩年信濃坂に移轉の後は一層その衝突がはげしく、落着いて著作の机にも向はれないやうな日が多かつた。天保九年四月の日記に「夜に入りお百又予に對して怨言をのべ、捨身すべしなど云ふ。予徐にこれに諭して、七年以來吾家治らざるは、吾不德の致す處、人を怨むるによしなし。夫婦七十餘歲に至れば、餘命幾かあるべき。無益の怒りに心を勞する事なかれと、萬事我不德にして致す所を以て教諭す。しかれども全く甘服なすにあらず、只聊か怨怒をくつろぎて止む。女子小人の養ひがたきは聖人すらしかり。況んや凡夫のわれら實に愧るに堪たり。」と嘆息してゐるばかりではなく、その前年の四月、伊勢の篠齋に與ふる書簡には、身體の衰へと生活の勞苦をしみじみと訴へたる後に、引續いて「且つ身病貧病はいかやうにも凌キ候へども、家病の不熟は理をもつて制しがたく、第一著作の障りに成候。不聾不痴無以爲家翁と唐の代宗のいはれしごとく、年中擬聾に成

候而罷在候へども。婦人家ばかりぜんかたなきものはなし。是等いふにいはれぬ難儀の物に御座候。御賢察可被下候」と悲痛なる言葉を洩してゐるのを見ても、家居の荒涼たるさまは窺ひ知られる。

前掲の日記に七年以來吾家治らずとあるは、彼の妻お百が天保二年の大病以來、ほとんど痴呆性の老衰病にかゝつてゐて、持病の癇症が高じると共に、喜怒常なく怨嗟嫉妬の情もはげしく、殊に一子宗伯の死後はその狂態が甚しかつた。俗説によればお百の老耄とともに、今まで日陰者であつた娘お路の勢力が頓に家庭内に加はつて、時には馬琴すらお路の手前を斟酌する風があつたと云ふから、自然そんな點にも女同志の小競り合ひもあつたらうが、然しその以前とても瀧澤家は決して譪々和樂の家庭とは思はれない『人々みな偏執的に小感情を固持して、ぶすぶす生木の燻ぶる如き不快なる空氣が、絶えず家庭に流れてゐた。』と云ふ或人の說は蓋し事實であらう。文政元年、彼が悴宗伯と妻のお百を神田に別居させて、自分は飯田町の故宅に長女おさきとともに殘り、下女もない不自由な生活を營んでゐる時の書面に「如斯係にさみしく不自由にまかりなり候へ共、又心やすき事もありて、妻子を遠ざけ候へば小言いふこともなく、妻子も隔り居候へば、たまたま本宅（飯田町の家）へ參るをたのしみに致し、拙者がたまたま悴方へ罷越候へば、家奔走、平生同居の日とおなじからず、夫のありがたき事も親の難有ことも、只今やうやく目がさめ候樣子にて、彼等がためにはよき修業に可有之候。」と斯ふ書いて、ほつとしてゐる姿があるのは、さながら風浪の間に憩ひ息づくさまが見えて、いかにも痛々しく思はれる。お百の死後（前の書面より二十五年の後）その追悼の哀歌に、「きさらぎ七日、老たる妻を失ないてこもりゐの徒然に、よみてみづから慰めける。」と前書して、「まれに見つきれにとはれてありし日を、今こそおしめつひの別れ路」とあるのは、やはりこの六年間の別居時代を追想してゐる。馬琴が心からしみじみと夫婦らしい愛情をその妻にそゝぎ得たのは彼の一生を通じてこの別居時代の外にはなかつた。

元來瀧澤家の血統には、遺傳性とも思はれる癇症があつて、宗伯にもその母お百にも、かなり非常態なる發揚發作が平時にもあつた。馬琴自記の宗伯行狀にも、「されば癇症短氣の折は、さしもあらぬに媳婦を叱し懲し、母にすら不遜の言まで聞ゆ。其怒氣の治まるを待ちて、父は彼に教訓しぬれば、又敢て悖ることなく、先非を悔ひて落涙す。この故に父は常に老婆と媳婦とを諫め諭して、琴嶺（宗伯の雅號）の短氣なるは彼の本性にあらず、其病の所爲なれば、堪忍を旨として逆ふことなかれと

いひけり。母(お百)素より癇症なれば、傍痛き事もありけり。」とあるやうに母子ともに猜疑心つよく、ものに驚きものを恐れて、始終極端に神經を苛立ててゐるのに、家長たる馬琴その人の性格がまた狹隘にして小事にこせつき口喧ましく、寛優の德を缺いてゐた。後年には彼も自己の性格に苦しんで可也注意してゐたやうだが、「堪忍を守る事甚なしがたき事にて、和漢賢良の人もなほ是を病めり。況野生など生得癇症にて、なか〳〵一日も忍の一字を守り候事出來かね申候。」と云つてゐるくらゐで、家庭の和樂などは素より求むるに難き狀態にあつたと思ふ。

慥か、燒けた明治座だと思ふ。わたしは芝居見物の篁村氏をその棧敷に訪問して、幕間々々に同氏から馬琴の話を聞いたことがあつた。その話のうちに、『馬琴夫婦の不和の源因の一つは、お百が再婚者のためでせう。正直者の馬琴は、紙に書いた證文のやうに終生それを愧ぢてゐた。』と云ふ意味のことがあつた。その時は別に氣にもとめなかつたが、今度また馬琴を調べて見て、わたしは篁村氏から可也大事な鍵を授けられてゐたやうに思ふ。馬琴の婦人觀はしばらく別問題として、彼はその著作のあらゆる機會に於て、女子の再婚を厭惡してゐる。或場合には、むしろ罪惡のやうにさへ云つてゐる。言行二ならぬを矜恃とする馬琴にあつては、それは單に倫理說としてのみではなく、實際生活に於ても枉ぐべからざる信條であつたらしい。彼の兄嫁お添(實兄羅文の妻)は二十四歲にして寡婦となり、遺産とてもなき身の方便なさから、一旦實家に復つて後ち長鹽某に再醮した。しかし添女は嚴格なる馬琴のおもはくを恥ぢて、わざ〳〵訪問せる宗伯にも面會せず、終生瀧澤家の閾を踰へなかつたと云ふ。また馬琴は實妹お秀が夫に別れて貧困のために鈴木某に再婚した時、「あとには妹二人殘り候へども、一人は所存わるく愚が教訓を用ゐず候に付、已を得ずよせつけ不申候。」とて、例へ一時にせよ妹を義絶してゐる。又、同じやうな例をあぐれば、文政初年に彼は方々に口かけて宗伯の嫁を探してゐた時、越後の鈴木牧之からひとりの緣女を周旋して來た。それはその前年に死亡した牧之の長男の妻で、馬琴も蔭ながら噂に聞いて、その貞淑溫良を稱揚してゐた婦人であつた。馬琴もそれには可也當惑したらしい。宗伯の結婚は二三年後にても遲からぬことなど云つて、さも苦しさうに再婚女を拒絕してゐる。尤も彼の長女さきは、夫淸右衞門の死後二度の養子を迎へてゐるが、これは馬琴にしても蓋し已むを得ない時であつた。飯田町の會田家は代々家主役をつとめ、その收入によつて生計を立ててゐるので、長女さきを寡居せしむれば自然生活の上にも脅威をうけなければならない場合であつた。

わたしはそれ等の事實と思ひ合せて、前にあげた篁村氏の、『證文でも書いたやうに終生再婚を憚ちてゐた。』と云ふ言葉をいかにも面白く感じられる。狹隘古陋と云はれる彼の道徳感や倫理説も、少し仔細に觀察すると、いつも彼の衷心に嚴乎たる確信と情操とをもつて主張せられるのではない、小心にして臆病なる彼は、古來の聖人哲士が教へ置いた倫理説に畏ひを抱いたり、その規矩をこへたりするやうな危きを踏むに耐へなかつた。教ふる言葉通りを正直に、頑固に守つて、それによつて騒ぎやすい自分のこゝろの動搖を防ぐとゝもに、極端に恐れてゐる世間の批判から遁れやうとして、絶えず苦しみ悶えてゐるやうに見える。殊に可笑しく思はれるのは、その學術操行ともに醜しとして當時學者に絶望してゐる彼が、儒者學者彼の謂ゆる實學者側の批評を非常に恐れて、悄々として心を縮めてゐる態度である。これ一つは當時社會的に最も輕視された戲作者生活に自ら卑屈したゝめもあらうが、大體に於て、彼は餘りに弱く小さなる心を抱いて、謂ゆる孔子學に壓倒されてゐるためであらう。世間の論者は彼が會田家に入夫しながらその姓を名乘らす、始終瀧澤家の家名存立にのみ焦慮してゐるのを見て、これも彼の自我執着のやうに貶してゐるけれど、わたしは然うとのみは思はない。彼が不安動搖の長い間の放浪生活に疲れはてゝ後先の思慮もなく一時の苦痛のがれに再婚の婦家へ入夫したといふ一事が、正直にして轉換のない彼のこゝろを、いかに長く苦しめ悔ましめたか知れないと思ふ。この悔恨は彼の著作のなかにも、時々それとなく顯はれてゐると思ふ。

然し、然うは云つても、馬琴は決してその老妻に對して無情なる人ではなかつた。否、寧ろ馬琴はあまりに妻を憚かり過ぎ勞はり過ぎて、却つて眞情に遠ざかつてゐたやうに思ふ。『女子と小人とは養ひ難しと爲す。これを近くれば不遜、これを遠くれば則ち怨む。』の金言を、言葉通り信じきつてゐた馬琴としては、不思議に思はれるほどよくお百を慰めてゐる。ことに老來お百の大病以後は、時々神詣や芝居に妻を連れ出したり、或は雨の日に自作の小説を讀み聞かせて慰めたり、なるべくその意に逆はぬやうにしてゐる。お百に對する不平は多く日記のみに洩らして、面と向つて餘り怒りを見せなかつたらしい。宗伯は馬琴のその態度に同情して、始終母親と衝突してゐたやうに見える。少し長いけれど、下に引いた文政六年八月一日の著篇は、彼の家庭に於ける彼の態度や、宗伯お百の病状なども詳細を極めてゐるので、そのまゝに掲げて置きたい。（彼、五十七歳）

一愚息宗伯義、生得虛弱に御座候上、老實の性にて、富貴のわかきものに不似候而、六ヶ年已前別宅致させ候後は、書業と日々のくらし方にのみ勞し候故歟、年々病身に罷成り、三四年來は夜學等いたし候へば、眼中に赤き朱のごときもの生じ、夜分は寢らうなりをいたし、一夕に一兩度大聲を發し、その上眼力とかくにうすくなり。十六七才より眼鏡を不用候ては、書を見る事不成。一昨年より手ふるへ候而、物を書候事甚遲筆になり候。何分捨置がたき樣子に御座候間、服藥をすゝめ候へども、灸治藥湯ともに甚嫌ひにて、一日々々と過行候處、當二月初午比より俄に寒熱つよく、一朝頭をふり出し候て跡へ引倒され候程の事、其上腰に磐石を着ケ候やうにて腰立不申、一方ならぬ病症に御座候故、打驚き早速懇意の醫を招き見せ候處、脚氣のよしにて療治いたし候へ共、させる効もなく、其後諸醫に見せ候へば、或は痛痺と申、或は痿躄と申候、悴もはじめは脚氣と存、中比は痿躄に可有之與存、自分の量簡をも加へ候て本方調煎日々六帖ヅツ服藥無由斷用ひ候へども、させる功無之候。とかくする程に、三月五日は奉公人出かはり時にて、一僕にいとまヲ遣候得ども、早速代りの僕も無之、老妻一人にて看病行とゞき不申候故、三月四日に悴をば拙宅江引取り明神下別宅は老妻一人守居候故夜分は拙者罷越候而止宿いたし、早朝に飯田町へかへり候て悴の看病致候處、三月下旬より老妻脚氣腫滿にて、總身はれ候て打臥申候、依之拙者事は明神下へ罷越、老妻の看病いたし、是より明神下へ止宿して、五六十日本宅江はかへり不申、悴の看病は娘へまかせ置候得ども、何分老 妻大病故悴義も安心不仕、日々杖に携り明神下へ罷越候て、母の診脈仕候へば、病人兩人の藥を煎じのませ候事も拙者一人故世話ふえ候へども、悴に來るなと申がたく、いとゞ心勞の上に心勞のみに御座候。この騷キにて、三月もむなしく過き候へども、主人（宗伯をいふ）並に老母大病中、氣もしれぬ僕は抱候ても却テ心配に御座候故、素生のしれたる譜代奉公人をと吟味いたし候内、時節おくれ候故、いよ／＼可然奉公人はこれなく、四月に至りやとひ婆にてもおけとすゝめ候物も有之候得ども、其節中々やとひ位にては間に合不申、われ一人くるしめば、兩三人の奉公人にます事あらんと存、飯ヲ炊キ水ヲ汲ミ、その間に老妻の藥を煎じ、ねせおこしヲいたし取次をもいたし、門の掃除、日々のかひ物にも夜中に出歩行、夜伽もいたし候故、五六十日は夜中一時とはねぶり不申候。初三十日斗の内は身骨いたみ甚心勞に覺候得、

も、終には下司業に馴れ候て、自分は却テすこやかに成り候様に覺申候、かやうの難義を經候て、やうやう五月下旬に至り、老妻は本復いたし、五月晦日に床揚ケ候後、追々全快いたし、只今は全く平生體になり候へ共、宗伯事はとかく今以同様にて、一日よければ二日わろく、凡千七八百帖薬を用ひ、手をかえ品をかへて種々療治いたし候得ども、經驗うすく困り果申候。病症實にはまつたく癇勞にて、可有之と被存候。老妻全快後、六月下旬より宗伯義も明神下宅へよびかへし候處、今に一僕一婢も無之仕合にて、病あがりの老妻者、はか〳〵しく役にも立不申候。悴明神下へ歸り候後は、夜分は拙者事飯田町本宅江罷歸り、毎日早朝より明神下へ罷越候而、萬事の世話いたし候事、今日迄も間斷無之候、（中略）かくの如く、物入多く候へども、當年は著述一筆もつゞり候いとま無之、全く俗にいふ居ぐひに御座候。當盆前など、身分不相應之借財有之、これもあらはに申出し候へば、悴病氣の障りに成り候故、愚拙一人胸ヲいため罷在候得ども、他力本願にて盆前の諸拂も無滯濟せ申候。さのみ腰を折めて、人々さまに無心も不申候へども、諸板元申あはせ追々たすけくれられ候。誠に誠に無德にして天祐ヲ待ち候事と、有がたく甘佩不少奉存候。壯年の比は長女が四ケ年の大病、悴が雜症老妻が二ケ年の大病伯兄沒年の心勞など、是迄種々の災厄にあひ候へども、此度ほど手をおろし身神共に勞し候大厄は覺不申、愚老生涯の大厄只この一條にありと存候へ共、凡人の世にある、常によき事のみあるべきやゝなし　妻となり子となり、親となり夫となるうへは、いかで慈に止らざらんや、死生は命にありといふとも、今日息のかよはん程は、思ひのまゝに看病して、後悔なからんこそ、人たるものゝ甲斐はあれと存候故、さのみ驚キなげく事はなく、激みつとめ候故歟、愚拙は平生の老病も起り不申候て、俗にいふ丈夫達者に御座候人は只心のもちやうにて、病むべき時にも不病、又出來がたきわざも出來候ものに御座候只うち歎くべきは、わが曾祖も女子のみ兩三人有之候處、いづれも早世にて、祖父ヲ養子にせられ候。祖父も男子四人女子二人御座候處、子孫あるものは、わが父のみに御座候。父も男子五人女子貳人をまうけられ候處、子孫あるものは解一人に御座候。解も女子三人、男子は只宗伯のみに候間、わづかに一すぢのいとをもて繋ぎ留たるごとく、宗伯が短命なるときは先祖の祀りも絕え、これのみ第一の心勞にて、日夜父母先靈に祈り候事に御座候。さのみ愛に溺れ候て、狼狽いたし候義には無之

候。この一條は貴君ならで肝膽を告るかたもなく候まゝ、無益の長文に及び申候。又愚拙が命だに恙なくば、諸板元並に惡友のたすけくれられ候借財も、總につぐのふ時あるべく候まゝ、これもさのみ苦勞になり不申候。只々子孫繁昌する歟、先祖の祀の絶る歟の堺に候へば、中々著述など千金ヲつまれ候ても、只今は一ふでも綴りがたく候。その中には折々ひどく催促いたし候板元も有之、人はさまざまなるものに御座候。

瀧澤家には始終病人が絶えない。毎年の日記にも、必ず誰かしら大病にかゝつてゐる、そのため一層家庭の平和を缺いていたのかも知れない。宗伯は幼年から羸弱で腺病質の體質と思はれたが、この發病以來肺疾の症狀が顯著になり、それがひどく馬琴を失望させてゐる。尤も當年の病氣は馬琴の看護と丹精とで、「二三年の間に七八分通りまで平癒し」兎も角も文政十年の春頃には、嫁お路を娶るまでに回復してゐた。(外出嫌ひな馬琴が先に立つて宗伯を釣魚に連れ出したり、或は近郊に散歩したり、鼈や鰻魚を方々食ひ歩き、著作も廢して宗伯の養生に熱心してゐたその二三年間である。)そして翌年の二月には初孫太郎さへ生れたので、馬琴は甚だよろこんでゐると、宗伯はその夏五月からまた激烈なる病にかゝつて、勞咳の持病も又甚しく再發した。その後つぎ女、さち女と孫は次々に生れても、宗伯の病患は次第に亢進するばかりで、廢人同樣の病床に日を送つてゐたが、天保六年五月八日、享年三十八歳をもつて遂に死亡した。馬琴は六十九歳であつた。その當時の悲痛なる感情と光景とは、「後の爲の記」「改過筆記」その他の書簡集に委しく書かれゐるから、こゝには總て省略に随つて置く。

馬琴の日記を讀む人は、誰も先づ、彼が悴宗伯と婿清右衞門との間に、あまりに格段なる階級を置くので、不快を感ぜずにゐられまい。宗伯には飽まで權威をつけながら婿は殆んど下男扱ひにして、日記にも「遣ㇾ之」とか「申付畢る」とか書いてゐる。宗伯が買物に出る時には、婿の清右衞門が風呂敷を負ふて後に隨ふやうな記事を讀むと餘りの別隔てがはげしいので、人事ながら憤りさへ覺えさせられる。しかしこの事實をもつて直ちに、馬琴はわが兒の愛に惑溺して、他者を凌ぐものとは云はれない。封建制度の時代常識に骨髓まで浸潤されてゐる彼は、斯くあるが正しく、斯くあるべきが當と確信してゐたのである。或人が屋代輪池の書蹟を批評せるを見て、「就中輪池翁の書をそしりて、キセルでもとほしたがよしといひしは、忌憚らさ

るの苦しき也。特に彼翁の書は、やんごとなき御かたにもとり用ひさせ給ふよし承り候事もあるものに候。」と憤激して、正直に然う考へてゐる馬琴にしては、大名お抱の宗伯と市井の一町人たる婿清右衛門の間に、截然たる區別があるのが正當と固く信じてゐた。彼が口癖に主張する、「小事にも必ず名分を正うす。」と云ふ學說は、彼のために動かすべからざる信條であつた。その證據に更に云へば、彼は家庭內に於ても宗伯及び太郎の二人を偏重して、同じ子孫でも娘どもや外孫などには可怪しいほど冷淡であつた。たまに泊りに來る四谷の孫どもや滋美の孫をひどく煩さがつて、日記にまで小言を洩してゐながら、同じ孫の太郎だけには著作の邪魔をされても怒らず、自分みづから子守をしたり、或は神詣でや芝居見物にも連れ出して、その歸路には踊み痛む腰骨に、眠れる孫をやうやうに負つて歸つたりするのも、必ずしも彼の初孫に對する盲愛のみではなかつた。やはり時代常識の固陋なる封建思想から男系嫡嗣を重んぜずにゐられなかつた。宗伯太郎は瀧澤家の家名をつぐ嫡流との意が強く先に立ち、「私情によつて正名を棄さず。」の持說を遵奉するために、彼には寧ろ苦しき克己心があつたやうに思はれる。三人の娘のうちでは長女おさきに最も厚く眷顧してゐるが、一つはおさきが病身にして心優しく。馬琴夫婦にもよく仕

へ太郎などの世話をよく見てくれたゝめもあらうが、彼女田家の家名を相續して、祖先の位牌を守ると云ふ點が、馬琴にして一層區別を置かせたのであらう。わたしはかゝる些細なる家庭生活に於てすら、窮屈なる名教心に囚はれて、絕えず苦しんでゐる彼の臆病なる心を悲しむ。

八歲の倅に繪をかゝせて、それを最も自信ある著作の卷頭に掲げたり、世間高名の學者を選んでその講筵に出席させたり、馬琴は宗伯を世に出すために可也あせつてゐる。家庭教育などにも餘程注意して、兒童教育は兩親の實踐薰陶にあり、「父母苦しますして子に德を望むは未だいたらさるなり。」と燕石雜志その他の隨筆にも主張してゐるほどである。彼の著作が俗劣なる黃表紙から讀本に進んで、次第に道德的情操を濃厚にしたのは、無論樂翁公の寬政改革の影響はあるが、愛兒宗伯のために遊民視せらるゝ戲作者境涯を極端に耻ちたのは云ふまでもない。それまでは京傳三馬などの浮世人仲間にも立ち交つて、狂歌もつくれば茶番口上も書き、遊里などへも時には出入してゐた彼が、ぴたりと足をとめて友人等に背き、書齋に籠居して經學研究に沒頭するやうになつたところに、平凡人としての彼の

狼狽ぶりが明かに見られる。わたしは彼の書齋に最後まで掲げられたと云ふ「事取二凡近一而義發二勸懲一」と云ふ聯の文字を見て、いつも思ふ。まだ調査がとゞかぬゆゑ斷言はしないが、馬琴終生の標語たるこの字句の現出は、わたしだけの所見では、享和元年新春出版の黃表紙「曲亭一風京傳張」まで遡ることが出來る。其口繪に彼の書齋を描いて、正面にこの聯を掲げてあるが、恐らくこの頃が彼の思想變化の初期と見るべきだらうと思ふ。自分の肖像の鼻をわざ〳〵可笑しく獅子鼻（京傳鼻とも云ふ）に書かせ、妻のお百に遊女風の姿をやつさせ、その內容から云つても京傳賣出しの煙管の廣告のために趣向を立てゝ、情なきまで下劣に女小兒の讀者に媚びてゐる戲作者生活を營みながらも、なほこの聯句を標榜せずにゐられないところに、彼が渡世藝術に對するこころの疚しさと痛みとが見られると思ふ。この黃表紙出版の時、馬琴は三十五歲、長男鎭五郎の宗伯はやつと五歲であつた。彼がしきりに龜田鵬齋や蒲生君平などに接近して、その提撕をうけるとゝもに、馬琴は急に高慢病につかれたとて三馬等の冷笑をうけたのは、この時代からであると思はれる。

極く概略に云つて、馬琴生涯の思想變化は三階段があるやうに思ふ。即ち今云ふこの頃からの彼の謂ゆる實學崇拜の時代と、前にも述べた宗伯が神田に別居して松前家の扶助をうけるやうになつた、馬琴五十歲前後の宋儒理學の心醉時代と、天保初年に宗伯の病症の不治を知つて、易學に迷ひ方位學に溺れ、神佛に佞媚して迷信に墮ちた晚年の彼と、この三段がある。そしてその三回の思想變化が、いつも甚しく宗伯の存在と境遇とに支配されてゐるのは見遁がすことが出來ない事實である。この點は馬琴研究家の特に留意すべき點だらうと思ふ。

「後の爲の記」は宗伯の行狀記を宗伯の子供に傳へやうとしたのだから、なるべく宗伯の長所美點を舉げてゐるが、仔細に彼の他の自記を吟味すると、彼には眼中の寶玉とも云ふべき宗伯に對する强烈なる期待が、年とともに次第に裏切られてゆくところに、彼の遣瀨なき失望と悲哀とがあつた。幼年時代は俊童寧馨兒として彼もひそかに心ほこりにした宗伯が、生來の病身のために業を遂げず、學者に失敗し、畫家に失敗し、醫者になつても學術に疎く、文事に遠く、到底名家巨匠の域に至るべき器でないと知つた時、馬琴最初の念願が大きかつたゞけに、その失望も痛ましく見られる。友人等に書き送る書面などにも、なるべくその弱味を見せまいとつとめながらも、何時とはなしに嘆息の聲が洩れて、兎に角凡人は凡人らしく食つて生きてさへくれゝば好いが、わがなき後は如何にして生きるだらうなどと、

るの苦しき也。特に彼翁の書は、やんごとなき御かたにもとり用ひさせ給ふよし承り候事もあるものに候。」と憤激して、正直に然う考へてゐる馬琴にしては、大名お抱の宗伯と市井の一町人たる婿清右衛門の間に、截然たる區別があるのが正當と固く信じてゐた。彼が口癖に主張する、「小事にも必ず名分を正うす。」と云ふ學說は、彼のために動かすべからざる信條であつた。その證據に更に云へば、彼は家庭內に於ても宗伯及び太郎の二人を偏重して、同じ子孫でも娘どもや外孫などには可怪しいほど冷淡であつた。たまに泊りに來る四谷の孫どもや渥美の孫をひどく煩さがつて、日記にまで小言を洩してゐながら、同じ孫の太郎だけには著作の邪魔をされても怒らず、自分みづから子守をしたり、或は神詣でや芝居見物にも連れ出して、その歸路には跼み痛む腰骨に、眠れる孫をやうやうに負つて歸つたりするのも、必ずしも彼の初孫に對する盲愛のみではなかつた。やはり時代常識の固陋なる封建思想から男系嫡嗣を重んぜずにゐられなかつた。宗伯太郎は瀧澤家の家名をつぐ嫡流との意が強く先に立ち、「私情によつて正名を紊さず。」の持說を遵奉するために、彼には寧ろ苦しき克己心があつたやうに思はれる。三人の娘のうちでは長女おさきに最も厚く脊賴してゐるが、一つはおさきが病身にして心優しく、馬琴夫婦にもよく仕へ太郎などの世話をよく見てくれたゝめもあらうが、彼女は曾田家の家名を相續して、祖先の位牌を守ると云ふ點が、馬琴をして一層區別を置かせたのであらう。わたしはかゝる些細なる家庭生活に於てすら、窮屈なる名教心に囚はれて、絕えず苦しんでゐる彼の臆病なる心を悲しむ。

八歲の悴に繪をかゝせて、それを最も自信ある著作の卷頭に揭げたり、世間高名の學者を選んでその講筵に出席させたり、馬琴は宗伯を世に出すために可也あせつてゐる。家庭教育などにも餘程注意して、兒童敎育は兩親の實踐薰陶にあり、「父母苦しまずして子に德を望むは未だいたらざるなり。」と燕石雜誌その他の隨筆にも主張してゐるほどである。彼の著作が俗劣なるのは、無論樂翁公の寬政改革の影響はあるが、愛兒宗伯のために遊民視せらるゝ戲作者境涯を極端に耻ちたのは云ふまでもない。それまでは京傳三馬などの浮世人仲間にも立ち交つて、狂歌もつくれば茶番口上も書き、遊里などへも時には出入してゐた彼が、ぴたりと足をとめて友人等に背き、書齋に獨居して經學研究に沒頭するやうになつたところに、平凡人としての彼の

狼狽ぶりが明かに見られる。わたしは彼の書齋に最後まで掲げられたと云ふ「事取二凡近一而義發二勸懲一」と云ふ聯の文字を見て、いつも思ふ。まだ調査がとゞかぬゆゑ斷言はしないが、馬琴終生の標語たるこの字句の現出は、わたしだけの所見では、享和元年新春出版の黄表紙「曲亭一風京傳張」まで遡ることが出來る。其口繪に彼の書齋を描いて、正面にこの聯を掲げてあるが、恐らくこの頃が彼の思想變化の初期と見るべきだらうと思ふ。自分の肖像の鼻をわざ〳〵可笑しく獅子鼻（京傳鼻とも云ふ）に書かせ、妻のお百に遊女風の姿をやつさせ、その內容から云つても京傳賣出しの烟管の廣告のために趣向を立てゝ、情なきまで下劣に女小兒の讀者に媚びてゐる戲作者生活を營みながらも、なほこの聯句を標榜せずにゐられないところに、彼が渡世藝術に對するこころの疚しさと痛みとが見られると思ふ。この黄表紙出版の時、馬琴は三十五歲、長男鎭五郎の宗伯はやつと五歲であつた。彼がしきりに龜田鵬齋や蒲生君平などに接近して、その提撕をうけるとゝもに、馬琴は急に高慢病につかれたとて三馬等の冷笑をうけたのは、この時代からであると思はれる。

極く概略に云つて、馬琴生涯の思想變化は三階段があるやうに思ふ。即ち今云ふこの頃からの彼の謂ゆる實學崇拜の時代と、前にも述べた宗伯が神田に別居して松前家の扶助をうけるやうになつた、馬琴五十歲前後の宋儒理學の心醉時代と、天保初年に宗伯の病症の不治を知つて、易學に迷ひ方位學に溺れ、神佛に佞媚して迷信に墮ちた晩年の彼と、この三段がある。そしてその三回の思想變化が、いつも甚しく宗伯の存在と境遇とに支配されてゐるのは見遁がすことが出來ない事實である。この點は馬琴研究家の特に留意すべき點だらうと思ふ。

「後の爲の記」は宗伯の行狀記を宗伯の子供に傳へやうとしたのだから、なるべく宗伯の長所美點を擧げてゐるが、仔細に彼の他の自記を吟味すると、彼には眼中の寶玉とも云ふべき宗伯に對する强烈なる期待が、年とともに次第に裏切られてゆくところに、彼の遣瀨なき失望と悲哀とがあつた。幼年時代は俊童寧馨兒として彼もひそかに心ほこりにした宗伯が、生來の病身のために業を遂げず、學者に失敗し、畫家に失敗し、醫者になつても學術に疎く、文事に遠く、到底名家巨匠の域に至るべき器でないと知つた時、馬琴最初の念願が大きかつただけに、その失望も痛ましく見られる。友人等に書き送る書面などにも、なるべくその弱味を見せまいとつとめながらも、何時とはなしに歎息の聲が洩れて、兎に角凡人は凡人らしく食つて生きてさへくれゝば好いが、わがなき後は如何にして生きるだらうなどと、

始終心を痛めてゐる。それでも越前老侯に仕へる頃までは、馬琴もわが勢力を殺いでも宗伯に品位をもつけ體面を保たせてゐたけれど、篤實・溫厚、淸潔とほこつてゐた宗伯の氣質が、その成長とともに次第に偏狹になり、固執に傾き、疑ひ深く嫉み強く、小事にこせつき我が強く、金錢に吝く義に勇まず、臆病なる家畜のやうにたゞ臆病に、弱く、始終大事を怕れ、雷地震に顚動して狼狽し、又惡風を恐れて夜も眠らず、「或は庭の樹を倒し、塀を傾け柿葺を破らるゝことあらんか。」とくよ／＼心配してゐるさまが、「其性の斯くの如くなるは、杞人の天を憂ふるに庶し。」と見えるのは、馬琴には悲しむよりも寧ろ疎ましくもあつたらしい。馬琴自身がうちに抱いて、終生を苦しめてゐる癖質が、最も理想的に、完全に、成人の模範にもと敎育して來た宗伯のうへに、殆んど病的とも云ひたいほど極端にあらはれて來たのは、彼としても耐へがたき苦痛であつたと同時に、寂惘でもあり同時には又人間的な厭惡でもあつた。篁村氏の說には、宗伯が斯く病身になり臆病になつたのは、馬琴が餘りに宗伯の敎育に嚴し過ぎたゝめでゐつて、宗伯は彼に敎へ殺されたのだと云つて、お百は始終馬琴を責め、馬琴も內心その悔悟が痛切であつたと云ふが、これは甚だ至當な說として首肯かなければならない。彼は家を愛し、子を愛するの結果、餘りに理想的な全人をつくらんとして、窮屈な餘裕のない道學的な敎育を急いだのであつた。その點は彼自身も氣がついてゐると見えて「後の爲の記」その他にも悲しい告白をなしてゐる。「常に出づる折は辭し、遲れば面す。そのゆくてにて果子などを得れば、これを懷にしてかへり來て父に薦めざることなかりけり。又平生病痛の發る毎に、病床に着くことを嫌ひて平臥す。父が病床に來て病を問へば、病苦の折といへども心身を起して稽顙す。父退かざれば敢て枕に着かず。この故に父は、彼の心の安からざらんことを思ふて、病を問ふこと稀也。只每朝媳婦に其安否を聞知するのみ。卿や其病癒たる折は父に謁する每に大賓を迎ふるが如し、其敬の過ぎたるをもて、父の心反て安からざる所あり、折々は打解けよかしと思へども、去る本性なるを如何せん。」とあるのはその一つで、宗伯の日常行儀がいかに小節に屑々としてゐて、形式に拘泥してゐたかゞ知られる

夜話　その第二

『兎園小說は是より斷絕す。社友內中にて鬼籍に入る者には文寶あり。（後、蜀山人と號す。文政十二年三月二十三日歿す。享年六十二。）海棠庵あり。（文政十二年九月二十七日歿

す。三十四歳）筑後に移住せる者に松嘉館あり。（文政八年の春、分袂以來胡越の如し。）故ありて絶交する者に好問堂あり。（文政八年季冬以來、此と交らず。其志慨はざれば也。）交遊の全からざる此の如し。浩嘆何ぞ堪へん。余は閑居を以て常となす。友無きも亦一樂也。（原漢文）」

多分天保初年の書入であらうが、馬琴は兎園小説外集の目次餘白に斯く註記してゐる。兎園小説會及び耽奇會の解散は文政八年の冬、山崎美成と馬琴の絶交に起因するのだが、物事にねつく執着づよい馬琴は、そのために兎園小説の集録を廢棄しなかつた。書齋に屛居して獨力をもつて奇聞珍事を書き集め、その後七八年間に外集二冊、別集三冊、餘錄二冊、拾遺二冊の九冊の漫筆集を世に殘してゐる。

わたしは前の註記を讀み、更に著作堂雜記にうつゝて、その末年の部分に、彼が舊友の訃音を聞くたびに、その死歿年月と略傳とを一々雜記に記入してゐる條を讀みつゞけて行くと、いつも悽愴の感にうたれる。晩年は信濃坂の邊鄙に移つて、且つ眼病にて步行の不自由もあつたらうが、六樹園雅望の死も龜田鵬齋屋代輪池の死も、渡邊崋山、谷文晁、只野眞葛、中村佛庵、柳亭種彥などの死を、いつも出入りの表具師や本屋の丁稚などから世間話の序に聞いて、驚いて人を頼みて死去の年月を調べたり享年などを確めて、それを手探りの顫へた文字で丁寧に雜記へ記入してゐる。そして心ひそかに交遊の全からざる自己の孤獨性を悔みながら、强いて自分を慰めやうとしてゐる。恐らく馬琴が最後まで交情を渝へずにその人の死後の追憶に、悔恨なき哀惜をそゝぎ得た友人と云へば、夙く死んだ蒲生君平、樂亭琴魚、關源藏などの外は、伊勢の殿村篠齋、高松の木村默老、筑後の西原梭江、越後の鈴木牧之などの三四人に過ぎまい。これ等の人はいづれも馬琴と數十年間の親交者で、牧之を除けばみな生涯の友誼を全ふしたとも云はれる人々なのだが、然し不思議にも總てが遠く鄕國をへだてゝ住み、書信往復によつてのみ友情をつゞけた友人であつた。馬琴自ら親友第一と稱する木村默老でさへ、彼と生涯の面話は二回か三回に過ぎなかつた。

世間の馬琴批評家はこれ等の事實を見て、直ちに彼の倨傲、彼の偏執、彼の尊大、すべて彼の有する性格の惡徳が彼に禍ひして、終生孤獨の人に終つたと結論するに一致してゐる。もつとも深い同情を馬琴に寄する篁村氏や依田學海翁なども、やはりこの點は彼馬琴の賦性の缺陷として嘆息してゐる。しかしながら、わたしはその點に於て深き疑ひをもつ。決して、强いて異を立てるこゝろはないが、馬琴は餘りに世間に弱く、人に弱

く、卑屈して、畏縮して、自分を棄てゝまで世に從ひ人に從はふとしたゝめに、却つて遂に一人の眞友もなく終生を孤獨にをはらなければならなかつたと、わたしは見てゐる。彼の生涯を觀察すればするほど、わたしは確信をもつて然う考へずにゐられない。

然しこの概括は過去の馬琴評傳と餘りに背馳するために或ひは特異を主張するやうに解されるかも知れない。わたしは結論を急がずに、最う少し冷靜に綿密に彼翁について考へて見たい。

五十嵐教授はその著書新國文學史のうちに、斯く記してゐる。『長じては（馬琴をいふ）龜田鵬齋、柴野栗山、石川五老、橘千蔭等に就いたが、自己本位の慢心が邪魔になつて、一つも能事を遂げなかつた。京傳には窮餘を救はれて、暫く準師弟の交を續けたが、遂には溫良なる京傳すら忍び兼ねる事があつて、絕交同樣の間柄になつた。彼れには先天的に血脈を引いた父母はあつたが、師といふ者はなかつた。少くとも眞に師事した者は無かつた。水滸傳』の雜貨中や『源氏』の紫式部は時代を異にしたればこそ尊崇もされたれ、若し同時代に生れたならば誨盜誨淫などいふ形容詞をつけて一喝の下に却けられたであらう。彼れの日記の中、子の宗伯が代筆した部分に、

一　七時過蜀山爲年始祝儀來る、於座敷御逢有之雜談數刻過暮歸去

といふ一節がある。苟も當時の名家（狂歌界のみならず、戲作者仲間からも、社會一般からも非常に尊崇珍重され、馬琴の師たる京傳も其勸奬によつて文學的生活に入り、殊に京山が、京傳の葬式に馬琴の列せぬを非難して、蜀山人でさへ會葬されたに馬琴の來ぬは怪しからぬと云つた程の人）馬琴より先輩の老大家で、而も客たる人を蜀山と呼び捨てにし、「來る」「歸り去る」と下人扱ひにして、父には「御逢有之」といふ調子の大名扱ひは、滑稽に近い無禮僭上ではあるが、察するに是れも宗伯が父の感化によつてか、或は父の氣風を呑み込んで書いたのであらう。全體が此の筆法で行つてゐる所を見ると、馬琴は之を嘉納して悅に入つてゐたと見える。馬琴が自己本位の虛榮心は之によつても間接に證明される。』

大體五十嵐氏は徹頭徹尾馬琴の性質を惡んで、その虛榮尊大を極端に罵つてゐる人である。更に進んで、『彼れは風變りな人間の標本として面白い人物で、溫かに交際すべき人物ではない。いつの世にも天才肌の文學者などには、婦人、金錢、交遊、種々の關係に於いて眉を顰むべき行爲をなし、又それを作

に現はして自分も得意がり、世間も持て囃す事のあるものであるが、かういふのは一寸法師やろくろ首や三つ目と同様、見世物として面白いので、又本來博物館の標本函に容れて置くべきを、假りに世間に放し飼ひして藝をさせて見るのが面白いので、社會を成り立たす一分子としては、決して賞すべきものではない。馬琴にも多少此の傾きがあつた。かくの如き我儘者は人間相手、社交本位の職業では到底成功すべき見込がない。かやうな人の成功し得る領分は、筆一本で思ふまゝの世界を勝手に紙上に創造し得る文藝界の外にない。而して馬琴はいみじくもその天職を選み當てた。かくして子として、弟子として、徒士として、醫者として、易者として、居候として、下駄屋として成功し得なかつた彼れは、小說家となつて一代を風靡し、我が文學史を飾ることになつたのである。』とまで言葉を極めてゐる。これは五十嵐教授が、偶ま馬琴の性質に假りて、現代の文學者に對する忿激の情を、洩されたのでもあらうが、篤學精勵の人と聞く同氏の言說としては、はなはだ不謹愼なる放言と思ふ。學徒として立論するに、はなはだ不詮索の譏を免れないのみでなく、人間の觀察に甚だ不用意極まるのを惜む。

　龜田柴野諸先輩に師事して、馬琴は慢心のために成功しなかつたと云ふのは恐らく教授は列傳體小說史に、之れより東奔西走、或は龜田鵬齋の徒僕となりて儒道を修めんとし、或は石川五老をとひて狂歌を學ばんとつとめ、又は橘千蔭の門を叩きて其書體をえんとしたれど、自尊にしてみづからはからぬ性なれば、一も果す能はず。』と書いてある漂浪時代の馬琴の迹述を、輕卒にもそのまゝに蹈襲したのではないかと思ふ。若しそれとすれば、これは同氏のために名譽ある引用ではなかつた。馬琴の學歷師匠については、自然後に言ふ時があるけれど、この列傳體小說史の記事は甚だ疎漏にして信用は出來ない。次に教授が最も憤慨してゐる蜀山の問題であるが、恐らくこれは教授の不注意であつて、馬琴を嘲罵するに急なるため、學者の第一とする研究を怠つたのであらう。同氏の評論にはたゞ宗伯の代筆とあるのみで、引照日乘の年月が記してない。けれども恪愼苟もせざる馬琴にして、殊に階級觀念のはげしい馬琴にして、宗伯にかゝる誇慢なる記述をゆるして置くのは、はなはだ似合はしからぬことに考へたので、兎に角わたしは自分の所藏の日記類や拔萃帖を精しく調べて見たけれど、不幸にして五十嵐氏の引かれた記事は手元の抄書には發見されなかつた。けれども蜀山に關する記事なれば二三の所見があつた。國書刊行會の戌子日記のうちにも出てゐる。即ち文政十一年十二月十七日の條に斯う出てゐる。「當日馬琴は聟や妻お百と共に淺草觀音に參詣、

て、夕方になつて歸宅した）。

一、右他行中、蜀山來る。かねて賴置候太平刀出來、持參せらる。代金三分貳朱貳匁のよし。並に柳川瀋より被ㇾ賴候よしにて短冊持參。すみた川の歌を被ㇾ乞。他行中に付、取次之ものへわたし、歸去。

わたしはこの日記を讀んで、五十嵐氏の云ふ蜀山は多分この蜀山であらうと推測する。もし然うとすれば、教授の憤激は甚だその謂はれをなさぬ。この蜀山は前の兎園小說外集の註記のうちにある二代目蜀山人であつて、教授の云ふ當時の名家でもなければ、馬琴の先輩老大家でもない。太田南畝の蜀山人はこの日記の六年以前、文政六年四月六日（名人忌辰錄）に死んで、馬琴もその雜記のなかに、「南畝老人死去の事。本月十二日公儀御屆に及び候由文寶いへり。密穩三年に及べり。」と文政八年五月下旬の聞書としてあるから、南畝蜀山の死は無論承知してゐるのみならず、この二三行の雜記の文章を見ても馬琴は、太田蜀山と文寶には文字の上にも多少の區別を置いてゐる。云ふまでもないことだが、この文寶の蜀山人は飯田町の藥種屋龜屋文寶（本名久左衛門）のことで、兎園小說の會員にも列してゐたが、たゞ南畝の筆跡をよく擬ね好事の趣味が幾分あつて書畫骨董の周旋のため瀧澤家へも親しく出入してゐるけれど、文事學業のうへでは可也馬琴に輕視されてゐた男であつた。（馬琴はまた文寶が蜀山の僞筆を賣買すると聞いて、ひそかに彼を陋しめてゐた。）宗伯が御逢對と書いたのも、あながち謗慢とばかりは云はれないと思ふ。それならば前の日記は五十嵐教授が、太田南畝の死去以前、即ち文政六年以前の日記によつて引照されたのではないかと云ふ不安もあるけれど、然し篁村氏は馬琴日記を調査ししてその初見を文政八年となし恐らく馬琴の日記の書初めは同年であらうと云つてゐる。わたしはその說に從つて五十嵐氏を不詮索と云つたのだけれど、萬々一、文政六年以前の日記が現存して、その中に教授の引用せる記事があると云ふなら、わたしは低頭して失言を謝さなければならない。

こゝまで書き來つて、わたしは衷心ひそかに忸怩たるものがある。些々たる五十嵐氏の錯誤不注意を拾ひ立てゝ、事々しく揚足とりをしたやうにも思へてならない。しかしわたしはこの一小些事の眞僞を外にして、教授までが從來の馬琴評論家と同じ弊竇に陷つて、先入の見解を主として論を立てられた點に於いて服することが出來なかつたのである。つづいて云ふ京傳對馬琴の問題なども、聰明なる教授に再考を煩はしたく思つてゐる。

京傳馬琴の對立及びその關係については、當時の文壇や文學者生活の概略とゝもに、別に云ひたいと思ふから、こゝには單に二家の師弟問題だけを書いて置く。馬琴を京傳の門下生とする說は、今日も行はれてゐるやうだが、これは甚だ疑はしい。その論の根據はやはり京山の「蜘蛛の糸卷」の記事か、京傳門人と記した二三の戲作が馬琴にあるを證とするに過ぎない、極めて胡散なる說と思ふ。尤もこの門弟說は馬琴の現在當時にも流布されてゐることとで、現に齋藤彥麿の「神代餘波」などにも、『山東京傳といひしは古今の一人にて、和漢の學びにたけ、雅俗の人情をよく辨へ老少に通達して、奇々妙々の作者也。その門弟に曲亭馬琴といへるは、元武家の浪人にて京傳の門人となり、町醫となり、瀧澤宗伯と名のり、後に家主となり伊勢屋清左衛門と變名し、終に戲作の名海內に聞えしは、全く京傳の恩賴也。』と云つて、いかにも傳聞の即記らしいなかにも、十分に京傳を稱揚して馬琴を抑へやうとする口調がある。その他に小山田與淸も馬琴を京傳の門弟と認めてゐるし、(確か松屋筆記の註書にあつたと思ふ)藤堂龍山、山崎美成なども然う書いてゐる。然るに肝腎の馬琴の自記には、「作者部類」、「伊波傳毛乃記」を初めその他の記述に、最初から兩人の關係を對立的の友人づきあひにして、一言も師弟らしい情誼の言葉を洩してゐないのみならず、却つて京傳の遊蕩生活を非難し、彼の儒學聖經に疎かりしことを憫み、世渡上手、利口者であつたやうに、諷刺してゐる。わたしは思ふに、京山が憤激して「蜘蛛の糸卷」のなかに天明中戲作者の一項を置いて、馬琴を思ふまゝに貶さうとしたのは、前記の二著述が京山の讀むところとなつて、謂ゆる「家兄先生」の京山を赫怒さした結果であらうと思ふ。(京山が二書を讀んで後に「蜘蛛の糸卷」を書いたと云ふには確證がある)然し馬琴が最初前記の二著を草するに到つた動機は、世の訛傳を正して自家の正體を僞りなく子孫につたへるのが本意で、決して自分を世間へ誇示しやう、と云ふところは明かな事實である。それは彼が初めかの二書を深く帳下に秘して、稿本を二三部つくり篠齋默老の心友の間に頒つたのみなのにも知られやう。その秘著が世間に流布して、京山の目に觸れやうなどとは、素より豫想だもしなかつた。

先づ順序として、その「蜘蛛の糸卷」を見るのに、「曲亭馬琴は寛政の初、家兄の許へ酒一樽持ちて始めて來り、門人になりたきよしをいふ。所を聞けば深川仲町の裏屋に獨り住むよしを云ふ。家兄曰、草雙紙の作は世を渡る家業ありて、かたはらなくさみにすべきなり。今時鳴なる作者皆然り。さて又戲作は、

予として教ふべき事一つもなし。されば己をはじめ古今の戲作者一人も師匠はなし。まづ弟子入はおことわりなり。しかし心安くはなしに來給へ、また出きたる物あらばみる事はみてやるべしと。」云ふ挨拶であつたので、それより後馬琴は足近く京傳を訪問して、戲作のうへの用意などを聞いてゐた。そして京傳の言葉に從つて、先づ生活の安定を第一にする考へでもあつたらう、馬琴は賣卜者として糊口の資を得るために、神奈川の方に旅行して暫く音信がなかつた。その間六七十日をへだてゝゐるので、「馬琴は狼にや喰はれつらん。」など京傳兄弟が噂してゐると、或日馬琴は旅裝のまゝ悄然として京傳の家を訪ねて來た。田舍にても生業の思ふやうに行かざりし旨など話して、京傳に夕飯をふるまはれて、その夜は深川の舊居に歸つて行つたが、間もなく又一日訪ね來て馬琴の云ふやう、『旅の留守に出水の（是寛政三年の洪水）ために、器殘らずくさり、壁も落ち勝手の物流れうせしも多し。旅の稼ぎもはか〴〵しからざりし故、今我足なき蟹の如し。いかゞせんといふ。家兄曰く、しからば當分我所に食客せられよ、と聞きて馬琴大によろこび內弟子の心にて居りし故、衣服まで心つけ給へり。かくてありし事半年あまり。』であつたが或日地本問屋の蔦屋重三郎が京傳を訪問して、見世番頭に不足ありて解雇したゝめ、業務にも差支えてゐるとの話であつた故に、京傳は丁度幸ひとして馬琴を蔦屋の番頭に周旋したのである。その時京傳の紹介の言葉が、『前にも引いた、『酒は呑ます、手も書き、文字も讀め作氣もありてうどよからん。しかし實體とはたしかに請合申されぬ。』と云ふ言葉であつた。馬琴はその蔦屋に『奉公中花の春虱の道行全二冊、春朗畫にて（今の北齋）蔦屋出版、馬琴自序に京傳門人とあり。此雙紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ。蔦屋に三年ばかり奉公をして、よき入聟の口ありとて、家兄を賴みいとまをもらひ、飯田町中坂なる下駄屋にて家主なる後家、』へ入緣したが、馬琴は下駄屋を嫌つて手習師匠などしながら專心著作に從事したので、次第に世間から認められて今の如き大家となつた。

以上は京山の記述を忠實に繰返したのだが、假りに事實をこのまゝ承認するとても、わたしは馬琴を京傳の門弟と呼ぶには躊躇する。現在の如く文藝の門戶が開放されてゐる時でも無名新進の作家が、名聲ある先輩作家の門を叩いて、その紹介によつて世間に出る例は往々にして見る。それを一々門弟と視て終生の師事を強いるのは、甚だ實情に遠い解釋である。殊に馬琴は當時相當の技倆も自信もあつて、京傳訪問のゝち間もなく、好くも惡くも「盡用而二分狂言」になる一冊子を戲作して、京傳の口添が

あつたとは云へ直ぐ翌年正月に和泉屋市兵衛方から出版してゐるほどである。無能の貧生が師札をとつて先輩の扶助を乞ふのとは、譯が違つてゐる京傳が友人として最初から相當の待遇をもつて馬琴を俟つたと云ふは溫厚なる京傳の性質としても然うありさうなことゝ頷かれる。天災に遇つて難儀してゐる友人を三月半年を寄食せしめたとて、直に門下生をもつて呼ぶのは酷に過ぎるし、第一人情にも遠い話であると思ふ。そればかりでなく、少し精密に當時の眞相を調べて見ると却つて馬琴の方が京傳のために盡して、可也京傳のために必要な人であつた。

馬琴が家財を流されたと云ふ寛政三年の洪水は、「武江年表」に、『八月六日。大風雨、小田原邊より江戸迄高潮上る。』とあるのか、又、『九月四日。大風、昨夜中より大雨南風烈しく、八月より弱し。巳刻高潮深川州崎へ漲りて、あはれむべし入船町久衛右門町壹丁目二丁目と唱へし、吉祥寺門前に建つらねたる町家住居の人數と共に、一時に海へ流れて行方を知らず。』とある方なのか、わたしには判明しない。しかし何れにしても馬琴が飄浪の旅から歸つて、悄然として京傳の家を訪れたのはこの兩度の洪水のうちであらう。然るに馬琴はこの年の十月には確實に蔦屋に住込んでゐるから、京傳の家に半年あまり寄食する筈はないと思はれる。それは然し、何方にしてもかまはぬ。わたしはたゞその當時に於ける京傳自身の境遇を考へれば足りると思ふ。この年の正月に京傳は耕書堂つた屋重三郎の懇請をいなみかねて、洒落本禁止の法令をおかして「錦の裏」「仕掛文庫」「娼妓絹篩」等三部の戯作を著作出版したゝめ、手鎖五十日の處罰をうけてゐる、この事實を忘却してはならない。「伊波傳毛乃記」には初冬の頃手鎖御免とあるから、馬琴が神奈川から歸つた頃は、京傳はまだ屏居謹愼中であつたに相違ない。『板元は元來大腹中の男なりければ（蔦屋は財産半減の闕所、絶版）、さのみ畏れたる氣色なかりしが、京傳は深く恐れて是より謹愼第一の人となりぬ。且つ口癖することも、この比より始れり。この事世上一同に風聞せし程に、京傳の名はいよ／＼高くなりて、牛打つ童蜑の子どもまで知らざるはなし。』と、各書ともに記述が一致してゐるから、穩和なる京傳はいかに自分の輕率を耻ぢ悔み、氣力も沮喪してゐたかゞ知られる。馬琴が丁度その時に旅から歸つたのである。京傳が、涙をうかめ、手を取らぬばかりにして、友人を悅び迎へた光景も前後の事情や馬琴の記録によつて察しられる。馬琴の言葉に慰められ、深く馬琴を賴みにして、この事以來一層二人の間に友情を加へたと馬琴がいつてゐるのは確かな事實であらう。のみならず馬琴はその間に京傳を助けて、「龍宮羶鉢の木」「實語教幼稚講釋」等の出版をも代作

してゐる。京山が云ふやうに走り使ひの食客として、馬琴は京傳の家に寄食してゐたのでは決してない。それにも拘らず齋藤彥麿などが京山に賴まれて蜘蛛の糸卷の註記に、『馬琴は京傳翁の大恩受けし人なり（中略）終に作者となりしは皆京傳の大恩なり。序に曰く、蜀山人の高弟子たる宿屋飯盛は、蜀山人の死去葬送の時にも行かず、師恩を忘却したるは、馬琴と一對の不義にて、人倫とは云ひがたし。』とまで讒謗を極めて、前出の「神代餘波」の惡言を强めてゐるのは甚だ執拗に過ぎると思ふ。京傳の葬式に宗川を列席せしめて自分が出なかつたのは惡いとしても人倫にあらずとまで罵るほどの罪ではないと考へる。馬琴は京山を終生憎み通したと云ふ事實をも考へたい。彼は憎みのある人間にてわが好まざる人なりと、始終三十年間京山に對する批評を變じなかつた。馬琴は蔦屋に寄食して一年餘りゐたらうが、「その間に七種ほどの黃表紙類を著作して世に認められ、翌寬政五年七月には會田家に入夫してゐるから、著作の上にも生活の上にも、格別京傳の扶助をうけるやうなことはなかつた。

「馬琴はこの前年、寬政二年の冬より京傳子を著せしが、兩三年にして京傳と並びて行はれたり。」と馬琴が自記してゐるの方が、わたしには正確と認められる。

わたしの研究が不十分なため、或は臆說とされるかも知れないが、この門弟說の出所系統をたどつて行くと、結局ははなはだ面白い事實に逢着する。餘りにしつこく同じ問題にこだはるやうだが、馬琴生前の鬱懷をはらすためにも、最う少し話をつゞけてみたい。何人もこの門弟說の出所を究めてゆくと、必ずその主張者や認定者の門戶には、京傳の弟京山の足跡がつゞいてゐることを發見するだらう。同時に又、その人々一群は當時の國文學大家小山田與淸と云ふ盟主のもとに範圍されてゐるのに氣がつくだらうと思ふ。山崎美成、岸本由豆流、巖瀨百樹（京山）太田南畝、齋藤彥麿、其他みな與淸の擁書樓に朝夕集合して、南畝を除いた人々の如きは、殆んど師禮をもつて松屋主人に服從してゐた。文化十二年より六年間にわたる擁書樓日記を飜して見ても、これ等の人々がいかに堅固なる一黨を結んで、各自の研究を互に資け合つてゐるか、自黨の學說を擁護して他派の學者に應戰してゐるか、その熱心なる邁進ぶりは、寧ろ當時の學術進步のために驚嘆しなければならないほどである。京山は多少漢學の素養もあり篆刻も器用だつたので、はやくから神田川通船屋敷の擁書樓に通つて、文人仲間にも可也顏を知られてゐた。然るに兄の京傳は文化の初年頃、思想上に變動があ

つて、染々と戯作者生活の空虚と哀愁とを感じ、考證研究の學者的態度に憧憬してゐる頃なので、弟京山の紹介をもつて小山田與清に謁を乞ひ、後には純然たる門生の態度にて、熱心にその講義日や會日に出席してゐる。南畝も馬琴も共に京傳は骨董集と討死したと太息してゐるほどで、當時京傳の熱なる研究ぶりと眞摯さとは社中の人々も驚歎してゐたと云ふ。それに人間も練磨してゐて、世事に聰く、しかも甚だ恭謙であつたゝめに、松屋主人も切りに京傳を愛して、また同人間の尊敬もうけてゐたらしい。その頃丁度馬琴も輕薄なる黄表紙や敵打ものゝ戯作に倦き、やゝ眞面目なる歴史小説に移らんとして獨學に勉强してゐる時分なので、京傳はしば〳〵馬琴を訪問して、擁書樓への參會をすゝめてみた。然るに當時馬琴は無闇に儒學に熱中してゐて、和學考證などを異端視し、何うしても京傳の親切に應ずるところはなかつたと云ふ。のみならず馬琴は狂歌を宿屋飯盛（石川雅望）に學んでゐたので、雅望と犬猿のなかなる太田蜀山とも好からず、烈しく蜀山を罵倒したので、その事が後ちに小山田及び社中の人々の耳に入つて、一同を深く憤慨させたと云ふ話も聞いてゐる。

　これは德川文學の研究を以て知られた某博士の談話だが、斯う云ふ傳説も聞いた。（酒席の閑話ゆゑ、誤謬を恐れて名は記さない。）小山田與清の社中が結束して馬琴に反感をもつたのは、——當時戯作界の雙璧として京傳馬琴の名聲が相凌いでゐたので、——謂ゆる贔負々々の競爭心理によるだらうが、馬琴の直情が甚しく與清や南畝の自尊を傷けてゐる源因が、他に一つあつた。それは例の有名なる、與清と淸水濱臣との上野和睦の珍話を聞いて、道學一天張りの馬琴は、學徒の名譽のため極端にそれを恥ぢ憤り、聖門經學にも參じたる學者にしてかゝる醜怪事を聞く。われら學者として、愧ぢて妻子の顔を見るに忍びず、とまで激語し、其後は閉居して謂ゆる學界との交りを絕つた。」と云ふ。然るにこの激情の言葉が、誰の口からか擁書樓同人の耳に入つたので、ひどく同人を憤慨せしめたのであると云ふ。勿論傳説のことゆゑ、どの點まで信頼すべきかわたしは知らない。然し齋藤彦麿などの如く、餘りに執拗に馬琴を攻撃してゐるのを見ると、慥かに小山田社中の人々は馬琴に對して好感情をもつてゐなかつたと思はれる。序ながら、濱臣と與清との和睦の珍話を、太田南畝の自記によつてこゝに掲げて置かう。これは後章の當時の文壇について述べるにも必要なる資料と思ふからである。

〇與清濱臣和歌狂歌

文化十二年乙亥三月六日。天晴和暖、筋違御門の外通船屋

數高田與淸松の屋にて、曾我物語讀んとて午の刻過る頃行く。惟園岸本由豆流も來れり。兼々約せし山本正臣中の刻まで來らず。あるじ酒を進めぬるに、如亭天民（柏木如亭、大窪詩佛）、など來れり。けふは天氣よければ上野の花見んとて、天民松郷惟園など倶して上野に行。道にして淸水濱臣にあへり。ともなひて淸水の元なる松原に莚しきて酒汲。天民、對レ花不レ飮花可レ笑と云句を出せり。予是に就て、一止三千戈二百年と云句をつく。試に起句系句をつくべしと云ふに、天民、五雨十風春暮天。予、斑荆無レ處不レ開レ莚と付て絕句とせり。天民云、結句のことくしきには此起句にあらざれば連續せずと自讃せり。やゝ有て天民はあすの暇、此地に花を見る約あればとて辭し歸れり。松の屋濱臣惟園松郷ともに蓬萊に入て酒のみ物喰ひ、あたり近き唄婦をよぶに、業といふもの來れり。此女歌をそて

らく〳〵と世を渡るべき瑞相は、耳が大きく色氣たつぷり　　松の屋

濱臣松の屋は和歌の事につきて、近來不和なるよし、けふは花の本にゆくりなく相見へしかば、中直りせんにはおの〳〵おのはしめをくらべて、大なる方を勝と定めんと興じければ、歌ひめに糸ひかせ、惟園を角力の行司立ものにして、扇を開て左右を合せしに、濱臣のもの太くたくましきに、勢を添て出しければ、人々の目を驚かせり。松の屋もおさ〳〵劣るましきが勢ひなく、なへ〳〵として出せしかば劣りて見ゆ。人々めてくつがへりてどよむ事になん。鳥羽僧正など書ける繪卷物見る心地して古代なる戯れ、今の世には有がたくなん覺へし。

松の屋の松茸よりもさゞなみや
　志賀の濱松太くたくまし

と心のうちに思ひ侍り、醉心地のまゝかたまに乘りてかへりぬ。

（半日閑話による）

わたしは以上の事實から、斯う考へて見たい。馬琴の京傳門弟說は、京傳の生前から京山などによつて流布されてゐたのみでなく、擁書樓一黨の人々には然う信じられてゐた。そして文壇的に對立の勢力者であつた馬琴を貶して、京傳を揚げやうとする態度があつた。京傳は流石に溫厚人ゆゑ、或はそれ程でなくとも　馬琴とは終生犬猿も啻ならざりし京山には、深く馬琴に含むところがあつたと思はれる。そこへ京傳の葬式に馬琴の不參問題があつたので、得たり賢しと京山や擁書樓側では攻擊の聲を擧げたのである。その聲が馬琴の耳に聞えたので、耐え性なき馬琴はその非難に酬ゆる心をもつて、「作者部類」を書き

「伊波傳毛の記」を書く心になつたのであらうと思ふ。

これを要するに、馬琴京傳の師弟說の確執は、小山田與淸の擁書樓を中心として、何方から最初に小石を投げたかと云ふ問題に歸着する。そしてわたしの調査せるところでは、どうも最初の礫は京山側から拋たれたやうに思ふ。馬琴は京傳の死後、その未亡人に同情をもつて、時々訪問して慰籍してゐるから、未亡人と反對者の京山には、利害の上からも馬琴を邪魔者と見たらうと思ふ。それこれが重つて京山が切りに馬琴の忘恩說を主張するので、擁書樓側は一致して京傳を揚げて馬琴を貶さうとしたのであらう。馬琴はそれ等の惡評を聞いて、その辯明のために「伊波傳毛之記」や「作者部類」を書いて、子孫や親友の間に諒解を得やうとした。その二書が後年また京山の目に觸れて、上記の如く「蜘蛛の糸卷」の一節となつて一層の毒語を弄することになつたのであらう。馬琴の私信の多くが京傳の才能を賞讃し、その人物をも認めてゐながら、京山だけを終生の敵として戰つてゐるのにも、その消息の一端は窺はれる。

夜話　その第三

山崎美成と馬琴との絶交は、彼の自記に文政八年の冬の頃より不通とあり、如電先生の略解には、同年十月海棠庵關源吉の家にひらいた兎園小說例會の席上にて、なにか文學上の議論から衝突したやうに記されてゐる。或はそんな事實があつたかも知れない。しかしその衝突はないにしても、當時彼等二人の交情は、その春以來の論戰のために甚だしく傷けられてゐて、感情上の乖離は相互の心裡に到底相渉すべくもない溝渠を劃してゐた。世にこれを兩家の「けんどう爭」として輕く見てゐるが、わたしはこの論爭の間に、かれ馬琴の性格のもつとも正直な露出層を見るやうな氣がして、甚だ興味をもつ。

問題は極めて些細なことで、この年三月の耽奇會に會員の一人が、元祿年間の蕎麥きりの容物「大名けんどん」の匣を出品陳列したのに始まる。玩古癖ある山崎美成はそれを太だ悅んで、同會の同人雜誌「耽奇漫錄」にその器物の解說を書いたところが、圖らずも同席の屋代輪池（弘賢）から異說が發表された。美成の說は今日も普通に行はるゝ極めて平明な解釋であつて、初めこの蕎麥きりの賣り出された頃は一杯盛りの下賤の食物にて、店屋の賣主が客あつかひも慳貪なところから、そんな名が出たのだらうと云ふ說である。然るに輪池翁は或る書にけんどんを見頓と書けるを見たとて、「頓は食の義にて、行がかりに調ひ食するよしの名也。」と云ふ、漢學者らしい解釋であつ

數高田與清松の屋にて、曾我物語讀んとて午の刻過る頃行く。惟園岸本由豆流も來れり。兼々約せし山本正臣中の刻まで來らず。あるじ酒を進めぬるに、如亭天民（柏木如亭、大窪詩佛）、など來れり。けふは天氣よければ上野の花見んとて、天民松擲惟園など倶して上野に行。道にして清水濱臣にあへり。ともなひて清水の元なる松原に莚しきて酒汲。天民、對レ花不レ飲花可レ笑と云句を出せり。予是に就て、一止干戈二百年と云句をつく。試に起句系句をつくべしと云ふに、天民、五雨十風春暮天。予、斑荊無レ處不レ開レ莚と付て絶句とせり。天民云、結句のこと／＼しきには此起句にあらざれば連續せずと自讃せり。やゝ有て天民はあすの賤、此地に花を見る約あればとて辭し歸れり。松の屋濱臣惟園松擲ともに蓬萊に入て酒のみ物喰ひ、あたり近き唄婦をよぶに、業といふもの來れり。此女歌を乞て

らく／＼と世を渡るべき瑞相は、耳が大きく色氣たつぷり　松の屋

濱臣松の屋は和歌の事につきて、近來不和なるよし、けふは花の本にゆくりなく相見へしかば、中直りせんにはおの／＼おのはしめをくらべて、大なる方を勝と定めんと興じければ、歌ひめに糸ひかせ、惟園を角力の行司立ものにして、扇を開て左右を合せしに、濱臣のもの太くたくましさに、勢を添て出しければ、人々の目を驚かせり。松の屋もおさ／＼劣るましきが勢ひなく、なへ／＼として出せしかば劣りて見ゆ。人々めてくつがへりてどよむ事になん。烏羽僧正など書ける繪卷物見る心地して古代なる戯れ、今の世には有がたくなん覺へし。

松の屋の松茸よりもさゝなみや
志賀の濱松太くたくまし

と心のうちに思ひ侍り、醉心地のまゝかたまに乘りてかへりぬ。

（半日閑話による）

わたしは以上の事實から、斯う考へて見たい。馬琴の京傳門弟說は、京傳の生前から京山などによつて流布されてゐたのみでなく、擁書樓一黨の人々には然う信じられてゐた。そして文壇的に對立の勢力者であつた馬琴を貶して、京傳を揚げやうとする態度があつた。京傳は流石に溫厚人ゆゑ、或はそれ程でなくとも　馬琴とは終生犬猿も啻ならざりし京山には、深く馬琴に含むところがあつたと思はれる。そこへ京傳の葬式に馬琴の不參問題があつたので、得たり賢しと京山や擁書樓側では攻擊の聲を擧げたのである。その聲が馬琴の耳に聞えたので、耐え性なき馬琴はその非難に酬ゆる心をもつて、「作者部類」を書き

「伊波傳毛の記」を書く心になつたのであらうと思ふ。

これを要するに、馬琴京傳の師弟説の確執は、小山田與清の擁書樓を中心として、何方から最初に小石を投げたかと云ふ問題に歸着する。そしてわたしの調査せるところでは、どうも最初の礫は京山側から抛たれたやうに思ふ。馬琴は京傳の死後、その未亡人に同情をもつて、時々訪問して慰藉してゐるから、未亡人と反對者の京山には、利害の上からも馬琴を邪魔者と見たらうと思ふ。それこれが重つて京山が切りに馬琴の忘恩說を主張するので、擁書樓側は一致して京傳を揚げて馬琴を貶さうとしたのであらう。馬琴はそれ等の惡評を聞いて、その辯明のために「伊波傳毛之記」や「作者部類」を書いて、子孫や親友の間に諒解を得やうとした。その二書が後年また京山の目に觸れて、上記の如く「蜘蛛の糸卷」の一節となつて一層の毒語を弄することになつたのであらう。馬琴の私信の多くが京傳の才能を賞讃し、その人物をも認めてゐながら、京山だけを終生の敵として戰つてゐるのにも、その消息の一端は窺はれる。

夜話　その第三

山崎美成と馬琴との絶交は、彼の日記に文政八年の冬の頃より不通とあり、如電先生の略解には、同年十月海棠庵關源吉の家にひらいた兎園小說例會の席上にて、なにか文學上の議論から衝突したやうに記されてゐる。或はそんな事實があつたかも知れない。しかしその衝突はないにしても、當時彼等二人の交情は、その春以來の論戰のために甚だしく傷けられてゐて、感情上の乖離は相互の心裡に到底相渉すべくもない溝渠を劃してゐた。世にこれを兩家の「けんどう爭」として輕く見てゐるが、わたしはこの論爭の間に、かれ馬琴の性格のもつとも正直な露出層を見るやうな氣がして、甚だ興味をもつ。

問題は極めて些細なことで、この年三月の耽奇會に會員の一人が、元祿年間の蕎麥きりの容物「大名けんどん」の函を出品陳列したのに始まる。玩古癖ある山崎美成はそれを太だ悦んで、同會の回覽雜誌「耽奇漫錄」にその器物の解說を書いたところが、圖らずも同席の屋代輪池（弘賢）から異說が發表された。美成の說は今日も普通に行はるゝ極めて平明な解釋であつて、初めこの蕎麥きりの賣り出された頃は一杯盛りの下賤の食物にて、店屋（てんや）の賣主が客あつかひも慳貪なところから、そんな名が出たのだらうと云ふ說である。然るに輪池翁は或る書にけんどんを見頓と書けるを見たとて「頓は食の義にて、行がかりに調ひ食するよしの名也。」と云ふ、漢學者らしい解釋であつ

た。その兩說が漫錄に記載されて、馬琴のところにも廻されて來た。當時馬琴は玩物喪志の格言に愧ぢて、古器物の考證詮索などを屑しとせざる時代だつたが、時の興にふと思ひつくまゝ、兩氏の解說以外に異說を漫錄に書き添へた。けんどんの文字は慳飩とするが正しく、蕎麥器のかたちが書物箱に似たるゆゑに慳と書き、初めは溫飩を主として賣つたゆゑに飩と書すといふ、これも又馬琴らしい拘泥した說明であつた。それだけなれば問題にもならなかつたらうが、馬琴は例の實學者ぶりの氣質から、美成等の用なき古器物玩弄を輕く諷するこゝろもあつたらう。その結末に、「そもこのあげつらひは、三聖の糟を嘗めたりと云ふ譬には似るべくもあらざめれど、わきて用なきくさはひも、耽奇の上にはゆるすべきか。とばかりにして二百歲の翁にあふてたゞさずば、誰かよく當否を定めん。果は諸君子の笑草にせられん外あらじかし。」と書いて、笑語のうちにこの論爭を切り上げるつもりであつた。然るにその大人顏した揶揄をふくめる言葉が、研究癖の旺盛にして氣鋭の美成には、甚しく不快に響いたと見える。美成はやゝ氣色をはげましたる態度にて、自說の正しき所以を一層深く書足して馬琴の說を更らに辯駁した上に、その揶揄に對しては、「さてのたまへる事なれど、二百歲の翁あらば、この當否を定めんともいはれず。今の世のことの今知れざるものいと多かり。いづれにもあれ、これらはわきて用なき事の如くなれど、小事も必ず名を正すは聖門の旨とする所にして、後學のものゆるかせにすべからず。且つ子は莫逆の友と思へばこそかゝるよしなきひがごともいへ、ゆめなじるにあらず。疑を質すは學者の常とする事にて、切磋は朋友の道ならずや。心置なく示し給へね。猶心にかゝる事のあらば、又も問ひ侍るべし。」と銳く詰問して、靑年らしい客氣と忿恨の情を洩らしてゐる。世事に老けたる屋代輪池は、論戰の發頭者でありながら、この頃からふッつり口を噤ぢて、全く傍觀者の地位に立つてしまつた。

後來のものだが「金杉日記」を初めその他の隨筆、また恩師たる小山田與淸や舊友等に罵詈讒謗を極めてゐる「海錄」の記事などを考へ合せても、美成は可成に我執ふかく、自信强く、先輩を恐れず、鬪爭心裡のはげしい人であつたらしく、彼が晩年の拓落もこの狷介なる性格に致されてゐると云ふ諸家の說は信じられる。殊に馬琴との論爭は、彼が二十七歲の血氣時代である。松の屋の擁書樓に通學してその誘掖をうけ、下谷長者町の藥種商長崎屋新次郞から新兵衞となり、美成となり、その新進俊銳の學才と熱心なる研究とは漸く識者の間に認められて來た彼の得意時代である。彼の言說に圭角多く、自信にまかせて

邁進したのも、まことに已を得ぬ次第であつたらう。

馬琴は當年五十七歳であつた。たゞ小說作家として當代第一の大家たるのみならず、獨學とは云へ學術の進境は彼みづからも認め、儒學實學をもつて既に儕輩の間にも高く標置されてゐる時であつた。後進の美成輩に、かゝる難詰をうけて沈默するは、彼の自尊心も傷けたであらうし、美成が餘りに狎々しく自分を友人あつかひして、切嗟は朋友の道ならずやとか予は莫逆の友と思へばこそとか、對等らしい言辭をもちひて來るのが、侮蔑のやうにも感じたであらう。馬琴もまたやゝ興奮して、美成說に辯駁してゐる。それは辯論約言と題して、普通原稿紙三十枚近い書簡であつて、自說の根據を示すために數十部の古書を引證して堂々たる論文をなしてゐる。正面から十分に美成の所說を粉碎する氣組らしく、冒頭には「予は壯年より老聃不爭の言を甘ひて、人と爭ふことを好ます。一時の浸戲の雜記なる者を顧念して、又何をか云ふべき。即ちこの故をもて排擠たれど免されず。猶其答を聞かんといはる。答へるときは罪をまさん。又答へずば謗たりとせられん。悔といへ共駟も及ばず。實に已ことを得ざるの義也。」と書き出して、飽くまでも冷靜なる態度をつとめながらも、言語が熱するに及んでは、次第に平心の權衡を失つて感情に趨り、美成が一言一句の微細をも論破しなければゐられぬやうに、極所まで敵を追究してゐる。わたしは、この點に彼馬琴の弱くして正直なる性質を探らなければならないと思ふ。

極端に他人のおもはくを恐れて、始終いら／＼してゐる彼は、一毫も餘さずに自分の心持を人に傳へて、他人が心から甘服するさまを見なければ、如何にしても安心のならないところに、凡俗人らしい彼の弱さがあつた。彼が川合川の下女の言葉づかひを匡正するために、萬葉集の語源まで持出して二日がゝりに息をきらしてゐたと云はれる笑話も、彼は決して下女の惡を憎んで執拗に苦しめたのではない。下女が煩さげに面膨らして聞いてゐるのを見ると、その少女の意嚮までが心の荷になつて、自分の訓誡の正しさをとつくりと得心させなければゐられないところに、彼の性格の弱さがあつた。その明かなる實例は彼の書簡集全部にあらはれてゐると思ふ。彼は諸國の友人から、この頃は手紙が間遠いとか返事が遲れるとか一言の催促をうけても、彼は必ず狼狽して十枚十五枚にも及ぶ言譯を書き送つてゐる。前に引いたお百宗伯の病狀を報ずる文も然うだし、その前の宗伯別居の事情を細々と牧之に報ずる手紙もそれであるが、彼は友人等の所思を恐れて、家族大病とか普請中のためとか云ふ簡單なる疎遠辯解の文句だけでは、對者その人よりも

自分自身のこゝろが落着けなかつた。病人の場合には何月何日より發病して、如何なる病狀に進み如何なる經過をとり、醫者は誰にて何と診斷し、彼は然かなし、此は斯くなし、斯くして、斯くして、事實の進行を有りのまゝに縷述して、對者いかに我を疑ふともその餘地なきまでに辯解の言葉をつゞけなければ、彼はどうしても自分を滿足させることが出來ない人であつた。彼が世に執拗と云はれる點はこゝにある。

伊勢の殿村篠齋は馬琴第一の愛讀者で、馬琴の新著が出るたびに飛脚便にて眞先に書籍を江戸から取寄せて、詳細なる批評を著者に書き送るのが例になつてゐた。馬琴もそれを甚だ心待ちにして、失明後も始終お路に書面を認めさせて批評を催促してゐる。そしてその批評にまた微細なる反駁論を書いて、著者としての苦心や用意を周到に說明してゐる。中にはやゝ强辯に過ぎるかと思はれる點もあるけれど、わたしどもは彼がいかにその著作の上に微妙なる注意をはらつて、一節一行にも多大の用意があつたかに驚かされる點が多い。藤井乙男博士はこの往復の書簡を讀んで、『しかし一場も得意の段はない、といひたから篠齋の批評に對して一々反駁の態度を示したのは、乃ち馬琴の馬琴たる所以で、いつもやかましく批評を督促しながら、それが來ると、ヤレ見方がわるいの、ソレ作者の本意がわからぬのと小言を並べ立てる。よくよく參つた時で「近頃は御評大分御上達」といふやうな御挨拶。篠齋も再三の往復に草臥れて、「屈伏々々」と手短く切上げやうとすると、これはけしからぬ。一體屈伏と云ふ文字は、心中には不服でも相手の威力に壓迫されて已むを得ず服從する意味である。親友の間に屈服といふやうな事はあるべきでない、どこまでも來い、どこまでも御相手仕らうといふのであるから、大抵の者は引下らざるを得ない。剛情我慢は厭ふべきであるが、幇間肌の戲作者に伍して、これだけの自信と威厳を以て立つたのは、此翁の偉大なる所以である。』と批評してゐるのは、一應尤もらしい議論に聞えるけれど、馬琴といふ人間そのものに徹底した眞の觀察とは受けられない。再三の辯論に疲れて對者が體よく切り上げて、「屈服々々」とむかふを向いて行つてしまふのを見た時の、初めて心づいた馬琴の狼狽、寂しさ、親友の心を傷けはせぬかとの惧れ、それ等の復雜なる心理の表顯を彼の書簡の行間に見出されなかつたのを遺憾に思ふ。と云つても、わたしとても彼の事々に露出する執拗性を認めぬのではない。然しながら深く觀察すると、彼のこの特質は多くの場合、彼の生來の臆病さと嘘を吐けない平凡人らしい正直さとから來てゐることも併せ認めなければならない。

山崎美成との絶交事情に復へる。元來馬琴は、美成の學識にさまで敬服してゐなかつた。雜學雜讀の博識ぶりは認めてゐるが、その研究に體系なく且つ獨創の見識なき點に於て、雜學者北靜廬（屋根屋三右衛門とも云ふ。狂歌師）と同樣、「たゞ一向の讀書人にて、人の爲めに本箱がはりは重寶に候へ共。」と除で批評してゐるほどで、寧ろ輕侮の念をもつて美成を見てゐた。その美成が近頃屋代輪池などを背景としてめき／＼と文事に活躍し、新進の鋭氣にまかせてやゝ傍若無人のさまあるのが、馬琴には豫て苦々しく見えてゐた。（美成が舊師の與淸をすてゝ、輪池の門下生になつたのはこの頃らしく平田篤胤は書いてゐる）訥辯にして社交べたの馬琴は耽奇會の會席などでもなるべく新進者に花をもたせて、始終退一歩の工夫を怠らず、いつも一隅に默々たるところから、美成等の目には大家與しやすしの感もあつたであらう。次第にその分際を忘れて、陵を浸し伺を探らうとする態度があつたかに思はれる。馬琴が主唱者となつて耽奇會の同人間に兎園小說の別會を獨立させたのも、一つは美成等の跋扈を惜んで衝突を避けるところであつたと云はれるから、何時の時代にもありがちな老大家と新進者との感情の背馳は、疾に兩者間に認められてゐたのだらう。たゞ輪池等はそれを巧に操縱し、馬琴は正直に澁面をつくつてゐた。

前にも云ふ如く、けんどん名稱の釋義について、わたしは美成の簡明なる說明に隨ふものである。馬琴がいかに考證をつくし典據を羅列しても、それは徒らに文字面に拘泥する僻說として、到底贊成出來ないけれど、彼が長々と筆紙を費して、「飩論約言」を草するに至つた心持だけはわかるやうに思ふ。彼はその緒言にも書いたる如く、後輩美成等を相手にして論じるは好むところではないが、「答へざれば諾たりとなされん。」と云ふこの一語が、彼には何よりも苦しき痛點であつた。俗人の俗情に囚はれやすく、全然超越性を缺いてゐる彼の性格には、敵を低しと見て陣を高所に退くるなど云ふ雅懐は到底望まれない。このまゝ沈默すれば言葉が屈したか、或は妄言をもつて誣ひたる者と敵に手を叩かせる。その當坐のさげすみ嘲笑が、女々しい彼には耐へ得られぬ苦痛であつた。彼がいつになき興奮的なる態度をもつて論敵に對つたのは、一擧に美成說を粉碎するところであつたらう。

然しながら、例へ謬說にしろ學問上の論爭である。堂々と自說を主張するだけならば、學徒として何等の疚しさを見ない筈なのだが、馬琴ほど浸たる水に溺れたがる人はない。初めは慣

んでゐても、言葉が熱し感情が高まつて來ると、われからわが所說にわなゝき狼狽して、論旨も私情も大際に混亂して來て、殆んと收集がつかなくなるところに、彼の平凡さと謐のとれない正直さがある。議論を議論としてさつさと片付けて、水の澄んでゐるうちに綺麗に引揚げ、二三分を敵にのこすやうな巧智は、全く彼に缺如してゐる。爭論べたの馬琴は、いつも未練らしく最後まで敵の前袋に食ひ下つて、その手を放すことが出來ないために、結局は自分から水を掻き濁して、その汚泥を自身に浴びるやうになる。この美成爭論などもやはりその一例で、學說の主張だけで退けば好いのに、興奮するまゝ、筆の迴るまゝに引摺られて、最後には甚だ拙劣なる愚痴に墮してゐる。自分が彼に與ふる書簡には美成を先醒と敬稱してゐるのに 美成から來る文面には、馬琴子と書いて同輩以下に見てゐるとか、貴下は自分を莫逆の友人と稱して親近を示してゐるけれど、自分は二十年來世上の交際を絕つて、曾て一度も貴下を　と思つたことがないとか、議論を忘れて愚痴の言葉を繰返してゐる。それも簡單に輕妙に不平を切上げればまだしもであるけれど、馬琴には到底それが出來ない。正面から諄々と敬稱論、友人論、先生と予との區別を講說して、美成の急所を突き得るものと思つてゐる。

「又予が如きものをも、人謹て書牘に先生と稱するものあれば、予も亦必す其人を先生とす。是其敬をかへすの義也。予が用心すべてかくの如し。然るに予がけんどんの評記におゐて、足下を稱して先醒とす。これ他なし、偏に足下の說を拙しとせさるの意をあかす也。されども足下にはよくおもはずや、予を貶して子と稱せり、其往來回報今の禮節をもて見れば、さながら師弟の如し。などてみづから尊大なることかくの如くなるや。是しかしながら、我が游德の致す所、足下の故にはあらずかし、とにも角にもわが心の通ぜざるを歎くのあまり言のこゝに及べるのみ。」と、あるのは、彼が呼稱に對する忿懣の一節を引いたのである。「かゝる瑣々たる事をしても名を正すは、聖門の旨とする所、後學の忽にすべからず云々といわるゝは、是金玉弦にて割雞牛刀の類にあらずや。かのけんどんと唱へたものは、近世市井の賣物也。よしやその名目を考へ得たりとも、聖門名教の爲にはならず。又考あやまりたればとて、名敎の害にもならず、(中略) 予が固陋寡聞なる、足下の該博强記にくらぶれば、雲壤の差ありぬべし。しかれども予は、足下の齡におなじきむすめさへもてるもの也、論じて足下が勝たりとも、人もほめじ。われも又手がらなりとは思はぬものを、いかでか長別功然をもて爭ひを好んや、只足下を足下として愛する心の已むこ

とを得ず、いさめにかへたるわざなれども、はかりしよしの拙きゆへにや、燃ゆる薪に油をそへて、遂に足下の怒りにあへり。かゝれば何をかいふべき。わが誤りを悔るの外なし。足下はなほいつ迄も慳貪の說を持し給へ。予は魯鈍をよしとおもへど、名づけはじめし人に遭ねば、經驗當否は終に得がたし。あなおぞましの老のくりごとに、えうなき筆を費しぬ。げにこと多き世にこそ有けれ。」とあるもその長文の一節に過ぎない。

この辯論約言には、流石に美成も意外の感があつたらう。日頃沈默の馬琴が、斯くまで激昂することは豫想しなかつたと同時に、瑣事に齷齪してわが體面の維持に汲々乎たる老大家の固陋さを憫笑せずにゐられなかつたと思ふ。寄らず觸らずに二三の書目を列記して、必ずしも自家の主張の臆斷にあらざる旨を告げて、好い加減に論爭を中止しやうとしてゐる。且つ馬琴を子と呼んだのは決して輕侮の意味ではなく、論語義疏に『子是有德之稱、古者稱師爲子也。』とある註釋をひいて、馬琴の怒りを慰めやうとしてゐる。尤もその謙遜せる文字のうちにも、自信を枉げざる不屈の剛愎さがほの見えて、美成の性格を暗示してゐるけれど、兎も角美成は怠狀を出して馬琴の激怒を緩めやうとしてゐる。然し、忍耐してゐるうちならば格別、怒聲を外に顯はした以上は、事を極めずに謂れなく中途に妥協の出來ない馬琴、妥協すれば今までの憤怒が虛僞になるやうに自らに恥を感ずる馬琴としては、もう一片の實意なき謝罪狀ぐらゐで、その激憤をおさめることが出來なくなつてゐた。一度怒りを顯はした上は、その怒りのわが直情なる理由と、何故に怒りしやの眞相を、徹底的に對者に知らさないでは、自分のこゝろの落着きが何うしても得られなかつた。そして最早やけんどん名稱などは問題ではなかつた。彼は先づ最初に、「子といふことは尊稱のよしにて、論語義疏並に二程全書なる程子の言を引いて教訓せらる。予は淺學なれどもかばかりの事は知れり。」と美成の辯解說を一蹴して、滔々長廣舌をふるつて、唐山姬周の五爵論から初めて、後代に下るに從つて子字の本義を失つて、普通對等者間の稱呼となつた經過を明かにし、また美成が自分を老兒と呼ぶのも、古代支那の敬老の本義を失つて、現代ではむしろ輕侮の意味とより外に開かれないとまで極論して、憤慨を極めてゐる。それでもまだ腹が癒へぬと見えて、更に語をつゞけて、「足下の博識高才もて、かばかりの事に心づき給はぬにやと思へしかば、いひにくき事なるを云々といひし事、萬みな朋友の信より出たる諷諫の微言也けり。いと憚りあることなれども、足下の辭として、動もすれば席上にて人をやりこむる事し

ばしば也。足下は心づかずやいふらん。予も二三度やりこめられしことあり。しかれども予は爭ひを好まず、いふべきこと猶ずべきことありても、さやうの時には閉口しておりし故、足下は心づき給はぬならん。もし足下の博識をもて、謙退を旨とし給はゞ、才德兼備の君子ならんと思ひつゝ、足下を愛する心から、人は得いはぬことまでをいひし也。かくて今勸解の備のみならず、近頃足下の動靜云爲に心をつけて見れば、去冬より當春の北峰子にあらず、一段の光耀をまし給へしを竊に歡び思ふのみ。愚者にも一得あり。賢者も一失なからんや。過を改むる事は君子のおそるゝ所なり。足下元よりあやまちあるにはあるべからざれど、予がひが目にはしかおもひしなり。」

美成遺稿の「けんどん爭ひ」は如上の書面にて終局してゐる。日附は明瞭ではないが、恐らく六七月頃の復書であらう。若し馬琴美成を文政八年季冬にかけるとすれば、或はこの後兩方のこゝろが和いで、一二度の面會はあつたかとも思ふけれど、美成が未練らしくこの往復書の後に寫本洞房語園や北女閭起原をひいて、自說の正確を書加へて卷を綴込んでゐるところを見ると、これが兩者絕交の最大源因であつたらうと推測される。

夜話　その第四

また某氏著某書に斯く云ふ。『馬琴の人物についてもう一つ加へたきは、彼れの性質の微溫的なることである。彼れは德に進むにも不德に進むにも、自分の事にも他人の事にも、積極的にも消極的にも、熱情を注ぐことが出來なかつた。彼は注意が細かく、道德感が鋭かつた故に、自他の善不善について鋭く感じたではあらう。しかしながら他人の善に感じても飽く迄之に倣ふ熱心がなく、他人の惡を憤つても飽くまで之れを懲らす勇氣がなかつた。自家の不善を知つても之れを改め通す勇氣がなく、自家の善を知つても、撓まずに之れを養ひ成す熱心がなかつた。彼は米つき男の違約を怒つても之れを叱責矯正する熱誠がなく、人の合羽を着て坐敷に上つたのを怒つても、之れを面責し若くは諷誡する勇氣はなくして、唯だ日記の文字上に餘憤を洩らす丈であつた。彼れのやり方は多く蔭辨慶であつた。』著者は馬琴の性格の特徵を「微溫的」と云ふ一語に取纏めて、得意の發見でもあるかの如く力說してゐる。これは恐らく篁村氏の「日記抄」から左記の記事などを讀んで、斷定したことだらう。

「一、山科宗仙、雨天の節は、長合羽着用坐敷へ着坐、二三日と

今日と兩度也。尤非禮の爲體、言語同斷也。」

(天保五年四月廿一日)

「一、土屋桂助、岩井政之助、暑中見舞に來る。政之助袴着用せず失禮也。」

(天保十五年六月十日)

「一、米つき男今朝可參よしかたく約束に付、早飯燒せ待居候所不來也。毎度如斯約束ちがひ支度相違す。不便の至り也。」

(天保十年十一月三日)

篁村氏の「日記抄」は馬琴研究家に多大の資料を與ふる點に於て、後學の感謝すべき良書である。殊に同日記燒失の今日に於ては、貴重すべき好書である。然しながら何を云ふても「日記抄」は抄出書に過ぎない。篁村氏は如何なる標準をもつて該書に日記を節錄したかは知らないけれど、偶ま抄出されてゐる二三の箇條を讀んで、一箇の人間の性格をしかぐ＼と斷定するは危險この上もないことゝ思ふ。(その同じ意味は曾て蘇峯先生が、和田博士の馬琴日記出版に際して國民新聞に論じてゐられた)わたしは自分の馬琴觀察を述べるのが目的であるから、一一他人の評論にまでかゝづらつて、煩さく辯說を弄する必要はないが、前掲の論評のうちに甚だわが意を得たりと思はるゝ一節があるので、わざとこゝに摘記した次第である。それは外でもない。馬琴は他人の傲慢無禮に對しても、これを面責膺懲するの勇氣がなく、いつも日記の文字上に餘憤を洩してゐると云ふ一節があつたためである。馬琴が自己の悔悟遷善の勇氣があつたかなかつたか、わたしは這の學者とゝもに論じやうとは思はぬからその點は云はぬ。

わたしは遙か前のところで、馬琴の特性の一つとして、彼の他人と爭ひ得ぬ弱さについて一言して置いたと思ふ。今玆にそれを述べる時が來た。各種の馬琴日記を參照すると、前記の米つき或は無禮者に對する記事は、殆んど枚擧に遑なきほどの實例を見る。敢て他人のみではない、渥美家に嫁した娘が先祖の逮夜にさんばら髮で來たとか、婿の清右衛門にその妻(馬琴の娘)へとて襲を與へたのに謝禮を述べなかつたとか、その近親者に對しても始終不滿を抱いて、必ず餘憤を日記に洩らしてゐる。殊にお路の實家たる土岐村元立の家族に對しては、生活意識さへも別にしてゐるかと思ふほど、毎々馬琴を憤せてゐる。正月の年始に無刀略服にて訪問したり、馬琴の多忙を知りつゝ用なき世間話に長坐したり、時には春畫の卷物を持參して馬琴に箱書を賴んだりして、馬琴を迷惑がらせてゐる。で、馬琴はなるべく戲劇著作を口實にして面會を避けてゐるか、元立

よりも一層馬琴を苦しめてゐるのはその妻の土岐村老尼である。この老尼は江戸人らしい甚だ暢氣な氣散人で、麻布から出て來ると必ず五日六日は瀧澤家に逗留して貸金の取集めに方々歩いてゐる。それが度々の上に、例へ瀧澤家に大病人がある場合でも何んでもかまはず、自分の用のはてるまでは滯在する。馬琴はその老婆の卑猥な談話や饒舌を厭ふて、日記には絶えず不平を洩らしてゐるけれど、面と向いては一言も不快をもらしたことがない。また、お路にはおしづとて、芝口田町山田宗之助の妻となれる姉がある。その長女のお定とて十九歳になる娘が、天保三年の七月に情夫とゝもに家を出奔した。暫くの間その消息も知れなかつたが、廿日ほど過ぎて神奈川宿に隱れゐることが知れて、やつと連れ戻して來た。然し世間の手前出奔娘をそのまゝ親の家にも置かれないので、大川端の安藤と云ふ旗本隱居に奉公させることにして、或日土岐村老尼はその娘を馬琴の家につれて來た。瀧澤の家を中宿にして奉公に出すつもりなのである。平常風敎を重んじて誨淫を惡むこと蛇蝎の如き馬琴にしては、その迷惑さが察しられる。それでも馬琴は蔭でぶつく\/呟くのみにて、出奔娘の宿泊を斷りかねてゐる。滯在中も娘はさまで愧る色なく、お路の衣類を借りたり何かして、平氣で居たやうに見える。馬琴がいかに苦々しくそれ等を見てゐたかは、その九月一日の日記に、「八時半頃、土岐村老尼來る。手みやげ持參。明日お定事、松島丁ら通り七千石安藤内藏之助（彦四郎といふか）女隱居附に移り送り參り、昨夜は他へ止宿のよし。今夕より此方へ止宿。多辯喋々たり、厭ふべし。お定奉公口最初より大川端安藤どのゝよしに付、安藤對馬守殿なるべしと思ひたる處、旗本の安藤彦四郎のよし也。」と書いて、奉公口の大名家でないところに劬つと溜飲をさげてゐる。こゝにも馬琴の馬琴らしさを見るやうに思ふ。

「一、家内留守中、日々參候野菜賣罷越候ニ付、予玄關え出、白瓜値段付け居候内、隣家常貞老妻垣越しに貌を出し、垣越に大根をかひ取り、右代錢八文、此方玄關前へ投わたし候。非禮傍若無人のいたし方ニ付、予たへがたく、右野菜うりを罵りいましめ候處わびニ付、尙又向後をいましめ用捨に及畢。」

（天保二年八月十二日）

わたしは何日も彼の日記を讀んでこの條下に及ぶと、思はずクス\/と笑ひたくなる。若し現場に居合はせて野菜賣の叱られるのを見て笑つたりしたら、どんなに彼を憤らせるだらうとも考へて見る。そして、また可笑しくなる。然し、やはり笑つた

後には、彼のために言ひ知らぬ寂しい氣持になる。

この常貞は、明神下の彼の隣家に住む男で、藏前どりの小祿なる御家人でもあるらしい。姓を伊東と呼び、彼の日記には始終出て來る。如何なる理由か馬琴とは甚だ中が惡く、名が日記に出るたび必ず小兒らしい喧嘩をしてゐる。同じ隣家でも地主の杉浦や橋本とは節句の贈答などもあつて、世間並の交際をしてゐるのに、この常貞だけは互に目の讐にして、小兒がその仇を憎むやうに憎み合つてゐる。この八百屋の騷ぎあつて後百日ほどして、この伊東の老妻が病死したとて、お路が近所の噂に聞いて來て馬琴に報告してゐる。然し馬琴は頑固に意地をはつて、家人を弔問にもやらなければ町づきあひの葬式にも列してゐない。そして日記には「常貞より此方へしらせに不」及候間、弔辭にも不」及。平日一向に交りなきによりて成。」と强がつてゐるけれど、何んとなく心の濟まぬ樣子を見せてゐる。

「一、今朝四時前、うへ木屋治右衞門並に同人弟金次郎悴鐵某、三人來る。（中略）隣家常貞より使を以、うへ木屋參候樣子に御坐候間、柳の枝伐らせくれ候樣申來る。常貞自分勝手、萬事言語同斷に候へ共、いひ爭ひも無益に付、平生此方よりは何事も不」言。今日も承知候旨、宗伯返答致すと云。依」之柳の枝伐透させ畢ぬ。」（天保二年七月二十一日）

馬琴が常貞老妻の無作法を怒つて、野菜賣にその餘沫を浴せたる近因とも見るべきは、同日より二十日ほど以前のこの記事なども關係してゐるだらう。

この柳は馬琴の玄關前にあつて、幾度か常貞との問題を惹起してゐる木である。植木屋の鋏の音を聞きつけると、即坐に文句を持込んで來た常貞の態度には、馬琴も可也むつとしたが、人に弱い馬琴も宗伯も面と向いて人と爭ふことは出來ない。やはり日記に餘憤を洩らして、先方の言葉に從ふより外はない。そればかりなら好いが、その八日過ぎの七月二十八日には、常貞の飼猫のために瀧澤家では大騷ぎをしてゐる。同日の夕刻常貞の飼猫が馬琴の書齋隣りの謂ゆる「巽三疊」から入り込んで、のさ／＼と天井に上つたやうな形跡がある。日頃動物ぎらひの馬琴の性質もあるけれど、常貞の家の猫と云ふので大騷動になつた。親子して手燭を翳してそこゝと探し廻り、天井に上つたり羽目板をはがしたりして追ひ出すけれど、猫の姿が見えない。「余並に宗伯立出見候へども闇夜にて詳ならず。入り候處も不」知、せんかたなく打捨置候處、五時頃內より羽子をはなし出去る。夕方臺所より天井へ登り、出どころを失ひ、物置邊の羽目を崩し出て候なるべし。」と日記に記けて、不安さうにその夜を明かし、翌朝は早曉から宗伯に檢分させてゐる。「日

朝、宗伯昨日之猫出候處を見候はん爲め、はしごをかけ處々見分いたし候處、物置上の羽目をはなし有之、臺所より天井へ登り出所を失ひ、内より右の羽目をはがし出候なるべし。即刻宗伯修復いたし、右之□子打つけおく。」と翌日の日記にまで書いて、親子がほつとして汗を拭つてゐる光景に、わたしは何時も涙含ましいこゝろになる。

一、隣家伊藤常貞方より、此方門前脇へ死狗捨候よしに付、今夕取片付候樣、門前脇辻鶴之ものへ申付おく

（七月十二日）

一、隣家常貞方にて、西の方へ座敷建足候樣子に候處、ひさしのたる木口、此方へ五寸餘出張、境内へ雨だり落可申樣子に付、此段申入、きらせ可申哉と宗伯申之。予一覽。實に不相濟事に候へ共、先づ／＼其儘差置可然旨申談じ、不及其儀也。

一、伊藤常貞より僕を以、今日うらかべかへし候に付、職人入込候間、玄關わき少々の間、借用いたし度旨屆來る。承知の趣答に及ぶ。

（九月二十八日）

一、隣家伊藤常貞以僕、玄關脇垣際の小柳、枝出ばり邪魔に成候間、枝切候哉、此方にてきらせ申可哉と申來る。甚失禮の申分に候へ共、使に付枝折候事、其方にたのむに、追て此方にて始末可致旨、返事申遣はす。是迄一兩度右之趣申來候節、或は枝を切り、或はからげ候へ共、その枝のび、少々隣へ枝出候を、むづかしく申來る。然る處、先日常貞方にて、東之方へ立候家、犬走りなく、垣際へ引付候に付、かべぬり候節、並したみ直候節、此方へ職人無斷入込せ候間、咎候へば、其後屆有之。（註記。前項參照）其意に任せ候處、右之始末に付、地主へ及内談、右之家一尺切らせ、其上にて此方柳ぬき捨可申存候へ共、今日杉浦家々内不殘、他行之樣子に付、明日お百を可遣存、先そのまゝにいたしおく也。然處、今夕常貞地主（註記、杉浦家）へ飛出、己が理と存じ、何やらん讒訴に及び候樣子聞えたり。實に愚痴のたはけもの、年に似合たる義歟。

（九月　八日）

一、今朝お百を以、杉浦方へ遣し、昨夜常貞不始末之趣、内々申入おく。大意は前にしるすが如し。此方柳ぬき捨可申旨、御定法の通り常貞方の新屋も一尺切らせくれ候樣申遣す。

（九月　九日）

一、大工寅吉來る。作事出精いたし、來る十三日迄に仕終り候はゞ、賞人分餘計に作料可遣旨談じおく。（中略）地主杉浦より、大工寅吉此方仕事仕舞候はゞ、一日頼申度よ

し申付、其段寅吉へ申聞おく。且常貞一義、杉浦より常貞呼ばせ、其旨可ニ申聞一旨被レ申由、お百告レ之、依レ之打任せ置く。

（同月　同日）

一、晝前杉浦老母來。昨日お百を以申入候伊藤常貞一件、則常貞方へ申通候處、心得違に候間、何分詫くれ候様申趣被レ申レ之。右應答之内大田九吉來る。依レ之晤談不果して止。

（九月　十日）

一、隣家伊藤常貞方より、先々月中普請ごみ、此方門前脇往來へ捨、犬糞も多くあり。今日人足に申付、ほりうづめさせおく。已來同所へごみ捨ざる様にいたし度旨、地主へ可ニ申通一旨、新吾（註、人足の名）へ申付置く。

（十二月十一日）

以上は文政十一年の戊子日記、七月より十二月までのたゞ半年間の記事から目につくまゝに伊藤常貞との關係を記載したに過ぎない。その外他の日記を見れば、常貞は始終馬琴の家に仇して、女犬を追ひ込んだり、門に泥を投げたり、煤掃の塵埃を掃出したり、ほとんど兒戲にひとしい惡戲をして馬琴を苦しめてゐる。杏の枝をきれの、葡萄の枯葉を拾ひのと始終苦情を持ち込んでゐるのは、常貞の方でも意地にかゝつてゐると見える。その源因ははつきり分らないけれど、馬琴が大名醫者の隱居ぶつて平常しちくどいことを云つてゐるのを、高慢にも見え、偏屈にも見えて、貧乏御家人の隣人には苦々しく見えて、癪にさはるのではないかと思ふ。高が戲作者風情がと云ふ意味もあつたらう。戊子日記だけ記事では爭論が馬琴の勝になつてゐるけれど、他の場合の喧嘩は始終馬琴の敗北になつてゐる。日記には忿怨痛切に書下しながらも、いつも先方の苦情通りにならないことがない。そして日常ひどく常貞を恐れてゐて、此方から直接に抗議を申込むなど云ふ場合は殆んど見られないやうである。

わたしはこゝに來て、馬琴自から總ゆる機會に云つてゐる、「予は壯年より老聃不爭の言を甘ひて、人と爭ふことを好まず。」と云ふ言葉を、或る程度まで信じられると思ふ。無論彼に老壯哲學の影響あつて不爭の人となつたとは思はないが、彼が如何なる場合にも他人と爭ひ得ない弱者であつたとは云はれると思ふ。それにも拘らず彼が今日まで、さも執拗なる爭鬪心裡に囚はれて、傲岸固執の人と見られてゐるのは、彼の自記なる日記や書簡集に、いつもくどくどしい怨情の語を洩してあるためだと思ふ。然しそれ等は甚だ到らぬ觀察であつて、わたしは寧ろこれ等の記事は、彼自身の窒息から救はれる唯一の窓であ

つたと思ふ。「作者部類」の最後に、二十年前大阪の某學徒にうけた妄評に對して諄々として抗辯の辭を書加へてゐるのを例證として、大抵の馬琴傳は拗戾にして敵に倦まざる彼の特性を說明しやうとしてゐる。しかしわたしはさうは思はぬ。他の批難攻擊に對して正面から堂々と爭ふことの出來ない臆病者の馬琴には、自らの筆紙にてつくれる唯一の窓に立つて外氣を呼吸しなければ、彼の心も落着かなかつたし、また窒息しさうになつた。作者部類の二十年後の辯解の如きは、彼がたまたまその時になつて初めて批評家の評文を讀んだためであつて、二十年間舊怨を忘れかねてゐたのではない。またその丸甚一條に對する辯明の如きも、彼にしては寔に已むを得ぬ次第であつた。謹愼第一をもつて自らゆるしてゐる馬琴が、誣告によつて法廷の訊問をうけるなどゝは、彼の終生を通じて拭ふべからざる恥辱であつた。彼にしては到底默して過ぎる問題ではなかつた。

彼は著作より以上にその日記を愛して、失明後もなほつとめて、一日も長く自筆の記事を殘さうとしたのも、やはりそのころであつたらう。名聞を願はず虛榮を惜み、「よくもあしくもありの儘に見られたし。」と冀つてゐた彼には、自分の交際ぎらひと世間べたのために、往々にしてあらぬ非難を聞き、思ひもかけぬ嘲を聞く度に、彼の臆病なこゝろは動搖してやまなかつた。また餘り律氣眞四角に凝り固つてゐる彼には、世間の人々われに對してする無意識の疎漏をも總てわれを侮りわれを凌ぐやうに感じられてならない。輪池が書籍を返すに帛紗に包まないのを非禮と感じたり、關源藏が馬琴の草稿に朱墨をおとしたりした無禮を怒つてゐるのは、彼自身が日常の用意が嚴重に過ぎて、借用の書籍は必ず風呂敷に包んで失火の場合の危急に備ひ、また本ばさみの宛板をつくつて他人の書籍を損さすまいとしてゐる、馬琴自身の細微なる注意があつたゝめである。それ等の壓迫感から解放されて、やゝ自由に外氣の呼吸をたすけ得るのはたゞこの窓、日記と遠國の友人に書き送る書狀のほかになかつた。だから彼は、馬鹿々々しいほど敍述の詳細をつくして、怒るべきは怒り怨むべきは怨み、心中に鬱積する感情のまゝに吐露しなければ、彼自身の心が救はれなかつた。そして、兎に角一度思ふまゝを筆紙に托すれば、後はほつとしてゐるやうな小兒らしさもないではない。それは彼の雜記日記と書簡集を精確に比較して見るとわかる。日記なり雜記なりに一度感情を披瀝した後の文面は、同じ事件でも感情が融和されてゐて、自己に對してもやゝ批評的な態度になり得るらしく見える。

彼の書簡についても一言して置きたい。例へば牧之などに與ふる書面を見ても、その文辭があまりに卑屈に過ぎて、寧ろ諂ふやうにさへ見ゆるところがある。そんな點からして、馬琴は遠國の富者に媚びてその扶助をうけてゐるとて、「又いはれなくとも、懇意の人實情を以、わが衣食の資にとておくられ候物は、忝く存、歡で受申候。只々世塵をまぬかれがたきは、妻子がほだしとなる故に、拘る事のみに御座候。」とある文句や、同じ頃に方銀一箇の禮狀があるのを證として得意さうに指摘する人もある。これは金錢と馬琴との條下に明記して置かなければならないが、わたしの今日まで調査したところでは、それ等は甚だしき無稽の誣言であつて、却て反對に、彼は終生その富める親友等から何等金錢の援助をうけなかつた方に歴然たる確證を列擧することが出來る。偶ま前記のやうな書狀が今日に殘つたのは、當時の習慣として節句祝義の友人間の贈答には、金錢をやり取りして怪しまなかつたこと〻。牧之は遠隔の人ゆゑ物品よりは銀貨を送るを便宜としたゝめである。殊にこの時馬琴は牧之の依賴やみがたく、牧之の著書「北越雪譜」の原稿を校閲中なので、相當の報酬があるべき筈なのだが、事實は却て、牧之から土地の産物や寒曝粉などを時々送つてゐるに過ぎない。前文の如きは、その前に馬琴が、某大名が理由なきに自分を愛して扶持など與へんとするゆゑ、自分は斷然それを謝絕したと誇らしく書いた文句に氣がさして、語氣を和らげやうとして書いてゐる文句なのである。

然し、さうは云つても、馬琴の人に與ふる書狀は、餘りに恭敬に過ぎてゐる。同じ牧之に與へて、「御地風俗十年毎に一變いたし候よし、何國もおなじ事と被存候、且御地も多くは身上よはりゆき候處、貴家樣のみ昔にかはらせ給ふことなく御繁昌のよし、何より以て祝すべく歡ぶべき事に奉存候、是併し貴家の御篤行を御先靈並に土神の守らせ給ふ故なるべし、俗に仁も德のあまりと申如く何事も家産衰へ候ては志を遂げ難し、只驕をはぶき家風を守り、子孫をはげまし家業を第一にする外あるべからず、この四ヶ條、貴兄に於て一事も欠けたる所なき故に、左もありなん、うらやましき限りに御座候、且御家の七十年に及びたるを延て更め給はざるも(中略)君は人の爲めに勞をいとひ給はず、諸出入事和睦のとり結び、萬事身にひきうけつゝ御立入被成候よし、これ則仁者の所行也、且俠氣も帶び給ふ所もあるべし、俠は任俠と熟して人の勞にかはるもの、慾の爲にせざれば是則任俠也、愚が毎度の稱賛、決して諂申すにあらず。」とまで書いてゐるのは、實に讀む者に不快を與へやう。そして一面には牧之を評して、「鈴木牧之は越後魚沼郡鹽澤の豪家

にて、野生四十年來の舊識に候。元來俗人ながら俳諧を好み、畫も出來候。第一名聞を好む癖あり候。」と伊勢の篠齋に書送つてゐるくらゐで、心中さまで尊敬してゐるさまも見えない。また牧之が六十の賀の祝ひをするについて諸名家の書畫を乞受けて摺物にしたしとて、馬琴にも詩歌の揮毫を頼んで來た時の日記にも、「此節著述多忙中、めいわく限りなし。」と呟きつゝ、仕方なしに揮毫してゐながら、翌日は終日を費して伊勢の篠齋と牧之にあてゝ、長文の書面を一通づゝ認めてゐる。

わたしはこゝにも彼の悲しきまでに弱き性格を見出さずにゐられない。彼は心中それほどに敬服してゐない人に向つても、書面にしても面話にしても、ほとんど諂ひに近い態度までに自卑自屈せずにゐられない。絕えず往復する諸友人との書簡にも、何日も初對面同樣の窮屈なる文字と、苦々しいほどの謙讓をつくしてゐる。わたしはそれ等によつて初めて彼が兎園小說外集の緒言に諸友と交遊の全からざるを浩嘆した後に、「余以」閑居爲常。無」友亦一樂也。」としみ〴〵云つてゐる意味が初めて了解されるやうに思ふ。彼自身にしても、人に弱く人を恐れて、始終おど〱して他人の顏を讀みながら卑屈して行く自分ながらに疎ましく、また傷ましく思はれたであらう。

所詮はたゞ一人生きて行くより外に仕方のないと考へたところに、彼の諦めもあれば悲しみもあつた。わたしは彼の多くの日記を通して、彼のこの心持を見遁すことが出來ない。

(十四年七月七日)

雇はれ人の市場に晒されて

佐々木指月

□

と、ほゝ杖ついて、さて、どうしたらよからうかといふ日が來た。

三月の一日。今日からは春だ。食はずにゐても、この冬は

てくらさうと覺悟をさだめてゐたが、雲晴れの空がすこしく深かゝつて、今日からは春だぞと、いはないばかりの朝日が、ぱつと、窓からさしこむと、急に腹がすいて來て、にぶい腦もはたらきだす。

だが、金もうけといふ一點にかけては、この腦、さつぱり役にたゝないので、私はぴつたり當惑した。

私に出來ることといつても數はない。まあ、一番の御得意は、鑿を叩いて木を彫ることであるが、この紐育においては、木なんか彫つてゐたのでは、とてもお金はもうからない。それには、わけがあるのである。

『君は木彫家なんだから、その方で行つたら、ここで、暮しのたゝないことはあるまい。』なぞと、よく友人からいはれるが、これは素人考だ。

この都會では、木彫家といふと、皆、伊太利あたりから來たばかりの、ほやほやの移民で、英語もろくすつぽ喋れないやつばかりなのだ。

伊太利人は、この都會へ來ると、土方になるにきまつてゐるのだが、なかに腕力のないやつは、皆、鑿を買つて木彫家になる。さうして、そろ／＼英語がわかるやうになると、彫刻家は廢業して、八百屋になつたり、魚屋になつたりしてしまう。

だから、彫刻家、ことに木彫家の値段の安いことといつたらお話しにならない。尤も近頃では組合をこしらへて、木彫家の値をあげたが、そのかはり仕事が減つて來たから、結局は同じことである。

近頃の紐育では、彫刻のくつついてゐる家具なぞは、野暮くさいものになつてしまつて、なんでもかんでも飾りなしの、すつきりとしたものが流行してゐる。と、いふ有様だから、木彫家は助からない。

今から、八年程まへ、私がこの都會へはじめてきた頃、様子を知らないものだから、その伊太利人の群に入り込んで、木彫をやつたものだが、一週間に五十時間はたらいて、たつた十五弗にしかならなかつたので、私もあきれて木彫家はそれ以來廢業した。

腕力がないといつても、伊太利人の腕ッこぶしで、大きな鑿で、荒つぽくやられては、日本人の、ひよろ／＼した指先では、とても爭へたものではない。術の勝負ではなくつて、力の勝負なんだから、我慢して見るがものはないと思つて、それから私は圖案師に化けてしまつたものだ。

『それでは、君は今度は圖案師になつたらいいではないか。』と、まア誰でも、さう考へるところだらう。だが、それも駄目

なんだ。

日本人の圖案師でも雇つて、まがひの支那模様でも書かせやうといふところは、皆、猶太人の工場なんだから、うまい汁は、皆、きやつらに吸はれてしまつて、こちらの得るところは、一週間に、たか〳〵卅五弗か四十弗。それも近頃では、さうしたところへ入り込んだ素人上りの日本人に、すつかり荒されてしまつてゐるから、骨を折つてもその手あひに憎まれるぐらゐなところが落である。

『近頃では、佛像なぞが、大分亞米利加人に賞翫されるやうになつたから、一つ、君の腕を振つて、東洋風の純藝術で立つたらどういふものだね。』なぞと、まるで、夢のやうなことを、云ふ人がよくあるが、この亞米利加で純藝術で立たうと云うのは、魚が樹の上でさか立ちをするよりも、むづかしい藝である。

この國では純藝術といへば、お金持のお孃さま方のやる仕事になつてゐる。その外にこの國には純藝術なぞといふものは、氣でもちがはなければ、やつてゆけないわけがある。

ことに、支那から輸入される、唐紀や宋紀の傑作が、とても本物とは思へぬが、それでも、私なんぞの度膽をぬくやうな佛像なぞが、たつた、二千弗か三千弗で賣り買ひされてゐるのだ。佛像なぞといふものは、一日や二日で彫れるものではなし、四五尺のものを一つ彫り上げるには、どうしても半年や一年はかゝらうと云ふのに、この物價の高い紐育のまんなかで、そんな事をしてゐては、それがよしんば賣れたところで、麥のマツシもすゝれない。

『それでは、その古美術品の修繕でもしたらどうだね。』と、いふ人は一番賢こい人である。まア、落ちるところはそこだが、その東洋古美術品のつくろひ屋さんは、紐育には腐るほどあつて、お互ひに商賣仇きで、いびり合つてゐるのだから、とてもそのなかへ首をつッこんで行かうとは、思ひもよらないことである。

『それでは、君は、どうしやうと云ふのだ。』と、はたの人はいふだらう?だから、今、かうして考へてゐるところなのではないか。

□

『英文で何か書いたらば、』と、いふのが私の最初——今度この國へ歸つて來てから——の、もくろみだつた。さて、初めて見ると、見事にはづれた。それは、はづれるだらうとは思つてゐたが、かう見事にはづれて見ると、やつぱり英語はむづかしいものだなアといふことになつてくる。文法に間違ひがなくつて

も、慣用法もどうやらかうやらごまかしても、書けないものは英文で御座いだ。

誰かゞ云つた。うまい皮肉があつたッけなア。知らなさうに見えてゐて、先刻御承知なのが令孃方のラブメーキングで、知つてゐさうに見えてゐて、さて御存知ないのが書生さんたちの英語だとは、全くうがつたものである。

私もその通りで、書き上げた英文は一度二度も毛唐さんに見て貰はないと、とてもこれでよろしいと安神することは出來ない。しかも、さうして書き上げたものを、どこかの雜誌へ投書して見ると、一週間とたゝないうちに、必ずかへつてくるから不思議だ。

編輯局へ出掛けて、編輯人に原稿を見せて談じ込むと、一應讀んで見ましやうといつて預かつてはくれるが、原稿のかへつて來るのは郵便で送つたときと同じことで、どつちしても別に變りはないことになる。

情ないのは無名の作家だといふ吹噓の聲は自然と出てくる。誰かが陰に居て邪魔をしてゐるのではないか知ら、なぞといふひがみ根性さへ出てくる。日本人だから嫌はれるのだらう、なぞと思つたりして、支那人の名で出して見る。印度人の名で出して見る。しまひには臺灣人となつて出して見てもやはり結果は同じことだ。

時には、無名の作家たちが集まつて、お互ひに編輯人の惡口を云ひ合ふ、私も、その仲間入りをして、彼等のいふことを聞いてゐると、段々この國の文壇の樣子もわかつてくる。で、結局は、いくら書いたつて、いくら投書したつて同じことだ。かう無名の作家が多くつては、さうして、その一人々々から一週間に一通づゝの原稿を送られては、編輯人の身になつて見れば、とてもたまつたものではないといふところへ氣がついてくる。考へて見れば、この都會に住んでゐる獨身の女などは、――いやこの都會ばかりではない、それはシカゴも、セントルイスも、遠くはなれたフレスコも同じことで、――仕事をしまつた日の暮れ方から、タイプライタアでもこと〳〵やつて、書くものは何だといへば、いづれも、その女たちの小さな頭でこしらへたローマンスか何かで、それをどこかの雜誌へでも投書しやうといふのである。それ故に、ある雜誌社などには、投書原稿送還掛りといふのが置いてあつて、來た原稿を片つ端から送りかへす。いゝもわるいもあつたものではないさうだ。

さういふわけで、私はもう、英文で何か書いて、雜誌へでも賣らうといふのは斷念した。

『この國の毛唐さんに禪宗を傳へやう。』と、いふのが、今度の

渡米のそもそもの目的だつた。しかし私もこれで案外の利口者だから、そんなことは初め一寸やつて見てすぐよした。

宗教なぞといふものは、一人や二人の人間が、銅鑼盤をふりたてゝ喋つて歩いたところで、弘まるものではないといふことがわかつたからである。

それは立派なお寺でも建てこんで、酒とたぼの大ぶるまひでもして、さア皆様いらつしやい、只今、おぼた様の宗教のお話が御座います。たつた一度きいただけでも菩提にのぼる。生涯にかういふ縁はあるかないかわからない。さアいらつしやいいらつしやいといつて人を集めたら、耳をかしてくれるものがあるかも知れないが、それも酒とたぼのあるうちで、酒がなくなりたぼがゐなくなつた暁には、誰も坊主に金儲けの相談をもち込んでくるものはないのである。日本ですらその通り。それがましてや、ここはマネイ、イズ、ゴッドの亜米利加のことである。

昔から一人種の宗教が、他人種のうちに弘通しやうといふのには、いつもそこに、人間以上の力が動いてゐたことを知らねばならない。それは、宗旨の言葉でいへば時節因縁、即ち時代の力とでもいふべきものであつて、靜に心を落ちつけて考へるに、太平洋の波を隔てゝ、東洋と西洋の宗教が接觸しやうといふのには――ことに、東洋の宗教の眞髄といはれてゐる禪なぞを、アメリカ人の心に植えつけやうといふのには――まだ百年は早からうと私は思ふ。

栗原傑道さんといふ――これは、禪の方では私の先輩に當る――英語の先生が日本にゐて、その國が今に物質的にデクラインし、その國人が、もつと、ものゝあはれを知るやうにならないと、東洋の思想なぞを受けつけることは出來ないから、君もそのつもりでおもむろに大機大用をめぐらされたら宜かんべいといふ手紙を書いてよこされたが、日本にも眼をそなへた人はゐるわいと思つて私は喜んだ。

しかし佛苗を植へるのには、こゝは無類の處女地である。まあ一生をどう送つてもかまはない、出來ることなら骨を埋めて、お菩提さまの西來の素地をつくらうといふ氣まぐれものなら、今からそろ／＼その仕度にとりかゝるのもいゝだらう。そのかはり死ぬ時は、のたれ死と覺悟をきめてゐなければなるまい。さうして何人も何人も骸をさらして土地に肥をして置けば、そのうちには機運が熟して、いよ／＼お祖師の御渡米の日がくるにちがいない。

誰がそれでは、いの一番に、骸をこの地にさらすかといふのだが、たゞ、ぶらついてゐて、この國の土になるだけの事でい

ゝなら、さう六ケ敷いこともなからうと思つて、實は私は引きうけて來たわけだが、ことによつたら日本へ訪問に歸つてでもゐるときに、ころりと死んだりなにかしては、あとから骨をアメリカへ小包で送るなぞといふ面倒なことになりはしまいかと、今から心配してゐる次第だ。

『亞米利加の移民地の日本人の第二世に禪を傳へろ。』といふのが、私の師匠、兩忘庵さんのお言葉だつた。宗教は血によつて傳へるのが一番の近道であるから、亞米利加へ禪をひろめやうと思つたら、先づ、兩忘庵さんのお言葉の如く、最初はこの國にゐる日本人の第二世に傳へて、それから追々血をまじえるとともに、年代を歴て全國に弘通してゆくといふのが、どうも本當のやり方らしい。然し、太平洋沿岸の移民地の第二世はまだ餓鬼あがりでどうにもならない。ではその親たち即ち第一世はといふと、皆、どうも禪を心得てゐるので、この上どうも無字の宗旨を吹き込んだとて、それは河童に尻子玉のぬき方を教へるやうなもので、教へたものが馬鹿を見るにきまつてゐる。

禪なぞといふものは、土臺から人間に教へやうとするのは大間違ひだ、人間が自然にその境涯に來て、はゝア、これがいはゆる禪なるものだなと氣のつくのを待つて、さうだよ、それが禪なるものだよと、相ひ槌をうつてやるぐらひなところで濟まして置かなければならないものだと、私は思ふ。

そんなこんなで、近頃では、私は、所謂禪宗なぞといふものは、どつかへ、すつぽり出してしまつてゐる。毛唐さんにお傳へ申すどころの騷きではない。況んや信心のうすい日本人にをやだ。

□

『では結局、嬪夫でもやらうか。』なぞと思つたこともある。いや思つたことはないが、これがこの國の事情に通じた私でなかつたら、自然そこへ落ちるだらう。いや、實は、嬪夫だと思はれて、あぶなく日本へ送還されるところだつたのさ。

アメリカにはいたづらものが多いからね。おい、あの野郎を一つ日本へ送還して見ようじやないかと云ふので、仕組んだ芝居へあぶなくはまるところだつた。

あたしが泊つてゐた宿の、それは八十八丁目西入りにゐた頃の話だが、私の隣りの部屋へ、安つぽい毛唐の女が引き越して來た。自然近づきになると、この女がジエントルマンを世話してくれないかとぬかした。ジエントルマンと云つたとて、私は日本人に知り合ひは少ないが、どんなジエントルマンがいゝのだと尋ねると、四十恰好でお金の澤山あるお店者に越したことはないといふ。

と、氣がついたな。はゝア、こいつは、ことによつたら、仕組んであるな。近頃どうも、腑に落ちない事件がしきりに私の身のまはりに持ち上つて、何だか、かう、うす氣味わるく感じてゐたのだ。こいつを私がよし來たと引きうけて、云はれる通りなジエントルマンでも、この女に世話してやると、早速に、白娼法違犯で、御用と來るやつだ。その筋から日本へ送還といふことになる。なにが故に私を陷し入れやうとするのかと考へたね。はゝア、こいつはある一件で、ある人の恨みや妬みを買つてゐるなと思つた。その一件はなか〱こんがらかつてゐて一寸こゝでは書けないし、また人に話してもいゝ時期になつてゐないから、暫く心に疊んで置くが、こいつは一つ先方の裏を欠いてやらうと、かう考へた。

日本人倶樂部に料理番をしてゐる男で、雪ちやんといふ――女のやうな名だが――俳優あがりの若い衆がある。これは私とは十年來の友人で、氣のいい男で、しかも女に餓えてゐるから、これを一つあてがつて見やう。隣りの女が雪ちやんをくはへ込んでどうするか。若し、ものにしさうだつたら、飛び込んで行つて邪魔してしまへば、白娼法に引つかゝらずにすむと私は考へて、その雪の字を電話で呼んで、無言でもつて隣りの女に紹介して、部屋の戸を明けたまんまで、様子如何と、息を殺して窺つてゐた。

やがてのことに雪ちやんは青くなつて歸つて來た。どうしたへと聞くと、駄目だつたといふ。それは氣の毒だつたね、と、口ではいつたが、して見ると女の目的はやつぱりあのジエントルマンにあるんだなと私はあらまし圖星をつけた。

で、その翌日、日本人倶樂部へ行つて見ると、倶樂部の書記が、君はなぜ正業をやらないのだ、なぞとどうもひどい見くびり方だつた。日本から來てゐた新聞社の特派員なぞは、妙な目つきて私を見てゐた。そのうちの一人なぞは、殆んど侮辱するやうな顏つきを私に示したものだ。どこに目をつけてゐやがるのだ。そんなスキンデイプなものゝ見方をしてゐては細育はわかるまいと、私は腹のなかで思つた。

虎穴に入らずんば虎兒を得ず。人を殺さば須らく血を見るべしといふ諺さへあるほどだから、こいつは、一つ、あの女を、ばらしてしまふに越したことはないと思つたから、私はその晩、隣りの女の部屋へ行つて、おまへジエントルマンを世話しろといふが、私ではどういふものだね。と、かう吹きかけた。おまへさんなら、いつでもお出でと私が逆からいつてゐるではないかとの返事で、デツシイスはウエイト、オンされてゐる。

×××、×××××××××××××××××××××××

×・××××××××××××××。おや、人は、噂によらないものだね。かう云ふ人までが、と、一寸、女は考へてゐたが、なに、かまうことがあるものかと云つたその言葉の様子で、して見ると、こいつは、私の思つた通りに、誰かに何かを吹き込まれて來てゐるのだな、よしこゝらで一つ赤つ恥をかゝしてやらうと思つたから、おい、なかには明りがついてゐるし、アパートメントの上だとて、外から見えないとも限らない。窓のブラインドを卸しなと云ふと、女は立つて、窓の方へ行くその隙に、私は部屋から飛び出して、浴室のなかへ、はだしのまゝで馳け込んで、なかから鍵をかけてしまつた。

いや、女は怒つた。とうとうその女は、私がその頃、仕事に通つてゐた、ある美術工場の親方と、私の合棒だつたある日本畫家とを、くはへてしまつて、それがために私は仕事をなくして、當分飯の喰ひあげになつたものだ。女は撒網を張つて仇をうつからかなはない。

ところで、その宿のミセスの告白によると、ミセスもやはり、私をトラップしやうといふいたづらの仲間だつたといふことだつた。このミセスはフランスの女で、でもよく私の食べものへ、コカインなんか入れなかつたと、それだけは感心だと、私は今でも思つてゐる。

さうなつてくると、レストランはあぶなかつた。私は、たべものにこまつて、お猫さんといふ、所謂、マイ、レデー、フレンドのところへかくまつて貰つて、そこで自炊をはじめたものだ。

嬪夫と思はれたくらいでも、このくらい難義なものだ。本當の嬪夫なんかやつたら、それこそ天地がどのくらゐせまくなるか、わかつたものではないのである。

『男妾はどうだらう。』と、考へたこともある。考へたところじやない、まさに私はそれをやつてゐると世間からは思はれてゐるのである。

もつともお金は一文も貰はないが、お猫さんといふ女にかこはれて、でれりぼうとしてゐるのだから、世間からさう思はれたとてしかたがない。

お猫さんは、外に男を四人も五人も持つてゐて、私はそのうちの一人で、私だけが燒餅をやかす、却つて晩の御飯の仕度をして、それがためにお猫さんは毎晩レストランへ通ふ必要がなく、また、フライ鍋一つ手にするではなしに、お好きな小牛の肝臓の天ぷらが、お口に入らうといふのだから、私に餌をあてがつて飼つて置くのだ、なぞと云ひわけしたところで、世間は承知するものではない。

と、氣がついたな。はゝア、こいつは、ことによつたら、仕組んであるな。近頃どうも、腑に落ちない事件がしきりに私の身のまはりに持ち上つて、何だか、かう、うす氣味わるく感じてゐたのだ。こいつを私がよし來たと引きうけて、云はれる通りなジエントルマンでも、この女に世話してやると、早速に、白娼法違犯で、御用と來るやつだ。その筋から日本へ送還といふことになる。なにが故に私を陷し入れやうとするのかと考へたね。はゝア、こいつはある一件で、ある人の恨みや妬みを買つてゐるなと思つた。その一件はなか／＼こんがらかつてゐて一寸こゝでは書けないし、また人に話してもいゝ時期になつてゐないから、暫く心に畳んで置くが、こいつは一つ先方の裏を欠いてやらうと、かう考へた。

日本人倶樂部に料理番をしてゐる男で、雪ちやんといふ——女のやうな名だが——俳優あがりの若い衆がある。これは私とは十年來の友人で、氣のいい男で、しかも女に餓えてゐるから、これを一つあてがつて見やう。隣りの女が雪ちやんをくはへ込んでどうするか。若し、ものにしさうだつたら、飛び込んで行つて邪魔してしまへば、白娼法に引つかゝらずにすむと私は考へて、その雪の字を電話で呼んで、無言でもつて隣りの女に紹介して、部屋の戸を明けたまんまで、樣子如何と、息を殺して窺つてゐた。

やがてのことに雪ちやんは青くなつて歸つて來た。どうしへと問くと、駄目だつたといふ。それは氣の毒だつたね、と、口ではいつたが、して見ると女の目的はやつぱりあのジエントルマンにあるんだなと私はあらまし岡星をつけた。

で、その翌日、日本人倶樂部へ行つて見ると、倶樂部の書記が、君はなぜ正業をやらないのだ、などとどうもひどい見くびり方だつた。日本から來てゐた新聞社の特派員なぞは、妙な目つきで私を見てゐた。そのうちの一人なぞは、殆んど侮辱するやうな顏つきを私に示したものだ。どこに目をつけてゐやがるのだ。そんなスキンディプなものゝ見方をしてゐては紐育はわかるまいと、私は腹のなかで思つた。

虎穴に入らずんば虎兒を得ず。人を殺さば須らく血を見るべしといふ諺さへあるほどだから、こいつは、一つ、あの女を、ばらしてしまふに越したことはないと思つたから、私はその晩、隣りの女の部屋へ行つて、おまへジエントルマンを世話しろといふが、私ではどういふものだね。と、かう吹きかけた。おまへさんなら、いつでもお出でと私が遂からいつてゐるではないかとの返事で、デッシイスはウェイト、オンされてゐる。

×××、×××××××××××××××××××××××

×。××××××××××××××。おや、人は、噂によらないものだね。かう云ふ人までが、と、一寸、女は考へてゐたが、なに、かまうことがあるものかと云つたその言葉の樣子で、して見ると、こいつは、私の思つた通りに、誰かに何かを吹き込まれて來てゐるのだな、よしこゝらで一つ赤つ恥をかゝしてやらうと思つたから、おい、なかには明りがついてゐるし、アパートメントの上だとて、外から見えないとも限らない。窓のブラインドを卸しなと云ふと、女は立つて、窓の方へ行くその隙に、私は部屋から飛び出して、浴室のなかへ、はだしのまゝで馳け込んで、なかから鍵をかけてしまつた。

いや、女は怒つた。とうとうその女は、私がその頃、仕事に通つてゐた、ある美術工場の親方と、私の合棒だつたある日本畫家とを、くはへてしまつて、それがために私は仕事をなくして、當分飯の喰ひあげになつたものだ。女は蜘網を張つて仇をうつからかなはない。

あとで、その宿のミセスの告白によると、ミセスもやはり、私をトラップしやうといふいたづらの仲間だつたといふことだつた。このミセスはフランスの女で、でもよく私の食べものへ、コカインなんか入れなかつたと、それだけは感心だと、私は今でも思つてゐる。

さうなつてくると、レストランはあぶなかつた。私は、たべものにこまつて、お猫さんといふ、所謂、マイ、レデー、フレンドのところへかくまつて貰つて、そこで自炊をはじめたものだ。

嬪夫と思はれたくらいでも、このくらい難儀なものだ。本當の嬪夫なんかやつたら、それこそ天地がどのくらゐせまくなるか、わかつたものではないのである。

『男妾はどうだらう。』と、考へたこともある。考へたどころじやない、まさに私はそれをやつてゐると世間からは思はれてゐるのである。

もつともお金は一文も貰はないが、お猫さんといふ女にかこはれて、でれりぼうとしてゐるのだから、世間からさう思はれたとてしかたがない。

お猫さんは、外に男を四人も五人も持つてゐて、私はそのうちの一人で、私だけが燒餅をやかず、却つて晩の御飯の仕度をして、それがためにお猫さんは毎晩レストランへ通ふ必要がなく、また、フライ鍋一つ手にするではなしに、お好きな小牛の肝臟の天ぷらが、お口に入らうといふのだから、私に餌をあてがつて飼つて置くのだ、なぞと云ひわけしたところで、世間は承知するものではない。

と、氣がついたな。はゝア、こいつは、ことによつたら、仕組んであるな。近頃どうも、腑に落ちない事件がしきりに私の身のまはりに持ち上つて、何だか、かう、うす氣味わるく感じてゐたのだ。こいつを私がよし來たと引きうけて、云はれる通りなジエントルマンでも、この女に世話してやると、早速に、白娼法(ホワイトスレーヴロウ)違犯で、御用と來るやつだ。その筋から日本へ送還といふことになる。なにが故に私を陷し入れやうとするのかと考へたね、はゝア、こいつはある一件で、ある人の恨みや妬みを買つてゐるなと思つた。その一件はなかなかこんがらかつてゐて一寸こゝでは書けないし、また人に話してもいゝ時期になつてゐないから、暫く心に疊んで置くが、こいつは一つ先方の裏を欠いてやらうと、かう考へた。

日本人倶樂部に料理番(コック)をしてゐる男で、雪ちやんといふ——女のやうな名だが——俳優あがりの若い衆がある。これは私とは十年來の友人で、氣のいい男で、しかも女に餓えてゐるから、これを一つあてがつて見やう。隣りの女が雪ちやんをくはへ込んでどうするか。若し、ものにしさうだつたら、飛び込んで行つて邪魔してしまへば、白娼法(ホワイトスレーヴロウ)に引つかゝらずにすむと私は考へて、その雪の字を電話で呼んで、無言でもつて隣りの女に紹介して、部屋の戸を明けたまんまで、様子如何と、息を殺して窺つてゐた。

やがてのことに雪ちやんは青くなつて歸つて來た。どうしたへと問くと、駄目だつたといふ。それに氣の毒だつたね、と、口ではいつたが、して見ると女の目的はやつぱりあのジエントルマンにあるんだなと私はあらまし目星(めぼし)をつけた。

で、その翌日、日本人倶樂部へ行つて見ると、倶樂部の書記が、君はなぜ正業をやらないのだ、などとどうもひどい見くびり方だつた。日本から來てゐた新聞社の特派員なぞは、妙な目つきて私を見てゐた。そのうちの一人なぞは、殆んど侮辱するやうな顏つきを私に示したものだ。どこに目をつけてゐやがるのだ。そんなスキンディプなものゝ見方をしてゐては粃育はわかるまいと、私は腹のなかで思つた。

虎穴に入らずんば虎兒を得ず。人を殺さば須らく血を見るべしといふ諺さえあるほどだから、こいつは、一つ、あの女を、ばらしてしまふに越したことはないと思つたから、私はその晩、隣りの女の部屋へ行つて、おまへジエントルマンを世話しろといふが、私ではどういふものだね。と、かう吹きかけた。おまへさんなら、いつでもお出でと私が遠からいつてゐるではないかとの返事で、デッシイスはウエイト、オンされてゐる。

×××、××××××××××××××××××××

×。×××××××××××××××××。おや、人は、噂にならないものだね。から云ふ人までが、と、一寸、女は考へてゐたが、なに、かまうことがあるものかと云つたその言葉の様子で、して見ると、こいつは、私の思つた通りに、誰かに何かを吹き込まれて來てゐるのだな、よしこゝらで一つ赤つ恥をかゝしてやらうと思つたから、おい、なかには明りがついてゐるし、アパートメントの上だとて、外から見えないとも限らない。窓のブラインドを卸しなと云ふと、女は立つて、窓の方へ行くその隙に、私は部屋から飛び出して、浴室のなかへ、はだしのまゝで馳け込んで、なかから鍵をかけてしまつた。

いや、女は怒つた。とうとうその女は、私がその頃、仕事に通つてゐた、ある美術工場の親方と、私の合棒だつたある日本畫家とを、くはへてしまつて、それがために私は仕事をなくして、當分飯の喰ひあげになつたものだ。女は陥網を張つて仇をうつからかなはない。

あとで、その宿のミセスの告白によると、ミセスもやはり、私をトラップしやうといふいたづらの仲間だつたといふことだつた。このミセスはフランスの女で、でもよく私の食べものへ、コカインなんか入れなかつたと、それだけは感心だと、私は今でも思つてゐる。

さうなつてくると、レストランはあぶなかつた。私は、たべものにこまつて、お猫さんといふ、所謂、マイ、レデー、フレンドのところへかくまつて貰つて、そこで自炊をはじめたものだ。

嬪夫と思はれたくらいでも、このくらい難義なものだ。本當の嬪夫なんかやつたら、それこそ天地がどのくらゐせまくなるか、わかつたものではないのである。

『男妾はどうだらう。』と、考へたこともある。考へたところじやない、まさに私はそれをやつてゐると世間からは思はれてゐるのである。

もつともお金は一文も貰はないが、お猫さんといふ女にかこはれて、でれりぼうとしてゐるのだから、世間からさう思はれたとてしかたがない。

お猫さんは、外に男を四人も五人も持つてゐて、私はそのうちの一人で、私だけが燒餅をやかす、却つて晩の御飯の仕度をして、それがためにお猫さんは毎晩レストランへ通ふ必要がなく、また、フライ鍋一つ手にするではなしに、お好きな小牛の肝臟の天ぷらが、お口に入らうといふのだから、私に餌をあてがつて飼つて置くのだ、なぞと云ひわけしたところで、世間は承知するものではない。

ところが、そのお猫さんが、私に職をあてがふことが出來なくなつてしまつた。このお猫女史は元來ある安雜誌の編輯をしてゐたので、南歐羅巴から來た移民の子女が、近來みな大きくなつて、やつとまア、ごく低級な讀書力が出來たので、その子女の讀み物として、極く低級な、さうしてこの國の都會生活の暗黒面を描いたフィクションの雜誌を思ひついて發行したところが、いや賣れるのなんのつて、忽ちのうちに、お猫さんは、麝香鼠の毛皮の外套にくるまつてしまつて、アパートメントの貸間住ひから、御自分の所有のアパートメントの五階目へ、エレヴエターで一足飛びに飛び上らうといふ騷ぎが、もちやかつてしまつた。その尻尾につかまつて、これも同じくその五階目へ上つたのが私だつた。

だが、實のところをいふと、お猫さんの安雜誌は、まだ低級さが足りなかつた。お猫さんは、幾分の文學味と、幾分の藝術味とを、その雜誌から取り去ることをし得なかつたが爲に、他の思ひ切つた低級な雜誌のために讀者を横取りされてしまつた。お猫さんの目のつけどころは實際よかつたのだが、資本が足りなかつた。そこへ、これはいゝ思ひつきだと氣のついたハースト系の編輯家が、大資本を卸して文學味も藝術味も、まるつきりぬきにした、低級に辵かけた安雜誌を、一度に百萬部も刷つて出したものだからたまらない。お猫さんの雜誌は見る〳〵うちに傾いてしまつて、毛皮の外套は春もまだうすら寒いのに飛んでしまひ、御自分のものとしたアパーメントは、拂ひ込みがまだ全部濟まないうちに人の手に渡つてしまつて、塗り直した赤い寢部屋のペンキもまだ乾かないうちに、お猫さんは五階目から飛び卸りなければならなくなつた。

フロンテヤ、ライフの亞米利加は亡びた。それに取つてかはるのが移民のホーム、即ちエリスアイランドを根柢とした、根ツきり葉ツきりな安文明が、この國を拭ひあげてしまうのであると、お猫さんは、そのハースト系の新雜誌の寫眞まがひの挿畫を見ながら嘆いた。とは云ふものゝ、私に云はせれば、それは亞米利加の運命で、そこへ、まぐれあたるかは知らないが、人より早く目をつけたがために、たとへ一と冬の間でも、エレヴエターのついてゐるアパートメントに住めたのではなかつたか。

貧乏しても詩でも作つてゐられるのと、いくらお金になつたとて、あんな無智な讀み物を朝から晩まで睨んでゐなければならないのと どちらがいゝと思ふと私はお猫さんを慰めた。

でも、おまへは日本人だから、食べずにも詩でも作つてゐればそれで滿足か知らないが、私は亞米利加人だから、どうあつ

でもお金がなければ活きて暮してゆく勇氣がなくなると、お猫さんはしよげてしまつた。

考へなくとも、お金本位のこの國では、文學や藝術の存在して行くべき道がない。この國で、文學や藝術でもやつて行かうといふのには、金持ちの息子か娘にでも産れるか、さもなければ、金持ちの後家さんの、それこそ男妾にでもなるよりほかはしかたがない。しかたがないどころではない、云はず語らずのうちに、實はさうなつてしまつてゐるのである。大きな聲ではいへないが。この國ではアーテストなぞといへば、それは女の慰みものといふ言葉の同義語となつてゐるかに思はれてゐる程である。

さア、では一つ、幸ひ向ふでも、さうして貰ひたい様子だから、お猫さんを見切つて、ミリオニヤの後家さんでもひつかけやうかな。しかしそれには馬のやうな精力と、牛のやうな度胸とを持つてゐなければなるまい。さうして、兎のやうな可愛ゆさと、廿日鼠のやうな、目にもとまらぬ、すばやさとを持つてゐなければなるまいが、生憎どうも、さうした動物は私の體のなかにはゐない。

さア、どうしたらよからうか、行こか倫敦、かへろか東京、こゝが思案の紐育といふのは應にこのことだ。

□

東洋には謙遜といふ言葉がある。亞米利加には、ヒューミリエート、ワンセルフといふ言葉がある。さうしてこの二つの言葉は、この意味が似てゐるやうで、その間に、實は、雲泥月鼈の差がある。

謙遜といへば、自分がやつて出來ることでも遠慮して讓歩して他人に機會を與へることである。ヒューミリエート、ワンセルフとなると、人間本來の根性を現はして、おい來たほいと、手當り次第に、あらゆる機會を自分のものにすることである。

謙遜は、おつうすまして、裃をつけて、行儀正しく紳士ぶつてゐるところがあるが、ヒューミリエート、ワンセルフとなると、禮服をぬいでしまつて、褌ひとつになつて、見えもへちまもなく、人間平等の慾心をさらけ出すことになる。

たとへば電車に乗るときでも、謙遜の方は、自分が大事な用をかかへてゐるにかゝはらず、先づ人をさきへ乗せやうとするのに反して、ヒューミリエート、ワンセルフの方は、人に何と思はれたつてかまひはしない、さしたる用も自分にはないが、しかし先へ乗るに越したことはないと、人を押しのけ、はねとばして、吊り革にぶらさがらない用心をする。

日本ならば、共同便所の前で落ち合つて、まアお先きへ、い

やそれでは恐れ入りますと、お尻の穴をすぼめ合つて御辭儀をしあつてゐる。亞米利加だと、ヘイ。アイム、ウエイテング。アー、ユー、シツク？と、サスペンターを肩からはづしながら、なかにゐるやつを、外から、大聲でせき立てる。するとなかの奴は、ウエイト、ゼア、フオアエヴアー。ザツツ、ユーア、オン、バツド、ラツクとばかりで一向に取り合はない。

前者は日本の禮式で、後者はアメリカの風習である。だから、外交にかけても、商業の取り引きにかけても、萬事にかけて、どうも日本とアメリカの呼吸はしつくり、はまらない。いや、あまり、しつくり、はまり過ぎてゐる。日本が、謙遜するところを、アメリカが、ヒユーミリエートしてしまへば、それで文句はないのである。

だから、日本人は謙遜して、皆聖人君子になつて貧乏する。だがアメリカ人は、ヒユーミリエートして、男は土に接吻し、女は金に接吻して富貴になるばかりである。日本人は慾をかたづけて德に着かうとするが、アメリカ人は德をはなれて慾のまへに跪づく。人間として誰しも慾心のあるものを、人間同志の德義を守らんがために謙遜する東洋人と、人間として誰しも德義の貴ぶべきことは知つてゐるが、しかし直面してくる生活のために自己をヒユーミリエートして、しばらく原始人たらんとするアメリカ人とは、前者は慾を、後者は名を犧牲にするだけの違ひはあつても、その犧牲の價値は同じでなければならない。どちらが貴く、どちらが賤しいといふ區別は出來ない。

で、私も一番、アメリカ流にヒユーミリエート、マイセルフして、——研究しかけてゐたサンスクリツトなぞは棚へ上げてしまつて、——牛馬に身を落すまでも、塵に額を押しつけて、勞働しやうと考へた。

日本に置き去りにした餓鬼どもは、そろ／＼大きくなりやがつて、パパーの原稿料だけでは、とても、ひもじくつてたまらないから、どうか現金で送つてくれろと、手紙の度に云つて來やがる。その方もどうにかしてやらずばなるまい。一つ、桂庵へでも出掛けて、口をさがして、昔取つたブルムの柄でも、また握らうかと、どうやら考へがついて來た。尤も、この考へは、今度アメリカへ來ると直ぐつけなければならないのを、今迄横着してゐたのだ。

□

さて、いよ／＼さうと考へが決つて見ると、誘惑は澤山ある。そのうちでも先づ私を誘惑するものは、靑い木の葉と、柔かい土と、淸らかな空氣である。郊外の生活。乃至は都會から五十哩も離れた田舍の生活。ヘドソン河の上流の水がちよろち

よろミルハウスの路を流れるあたりの、どこかのガアデンの園丁にでも住み込んで、來る夏を過ごしたいもんだ。

で、私はお猫さんには相談なしで、例の長髮を、ちよつきりと、はさみとつて、まびさしの廣いキアツプを目深にかぶつて、さてどこの桂庵へ行かうかと、第六街の高架線の停車場のプラツトフオームに佇みながら思案した。

日本人の行くべきところは、まさに、日本人の經營してゐる桂庵でなければなるまい。桂庵といふと何んだか俗にきこえるが、これを英語でエムプロイメント、エヂエンシイといふと、いくらか勿體がつくやうだ。それは丁度日本で、一ぜんめし屋といふのを、公衆食堂といひ直したやうなものだ。今に、お女郎のことを、ソサイテーレデースなぞといふ日が來るかも知れない。名前は古今東西を隔てゝ違ふが、實質に於て桂庵もエムプロイメント、エヂエンシイも同じく雇人口入所である。

電話帳に當つて數えて見ると、この紐育市內には九百四十七軒の雇人口入所がある。一日に十軒づゝ廻つて歩いて十日かゝれば、きつとそこには私の行くべき望みの口はあるに違ひない。然し、日本人を雇はうと思つてゐる異人さんたちは、自然、日本人の桂庵へ口をかけるに違ひないから、これは日本人の桂庵へ行く方が道だと、これは誰しもさう考へるところであらう。ところが日本人の口入業をやつてゐるところは、同じく電話帳でしらべると、八軒しかない。いや、八軒でもことによつたら多過ぎるのかも知れない。一つ片ツぱしから廻つて見やうだが、どこから手始め、ではない、足はじめに廻らうかと、地の理を思ひめぐらしながら、丁度來かゝつた上町ゆきの高架電車に乘り込んだ。

私は八丁目の停留所から、五十丁目まで上つて、こゝらでよからうと、電車を卸りて、停留場の鐵の梯子を下つた。で、そこから、一番近い日本人の口入れ屋へ先づ足を踏み込んで、ぞつとした。板張りの上り段はがた〳〵で、それが、よじれて傾いてゐる。ぼろ〳〵のカーペツトは靴の踵にひつかゝり、うつかり、くしやみでもしやうものなら、塵が舞ひ立つて、窒息しないとも限らない。戶を押してなかに這入ると、百年も拭いたことのなささうな硝子窓に向つて、古道具のデスクを据えて、それに向つて今しも電話の受話器を握つてゐるのが、こゝの主人と見えた。目は狐の如くとんがつて、英語はしどろもどろだ。ワツツセ？　ドウ、イー、ノー、ニードド、ザツ、マン？オワイ？　ヒー、イズ、グルマン！　と、相手は誰だか知らないが、しきりに押問答をやつてゐる。私は茫然としてそのデスクの傍に立つた

會話がすむと、そのボースは、私を何しに來やがつたと云はないばかりに、睨み上げた　私は一言も云ひ出す氣にはなれなかつた。次の部屋をのぞきこむと、ベルビユーの慈善病院の患者でも、こんなに青い顔をして、衰へはて、疲れはてたのは居なからうと思はれる程、やつれてしまつた日本人が八九人、烟草の烟りに浸りながら、反古紙のやうになつた日本字の雜誌なぞを開いて見てゐる。私の方を皆一樣に振り向いて、何處から來たと、あやぶむやうな、けげんな目つきで、立つてゐる私の姿を見上げたり見卸したりした。

こりや話にならない。誰が見たつて此處にゐる日本人が、異人さんに雇はれて、ものの役に立つだらうとは思ふまい。また、あんな、がたぴしな英語を話すボースでは、どういふところへは、どういふ人間を向けたら、ぴつたり、はまるだらうといふことは、わからないに違ひない。こりや駄目だ。口のある無しを尋ねて見るがものはないと思つたから、私は何も云はずにそこを出てしまつた。

要するに、雇はうとする先の樣子に通じて、かういふ男を送つたら、あの家なり主人なりに、向くだらうといふことを呑み込むには、これは日本人のやつてゐる口入れ屋の日本人の主人では、ちよいと出來ない藝である。日本人がやつてゐて、西洋人の女かなにかゞ、雇ひ主と雇ひ人との間をアッテンドするいふやうな、やり口でなければ、この口入れ業はうまくは行かない。さういつたやうなところはないものか知らんと、私は往來の角の烟草屋へ入り込んで、また、そこの自働電話の電話帳をひろげて見た。

ははア、あるわい。女名前でやつてゐる日本人の口入れ屋がある。日本人の女にこの營業が出來るわけはないのだから、これはきつと日本人の御亭主を持つてゐる女異人が、やつてゐるに違ひない。幸ひこゝから遠くはないし、一つそこへ出掛けて見やうと、私は、キアップのまびさしをぐつと引き卸して、もうすつかり雇ひ人氣分になつて、高架電車のブリッヂの蔭に沿ふた道を歩いた。

□

ここは前のにくらべると、入り口からしてベタアである。カーペットも切れてはゐないし。塵もそんなに溜つてゐないし。女主人は　三十四五の、まるぽちや美人で　案じた通り日本人を御亭主に持つてゐる異人さんだつた。

金魚を入れた硝子函を四方にめぐらして、そのなかにデスクを置いて、今しもタイプライタアを打つてゐたその女主人に、私は手短に話した。

アイ、ケーム、フロム、サンフランシスコ、エンド、アム、ルッキング、フオア、エ、ジアーブ。アイ、ム、エ、ガーデナー、エンド、ハヴ、サム、エッキスピリエンス、オブ、ドライヴイング、フオード。

勿論、サンフランシスコから來たといふのは嘘(こそ)ツ八(ぱち)だ。しかしさう云はなければならない理由があつた。それはこの都會では、今迄雇はれてゐた家のレフエレンスがなければ、新しい仕事口を見出(みだ)すことは一寸困難だといふことを、私は知つてゐたからだつた。また、フオード自働車の運轉(ドライヴイング)が出來るといふのも嘘(こそ)だつた。しかし、ガーデナーといへば、いづれも田舎の避暑宅の庭園での仕事で、それには、自働車の運轉(ドライヴイング)ぐらゐは幾分心得てゐなければ、口を取ることが先づ六ケ敷いといふことを聞いてゐたからであつた。

イット、イヅ、デフイカルト、サアー!トウ、ゲット、エー、ガアデナース、ジヤーブ、エアリー、イン、ゼ、シイゾン。と、そのミセスは返事をした。なる程、園丁(ガーデナア)の仕事はまだ季節(シーゾン)が早いに違ひない。それは五月の初めからでないと誰も雇ひ手はないわけだ。こいつは、少々、まづかつたな。

イット、マスト、ビー、デツフエレント、フロム、キアリフオルニヤ、イン、ゼ、シイゾン。アイ、レユンー！なる程、加州とは陽氣が違はなければならないわけですな。なぞと、云ひ譯も頗る窮して、フオア、ゼ、タイム、ビーイング、アイ、シヤル、テーク、エニ、ジヤーブ。まア當分、どんな仕事でもやりましようと、私は第二義にくだらざるを得なかつた。

サアー!キヤン、ユウ、クツク？御料理が出來ますか？と、そればつかりを氣づかつてゐた、その、質問がやつて來た。

ノオー!と、私は、かぶとをぬいでしまつた。

ミセスは笑ひ顏になつて、ウエイト、フオア、エ、ホワイル、イン、ゼ、アザア、ルーム、サア。サムシング、ニユー、キヤン、アンフオード、トウ、ドウ、メイ、カム、と、それでも向ふは商賣だ。そらさないで、私をそこの溜り場へ送り込んだ。

さうだ、ミセスの云ふ通りに、ここの溜りで待つてゐたら、何か私に出來さうな仕事の口(くち)がかゝつてくるに違ひない。と、ばかりに私は望みを抱(いだ)いで、その溜り場へ足を踏み込んで見ると、やはり煙草の煙に浸つた連中が、何かしきりに高聲(たかごゑ)で談(だん)じ合つてゐるところであつた。

やア、皆さん今日はと、聲をかけながら、そこにあつた一つの椅子にかけると、見かけない男に聲をかけられたその人たちは、しきりに私の顏を見た。紐育には前後で六年の餘も住んでゐる私であるが、遂に日本人のあつまるところへ顏を出したこ

どのない人間であるからからいふ時には都合がいゝ、誰も私を見覺へてゐるものは、この溜りにはゐなかつた。

私は謹しんで皆の話を傾聽してゐると、そのなかに一人、もう聲も日本ばなれてしまつた日本語で、私の來たのには目もくれず、話をつゞけてゐる六十近いおぢいさんがゐた。それでも華美なネクタイをかけて、靑髭もまだ少しは殘つてゐる口のまはりを綺麗に剃つて、着てゐる服は裸糸にこそなつてゐたが、それでも熨斗だけはきちんとかけて、どう見ても、この國に住み古して、金持の異人の家に長の年月をバトラァでもしてゐたらうと思はれる人柄だつた。

それは、ホエアエヴァ、ファミリーで働いても、ジャーブがキープ出來ないといふのは、マダムたちのサイコロヂイが、のみこめてゐないせいだ、と、そのバトラアは話してゐる。フウエヴァ、ミリオニヤのマダムでも、どこへ行つても往來のまんなかや、ショッピングに行つた先で、さう無闇に威張れるといふわけのものではない。威張れるところは世界のうちで、自分の家のケッチンより外にはないのだから、そのケッチンで働いてゐるゼア、オン、サーバンツに當り散らすより外に道はないのだ。そのために彼女たちは高い金を拂つて、吾々を飼つて置くのだもの、マダムに當たられて、それを我慢するといふことは、吾々の仕事のうちなのだ。それは既に、その價が拂はれてゐるのだ。それを、マダムに當られたからと云つて飛び出すやうでは、ビジネスになりはしない。と、彼は自分の經驗から所謂臺所哲學（ケッチンフィロソフィ）の奧義を說いてゐるのである。

私はそれを默つてきゝながら、すつかり感心してしまつた。なる程なア、昨日までは人の事だと思つてゐたが、明日からは、私も、その臺所哲學の奧義を服膺して、どんなにマダムに威張られても、どんなに侮辱されても、どんなにけんつくを食つても、イエス、マムとばかりで我慢しなければならないのだ。その價は、その家に住み込んだ上からは、將に弗をもつて拂はれてゐるのだ。アメリカの弗の力よ。嘘か本當か知らないが、フランスのクレマンソーも、一度は、この都會のレキシントン街でウエータアをしてゐた事があるといふ。ロシヤのレニンが、この都會のイイストサイドで、皿洗ひをしてゐたことがあるといふのは本當らしい。世界のうちのどんな賢こい人間でも、世界のうちのどんな立派な美術品でも、悉く弗の力で征服して、それを臺所で踏み倒し、それを家の入口で蹴倒す。盛なるかな弗の亞米利加よ。日本の三文文士が、この都會のまんなかで飢に迫つて桂庵の溜りで烟草の烟にむせぶぐらひなことは、何も驚くには當らないのである。

□

桂庵の溜りで合はす人の顔はきまつてゐた。女の話が御得意で鼻のあたまの赤い人。目鏡の當るところが黑くなつてゐて料理の講義の上手な人。六尺ゆたかの大男で布哇育ちでダイヤの指輪をはめてゐて貯金が一萬弗もあるといふ人。白妻に死に別れて混血兒の子供をかゝへて、それでゐて耐火材料の發明に熱中してゐる人。沖繩縣の產れで縣知事のやうな顏をしてゐて、しかも自働車の運轉に妙を得てゐるといふ人。それから例の齋所哲學の泰斗と私から尊號を奉られた禿頭のバトラ博士と、それから今一人、これは大きな易者眼鏡をかけて、英語の文法に堪能で、剛愎さうな顏はしてゐるが笑ふと何とも云へないあどけなさを見せる人。それと、かく申す私が其處の定連で、朝の十時頃からやつて來て、辨當屋さんの持つてくる折詰の日本めしを食べて、話す話は每日たいてい、働いた先のマダムの棚卸しと、そこのメードに惚れられたローマンスと、それから日米問題未來記のこの三つときまつてゐて、晚は溜りをミセスが締める五時頃迄、私たちは三週間も詰めてゐた。

この紐育の雇はれ人の入れ換りは四月なかばからぼつ〱はじまるまるのださうだが、それにはまだ、一ケ月も早かつたので、何の口もさつぱりかゝつて來なかつた。でも私たちは、どの桂庵を步いて見ても同じこと、一つ口は八方にかゝるのだから、他へかゝる口ならば、此處へもかゝつて來ないと云ふことはない。此處でとつても餘處でとつても同じこと、ならば愛嬌たつぷりなミセスの顏でもをがめるところに腰を落ちつけて、機會を待つに越したことはないと、これは誰しも腹のなかで思つてゐるところでがなあつたらう。

すると或る朝のこと、私は少しいつもより時刻が後れて、十時半もまはる頃、溜りへやつて來て見ると、丘さんといふ、古くから私の知つてゐる人が、定連のなかの新顏といふ格で、そこに、きちとん腰をかけてゐるではないか。

よう、丘さん。思ひがけないところでお目にかゝつたねと、握手しながら、私はその人の耳へ口をよせて、他の定連にはきこえないやうに、俺の名だけは云ふなと、小聲でたのんだ。別に深いわけはないけれども、私は、飯田佐助といゝ加減な名をつけてゐたのだつた。假名で書ければ、イータ、サスケで、それは私の本名を羅馬字で綴つたときと、さうたいして違つてゐる名ではなかつた。

丘さんは笑を殺して、うん、よしよし。時にどうした、やつぱり金には勝てないなと、私の急所をついて來た。

いや〱これが本當の道だねェと、私の返事は、まんざら當座

の負け惜みを云つてゐるわけではなかつた。

私はポケットから鉛筆を取り出して、そこの小さなテーブルの上にあつた新聞の片端へ、思つてゐた短い文句を書き記して、それを丘さんに見せた。それは次のやうな文句である。

猫の道が通れなければ、鼠の道を通る。鼠の道が通れなければ、もぐらの道を通る。と、いふのであつた。

判じ物のやうないひ方であるが、別に深い意味はない。云ひ直して見れば、紳士の道が通れなければ、野郎の道を通る。野郎の道が通れなければ、乞食の道を通るといふのも同じことである。

日本人が太平洋を渡つて來て、亞米利加の社會を通つて行く道は、まるつきり開けてゐない。紳士の格で亞米利加の社會を切つてまはらうといふには少なくとも一ケ月千弗の小遣ひ錢を費やさねばならない。日本の政府から派遣されたお役人さまに就ては知らぬこと、私の知つてゐる限りでは、日本といふ貧乏國から來た人では、一ケ月千弗のお小遣ひの持ち合はせのある人は先づ無い。して見ると日本人には、紳士の格で亞米利加を通る資格はないといふことにきまつてくる。何も私は大袈裟に小遣ひ錢を見積つてゐるわけではない。紐育あたりでは、一寸とした晩餐會を開いても、十人お客をすれば安くつもつて百弗は飛んでしまふ。パークアヴェニウのアパートメントに住むと、客間に、食堂に、寢室に、浴室と便所は兼帶で、小さな臺所と、その脇に下女の部屋がついてゐて、それで、一ケ月五百弗の家賃を拂はなければならない。紳士となれば自働車の一つぐらいは、どこかのギャラーヂに預けてなければならず、それでどこかに月ぎめの女の子でもかこつたら、千弗ぐらいは、ハンケチの洗濯代にも足りやしない。

で、先づ紳士は見合はして、野郎の格で通るとすれば、通つて通れないこともないが、何もさうして假にもつかない小さな自我を押し立てゝ、蝸牛角上の生存競爭をして見たところで、三千弗の生命保險の一口も拂ひ込めれば、それこそ生涯の大成功で、金がたまるといふではなし、名が殘るといふではなし、一死に際になつて見れば、骨折り損のくたびれ儲で、結局は智慧がなかつたといふことに歸着する。

一層のこと、綺麗さつぱり身を落して、乞食になつて世の中を渡れば、亞米利加程、渡りいゝ國は世界中どこさがしてもないので、期せずして、萬人が萬人とも、この國では乞食の道を通ることになつてしまふのである。金持ちの袖にすがつて、嗄れた聲を出して、何か仕事をさせて貰つて、なにがしかの、おこぼれを頂戴して、それで露命をつないでゆく。金銭の、つむ

じ風の吹きめくる亞米利加では、自己といふものを殺し盡くして、金持ちの手足となつて活きてゆけば、それが全く、賢明な、さうして資本のかゝらない世渡りの方法である。ことに亞米利加の金持ちは、日本の金持ちのやうに根性がひねくれ曲つてゐないので、乞食連にとつては大いに都合がいゝのである。

で、私も文士だとか、詩人だとか、美術家だとか、そんな野暮なことは云つてゐずに、大いに時勢を達觀して、すぽんと自分をなげ出して、乞食のうちの、その乞食。そのまた乞食の、その乞食。お三どんになり濟して、のんきに亞米利加を渡らうといのである。

して、さういふ心掛けで亞米利加を見渡すと、乞食の通る道は四通八達。坦々として砥の如く、今迄は狹く見へた人生が、急に廣々と見えてくる。何も、自己一人の道を開かうとあせつて、樹の根につかまつたり、岩角につまだつたり、そんな輕業師のやうな眞似をして、無理なところを通るがものはない。今迄、なんだつて、あんな馬鹿なことをしてゐたのだらうといふ、樂々とした氣分になつてくる。

さういふつもりで、私は、鼠の道が通れなければ、もぐらもちの道を通ると書いて、丘さんに見せたのである。さうして、これが本當の道だねエといふ叫びは、やはり、そこから出てゐる。ことに貧乏國から來てゐる日本人は、なんの、かんのと、一いつたところで、亞米利加にゐる間は、もぐらもちの道を通るより外に通る道はない。吾々のラインの人では、詩でもつて通つて行つたのが、野口のヨネさん。新聞書きで通つてゐるのがアダチさん。繪かきのマーキノは紐育ではさつぱりもてず。活動のハヤカワは、モナコで自殺をしたといふし。時にバタフライのタマキ夫人が、まだ、ぴく／＼してゐるぐらゐのものであつて、しかも、それ等の人々の通つた道、或は通りつゝある道は、一般アメリカの社會といふものに較べれば、本當に蜘蛛の糸より細いのである。だが、その人たちは、ラインがラインだから、お金こそないが——タマキさんは除外例——でも、紳士の道を通つたに違ひない。

だが、私は、考へれば考へる程、馬鹿／＼しくなつた、と、いふのは、この弗の國で、詩だの、宗教だのといつてゐるのは、それこそ、石に戀文、樹に念佛だ。東洋の思想なんかを吹聽して見たところで、それこそ、馬に井戶を見せ、おつと違つた、井戶に馬を見せるやうなもので、このくらゐ間のぬけてゐることは、先づ世界に類がない。

先づ、もぐらもちに當分なつて、出來ることなら、新らしい洋服の一着もこしらへやうといふのが私の本望で、そんな仔細

の負け惜みを云つてゐるわけではなかつた。

私はポケツトから鉛筆を取り出して、そこの小さなテーブルの上にあつた新聞の片端へ、思つてゐた短い文句を書き記して、それを丘さんに見せた。それは次のやうな文句である。

猫の道が通れなければ、鼠の道を通る。鼠の道が通れなければ、もぐらの道を通る。と、いふのであつた。

判じ物のやうないひ方であるが、別に深い意味はない。云ひ直して見れば、紳士の道が通れなければ、野郎の道を通る。野郎の道が通れなければ、乞食の道を通るといふのも同じことである。

日本人が太平洋を渡つて來て、亞米利加の社會を通つて行く道は、まるつきり開けてゐない。紳士の格で亞米利加の社會を切つてまはらうといふには少なくとも一ケ月千弗の小遣ひ錢を費やさねばならない。日本の政府から派遣されたお役人さまに就ては知らぬこと、私の知つてゐる限りでは、日本といふ貧乏國から來た人では、一ケ月千弗のお小遣ひの持ち合はせのある人は先づ無い。して見ると日本人には、紳士の格で亞米利加を通る資格はないといふことにきまつてくる。何も私は大袈裟に小遣ひ錢を見積つてゐるわけではない。紐育あたりでは、一寸とした晩餐會を開いても、十人お客をすれば安くつもつて百弗は飛んでしまう。パークアヴェニウのアパートメントに住むと、客間に、食堂に、寝室に、浴室と便所は兼帯で、小さな臺所と、その脇に下女の部屋がついてゐて、それで、一ケ月五百弗の家賃を拂はなければならない。紳士となれば自働車の一つぐらいは、どこかのギヤラーヂに預けてなければならず、それでどこかに月ぎめの女の子でもかこつたら、千弗ぐらいは、ハンケチの洗濯代にも足りやしない。

で、先づ紳士は見合はして、野郎の格で通るとすれば、通つて通れないこともないが、何もさうして愚にもつかない小さな自我を押し立てゝ、蝸牛角上の生存競爭をして見たところで、三千弗の生命保険の一口も拂ひ込めれば、それこそ生涯の大成功で、金がたまるといふではなし、名が残るといふではなし、死に際になつて見れば、骨折り損のくたびれ儲で、結局は智慧がなかつたといふことに歸着する。

一層のこと、綺麗さつぱり身を落して、乞食になつて世の中を渡れば、亞米利加程、渡りいゝ國は世界中どこさがしてもないので、期せずして、萬人が萬人とも、この國では乞食の道を通ることになつてしまうのである。金持ちの袖にすがつて、僱れた家を出して、何か仕事をさせて貰つて、なにがしかの、おこぼれを頂戴して、それで露命をつないでゆく。金銭の、つむ

し風の吹きめぐる亞米利加では、自己といふものを殺し盡くして、金持ちの手足となつて活きてゆけば、それが全く、賢明な、さうして資本のかゝらない世渡りの方法である。ことに亞米利の金持ちは、日本の金持ちのやうに根性がひねくれ曲つてゐないので、乞食連にとつては大いに都合がいゝのである。

で、私も文士だとか、詩人だとか、美術家だとか、こんな野暮なことは云つてゐずに、大いに時勢を達觀して、すぽんと自分をなげ出して、乞食のうちの、その乞食。そのまた乞食の、その乞食。お三どんになり濟して、のん氣に亞米利加を渡らうといのである。

して、さういふ心掛けで亞米利加を見渡すと、乞食の通る道は四通八達。坦々として砥の如く、今迄は狭く見へた人生が、急に曠々と見えてくる。何も、自己一人の道を開かうとあせつて、樹の根につかまつたり、岩角につまだつたり、そんな輕業師のやうな眞似をして、無理なところを通るがものはない。今迄、なんだつて、あんな馬鹿なことをしてゐたのだらうといふ、樂々とした氣分になつてくる。

さういふつもりで、私は、鼠の道が通れなければ、もぐらもちの道を通ると誓いて、丘さんに見せたのである。さうして、これが本當の道だねエといふ叫びは、やはり、そこから出てゐる。ことに貧乏國から來てゐる日本人は、なんの、かんのと、いつたところで、亞米利加にゐる間は、もぐらもちの道を通るより外に通る道はない。吾々のラインの人では、詩でもつて通つて行つたのが、野口のヨネさん。新聞書きで通つてゐるのがアダチさん。繪かきのマーキノは紐育ではさつぱりもてず。活動のハヤカワは、モナコで自殺をしたといふし。時にバタフライのタマキ夫人が、まだ、ぴく／＼してゐるぐらゐのものであつて、しかも、それ等の人々の通つた道、或は通りつゝある道は、一般アメリカの社會といふものに較べれば、本當に蜘蛛の糸より細いのである。だが、その人たちは、ラインがラインだから、お金こそないが――タマキさんは除外例――でも、紳士の道を通つたに違ひない。

だが、私は、考へれば考へる程、馬鹿／＼しくなつた、と、いふのは、この弗の國で、詩だの、宗教だのといつてゐるのは、それこそ、石に戀文、樹に念佛だ。東洋の思想なんかを吹聴して見たところで、それこそ、馬に井戸を見せ、おつと違つた、井戸に馬を見せるやうなもので、このくらゐ間のぬけてゐることは、先づ世界に類がない。

先づ、もぐらもちに當分なつて、出來ることなら、新らしい洋服の一着もこしらへやうといふのが私の本望で、そんな仔細

の負け惜みを云つてゐるわけではなかつた。

私はポケツトから鉛筆を取り出して、そこの小さなテーブルの上にあつた新聞の片端へ、思つてゐた短い文句を書き記して、それを丘さんに見せた。それは次のやうな文句である。

猫の道が通れなければ、鼠の道を通る。鼠の道が通れなければ、もぐらの道を通る。と、いふのであつた。

判じ物のやうないひ方であるが、別に深い意味はない。云ひ直して見れば、紳士の道が通れなければ、野郎の道を通る。野郎の道が通れなければ、乞食の道を通るといふのも同じことである。

日本人が太平洋を渡つて來て、亞米利加の社會を通つて行く道は、まるつきり開けてゐない。紳士の格で亞米利加の社會を切つてまはらうといふには少なくとも一ケ月千弗の小遣ひ錢を費やさねばならない。日本の政府から派遣されたお役人さまに就ては知らぬこと、私の知つてゐる限りでは、日本といふ貧乏國から來た人では、一ケ月千弗のお小遣ひの持ち合はせのある人は先づ無い。して見ると日本人には、紳士の格で亞米利加を通る資格はないといふことにきまつてくる。何も私は大袈裟に小遣ひ錢を見積つてゐるわけではない。紐育あたりでは、一寸とした晩餐會を開いても、十人お客をすれば安くつもつて百弗は飛んでしまう。パークアヴエニウのアパートメントに住むと、客間に、食堂に、寢室に、浴室と便所は兼帶で、小さな臺所と、その脇に下女の部屋がついてゐて、それで、一ケ月五百弗の家賃を拂はなければならない。紳士となれば自働車の一つぐらいは、どこかのギヤラーヂに預けてなければならす、それでどこかに月ぎめの女の子でもかこつたら、千弗ぐらいは、ハンケチの洗濯代にも足りやしない。

で、先づ紳士は見合はして、野郎の格で通るとすれば、通つて通れないこともないが、何もさうして益にもつかない小さな自我を押し立てゝ、蝸牛角上の生存競爭をして見たところで、三千弗の生命保險の一口も拂ひ込めれば、それこそ生涯の大成功で、金がたまるといふではなし、名が殘るといふではなし、一死に際になつて見れば、骨折り損のくたびれ儲で、結局は智慧がなかつたといふことに歸着する。

一層のこと、綺麗さつぱり身を落して、乞食になつて世の中を渡れば、亞米利加程、渡りいゝ國は世界中どこさがしてもないので、期せずして、萬人が萬人とも、この國では乞食の道を通ることになつてしまうのである。金持ちの袖にすがつて、嗄れた聲を出して、何か仕事をさせて貰つて、なにがしかの、おこぼれを頂戴して、それで露命をつないでゆく。金錢の、つむ

と風の吹きめぐる亞米利加では、自己といふものを殺し盡くして、金持ちの手足となつて活きてゆけば、それが全く、賢明な、さうして資本のかゝらない世渡りの方法である。ことに亞米利の金持ちは、日本の金持ちのやうに根性がひねくれ曲つてゐないので、乞食連にとつては大いに都合がいゝのである。

で、私も文士だとか、詩人だとか、美術家だとか、こんな野暮なことは云つてゐずに、大いに時勢を達觀して、すぽんと自分をなげ出して、乞食のうちの、その乞食。そのまた乞食の、その乞食。お三どんになり濟して、のん氣に亞米利加を渡らうといのである。

して、さういふ心掛けで亞米利加を見渡すと、乞食の通る道は四通八達。坦々として砥の如く、今迄は狹く見へた人生が、急に廣々と見えてくる。何も、自己一人の道を開かうとあせつて、樹の根につかまつたり、岩角につまだつたり、そんな輕業師のやうな眞似をして、無理なところを通るがものはない。今迄、なんだつて、あんな馬鹿なことをしてゐたのだらうといふ、樂々とした氣分になつてくる。

さういふつもりで、私は、鼠の道が通れなければ、もぐらもちの道を通ると誓いて、丘さんに見せたのである。さうして、これが本當の道だねェといふ叫びは、やはり、そこから出てゐる。ことに貧乏國から來てゐる日本人は、なんの、かんのと、—いつたところで、亞米利加にゐる間は、もぐらもちの道を通るより外に通る道はない。吾々のラインの人では、詩でもつて通つて行つたのが、野口のヨネさん。新聞書きで通つてゐるのがアダチさん。繪かきのマーキノは紐育ではさつぱりもてず。活動のハヤカワは、モナコで自殺をしたといふし。時にバタフライのタマキ夫人が、まだ、ぴく〳〵してゐるぐらゐのものであつて、しかも、それ等の人々の通つた道、或は通りつゝある道は、一般アメリカの社會といふものに較べれば、本當に蜘蛛の糸より細いのである。だが、その人たちは、ラインがラインだから、お金こそないが——タマキさんは除外例——でも、紳士の道を通つたに違ひない。

だが、私は、考へれば考へる程、馬鹿〳〵しくなつた、と、—いふのは、この弗の國で、詩だの、宗教だのといつてゐるのは、それこそ、石に戀文、樹に念佛だ。東洋の思想なんかを吹聽して見たところで、それこそ、馬に井戸を見せ、おつと違つた、井戸に馬を見せるやうなもので、このくらゐ間のぬけてゐることは、先づ世界に類がない。

先づ、もぐらもちに當分なつて、出來ることなら、新らしい洋服の一着もこしらへやうといふのが私の本望で、そんな仔細

のところ迄はいはなかつたが、察しのいゝ丘さんのことだつたから大方の見當を悟つたものと見えて、にや〳〵と笑ひ顏をした。

ところで、どうだね。君も、やつぱり賣り物に出たのかね？と私がきくと、まあ、さういふわけだねェと、丘さんは度胸の据はつたものである。

□

すると、或る日のこと、ミセスが私をデスクの脇へ呼び出して、どうです、あなたに宜からうと思はれる口が一つ來たのですが、掛け合ひに行つて見ませんか？　だが、それにしても、あなたの身元を誰かに證明して貰つたレフエレンスがないと、いけませんねェといふわけで、さて、こいつは困つたなア、誰か然るべき人が知人のうちにありさうなものだと考へたが、うん、あるある。トレージユリイ、デパアトメントの紐育支局で、魔睡劑の監査役をしてゐる、カザリン、ヘリングといふドクトルがゐるから、あの人に一つ身元を證明して貰へば、何しろ彼女はドクトルだし、ことに日本でいへば大藏省といつたやうな處に勤めてゐる人なのだから、彼女のレフエレンスならば鶴の一聲で、どこへ行つても通りがいゝに違ひない。よし〳〵さういふことにしやうと、早速私は出掛けたが、丁度午休時間で、ドクトルには直ぐ逢へた。で、一件の事を賴むと、それはいゝ、あんな、お猫のところなぞに、お前が厄介になつてゐるのは、實は、私は大不賛成だつたのだ。この國では、箒木を握らうが、雑巾を持たうが、それが正しい職業ならば、何も恥ずるところはない。大統領リンコロンでさへ、さうした生活をしながら、あの偉大な人格を練り上げたのだ。お前がそこへ決心がついたといふことは、全く見上げたものである。やるべし、大にやるべしとばかりで、お婆さん、すつかり喜んでしまつて、公用のステシヨナリーへ、タイプライタアで、私の身元を證明した文句を押して、インキの色も黒々と、フエデラル、ナーコテツク、インスペクタア。カザリン、エム、ヘリングとばかりに、彼女の名をサインして、それを、この封筒を私用するものは三百弗の罰金に處すと摺つてある公用の狀袋へ入れて――仕事が取れたら、すぐに、電話をかけてよこせと、お婆あさん、でつくり肥つた大きな體をゆりながら、白髮あたまを振り立てゝ――私の手に渡してくれた。この國のお婆あさんは、かういふ事にかけては實に深切なものである。私は厚く禮をのべて、その合衆國大藏省の公用の封筒に入れてある、私の身元證明書を持つて桂庵へ引き返した。思ふにドクトル、ヘリングは感激のあまり、公用も私用もそんなことはかまはない。

見る人が私に信用を置けかしとばかりに官省のステーショナリーを使用したものに違ひない。これさへあれば大丈夫と思つたが、念には念を入れといふことがあるから、私が支那人や馬來人ではない、日本人で御座るといふことを證明して貰はうと思つて道の序に、日本人會へ立ち寄つて事情を話して書記の福本君に頼むと、福本君はにつこりしながら、早速、私の生國、身元の證明書を英文で作つてくれた。これで、しめたと思つたから、急ぎ足で歸つて來て、桂庵のミセスにその二通の證明書を見せると、ミセスも滿足して、これさへあればたしかなものですといつた。

さて、そこで私は、桂庵のミセスの渡す先方の番地町名の認めてあるカードを持つて、紐育の成金町、パーク、アベニュー、ユーア、エイテ、フエフス、といふところへやつて來た。で、來て見ると、そこは立派なアパトメントハウスで、白と黑との大理石をチヤツカ、ボオドに敷きつめたエントリーウエーには、金釦のユニフオムに身をかためた大男が嚴しく立つてゐる。

こいつは、いけない、この正面入口からは、お三どん階級の人間は入ることは出來ないのだ。私は、かつて、紐育日本人倶樂部の正面入口から入り込んで、留ちやんに逢ひたいと云つたところが、料理番に逢ひたいなら、下の奉公人出入口から這入れと、大喝一聲されて、縮み上つて綠の下の方から炊事場の方へ廻つたことがあつた。紐育日本人倶樂部となると、紳士方の倶樂部なのだから、やはり日本の區役所のやうに敷居を高くしないとならないものなのだらうが、日本人は、デモクラシイの亞米利加へ來ても、やはり日本式を發揮しちよるわいと、その時思つたのは私の間違ひで、この紐育は、どこへ行つても、お三どんは臺所から廻るものときまつてゐるのは、日本と變りはないのである。

で、私は、アパートメントの建物を曲の手にまがつて、そこにあつた、物賣り人入口としてあるところからなかへ這入つた。日本人倶樂部のは、下男下女入り口としてあつたが、ここのは物賣り人入り口で、この方が云ひまはしが人道に叶つてゐる。

さて、私は、その物賣人入口から、こそ〳〵ともぐり込んで、そこにあるエレヴエターに乘つて、ずつと昇つて、がちやん止つて、すつと鐵の戸が開いたところから、一歩出ると、それは、直ぐさま臺所で、そこにゐた下女どのが、何しに來たと、けんもほろゝに私に訊いた。私は恐る〳〵キヤツプをぬいで、桂庵のカードを見せると、下女殿は、ぽん〳〵した口調

で、マダムに逢ひたいなら、そこに待つてる。今、取り次いでやるからと、捨て臺詞で奥へ行つた。

しばらくして出て來たのが、寢卷姿といつても、華美なネツクレシエーを、しどろもどろに引ツかけた奥樣、お白粉で目も口も埋まるばかり。よく見ると、四十の坂は越えた女。いや、こいつは化物だなアと思ひながらも恭しくしてゐると、桂庵から來たのかい。私の家では召し使ひにも、いゝ部屋をあてがふよ。これ御覽と、そこに戸の開いてゐる一つの部屋を指びさした。

見るとなる程、日がぱつとさし込んでゐて、居ごこちがよさゝうな部屋だ。ビユーローの上にお白粉函だの、口紅脂のステツキなどが散らかつて、ベツトに女の着るものが抛げ掛けてあるところを見ると、これは下女の部屋だな。して見ると、下男を雇つて下女を出すのだな。それ故、下女はぽん／＼してゐるのだな。下女を出して、下男を入れるやうでは、ここの家は仕事はえらいなと、私は探偵の如く目をきかして、探偵の如く分別した。

お前は、家庭の働きの經驗があるかねと、化物は尋ねた。ここだと思つたから、家庭の働きの經驗は充分ありますが、たゞコツキングはやつたことがありませんと答へた。コツキングが出來なくつては家庭の働き人とはいはれない。レフエレンスをお見せと來た。

取り出して見せた一通は、合衆國大藏省の狀袋に入れてある三百弗罰金付きのレフエレンスだ。化物は目をまる／＼して、お前、ナーゴテツクツて何んだか知つてるかへと尋ねた。ナーコテツクといふのは阿片から取つた麻睡劑でしやうと私が答へると、して見ると、お前は、それを秘密で持ち歩いてゐるのかい？といふから、私は吃驚して、どう致しましてと答へたが、お化さん承知せず。禁酒監察官がお酒を賣る世の中だからねー お前は支那人かいと、化物のいふことは穿つてはゐるが、的は外れてゐる。かう云ふ時の用心と思つて、書いて貰つた日本人會の證明書を見せると、化物は笑ひ顏になつて、お前はあまり英語がわかり過ぎていけない。うちの旦那は英語が話せないのだから、それで、旦那より英語の下惡な日本人と思つて、日本人桂庵へ口をかけたのだが、事は思つたやうに行かないものだねエ！ と化物は私の顏を見てゐる。

さうですね。英語のわからないふりなら造作もないことですかといふと、まあ考へさしておくれ、次の木曜日頃迄に返事をするからと、お化けの最後の一言で、私は首尾よく落第をしてしまつた。

□

パアクアヴエニウあたりに住んでゐる成り金程、えたいのわからないものはないねエなぞと、噂をしながら、また二三日、例の溜りで日を暮すと、今度かゝつて來た口は、成り金ではなくて、本式の金持の家のドーア、マン。即ち玄關の立ち番人だ。

よし來たとばかりに桂庵を飛び出して行つたのが、音にきこえた、セントラル・パーク・イイストで、これも角の建物だか、鐵柵をめぐらして、いかめしい、これは住宅造り。アパートメントや何かとは、わけが違ふ。例の如く裏口をさがしたが、なる程金持は違つたもので、日用品はこの入口よりとしてある眞鍮の札がかゝつて、物賣り人とか、召し使ひ人とか、そんな人を馬鹿にしたやうなことは云はない。

ずつと這入ると、英國人らしいお抱への自働車運轉手が立つてゐて、何か用事かねといふ。桂庵から來た由をつげると、では玄關へまはれ、こゝは奉公人の入り口だからといふ。私はその奉公人ですといふと、その運轉手は眞顔になつてまだ奉公をしないうちは、この家の奉公人ではないのだから、正面入口からお入りなさい。私が奥様に取り次ぎましやうと云ふではないか。こゝに至つて、私もすつかり感心したね。なるほど、大家は違つたものだ。私を玄關で怒鳴りつけた、ジャプの倶樂部とは較べものにならない。

そこで玄關へ廻ると、その運轉手が、最早、奥へ私の來意を通じたものか、直ぐに這入れといふから、私は彼のあとについて、大理石も、もう古くなつたと見えて凹んではゐるが、スツトレスに洗ひ清めた奥深いホールを通つて行くと、突き當つて右に大きなマハガニイの戸があつて、それについてゐる青銅の獅子の口からさがつてゐる輪をつまんで、こつこつと叩くと、戸が靜かに開いて、そこには、メードが立つてゐて、二人を中に入れて、また、その戸を締めた。

少し廣すぎると思はれる程な居間の正面には、大きな古風なファイアプレースがあつて、その上には藍の色面白い伊太利の古陶器が並べてあつて、左右には高窓がある。窓の向ふは往來で、セントラルパークの青い樹の蔭が透いて見える。壁は灰色に沈みきつて、居間のなかは寺院のやうに靜まりかへつてゐる。ファイアプレースに向つて横向きに置いてある大きな黒革の椅子にかけた奥様は、くすんだオリーブ色のローブを着て、ゐたが、三十の上を少し越したらしく、賢こさうな目を持つた顔をこちらに向けて、おや、私はロシアンスチューデントを欲しいと思つたのに、このジエントルマンは、ロシアの人で

ないやうですねエと、至極平民的な口ぶりで、傍に來て立つてゐたメードに話した。

メードと云ふのは身の丈の優れて高い、とげ／＼した女だつたが、聲は至つてやさしく、この方は日本人と思はれます。どうしてかう云ふ間違ひになりましたかと、云ふ意味は私にもわかつたが、英語は私たちには思ひもよらないつかひこなしで、奥様のにくらべると、メードの言葉の方がはるかに貴族的だつた。

私が電話帳を見て、私自身が、これは露西亞人を扱ふエジエンシイだと思つて、かけたのだから、手違ひは私のせいよ。

と、今度は私の方を見て、あなたは學生さんですかといふ質問だ。

と、つまつたね。學生だなぞといふと、紐育の人は嫌ふといふ話を聞いたが、周圍の狀況から考へると、學生だと云つた方がよささうだから、如何にも學生で御座りますと云つてしまつた。

私の家には、主人は私だけですが十一人の召し使ひが居りまして、それが皆、食事すると大變なので、こゝには働く方に食事はついて居りません。私は自分の食事を自分で炊事してゐる始末と、奥さん笑ひ顔になつて、しかし部屋だけは一人一人に別なのを上げますが、月給は極く安いのですよ。一ケ月に六十弗差し上げます。その代り、あなたの仕事といふのは、朝の十一時に、私が外出する時に玄關に立つてゐて、戸を明けて下されば、それで午前のあなたの仕事は濟みます。然し、午后には五時頃から、ことによると、明朝の一時頃まで、私が歸宅――それもいつ歸宅するかわからないので時間はきめられないが、――ともかくも、私が歸宅する迄、玄關に、立つて待つてゐて下さい。私が早く歸れば、後の時間はあなたのものです。遲く歸る時にでも書物ぐらひは讀んでゐてかまひません。たゞ立ち睡りをしないやうにして下さい。外から見て、みつともないから

と、奥さんは全くざつくばらんである。

だが私は考へた。食事なしで六十弗といふと、六十弗は食事にかゝつてしまふから、私は部屋代だけで、でくの坊の如く立つてゐなければならない。小便にでも行つてゐる間に、奥樣に歸られては、こいつは大變だし、といふて、日暮れの五時から、夜中の一時頃までそいつを我慢してゐるわけには行かないし、こいつは六ケ敷い藝當だと思つたが、しかし、そこには何とかぬけ道もあるだらうと考へたから、食事のないのは少々とまりましたが、然し書物を見てもいゝとおつしやるならば、やつて見ませうと答へた。

先日迄ゐたロシヤの方は、ロシヤの貴族の亡命者で、私も大切に取り扱つてあげましたが、どうも英語がお下手で、夜會の時なぞは、本當に、そばで聞いてゐて、ひや〳〵しました。あなたも英語は、このメードから習つて、あなたのはなさなければならない言葉だけは、間違ひなしに話して下さい。さう云ふ私の言葉なぞは、とても大變で、英語は、この方——運轉手を指さして——それから、このレデイ——メードを指さして——の方が、私よりは、ずつとお上手でと、いふと、その二人は互ひに顏を見合はせて、オー、ノー、マムと異口同音に、奥さんの言葉をさへぎつた。

私の着るべき、ユニフオームは運ばれた。帽子をかぶつて見ろといふから、金モールを卷き込んだ、土耳古の軍人でも冠りさうなやつを、一寸あたまに乘せて見ると、耳を越えて鼻まで來た、さア皆はころげて笑つた。金釦の服を着て見るがものはない。ズボンの方は、胸から吊つても、その裾がフロアに屆いた。

奥様は考へた。お前さんが長くゐてくれるのなら、お前さんの體の寸法に合して別に注文するが、また二三百弗かゝるから、私に、お前さんのユニフオムを注文させる前に、一應考へて見ておくれといふのであつた。

私は、その金モールのユニフオムを着るのでは、少々厭氣のさしてゐるところへ、奥様の今の言葉だつたから、一應考へて、後刻、電話で御返事を申しましようと逃げ言葉をこしらへて引きさがつた。

玄關まで送つて來たショフアーは、食ものは、買ふには當らない。夜會をしたあとのあまり物が、いつも食べきれない程殘つて捨てるくらゐだからといつた。然も、夜會は一週間に二度もあつて、夏になれば、お前も別莊の方へ行けるのだから、ここで働けと勸めた。

しかし、十一人の召し使ひの間にはさまつて、そのうるさい葛藤をきりぬけて行かなければならないとなると、こいつは心棒して見るがものはないと思つたので、桂庵へ引きとるが早いか、私はミセスに賴んでことはりを云つて貰つた。

□

さうかうしてゐるうちに、その週もまた終りに近づいて、懷中もやゝさびしくなり、お猫さんも、それ見たことかといはないばかりの顏をしだすやうになつた頃、こゝにまた一つの口がかゝつて來て、それは私にも出來さうだといふので、桂庵のミセスは私を溜りから呼び出して、例の通りカードをくれた。

宛名を見ると、ミツス、マーテイン。アドレスを見ると、十

一丁目、東入り、十五番。はてな、知らない人ではあるが、十一丁目ときくと方角がよくないな。私の住んでゐた華盛頓角園からは目と鼻の間だし。お猫さんの住んでゐる、今の私の宿からは三丁ばかりしかないし。これでは私の最初の豫定の、ハドソン河の上流の、青い樹の葉に紫の陰のちらつくどころのさはぎではなくなつて、もとの古巣のラテンクヲタへ逆戻りをすることとなる。こりや困つたなア、十一丁目の西入りには、昔名染のドロシイ、ウイツテが住んでゐるし、さうして、そこは、第五街の大通りを突ツ切つて、たつた一とまたぎのところだし、どうも大變なことになつて來たが、然し、これも懐中との相談で萬やむを得ない場合だからなアと、とつおいつしたからも、私の體は高架電車の速力でその方へ運ばれた。

番地の十五番といふのを目あてにして來て見ると、これは昔から見馴れた家で、テラコツタの塀を低くとりまはして、無花果がその入口に立つてゐて、家は極く小さいが、家の前にガーデンを取つたところは、此の近所にはどこにもない。このあたりは千弗紙幣を地に敷いて賣買するやうな地所だから、ガーデンを邸内に置かうといふのには百萬弗の金がないと出來ないことで、あたりの家は皆大厦高樓で、五階より低いのはないのだが、この家はたつた二階で、造りには飾りも何もないところが、如何にも、借家でないといふことを物語つてゐて、一寸奥ゆかしい。のみならず、この家には、雇ひ人入り口も、日用品持ち込み口も、何にもない。門から、ずつと入ると、正面に一段あがりの階段があつて、平凡な板の戸が、そこにとざされてゐるばかりである。

窓のなかゝら、のぞいてゞもゐたものと見えて、私が、階段へ、一歩かけるや否や、その板の戸は開かれた。顏を出したのは、若い令嬢風の別嬪で、——令嬢は若いに決してきまつてはゐないのが亞米利加だが、この令嬢は珍らしく若かつた。——飾りはないが、身にぴたりと吸ひついた衣裳を着てゐて、あなたは、エーヂエンシイからお出でゝすか。さア、どうか、カム、オン、イン、と、いふので私は戸を入つて、すぐと左にしつらへてある、テラコツタの段を上ると、そこに小さな應接室があつて、プリース、シーチユアセルフ、オン、ゼ、スツールといふから、云はれるまゝに、その支那風の陶器のスツールへ私はかけた。

この家には仕事といふのは澤山はありませんが、朝七時に起きて、入口に配達されてゐる新聞と、牛乳を、取り入れて下さい。それから、地下室のフアーネスを焚き上げて、家のなかに暖氣と湯とを絶やさないやうにして下さい。この時、毎日の

灰を取つて、八時に、丁度こゝへ來る、ガーベツヂマンに、それを渡して下さい。朝食後には、御主人の書齋を一應掃除して下さい。十時頃からは用無しで、大學へお出でになるのなら、こゝから通學してかまひません。然し、家にゐらつしやるのなら、犬をつれて、一時間程、公園でも散步して下さい。正午には、ランチを差し上げますから、それがおすみになつたら、地下室のフアーネスを見て、私の指圖によつて、火を焚き上げたり、火を落したりして下さい。晩は食事は七時で、その前にまたフアーネスの灰を落して、それから、あなたがお休みになる前に、フアーネスの上の戸を明けて、下の戸をしめて置く。それだけの用事です。但し、一ケ年以上ゐて下さいといふお約束でないと、私の方でこまります。月給は七十弗で、御部屋は、日當りのいゝ、御勉强の出來るやうな部屋を差し上げます。レフエンスをお持ちなら拜見したいものですがと、令孃は、てきぱきと云つてのけた。

前に、三百弗罰金つきのドクトル、ハリングの證明書で、催眠劑を持ちまはる男と思はれて失敗してゐるから、今度はその方は見せないで、福本君のくれたやつを先へ見せた。すると令孃はそれを讀み了つて、これ一通ですかと云ふから、恐る〱、例の催眠劑の方を見せると、令孃はとつくりとその文面を見て、この官省に勤めてゐらつしやるお方は、どなたも立派なレデースです。かう云ふ方の證明書をお持ちになつてゐらつしやる上からは、當家の主人もさぞ滿足して、あなたをお抱へになるでせう。で、あなたの方は如何です。それで御承知ですか？と、かう尋ねられた。

さうですな、して見ると、私は、つまり、フアーネス掛りですな つけたり、御愛犬のお守りもしなければならないわけですなア。私は腕力がありませんから、そのフアーネスの前に立つて、シヤベルで石炭を、投げ込むことが出來るかどうか、それが頗る心配ですがと云ふと、令孃は顏を赤くして、實は、私が今迄、それをやつてゐたのですといふお話し。では、フアーネスは小さいのですねと尋ねると、一萬噸の軍艦のとは違ひますと、令孃は、もう我慢がしきれなさうに、はゝゝツと笑ひ出して、部屋から外へ逃げ出してしまつた。

はてな、どうしたのだらう。あの令孃の御機嫌でも損じたかしら、そんなこともあるまいがと狐にでもつまゝれたやうに、ぽかんとしてゐると、應接室の戸が外から明いて、入つて來たのが、これはしたり、ミツス、ローレンス、と、云ふのが彼女のペンネームで、實の名前は、レープさん。萬國公法の學者で、おまけに小說家。私は、四五度今迄にお目にかゝつたこと

のある、ものやさしい老令嬢。と云つてもまだ五十にはならない。

とんでもないところでお目にかゝります。どうしてあなたはこゝへと私が目をまるくして、ぶつたまげて、尻り餅をついてゐると、

レープさん、いつものしんなりした腰を少しひねつて、片肘を、と、張つて、片手の指先でネツタレースの眞珠の玉をつまみながら、ほゝツ、私はこゝの主人だといふことを、あなたは御存知なくつて？ あなたが、マアケツトへ賣り物に出てゐるといふことを、風の便りにきゝつけたから、やつとそのエヂエンシイをつきとめて、賣り物に買ひ物ならば、これは掘り出しものだから、私の家へ買つて置からうとしてゐるところなのよ。七十弗では安過ぎて？ といふ御言葉で、私は金にはかへられないから、往生して、へいよろしゆう御座いますとばかりに、ぽんと手を打つてしまつた。

—了—

松の木の日本國

野口米次郎

其一

私の少年の追憶は弘淨寺の松の木で始まる……松は、雪舟が墨色淋漓と描いた雄松のやうに、天へ昇らうとして地上との離別を惜む植物界の大蛇だ。弘淨寺は私の鄕里にある淨土宗の寺である。詳しくいふと鄕里の家の二階に大きな丸窓があつて、外を覗くと右手に見える寺である。然し私の追憶に問題となるのは、この寺の屋根でない、この寺の墓場の隅に小さく埋まつてゐる私の妹でない、この寺の奥の院にある稻荷の社でない又庭の池へ水を飲みに出る狐でない。幾百年たつても雄渾の氣魄を失はずに周圍を睥睨する松の木が、天氣の良い日には、常日綺麗に掃除された本堂前の廣場へ黑い影を投げるので、こ

の寺が私の追憶の最初の頁を塞くのである。この寺が、むしろこの大きな松の木が、少年時代に於ける私の遊友達であつた。

私の少年の追憶には梅樹が無い、櫻花が無い、霧のやうに煙る晩春の柳が無い、又瀟洒な立姿の水仙が無い、私は少年の時この百年綠を變へない松から、横擴がりに下へ向つて稜々たる氣骨の幹や枝を無遠慮に伸す松から、一言で蔽ふと、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はるゝ松の木から、所謂男性美の影響を受た事を喜ぶものである。私はこの弘淨寺の松の木を遊友達としたといつたが、實際には私はその木を恐れたのである、一種の恐怖心を以てその木に接したのである。松には、雲雨を得て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲羅の皮膚がある。松には、觸ると手を刺す針の様な松葉がある。松には人に婉麗の感をそゝる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私の追憶は、群青金泥の酒井抱一の松でなく、毅然として百難に堪へる雄姿が紙上で風雨を呼ぶ雪舟探幽の松である。私に語らねばならない追憶が多い。

煮えくり返へる様に熱い夏の日が續く。田地田畑に稻や麥が唇を潤し根を濕すに足る一滴の水もない。地面は破れ始め樹木は萎れかける。日中は蟬が雨か霰の様に雨乞の歌を地上に降らす。夜分になると家の前を雨乞の百姓が鐘や太鼓を叩いて牛頭天王の御社へと急ぐ。物凄いほど眞暗な御社には雨乞の百姓を迎へるため提燈が燃え篝火が焚いてある。御社の神主の家の座敷へ昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽の瀑布の畫が出されてからもう十日以上になる……沛然たる雨を呼ぶ筈の『探幽の瀑布』はどうしたものか魔力を失つたのであるか。十五日の滿願の朝早くから無言の祈禱を歌つてゐる巨人がある……外でない、弘淨寺の松の木である。間もなく天は曇り始め力强い風が吹きだす……いなそれは雨を祈る松の木が吐きだす數龍の唸り聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐ろしく大粒の雨が落ち始め。半時間もたゝない中に天を覆ふして降る豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは弘淨寺の松の木である。たれか私の外に、篠突く雨を全身に浴び傲然として立つこの松の偉觀壯觀を見たものがあるか。この松の木の態度は、百倍の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する猛將軍のそれであつた。

私は弘淨寺の松を單に樹木とは思へなかつた……面を拂ふ春風に乘つて一つの白い蝶々がこの松にとまつた時、私はその溫顏に平和の微笑があることを知つた。群禽を眼下に睥睨して擴げた大鵬の羽が、急に嬌態を作つて顧眄する美人の扇面と變つたと思つた。私は靉靆たる霞の春の日に、この松が奏でる午後の催眠歌を聞いた。さうしてこの松が雪の朝に、ぽつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて金剛石

のやうな光を放つた時の光景はどうだ。私の家は傳統的に熱烈な佛教信者であつて、私は朝念佛を聞いて起き、夜念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の聲が弘淨寺から響いた時、私は私が尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざるを得なかつた。私は夕景の木魚を聞くと、家の二階の丸窓をぱつたり締めてこの松を見ることを恐れた……夜陰の空に立つ其姿は實に恐ろしいものであつた。私は夜になると天狗の寢床になるであらうとさへ想像した。また私は母から、死んだ妹の杓子のやうな人魂がこの松の間へ落ちたといふことも聞いた。

弘淨寺の松の木に關し私の忘れることの出來ない追憶がもう一つある。私の追憶は九尺以上もあつたと思はれる彗星に關係して居る。世界が結局に近づく印として彗星が現はれるのだと聞いた時、どんなに私の小さな胸は戰慄いたであらう。夜も三更に近い時、母は眠れる私をゆり起こして二階へ連れ出し、例の丸窓を開けて弘淨寺の松の木を見よと語つた。私は恐る〳〵青臭い呼氣を吐く老龍の松を見た……老龍の角とも思はれる邊に妖魔の彗星が引掛つて居つた。私は、むしろ私の心眼は彗星の光に照されて松葉の針がぎら〳〵光つて居つたやうに感じた。私はどうしてこの物凄い深夜の光景を忘れることが出來よう……これを思ふと、私は今も身振をして其夜の恐怖に襲たれる。

私は餘り多辯に恐怖の松を語りすぎた。私は恐怖のあとに歡樂の松を語らねばならない。私の歡樂の松は一の字に並んで、天王川といふ圓い瓢簞池の眞中を締括つて居る。この池の中へ突出して池を二分してゐる松林の土手を猿尾といつて居る。諸君は廣重の『六十餘州名所圖會』の中で、津島の提燈祭の夜景を見たことがあるか。夜の山車の天邊をお椀形に飾る數百の白い提燈は、山車の中から響く太皷の音に連れ上下左右に動く……この山車が五臺揃つて、溢れる夢幻の夢曲をこぼし乍ら猿尾の松の木の彼方を練り乍ら、其先頭の山車が將に此方の廣い池へ出ようとして松林を離れる光景が廣重の繪だ。私はこゝで廣重の繪を語るので無い。又この提燈祭を語るので無い。私の興味は猿尾の松の木に限られねばならない……私共は廣い此方の池の堤防に立つて居ると想像する。堤防の眞中には牛頭天皇の神輿が苔蒸す神社から出張つて、今山車が揃つて面前に禮拜して來るのを待つて居る。堤防の上には無數の見物人がぎつしりと鮨詰めになつて居る。私の興味は猿尾の松の木に限られねばならない……見よ、練りだして來る大きな提燈のお椀

は、小さな提燈の山は、今松の木の間から動いて見える。ああ、これは深夜に見る美の幻だ。如何なる詩人でもこの美觀を歌ふには力が足らない言葉が足らない。幾千といふ提燈の光に照らされて猿尾の松林は珍らしい青い色を放散する……この色は如何なる繪師でも出したことが無い色だ。この支那の青磁以上に、地中海の青い波以上に青い松の林は、動く山車と共に上下左右に動いて見える。堤防でどよめく見物人の騒々しい歡呼の聲に應じて動いて見える。この光る動く松樹の美觀に匹敵し得る美觀が、世界の何處に有るだらうか。もとより有りやしない。

然し私は津島出身者として、更にもう一つの長い松林の美觀を語りたい。それは天王川から引續いて一里半にも及ぶ廣い立派な、津島と前ケ須とを結付ける堤防の兩脇を飾る松林をいふのである。この威風堂々たる堤防は、佐屋川が今日のやうに人間の力で破壞されて仕舞はなかつた舊時代の遺物である。私の少年時代には、佐屋川の綺麗な水が右側の松林の下へ廻つて來て提燈祭の天王川へ注き込んで居つた。其處に細い流を柳が緣を取つてゐて、春陽四月の頃になると柳の若芽が煙り、煙る若芽と水との間を澤山の燕が飛びよつたことを記憶して居る。私が倫敦で、バンジョンスがテニソンの詩に因んで描いたシヤロット姫……一日下を通るランスロットを眺めた罪で生命を失ひ魔のお城から捨てられたシヤロット姫、硝子張りのやうな蒼白い目の死顏した姫が蘆の間の小舟に乘つてゐる姫の繪を見たとがあつた時、ふとこの土手下の小さい流れが胸に浮んで來て、この松並木の堤防を中世紀の騎士ランスロットが馬上で、口笛を澄み切つた空へ響かせ、着てゐる甲冑の音で若芽の柳を動かし乍ら走るやうな氣がしてならなかつた。實際この見事な松林の間を歩いて居ると、何か不思議な浪漫的武勇事件が起るやうな氣がする。夏なほ寒い風が幾里の遠方から吹いて來る。もとよりその風に肌を冷めさせるのも愉快の一つだが、私が最も愉快な光景として忘れられないのは、松の青い色と黄色の菜種の毛氈とを對照に眺めた時だ。松並木の左側は沃野十里（假令千里でなくとも）と擴がる菜種の畦で、花盛りの時には、王朝時代の戀歌の色紙でも飛ぶやうに、幾百幾十といふ蝶々が温い南風に乘つて飛ぶのを見るのだ。又かういふ時節に、「伊勢參」の木遣音頭が聲高らかに松並木を流れて來ることもある。

松樹の青色と菜種の黄色との配合……群青と金泥を描いたなく六枚屏風に流したならばどんなに見事な繪を成すであらう。私は青と黄との配合のみを美觀なりとはしない。松の木は正にこれ調和の神だ。如何なる自然の現象とでも調和して、しかも個

性を失つたことが無い。むしろ對照となる諸相を美化し雅化して不思議な祕術を發揮する。嵐雪に何がある、『花を出て松へしみ込む霞哉。』右手に見る一面の花の山、それに對照する青い松林。この二つを結付ける霞の春景色に何といふ婉麗さがあるであらう。朝はまだ早くて薄暗い霧が周圍を包んで居る、其中にぬつくと顔を洗つて立つ青松一本の姿には、人の起きない以前に祈禱を捧げる信仰の深い清僧の面影がある。行意の歌に、『ほの〳〵と與謝のなけひの朝霧にあらはれ渡る天の橋立』とある。これぞ限りない詩趣ある一幅の日本畫といふべきであらう。私共は栖さす夕日に松の緑を對照させて見たい。樗良の句に『夕日うれし月夜にまさる松の影』とある。**初夏の一日も將に暮れようとして鳴き始めた蟲の聲は漫に寂寞を送る。私は日暮前一時間に感ずる寂寞**味を最も心に滲るものとして居る。時に眼前に横たはる松樹の影の長さ幾丈ぞ。

『からさきの松は花より朧にて』の芭蕉の句は何處に價値がある。漫々として岸に溢れる湖水の春は夜なほ明るい。湖水が流す銀波の幽かな光に照らされて唐崎の松は花以上に霞んで見えるといふ點に作者の詩的發見がある。芭蕉の句としては必ずしも上等の作でないかも知れないが、決して其角の『朧とは松のくろさに月夜哉』以下に屬しない。然し事實としては、月夜に眺める春の松樹位朦朧たる美觀を呈するは無い。私は夏の月に對照させた松を歌つた詩歌俳句の名作を知らない。松の木を徐々としてしかも急に登る團扇大の黄金の月は、云はずと知れたこれ仲秋の月だ。私は、汗牛充棟も啻ならない名吟愚作を讀むよりか、千金の價値ある月影を踏んで松の下に佇みたい。然し繪の中で、廣重の木曾街道六十九次の内『望月』の一枚を忘れることが出來よう。滿月が路傍に林立する巨大な松樹にかゝつて、其下を家路を急く馬子や疲れた足の旅人が通る木版繪である。私は大地により近く接近して自然の腰から足部を眺め、禮拜するにしやがむ必要のない『坐る人間』として、天上の月よ**り地上の松樹に一段の愛と敬意を持つものである。**

降雨と松樹との對照を描いた畫家としての廣重は世界に隨一であらう。春雨、五月雨、夕立さては秋の雨、それ〳〵其姿と其趣は千差萬別でも、單調の空から破れて落ちる自然の聲だ。其聲には神祕がある渴望がある。天空と地上と人間とを降雨の景で代表させた廣重の繪には、天上地上の合奏がある。今江戸近郊八景の内『吾嬬杜夜雨』を見よ、左から斜に道路の松樹を撃つ雨は細く淡い。雨に濡れ乍ら路を急ぐ二人の心に何たる春夜の愛愁があるであらう。新撰江戸名所隅田川堤白雨の圖で、畫面の主人居並ぶ松樹を垂直線の雨で濡して居る。私はこの畫

を眺めると、太い夏の雨に叩かれて砂煙する地面の臭氣を感ずるやうな氣がする。何たる松の緑に對する降る雨の白色の好配合であらう。優麗平和の詩人畫家一立齋廣重に、暗い空間を一閃射して寸斷する稻妻の繪が無いことを咎めてはならない。雷は遠方に轟き、白雲は暗雲と變つて半天を蔽はんとする時、物凄い稻妻が松原を射つて落ちる。この光景を某俳人は『稻妻や二本までよむ小松原』と書いて居る。雷鳴が止み、急激に或はだらしなく降る雨がぱつたりと止み、『梅雨も終つたな』と私共が叫ぶ時、日本人で誰が『白雲白く松高し』の光景を知らないものがあらう。

光淋の二枚折屏風に、中央に奇怪な松を描きそれに配するに一羽の鶴を以てする繪がある。鶴と松との調和の愉快なことはいふ丈け野暮の沙汰であらう。松鶴いづれも壯麗な自然現象の一對。私は實際にこの兩者の對立して居る光景に接したことが無いが、神韻縹渺たる想像を胸中に描くことは極めて容易である。鎌倉右大臣の歌に、『姫島や小松かうれにゐる田鶴は千年經れとも、年老すなり』又貫之の歌に、『我宿の松の梢に鳴たつを千代のゆかりと思ふへらなり』とある。私はこゝで其等の歌の價値を議論するのでない。たゞ松鶴二つの意氣は昂然として千年の榮辱以外に立つてゐるの感があると云ひたいのである。

私は彼等には、白砂碧水の間に永遠の生命を維持する靈性があると云ひたいのである。松樹は鶴と對立して太平の畫題となると同時に、鷹とも鳩とも又雀とも調和することが出來る。馬とも鹿とも乃至は螢とも蟬とも調和することが出來る。雉子とも闇夜に幽寂の消息を傳へる濱千鳥とも調和することが出來る。松樹は鳥獸と調和して畫題を提供するやうに、雲と見まごふ幾朶の櫻とも調和して、閨女に『山松の間々や花の雲』と云はせて居る。燃えるやうな赤色の躑躅とも梅とも竹とも調和することが出來る。芭蕉に句がある、『松植ゑて竹の欲しさよ秋の風。』

謠曲一角仙人の道行の言葉に『山遠うしては雲行客の跡を埋み、松寒うしては風旅人の夢をも破る假寢かや、露時雨、漏る山陰の下紅葉〳〵、色添ふ秋の風までも身にしみまさる』とある。秋の山嶽は、所謂龍田姫が織りだす錦繡の紅葉に對照させる青緑の松を以てその生命とする。私はいまだ嘗て嵐山へ櫻見にいつたことが無いと同時に、龍田山の秋の紅葉も知らない。然し私は紅葉と松を並べて其美を觀賞し得る機會を、こゝ東京郊外の東中野に住み書齋に坐り乍ら持つことが出來ることを喜ぶ。庭は二百坪に足らない猫額大の面積に過ぎないが、中央に一本の松を植ゑ、それに配するに眞直に高い老木の山紅葉を以てして居る。秋も末になつて夕日の赤い時、それに照返へすこ

の紅葉の美麗さ、まつたく春の櫻花以上の美觀である。私は佐保姫のだれであるかは知らないが、龍田姫の伎倆の方が遥に冴えて居る。龍田姫の傑作でなくても、その作品ならどんな斷片にも捨てがたい價値がある。

嬋娟たる手弱女のやうな蔦が、錦のはれ着を纏つて武骨な雄松にからみ付いて居る有樣を見よ。紫色艶麗な藤が、苔蒸した山間僻地の老樹からだらりと下がる優美さを見よ。『法然の珠數もかゝるや松の藤』と見立てた所が、機智に富むと云はれる蕪村の思附だ。秋の山路を一面に蔽ふ七草の間を歩いて、細腰可憐な女郎花を眺めて居ると自然に凛然たる枝幹の松が、眼界に入ることがある。一は露をも厭ふ媚めかしさに、他は猛颶を恐れない丈夫の健剛な姿。私が陶淵明を愛する理由は外でない……彼が菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見たからだ。幽かな清香を放つ菊花と共に、賢者が好むといふ永遠の山を眺める陶淵明の心理狀態は私によく了解される。即ち私今日の詩境である。

『六十餘州名所圖會播磨舞子濱』は廣重の作として人を喜はしめる木版畫の一である。この繪の雅趣は白砂青松の四字で盡る。枝幹を交へて立つ老松の數は容易に計算が出來ない。波浪が音律的に洗ひ寄る白砂の上に寝そべつて、奇怪な老松の影を浴びると、文字通り半日の清遊を恣にすることが出來るであらう。私が始めてこゝを訪問した時の印象は今日なほ忘れることが出來ないが、菅茶山といふ漢詩人同樣に、『蛻叟亡來無好句、鷗聲帆影背殘春』の感あるのみである。須磨明石の所謂名所としての價値は、舞子濱と等しく相應へる亂松が白砂の上に立つ優美な配合に懸つて居るといふこと云ふまでもない。春風柔かに吹く時、其等の老松が奏する音樂に耳を欹てることだ。其等の老松が眼を遠く漁舟に送ると、時には周圍の靜寂を破る船歌が東天低く懸る大きな月の中へ消えて行くのを感ずるかも知れない。高砂の尾上の松に關しては、『高砂の尾上の鐘の音すなり、曉かけて霜はおけども松か枝の葉色は同じ深みどり、立ちよる陰の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、まことなり松の葉の散りうせずして色はなほ正木のかづら長き世の』とある謠曲の文字を借りて、この沈默の靈樹を祝したい。

然らば鬼貫の句になる『春風や三保の松原清見寺』の美觀は如何。もう一度謠曲の文字を引用したい……『わすれめや山路をわけて淸見がた、はるかに三保の松原にたちつれいさやかよはん、風向ふ雲の浮浪たつと見て〳〵、釣せで人やかへるらん、待てしばし春ならば吹くものどけき朝風の松は常磐の聲ぞかし、浪は音なき朝なぎに釣人おほき小舟かな。』『高砂青松が靜

な清水灣に突出する景色は、東海道中一番の場所であらう。汽車で名古屋から東京へ向ふとする……遠州濱名湖邊の美觀を別にして、靜岡を出て始めて東海道の景色は縱横無盡な變化を顯はして來る。富士は亭々と聳える青綠の松樹の間から見えたり隱れたりする。白砂の海岸や紫色の海は立並ぶ松の木を得て、その白さと紫色とを一層清らかにする。東海道に松が無いならば、何邊に風光明媚があり得ようぞ。

洋々たる晩夏の海も、のたり〳〵と流れる春の川も、たゞ水の存在としては藝術的價値がない。然れど彼等が松の木との配合の上に立つと、直に其價値を百倍する。朝は淡霧を捨てる青い松を金波銀波に映して彼等に價値がある。夕方は、紅い雲を卷く靑い松と音律を交へて彼等に價値がある。海濱の旅亭に宿り深夜夢を結び得ない時、颯々と響く松林の音を聞く感じは如何。其時起つて雨戸を細目に開け、傾く月に照らされて薄靑い砂上に海黑い影を印する松を見た時の感じはどうだ。湖畔の松の木は靜寂である……波の無い湖水は壁となつて、遠隣の松を默想に送るであらう。池畔の松は平和な水を鏡として青い松葉の髮を櫛けづらせる。若し夫れ白虹となつて落ちる瀑布を眺める松の木に至つては、必ずや瞬間も停滯しない水に向つていふであらう。

『君は永遠に動き、
僕は無終に靜まる。
「君はどこまで動いて行かうとする」……これが僕の質問だ。
惡いことを尋ねた、君自身もそれを知るまい。
僕は僕の靜止を智の表象とは思はない。
たゞ、靜止するのが僕の身勝手だ。』

自然はこれ必竟積極と消極の紋織、影と日向の管絃樂、靜と動との合唱である。自然は互に和するとを知るが決して同じでない。一定不動で場所を變へない松の木は、愛と友情の歡を天と地との間に送る……時には感激し時には微笑し時には流涕する。然れど松樹は他に完全な自由を許し、決して他の行爲を束縛制限しない。さうして自分の個性を極力保護し存在の意義を明かにする。

私は更にもう一つ松に關する重大な追憶を語らねばならない。何故に私が重大といふ言葉を敢へて使ふかの理由を、讀者は今直に知るであらう。私の追憶の場所は松の公園芝の山内。時は立並ぶ松林の無言に落とす影が一層神秘的に黑い仲秋の晩。私の舞臺裝置は極めて簡單である……松林の間に立つマ

ツチ箱のやうな小さい二階家。燈火の無いこの家は眞暗である、いな、松の林を洩れる滿月の光で薄明るい。登場人物はただの二名……一人は七十歲に近い俳人其角堂永機。他の一人は誰でも無い、私自身である。

讀者はこゝまで讀むと、これはノグチが永機宗匠を滿月の晩に訪問する場面であると直に思ふであらう。卽ち其場面である。其頃私は十八歲のほんの少年であつたが、私の詩を發達させる上に彼を直接訪問することが最大急務であると思つたに相違ない。私は千金の價のある黑天鵞絨の松影を踏んで彼の暗い寂しい『詩の家』へ接近した。老永機は江戶子である。彼は蓼太のやうに『名月や生れかはらば峯の松』とでも思つて、家の入口に蹲り乍ら松の木の天邊を見上げて居つた。私は私の來意を語つた。彼は私を二階の座敷へ請じ入れた……其處には燈火以上に黃金色な滿月の光線が室內に溢れ、梁の上に大きな松の影が墨黑ぐろと描かれて居つた。私はこれを見て、『あはあ、「名月やたゝみの上の松の影」ですね』と叫んだ……：この瞬間位私の心が自然とぴつたり合一したことは無つた。この瞬間には過去も現在も將來も無く、茫漠な永遠が自然の實相として顯はれて居るのみだ。眼前に見る梁の上にある松の影は、松の影で無くて詩の潜戶であると感ぜられた、さうしてその潜戶の彼方に大きな想像の世界が横たはると感じられた。其處で始めて私の詩の世界への路が、明瞭に見通されたのである、卽ち私の詩人生活が始めて開かれたのである。禪宗坊主の言葉を使ふと、私は其時始めて詩の悟を開いたのである。永機宗匠は私に、『あなたは發句をお遣りですね』といつた。私は無言で、梁の上の松影を凝視し乍ら頭を下げた。然し私の訪問の目的は今十分に達せられたので、立去らうとしたが老俳人は私を引留めた。私とこの老人との無言の對座はまた數分間續いた……昔カーライルとエマーソンとが倫敦で沈默の談話を交はしたやうに。私はこれ以上この追憶を語る必要が無い。其角の作として平凡の一句であるかも知れないが、『たゝみの上の松の影』で私は眞實な自然の實相を握ることが出來た、私は眞實な詩境に入ることが出來た……私は年少の頃に已にこの秘密に觸れたといふことを感謝するものである。

他の自然現象と溶け合つて歌の一曲を合唱する松の木の態度は謙讓だ。他の行爲に自由を許して一幅の繪畫を作る松の木には、自分と違つた存在を理解する叡智がある。然し如何に個性を松の木が保守するにしても、他と合唱し他と同行動を取る場合には、彼の個性は傷付けられるであらう。私はこゝで山の頂上に立ち一本松を遙に眺めて、彼の無言と孤寂から生れる威嚴

の獨唱を聞きたい。獨唱家としての一本松に、何たる完全な自己表現があるであらう。何たる存在の威嚴があるであらう。私は曾て『山上の一本松』を歌つて、から書いたことがある。

『今日お前は鳥一羽も飛ばない青空の下で、
たつたひとり歌つて居る……
お前は、あゝお前は朗な聲の獨唱家！
私はお前の獨唱を聞いて、
始めて最高潮に達したお前の美を見ることが出來た。
お前の獨唱家としての態度には獨立の大きな威嚴がある。
そしてその獨立は沈默と孤獨の聖なる空氣の中で育つたものだ。
お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、
あゝ、お前の銀のやうな獨唱に、
何たる壯麗な神嚴を私は感ずるであらう！』

其 二

私は今松の木の無い米國から、十幾年振りで松の木の故國へ歸らうとして居る。日本へ到着前一日の太平洋は暴れにあれる。波が昇ると峰巒迭遞の狀態を作り、波が降ると千丈の谿谷となる。半熱帶的波浪の滴るやうな緑色は、日本の海岸に接近するに從つて憤怒の黑青色と變はる。私の狂想が、半西洋人となつて歸へる私に對する日本海神の暴動的謀反ではあるまいかと思つた時、私の心は靜に精進した。日本の近海は深い、不正直な僞計の人間を溺らすに足る。日本の近海を襲ふ風雨は暴らい、信仰の無い輕薄の人間を戒めるに足る。私の心は恐れる。恐れると恐れるほど私は故國に對し愛慕の情に燃える。

翌朝になると憤怒の海は微笑の海と一變した。人間を威嚇する自然は人間を愛撫する自然である。暴風雨が一過した後の平和の海に、何たる靜謐さがあるであらう。昨日まで私を無慈悲に威し附け睨み附けた日本の海は、今私を宥める可愛がる。私は日本の子供である。親の日本は氣まぐれの專制者である。私は其前に跪いて恐れる敬する。船は將に觀音崎に近づかんとする……見よ、私に手を振つて歡迎するものがある。外のものでない、其處に立つてゐる松樹である。聞け、聲高らかに私を歡迎するものがある。外のものでない、其處に立つてゐる松樹である。私は日本の代表者としての松から、百難に挫折せず雄剛な勇氣の英雄樹松から、綿綿たる艶麗な情緒を四期一貫して失はない愛の木松から、最初の歡迎を受けたことをどれ程喜んだであらう。私は再び翠緑滴らんとする松の木の日本へ歸つた

ことをどれ程喜んだであらう。

船が觀音崎を離れて横濱へ向つて進む。左右に見る連山は松樹で青い。然し其青色は、巴里郊外で見る樹木の淡青色でない。此處で見る松樹の青色は、萬代經ても變色しない千早振神代からの濃綠色である。前者に艷麗な抒情詩がある、さうして後者に靜寂な默想がある。默想の日本は年老いて居る。しかも歌ふことを忘れない踊ることを忘れない。松樹を見て、如何に日本人の魂が古く若いかを知らねばならぬ。私は嘗て日本の景色を描きに來たことがある有名な米國畫家から、日本の松の綠青色が如何に出しにくい色であるかを聞いた。この松の色はパレットの上で至難な色であると同事に、審美の上で觀賞するに六ケ敷い色である。松樹で蔽はれる青色の日本に、薄暗い影がある耳語の神秘がある。古い追憶と幽藻が永久に新しい意識を漁り、永劫に老いない生命に復活する。

審美學者の說に依ると、綠青色の感覺と觀賞は赤や黃などを味つた體驗後に來るべきもので、一段と進んだ心理の所有者である國民に對する色である。日本人が松樹の色を了解して、其感化を受けてゐるとするなれば、確に私共は、赤や黃に對して敏感な歐米人より、遙に進步した精神狀態の國民であるといふことが出來る。貫之の歌に、『岩清水松枝深く影見えて絶ゆへもあらぬ萬代の影』とある。私共の祖先は幾千年間も、萬代不易の影と眺めて松の下に立つた。倭建命が『青垣山隱れる倭し美し』と歌つた以來、日本の歌人俳人さては詩人で、この青垣山の松樹の國を謳歌讃嘆しないものは無い。私は日本人に與へる松の偉大なる感化を喜ぶものだ。もとより過去の日本に於て有意味の大事件を、悉く松の感化とするもので無い。又所謂武士道を松と一緒に論ずるもので無い。然し私共に堅忍不拔の性質がある、私共は百難に屈しない奮鬪の勝利者である、私共は末節に拘泥しない健剛の丈夫である、私共は滿節を重んずる詩人であるとして、其表象を永劫の青年樹たる松の木に求めるのは自然である。日本人の表象として私は松を禮讃するのである。

もとより横濱灣内の景色の如きは、瀨戸内海の美觀に比較すると粗末極まつたものだ。瀨戸内海の風致は日本に冠たると共に、恐らくその匹儔は世界に少い。若し人が、(日本人でも西洋人でも、)完全に其美景色を味ふとするならば殺風景な赭山の朝鮮から瀨戸内海に入らねばならぬ、又非藝術的な印度支那から其處へ入らねばならぬ。瀨戸内海の美は靜態として並立つた有の青い山と其間に溢れる青い水との對照の上にあるとはいふまでも無い。青い山は無數に繁る松樹である。青い水はこゝそこに散る小島にあたつて破れる。小島と小島との間を

が、水上に落ちる有様は宛も碁石が盤上に散るが如しだ。『萬里一碧』といふ言葉は瀨戸內海を見て始めて使ふことが出來る。實に風景佳絕の長たりといふべきである。其處に流れる水は香氣ある酒の水だ。其處を滿たす情調的雰圍氣は紫色の煙だ。青い松樹の山と青い水の暗明境だ。私は嘗て瀨戸內海で歌つていつた『私は言葉のない歌を聞く、それは私の飛ぶ心の歌、私は千年も以前に夢見た私の夢の歌、おゝ私の仙女の世界の夢……おゝ瀨戸內海の美はしさよ。』

私は今全島松樹を以て美景の生命とする松島を、芭蕉に語らせたい。『松島は扶桑第一の好風にして凡洞庭西湖に耻ぢず、東南より海を入れて江の中三里浙江の潮を湛ふ、島々の數をつくし欹つたものは天を指し伏するものには波にはらばふ、左に分れ右に連る、負へるありふせるあり兒孫を愛するが如し、松の綠こまやかに枝葉潮風に吹き撓めて屈曲自らためるが如し、其景色窅然として美人の顏を粧ふ、千早振る神の昔大山ずみのなせる業にや造化の天工何の人か筆をふるひ言葉をつくさむ。』これ以上語るは贅言に近い又この芭蕉の美文にしても到底松島の實景を傳へないならば、等しく贅言の範圍を出ない。それで『おゝ松島や〳〵』で匙を投げた所に、芭蕉の眞面目が詩的に躍動して居る。私はいつも語る芭蕉に興味が無く、沈默の穴に引込む蝸牛の姿に彼の實相を認めんとするものである。

日本海岸の勝景は與謝內海に集る。與謝內海勝景の雰圍氣は周圍から豪放跌宕の影を清い水に投げる松の青山が作る所で、その雰圍氣が凝つたものが卽ち長蛇の天橋である。天橋を飾る幾千の老松の色は蒼然として古い。屈曲參差して千變萬化する其幹枝は、限りない年月の風雨と戰つて來た體驗をつぶさに物語つて居る。彼等は千軍萬馬の間に生命を維持して來た猛將勇士の姿だ。彼等は月に嘯く深山の虎だ。彼等は雨を呼ぶ蛟龍だ。日本海岸の雰圍氣は概して陰欝であるが、此處だけは清澄である……清澄な鏡のやうである。私は玲瓏な明鏡の自然を喜はない。私の興味はさつと霧のかゝつた灰色の自然を見て其深さを增して來る。そこで私は暮色で包まれる天橋を好む、細雨で柔かに叩かれる天橋を好む。實際に松の天橋は雨を得て、その詩的價値を高める『橋立の松を時雨の越えんとす』と歌つた與謝野蕪村は、正に私と詩的興味を同くする俳人である。

數日前私は米國から『バートン・ホームス繪畫藏書日本の卷』一冊の寄贈を受けた。書中日本三景の一章を飾る寫眞に、所謂天橋立股のぞきをして居る圖が入れてある。私はまた最近彼地に遊んだ友人から、與謝野灣頭の光景は股鞍一つに集めることが出來ると聞いた『股鞍が鏡となつて……明鏡だか暗鏡だか知

らないが……其中央に一帶の松が聳るのだ」と彼はいつた。然しそれは敢へて天橋立のみに限つたことで無い。どこでもよい、差詰廊下へ出て君の庭を股の間から眺めることだ……何等珍らしくない平凡極まる庭の樹木が、どんなに新鮮に見えるであらう。それはまた庭に限らない。君は君の思想を股鞍から見直さねばならない。君は君の感情を股鞍から感じ直さねばならない。天國と地獄の光景を股の間から逆に覗いた男はブレークである。徳川の爛熟文明を鏤棄で飾つた瀬川菊之丞や嵐龍藏を股鞍から凝視した繪師はわが東洲齋寫樂である。北齋も廣重も股のぞきの名人である。ボーもブラウニングも股のぞきの詩人である。だれがこの『股のぞき』を子供の遊戯であると笑ふものぞ。眼を地上に落して天地の諸相をその根元から見上げる眞人の仕事である。

私は脇路へそれたかの感がある。今日本の松に歸つて嚴島を語らねばならない。嚴島を箱庭的である人工的である俗醜な歌舞管絃の地であると罵倒する人は、其眞價を知らない。それぞ俗眼者といふべきだ。半ば海に入る社廊、水中に動かない二本の足を入れてゐる大鳥居、其等に配するに綠青の松樹を以てした藝術的設計に對して、私の頭は下らざるを得無い。水に神社を接近させた設計は嚴島に限らない、又松を神社の背景とした設計はこゝばかりで無い。然し水と松樹と神社の三つが音律的調を整へる點で、この嚴島に匹敵する場所は無い。松の無い神社佛閣は私の神社佛閣でない。松の無い名所古跡は私の名所古跡でない。

私は時々京都へ行くことがあるが、櫻の京都を見る爲めでなく松の京都に接するためである。京都へ行くと私はいつも嵐山へ遊ぶものだが、それは松樹の嵐山を見るためである、さも無くば竹籔の嵐山を眺める爲めである。私は淸水を知らない祇園神社を知らない、金閣寺を知らない銀閣寺を知らない。もとより東本願寺へ踏込んだことが無い。私が京都に興味を持つ所以は、松籟松影共に幽かな鹿ケ谷の法然院があるからだ。院の本靜な庭を飾る白い盛り砂は世界に類の無い自然美を院の雰圍氣に添へる。私は嘗て傾く秋の夕陽が赤い時其處を獨り訪問したことがあつた。院は寂として人間一人の聲さへも無く、堂內へ入つて陰微の內に優美を藏する神秘的空氣に觸れた。私は堂を出て、足元に松笠が二つ三つ落ちてゐるのに注意した。私は松笠を拾つた、それを眺めた……この洒脫な信仰深い僧侶を思はせるやうな松笠から、夕陽に光る松の木の方へ頭を上げた。

私が耶馬溪を訪問したのは最早や二十年前の昔である。如何に奇怪な山骨と岩石があつたかは私の今の記憶にない。然し山

陽は、『或前以爲一山者、分成數峯、如群仙駢肩、露其半身、萬松振鬣』といふ言葉を使つて居る。松樹と耶馬溪との關係は、其他日本の景色同樣に、可なり密接なものであらうと想像することが出來る。私は今年の早春、耶馬溪と等しく漢學者の筆で有名となつた月瀨へ梅見に行つた。三學院から路を右に取り左の細い道を行く時、傾きかけた太陽に照らされて見事に赤い天神の森境內の女松の幹を、私は梅以上に深い印象で記憶して居る。齋藤拙堂も『梅爲之經而松爲之緯水竹點綴之』と書いて、松が竹林と共に月瀨の自然美を助けてゐることを明言して居る。

廣重の榮川堂版近江八景は彼一代の傑作である。圓熟せる技能を構圖と調色の上で發揮せる木版繪として、日本はこれを世界に誇るであらう。其中の一枚『唐崎夜雨』は傑作中の傑作である。それを見たもの誰でも一生忘れることの出來ない印象を與へられるであらう。淡墨の上に雲母で描いた直線の豪雨は、木版畫界前代未聞の壯麗である。この豪雨は畫面の中央に蹲る巨大な老松に突撃して居る……あゝ、ふきぼかしの見事な裝飾美だ。老樹の下には凝藍の湖水が流れる。然しかゝる傑作を廣重に與へた老松は、『山櫻咲けばかつ散る世の中に昔ながらの志賀の浦松』と詠はれた老松は、永劫の表象として歎美されて來た老松は、數年前枯死して仕舞つて、今では廣重の作のみが不死の記念として殘つて居る。然し『唐崎夜雨』の存在する限り、其名聲は海外海內何處へいつても永久に稱へられるであらう。廣重は畫家として、唐崎の松に於てのみ成功したのでない。近江八景中『粟津晴嵐』も傑作として私の喜ぶ一枚である。湖畔に松の並木が立ち、向ふには山々がある。さうして白帆を風に孕ました船は將に出帆しようとして居る。近江八景で松が取扱はれてゐないものは無い。實際に松樹を拔きにすると八景の美は無いとさへ云ふことが出來る。

私は唐崎の松近くに住む光榮を得なかつたが、東京は根岸の御行の松を數年間の隣人とすることが出來た。私が空想の耳で鳴かない鶯を聞き乍ら根岸に住んだのは、最早十三年の昔である。その時代には、今日のやうに所謂近代文明の爲め其雰圍氣は破壞されて居らなかつた。生垣や車井戶さては屋根越しの三階松が、『山茶花や根岸尋ねる革文筥』の情調を漂はせるに十分であつた。私は御行の松の根元を洗つて流れる小さい河に沿つて散歩し乍ら、二百年前の太平樂時代を想像した。夕景になつて、御行の松をしみぐ\眺め上げて家へ歸ると、私はこの老松が吹き出す神秘に觸れて浪漫主義者となつた。其頃の私の生活は、無地淡葡萄の色羽二重の着物に色模樣黑紋紗の信玄羽織を

纏つた雨華庵抱一と御行の松を離れることが出來なかつた。私はこの偉大な婦人的松を種々な姿で眺めた……引續く五月雨が夜ばつたり止んだ時は、私は『五月雨やある夜ひそかに松の月』の感興に打たれ、時が大寒に入つて『寒参り』の鈴が冴え渡る凄愴の月に響く時には、『神松の冴えこむ影や禰宜の夢』といふ丈草の句を思つた。麗かな春の太陽に浴びる御行の松は艶美である。靜かな秋の月が薄墨で描くこの松の影を踏んだ時、私は憧憬的な審美觀に醉つた。動く時代につれて私の詩境は變り、私の思想は更新する。あゝ、十三年前の隣人御行の松は今どうして居るか。

日比谷公園は私の眼中に無い。松の背景があればこそ芝の御靈廟も大きな屋根の寺も、私の對照となるのである。上野公園も所ところに松の木があるから私の公園である。私はどんなに歡喜の眼で、宮城前の内堀帝劇前から郵船ビルヂング前に至る石垣の上に、行儀よく或は行儀惡く龍幹緑葉を横たへて居る老松を眺めるであらう。其等巨大な松の盆栽が無かつたならば、私はいつでも堀を埋めて洋服細民の散歩場とすることに贊成するであらう。

私がこの東中野へ住居を構へた時、私には家屋の設計はどうでもよかつた。然し庭だけ廣く取つて松を一本植ゑたいといふ希望であつた。其希望は達せられた爲め、私の家族に取つては住み悪い鈎の手の家を私は建てゝ仕舞つた。然し庭には粗末なものではあるが一本の松がある……それで私は滿足して居るのだ。

『「松葉の色も濃くなり、全體に落着きも出來て、年々立派になつて來る」と、
私は庭の中心に蹲つて居る一本の女松を眺めて獨語する。
松は茄蛸のやうに枝の手や足を左右に張つて、
下の方の枝は人に祝福(ブレッシング)を與へる僧侶のやうな手付きをし、
上の方の枝は少しも早く日光を拜みたいと背のびして居る。
數日前に松を私に讓つた男が遣つて來て、さていふのに、
「旦那十兩は安ございましたね、今ぢや百五十兩だしても得られませぬ。」
私の家内は、植木屋をたのんで松の手入れをさせるたびに、
「毎年こんなに金が掛つては松も厄介物ですね」といふ。
だが、私だけは其等二人の間で、
たゞもう松の成長のみを眺めてゐる。』

巴里通信

柳澤健

○

今朝（一月十七日）の新聞を見て行くと、所謂プロモーション・ロンサールの受勳者の人名が全部發表せられてゐる。この發表は、隨分永く待たれてゐただけに、一段の興味がある。選に當つて喜ぶ人、選に洩れて悲しむ人、それを謗る人、それを褒めそやす人、――佛蘭西の文壇・學界は兹暫らくはこの噂で持ち切りのことであらうと想像せられる。

プロモーション・ロンサールとは、今から恰度四百年まへに（詳しく言へば千五百二十四年に佛蘭西はヴァンドーム近くの田舍に生れた大詩人ロンサール Ronsard の、その生誕四百年祭を機會として、佛蘭西政府が、今日の文壇・學界を通じ、最も著くこの詩人の精神・傳統を繼承しまたはこの偉大なる詩人の功績を記錄し紹介してゐた人々に、廣く受勳しやうとする企てである。この特別受勳案は、法律の形で昨年議會に提出せられ、その可決を得たものであつて、爾來今日まで四五個月に亘つて文部省と賞勳局との間に愼重その人選の審議に努めてゐたのが、漸く今日確定、その發表を見たわけである。

その顔觸れをこゝで一々披露することは、祖國の大部分の讀者にとつて極めて興味の尠ないことであらうことは言を俟つまいっ従つてこゝでは、たゞ、ほんの概念だけでも得て貰はうが爲めに、五六の人々の名だけを擧げるのに止めることにする。

グラン・トフィシエ Grand Officer の勳章と言へば、日本ならば勳一等にも該當する最高位の勳章の一つである。それを、劇作家のジョールジュ・ド・ポルト・リッシュ氏が貰つてゐる。グラン・トフィシエに次ぐ勳章はコムマンドウール Commandeur の勳章であるが、それを、（日本の文壇にも能く知られてゐる）詩人で小說家のアンリ・ド・レニエ氏や、また、劇作家のフランソア・ド・キュレル氏や、その他二三の文學者並びに大學教授やが貰つてゐる。更に次位の勳章に當るオフイシエ Offici

er を貰つたものには、（これも能く我文壇の人々に知られてゐる）閨秀詩人のド・ノアイユ伯爵夫人や、詩王（プランス・デ・ポエート）のポール・フォール氏をはじめとして、二十名近くの人々が算へられる。このほかに、シュヴァリエ（Chevalier）の勲章を授けられた者は、彼是四十名の多きに達してゐやう。……

文學者が勲章を貰ふ！そうした官臭紛々たることは一向羨ましいことでも、望ましいことでも無い、と恐らく日本の文壇の人々は、直ちに言ひ切つて了ふであらう。然しながら、そう簡單に言ひ切るまへに、暫らく佛蘭西の國情の如何を見渡す必要がある。

佛蘭西は、ある意味で勲章の邦である。佛蘭西人ほど、勲章を欲しがる國民はなく、従つて、佛蘭西人ほど、勲章を自慢してゐる國民はあるまい。足を一歩佛蘭西に踏み入れた者が直ちに氣の付くことは、背廣の襟のボタンホールにも、外套の襟のボタンホールにも、紅や紫やの細い筋（それを佛蘭西語で Rosette と呼んでゐる。）を附けてゐる人の、頻りに眼に入ることであらう。彼等は、何れもシュヴァリエの帶勲者であり、さては、オフイシエの帶勲者なのである。彼等は、裸で風呂に這入る時を除いては、寢室に於ける着物にすらこの徽章を附けることを憚らないほどであると言つていい。フロックコートか、せいぜいモーニングの、充分改まつた服裝をした時ならでは、勲章の略綬などを襟へ附けることを敢へてしない日本の風習と較べて蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある。全く、佛蘭西は勲章の威張る邦である。

が、この現象を目して、佛蘭西人が日本人よりもより官臭を帶びたる國民でありより保守的なる國民であり、さてはより子供じみたる國民である一つの證據であるとなす者があるならば、早計に失する。今回のプロモーション・ロンサールの實例のごときをよく見れば、這般の消息はおのづからに會得できるのである。日本に於いて勲章を授與せらるる者の殆んど全部は、人の皆知れるごとく軍人と官吏とである。取り分けて軍人である。これを他にしては、殆んど言ふに足る者がない。然るに、佛蘭西に於いては、文學者でさへもが、勲章を授與せられる。前記ポルト・リッシュ氏の例にて見らるるごとくその人の生前に於いて、日本ならば勲一等にも當るべき最高の勲章までが不思議なく授與せられるのである。（殊にこのポルト・リッシュ氏のごとき、彼の傑作として最も有名なる『戀人（アムールーズ）』を、試みに國立劇場コメディ・フランセーズの舞臺の上にこれを見よ。それは、決して『愛國』を取扱つたものでも『忠孝』を取扱つたものでも『義士』『烈婦』を取扱つたものでもなく、實に坊間頻

りに見る夫婦間の一痴態を描き出したものに過ぎないのである！）最高級の軍人に於いても、また、大臣の顯職に屢々着いてゐる政治家に於ても、グラン・トフイシエの勳章を授與せられるといふことは、必しも多いとは言はれない。その稀有、貴重なる勳章が、かくのごとく文壇の一布衣に下されるのを見るのである。男女間の情痴の消息を描くに巧みなる一芝居作者にも下されるのを見るのである。我々日本人にとつて、これほど不思議なる受勳沙汰は、ありやう筈はないではないか！

受勳について、最近こゝに更に不思議なる一つの實例が存する。二個月ほど以前のこと、巴里の郊外（だつたと記憶する）に建つてゐる工場に勤むるある二人の勞働者が、シユヴァリエの勳章を授與せられて、人々の羨望を集めたといふ事實がそれである。この受勳者たる勞働者は、一體何を爲したといふのか？ある特殊の犠牲的行爲を爲したのか？それとも、ある場合に驚くべき英雄的行爲にでも出でたといふのか？それならば、格別我々に理解し得られぬほどの事柄でもあるまい。然し事實は、その孰れでもないのだつた。唯、彼等は二人共、永年の間極めて誠實に工場の仕事に從事した！――といふ、たゞそれだけのことであつた。勞働者として、日頃その責務を充分に盡してゐた！――といふたゞそれだけのことであつた。それが、日本ならば軍人の佐官以上か、それとも官吏の古參でなければ容易に貰ひそうもない、このレジヨン・ドンヌールの勳章を、立派に貰ふことができたといふのである。勳章から官臭を離して考へ得ない日本人の頭には、容易に會得し難い事柄と言つていいではないか！

かうした邦の、かうした制度・慣習を、日本人の眼から見て、直ちに彼是云爲できないのは、當然であると自分には思はれる。勳章と言へば、前記のごとく、軍人か然らざれば官吏に與へられるものといふ風にあらかた極つてゐる日本と、かうした風に如何なる職業にある者でも貰ひ得る、――芝居作者も貰へば工場職工も貰ふことができる邦とは、斷じて同じ標準で見ることはできまい。自分が、佛蘭西を勳章の邦であると言ひ作らも、直ちにそれが、日本よりより官臭に富み、より保守的であり、さてはより子供じみてゐることの證左とはならぬ。と言はうとしてゐる理由である。――

強いて言へば、日本に於いては、『國家』が勳章を與へる。佛蘭西に於いては、『社會』がこれを與へる。從つて佛蘭西に於ける勳章は、日本人の頭では直ぐと會得はできぬほどに、廣汎なる社會性を帶びてゐる、と言ふことができる。如何なる職業にある者でも、その職業に應じて國家なり社會なりに貢獻した者は、

等しく勳章が貰へる。それだけに、如何なる人でも、それを貰ふことを望む。佛蘭西人が、總じて勳章を所有してゐることを絶えず自他に誇らうとしてゐる理由は、實にこゝにある。從つて、今回の文學者受勳の大袈裟な企も、文學者の仕事の社會的影響の大いなることを認むる者には、今更異論のありやう筈はない、至極當然の企であるに過ぎないのである。なまなかな世の常の政治家や軍人や官吏やよりは、文學者の方が、社會に及ぼす力は、遙かに大きいことを、平素から社會一般が先づこれを認め、政府もまたこれを恒懐に承認して憚らなかつたからこそ、このプロモーション・ロンサールのごとき法令が易々と議會を通過したのであつた。その法令を提出したものも、それを可決したものも、毛頭新奇なことを爲したといふがごとき觀念はなく、從來のこの國の傳統に從つて極く平凡なことを極く平凡に行つたといふのに過ぎなかつたのである。然もそれは、國情の違ふ日本人の頭には、容易に會得できぬ、突飛な不思議な出來事として映り來るものなのである。——

○

佛蘭西にプロ－モーション・ロンサールを書き來つた自分の念頭に、不圖浮び出す一つの出來事がある。それは、極めて最近に起つた出來事で、伊太利を舞臺とした興味ふかき一つの物語、——矢張それも、文學者と勳章とに關する物語なのである。

プチニと言へば、例の『胡蝶夫人』(マダム・バタフライ)の作者として、誰知らぬ人とてもあるまい伊太利の、——否世界の秀れたる音樂者である。この人が、二三個月まへに白耳義の首都ブリユツセルで客死したといふことも、これ亦世の多くの人々のよく知れる所であらう。

このプチニは、その沒する彼此二十日許りまへに、——これも我々日本人の頭には直ぐと會得できさうもない話であるが、——伊太利の上院議員に任命せられたといふ事實がある。話はこれと關係してゐる。

このプチニが上院議員に任命せられると同時に、ナポリの郷土詩人で、『伊太利のミストラル』とさへ人々に稱ばれてゐるサルヴアトーレ・デイ・ジアコモ氏 Salvatore di Giacomo. にも同じく上院議員の任命が下る筈で、この二人の名を並べた勅令案が、伊太利の法令に從ひ、政府から當の上院に廻附せられて、その協贊を得る運びとなつてゐたのであつた。この國に於ては、同じ立憲君主國でも、日本とは變つて、上院議員の任命等まで、所謂民意を酌んでこれを定めるといふこととなつて

ゐるわけである。

然るに、この勅令案の廻附を受けた上院は、プチニの任命には承認を與へたが、他方ジアコモの任命には、その承諾を與へることを敢てしなかつたのである。抑々問題はそれから始まる。何故この詩人に承諾を與へなかつたといふその理由は、實に、以下の通りであつた。——

上院議員となる資格は、伊太利の法令で種々數へられてゐる。そのなかに、『祖國の名を擧げたる者』といふ條項がある。音樂者のプチニ、詩人のジアコモ氏が、この條項に示されてゐる資格で、政府から推薦せられたものであつたことは、言ふまでもなからう。所が、この條項は、御覽の通り、甚だ漠然としたもので、可否の議論が如何樣にもなり立ち得るのである。從つて、當のプチニに對してさへも、異論が出やうといふ形勢がないのでもなかつた。所が、プチニの爲め、——と言ふよりも、寧ろその推薦者たる政府にとつて、甚だ都合のよかつたことは、彼に、この條項を別としても他に更に適用し得る一の條項があつたといふことである。多額の納稅者に對しても、上院議員たるの資格を與へ得るといふ條項がそれなのであつた。プチニは、『胡蝶夫人』の作者として、更に、『ラ・トスカ』及び『ボエームの生活』の作者として、各國から月々(それとも日日に)はいる上演料だけでも大したものである。恐らく數百萬、場合によつては數千萬にも達するほどの巨富を擁するの人である。それだけに、その納稅額の多いのは、怪むに足りない。かくして、プチニは、『祖國の名を擧げたる者』ではよし落第するとしても、『多額を納稅せる者』の資格では異議なくパスし得る人であつた。事實彼の任命案は、口やかましい上院を無事に通過して、こゝに愈々上院議員たることが確定したのである。

然るに、他方わがナポリの詩人は、到底その富の資格をもつて、議員の地位を克ち得るがごとき境遇にある人でないことは、固よりであつた。反對に、彼は、その詩以外には何物をも有せぬほどの人であつた。『祖國の名を擧げたる者』の資格のみが、彼に上院入りの可能性を與へ得る唯一つのものであつた。

果然、上院では、この任命案に對して、文句を附けはじめる者が現はれて來た。たかが『小唄作り』に過ぎぬではないか。女子供を喜ばす歌唄ひに過ぎぬのではないか。それが、例へば最高學府邊の尊敬すべき碩學、教授に對すると同じく『祖國の名を擧げたる者』として榮譽ある席に着かしめやうとするのは、驚くべき暴擧ではないか。斯くのごとく、徒らに世俗に喜ばるるのみにして、學識なく德操なくまた世の榮ある經歷とて

もなき一市井の徒を、上院議員たらしむるがごときは、上院自身の歴史と尊嚴との爲めにも、極力排斥することゝしなければならぬではないか。……かくのごとき反對の聲は、多數上院議員を驅つて、遂に、このジアコモ氏の任命案に對し、否決の投票をなさしむるに到つたのである。この際、わけても强硬に詩人ジアコモの任命に反對して勅令案の否決に奔走これ努めた者は、某々、ある二人の著名なる大學教授であつたと言ふ。

勳章の話といふのは、これから始まる。

扨て、ジアコモ氏の上院議員任命は、プチニの夫れとは異り、終に上院の反對の結果、流産に歸して了つたわけであるが、このことを最も遺憾に思つたのは、當のジアコモ氏よりも、さては、推薦者たる政府よりも、誰あらうヴィットレ・エマニュエレ陛下御自身であつたのである。——といふのは、陛下御自身、恐らく誰よりもよく、このナポリの詩人の作になる、心に泌み入るやうな、メロディーの妙えにあやな、且つ麗はしい姿を持つた數々のその詩章を、ふかく愛讀してゐられたからである。古錢學者として特に世に聽えてゐらるゝ陛下、極めて平民的でまた極めて多趣味でゐらるゝわがエマニュエレ陛下に、かゝることの存するのは一向に不思議ではない。從つて、今回新らしく任命せんとする上院議員候補者として政府がこの詩人の名を加へたといふことは、假令陛下御自身の發はなかつたとしても、この任命案のうへに、至大の歡びをもつて玉璽を印せられたことは、疑ふの餘地はないと言はなければならなかつた。それだけに、この上院の拒否は、すくなからず、陛下の御心を曇らさせずには措かなかつた。その拒否が、主として勿體ぶつた碩學、教授等の嫉妬の感情から生れ出て來たものらしく感じられるだけに、、尚且、陛下の御心は平かでなかつた。

かゝる時、不圖陛下の念頭に浮んだのは、何等議會に諮ることを要せずして陛下御自身の裁量で自由に授與できる勳章のことであつたのである。

勳章と言つても、種々種別、階級のあるのは、伊太利とても他の國々と同樣である。併し、この國には、餘り他國には見ない、極く限定せられた、最高級に位する高貴なる勳章が存してゐる。サヴォイの勳章と稱するものが、即ち夫れである。而して、この勳章には、文武の區別があつて、武人ならば、遍ねく武勳を中外に赫かしたといふ極めて著名なる少數の者に、一般文化方面に立ち働くものならば、單に國内に於いて多大なる功績を擧げしに止まらず國境を外にしても優に伊太利の名聲を代表し得る程度の、これも極めて少數の者にのみ、授與せらるる

ことゝなつてゐるのである。從つて、この榮譽ある勳章を授與せられし者は、例へば、上院議員中においても、特に著名なる數氏に過ぎない有樣なのである。

ヴィットレ・エマニエレ陛下の念頭に浮んだのは、實にこのサヴォイ勳章を、ジアコモ氏に授與しやうといふことであつたのである！

陛下と感を俱にするムソリニ首相は、この陛下の發議に對して、全然贊意を惜しまなかつた。彼への授勳はかうして直ちに極つた。最近に發表せらるるものとして、準備せられてゐたサヴォイ勳章授與者名簿のなかに、彼ジアコモ氏の名が、かくして、愈々書き込まるるといふ段取りとなつたのである。

然るに前記の如く、この勳章の授與は極度に制限せられてゐる。從つて、今回ジアコモに授與せんが爲めには、既に、作成した名簿のなかから、是非とも候補者を一名だけ削除しなければならぬといふ結果となる。が、陛下は、わがナポリの『小唄作り』の爲めに、躊躇することなく、その一名の候補者を削除せしめられた。と同時に、恐らくそれとの權衡を考慮せられたる爲めか、更にも一人の候補者をも削除せしめられることとなつた。

この不運なる削除を敢てせしめられたる二人。この二人こそ、誰あらう。實に皮肉にも、ジアコモの上院議員任命に對して最も猛烈に反對したといふかの著名なる大學教授、その人に他ならなかつたのである！

勳章の話は、これで終る。が、當時この愉快なる事件を眞先に巴里に通報した『タン』紙の特派員ジャン・キャレール氏の書く所を全部信用して、こゝに最后の逸話を紹介するならば。——

件の老大學教授の二人は、かくの如き成行きを見るや、倉皇としてその秘書を最寄りの書店に走らせ、わがナポリの詩人の作にかゝる詩集全部を買ひ來らしめ、書齋にうづくまりつゝイディオムの辭書を片手に、その詩作を理解せんものをと、ひたすらに努めてゐるといふ。………

○

扨て佛蘭西と伊太利とに最近に起つた、文學者を對手としてゐる二つの出來事を書いて來た自分は、序ながら英吉利に起つた、これも極めて最近の出來事を、こゝに書き記すこととする。但し、それは勳章の話ではないが、それと相似た授爵の話である。

英吉利に貴族の制度のあるのは、人々の遍く知る所である。世襲のほかに、國家に功勳を立てた者も、新らしくこの貴族に

任ぜられることゝなつてゐることは、これ亦人々の能く知る所であらう。

この貴族に、極めて最近任じられた者がある。それは、文學者として日本にも相當その名を知られてゐるエドモンド・ゴス氏その人である。『サア』Sir の榮爵を賜はつたといふのである。

この人の著書『フレンチ・ポートレーツ』は、恐らく今日でもわが日本の若い人々の間に、相當の愛讀者を有してゐることと思はれる。十年ほど以前、自分が學窓にあつた頃、佛蘭西の諸詩人の印象やら批評やら紹介やらを趣深く書いたこの秀れた書物は、我々のなかでは、爭ふて讀まれたものゝ一つであつた。自分は、今日でも、この書物の各頁の餘白の所に印刷せられてゐた、赤や青やの線で美事に描かれてゐる諸詩人の洒落た(しやれ)數數の繪姿を――わけて、あの美貌弱年の詩人アルチユール・ラムボーが、パイプの煙を吐きつゝある消楚にして意氣なる繪姿なぞを、はつきりと思ひ出すことが出來るのである。――かうした書物が示して呉れるやうに、彼は英吉利人として多年最も忠實に佛蘭西文藝の研究・紹介に努めて來た人であつたのである。而して、結局この功績に依つて、――この功績のみに依つて、彼は今回何人も羨やむ『サア』の榮爵をさへ克ち得るに到つたのだ。『彼は、最もよく佛蘭西人の魂を理解した一人である。そして、それを秀れたる著述に依つて廣く英吉利の公衆に知らしめた。かくして彼の多年の努力は、英吉利と佛蘭西との間の心の結合、眞實なる魂の接近のうへに向けられたものとも言へ得る。』――これが、實に今回の授爵の理由となつてゐるのである！

英吉利は、政治の國である。さては、實業の國である。若くは、スポーツの國である。他方にはまた、極めて自尊自傲なる國柄でもある。それなのに、かうして一外國文藝研究者の爲めに、數すくない榮爵を授與して、これを社會の最上層の位置に置かうといふのである。尠くとも我々日本人にとつては、――若し噂にして信ずべくんば、國學か漢學ならばいさ知らず泰西文藝の研究では文學博士にすら容易に推薦されないといふ我が日本に生を享けてゐる人々にとつては、世にこれほど案に相違した、不可思議な出來事はないと言つてよいであらう。

○

プロモーション・ロンサールのことから、次々と書いて來るうちに、自分の頭は自然こちらの文學者　――ここは一般藝術家の社會的地位と言つたやうな話題に向つて來たが、自分はそれ

に就いて今更らしくこゝに長々と說き出さうとはしない。ただ、自分が近く親しく見聽きした所を、極めて狹い範圍で、語るに止めやうと思ふ。それだけでも、祖國の讀者には、ある省察を促すに充分であらうから。

自分は、前回の通信のなかで、アナトール・フランスの葬儀の光景を、短かいながらに書き送つた。大統領ドウーメルグ氏をはじめとし、首相エリオ氏以下各閣僚、各將軍、其他朝野の諸名士が、その壯嚴なる儀典に列席してゐる光景を、親しく目のまへに眺めた自分の胸に、當時去來したものは、實にこの國の文學者の社會的地位の如何に高いか、といふ感慨に他ならなかつた。かうした光景を見た者には、古い言葉かも知れないが、文學も亦男子一生の仕事となすに足りる、といふほどの感想が自然(おのづから)に湧き出して來るのを禁めがたいであらう。

越えて旬日餘、佛蘭西は更に最も優秀なる藝術家の一人を失ふに到つた。作曲者ギャブリェール・フォーレの死が、それである。その葬儀は、フランスの場合と同じく國帑をもつて擧行せられた。不幸にして自分は、當日公務に碍げられ、平素より愛好して措かなかつたこの偉大なる音樂者の葬儀に親しく列する機會を得ることはできなかつたが、その盛況は、詳しく新聞紙のうへで知ることを得た。こゝにも、ドウーメルグ大統領はわざ〳〵臨場して、佛蘭西全土の哀悼の意を、靈前に捧げたのであつた。なほ、政府を代表して文部大臣フランソワ・アルベール氏は、一場のすぐれたる哀悼の演說をしたといふのであつた。

この葬儀の日から程經たぬある夜、この樂聖の死を傷む意味から、彼の名作の一たる歌劇『ペネロープ』が、オペラ・コミックの舞台に上演せられた。逸早く、その夜この歌劇場の客の一人となつた自分は、そこの正面の棧敷に、誰あらう、大統領及び文部大臣の姿が相並んでゐるのを、不圖見出したのであつた。この夜、この二人の臨場は、言はずとも、逝けるわが偉大なる樂聖への敬意からであることは、勿論であつた。それにしても、葬儀に列せしのみにてその『役目』は充分完うした筈なのに、更にわざわざかゝる作品の上演にまで足を運ぶといふやうなことは、尠くとも我々日本人などにとつては、尙更理解できぬ事柄だと言つて差支へあるまい。……

(こゝまで書いて來た自分は、圖らずも今夕——二月九日——ドウーメルグ大統領及びエリオ首相が並んでコメディー・フランセーズに、アンリー・ベツクが名作『群鴉』(レ・コルボー)を見んが爲めに臨場するといふ記事を、夕刊紙で讀むことができた。自分の手許に最近屆いた新潮社の編纂にかゝる『近代劇大系』のなかに、美事に譯されたこの『群鴉』の脚本が掲載せられてゐる。

任ぜられることゝなつてゐることは、これ亦人々の能く知る所であらう。

この貴族に、極めて最近任じられた者がある。それは、文學者として日本にも相當その名を知られてゐるエドモンド・ゴス氏その人である。『サア』Sir の榮爵を賜はつたといふのである。

この人の著書『フレンチ・ポートレーツ』は、恐らく今日でもわが日本の若い人々の間に、相當の愛讀者を有してゐることと思はれる。十年ほど以前、自分が學窓にあつた頃、佛蘭西の諸詩人の印象やら批評やら紹介やらを趣深く書いたこの秀れた書物は、我々のなかでは、爭ふて讀まれたものゝ一つであつた。自分は、今日でも、この書物の各頁の餘白の所に印刷せられてゐた、赤や青やの線で美事に描かれてゐる諸詩人の洒落た（しやれた）敏敏の綺姿を――わけて、あの美貌弱年の詩人アルチュール・ラムボーが、パイプの煙を吐きつゝある消楚にして意氣なる綺姿なぞを、はつきりと思ひ出すことが出來るのである。――かうした書物が示して呉れるやうに、彼は英吉利人として多年最も忠實に佛蘭西文藝の研究・紹介に努めて來た人であつたのである。而して、結局この功績に依つて、――この功績のみに依つて、彼は今回何人も羨やむ『サア』の榮爵をさへ克ち得るに到つたのだ。『彼は、最もよく佛蘭西人の魂を理解した一人である。そして、それを秀れたる著述に依つて廣く英吉利の公衆に知らしめた。かくして彼の多年の努力は、英吉利と佛蘭西との間の心の結合、眞實なる魂の接近のうへに向けられたものとも言へ得る。』――これが、實に今回の授爵の理由となつてゐるのである！

英吉利は、政治の國である。さては、實業の國である。若くは、スポーツの國である。他方にはまた、極めて自尊自傲なる國柄でもある。それなのに、かうして一外國文藝研究者の爲めに、數すくない榮爵を授與して、これを社會の最上層の位置に置かうといふのである。尠くとも我々日本人にとつては、――若し嘘にして信ずべくんば、國學か漢學ならばいざ知らず泰西文藝の研究では文學博士にすら容易に推薦されないといふ我が日本に生を享けてゐる人々にとつては、世にこれほど案に相違した、不可思議な出來事はないと言つてよいであらう。

○

プロモーション・ロンサールのことから、次々と書いて來るうちに、自分の頭は自然こちらの文學者――さては一般藝術家の社會的地位と言つたやうな話題に向つて來た。が、自分はそれ

に就いて今更らしくこゝに長々と說き出さうとはしない。ただ、自分が近く親しく見聽きした所を、極めて狹い範圍で、語るに止めやうと思ふ。それだけでも、祖國の讀者には、ある省察を促すに充分であらうから。

　自分は、前回の通信のなかで、アナトール・フランスの葬儀の光景を、短かいながらに書き送つた。大統領ドウーメルグ氏をはじめとし、首相エリオ氏以下各閣僚、各將軍、其他朝野の諸名士が、その壯嚴なる儀典に列席してゐる光景を、親しく目のまへに眺めた自分の胸に、當時去來したものは、實にこの國の文學者の社會的地位の如何に高いか、といふ感慨に他ならなかつた。かうした光景を見た者には、古い言葉かも知れないが、文學も亦男子一生の仕事となすに足りる、といふほどの感想が自然に湧き出して來るのを禁めがたいであらう。

　越えて旬日餘、佛蘭西は更に最も優秀なる藝術家の一人を失ふに到つた。作曲者ギャブリエール・フォーレの死が、それである。その葬儀は、フランスの場合と同じく國帑をもつて擧行せられた。不幸にして自分は、當日公務に碍げられ、平素より愛好して措かなかつたこの偉大なる音樂者の葬儀に親しく列する機會を得ることはできなかつたが、その盛況は、詳しく新聞紙のうへで知ることを得た。こゝにも、ドウーメルグ大統領はわざ〳〵臨場して、佛蘭西全土の哀悼の意を、靈前に捧げたのであつた。なほ、政府を代表して文部大臣フランソワ・アルベール氏は、一場のすぐれたる哀悼の演說をしたといふのであつた。

　この葬儀の日から程經たぬある夜、この樂聖の死を傷む意味から、彼の名作の一たる歌劇『ペネロープ』が、オペラ・コミツクの舞台に上演せられた。逸早く、その夜この歌劇場の客の一人となつた自分は、そこの正面の棧敷に、誰あらう、大統領及び文部大臣の姿が相並んでゐるのを、不圖見出したのであつた。この夜、この二人の臨場は、言はずとも、逝けるわが偉大なる樂聖への敬意からであることは、勿論であつた。それにしても、葬儀に列せしのみにてその『役目』は充分完うしたる筈なのに、更にわざわざかゝる作品の上演にまで足を運ぶといふやうなことは、尠くとも我々日本人なぞにとつては、尙更理解できぬ事柄だと言つて差支へあるまい。………

（こゝまで書いて來た自分は、圖らずも今夕——二月九日——ドウーメルグ大統領及びエリオ首相が並んでコメディー・フランセーズに、アンリー・ベツクが名作『群鴉』（レ・コルボー）を見んが爲めに臨場するといふ記事を、夕刊紙で讀むことができた。自分の手許に最近屆いた新潮社の編纂にかゝる『近代劇大系』のなかに、美事に譯されたこの『群鴉』の脚本が掲載せられてゐる。

この脚本に接した誰もが見る通り、この作品は、『勸善懲惡』を目的として書かれたものでも、また『思想善導』を圖るが爲めに書かれたものでも、はた『質實剛健』の氣風を涵養せんが爲めに書かれたものでもなく、さては、そこに現れて來る人物は、『英雄』でもなければ『豪傑』でもなく、はた『良妻』でも『賢母』でもなくして、言はゞ單なる市井の痴愚凡俗なる匹夫匹婦の葛藤を如實に描き出したものであるに過ぎない。それを身佛蘭西全土を統べる地位にある人が相揃つて見物に行くといふのは、抑々如何なる性根から來てゐるのであらうか？新聞紙の註に依れば、この十九世紀末の不遇なりし劇作家の作品を、この際國立劇場に於いて廣く上演、紹介せんとして、先づその手初めにこの『群鴉』を選み、今夕をもつてその初演を興行するとある。大統領及び首相の不時のこの臨場は、實に一芝居作者（それ極めても不遇なりし）アンリ・ベックその人に對する深厚なる敬意と追憶との爲めに他ならなかつたのだ！）

ギャブリエール・フォーレのことについてもひとつこゝに語るに適はしい話がある。それは當時白耳義に於ける出來事なのである。フォーレの死が、佛蘭西とはわけて關係の濃いこの國に傳はるや、上下を擧げて深くこれを悼んだのは、言ふまでもない。その深い哀悼の念を示すために、首府ブリュッセルである夕この樂聖の爲めの記念の音樂會が催された。所がこの音樂會に、自ら進んで臨場を希望し、美しい姿を公衆のまへに現はした女性があつた。それこそは、取りも直さずこの國の國母陛下そのかただつたのである。

このブリュッセルの出來事を聽いた折に、不圖自分の念頭に浮び上つた古い記憶がある。それは、今から十數年ほどまへに、詩人三木露風氏の口から親しく聽いた所のものであつた。『非羅曼風物詩』（レ・フラマン）の作者として知らぬ人もあるまい詩人エミール・ヴエルハーレンが、ある日、白耳義國王アルベール陛下のまへで、詩に關する長講演をやつたことがある、といふのである。三木氏はそれを語つて『ヴェルハーレンはその時、たゞ「陛下！」といふ間投詞を時々入れるだけで、全く『敬語拔き』で講演したものなさうです』と、二十歳を出て間もなかつた自分をびつくりさせるやうな調子で聽かせたものであつた。事實、自分は、その折は、その話に感服するといふよりも、日本にゐてはまるで想像もできぬ事柄なので、殆んど信じ難いほどに思つたものであつた。が、今日では尠くもこちらの國々に於いては、かくのごとき事柄は一向に珍らしいことではなくして、格別の話題にすらなり得ぬものであることを、次第々々に知るに到つたのである。——

○

自分は、こちらの國に於ける藝術家の社會的地位を語るに際して、大統領やら總理大臣やら文部大臣やら、さては國王陛下やら國母陛下やらを引合ひとして出して來た。讀者のなかには、或は、自分のこの援用を目して徒らに金ピカを光榮とするものとなす人々が無いでもあるまい。よし、自分は必ずしも然らざることの反證として、所謂民衆自體が、所謂プロレタリア自體が、秀れたる藝術と藝術家とに對して、如何ばかり強き愛著と尊敬とを有するかの一二の實例を、こゝに述べて見るとしやう。然かも、これ亦、不幸にして、我々日本人の大部分にとりては、容易に理解し得ざる出來事でないかを虞れる。――

十月十八日のアナトール・フランスの葬儀當日の巴里の人出は、自分の眼に最も鮮やかなるものの一つである。ケイ・マラツケイの式場から、巴里の郊外ヌイーユの墓所にいたる約數里の沿道は、その行列を見んとする人々で、文字通り十重二十重の人垣を作つてゐた。あれほど廣いエトワールの凱旋門附近なぞでさへ、時間の接近につれて、殆んど人垣を通り拔けることができなかつたほどだつたと言ふ。數年前、一代の名女優サラ・ベルナールが亡くなつた時も、その葬式の行列は、矢張りこの折のやうな夥しい人出のなかを通り過ぎたものだつた、と自分に語つて呉れた人もあつた。兎に角、役者なり小說家なり世に秀れたる藝術家に對するこの國の民衆の異常なる愛著は、かゝる盛んなる光景を一目見たゞけでも、充分會得することができる氣がした。到底我々の國では想像すらもできまい、――といふ氣までした。

話は、葬儀の式典そのものに遡る。前回の通信のなかでも鳥渡書いた所であるが、この式典に於いて數々の人々の哀悼の演說があつたが、そのなかに、自分に取分け強い印象を與へたのは、勞働總同盟（セー・ジエー・テー）の首領ジユーオー氏の爲した演說であつた。ジユーオー氏と言へば、日本邊にも名の聽えてゐる勞働階級の爲めの有力なる闘將である。ひとり佛蘭西とのみ言はず、世界のプロレタリアの爲めに、日夜健闘しつつある偉大なる勞働者である。この氏が、あの見上げるやうな巨軀を演壇の上に運んで、『全勞働者に代つて』文豪フランスの死を心から悼む、といふ悲痛な言葉に充ちた哀辭を述べてゐるのを、自分は間近い席から眺めながら、深い感慨を起さずにはゐられなかつた。こゝに『白き石の上にて』の著者の偉さがある！ といふよりも、こゝにこの國の藝術家の持つ社會的の力の根強さがある！と自分は、その折も、今更のやうに祖國の方

を振り返られずにはゐられないものがあつた。……

自分は、昨年巴里に着いて早々、あのトロカデロの廣いサルで行はれたエミイル・ゾラの盛んな紀念祭に臨んだ折にも、同じ感慨を起させられたものであつた。二萬人も這入れると言はれてゐる廣大なそのサルは、殆んど立錐の餘地もないほどに人々で一杯になつてゐた。然もその夥しい人々は、その姿からその容貌からして、例へば平素我々がオペラやらコメデイー・フランセーズやらに赴いて眺める人々とは、明らかに違つてゐた。着古した背廣姿の、それとも粗末なサージュのタイユールを著けた姿か。ゾラが、貧しき者、壓し拉がれたる者の、二なき理解者であり同情者であつたといふだけに、この日この廣大なるサルを埋めてゐた夥しい人々の容貌には、むしろ、華やかなる藝術の饗宴に列してゐるといふよりも、例へば社會主義者の會合にでも臨むでゐると言つたあるものが存するやうな氣がさせられた。ゾラと言へば、『ナナ』を、『ナナ』と言へばあの當時わが新聞廣告に現はれたるがごとき淫蕩卑猥なる文字のみにて描かれたる春本の類と合點してゐる日本からはるばると海を航して遣つて來た自分は、この夜の光景を見て、思はず顏が赧くむのを禁じ得なかつたのである。ゾラと言へば、――否、なべて文學と言へば主としてニキビ青年の愛讀するものと相場が極められてゐる日本と、この會場にあふるるがごとき『民衆』を愛讀者として有してゐる佛蘭西と、まことにその間には、はるばる航しなければならぬ、海洋が横つてゐるのだ！

然し、自分にとつて、この國の所謂プロレタリアが如何に藝術と藝術家とに對して強き尊敬の念を有するかを、最も明かに理解し得たと思つたのは、自分の第一次の巴里滯在中、――詳しく言へば、千九百二十年の春に見たある出來事に依つてであつた。その出來事といふのは、巴里はエトワールの凱旋門に近きサル・ワグラムに於いて催されたる巴里を中心としその近郊の社會主義者を集めた聯合團體の舉行にかゝるベートーヴエン祭がそれであつた。

社會主義者のベートーヴエン祭！これだけ聽いては、日本の讀者に何のことやら一向腑に落ちぬかも知れない。ベートーヴエンの音樂といふものは、高尚なものだ。ハイカラな新知識の所有者ででもなければ判らないものだ。官立の音樂學校邊でなければ、演奏できないものだ。奇麗に着飾つて、――できれば自働車にでも乘つて聽きに出掛けなければならないものだ。そうしたのが、日本に於けるベートーヴエンなのである。それを、佛蘭西では、無産無識階級の者等が寄り集つて、この『高

尙なる』ベートーヴエンの爲めの音樂會をやるといふのである。腑に落ちやう筈はない。

が、それ計りではない。その日の演奏は、全然社會主義者のなかの有志だけで遣つたのである。それも、日本では漸く昨年の暮かに官立音樂學校の手に依つて初めて演奏せられたといふ『第九シムフオニー』の大典を、當夜百人を越えた管絃團と更に二百人をも突破してゐやうと思はるる夥しい合唱團と（繰返して言ふ、それが全部社會主義者の男女である！）で、物の美事に遣り拔いたのである。このほかに『エグモント』の序曲、ほか二つ計りあつたかと記憶する。――

何の爲めに彼等は、當夜のごとき眞似をしたのであるか？この日、音樂のはじまるに當つて、社會思想家にして詩人、同時に秀れたる勞働鬪將の一人であるジョルジュ・ピオッシュ氏は、その巨軀を群集の上に突立たせて言つた。――『あゝ、ベートーヴェン！君こそは眞に『革命』の爲めの藝術家だつた。プロレタリアの爲めの藝術家であつた。君の惱めるその惱み、君の戰へるその戰ひ、君が永久に失はざりしその希望の耀き。――それこそ、何よりも我々の惱み、戰ひ、希望ではなかつたか。ベートーヴェン。君の藝術は、否君自身は、實に我等プロレタリアに屬する！』

自分は、ピオッシュ氏の言葉が正しいか否かを、こゝで吟味しやうとは思はない。然し、あの烈しい『第九シムフオニー』を火のやうな勢ひで演奏してゐる數百人の素人音樂者、それを興奮しながら聽いてゐる數千人の貧しげな姿をした聽衆、その孰れもは、全くピオッシュ氏の言葉通り、ベートーヴェンを『己れのもの』のごとく確信し切つてゐるのだつた。それは、他目ながら疑ふの餘地がなかつた。

それにしても、社會主義者と言へば何處でも罷工騷ぎのお先棒かそれとも賃銀値上運動の煽動か、そのほかには大して、藝はないものと考へてゐた自分にとつて、この夜の光景は、その平素の考を根柢から覆すに充分であつた。同時に、これほどまでに藝術をさては藝術家を敬愛する心持が、社會の底々までも泌み込んでゐることに、驚嘆しないわけには行かなかつた。從來文學美術を以てむしろ婦女子の玩ぶ具に過ぎざるものとなし、さては近時は有閑階級の贅澤なる娛樂物たるに過ぎざるものと見做さうとしてゐる東海の絶島に生を享けた自分にとつては、この夜の光景はまたとなき一の新らしき世界の教訓となつて、忘れ得ぬ印象を止めるに到つたのであつた。――

○

藝術を愛し藝術家を崇ぶことは、要するに已れが既に一の藝術家であることを意味する。所謂藝術を職業とする連中の側に、それを職業とはせず然もそれ等の連中にも劣らずに藝術に精進するの士の多いこと、こゝの國のごときは他にはあるまい。自分は、この種の顯著なる實例を、隨時隨所に見ることができた。

アナトール・フランスをこゝでも抽き出すこととしやう。彼の死後幾許もなく、シャンゼリゼー街のあるサルに於いて、彼に關する極めて興味ふかき講演があつた。自分もその講演の席に列することができた。講師は誰あらう、現賠償委員會議長にして既に幾度か閣員となり剰へ首相の重任さへ帶びたことのあるルイ・バルトゥー氏その人であつた。その講演の内容は暫く措く。兎に角この人が、全然政治の關係を離れ純文學者としてフランスを説くこと約二時間の長きに亘つたのであつた。

バルトゥー氏は、特にヴイクトル・ユーゴーの權威ある研究家として、かねて文壇學界を通じて盛名を有する人である。自分が第一次の滯佛の折、この人は、モンマルトルに近いあるサルに於いて約一週間に亘り『レ・ミゼラブル』の作者に關する平素の蘊蓄を公にしたことがあつた。その長講演が漸く終了して數日後、突然氏は陸軍大臣の辭令を受けて入閣することとなつた。ヴイクトル・ユーゴーの研究家が、陸軍大臣に！次の内閣に於いても氏は留任して司法大臣を勤め、程なくポアンカレー氏が賠償委員會議長を辭すやその後任に推薦せられて、今日尚この最も樞要なる地位にあるのである。

ポアンカレー氏自身も、藝術の深い鑑賞家であることは、前回の通信に於いて、メッツの町のモーリス・バレスの銅像除幕式のことを書いた折に示した通りである。最近新聞紙の傳へる所に依れば、馬耳塞の町はバレスが晩年の傑作『東邦調査（ユンヌ・アンケート・オー・ペイ・デュ・ルヴァン）』の紀行が、馬耳塞の港を舟出して書かれたるものであることから、それを記念にする意味でこの小説家の銅像を建てることとなし、おゝ不思議なる町よ！ 近くその除幕式をば、ポアンカレー氏の司會の下に行ふはずだといふ。氏は當日、この『東邦調査』の名篇について、特に秀れたる讚頌の心を述べるつもりであるといふ。

さういふバレスその人も、小説家とは言へ、一方に於いて最も識見ある政治家の一人ではなかつたか！ 文部大臣に就任の勸誘をさへ、屢々受けたほどの人ではなかつたか！

ポアンカレー内閣の文部大臣であつたレオン・ベラール氏が、卓逸せる文藝批評家であることは、殆んど定評である。氏は最近、大臣當時諸方で公式に爲したる演說を蒐め、『偶感

思想の爲め』に題し、一冊の本として公刊してゐる。氏は、劈頭に、これ等の演說は當時政府の名に於いて爲したものであるだけに、稍もともすれば重く且固きに失してゐたことを遺憾とせねばならね。と斷つてゐる。が、その內容を見て行けば、ある時は喜劇作者モリエールを論じ、ある時は自然主義の小說家フローベルを語り、ある時は宗教哲學者ルナンを童話作者ラ・フオンテーヌを、劇作者エルヴイユを、小說家バレスを說き、さては、畫家アルグルを、トゥールーズ・ロートレックを、時としては現代の漫畫家フオランをさへ語る等、何處に、『大臣』の演說があると日本人には、不思議に感ぜらる計りである。實にその眼界の廣汎にして、しかもその見解の透徹せる、到底凡庸なる文壇の職業批評家は、氏の足許にさへ及ばない觀があるのである。かうした本を手にして見れば、かの哲學者クローチエを文部大臣に持つた伊太利を、佛蘭西だけは必しもさして羨むに當らないとさへ、自分には思はれたのであつた。

今の首相エリオその人も文筆に携つて立派に『飯のたべて行ける』人である。彼はリオン大學の文學部の講師でさへある。彼の文學的著述は、既に雙指を屈するほどある。わけて最近美裝して世に出た『レカミエ夫人その友』のごときは、彼の深き學識と優しき情操とを示して、餘蘊のないものと言はれてゐる。若しそれ、過日パンテオンに於いて述べたジャン・ジョレスへ讃頌の言葉のごときは、再讀三讀正に金玉の響ある古典的名文章を以て稱せらるべきものであらう。

……かうしたことを次々と述べて行けば、全く切りがないから此邊で止すとしよう。たゞ序ながら、日本の誰しも名だけは知つてゐるに違ひない駐日佛國大使クローデル氏のことを、鳥渡書いて見ることにする。

クローデル氏が、大使でありながら、然も一方詩人として聽えてゐる人だといふことから、他の國の大使の名は知らずとも、この人の名だけは誰しも知つてゐるといふ位に、日本では有名な人となつてしまつた。それほどに、かうしたことが日本人には珍らしかつたのである。然しながら、氏の『本職』が純粹の文學者ではなくて、言はゞ畑違ひの外交官であるといふが爲めに、氏の作品が野口大塊氏の俳句のごときものであると、勇ましくも斷定しやうとしたある有名なる小說家の觀察のやうに（その小說家の意見を自分は雜誌『新潮』に掲載せられてゐる合評會の速記記事で、親しく讀んだ）、若し大部分の日本人が、すぐれたる藝術は、一切職業藝術家の手になるべきものであるといふ風に考へてゐるとしたら、尠くとも、佛蘭西の關する限りでは、「間違つた考へ方であると言はなければならないのであ

藝術を愛し藝術家を崇ぶことは、要するに己れが既に一の藝術家であることを意味する。所謂藝術を職業とする連中の側に、それを職業とはせず然もそれ等の連中にも劣らずに藝術に精進するの士の多いこと、こゝの國のごときは他にはあるまい。自分は、この種の顯著なる實例を、隨時隨所に見ることができた。

アナトール・フランスをこゝでも抽き出すこととしやう。彼の死後幾許もなく、シャンゼリゼー街のあるサルに於いて、彼に關する極めて興味ふかき講演があつた。自分もその講演の席に列することができた。講師は誰あらう、現賠償委員會議長にして既に幾度か閣員となり剰へ首相の重任さへ帶びたことのあるルイ・バルトゥー氏その人であつた。その講演の內容は暫く措く。兎に角この人が、全然政治の關係を離れ純文學者としてフランスを說くこと約二時間の長きに亘つたのであつた。

バルトゥー氏は、特にヴイクトル・ユーゴーの權威ある研究家として、かねて文壇學界を通じて盛名を有する人である。自分が第一次の滯佛の折、この人は、モンマルトルに近いあるサルに於いて約一週間に亘り『レ・ミゼラブル』の作者に關する平素の蘊蓄を公にしたことがあつた。その長講演が漸く終了して數日後、突然氏は陸軍大臣の辭令を受けて入閣することとなつた。ヴイクトル・ユーゴーの研究家が、陸軍大臣に！次の內閣に於いても氏は留任して司法大臣を勤め、程なくポアンカレー氏が賠償委員會議長を辭すやその後任に推薦せられて、今日尙この最も樞要なる地位にあるのである。

ポアンカレー氏自身も、藝術の深い鑑賞家であることは、前回の通信に於いて、メッツの町のモーリス・バレスの銅像除幕式のことを書いた折に示した通りである。最近新聞紙の傳へる所に依れば、馬耳塞の町はバレスが晩年の傑作『東邦調査（ユンヌ・アンケート・オー・ペイ・デュ・ルヴァン）』の紀行が、馬耳塞の港を舟出して書かれたるものであることから、それを記念にする意味でこの小說家の銅像を建てることとなし、おゝ不思議なる町よ！近くその除幕式をば、ポアンカレー氏の司會の下に行ふはずだといふ。氏は當日、この『東邦調査』の名篇について、特に秀れたる讚頌の心を述べるつもりであるといふ。

さういふバレスその人も、小說家とは言へ、一方に於いて最も識見ある政治家の一人ではなかつたか！文部大臣に就任の勸誘をさへ、屢々受けたほどの人ではなかつたか！

ポアンカレー內閣の文部大臣であつたレオン・ベラール氏が、卓逸せる文藝批評家であることは、殆んど定評である。氏は最近、大臣當時諸方で公式に爲したる演說を蒐め、『偶感

思想の爲め』に題し、一冊の本として公刊してゐる。氏は、劈頭に、これ等の演說は當時政府の名に於いて爲したものであるだけに、稍もともすれば重く且固きに失してゐたことを遺憾とせねばならぬ。と斷つてゐる。が、その內容を見て行けば、ある時は喜劇作者モリエールを論じ、ある時は自然主義の小說家フローベルを語り、ある時は宗教哲學者ルナンを童話作者ラ・フオンテーヌを、劇作者エルヴィユを、小說家バレスを說き、さては、畫家アルグルを、トゥールーズ・ロートレックを、時としては現代の漫畫家フオランをさへ語る等、何處に、『大臣』の演說があると日本人には、不思議に感ぜらる計りである。實にその眼界の廣汎にして、しかもその見解の透徹せる、到底凡庸なる文壇の職業批評家は、氏の足許にさへ及ばない觀があるのである。かうした本を手にして見れば、かの哲學者クローチエを文部大臣に持つた伊太利を、佛蘭西だけは必しもさして羨むに當らないとさへ、自分には思はれたのであつた。

今の首相エリオその人も文筆に携つて立派に『飯のたべて行ける』人である。彼はリオン大學の文學部の講師でさへある。彼の文學的著述は、既に雙指を屈するほどある。わけて最近美裝して世に出た『レカミエ夫人その友』のごときは、彼の深き學識と優しき情操とを示して、餘蘊のないものと言はれてゐる。若しそれ、過日パンテオンに於いて述べたジャン・ジョレス讃頌の言葉のごときは、再讀三誦正に金玉の響ある古典的名文章を以て稱せらるべきものであらう。

……かうしたことを次々と述べて行けば、全く切りがないから此邊で止すとしよう。たゞ序ながら、日本の誰しも名だけは知つてゐるに違ひない駐日佛國大使クローデル氏のことを、鳥渡書いて見ることにする。

クローデル氏が、大使でありながら、然も一方詩人として聽えてゐる人だといふことから、他の國の大使の名は知らずともこの人の名だけは誰しも知つてゐるといふ位に、日本では有名な人となつてしまつた。それほどに、かうしたことが日本人には珍らしかつたのである。然しながら、氏の『本職』が純粹の文學者ではなくて、言はゞ畑違ひの外交官であるといふが爲めに、氏の作品が野田大塊氏の俳句のごときものであると、勇ましくも斷定しやうとしたある有名なる小說家の觀察のやうに（その小說家の意見を自分は雜誌『新潮』に掲載せられてゐる合評會の速記記事で、親しく讀んだ）、若し大部分の日本人が、すぐれたる藝術は、一切職業藝術家の手になるべきものであるといふ風に考へてゐるとしたら、尠くとも、佛蘭西の關する限りでは、間違つた考へ方であると言はなければならないのであ

る。クローデル氏のごとき、『本職』が外交官でありたから、職業文學者に劣らずに卓れたる詩を書き、小說を書き、論文を書く人が、この國ではいくらでも居るのだ。クローデル氏は、さうした數多い人々のなかの一人であるといふに過ぎないと言つていゝのである。

多年華盛頓に佛國大使として駐剳してゐたジュスラン氏のごときを見よ。英文學の精通者として、かの世界的の名著『英文學史』の著者テーヌ以後この人在りとさへ、世に喧傳せられてゐるのではないか？さては、大戰前駐露大使をしてゐたパレオローグ氏のごときを見よ。『ダンテ論』の、『詩人アルフレッド・ヴイニエ論』の、さては小說『ル・シリス』の著者として、文名を高く擧げてゐる人ではないか？

そんなに古い大使級の人々を持ち出さんでもいゝ。現代佛蘭西文壇の花形役者として何人も先づ第一に指を折るのを躊躇しない『夜開く』(ウーヴエール・ラ・ニュイ)の著者ポール・モラン氏は、目下ケー・ドルセーの本省に勤務してゐる青年外交官なのである。更にモラン氏と並んでこれ亦文壇の華やかな人氣の渦中にある小說『ジーグフリイリモージュ人』の著者ジャン・ジロートウー氏も、ひとしく若手の外交官ではないか？

政治家で文藝の才あると言へば、直ちに野田大塊氏の俳句に飛ばうとする我が祖國の文壇の士よ。が、自分はそれをこゝで嗤はうとはしない。その連想が如何に滑稽極まるものとは言へ、それはあながち諸君の責任ではないのであらうから。日本の政治家の、――否、日本の社會全體の責任といふのにほかならないであらうから。……

○

自分は、長々とこの國の文學者の社會的地位の高いことを語り續けて來た。彼等が、如何に社會の『寵兒』であり、『寶』であるかを、いろ〳〵と語り續けて來た。が、こゝにはそれと反對に、社會の、國家の、一政府の、さては皇室の、極度の憎しみと怒りとを買つてゐる一文學者の話がある。その珍らしい話を物語つて、――それは勿論日本の話ではない、――この通信を結ぶことにしたいと思ふ。

ブランコ・イバニエスと言へば、『默示錄の四騎士』の著者として、さては『血塗れの鬪牛場』の著者として、世界でその名を知らぬ者のない傑れた小說家である。道聽塗說に過ぎないのかも知れぬが、亞米利加に於いては、バイブルに次いでこの作者の作品が最も多く讀まれてゐるとさへ、言はれてゐる。こゝに語らうといふ文學者とは、實にこのブランコ・イバニエスそ

の人に他ならない。

彼が世界一週を企て、その序にわが邦にも立ち寄つたのは、確か昨年のはじめであつたかと記憶する。その際、西班牙に關係ある外務省の四五の者が中心となつて、芝の紅葉館で彼の爲めに午餐會を催した。曾て西班牙を旅して其の旅行記なぞを公にしたことのある自分は、勸めらるゝまゝにその午餐會の席末を汚して、杯盤のなかに親しくこの著名なる小說家を見ることができたのであつた。

彼が世界一週を終つて佛蘭西の南海岸（彼は常にそこを定住所のごとくにしてゐる。）に落付いたと思はるゝ頃、その後を追ふやうに自分もまた日本を去つてこの佛蘭西に來ることになつた。何といふことはないかゝる無意味な緣からも、自分は、彼が世界一週から生み出すはづになつてゐたその著作なるものが市場に現はれるのを、人以上に待ち心であつた。彼の見た『日本』も、その日本を遠く離れてゐる自分にとつては人以上に早く知りたくもあつた。

その年も暮るゝに差程間もない頃、彼の新らしい著作が、書肆のまへに積み重ねられた。がそれは、自分の待つてゐたやうな種類のものでは全くなかつた。否、自分許りではあるまい、恐らく世間の大部分の人が、一齊に驚ろきの眼をもつてその書物に印せられてゐるブランコ・イバニエスの名前を見るに違ひあるまい、と思はるゝほどに意外なる著作であつたのだ。『假面を剝ぎたるアルフオンス十三世。西班牙の軍閥主義的恐怖時代。』"Alphonse XIII démasqué, La terreur militariste en Espagne." ——これが、その書名であつた。

兎に角自分は、小說家の域を全く脫して書かれたと覺しいこの著作に、全く別樣の意味で心が牽かれた。それに、數年前親しく西班牙の土地を踏んで以來、自分は、この國の內外の種々の出來事に付いて絕えざる興味を持ち續けてゐた。屢々自分は、この書物を購ふて、早速讀みはじめたのであつた。

言ふまでもなくこの書物は『政治』の爲めに書かれたるものであつた。何が、彼をして、己れの固有の世界の『文藝』から態々かゝる『政治』の世界へと足を入れさせたのであらう。そのことを先づ第一に彼は書いてゐる。

『數年以來、自分は、わが國の政治とは遠く離れて棲んでゐた。然し、西班牙の現況は、自分の隱退の生活を捨てしめ、且つ、自分が永久に放棄したと信じてゐた戰鬪に再び今日加擔せざるを得ざらしめたのである。

自分が、かゝる決心を起すに到るまでは、永いこと躊躇してゐたものであつた。孤獨と勞作との生活は、文學者としての自

分の趣味に何よりも適する。が然し、自分は、戰鬪を再開することを、義務なりと思惟するに到つた。

今日、西班牙は、軛の下にある。彼女は語るを得ない。といふのは、その口に猿轡を銜へさせられてゐるから。彼女は書くを得ない。といふのは、手を縛られてゐるから。……自分は、最早や沈默を守つてゐることができない。西班牙の人々がその聲を擧げるのを碍げられてゐる時に當つて、自分はせめて彼女の爲めに語つてやることを敢てしやう。假令如何やうなる結果とならうとも、自分は、眞實を語らう、眞實全部を語らう……』

から先づ宣言してから彼は、所謂その眞實を容赦なく發露する。然もその容赦なき攻擊は、一に現國王アルフォンス十三世その人に向けられてゐるのである。現執政プリモ・デ・リヴエラ將軍に對しては、早晩彼は失脚するであらう、然かも彼はアルフォンス十三世の一傀儡たるに過ぎない、國王にしてその地位にある限り、一のプリモ・デ・リヴエラ去るも更に他のプリモ・デ・リヴエラが現はるであらう、となして深くはこれを追窮せず、專ら國王のみにその攻擊の矢を集中してゐるのである。

自分は今こゝにこの書の內容を日本の讀者に紹介する自由を有しない。たゞ、それが、實に猛烈深刻なる問責であり彈劾であるとのみ言つて置かう。矢繼早なる諸事實の列擧と、それを叱責する語氣の峻烈さとは、正に法廷で檢事の論告を聽くがごとき感じを與へる。とのみ言つて置かう。

無論この著作は、原文は西班牙語で書かれて、西班牙本國並びにそれと母子の關係にある南阿米利加の諸國に最も多く頒布せらるるやうに仕組まれたことは、言ふまでもない。然しながら、かゝる性質の書物が、西班牙本國に容易に搬入せられ得るものでないことは、——殊に現下の政情に於いては、——誰しも氣がつくことである。果然、西班牙の國境では、極端に峻嚴なる監視、檢閱が行はれ出すに到つた。否、國境のみと言はず、西班牙全土に亘つて、その警戒の手は伸びた。この著書を一部でも藏してゐた者は、遠慮なく十五日間の禁錮を言ひ渡された。當時西班牙を旅してゐたある佛蘭西人の技師が、汽車中で突然官憲の取調を受け、かゝる禁令あるとは知らずして鞄のなかに偶然藏してゐたこの本の爲めに、其儘監獄に送られたとさへ言はれてゐる。

當時の新聞紙は、ブランコ・イバニエス氏の所有にかゝる飛行機數台が、この著書を滿載してピレネーを越え、西班牙の北部地方にそれを頒布したので、それを追擊する爲めに政府側でも飛行機を飛ばして、空中に戰爭當時さながらの大活劇を演じた、とさへ傳へてゐた。——

マドリツト政府は、遂に在佛西班牙大使に訓令して、ブランコ・イバニエス氏を、佛蘭西の現行刑法に遵つてこれを佛蘭西の法廷に訴追せしむることに決意した。その佛蘭西の現行刑法といふのには、外國の元首に對して侮辱を加へた者は、その外國政府の請求に從つて、論罪するといふ條項が存してゐるのである。（日本の刑法に規定する『國交に關する罪』の條項には、『帝國に滯在する外國の君主又は大統領に對し云々』とあつて、佛蘭西の刑法の條項と較べて、遙かに範圍が局限せられてゐるわけである。）『假面を剝ぎたるアルフオンス十三世』の著書は、實に、この條項にぴたりと當てはまるといふ譯である。

法は法である。西班牙大使から西班牙政府の名を以て佛蘭西法廷に提起せられたこの公訴狀に對しては、法の明らかに示してゐる所に遵つてこれを處理し、被告ブランコ・イバニエスを起訴し、審理し、結局彼を何年間懲役に處すると判決するのほかはない。到底これを曖昧のうちに葬り去る餘地とてはない。

元來文藝を愛好し、また文學者なるものを尊敬する念の並以上に強い佛蘭西に於いては、ブランコ・イバニエス氏が世界の傑れたる小說家の一人であるといふことだけで、今回のごとき危禍（?）に逢はねばならなくなつたことを上下ふかく痛心してゐることは、言ふまでもない。加へて、この小說家は、その名作『默士錄の四騎士』の一篇が明かに示してゐるやうに、佛蘭西を佛蘭西人を佛蘭西文明を一切を越えて熱愛してゐる人である。この小說一つのみによつても、彼は佛蘭西全體の感謝を集めてゐるのだつた。この二なき『佛蘭西の親友』を、事もあらうに、佛蘭西自身の手で所刑しなければならぬといふ破目に陷つたわけだ。その並ならぬ痛心の狀は、この事件を報道する殆んど總ての新聞のうへに、誰しも見ることができたのである。

然し、繰返して言ふがごとく、法は法である。著々として、事件は進捗して行かねばならなかつた。裁判長は任命せられた。陪席判事も任命せられた。檢事も任命せられた。これと同時に、ブランコ・イバニエス氏側の辯護士も確定した。公判の期日も定められた。マントンの別墅（ヴイラ）に日を送つてゐる著者は、檢事局の召喚狀に依つて、何日には巴里へ到着する、といふことも明かにされた。――

が、彼に對する佛蘭西一般の痛心と同情とは、時日の切迫とともに何等かの形をとつて現はれずに居らなかつた。數名の下院議員から、折柄開會中の議會に、現行刑法改正の提案――卽ち、ブランコ・イバニエス氏を罪に陷さうとしてゐる問題の刑法の條項を削除して了はうとする提案が、急遽持ち出されたのなぞは、その最も大きな現はれの一つであつた。然し、この提

案も、ブランコ・イバニエス氏を庇ふ餘り、他方西班牙國王及び西班牙政府に對して穩やかならぬ態度を示すといふ結果となり、國際關係上憂慮すべき種を播くこととなるのは固よりである。それを思へば、心中では誰しもこの提案に異議はないとしても、表面これを贊成するといふことには躊躇させられる。…

西班牙政府が、この訴追の決意を變更せぬ限りは、到底この『板挾み』の苦しい狀態から佛蘭西が脫し得る望みはなかつたと言つてよいのであつた。

所が、思ひがけず、西班牙政府は、——否、西班牙國王は、ブランコ・イバニエス氏に對する訴追を中止することとなつたのである！その理由、その動機は、必しも明かではないが、一月廿日過ぎのこと、首相エリオ氏が下院に於いて簡單に報告してゐる所に依れば、——

西班牙政府は、國王アルフォンス十三世の名に於いて、佛蘭西政府に對して、嚢に佛蘭西政府に提起したるブランコ・イバニエスに對する公訴狀はこれを取下ぐることに決したる旨を、通告して來た。佛蘭西政府は、この機會に於いてアルフォンス十三世の自由主義（リベラリズム）の發現に對し、深く嘆賞せんとするものである……云々。

恰度この時期に、西班牙では首府マドリットを中心とし全國に亘つて、國王の爲めの盛んなる祝賀の祭りが行はれた。恐らく、ブランコ・イバニエス氏に對する告訴の取下げは、この機會に於ける特赦といふ意味から來たこととかと思はれる。同時にこの事件に對する佛蘭西の一般の輿論なぞも、この告訴取下げの決定の有力なる資材となつたではないかとも、推測せられぬわけではない。——

兎に角、エリオ氏の口から、思ひがけないこの通告を聽いた時の下院全體の喜び（それは取りも直さず佛蘭西人全體の喜びだつたと言つていい）が、——まゝにならぬ『板挾み』の苦境から脫し得たといふその喜びが、如何に大きくあつたかは、殆んど前例のない全員總起立の喝采をもつてその通告を迎へた光景をもつて見ても判る。議員の一人の如きは、わざ〳〵演壇に足を運び、曾て彼が西班牙放浪中各所で受けた厚遇、同情を追回して、これを機會に西班牙に深き感謝の言葉を寄せたほどであつた。

かくして、世間を騷がしたブランコ・イバニエス氏の訴追事件なるものは、こゝに大團圓を告げるに到つた。かくして、佛蘭西國民は、やれやれと安心をしたわけである。所が、當のブランコ・イバニエス氏は、一向これで安心はしない。現に事件が決定に緊張せらるるに到つた後も、本國の所謂患者に對して、斷

くの如きことあるべしとは豫め覺悟してゐた、寧ろ佛蘭西を愛する自分としては佛蘭西の法廷に於いて裁かるるを歡びとする、とさへ述べてゐたほどであつた。從つて、彼の訴追が國王の發意から中止せらるることになつたといふ報を聽いても、彼はエリオ氏のやうに、アルフオンス十三世その人の自由主義(リベラリズム)を德とする氣にはなれなかつたのである。エリオ氏の演說があつて間もなく彼は、書を裁して佛國首相に送り、彼が平素から感謝と敬愛との念を持する佛蘭西に對しこの機會に更に深甚なる謝意を表すると述べ、然も筆を轉じて、首相がこの事件に關しアルフオンス十三世の『自由主義』を讃頌しつゝある際に、一方西班牙に於ては、彼の財産はマドリツト政府の爲めに故なく沒收せられ、彼の著作はその如何を論ぜず片つぱしより總て燒き捨てられ、さては、從來彼の名を持ちたりし町の名、廣場の名、……等は、總て廢止せらるることになつたと、憤懣と皮肉との語氣を用ゐて、盛んに『吠え立てて』ゐるのである。恐らく、マドリツト政府の彼に對する憎惡は、この書翰によつて更に一段增大したことかと、想はれる。告訴取下げの寬大なる處置に出でたのを、悔いてゐることかと、想はれる。

それは兎もあれこのエリオ氏あての公開狀が新聞に現はれてから數日の後、西班牙はヴアレンシヤ發の電報として、一寸人の目には付かぬほどの數行の短かい記事がある新聞に載つてゐるのを、自分は圖らずも眼に止めた。それに依れば、ブランコ・イバニエス夫人がこのヴアレンシアの町(彼の生地であることは、こゝに材料をとつた彼の數々の小說を讀んだ者のよく知る所であらう。)が病沒したといふのである。なほその電文の末に、その葬式には、二萬人を超へる人が參加したと附記してあつた。

ピレネーの山の南と北、さして遠からぬ距離の間に住みながら、愛する夫を見得ずして死にゆく妻。その死にゆく妻の手さへも親しく執り得ざる夫。身から出た錆とは言へ、はた、天人俱にこれを許さざるべき反逆の行爲の爲めとは言へ、異鄉にあつてこの凶事に逢ふ彼の斷腸の念を想到すれば、誰しもそゞろ一掬の涙無きを得まい。然し、罪は罪功は功、兎も角小說家としては西班牙の誇りである彼の偉大なる功績を想ふたが爲めか、彼の生地なる二萬の多きに達する人々が、彼の亡き妻の棺後に從つて會葬したといふ、その報を聽いては、夜半彼の心もひそかに慰めらるることを得たであらう。……(**第二信**)

(一九二九・二・一一)

冷たい飲もの食もの

冷たい飲みものと食ひもの

近松秋江

西瓜

私は夏は相應に冷い飲食物を取るけれど人工的の飲料品はあんまり好まない。たとへばアイスクリームなどは、各人が好んで用ゐる物であるにもかゝはらず、自分はあまり好まない。それからソーダ水なども好きな方ではない。たゞ、冷したコーヒーにオレンヂを一片入れたくらいのものは自から進んで飲むこともある。氷水などは最も用ゐない方である。

之れに反して天然の産物は夏期に於て最も好む所である。その中でも西瓜が一等好物である。私は決して、贅澤は申さないから、夏日は毎日西瓜の甘い品を常用したい。昨年も一昨年も西瓜は連日食べてゐた。今年もそれが食べたい。西瓜を食べることを思ふと、夏日の來るのも私にとつては、一つの樂みである。私は以前は冬よりも夏が嫌ひであつたが、近年年を取つたせいか、冬はしどく閉口するが、夏は存外元氣である。食欲も冬季は可けなくつて夏季に進む。そして夏日高い山の上にでもいつて、翠巒の中に呼吸してゐたならば、四季の中で夏季くらゐ樂しいシーゾンはないと思ふ。眞に夏日は樂みである。

それで西瓜だが、誰しも子供の時は西瓜を好むものである。私もさうであつた。村の外を流れる川へ水泳にいつて、したゝか遊んで戻つて來ると、井の井筒に棕櫚繩がかゝつてゐるのを子供の眼に、早くも見てとり、西瓜だなと、覗いてみると、果

してそれである。それを引き上げて食べるまではもう何處へも遊びに行きたくない。

すると段々、田舍にも村役場の達しなどによつて、衞生思想がやか間敷なり、西瓜など最も可けないといふことになつて、殊のほか、少年の頃から病氣に神經質であつた私は、自分の方から、恐れて西瓜を決して食べなくなつてしまつた。他の者が食べて、私にも進めても、ぱつたり食べなくなつてしまつた。これは、田舍の、物事をよく辨へない者共の誤解であつて、西瓜が不可なのではない、それを過食したり、腐敗しかけてゐたりするのを食べるからで、西瓜その物は決して不可でないのみならず、西瓜は非常に好い物だといふことを知らなかつた。

それで近年は、私も復た西瓜を食ふ。夏季になると、殊に近ごろは到る處にふえたカッフエーなどでいろんな人工的の飲料水を賣つてゐるが私はそれを甚だ好まない。夏季は殊のほか自然の心に一致して生きるといふことにしたい。卽ち自然を樂むことだ。人間の造つたソーダ水やアイスクリームなどは何だか厭味であるが、甘熟した西瓜を割ると、そこに、ぱつと得もいはれぬ淸新な香氣が立つて、一點も外界の不淨の物によつて汚されてゐない所の水分がたら〳〵と滴り流れる。この水分といひ、甘美なる香氣といひ、眞に造物主が吾々人間に惠んでくれた所の貴い食味である。あの暗綠色の外皮に包まれて、あんな鮮紅色をした一たび舌に觸るれば忽ち消えてしまふかと思ふやうな甘美なる成分が存在してゐることを思ふと造化の妙技ほど難有く且つ不思議なものはない。

たゞ困ることは、過食しては可けない。さうかといつて割つたのを藏つておいて後刻又取出して食べたりすると、どうも味が落ちるし、危險である。さうかといつて、大きいのでないと甘くない。一寸始末がわるい。

さらに、この西瓜について深い印象の一つは、昨年九月初旬家内が急性腦膜炎にて病氣危篤の際、やゝ正氣づきたるところで、大好物の西瓜を枕頭に持つていつて見せ、これを食べるかと聞くと、食べたいといふので、割つてやると、二切れを甘まさうに食べた。朝もそれを食べ、晝も同じほど食べ、又晩にも同量の物を食べた。博士はそれを聞いて、「うゝ西瓜を食べた。それは良かつた。」といつた。病はその時から峠を越したのであつた。殊にその西瓜は、家内が、いつも青物を買ふ所の田舍から下肥を汲取りに來る武藏野の奥の百姓が一つくれた物であつた。肥取りに來る農夫であるが、家内は毎時緣に茶を汲んで出し、そこで辨當を食べさした。そのお禮心にくれたものであらう。しかし後になつて、その西瓜を食べたことを聞くと、少し

も覺えてゐない。

トマトとビール

西瓜についで私の夏季の好物の一つはトマトである。西瓜もトマトも眞紅の色をしてゐるので紅い物が好きかといふに、さうではないが、私は此のトマトが好物である。

今年は兎角氣候がおくれがちのやうであるが、夏季の食事の樂みは晩食の時冷したビールを飲んでトマトを食べること[illegible]の一つである。トマトの他に食べる物もあるが、それ等は冷たい食ひ物の部類に入らぬから、こゝには言はぬ。一體私は、夏季といへども、あんまり冷たい物は過食することを欲せぬ。右にいつたやうな品々のほかは特に冷たいといふほどの物は食べぬ。一般に夏季の飲食物といへば又いふことも多いが、特に冷たいといふことになるとまづ、そんな物である。

涼食水扇

室生犀生

夏の飲みもの食ひものにさまざまあるべし。

許六の句集をひもとけるに句あり。

○淺顏の果も見えけりところてん

また芭蕉には

○清瀧の水汲みよせてところてん

の句あり。されど紅塵裡水道に冷したるところてんの色いたすらに磨り硝子のごとかれど、夏日暑さを鎖するの料にはあらす。

○

アイスクリームに添えたる短冊形のせんべいのあるは、大方の諸君子の知るところなるべし。されどあれは何のために添えられるかを知らざる人多かるべしと言へる友は、まづ短冊形のせんべいに盛りたるアイスクリームを裏返しにして、口中上む

ごにぢかに冷たきをあてさるためなりと言ひぬ。ことの眞僞は知らず、故あることかなと思ひぬ。

○

碓氷山上、碓氷村に碓氷川の原泉あり。冷たき泉のふくれて湧きつ溢くるときなし。予、その泉を掬び味ひけるが信越線熊の平の水よりも數等つめたく、永くは手を浸すことあたはず、美しさ心神を透明になす。とうてい輕井澤の水と較ぶべきものにあらず。

されど輕井澤の水も冷たくて洗面に耐えざるものあり、予、ひと夏をここに暮して歸京するとき、つねにまほう壜の中に一杯をおさめ、東京に持ち歸りて家族にすすめしことありしが、冷甘、とみにみなみな感心するところなりしなり。今夏、ひそかに思ふらくは此の高原の水を沸かしめ茶を入れんには、一さうの山水の味沁み徹りて茶の味天外のものあるべし。

○

○水飯や簾捲いたる日の夕　紅葉

紅葉の句は派手にて好まざれど、この句意また後世をたのむべきものなり。水飯とは夕方どき清水をもて洗ひ濯ぎ、飯一粒づつの芯に冷たさ沁みたるころ、淸き器物にて食すべきものなり。むしろ盛夏のころより、こころもち秋近く暑さ中々に烈しきとき、一夕の水飯の心、哀しとはなして食すべきなり。

○

瓜は鄕里にてみのうりと云ふ。

山の茶店、海近きところの茶店、それらの堀抜き井戸に五つ六つ浮べ冷したるありさまの、中々に俳味の姿あり。行商の人ら集ひその肌に庖刀あつるを見れば、古き木版畫の景色さながらの、川やなぎのかなたに一帆おもむろに過ぐるなるべし。東京の瓜は白かれど鄕里にては黄色の肌に縞のすぢ走り、大きさ一と握りのあまりあり。子規の「瓜二つ重たさうなる籠かな」といへる句の、そのこころ又たなしとせず。されば鄕里の童子らのその瓜のおもてに、眉目鼻を描き、みのうりちやうちんとはなすなり。または梅雨明けの夕方には泳ぎ遊ぶ子供のために、その生れ年月を書き、すつぽんに命とられぬやうにまぢないするため、大川に供養流しを敢てするなり。

○朝露によごれて涼し瓜の泥　芭蕉

瓜の句、さまざまに讀みふけりしが、この句ほどすがすがしきものなし。これ、いまの人の句のやうに新らしきなり。誰か二百年前の瓜と思ふものぞ。芭蕉はものの奥や深さに手をさぐり入れて、あたらしきものをつかむ人なり。この人の狙ひのて

いねいに落着きたるありさま、感歎の外なし。
その他瓜の句の、わが好みしをあぐれは左の二三なるべし。
○旅人の枕に瓜の匂ひかな　浪化
○瓜喰に松陰せまき日なたかな　李下
○葉がくれをこけ出て瓜の暑さかな　去來
○大垣は夜明になりぬ眞桑瓜　眠石

○

夏に氷あり、氷室といへるものあり。享保版、江戸砂子によれば「六月朔日、氷室の祝、賜氷節(ひやうせつ)と云、おほやけに氷を召す事あり、それにしたがひて地下にも氷餅、又、かき餅やうのものを食す。」とあり。いまの世の姿うつりて人造氷とて機械にてつくるなり。その緣起に曰く。

「仁德天皇六十二年五月に額田大中彦皇子鬪鷄(つけ)といふ所にかりに出給て山に上り、野中を見やり給ひしかば廬き庵を作りたるやうなる所あり、人をつかはして見せたまふに窟(いはや)なりと申、そのときこの山のあたりに侍る人をめして問せ給ふに氷室なりと申、皇子その氷をいかやうにして納るぞと問せ給ふ、こたへて申さく、土を一丈あまりほりて草をその上にふき、芦萱などをあつめしきて氷をおさむればいかやうなる大旱にもとけず、これをとりて暑月に用ゆるとなん、其時皇子此氷を仁德帝へ奉つらせ給ひければ、叡感ありしよし日本紀に見えたり是氷を奉はし始めなり。これより國々所々に氷室をおかれけるなり。近きは丹波の奥山に氷室ありけるよし、又、富士山伯耆の太山などにもありしなり。」

「氷室守龍に卷れしはなしかな」これは曉臺の句にして語らぬやうなれど、龍に卷れしは何となく氷室の感じあり。

○

くず餅、涼しけれど好まず。

粽は笹の葉につつまれ、新しげなれど腹はりて好まず。されど春に於ける草餅のやうに何となく好ましき俳味を帶びたるものなり。

其角の句に、
　相知れる女の塔澤に入て文としたるに
○山笹の粽やせめに湯なぐさみ
とあり。

倘白の句に、
○塵そへて草の香淺き粽かな
の句境は自ら愛すべき粽の風雅をよみ得たるものなるべし。

粽に似たるものにて土用餅といへるものわが郷里にあるが、むしろ涼しからざるものの如し、紅(くれなゐ)せるささげ豆を餅のそと側に

けたるもの、盛夏、腹のちから弱りたるとき食して力餅とな稱ふ也。

○

夏の日、東京の町にあま酒賣の呼びありけるは、予のごとき田舎もののその風雅知るによしなきことなり。あま酒すすりて甘美しといへるは誰が子ぞ。

○

予のこのごろつくづく思ふはラムネの流行廃れしことと之れなり。そのかみ我ら幼なき時いかにハイカラにして高貴なる飲料なりしか？いまは場末や活動館内にて折々呼賣りせるをながめ時代の高尚をこそ悲しく又た當然とは思ひぬ。ラムネの玉ほしさに憧れたるは予のみにあるまじ。

○

予の一年餘り滞郷中に食べたる鮎の數知るべからず、鮎のわた苦きは山川の味、御りて一片花瓣を嚼みたるがやうなり。蕪村の句に、

○鮎くれてよらで過行夜半の門

と、よみたるは宵淺きほどに上流に夜網打てる知り合ひの、門邊を過ぎて五六が程頒ち行きしをよみしものならん。田舎の暮しにはこのやうなること屢々あるなり。蕪村の鮎の句の新鮮なること、芭蕉の瓜の句とともに三誦すべし。鮎の最もあたらしきはいまだなれず、からだぐなぐな也。すこし時經ちてぴんと反りを打ち、ぬらぬらのあぶらのやうなるもの肌につけるは、あぢはひ新しきなり、それより時經ちてぐなぐなになるは最早なれたるあとにて、市上一片落葉のごとき鮎なり。

鮎のさしみはあまりに非道なる食ひものなり、鮎は燒き或はつゆとなすべし、山川のおとめごをさしみにして喰ふは何人の風流なる。――予、郷里の門前を走しる流れに鮎を生簀に入れ、夕されば自ら石垣を下りて料理るがほど、生簀の中よりつかまへ夕膳にしたゞめぬ。數すくなくなりしほどに漁師きたりて生簀を充せり。いま都にありて色黄なる鮎たまたま燒きくらひて、予が故郷をこそ思ひ慕ふなれ。色黄なる鮎の味ひ夕方のわが庵に坐して思へば、まことに「鮎くれてよらで過行夜半の門」べにあらず、こよひは細き月さへなく、茫たる都門の熱したる風のすぐるのみなり。

○

西瓜畑の夜半すぎて朗らかなる西瓜の肌手さぐりあてるはそも何たる悲しさぞと云へる人ありき。この言葉西瓜くらふごとに思ひ出され微笑まるるなり。なにゆゑかを知らず。西瓜は石をもて割りたるは味すぐれたりとなん。

冷たい飲物

長田秀雄

今年は氣候が大へん不順だ。もう七月だと云ふのに、まだ朝夕はセルの肌ざわりがなつかしいやうな寒い日がつゞく。かと思ふと、土用中のやうな炎暑に見舞はれて、急に街上の氷店に浴衣がけの人影が、チラホラしたりする。こんな年は、私は、まだ物心ついてから初めてだ。どうも一昨年の地震以後、まだ天變地妖の氣が、重く、國土の上を覆つてゐるやうな氣がしてならない。

が、然し、何と云つても夏は夏だ。これまで家の内に引込んでゐた人たちが急に街上に現はれて、銀座や日本橋はもちろん、いかに場末の街でも、夜の賑はひは、今が盛りである。

冷たい飲物が、この夏の夜の情調に、一段涼しげな趣を添へてゐる。けだし、夏の夜は玻璃と灯の色と羅衣と冷たい飲物との美くしい交響樂があると云つてもよからう。

アイスクリームやソーダ水のやうな飲物も結構ではあるが、私は、やはり夏にもつともふさわしい飲物は、氷水であらうと思ふ。

紫陽花の花びらのやうな美くしい顔色の女が羅衣をきて、氷屋の店先で、氷イチゴの血のやうな氷片を口に含んでゐる情景を、かつて何處かでみた事があつたが、今でも思浮べると、身内に透徹するやうな冷たい美くしさを感じるのである。

切子の皿に盛られたかき氷に、さまざまの果汁をかけるのは、恐らく、日本人の發明であらう。明治以後、人力車、牛鍋とともにこの冷たい飲物が、我々の生活とは、切離す事の出來ない夏の飲物となつてしまつた。よくは分らないが、西洋人は、決して氷をそのまゝでは食べないやうである。必ず氷を使つて、他の飲料を冷やして飲むやうである。

久しく京阪地方に行つてみないから近來の事は分らないが、以前……と云つても、もう十年程前だ——京都や大阪の氷屋は東京より餘程大がゝりでもあり、發達もしてゐたやうであつた。これは京阪が東京より苦熱の程度が烈しいためであらう。

銀座街頭の夜の散歩に、資生堂や千疋屋でアイスクリームや、ソーダ水を飲む趣味は、どう考へても夜でないと調和が惡いが、烈しい日射が、くわつと大地を射つて、眼も昏らむやうな眞晝の寂靜裡に、垣根にしがらむ朝顏の花も、すつかりしぼんで、たゞ、坐つてゐても自然と汗ばんでくるやうな時、しいんと底氣味の惡いやうな靜けさを破つて、

「氷、こほり」と呼び歩く氷屋の聲くらひ夏の眞晝の幽遠な氣持と調和する物はない。近頃は、電車や自働車の往復が騷がしいので日本橋や、廐小路や、その他目拔の大通りでは、かういふ幽深な氣持は味はへないが、やはり、燒けのこつた山の手の藝者屋町などにゆくと、どうかすると、かう云ふ情景に出くはす事がある。いま午睡から起きた桃割ればかりつやつやしい半玉が、色のさめた浴衣姿に、幅のせまい夏帶をチョコンと結んで、けたたましく格子を開けながら、呼賣りの氷屋にませた聲で氷水を注文してゐる……かう云ふだらしのない物憂い情景の内に、云ふに云はれぬ艶めかしさが古い世の風俗畫のやうに現はれてゐる。色を賣る女たちと氷水との調和には、非常に肉感的な情趣が含まれてゐると、私は思ふのである。

瀟洒たるバラック建てのカフエで、白い絹のシエードに覆はれた柔らかい電燈の光の下で、現代好みの濃化粧の女給が持つてきたフルーツアイスをすゝる趣は、まことに華やかである。夏の夜の底を流れる冷たさが、かう云ふ情景から、私にはしみじみと感じられるが、然し、森羅萬象がすべて深かい沈默に墜ちてしまつたやうな夏の眞晝の不思議な寂しさは、かう云ふ夜の情景の内には求められない。

然し私の愛する氷水の情趣は、既に過去の物である。街上を歩いてみると、氷店は段々數が少なくなつて、それに代るものは即ちカフエであるやうに思はれる。牛鍋と人力車と氷水とは、日本人の發明した物ではあるが、既に現代の好みから遠ざかりつゝある。牛屋の數が少なくなり、その代りに洋食屋が發達してきつゝあるのは、もう震災以前からの顯著な事實である。人力車もいまは電車、自動車に押されて、わずかに場末の街に姿をみせてゐるに過ぎない。

所詮、氷水とか人力車とか、牛鍋とか云ふ物は、明治の時代の産物である。即ち、形式的に西洋文化を吸收しつゝあつた過渡期の産物である。私たちが氷水の情趣をなつかしむのは、既に、過去の昔に覆はれた舊日本の思出を感傷してゐるのであらう。

氷水の味は俗惡の内に、ある清楚な味を持つてゐた。そこに明治の日本人の趣味性の一端が現はれてゐる。氷水にかはつ

て、大正時代の冷たい飲料となつた物は、アイスクリームである。冷氣に曇つた銀色の杯にもられた黄色いアイスクリームの美しさは、氷水のやうに單純な物ではない。すべて、飲料と云ひ食物と云ひ、夏の物は、冷たさと一緒に見た眼の美しさ新鮮さが必要である。食物でこれを云ふならば、淸楚な鯉の洗ひは、勿論晩酌の膳の上に幅をきかす冷奴の單純さにも、一種見た眼の上の美しさが考慮されてゐる。西洋料理でも、やはり夏の食物の方が見た眼は美しいやうである。

アイスクリームの美しさは、その色調から云つても味はいから云つても氷水に比べれば、はるかに濃厚である。濃厚にて鈍重な味はひの内に、ラシヤの手ざわりのやうな異國的な感じがひそんでゐる。氷水の方では、まづ、その冷たさが神經の末梢に響きわたるやうな氣がするが、アイスクリームの方では第一に神經に呼應する物は、厚みのある甘さである。

アイスクリームは大正の時代をかざる夏の飲料である。そして、アイスクリームをすゝるには、素顏なほころ洗髮の美人では調和しない。

山井の冷味

小川未明

ほんたうに渇した人でなければ、冷たい水の味は分らないものであるが、その冷たい水にかけては、私は、家の井戸の水にまさるものを曾て經驗しなかつたのであります。

それは、形容のされないほどに冷たい、氷水は冷たいにはちがいないが、ある意味からいつて、もつと冷たいともいはれるものは、地下幾十尺のしかも岩石の床を碎いて底から湧出する水であります。

山の半腹に、井戸を穿つて、果して、水が出るものか、否かといふことは、その當時、疑問とされてゐました。しかし、こゝに家族が移つてきて住むのには、何よりも水がなくてはなら

ない。この山には、昔から、水の湧き出る清水がありましたが、毎日、そこまで汲みに行くのは、非常に不自由を感じたからです。桶を擔つて坂を上らなければならぬことは、雨の降る日には、赤土が滑つて困難であることは、まあいゝとしても、冬、雪が積つてしまつてからは、眞に容易のことではなかつたからでした。

「果して、出るものか、出ないものか、一つ井戸を堀つて見よう」と、いふことになつた。

その時、多年この仕事に經驗のある老井戸堀人は、頭を傾けて考へながら、

「うんと深く堀らなくては、どのみち、水は出ませんね。そのかはり出たら氷水よりも冷たいですぜ」と、言つた。

老井戸堀人は、平地の井戸には、見當もついたが、かうして山に井戸を堀ることは、その經驗が少なかつたからよく分らないのでした。しかし、この男の言つたことは、當つたと言ふべきでありませう。

日數はかゝたけれど、堅い岩石の床を堀り破り、堀り下げて、ついに究き切つた時に水晶のやうな良い水が湧いて出たのです。

北へ行つても、南へ出ても、町へ行くには、二里ありました、夏のあつい日に町から山へ歸るといふのは、慣れたものでも難儀が感じられたのです。そして、途中から咽喉が燒きつくやうに渇くのが常でありました。

「我慢して行かう。家へ歸つて、冷たい水を飲まう」

さう思ひながら、家の水を樂しみにしました。平地を歩るくうちは、咽喉が渇いても我慢はされたが、山を上りかけて、あのむつとする蒸れを顔に受ける時は、もはや、我慢ができないのでした。そして、眼がくらみさうになり、口の中がねば〱するのです。

「我慢して、家へ歸つてから、上げたての水を飲まう」

私は、かう思いました。やつと、家に着くと、物も言はずに、すぐに井戸端へ行つて、自から釣瓶を降しました。その綱の長いこと……。かすかに、地の底の方で、釣瓶が水に觸れる音がしました。こんどは、それをたぐり上ることの綱の長いこと。この間に、峯の梢からきこえて來る蟬の唄が私の耳にはいりました。

やつと汲み上げた水を杓に移して、口にいれた時、その冷たさを何にたとへることができませう。まつたく歯がうづき、舌にしみるのでした。しかし、その冷たさは、氷を嚙み碎いた時に感ずるやうな痛い、粗硬な刺激ではなかつたのです。天然の

水の貴とさを思はせるのでした。

町からさげてきた、新鮮の魚も、長い途では、しかもこの暑さのためには、ぐんなりとなつてしまいました。この時、魚を摺鉢の中に移して、上から、汲み立の冷たい水をかけると、不思議にも、たちまち、ぴんとなつて、全く生きかへつたのであります。

山へ行つてから、あの水を飲まうと我慢してくる者は、獨り、私達ばかりでなかつたのでした。麓の村を歩るいて、それから、たゞ一軒ぎりある山へ、しかも毎日のやうに、新聞が郵便で來るのを配達した。配達夫がやはりこの水をたのしみにして、汗を流しながら上つてくることを後で知りました。

「この水を飲まうと思つて、我慢してきます」と、一人の配達夫が言ひました。

大きな鞄を傍に投げだして、冷たい水を飲んでから彼等は、一息ついて休むのでした。そして、涼風を胸に入れて、はじめて昏倒せんとする苦しみから救はれるのでした。かうして、勞働するものにとつて、またこの水の味が、永久に記憶されたのでした。

いまでも、山に上つて行く、私が知らない當の配達夫等に、夏になるとこの井戸の水はかぎりない慰藉となるでありませう。もし、カルピスを、あの井戸の冷たい水にとかして飲んだらばと思ひ、また、あの井戸の水で顔を洗ふことができたらばと、私は、午後の倦んじきつた都會のなかで思ふのであります。

山間の清水の味や、また、かうした岩床を破つて底から湧いた井戸の水の味には、天然な言ひしれぬうまみはありながら、淡としてゐるのに比すれば、アイスクリームや、冷したソーダ水の味は、濃厚で、泥濁です。それは、木の下の青苔の上に臥ころんで、冷風に吹かれていつしか眠つてしまふのと比するに、人工的な、煽風器で冷を取るのを以つてすると同じでなければなりません。

西洋料理屋へ行つて、冷やしスープをしかも、珈琲茶碗にいれて出される程、不快なことはなくまた、その味の不純なものはありません。たとへ、燦然として、窓の外には、文明を誇らしげに燈火は閃いても、また自動車や、電車は、走つてゐてもこんなものを都會人は、うまいといつて食べなければならぬ理由はない。

私は、自からの健康が許すまゝに、あつくて堪へられない日は、狹い庭さきへ、大きな盥を据え、それになみ／＼と水を汲みいれて飛び込むのです。そして、體が冷たくなつてから上つ

て着物を着換へて、座敷の眞中に臥ころぶと生きかへつたやうな氣持がします。もし、これに冷し切つてあるビールをあふり、身心微醉して夕風に動く木の葉と暮れゆく、青い夏の夜の空を仰げば、いつしか、醉は醒めてしまつて、轉た寂寞の感に堪えざるものがあるのでした。―七月六日―

水飯と水煎の玉露

上司小劍

冷たい食物は、水飯を第一とする。都會の生活では、ちよツと出來ないことだが、山家に夏を送つて、谷間に湧く氷のやうな清水を手桶に汲みとり、柄杓からぢかに茶碗の飯にかけて食ふこんなうまいものはほかにないと思ふのもこの時だ。都で一流の料理屋のものも、これには敵はない『神は田舍を造り、人は都會を造る』とかいふ言葉を思ひ出すのもやはりこの時である。

それに瀧泉院といふ山の中の貧乏寺であつた。貧乏寺でも、禪宗だから、掃除は常によく行き屆いてゐる。山の半腹よりは少し下にある二百坪ばかりの空地に一宇の堂が建てられてある。堂といつても、それ一棟で、奥座敷に釋迦の像を安置し、次ぎの間に和尚が住まつてゐる。其のほかには廣い臺所があるばかりだ。私がそこへ昔し馴染の和尚を訪ねて行つたのは二三年前の夏のことで、少年の折り、先住の老僧に素讀を教はりに行つた時のやうに、裏口から入つて行くと、枝折戸の外には、昔のとほりに、梅の青葉が繁つて、枝もたはゝに、梅子が實つてゐる。よくこの梅をとつて老僧に叱られたものだ。其の頃私より二つ三つ年上であつた雛僧が現住で、唯一人この山寺で仙人のやうな生活をしてゐる。檀家は一軒もないが、一人ぐらゐの食料を得るだけの田畑が山の麓にあつて、ある篤志の農夫がそれを作つてくれ、年の豐凶にかゝはらず、和尚の食ふものだけはもつて來てくれる。税だとか、本山への納めものだと

か、なんだとか、小うるさいことはすべて、其の農家で辨じて、和尚に面倒をかけないから、まことに氣樂なものである。着物も四季折々に、そこの女房が洗つたり張つたり、縫つたり、たまには新調したりしてくれるので、釋迦のやうに襤褸を纏ふ必要もなし、と和尚は空嘯いてゐる。

『托鉢に出たかて、今はうるさがつて、なか〳〵くれよらんさかいな、かうやつてじッとしてるのが、一ばんよいで。……其の代り錢は一文もないわい。こゝ十年あまり錢といふものを持つたことがない。先住の和尚さんは、實家がよいしゆやッたさかい、錢使ははツたが、わしは實家が貧乏やでなア、雛僧をおくことも出けんし、新聞も取れんわ。煙草かて、茶かて、みな山下で貰ふてくるんや。物々交換でなうて、物々お貰ひや。はゝゝゝ。』と、高らかに笑ふ和尚の口からは、山の空氣と同じ淸らかな息が流れさうであつた。

『あんたの食ふぐらゐの米は餘分にあるさかい、まアゆッくり泊つていてくれはれ。ほかのもんにはもうさう不自由を感ぜんが、話し相手に飢ゑとるわい。』と、どこでおぼえたのか、この和尚、時々新らしさうな言葉を使ふ。

『なんにも、ごッつおうはないが、水飯に胡瓜と茄子の漬けたやつちや。それに味噌のうまいのがあるで。まア一つ水を汲んでくるかなア。』と、和尚は細長い手桶を提げて谷へ水を汲みに下りた。柾のよくとほつたあの杉の手桶は先住からの持ち傳へで、新らしい時には先住の手蹟で『波淸泉』といふ字と、『瀧泉院』といふ字とが、兩面に書いてあつたが、今はもう其の文字も消ゆるまでに古びたのか、何にせよ、よくもつたものだ。と感心しながら、私は和尚の後姿を見送つてゐた。和尚は表門の方から谷へ下りて行く。

古手桶に新らしい水を湛へて、一向疲れた風もなく、汗一つ流さずに、和尚は歸つて來た。この水が谷間の岩の間に三角の凹みをなしてゐるところから湧くといふことも私はよく知つてゐる。私は今こゝへ登る時、其の三角の泉の冷たい淸らかな水を、兩手に掬んで、思ふ存分飮んで來たのであつた。それでもこゝへ登るまでは、飮んだ水が殘らず汗になつたかと思ふほど、背中を潤ふし、せい〳〵息ぎれがしてたまらなかつた。同じやうにこの土地の人であつた頃は、山の駈け登りッこをしても、決して和尚に負けなかつたのになア、と今更都會の毒氣が人の身體を弱くするのを考へたりした。

大きな木鉢に、炊いてから間のない白飯を盛り、蓮の葉に味噌を包み、桐の葉に茄子と胡瓜との新漬を載せて、緣側に持ち出された。今汲んで來た淸水は桶のまゝ、そこに置かれた。

『いつも麥飯ぢやが、今日はあんたが來るのを知つて、久しぶりに米の飯を炊いた。麥飯を食つとると、たまに食ふ米の飯のうまいこと。』と、さう言ひながら和尚は、水飯にして先づ掻き込んだ。私も其の通りにして、茶碗によそつた飯へ柄杓で水をかけて食つたが、なかなかうまい。味噌もうまければ、茄子と胡瓜との漬物も。都の郊外で食ふのよりはズツとうまい。蓮の葉に包んだ赤味噌には蓼の葉が添ふてゐる。それを少しづゝ嘗むと、チクチクした辛味が、更に物の味を增す。都ではめつたに三碗をこえない食慾が四碗半に及んで、漸く箸をおいた。箸は躑躅の枝を新らしく伐つて作つたものだつた。

食後、私はいろいろの話を和尚にして聽かした。和尚もまたいろいろと打ち解けて語つた。『舊友はやはり一ばんよいものぢや。』と、和尚は喜んで、頭を振りふりした。人一倍硬い毛で、針金のやうなのが生えてゐた和尚の頭も、だいぶ薄く禿げかゝつたり、銀のやうな白髮になつたりしてゐる。『剃るのがめんだうぢやで、禿げ藥といふのを貰つて塗つたらかうなつた。』などと、和尚はつるり頭を撫でた。まださう禿げるほどの年でもないのだ。

『水飯はうまい。』と、私はしみじみさう言つた。

『お氣に召して結構ぢや。昔し芭蕉もこれが好きぢやつたげな。水が良うて、米が良うないと、これは駄目ぢや。東京の水道の水ではあかんぞ。米もおんなし田で作つたやつやないと、ほんまの味がない。東京や大阪みたいに、米屋で拵へた混成米ではなア。井戸の水でも、もう一息といふところぢや。水は天水を屋根の上で受けたのが第一、谷間の清水が第二ぢや。しかし夏の天水はぬるいでなア、雨が降つても水飯にはならん。茶にはよいけど。』と言ひ言ひ、和尚は、これも先住傳來の烏泥の急須で茶をいれた。やはり水煎だ。

『今日は、あんたのごツつおうに玉露を買ふといたで。』と、和尚は水煎の滴露を私にすゝめた。それがまた湯でいれた茶よりもズツとうまい。香味も甚だ濃かだ。

『夏の茶は水煎に限る。しかし飲み過ぎると腹にわるい。』と言ひながら、和尚は幾度もいれかへては私にすゝめ、自分でも飲んだ。水飯を食つて、水煎の玉露を飲んで、この涼しい縁側で峯の松風に頬を撫でられながら、肱枕で晝寢でもしてゐれば、むづかしい世間も、やさしく渡れる……といふよりは、渡らずに濟むといふものだ……私は和尚の身の上が、どうやらうらやましくなつた。たまに食つたからさう思ふのであらうが、こゝの水飯の味は、都へ歸つてから千金を並べたとて、求むることは出來まい。水煎にした玉露の味は、いかなる家のア

イスクリームでも敵はないであらうと考へた。

夕食もまた水飯で、おかずには納豆が一品加はつてゐた。やはり蓮の葉に包んである。醬油はないさうで、鹽をつけて食つたが、都の納豆屋の賣り歩くものとは、とてもくらべものにならぬほどの滋味を含んでゐる。食後の茶は水煎でなくて、和尚手づくりの香茶を湯煎にしたのだが、これもまた豐かな香氣が腹の底に滲み込んで、一年ぐらゐは消えないほどの風味だ。

『東京の人は香茶を焙じていれるさうぢやが、そんなことをすると、折角の香味が消えるがなア。』と、和尚は嘆息するやうに言つた。

其の翌日も翌々日も、三日間の滯在中に、三度〳〵の水飯が、私には飽くことを知らないものであつた。水煎の玉露も朝起きるとすぐ待ちかねて飲んだ。三日目に山下の農家から、山川で漁れたのだと言つて、香魚を三尾、鹽燒きにして、私のために持つて來てくれたが、玉川の香魚なぞよりはズツといゝものだつたけれど、私は其の一尾だけをやツと食つた。水飯にはやはり、和尚手製の味噌や漬物や納豆がよいのだ。和尚もむろん、魚には箸をつけない。二尾の香魚は谷間へ棄てゝしまつた。

東京へ歸つてから、井戸水を沸かして、冷藏器で冷たくさましたので、水飯をやつてみたいが、うまくない。米も和尚の所謂混成米で、よくないのだし、漬物の材料もわるいのだ。玉露を水煎にしてみたけれど、これとて、山寺で飲んだやうな風味を感じない。玄米の煎つたのを混ぜて、俄か焙じに焙じた番茶なんか、一口飲んで吐き出したいほどだつた。私はまた、アイスクリームやソーダ水をもとめて、銀座を歩かなければならなくなつた。

こま〴〵と其の由を、和尚のもとに書きおくると、和尚からすぐ葉がきで返事が來た。それには、『これだけが一生の恨事ぢや。』といふ讃をして、下手な文人畫で女人に戯るゝ男の姿が書いてあつた。

涼しい飲食

德田秋聲

飲食物の涼味といつても、それは其の人の境地にあるので、支那の詩文などには、文字だけ見ても腋下涼風を生ずるやうなものが隨分多い。日本人のものでも、涼しい俳句や和歌もあるが、漢詩に如くことはない。これは文字その物が既に清風を喚ぶやうに出來てゐるので、特に禪氣を帶びた詩文にそれが多い。寢ころんで白雲を見ながら、それらの漢詩でも讀んでゐると、炎暑の涼しさといふものも、可なり樂しいものである。飲食物もその通りで、やはりその人の境地に屬するのだらうと思ふが、それほど主観的でなくとも、環境、居室など四圍の情況で涼しかつたり暑苦しかつたりする。食器なども見た目に涼しいものと暑苦しいものとある。たとへば料理がどんなに旨くても、亞鉛や瓦屋根ばかり見えるところや、電車や自動車の音の聞えるところ、町の埃の立つところなぞでは、うんざりしてしまふ。それらの環境では、石で疊んだ洋室で、西洋料理でも食ふ方が寧ろ涼しい感じを與へる。雪白のテーブルクロース、さつぱりした西洋の花なぞも感じが好いし、フオクやナイフも、かちやりと涼しい音を立てるのである。日本室なれば泉石といふほどでなくとも、水を打つた石や木や竹でもある庭があるか、流れに臨んだ淨らかな部屋かでなければ、迚も食慾がおこらない。しかしどつちにしても、都會は夏に宜しくない。山と水とのある田舎に如くことはない。西瓜一つ割るにしても、冷藏庫から引出されたものより、清冽な水に浸したものゝ方が感じが涼しい。魚類や肉類はさうでもないが、氷詰の鮎や凍らした鯛などは、山や海で食ふのと雲泥の相違である。

私は少年のをり、晝飯を食つてから讀書に倦んだ頃、よく海へ浸りに行つた記憶がある。北國の町は、店屋は廂が深いし、屋敷町は綠蔭が多いので、さういふところを拾つて行くと、さほどにも暑くはない。海は一里餘りで、街道は松並木で、左右は靑田である。そこをてく〳〵歩いて行くのである。今は電車もあるが、その頃は中程にある休み茶屋で、歸りに懈い足を休

めることも間々あつた。茶店には藤棚があつたり、水晶のやうな水が湧きこぼれてゐたりして、そこに冷された瓜が、むくむく浮いたり沈んだりしてゐる。それをあげて皮を剥いて食べたこともあつた。東京では餘り見かけないけれど、私の町では油團といふ夏の敷物があつて、今は製法も粗雜になつたけれど、以前はその上で露寢をしてゐると、蚤などもつかず、づゐぶん氣持のいゝものであつた。露寢からさめて、蜩なんかの啼く時分に、深い井戸に朝から浸してあつた西瓜をあげて來て、皆んな寄つて食べる。水や硝子が、その油團のうへにこぼれなどして、つる〳〵してゐる。涼しいといふよりか、寧ろ肌が寒くなつて來る。

東京で困つてゐる時分、或る夏故人田岡嶺雲大人とどこかへ行く途中、高等學校の前あたりで、その頃はやつたサイホンを御馳走になつたことがある。氷の上へ其のサイホンを注ぐと、しゆつ〳〵と云ふ音と共に白い泡を立てゝ、氷が立所に水色になつて行く。暑い砂埃の町を歩いたので、それは隨分涼しかつた。それから神田に下宿してゐる時分、初めてミルクセイキといふものを飲んで、その冷たいのに驚いたことがある。私は今でいへばカフヱの先驅でもあつたらうところの其の店などへよく入つて、色々んなハイカラなものを食べおぼえたお蔭に、生死のほども覺束ない、ひどい胃擴張になつて、三四年も恢復しなかつた。

夏は少し汗ばむほどの思ひをして、飲み食ひをした方が涼しい。いつかの夏、伊香保で夜更けに月を見ながら町をあるいて、宿へ歸つてから、冷紅茶を飲んだことがあつたが、その紅茶の冷たさは、今思ひ出しても、咽喉から胃袋の底まで冷たいものが流れて行くやうな感じがする。

尤も暑い感じのするものは、お櫃のなかの溫氣で、日南(ひなた)くさい臭のする飯だが、尤も涼しい感じのするものは、朝夙くおきて、紫紺色した茄子の、漬かり加減のいゝ漬けものなぞで朝飯の進むときである。

想華

新しき村雜感

武者小路實篤

「龍の卵を靜かにかへしてゐる男に
早く卵をかへしてくれと
せきたてる男だ、君は、
まあ靜かに待つてゐてくれ
小蛇ならすぐにもかへして見せるが
龍をかへすにはさうたやすくはゆかない。
今まで誰もがやれなかつたことをやるにはいくら僕でも十年はかゝるだらう。
まあ靜かに僕に任せて待つてゐてくれ
今迄誰もかへせなかつたものを

生れさして見せるからね。

もうぢきアメリカにつくと云ふ時になつて
今迄辛棒してゐたのり組人たちは
コロンブスをせめだした
目標にもう一歩と云ふ處で
コロンブスを說きふせることが出來た男は賢いとは云へないであらう。

成算胸にあり
暫らく待つてゐてくれ
待てない人は愛想をつかして
他の仕事にのりかへたらいゝであらう
君達が忘れてゐる時分に
龍はかへるだらうよ。」
自分は幸ひこの男ではない。新しき村の仕事のよくゆくことを信じ、又新しき村の目標が何處にあるかをはつ切り知つてゐるのは自分だけではない。多くの人は知ることが出來ないでも少數の人は實によく知つてゐる。そしてその人に許された方法でその方に目ざして進んでゐる。

しかし多くの人は今でも村の仕事を理解してゐない。或人は自分が本音をはかない社會主義だと思ひ、或人は僕をクリスチャンだと思ひ、或る人は新しき村を共産主義だと思つてゐる。皆あたらない。その證據には僕は正直に自分の思つた通りのことをかくと、それ等の主義者や、信仰家から惡口されるのでもわかる。又自分も彼等の考へにあきたりない。

僕は新聞でよく資本家と云はれる人々の談をよむが、さう云ふ時實に資本主義に腹を立てる。それと同時に社會主義の人のかくものを見ると社會主義が嫌ひになる。兩方とも人間の生命にたいする尊敬が不足で、又頭の動き方がはがゆい。狹い處に手がとゞいてゐない。それからさきが大事なのにいゝ加減の處でおさまつてゐる。

自分は自分の考へが既成の主義や、信仰と何處か共通な處があることは知つてゐる。人間の頭はさうちがつたことは考へられない。しかし同一だと云ふことはあり得ない。新らしき村は同じ主義者の集りである必要はないのである。各自自分の考へを持つことはいいことだと自分は思つてゐる。たゞ皆同じく食物を要し、着物や家を要する點で共通があると云ふにすぎない。」

兄弟姉妹は第一主義者の必要はない。しかし生てゆくのに必要なことを助けあふことは必要である。新しき村で必要なのは皆の生命が生きると云ふことである。村が立派になつても皆生命が生きなければ仕方がない。村と人間とどつちが大事かと云へば人間の方が大事である。人間の生命を大事にする處から村が生れるのである。すべての人の生命が生ると云ふことが村の目的である。

社會主義者は個人を輕蔑する傾がある。個人主義をブルジョア根性と同一視してゐる人さへある。大馬鹿である。個人の生命が生きないでもいい社會なぞは理想には出來ない。資本主義の惡いのも多數の生命、多數の個人の生命を輕蔑

する點が惡いのである。社會主義者が個人主義を恐れるのは、資本主義者が社會主義を恐れるのと同じ理由である。後より來るものにたいする恐れにすぎない。それは自分達を葬る力をもつてゐるが故に恐れるのだ。自分は個人の生命を他にして何があるかと云ひたい。」

自分が無政府主義を愛しないのは、今の人々がまだ獨立人として立派に生てゆく修業が出來てゐないからである。自分はいつか政府と云ふものはあるかなきかのものになる、單なる事務をとる、電話の交換手のやうな役をするものにすぎなくなる時の來ることをのぞんでゐる。大臣になるのを名譽なぞと心得てゐる人間を一人でも持つのは國の恥である。大臣なんかは自分の內に特別に天與の才能を惠まれてない人間が、他人の內の天與の才能を生かすために骨折りたく思ふ謙遜で善良な人間のなるべきものである。大臣以上も以下も役人と稱するものは他人の生命を尊敬して自分の時間をそのためによろこんですてる人間なるべきものである。尤も本當にいゝ時が來たら役人なんてなり手もないだらうし、さう大ぜいがなりたがつては困るものであり、小人數で足りる。」

しかしそんな時代は十年や二十年の間には來ないと思ふ。

軍人が惡口云はれ、金持が惡口云はれる以上に他人を命令出來ると思ふ政治家は惡口される時がくる。あとの雁は先になり、先の雁はあとになる。昔一番進んでゐたフランスやアメリカはロシヤよりあとになつたであらう。しかし今にロシヤも後れた國になるであらう。日本が一番先に立つとなると、その時は、皆が兄弟姉妹のやうに仲よく生られる時代であらう。そんな時が今來ると云つても信じる人はないであらう。

自分達が目ざしてゐる世界は、すべての人が獨立人として、平和な勤勉な人間として、生てゆかれる世界である。他人の頭よりは自己の頭を尊敬するのは當然のことである。自分より優れた人を尊敬することはあつてもこれは強いられ

た尊敬ではない。云ふことをきかない人間は罰すると云ふ世界、罰せられるのが怖いために腹に思はぬことを云つたり、行つたりする世界は獨立人の世界ではない。

皆が四五時間働けば生てゆくのに事をかゝない、たゞ贅澤したい人はそれ以上働くとしても、自分はすべての人が同じく働かなければならないとは思はない。洗禮のヨヘネのやうな生活の出來る人や、或は木の葉や松の葉を食つて生てゆける人間は働く必要はないと思ふ。又働くより乞食して餓死にしてもその方がいゝと云ふ人は働かなくつていゝと思ふ。又慾望の少ない人は、澤山働くことを强いられるのはよくないと思ふ。だが普通の生活をしたい人は普通の勞働をし、それ以上の働の出來るものはその働に應じて贅澤してもいゝと思ふ。必要以上に働く人がゐてくれるのはいゝことである。それと同時に少しでも多く自分の時間を持ちたいと云ふ望みもわるい望ではない。身體のわるくなるやうな勞働を他人に强い、又自分に强いるのもよくない。

自分達はさう云ふ社會を根氣よくつくつて、そしてさう云ふ社會に住みたく思ふ人を段々とり入れてゆかうと思つてゐるのである。

このことは今に不可能でない時がくることを自分達はかたく信じてゐる。勿論それには隨分廣い土地と、大勢の人の協力が必要である。自分達は他人の生活を自分達の生活の型に入れやうとは思はない。今の社會で生活する方がおちつきのいゝ人は今の社會にゐることを自分は望んでゐる。

村はいつまでたつても大きくなり得ず、貧弱のまゝでゐる。村の仕事はまどろつこしいと云ふ人には自分はまあさう思つてゐられる間は思つてゐてほしいと云ひたい。自分達の望んでゐるやうな世界をのぞんでゐる人が協力すればさう云ふ世界はわりに早くくるのだが、それには自分達がまだ信用されるだけ生長してゐない。自分達が生長しだしたら、

あとは目ざましく生長してゆくことを自分は信じ切つてゐる。すべての仕事は始めはなか〱ものにならないやうに見へるものである。そしてひよつとした處で道がひらけるものである。自分はもう少しはつ切り村についてかいて見たく思ふ。

出來上つた村に對しては誰も不服はない。もしあれば金持位いのものである。一日四時間位働いて食へれば之に越したことはない。クラポトキンに云はすと米國では、一日半働けば一年一人の人の食ふ小麥がとれるわりあいださうである。日本の農業の仕方はあまりに習慣によりすぎ、進歩的精神が少なすぎる。之は資力が乏しく人手が多すぎる關係もあるし、大陸的な處が少なく小農式にやる外ない所もあるし、小作の方法の方がまちがいがなかつたり、小作する人は文明の利器を使ふ資力もなく、又使ひ方もよく知らないので安全な方法として小さい土地をこつ〱たがやしてゆくことになつてゐる。その結果一日十時間以上働いてやつと食つてゆける。或はそれでも食つてゆけない狀態だ。さう云ふ日本で、しかも山國で、せまい土地で、農業になれない人達が、しかも十分に働けない人々をわりに多く有して六時間勞働でやつてゆくのは無理に見える。實際村はまだ自活が出來てゐない。それで或人は新しき村が新しき村になるまでは世間の農場と同じやうに十時間以上働いて、そして自活が出來てから段々時間を短縮するがいゝと云ふ說を出した。實際今迄の村でもさう云ふ議論はよくあつた。しかし自分はそれに贊成出來ずに來た。自分が身體が鍛えてないせいか十時間働くことはどうしても閉口なので、他人に十時間働くことをすゝめるわけにはゆかない。僕は學校へ行つてゐる時五時間、休みの時間もよせて六時間學校にゐるのさへ閉口してゐた。だから今でも村の勞働時間の六時間を自分は決して短かすぎるとは思つてゐない。どつちかと云ふとまだながいと思つてゐる。世間でよく働いて來た人には十時間もさうながくないやうに思つてゐる人があるが、自分は六時間でもながいと思ふ。勿論いくらながくつても食へないでは困

るし、村がつぶれては困る。

實際村が出來たては自分も十時間あまり働いたことはある。それが習慣になつてしまひ、それがあたりまいになつたら十時間の勞働も勞働によつてはさうつらいとは思はなくつてすむであらう。習慣の力は強いものだから、しかし十時間以上働いて村がやつと自活が出來たとして、それから時間をへらすことは出來るだらうか。それが習慣になつてしまひ、よろこんで十時間働く人許りの村が出來上つてしまいはしないか。それで心がゆつたりし、あかるく生きられ人はいゝが、生活に追はれて生きてゐるやうな氣になり、世間の農場と新しき村とさうちがはないものになつては困る。世間は新しき村の人がよく働くのを讃美するだらう。だが村の人の精神はそれでいく分かひねくれて來、そして世間で安樂にくらしてゐる人達を内心うらやましく思つたり、不平をもつたりしはしないか。又十時間働いて生活がやつと出來たとしても進歩的精神がなくなつては困る。勿論十時間働いてしかも精神に餘裕をもて、自分の個性を生かせ、自分の生命をあかるく生かせる人もないことはないと思ふ。しかしそれは例外の人ではないか。その人は立派な人であるが、さう云ふ立派な人は少ないと思ふ。新しき村は特殊の人が生活する所ではなく誰でも生活出來る社會をつくりたいのだ。

新しき村では六時間の勞働と云つても、それ以上働くことは禁じてはゐない。それ以上よろこんで働く人がゐたら自分は讃美する。たゞ自分一人働くのは馬鹿氣てゐる、皆も一緒に働かなければと云ふのでは困る。實際又何十人と云ふ人が、生活してゐるのに自分一人が二時間か三時間多く働いてもあまりきゝめはないかも知れない。しかし働くことそのことが愉快な人なら人目をぬすんでも働くはづである。たまにさう云ふ人もゐるが、それはなほ例外である。働くことそのことは誰でもあまり好きと云ふわけにはゆかないと思ふ。自由を束縛されると云ふだけでも皆いやがるのは無理

がないと思ふ。

今の人間が自活をするためには十時間以上働かなければならないと云ふことはない。今の人間が賢く協力すれば四五時間の勞働で立派に生きられると云ふのが自分達が村をつくつた最大の理由の一つである。自分の知つてゐる人の知つてゐる人の弟が、農業で自活をするのを目的にして農場をつくり、自分達で働いて四五年で自活することが出來たさうだが、その時は普通の今の農民と同一の心がけになつてしまつたので、その兄の人はがつかりしてゐた。村もやつと自活が出來たが、村にゐる人はいや／＼働いてゐるのでは面白くない。又よろこんで働いてゐる人は十人に一人では面白くない。

自活が出來てから段々時間をへらすのは反つてむづかしく思ふ。その內には十時間働くことに平氣になつてしまふであらう。自分は六時間働くことでその働くことを村らしくすることで自活の境にもち上げる方がずつと早いやうに思ふ。又その方が皆の元氣を失なはずに仕め、いろ／＼工風してゆく處に面白味が出來、仕事が段々ものになつてゆくのによろこびが感じられる。實際村の畑などが目に見へて美しくなつてゆくのは實によろこびだ。以前八時間働いて得られなかつた結果を今六時間働いて得られてゐる。今六時間働いて得られない結果を四五年のちには五時間働いて得られることもむづかしいとは思はない。

前は病人がよく出來たが、この頃は病人は出來ない。そして皆よく働いて、疲れすぎて身體をこはす人が殆んどない。そして皆あかるい氣持になつてゐる。そして少しづゝ開墾も出來、作物の出來もよくなつて來てゐる。

クロポトキンは溫室の効能をし切りとのべてゐる。自分達も今年あたりから溫室をつくつて研究的にやつて見たく思つてゐる。その內に電氣でも出來たら應用して見たく思つてゐる。最もすゝんだ方法を、最も熟練した方法でやつてゆ

きたい。それは不可能ではない。今迄に少しづゝ進歩して來たことは事實である。決して今のやり方に失望する理由を認めない。二三年の内には、眞面目なブルヂョアの子弟は村の生活を羨やましく思ふやうに出來ると思ふ。村はよくなつたが、人間は馬鹿になつたでは困る。學問だけが人間を賢くするのではないが、人間の内にある生命がしなびては困る。村は人類の意志の噴火口にしたい。人類の意志のまゝに生活し、又人類の意志のまゝに萬丈の氣焔をあげたい。

尤も新しき村をつくるにはいろ／＼の方法がある。金がなく四五人の人で始めるとすれば、最初の人は十時間以上働いて先づ自活をし、それから一人二人、氣に合つた人を入れて自活を傷つけない方法で、少しづゝ勞働時間をへらしてゆくのも一つの方法にちがひない。それは始めつから百姓の仕事になれてゐる人許りでやり、そして進歩的精神の强い人達であつたらものになると思ふ。しかしそれでも十年以上はかゝると思ふ。そして出來上つた村は何處までも生長する力をもつてゐるかどうか。村を大きくする、又生長させる最大の條件は多くの人がその村に進んで入りたく思ふことである。他の農村で生活するのとちがひがなくては困る。何よりも生た精神、何處までも生長してやまない力が必要である。

もし金の十分にある人が始めたとすれば、最初に或る程度の設備をしておくことが必要である。設備はあまり完成してゐない方がいゝが、住宅は氣持がよく、一人一室主義がいゝと思ふ。それ以上大事なのは勞働の指導者を得て、入村者に勞働のこつを教へることゝ思ふ。一人前の勞働者になれるには修業がゐる。しかしその教へ方は窮屈であつてはならない。たゞ自由の時間を多くするために、短時間で能率をあげるためでなければならない。我々は金をとるために生たらおしまいである。切りがなくなる。我等は生るために働くのである。病人の出來た時の用意、消毒なぞの用意もあるにこしたことはあるまい。しかしそれ等は集つた人によつて設備は何もならない時が多いと思ふ。必要と實力と熱

心とに應じて內から生れたものでないと兎角實の持ちぐされになる。人間の生命は何處かに生る餘地を求める、自由の精神の强いものは器械の器械になることをよろこばない、自分で創造するよろこびなしに働くことは自分達の精神を殺すことになる。義務勞働は勝手許りは云へないが、よろこんで働ける時と、いや〳〵働く時とで人生にたいする氣持も、能率も隨分ちがう。自分達は金に餘裕がなくこの仕事を始めたことは反つてよかつたと思つてゐる。進歩はそのために隨分遲れてはゐるが、進みすぎる心配はなく、一歩々々力を入れないと進めないだけに、得たものを失はずにすむ。しかし自分達は盲目滅法だつたのと、つまり成算がなかつたのと金がなかつたので三年は損をしたかと思ふ。しかし負け惜みでなくその損は無駄ではなかつた。今やり出すとすれば始め暫くは十人位いでやつて、大部の方針がたち、仕事のやり方を會得してから、その設備をしてから少しづゝ人をふやせばよかつたかも知れない。又適當な先生に最初から來てもらつて勞働の仕方をおそはれば、仕事はいく分かはかどつたかと思ふ。

來たて自分達は十時間以上働いたが、あまり無駄な働き方が多すぎた。しかしいろ〳〵の經驗は無駄にはならない。今でも畑の仕事にくわしい人が十人集れば、村は六時間勞働で十分生活が出來ると思ふ。勞働に見當がついてゐるのと、つかないのと、又熟練してゐるのとしていないのとは云ふ迄もなく隨分ちがう。村へ入つての二三年は勞働の教育を受けるやうにいつかはなると思ふ。今はまだ教育する資格のある人がないから仕方がない。新しき村らしい勞働の仕方をのみこむでゐる人はまだない。又新しき村らしく勞働するのに必要な設備がまだ少しも出來てゐない。

しかし見當がつき出して來たことは事實である。しかし之は自分の力ではない。集つて來た人の力である。

新しき村へ入りたい人はいくらでもある。今に村が村らしくなつたら、入りたい人はます〳〵ふへる一方と思ふ。日本人許りではない。まだ西洋人にはないが、朝鮮人、支那人にはゐる。しかしまだ設備が不完全なので御斷りしてゐ

る。勿論それ等の人は村で修業してゆく〳〵は自分の國で同志達とやつて見たいと云ふ人で、又自分達もそれを望んでゐる。

新しき村は二三年の内には急足に進歩すると思ふ。するとこの土地ではせまくなる。するとこの土地を廣げてゆくか、又他に村をつくるか、それはその時になつて見ないとわからない。自分は自分達とまるでちがう方面から新しき村と同一目的なものが生れ出すことを望んでゐるが、しかし自分達の力で、村を大きくする時は、今の村が出來上れば今の村で二三年修業した人を適任な村に、又自分の望む村に住んでもらつて同じ精神の、仲よき村をいくつもつくりたく思ふ。幸ひに大きなまとまつた土地が得られたら、其處に新しい田園都市をつくつて見たくも思ふ。そして一人殘らず村の精神通りに生る社會をつくりたく思ふ。どつちにしても自分達は村に入りたい人をどん〳〵入れられるだけの村に早くしたく思つてゐる。

自分達は一つの村をつくり上げればいゝとは思つてゐない。一つの村は百の村をつくる研究所でもある。そして村は選ばれた人の住む所ではなく、獨立人の住む所である。普通の人ならすめる處にしたい。決して無理しないですめる。村はブルジョアの村でもなく、又今の勞働者や小作人の村でもない。村にすむものは他の兄弟姉妹を金で働かすことは出來ないであらう。そして又自分のしたい時以外は過勞することはないであらう。借金がなくとも生ることに事かゝないが、義務勞働がそれに相當する村の仕事をすることが必要である。病人は元より大事にされなければならないが、故なくして怠けるものは制裁されるであらう。しかしその制裁も兄弟姉妹にたいする同情は失ひたくないと思ふ。

未來の話はうますぎるが、そして今の村は滿員で、入村希望者を入れる餘地は殆んどないが、しかしその內、自分達は自分達らしい仕事を始めやうと思つてゐる。

しかし大事なのは何と云つても農業を村らしく解決することである。農業の勞働をクラポトキンの云つてゐる半分でも工業化することが出來ればその時は農業を村らしく解決した時である。だが云ひやすく行ひがたいのは世の常である。自分達はそれを早く實行して見たい。それには正直な處、金がなければ今の處だめである。そして今の處村には金がない。そのために全集を出したのだが、うまく失敗した。しかし失敗は成功のもとである。自分達は進む道をいくらでも知つてゐる。

○

村は共産主義ではないのである。之は共産主義と思はれるのが怖いので云ふのではない。今の人間が共産主義を稱へるのは早やすぎるか、おそすぎるかどつちかである。

自分は肉體を生かす方では共産主義に反對する理由は認めない。しかし個人の生命を生かすには共産では危介なことがいくらでもある。我等の内心の要求は同一ではないからである。或人にとつては生るために絶對に必要なことが他人にとつては無くとも一向さしつかいのないことがいくらでもある。

三度の飯を二度にへらしても、本がほしいと云ふ人もあれば、本なんかよりは菓子の方がいゝと言ふ人がある。

個人の慾望を滿足させるための勞働は義務勞働の内に入れるのがまちがいなのは云ふ迄もない。義務勞働は個人的慾求を滿足させるためにも存在するとしたら、義務勞働の範圍はいくらでも廣がり、朝から晩まで働いてもおいつかない。個人的慾望は個人にまかすべきである。つまり自由時間で個人的の慾求は滿足させるのが當い。村から供給されるもので滿足するものは義務勞働さへ果せば、あとはいくら怠けてもいゝ。しかしそれで滿足出來ないものに、無理に滿足しろといふ必要はない。その人がその自分の慾望、或は内心の要求を滿たすために、自由の時間働いて、それで自分の

ほしいものを得られるやうにするのが當然だと思ふ。そしてそのためには金があるのが便利である。だから新しき村では生活には金が不必要だが、個人の慾望を滿足させるためには金をとることを禁じない。むしろ奬勵したい位いなのである。

それで全世界が村になつても金は存在し得るが、全世界が村にならない限りなほ金は存在の必要がある。金は他人の自由や生命を傷つける力を失なへば便利なものに過ぎない。

金のために働くことは恥であらう。だが自分の内心の要求のために働くのは恥ではない。正しき内心の要求は生る程い、しかしそれは義務勞働を果すことが出來た上の話である。村ではまだ義務勞働を立派に果すことが出來る人が少なすぎるが、今に義務勞働を立派に果すことが誰でも出來るやうになつたら、自由の時間で金をとることを自分は禁じる必要はないと思つてゐる。

だから地平線以上は各自の私有を許すことになる。勿論他人の獨立性を傷つけないことは絶對に必要である。

僕が村をつくる前にかいたものに、共産的な文句があれば、それは考へ不足の結果にすぎない。

○

自分は二三十年の内には村と同じやうな生活をするものが二三十萬は出來ることを夢みてゐる。始め五六百人迄がむづかしい。それさへうまくゆけば、三四萬の人を集めるのは十年もすれば十分であり、それがうまくゆけば二三十萬の人を集めるのはむづかしくない。そして二三十萬の人が村らしい生活をすれば、村へ入りたい人は誰でも入れられるやうになると思ふ。村は一所にあつまる必要はない。いたる處に四五人から二三千位の同志が住む村が出來る方が面白い。このことは不可能ではない。しかしそれには村のやうな生活をすれば、安心して生活が出來、その上に立派に自分

の生命を生かせると云ふことが必要である。それからもう一つ必要なのは村以外の人の生活を不安にしないことである。村が近所に出來ることをすべての人がよろこんでくれるやうにすることが大事である。しかしそれも無理や、僞善であつてはならない。

自分達は他人がそれで生活を得てゐる田や畑は買ふことを耻ぢる、又さけたい。いつか有島武郎さんが農場を解放する時その方法について、いゝ考があつたら參考にきかしてほしいと云はれた時、自分は新しき村をつくれとは云へなかつた。その土地で生活してゐる人達を逐ひ出せとは云へない。又其處にゐる人全部に村の主意を贊成させることの出來ないことはわかり切つてゐる。自分は武郎さんの考へとさうちがはない考へをのべた。つまり小作してゐる人達を主にして考へた。そして土地を賣れないものにしておく方がいゝと思つた。そして土地はその土地を生かすことの出來る人に任せるがいゝと思つた。自分は他人の生活をあぶなくすることはよくないと思ふ。金持から土地を買ふのは勿論いゝと思ふ。だが金に困つてゐる人から、又小作でやつと生活してゐる人から田を奪ふのは考へものと思ふ。荒れたまゝの田はいゝ、又他に融通がついて相手を困らせずにすめる場合はいゝ。

自分は隣人の利己心を尊重しやうとは思はない。ずるい人間に讓歩しやうとも思はない。だが田の少ない、他に仕事が見つからない土地だつたら、田をとりあげることはしたくない。なるべく原野を開墾したい。その方が金がかゝり、時間がかゝつても氣持がいゝ。

尤も絶對に田畑を買つてはいけないと云ふのではない。村に金があまる時が來たら、地主から土地を買つてその一部を村のものにし、その他を其處を小作してゐる人にたゞでかしてもいゝと思つてゐる。村では小作米の生活は絶對にしてはならないことは云ふ迄もない。小作料が四と六の割合の處だつたら、土地の四だけを村のものにし、あとを小

作米なしにつくることが出來るやうにして上げたら、米のとれ高は同じになり、勞力や、肥料代その他で小作する人も助かるわけだから、さう云ふ風にしたい。

村は農業一點張りではないが、出來るだけ農業をもとにしたい。そして村が大きくなるために一人の犧牲者も出したくない。理想通りは實行出來ないまでも、大事な精神を忘れては仕方がない。

自分達は水路に一萬圓近かくかけることになりさうだが、その金で田を買つた方がよかつたと云ふ人があれば自分の精神を知らない人である。今迄一粒も米が出來ない處から米を二石以上でもつくれることにしたことは少しすぎるがよろこびである。今に水路が完成すればゆく／＼年に百石以上はとれるはづである。それ等は一粒もとれなかつた。又村が出來なかつたらとれる見こみのない處からとれるのだから樂みである。勿論開墾專門の人から見たら、米をつくる方面から見たらあまりに子供らしいよろこびにはちがいない。精神では輕蔑されずにすむと思つてゐる。一萬圓は高すぎると云ふかも知れないが、道樂者にとつては一年分にも足りない金である。

ともかく村をどん／＼大きくするために、平和な道で、他人を不幸にしない道でどん／＼大きくするには、どうすればいゝかは、自分は實によく知つてゐる。たゞそれを實現するには一寸多くの年月がゐるのである。

村が出來てまだ十年にもならない。村の生長をまどろつこしがる人が多いのは愚である。村の仕事が氣が長いと云ふので社會主義に走つた若者は七八人はゐる。しかし日本の社會主義が出來てから何年になるか、もう三十年位いにはなつてはゐないか、新しき村も二十年たつ迄ものにならないでも、生長がおそいとは云へない。社會主義になつた人達は、今後十年にどの位いのことを仕出かすか、見たいものである。自分達は少くも今迄少しもあともどりはしない。山の頂を目ざして少しづゝは進んでゐる。二十年三十年たてば何か面白いことは出來るつもりだ。社會主義より生長が遲い

とばかりは云へない。「今に見ろ」でお互に進んでゆかう。

村に入りたい人は隨分ゐる、昨日も四人ゐた。四人ゐるのは珍らしい方だが、とにかく二三人から村へ入りたい云つてくる日は珍らしくない。

その人達の内には隨分いろ／＼の人がゐる。村はそれ等の人の力で生長するのであるが、今の處、さう人を入れるわけにはゆかないので御斷りしてゐるが、立派な人間を入れることによつてのみ村は生長する。村の仕事は、入りたい人がなくなつたらそれつ切りの仕事である。その時こそ獨善の仕事になる。

少數の人でこの仕事をしてゐればこの位いまちがいのない仕事はない。しかし自分達事情の許すかぎり、無理しても人を入れて來た。そのために村の物質的方面では隨分苦勞もし、無理もして來たが、精神的には隨分得して來たと思ふ。いゝ人を知つたゞけでもよろこびだ。そしてそのために村はいつも活氣を失はずに來た。そして生長力の強い村とじて今日迄來た。そしていろ／＼教はるべきことを教はつた。

今後はます／＼村を萬人が住みたがる所にしたい。

自分は新しい氣持のいゝ家さへ出來れば古い家にゐろと云つても居られないのが人間だと思つてゐる。日本の革命讃美者の多くは古い家をつぶせば新しい家は自づと生れるやうに思つてゐる。しかし自分にはさうは思へない。

自分は新しい氣持のいゝ家を先づたてゝ、そして扉をひらいて、來るものを拒まないことさへ出來れば、古い家は自づと住み手がなくなると思ふ。そして住み手がなくなると困るものは新しい家にまけない家をたてだすと思ふ。

たゞ家さへたてばいゝで古い家と同じものをつくつたのでは何にもならない。村を世間普通の農場につくるので滿足しない理由は其處にある。成功をいそいでどつちつかずのものをつくつたつて何にもならない。そんなものをつくるた

めに僕は一生をさゝげる氣にはなれない。自分が捨て身になつてもつくりたく思ふのは、今迄誰もがつくれなかつたやうな社會をつくつて、誰もが住みたくつて仕方がなくなる社會をつくることだ。

家に譬へれば、建築師ソルネスに出來なかつた家をつくることだ。萬人が生活出來、又自分の個性を生かせ、獨立を失なはず、人間の傲りをもつて生きられる世界だ。

其處では勿論、赤裸々の人間の價値だけが通用する。

そして其處では四五時間働けば自分の病氣の時の心配も、老後の心配も、子供を養ふ心配もなくなり、あと自由をたのしめる社會である。之は夢想ではない。それがまだ實行出來ないのは協力の仕方の不足であり、人類の文明の應用の仕方が不足してゐるからである。人類文明の器械はあまりに金をとることに熱中して、人間が人間らしく生られる方に力をつくされてゐない。自分達はさう云ふ器械を人間の生活に奉仕させる財力と、智慧と、經驗がなさすぎる。しかしその方を目ざしてゐる。そしてその方の先輩の教へをうけて、その方に益々進みたく思つてゐる。

今に最も文明な農園をつくり、最も人間らしい世界をつくつてお目にかける。

自分はもう一度十年後を見よと云ひたい。

しかしこの仕事には僕達よりももつと適當な人々が何處かに居さうに思ふ。さう云ふ人が自分達とまるではなれてさう云ふ世界をつくつてくれゝばなほうれしい。

いろ〳〵の特色のある世界が生れ、同じ目的や趣味をもつ人が集り、いろ〳〵特色のある田園都市をつくることが出來ればよろこびである。金もうけと云ふことを考へずに、人間の生活と云ふことを一心に考へる人が出て來たら、僕達がつくり得る世界とまたまるでちがつた面白い世界が方々に出來ていゝと思ふ。社會主義の人達は社會主義の社會をつ

くり、無政府主義の人達は同志で無政府主義の社會をつくり、宗教家は宗敎家で又一つの社會をつくり、そのいづれにも住みたくないものは又自分に適當な社會をつくり、他人を自分の生活形式にあはさうとせず、お互に好きな生活形式で生活してゆける時が、來れば一番いゝと思ふ。さうすれば自分の主義がまちがつてゐることも早くわかつていゝ。空想許りしてゐるとつい蟲のいゝことを考へるものである。

自分は自分の考へ通り生て見るつもりだ。

自分は自分より自分のすみたい世界をたくみにつくり得るものが出ない限り　自分の考へに從ふ。

○

自分は今に學校もつくつて見たい。それはすべての人が自分の生れつきによつて何處までも生られる敎育の仕方をし、そして又それに一番適當な生活をおくることが出來るやうに骨折る學校である。學校で研かれた才能が世間へ出て生ないのは、勿體ない話である。

村が大きくなりいろ〳〵の人が必要になり、適任を適所におくことがいくらでも出來るやうになつたら、それに應じたいろ〳〵の學校をつくりたく思ふ。今ある學校で間にあひ、又其處に入學出來る人はそれでもいゝと思ふ。さうでない人の內にある貴き特色を出來るだけ生かして見たい。

面白い人間、いゝ人間、しつかりした人間、特色のある人間、さう云ふ人間をつくり出すことが出來、その人の力を地上にのこりなく生かしてもらへる機會を與へることは大事なことである。

自分は村が大きくなり、さう云ふ仕事に適任者が出て來たら、この日向の山のなかに、最も特色ある學校をつくつて見たい。

立派な人物を二三千出すことが出來たら、日本は隨分面白い國になると思つてゐる。自分は自分の空想を少しづゝ生かしてゆきたい。そして先づ日本を、面白い國にしたい。

若い人々の内には自分が望みをおいてゐる人が隨分ゐる。それがあつちこつちに、都會や田舍にがんばつてゐる。今に面白い時が來、又來させて見せると彼等は私かに思つてゐるにちがひない（二五、二、一四、）

○

ついでにもう一こと云ひたい。自分は各自が自由に、自分で好きで働くのなら何時間働いてもいゝと思ふ。しかし義務勞働、又生活の爲の勞働の時間は短かくしたい。

そして失業者を出すやうなことはしたくない。いくら仕事の見つからない人でも、生活には困らないやうにしたい。いゝ器械が發明されて人間の勞力をはぶけ、人間が樂が出來るのなら嬉しい。しかし器械が働いてくれるから人間はへらしてもいゝ。そして人々が食ふに困つてもかまはず免職すると云ふことはまちがつたことである。仕事は金をもうけるためにやるものではなく、多くの人が氣持ちよく生られることを目的にしてなさるべきである。金のかゝる器械をつかうが、人をやとうよりはやす上りだと云つて器械をつかうのが當然でない世の中が今にくると思ふ。どうも今の世では人間の立場から見ると不都合なことが平氣で行はれてゐる。自分が文明の利器を應用したいのは多くの人が少しでも多く自由をたのしみたいためである。又その社會の人すべての生活程度を高めたいためである。

又村が農業本位でゆきたいのは、ともかく食へさへすれば、あとは辛抱が出來るからだ。勿論家や、着物も必要だが、それは一度つくれば隨分ながい間もつし、農業本位だと着物や、住宅もどうにかまにあはせてゆける。勿論孔子が云つてゐるやうに、耕しても餓えると云ふことはあり得る。學べばどうにか食つてゆけると云ふのも本當であらう。キ

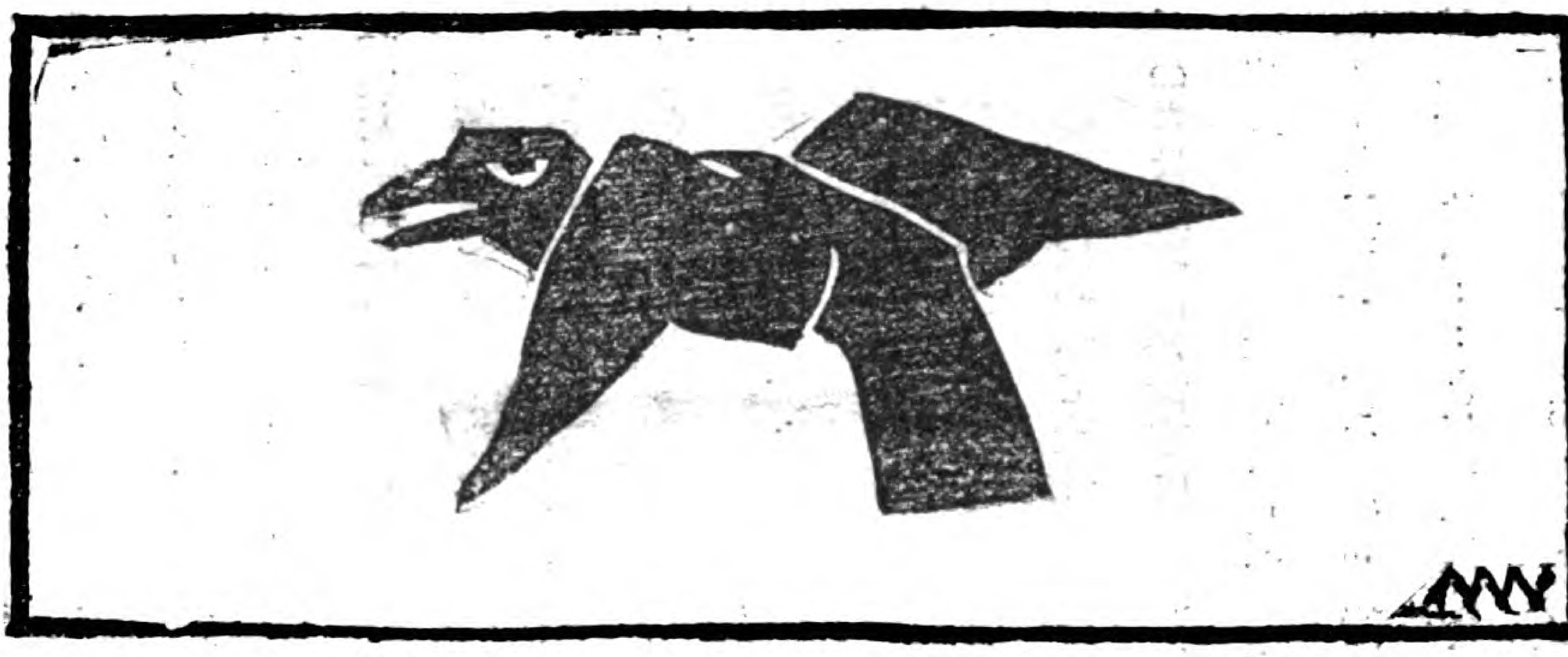
キンで一番ひどい目にあふのは農民であらう。だが世間の經濟的影響をあまりうけずにすめるものは矢張り農業と思ふ。米は高くなつても、安くなつても自分の處でつくつて自分の處で食ふだけなら同じことである。少くも工業方面程競爭がはげしくなく、不安が少ない、大地の上に立つてゐるので、他人の影響をうけることが少ない。農業で食ふ力の心配をなくしておくと他の仕事をするのにも安心して出來る。農業の仕事は一番工業化してキチンとやるのはむづかしいが、何と云つても食物の問題が第一である。他の仕事で金をとつて、それで米を買ふのもある村ではいゝが、農業が村らしく解決が出來なければ、おちつきがよくない。ともかく自分は農業は生活の基礎的勞働と思つてゐる。

しかし自分は村を生長させるためにはあらゆる方法をとるつもりだ。生てゆくものは米が何處で出來たかを問題にしない。何處で出來た米は食はないなぞとは云はない。そして一日も早く來るものを拒まずにすめる村をつくりあげたい。

自分達は今後農業以外の方面にも手を出さうと思ふが、農業方面にはますく進歩した方法をとりたく思つてゐる。自分は世界中のいたる所に村のやうなものが出來だしていゝと思つてゐる。少し形はかはつてゐるが、西洋にもさう云ふ運動が起りつゝあり、又ものになりかけてゐることを聞いた。

しかし自分はくわしいことは知らない。他の人に任せるべきものは任せて、自分は同志と自分達の望む世界を先づ日本に、そして日向につくりたく思つてゐる。

他でもまけずに立派な村をつくつてくれる人があれば實に嬉しい。(二五、二、一四)



結婚難

宮地嘉六

一

どしや降りの夜の八時頃、二臺の幌俥は雨の中を駒込驛から染井の方へ馳つて行つた。植木屋の生垣續きの狹い路は深夜のやうに暗く靜まつて、ところ〴〵門燈の灯が雨夜の闇をくりぬいて、もや〳〵とした中に樹々の濡れ葉を照らし出してゐた。二臺の幌俥の裡の客は靜子と相良陽吉だつた。俥が彼の自宅へ近づくに從つて雨は勢を加へた。彼は凄く降りつける雨の音に、呪はれた二人の不吉な劇的最後の悲曲を聞いた。彼は故郷から新妻をつれて東京の自宅に戻り着くところだつた。彼の不安は、彼等新夫婦の上京を待ち受けてゐる一人の失戀者のあること、その青年がいかなる決意を持つて待ち受けてゐるか知れないと云ふことだつた。陽吉は幌の裡から車夫に云つた。

『あの、車夫さん。賴みがあるんだがねえ。泰宗寺のきわから右へ曲つてくれるで

せう。あそこのだら〳〵坂を下りきつたところに交番がありますねえ………』
『へえ、ございます。』車夫は馳りながら應答した。
『あの交番のところで、さきの俥だけをちよつとの間、停めて貰ひたいんだがね……』
『さうですか。ようござんす。』
『僕だけはあの交番から電柱三本ほど行つたところまでやつてくれたまへ。さきの俥だけ交番のところに待たせてですよ。頼みますよ……』
『へい〳〵。』車夫は答へた。そしてさきの車夫に云つた。『よう、兄弟、お前えの俥だけ染井の下の交番のところで停めてくれとよ。』
『交番のところで、よし來た。』
『そこんとこでお前の俥だけ待つんだとよ。』
『よし來た。』さきの車夫は應答した。
二臺の俥はやがて染井の泰宗寺のきわまで來た。そこから右へ通ずる細い路へ入つてだら〳〵坂を下りて行くと、交番の灯は二町ほど前方に見えてゐた。
車夫は云はれた通りにした。靜子が乘つてゐる、さきの俥だけはその交番のところの路ばたで停まつた。
『ほんの二三分間、そこで待つてくれたまへ。』陽吉はさう云つて自分の俥だけを進めた。まさか……と彼は思つた。然し分らない……と思つた。彼はそこらに身をひそめてゐる狂暴な一人の青年を想像して心を張りつめてゐた。半ば胸さわぎを感じてゐた。幌の窓から前方の闇を見すかしながら……。

交番から三本目の電柱は雨に打たれながら、幽に、近くの門燈の灯を受けて光つてゐた。陽吉は一月ぶりに自宅のそばに着いた。

『此所でおろしてくれたまへ……ありがたう……』

彼は傘がなかつたので、どしや降りの雨を浴びながら俥を下りた。そして直ぐそこの大屋の家の潜り門の戸に手をかけたが、もうかけがねをおろしてあつた。家からは一筋の燈光も漏れてゐなかつた。

『もうねてしまつたのか……車夫さんちよつと待つてくれたまへ……』

彼は自分の戸惑ひを車夫に云ひわけしながら、雨の中を、白靴で、びちや〳〵小走りに、そのさきの門口まで行つて、そこの潜り戸をうんと力をこめて引いた。構居が雨で洗はれてゐたので、扉はする〳〵つと軽く開いた。門内は二軒續きの平家で、奥の方が彼の借家だつた。

『只今歸りました。留守中はお世話になりまして……。』彼は隣の人に一言告げた。

『おや、お歸りになりましたか、それは〳〵……』玄關の硝子戸の内から年とつた女の聲が應答した。かけがねをはづす音がして硝子戸は開いた。

『まあ大へんでございましたでせう。あいにくひどい降りになりまして……。』

『こんなにひどい降りになるとは思はなかつたもんですから……留守中はいろ〳〵……』

『どういたしましまして。』

『申しかねますが、かな火箸を一本、ちつとお借し下さい。』

『お易いこと……』

彼は老婆から火箸を一本受け取るとそのまゝ裏口の方へ行かうとした。

『旦那、此のお荷物は、こけえらに立てかけといてようがすか。』車夫は長方形の平べつたい、包裝した荷物を持ちあぐんで廂の下から少し不機嫌に云つた。

『あゝそれは鏡だが、そこらに立てかけて置いても好い、今、戸をあけるまで待つてくれたまへ……。』彼はさう云つて裏の方へ姿を消した。火箸で裏口の戸を、こぢ開けて、それから、黴臭いまつ暗な部屋に手さぐりで這ひ上つて電燈のスヰッチを探りあてると、家の中は急に甦つたやうに明るくなつた。と彼は玄關の戸の螺をせつかちにはづして内側から硝子戸をひき開けた。そのとたんに、戸の外側では物の倒れ落ちる音がした。

『しまつた！』と陽吉は舌打した。『車夫の奴、氣のきかない……毀れた……』彼は氣が氣でなかつた。それは鏡だつたのだ……。

無頓着な車夫は隣の家の廂下に雨をよけながら立ちすくんでゐたが、陽吉を見ると、ぶつきらぼうに、

『交番のとこに待たしてある俥はどうなさるんだ旦那。』

『もう好いから呼んで來て貰はう。』

彼は倒れてゐる鏡を起した。妻が實家で使つてゐた姿見で、臺だけ別に離して行李に詰め込んで、長方形の硝子は毛布でくるんで、長い汽車中を大切に、やつと此所まで持つて來た――然し鏡は玄關外の敷石に倒れても無事だつた。

交番前に待たせてあつた俥は門のところへ來た。俥の中から小柄の娘々した女が出た。陽吉は急いでひとまづ妻を家へ入れた。それから不機嫌な顏つきをしてゐる二人の車夫に酒手をそへて賃金を渡した――車夫は去つた。

隣の老婆に火箸を返すことゝ新妻をちよつと紹介することゝがまだ殘してある。

『大著はありがたうございました――これは妻でございます。どうぞよろしく……』

　彼女も陽吉についてあいさつした。

『おやまあ左樣でございますか、それは〳〵、何よりお喜び申します。ほんとによくいらつしやいました。此の大降りでさぞおこまりでございましたでせう。さあ、まあどうぞ……』

『明朝、またあらためまして……』

『まあさうおつしやらずに――おや左樣でございますか、ではお疲れでいらつしやいませうから明朝……』

『おやすみなさいませ。』

　二人は隣の婆さんにあいさつをすませて家に戻つたが、家の中は少しむし暑かつた。陽吉は雨戸を一枚開けてやれやれと、ひといき吐いた。しめつぽい風が吹き込んで部屋の中の黴臭い空氣は急に一掃された。一年餘も男世帶で住みあきて來た部屋に若い新妻をあらためて眺める嬉しさを彼は抑へきれないのだ。

『まあ好い家ですこと、臺所もこれだけあれば結構ですわ。』彼女は良人が長い間獨身で暮して來た家であることをなつかしく思ふと云ふ樣子で云つた。良人がこれまでどんな風に、ひとりさびしく生活してゐたかを考へて見ようとするかの如く彼女は部屋中を眺めた。陽吉の長い間の自炊生活を最もよく語つてゐるのは臺所だ。そこには酒徳利や醤油壜が亂暴に列んでゐる。鍋は傾いたまゝシチリンの上にかゝつてゐる。棚には雜然といろ〳〵の器物が重なり合つてゐる。錆びた庖丁がある。萎ばんだ玉葱がころがつてゐる。一方の棚には金槌や鋸などがある。ふたちのかけた土釜の中には石屋の鑿が二三挺入つてゐる。

『まあ、いろんなものがお臺所にはありますのねえ。石屋の道具まであるわ。』

『あれは漬物のおもしにするのだよ。あの赤い土釜にキャベツの鹽もみを漬けてあの鑿でおもしをして置くとよく漬かる。』陽吉はこれまで自分のして來た自炊のさまを新妻に說明した。

『お香々まで家で漬けてゐらしたの。まあよく……』

『さあ、着物を着替へよう。大分雨がかゝつたゞらう。その衣紋棹にかけたが好いよ。』陽吉はアルパカの上衣をぬぎながら云つて『少し狹過ぎるが當分此所で我慢しよう、獨身になつてからは小さな家が好いと思つて、部屋借りのつもりで此の家を借りたんだが、以前にゐた家は二階家で、此所よりずつと廣かつた。』

『ちつとも狹いことはございませんわ。此所で澤山よ、私廣い家よりは、かうした小ぢんまりした家が好き。』彼女は着物を着替へる爲めに帶をほどきながら『まあ貴男どうなすつて……泥がいつぱいよズボンに。』と彼女は陽吉の胴から下を見た。

『さつき裏口へ廻る時、すべつた。玄關の戶を開けてお前を家の中へつれこむまでは氣が氣でなかつた。どこに彼が身をひそめてゐるか分らないと云ふ氣がして、うろたへてしまつてね。最初大屋の家の潛り門を開けようとしたんだ。先づ大屋にあいさつをして、あそこの裏木戶からぬけた方が安全だと思つたもんだからね。だが今夜に限つて大屋の門の扉はしまつてゐたんで、すつかり戶惑ひしてしまつた――あまり思ひ過ぎをしたもんだから――でも萬一のことがあつては取り返へしがつかないと思つたからねえ。』

『ほんとに私は感謝しましたわ。私の俥だけを交番の前に置いて私の爲に及ぶだけの安全策を講じて下すつたわねえ。』

『まだ今夜は氣をゆるしてはゐられないよ。大抵大丈夫とは思ふが、夜中にでもひよつと……』

『雨戶をしめて下さらない貴男。むし暑くても閉めたが好くはないこと。』彼女も不安さうに云ふ。

陽吉は彼女にさう云はれて、折角開けた一枚の雨戸を堅く閉めてしまつた。それから二人は長い間、ぼそ〳〵と小聲で何か語り續けてゐたが、やがて寢具をとり出して寢支度をした。夜雨は同じ勢ひで降りそゝいだ。

二

陽吉は二三日して妻の兩親に手紙を書き送つた。

『拜啓滯在中は一方ならず御厄介に相成候段厚く御禮申上候。また出發の際は御見送り下されありがたく存じ候。小生等は佐賀に一泊仕り、十四日夜、下の關發の特急車にて東京へ向ひ、途中、都合により大磯にて下車致し、海岸の旅館に一泊、十六日夜東京の自宅に到着仕候間先は御安心下され度、着京の當夜は降雨激しく、ステーションより郊外の拙宅まで俥を雇ひ、萬一の場合を怖れて靜子の俥だけ附近の交番前に止め置き、小生の俥だけ斥候として一先家へ進ませるなど及ぶ限りの警戒をつくし候が、幸にもそは思ひ過ぎに終り、今日までのところはまだ何等特に御報告すべき事も無之、聊か拍子ぬけの感有之候次第、然しながら小生等の着京を知るや先方は早速來訪するは必定と心得、豫め對應の用意は致し居候……』

陽吉は彼女の兩親に對しては文字外の忠實と誠意をこめたつもりであつた。

歸京後は雨の日が續いた。陽吉と靜子とは、何時大學生が訪ねて來るか知れないので一日も氣をゆるしてはゐられなかつた。若し玄關にそれらしい來訪者の聲がした場合は先づ彼女だけは早速押入か臺所の隅の方に身をかくすことに二人は定めた――彼等は隣の家に來た訪問者の足音にも神經を勞した。それゆゑ彼女だけは戶外へは一歩も出ぬことにしてゐた。そのやうな不安と怖れは平凡な男女の結合の道程よりはまさつてゐて、小說的情緒の道程を現在經驗し

つゝあると云ふことが幾分陽吉を滿足させ、そして勇敢にした。すべてが彼のこれまで空想したことのある戀愛の悲劇的條件に叶つてゐるやうで……。彼はそれを愚かしい營みだと自から嘲りもし、またその情緒の中に一瞬間自分の艶福をも感じて見るのであつた。彼はその情緒に促がされて自分を悲劇的小英雄にし、靜子の心に感謝と信頼と敬愛とを增さしめねばならぬと思ふが然しその努力を長時間持續することは彼の素質が許さなかつた。彼は小心で神經質ですべてに於て懷疑者である。

『自分は何だつてこんなあいまいな年若い女にひつかゝつたのだ……自分は此の女にうまく欺かれてかう云ふことになつてしまつたのだ……今に自分は馬鹿を見るだらう……』さう思ふと忽ちいろ〳〵の不愉快な想像で頭はいつぱいになる。さうなると彼の小英雄的氣組は愚痴の男の懊惱に變つてしまふのであつた。

『此の女の從兄と云ふのは大學卒業まで、尠くも向ふ四年間は此の東京で暮らすだらう……或は大學卒業後もそのまゝ東京に居るだらう……此の女が心から從兄を厭つて振りきつたと云ふなら、それほど執念を抱いてゐる從兄が此の東京にゐるのにわざ〳〵東京にゐる自分に結婚を求めたのはどう云ふつもりだ……最初から從兄の復讐を豫期して彼を振りきつたのなら彼女は東京で生活することを避けねばならぬ筈だ……その點はどう考へても自分には疑はしい……そこには何等かの考へがありさうだ……從兄との結婚はどうあつても兩親がゆるさぬ……しかも初戀を經驗したと云ふ從兄だ……兩親の意に背いてまでも從兄との戀を完ふする勇氣はないし、それに從兄はまだ無收入の大學生だ……だから東京に居住する自分との結婚を思ひついたのは、時々從兄と逢ふことが出來ると云ふ計畫が含まれてゐないとはどうして保證が出來るものか……尠くも彼女の最初の考へはさうではなかつたか……』此の疑ひは最初から幾度陽吉を惱ましたか知れない。いろ〳〵躊躇させた――では何故彼は彼女をつれて東京へ來てしまつたのか？……信じて下さいと彼女から

極力切願されたが爲め……そして孤獨生活からのがれたい爲め……彼女が同鄕の女であつたが爲め……彼女をしりぞけて再び彼女ほどの女を得ることは出來さうもないと考へたが爲め……彼女とそのまゝ別れてしまへば後日に於て自分の勇氣の足りなかつたことを悔いねばならぬと考へたが爲め……それにしても結婚後の不安と疑惑については全然豫想しなかつたか……いやそれは充分豫想した……では彼は唯一夜の爲めに彼女と結婚してしまつたのか？……必らずしもさうではなかつたと彼は云ひ得る……何故ならば彼は幾度となく彼女に對して自分との結婚を思ひ止まるやうに說き聞かせもしたから――抑も何故彼女はあくまでも、その從兄なる大學生に背いて陽吉と結婚しなければならなかつたか？……抑もいかなる動機から二十も年上の陽吉に彼女自から書面を以て結婚を切望したのか……それは誰よりも彼女の胸が最もよく知つてゐなければならぬ――

彼女の父親は醫者であつた。父は醫學上から、そして醫者としての社會的立場から娘に近親結婚を絕對に許可しなかつた。――唯それだけの理由で彼女は從兄との戀を棄てねばならなかつたとして、彼女は心からその戀人を棄て得たのであるか？……彼女は云ふのであつた。

『いゝえ、それだけではないんです。無論その爲めでもあつたけれど、私は心から從兄を好きではなかつたんです……』

では何故彼女は陽吉に結婚を求めながら一方その大學生が、暑中休暇で歸省してゐる間もしば〱逢つて續けたか？……それは從兄をさつぱりと思ひきらせたい爲めに逢つて得心させる必要から止むを得なかつたと彼女は云ふ。果してさうであつたとして、彼女は假にも『私が相良と云ふ人と結婚しても同じ東京にゐれば、いつでも逢へるじやないの』と從兄に誓ひはしなかつたか？……それは從兄の心を柔らげ彼の失望を少くしてやりたい爲めに心にもないことを云つたと彼女は云ふ。では何故に陽吉に自から結婚を求めながら、結婚する間際までひとりで悶へてゐた？……從兄に

對する愛憐と悲しみとを妹に愬へたりしたのは何が故か？……彼女はそれについてはかう云つて打ち消すのであつた。
『あなたに妹がおしやべりしたことは大へんちがつてゐますわ。私そんなに悶えたりなんかしませんわ。悶え泣きするほどのことはなかつたんですわ。唯あの人が私からやつて置いた誓書を戻してくれないのが氣になつたんですの。そのことだけは貴男と結婚するについて心配でしたの――いゝえ、それは無理にあの人から書けと云はれて仕方なしに書いて送つた誓書です――きさまのやうな妖婦から誓書なんか貰つて置いたつて何にもならないから戻してやる。とさう云つたくせに戻してくれないんですもの。これがありさへすれば何時でも法律に訴へることが出來る。他の男と結婚するならしろ。つておしまいにはそんなことを云ふんですもの。』そして彼女はかうつけ足して云ふのであつた『私を信じて下さい。信じてゐて下さい。決して貴男を欺くやうなことはいたしませんから――貴男をさきで裏切る考へでどうして貴男に結婚して下さいと私が云へるでせう。私はそんな妖婦ではありません。貴男を尊敬もせず好きとも思はずにどうして暫しでも夫婦になつてゐられるでせう。そんな恐ろしい女に私は見えるでせうか。信じて下さい。貴男が私の郷里から出られた詩人でなかつたら、そして貴男が不幸な離婚後をさびしく孤獨でいらつしやることを私が知らなかつたら、私はあなたにあつかましくも、年若い女の分際で結婚して下さいなどと云へなかつたのです。ほんとに、私のやうな汚れた身ではとてもと幾度か考へましたけれども、貴男のやうな不幸なお方に一生を捧げることによつて幾分でも私の心は浄められるやうな氣がしたのです。それに國での講演の時あなたを見て、私は貴男が私の想像以上にお若いことを知つたのでした。その時母も貴男を見たのでした。母は貴男を見た時云ふのでした。なくなつた私の兄にそつくりだと云ふのでした。私も兄にそつくりだと思ひました。でもありのまゝを申しますと父は最初私が父に相談した時には同意を持つてくれませんでした。詩人なんかの妻になつてどうする。つてさう云つたきりでしたの――然し貴男が今度私の爲

めに東京からわざ〳〵來て、父にお會ひ下すつてから父の氣持は急に變つてしまいました。お顔からおからだの格構まで兄にそつくりだつたので父はびつくりしたさうですの。母は秀雄が歸つて來たやうな氣がする。つて涙ぐんで云ふのでした。貴男の濃い眉と眼が兄そつくりだつたんですもの——そして父は日頃の頑固に似ず私の希望通りにして好い。つてやさしく同意してくれましたの。

彼女の云ふことは半ば以上嘘であつても彼を信じさせようとする熱心は何ものに根ざしてゐたか……陽吉の思はなければならなかつたことはその點であつた……彼女が彼に結婚を求めたその動機、更に想像し得べき將來の事柄——彼女は自分との結婚を最初から眞面目に嚴粛に企てたのなら、何故その從兄との關係をきれいに打ちきつた後、なほ一年か半年の月日を眞面目に過ごしてからにしなかつたのか？……彼女の行動は淫奔な娘が戀人と良人とを別々に持たうと企てたやりくちと同じではないか……彼は彼女に云ふ『お前がお前の云ふ通り僕の不幸な離婚後の獨身生活を氣の毒に思つてくれて、その爲めに僕との結婚を思ひ立つたのならば、お前の行動はも少し最初から異つてゐなければならぬ……お前の僕に對してとつた手段と方法とは、僕が獨身者であると云ふ弱點をねらつて、お前は自分の若さと美貌とを信じて、そして一度でも僕がお前と會ひさへすれば大抵ひきつれられて無條件的に結婚するだらうと確信した上のやりくちのやうに思へるんだ……お前はそれほど僕を好いても尊敬してさへもゐずに寧ろ僕から戀されようと構へてゐたやうに僕には考へられる……いきなり見ず知らずの自分に結婚を求めて僕の已惚を利用しようとしたのだと思ふといくらお前が美貌であつても好い氣持はしないよ。……僕は直ぐにもあの時東京へ引き返す決心をしたのはその爲めだつた。然し結局僕は自分の迷ひに打ち勝つことが出來なかつた……。』

靜子はさうまで云はれると默るのみだつた。そして彼女はそんな時には陽吉と同棲してゐて、すぐそばにゐる陽吉に

手紙を認めて送るくせがあつた。彼女は次のやうに書いて陽吉に見せた。

『樂しかるべき晩餐の貴重さを私の不行屆から貴男様の心を傷けましたことを幾重にもおわびいたします（彼女の不行屆と云ふのはお菜にこしらへた燒茄子の味が少しすつぱくなつてゐたこと……）思ひ見るに私ことこれまで幾多の教養上の缺點を暴露いたし貴男様の內的生活をまで冒すことの恐るべき責めを痛く〻〻感ずる次第でございます。いかに私のみ貴男様に對する信賴の度が高くとも、また愛の深甚さを認識してゐましても、その表現結果の不充分なるが爲めに貴男様を忽ち或る疑惑に陷らしむることの悲しさよ――結婚後日に增し深みゆく愛と崇敬と信賴を護る爲めの願望――身を碎いても二人の上に良き日の多からむことを只管念じつゝも完全に達することを得さる不純の悲しさ、私の惱みの現狀をばどうぞ御諒解下さいませ。貴男様の御人格に對しての不滿は更にございません――日常の生活を理想的に且つ又有意義たらしめたい事、人生の嚴肅さを學ぶ上にもと存じ、家事萬端の整理に興味を覺え、貴男様よりの御注意お心添の數々を身にしみて有難く謹服致し身心の訓練に怠りなく一步を先んじてより良き生活の殿堂を築かんものと努力は致してをりますものゝ心のまゝならぬ擧動に貴男様の不快と幻滅のみを色濃くして行くよぎなさ――いかにしてか圓滿を見ることが出來ないでございませうか。峻嚴なる社會人としての貴男様に嫁くに當りまして私は極めて確定したる覺悟と抱負とに胸の高鳴りを覺えながら鄕里の土を旅立ちしましたが、今日まで何等お盡しすることも得ず却つて〳〵お惱みと不快とをのみ增させ申し、まことに〳〵本意なき次第でございます。私は例へ泥濘の域にありましても、いづくんぞ知らん、共に〳〵世の辛酸と戰ひながら最後の勝利を期して生涯貴男と連れ添ふことを得ますならば私は此の上何をか望みませう。然し現狀の生活が貴男様の心の負擔を重くし、お惱みを加へ、御不快を增すものでございましたら、私はほんとうに深く、そして愼重に考へなければならぬと存じます。

靜　子

『おい〳〵、お前はよく、いつくんぞ……と云ふ言葉を手紙の文章に使ふくせがあるねえ。いつくんぞ知らん、共に共に世の辛酸を……』陽吉は冷かした。彼女の辭令に長けてゐる點には好意と嫌惡と一緒に彼に感じるのが常であつた。

或る時は彼女はまた次のやうに書いて陽吉に渡した。

『すつかり淋びしくなりました。貴男様の沈々とした御面影をまのあたり見て私としてはどんなに〳〵罪深く堪へがたいなやましいことでございませう。昨日も今日も、一昨日もずつと變なお天氣がつゞきました。せめてもの二人の憂欝が氣象のせいであつてくれますならば、また晴るゝ日の喜ばしさを待つことも出來ませうけれど——噫されど私如き忌まはしき過去を持つ身としては、貴男様の幸福と平靜とを亂す者として自から退くことの當然を感ずるより外にございません。私の切なさ苦しさ、別離に際しての悲歎は必然私の脊負ふべきものとして何等人を恨み世をかこつべくもありません。私は昨日來眞實死にたへと思ふのみでございます。親元へ再び歸ることは私としてはどんなに苦しい耻ぢさらしでございませう、私はいつそ尼僧にでもなつて靜かに魂の勞れと痛みを……云々』

三

彼女の母からの手紙には『無事にそちらへお着の由、一同安堵しました。おたよりが少し遲いのでいろ〳〵案じてをりました。たゞ〳〵今後は事なかれかしと神佛に祈つてをります……』

一日遲れて父からの手紙が來た。

『御着京の情報を得て安心致し候。今後の事については貴下に及ぶだけ御迷惑をかけざるやう當方にては親戚一同と相はかり、それ〳〵手を廻し居る次第に候へば、必らず早晩完全なる解決を得べしと確信致し居り候。今回の御迷惑は不

束なる娘の致せし事にて候へ共一切は我々兩親の不徳に歸すべきものにて唯々耻ぢ入る次第にて候……云々」

彼女の父は村では村會議員として相當にきけ者であつた。それに醫者として立派なくらしをしてゐた。然し二十四になる長男を失つたことゝ娘が親の期待に背いて忌むべき血族の青年と戀に陷ちたことゝが此の老醫師の晩年の心算を狂はせた——まだ靜子の下に二人の娘と男の子一人がある——彼女の父は長女をばあまり高名でもない詩人の陽吉と結婚させることはもとより本意ではなかつたに違ひないが、一度まちがひを惹き起した娘が自からそれを悔いてあらたに陽吉と結婚したい希望を申し出たので、一方の青年の未練を打ちきる爲に多少後日のめんどうを豫期しながらも許したのである——陽吉はその青年と彼女との關係が終結してゐると云ふ兩親の保證と彼女の明言とを信じて結婚したのであるが、結婚式がすんでから甚だ迷惑な事情を兩親から打ちあけられて彼は己の愚かな失態を明白に痛感した——その青年は陽吉と靜子との結婚にひどく激昂して常態を失ひ、東京へ急行して二人の上京を待ち受けてゐると云ふのであつた。或は二人に對して狂的な行動に出でないとも限らぬから暫く上京を見合はせて此の地へ止まる方が安全であらうと彼女の兩親も當惑顏をして云ふ。彼も當惑した。そして考へた。彼は彼女及び彼女の兩親に欺かれたと云ふ氣がした。兩親に對しては問責すべき言葉が充分あると思つた。然し彼の心弱さは、あくまで雅量ある花婿たらんとする名譽心と結びついて此の不幸な結婚をあきらめることを彼に强いた。そして彼はなほ自分の勇敢によつて彼女及び彼女の兩親の信頼と感謝とを買ふ爲めに、一つはまた田舍にそのまゝ一月二月と止まることがいやなのとで危險を冒して上京することに決したのであつた……。

四

幾日も降りつゞいた秋雨はやんで晴れやかな澄みきつた淺黄色の高空に變つた。二人は思ひきつて家をぬけ出して見た。彼女は淡紅色のパラソルを斜にかざして顏をかくすやうにして、陽吉と離れて歩いた。二人は駒込驛から省線電車に乘つた。プラットフォームに一人の角帽の大學生が立つてゐた。これまでは何とも感じなかつた角帽の青年に對して彼はひどく臆病になつてしまつてゐた。角帽を冠つた大學生をさへ見れば彼女の從兄ででもあるやうに彼はびく〳〵した。鶯谷驛まで行く間に幾度かそのびく〳〵をくり返した。ロイド眼鏡をかけた、カバンを持つた角帽の大學生がプラットフォームから彼等の乘つてゐる列車の方へ近づいて來て扉を開けて入つて來た。そして彼女と陽吉とを意味ありげにちらと見る?…陽吉はハッと思つた。『與ふわ、もつと痩せてゐますのよ……』彼女は落ちついた小聲で云つた。

鶯谷で下車して二人は公園の方へ登つて行つた。二人の姿は尠くも往き來の人の目についた。陽吉は人々の注目によつて彼女の美くしさを今更に一つの滿足を以て承認しなければならなかつた。然し自分はそれほど幸福でないと云ふことと、幸福の模倣者に過ぎないと云ふことを彼は絕えず感じて、ひそかに耻ぢてゐるのであつた。彼女がもつと神聖な女であつたなら……と彼はさう思ふのである。

彼等は院展の會場の方へ歩いて行つた。そして入場した。そこでも同じやうな角帽の大學生を見た――然しいろ〳〵の繪畫を見廻つてゐるうちに彼はうつとりとなつた。煩はしい感情に疲れてゐる胸を輕くすることが出來た。彼女と自分との同棲生活は此の院展を一緒に見たと云ふことを後日の追憶として遠からず終結するのかも知れぬ……と彼は會場の中でそんなことを思つた。その方がめんどうなしで好い……と思つたりした。

二人は彼女の故鄕の小村に似た油繪に見入つた。陽吉は『東北の或る町』と題してある油繪の前に立つて別れた妻の故鄕の町の冬の情趣に感慨を喚び起こした。

『前の奥さんとも、かうして一緒に展覽會へいらしたでせう。』彼女は云つた。
『來たとも……』陽吉はぶつきら棒に云つた。やがて會場を出た。
『ねえ貴男、登世ちやんの宿にはよらないで歸りませうか、どうなさるの。』
『さあ、寄つて見たいが、ひよつとして君の從兄とそこで出くはすやうなことになると大へんだからね。從兄はこれまでも時々行つてたんだらう……屹度僕等の上京したかどうかを知る爲めにちよい〳〵行くだらうと思ふんだ。』
『さうねえ……』
『いつたい登世ちやん僕等がかうなつたのをどんな風に思つてゐるのだ。從兄の方に同情してゐる風がありはせぬか』
寛永寺の裏手の通りの大塚某と云ふ家を探しあてるまでには二人は暫くうろついた。低い黒塀をめぐらせた古ぼけた平家の門札が大塚とあつたので、靜子だけ入つて訊ねて見るとその家が登世子の宿だつた。登世子は故郷の女學校時代の國語教師と六疊の部屋に同居してゐた。國語教師は三十に近い獨身の婦人で帝大の聽講生で、此の大塚家の家庭教師であつたが、國語教師は外出してゐて登世子が一人ゐた。陽吉も靜子の後から入つた。その部屋へは庭の木戸から行くやうになつてゐた。登世子は假寢からさめたやうな顔をして二人を迎へた。
『いつ姉さん達は東京へ來ましたの。』
『もう一週ほどになるのよ。』
『さう……』
登世子はきたない自分の座布團を陽吉にだけすゝめた。陽吉は彼女がきまり惡がつてゐる樣子を見て多く話しかけないことにした。彼女は田舍出のバンカラ女學生と云はれる方の、極めて自然兒風の女であつたが陽吉に對してはもちも

ちした。

『今日は院展へちよつと行つて見る氣になつて、ついでにお寄りしたんですよ。あなたは行きましたか院展へは……』

『は、まゐりました……油繪を見ると日本畫の方をやめてしまひたくなりました。』

登世子は學校で日本畫を主として學んでゐた。

『柴田は來ない？……登世ちやん……』

『一度も來ないのよ姉さん。』

『手紙をよこしやしないの？……』

『いゝえ……』

『さうを……』

『私もあの人にはよくは思はれてゐないのよ姉さん……あの人ずつと學校の方は欠席してゐるんですつて……』

『私達のところへ押しかけて來さうか知ら……姉さん氣が氣でないのよ。』

『……』登世子はだまつてそれには答へなかつた。

『またそのうちに逢へるわ、今日はこれでおいとまするわ……』

五

『ごめん下さい……』

夜の八時頃であつた――。

『前の奥さんとも、かうして一緒に展覽會へいらしたでせう。』彼女は云つた。

『來たとも……』陽吉はぶつきら棒に云つた。やがて會場を出た。

『ねえ貴男、登世ちやんの宿にはよらないで歸りませうか、どうなさるの。』

『さあ、寄つて見たいが、ひよつとして君の從兄とそこで出くはすやうなことになると大へんだからね。從兄はこれまでも時々行つてたんだらう……屹度僕等の上京したかどうかを知る爲めにちよい／＼行くだらうと思ふんだ。』

『さうねえ……』

『いつたい登世ちやん僕等がかうなつたのをどんな風に思つてゐるのだ。從兄の方に同情してゐる風がありはせぬか』

寛永寺の裏手の通りの大塚某と云ふ家を探しあてるまでには二人は暫くうろついた。低い黑塀をめぐらせた古ぼけた平家の門札が大塚とあつたので、靜子だけ入つて訊ねて見るとその家が登世子の宿だつた。登世子は故鄕の女學校時代の國語敎師と六疊の部屋に同居してゐた。國語敎師は三十に近い獨身の婦人で帝大の聽講生で、此の大塚家の家庭敎師であつたが、國語敎師は外出してゐて登世子が一人ゐた。陽吉も靜子の後から入つた。その部屋へは庭の木戸から行くやうになつてゐた。登世子は假寢からさめたやうな顏をして二人を迎へた。

『いつ姉さん達は東京へ來ましたの。』

『もう一週ほどになるのよ。』

『さう……』

登世子はきたない自分の座布團を陽吉にだけすゝめた。陽吉は彼女がきまり惡がつてゐる樣子を見て多く話しかけないことにした。彼女は田舍出のバンカラ女學生と云はれる方の、極めて自然兒風の女であつたが陽吉に對してはもちも

ちした。

『今日は院展へちよつと行つて見る氣になつて、ついでにお寄りしたんですよ。あなたは行きましたか院展へは………』

『は、まゐりました………油繪を見ると日本畫の方をやめてしまひたくなりました。』

登世子は學校で日本畫を主として學んでゐた。

『柴田は來ない？………登世ちやん………』

『一度も來ないのよ姉さん。』

『手紙をよこしやしないの？………』

『いゝえ………』

『さうを………』

『私もあの人にはよくは思はれてゐないのよ姉さん………あの人ずつと學校の方は欠席してるんですつて………』

『私達のところへ押しかけて來さうか知ら………姉さん氣が氣でないのよ。』

『………』登世子はだまつてそれには答へなかつた。

『またそのうちに逢へるわ、今日はこれでおいとまするわ………』

『ごめん下さい………』

五

夜の八時頃であつた――。

『ごめん下さい……』訪問者は、内側から掛けがねをおろしてある玄關の硝子戸を輕く外側から小突くのであつた——靜子はいち早くその聲を聞きつけて立ち上がつて次の部屋にかくれた——來た!!陽吉は腹をきめて彼女がかくれてしまふのを待つて立つた。

『はい……』

そして彼は玄關の方へ行つた。

『どなたです……』

陽吉は少し言葉を尖らせた。

『柴田と云ふものです。相良さんはお宅でせうか……』

『をります。』陽吉は思ひきつて硝子戸のかけがねをはずした。彼は數日來自分等を脅やかしてゐたその幻影に對する一種の反抗と、心弱い自己に對する反抗とを一緒にした勇敢さを以て戸を開けた。そこには二十五六の、制服の上にコートを被た背の高い大學生が立つてゐるのだ。

『夜分あがつて御迷惑とは思ひましたが、相良さんにちよつとお目にかゝりたいのですが……』青年は角帽をぬぎながら、昂奮を抑へるやうな語調で云つた。

『私が相良です。どうぞ……』

陽吉は客を無造作に座敷へ通した。そして形式的な初對面の挨拶をした。彼は靜子の前情人であると云ふ意識と共に彼女の従兄であると云ふ情誼を以て相手を見た。續いて愛する女を失つた氣の毒な青年と云ふ感情を以て靜かに客の蒼白い顔を見た。客の蒼白い顔はこれ以來の焦燥を語つてゐる。久しく剃らないらしい濃い髭が顎から頬にかけて蔽ひか

ぶさつてゐた。

『私が今晩あがつたわけは、あらかじめ御存じかと思ひます。』客は口を切つた。

『さうです。實は私から一度お目にかゝつたが好いとも考へてゐました。然し貴男の御宿所を全く知らないものですから……』

『私は貴男の歸京されるのをお待ちしてゐました――貴男は靜子と結婚なすつたのは事實でございますか。』

『は、結婚しました。』

『正式にですか。』

『無論正式にです。それについて貴男は御異存があられると云ふことですが……』

『大に異存があります。』と客は色を變へた。

『靜子が私の情人であることを貴男は御承知だつた筈ですが……私のお訊ねして見たいのはその點です。貴男は私の情人であることを御存じでゐて、彼女と結婚なさつたと云ふことについてです。』

『私は貴男と彼女との關係が既に終結してゐると云ふことを彼女及び彼女の兩親から聞いて、それを信じて結婚しました――それについては今日までの順序をお話ししなければなりません。然し今私からそのことを貴男にお話ししても辯解がましく聞こへるか知れませんから、私が貴男の大切な愛人を掠奪する考へで彼女と結婚したのでは毛頭ないと云ふこと、その證據として彼女からの手紙を全部お目にかけます――この手紙で見ると、貴男は彼女に『自分等二人の結婚は不可能であるから他に幸福な結婚が得られるならばお前の爲めに私は何時でもそれを忍ぶ……』と貴男は彼女に云はれたと云ふことです。貴男はさうおつしやつたことはないのですか？……』

『ごめん下さい……』訪問者は、內側から掛けがねをおろしてある玄關の硝子戶を輕く外側から小突くのであつた——靜子はいち早くその聲を聞きつけて立ち上がつて次の部屋にかくれた——來た!!陽吉は腹をきめて彼女がかくれてしまふのを待つて立つた。

『はい……』

そして彼は玄關の方へ行つた。

『どなたです……』

陽吉は少し言葉を尖らせた。

『柴田と云ふものです。相良さんはお宅でせうか……』

『をります。』陽吉は思ひきつて硝子戶のかけがねをはずした。彼は數日來自分等を脅やかしてゐたその幻影に對する一種の反抗と、心弱い自己に對する反抗とを一緒にした勇敢さを以て戶を開けた。そこには二十五六の、制服の上にコートを被た背の高い大學生が立つてゐるのだ。

『夜分あがつて御迷惑とは思ひましたが、相良さんにちよつとお目にかゝりたいのですが……』青年は角帽をぬぎながら、昂奮を抑へるやうな語調で云つた。

『私が相良です。どうぞ……』

陽吉は客を無造作に座敷へ通した。そして形式的な初對面の挨拶をした。彼は靜子の前情人であると云ふ意識と共に彼女の從兄であると云ふ情誼を以て相手を見た。續いて愛する女を失つた氣の毒な青年と云ふ感情を以て靜かに客の蒼白い顏を見た。客の蒼白い顏はそれ以來の懊惱を語つてゐる。久しく剃らないらしい薄い髭が頰から頤にかけて掩ひか

ぶさつてゐた。

『私が今晩あがつたわけは、あらかじめ御存じかと思ひます。』客は口を切つた。

『さうです。實は私から一度お目にかゝつたが好いとも考へてゐました。然し貴男の御宿所を全く知らないものですから……』

『私は貴男の歸京されるのをお待ちしてゐました――貴男は靜子と結婚なすつたのは事實でございますか。』

『は、結婚しました。』

『正式にですか。』

『無論正式にです。それについて貴男は御異存があられると云ふことですが……』

『大に異存があります。』と客は色を變へた。

『靜子が私の情人であることを貴男は御承知だつた筈ですが……私のお訊ねして見たいのはその點です。貴男は私の情人であることを御存じでゐて、彼女と結婚なさつたと云ふことについてです。』

『私は貴男と彼女との關係が既に終結してゐると云ふことを彼女及び彼女の兩親から聞いて、それを信じて結婚しました――それについては今日までの順序をお話ししなければなりません。然し今私からそのことを貴男にお話ししても辯解がましく聞こへるか知れませんから、私が貴男の大切な愛人を掠奪する考へで彼女と結婚したのでは毛頭ないと云ふこと、その證據として彼女からの手紙を全部お目にかけます――この手紙で見ると、貴男は彼女に『自分等二人の結婚は不可能であるから他に幸福な結婚が得られるならばお前の爲めに私は何時でもそれを忍ぶ……』と貴男は彼女に云はれたと云ふことです。貴男はさうおつしやつたことはないのですか？……』

『それは僕から一度さう云つたこともあります。云はないとは云ひません。然しその後彼女は絶對に他の男と結婚しないと云ふ誓書をあらためて僕に寄越しました。その誓書を僕はちやんと持つてゐます。僕との關係が終結してゐるとは何人にも云はせません。僕と靜子との關係は四年間續けられて來たのです。さう易く打ちきることの出來ないものがあります。貴男が僕と彼女との關係を少しでも御存じであつたならばです。また貴男に掠奪の意志が全然なかつたとすればです、貴男は彼女と結婚する前に一應僕に會つて下さらねばならぬと思ふんです。僕が貴男に對して默認することの出來ないのはそのことです。』

『なるほど、彼女と私が結婚する前に貴男と私が會見しなかつたそのことが惡いと云はれるんですか、私には少し勝手が異ふやうですが、貴男の立場からはさう云へるかも知れません。然し私が靜子の妹から貴男のことを聞いたのは七月の六日で、貴男は既に暑中休暇で佐賀へ歸省されてゐるとのことでした。私が貴男に會見したくも貴男はその時東京にゐられなかつたのです。靜子に貴男と云ふ情人があることを聞いて無論私は彼女との結婚はすぐに斷念しました。彼女にさうした貴男があると云ふことは實に私にとつては意外で、もと〳〵私から結婚を求めたわけでも何でもなかつたのですから、早速私は彼女にお斷りの手紙を書いて送つたのでした。』

『では、貴男は結婚する意志がなくて、わざ〳〵佐賀へ行かれたのですか？……』

『それはかうです。彼女と貴男との關係の内容を全然知らない時分に最早彼女からは數通の書面が私に來てゐたのです。つまり求婚の手紙です。私はそれに對して、兎も角も一度お目にかゝりたい。それには私の方から墓參旁々佐賀へ歸郷してお會ひすることにしてもよい……と答へてやつたのです。そして私は七月の末には遲くも歸郷することに定めてゐたのでした。ところで一番最初に來た彼女からの手紙に、東京の妹に一度會見して貰ひたい。そして自分のことを諒

め妹に聞いて貰ひたいと書いてあつたので、私は或日妹の登世子の下宿を訪ねました。その時分妹は小石川表町にゐました。妹に會つていろ〳〵聞いて見ると貴男と云ふ愛人が姉にはあると云ふので、結婚はもとより、歸郷して本人と會見する必要も私にはなくなつたのでした。ところが彼女からのしば〳〵の手紙では貴男との關係は最早全然ないから、過去を問はずに自分を救ふと思つて結婚して貰ひたい、是非佐賀へ來て兩親と會見して貰ひたい、と相變らず同じことを書いてあるのです。然し實際私は氣がすゝみせんし、そのまゝこちらから返事をやらぬことにしてゐたのです。するとと今度突然、待つてゐる……と云ふ電報なのです。で私もつい動かされて墓參旁々あちらへ行つたわけでした。私が東京を立つたのは八月二十二日の夕です。無論あちらへ行つても自分は彼女と結婚はしまい。唯どんな性格の婦人か、一度會へば大抵分る。と云ふ氣でした。』

『それにしてもですな、僕が休暇であちらに歸つてゐることは御存じでしたらうから僕にもあちらで一度逢つて下さつてもよい筈ではありませんか。實は僕は貴男が佐賀へ來られることを靜子の妹から聞いて、待つてゐたのです。然し學生會の方や何かで奔走してゐたもんですから。ステーションで貴男を待ち受ける暇などなかつたのです――丁度僕が歸省して十日目のことです。靜子が僕に逢ひに來ました。そして云ふには、私は今度詩人の相良陽吉と云ふ人と結婚することにしました。貴男が一應さつぱりして下されば東京ではいつでも逢へるので すからどうか氣を惡くしないで下さい。私の魂は一生涯貴男を離れることは出來ません。唯父母があの通り近親結婚を許してくれませんから父母に安心させる爲めに相良と云ふ人と結婚します。決して貴男をふりすてるのではありませんから承知して下さい。と僕に云ふのでした。で僕は大に云つてやつたのです。一旦人妻となつてしまつてから俺はお前と不義をするやうな人間ではない。俺はそんな氣やすめを云はれたとて承知しない。俺は相良と云ふ人に一度逢つて、そんな不幸な結婚を斷じてしないや

うに忠告してやるからさう思へ、と僕は云つてやつたのです——あの女がどう云ふ考へで貴男との結婚を思ひ立つたかは、これだけお話しすればお分りになるでせう。彼女は一方の貴男に結婚を求めながら、その夜は僕の家に泊つてそして自から易々として僕に　　せたのです。そして、なほその時もかう云ふのでした——相良さんは私より二十も年上ですから、さきで貴男とどのやうなことでも出來るぢやありませんか……とさう云ふのでした。實にひどい女ですよ。だから僕は貴男の爲めにも不幸だと思つて是非一度その前にお逢ひしたかつたのです。貴男の方さへ彼女との結婚を思ひ止まつて下されば互に幸ひだと思つたのです……あ……そして彼女は貴男と結婚して一緒に上京した筈ですが今貴男と此の家に同棲してゐるのでせうか？……』

『いや〳〵まだ此の家には來てゐません。』そのことを訊ねられるのを待ち受けてゐた陽吉は萬一を思つてさう答へた。

『いや、貴男のお話しで何もかも私には分りました。私も彼女がどう云ふ動機から私に結婚を求めたかと云ふ點は最初から疑問だつたのです。或はそんなことだらうとも想像して見ないではなかつたのです。』

『僕がかう云つても信じられないかも知らんが、貴男も行く〳〵は不幸ですよ。屹度あの女にはてこずりますぞ。僕はようくあの女の性質を知つてゐます。兩親もこれまで彼女にはこまりぬいたのです。彼女が此の前東京に飛び出した時も娘の所置に窮して兩親は僕との結婚を許すとまで云つたのです。で僕がその氣でゐると、いつの間にかまた他の男と文通したりして、隨分僕を惱ませました。だから僕は、お前が僕を眞實愛して變らないつもりなら、絕對に他の男と結婚しないと云ふ誓書を認めろ、と云つたのです。すると僕の要求通りに誓書を認めてよこしました。それはまだ今年の四月のことなんです。僕はいつでも貴男にお目にかけて好いです。彼女も五月には東京へ來て僕と一緒に暮すとまで誓つてゐたのでした。それだのにこんな始末なんです。僕も今度こそは此のまゝ許して置くわけには行きません。兩親に

しても娘の所置にこまつた時には僕との結婚を許すと云つて置いて、僕を愚弄して彼女を貴男と結婚させてしまつて、愚弄も甚だしいです。あまりに踏みつけた所爲だと思ひます――郷里の友人からの報告では貴男と彼女は九月十三日にあちらを一緒に立つたとのことですが、現在彼女はどこにゐるのですか？……』

『彼女は今中澁谷の親類の家にゐます。一緒に佐賀を立つたのは事實です。私も貴男が今度のことについてひどく思ひつめてゐられるやうなことを聞きましたので、實はその爲めに同棲を躊躇して、彼女は中澁谷の親類の家にゐることになつたのです。』

『僕も男子です。一旦自分に背いた女を今更とやかく思ふのは愚だと斷念もしてゐます。然し、どうも矢張りさうは行きません。考へ出すと夜も眠れません。學校の方もずつと欠席してゐます。世間からもの笑ひを受けるやうな眞似はしたくはないと自分も出來るだけ氣持を轉換しようと努めてゐますが、どうかしたはずみで僕だつて思ひきつたことをしないとも限りませんから、その時は貴男にはお氣の毒ですが、彼女の爲めに貴男が防禦的態度をとられるならばいたし方ありませんから。それだけ御承知を得て置きます。』

六

陽吉はやつと無事に客を送り出してから玄關の戸の掛けがねをかけて、そのまゝ隣室へと入つて彼女をよんだ。彼女は暗い臺所の米櫃に打伏したまま泣いてゐた。やがて靜かに身を起こして陽吉の方へ近づいて來たがいきなり顔を彼の胸に押しつけてしやくりあげた。

『話しは全部聞へただらう……』陽吉は寄りつく彼女をすげなく押しやつた。

『私をゆるして下さい……』彼女はかすれた小聲で云つてなほも彼にしがみついた。『貴男はあの人の云つたことを全部お信じになつてはいけません……なんてまあ、あの人は大嘘つきでせう……あの人は私が貴男から棄てられるやうにばかり望んでゐるのです……貴男が私にあいそをつかすやうにばかり話してゐたんです……ようく皆、私は聞きました……私はあの人があんなことを云へば云ふほどいやでたまらなくなります……あの人は私が貴男から棄てられて不幸にさへなれば今となつてはそれで氣がすむのでせう……でも私は……』彼女は云ひ續ける——。

『だがお前は、相良と結婚してもさきでどんなことでも出來るぢやありませんが、と彼に云つたのはたしかだらう……私の魂は貴男から一生涯離れることは出來ませんと彼に云つたのは事實だらう……』陽吉は靜かに云つて彼女を見た。

『決して私はさうは云はなかつたんですもの……あなたがさつぱりしてさへ下されば從兄同志ですから東京で時々お逢ひするぐらゐのことは出來ますから、つて、そんな意味で云つたんです。それ以上のことを私が云つたとしても、それはあの人をあきらめさせる爲に云つたものと察して下さい——貴男と結婚してからもあの人と　を續けることを私があの人に堅く誓つたのでしたら、あの人はあんなに惡しざまに私のことを貴男に云ふ筈はございません……わざ〳〵あゝして昂奮して此の家へやつて來やしないでせう……あの人があんなに怒つてゐるのは、私があの人をきつぱり振りきつた證據ですわ……。』

『それはさうも云へるが……』、

『私は神樣にだつてそのことならお誓ひ出來ます。今後のことだけは私、ほんとうに……』

『俺は自分が馬鹿であることがます〳〵はつきりして來た。お前が僕にどんなに信じてくれと云つたつて、僕はいろいろの點からお前を信ずることは出來ない。お前を信じようとするほど僕の心は混亂するばかりだ。しまひに氣ちがひに

なつてしまふだらう……』

『では私を女中だと思つてゐて下さい。あなたが獨身で自炊をなさるよりは好いでせう……貴男のおつしやることはみんなあたりまへですから私はなんにも云へなくなつてしまひます。』

彼女の云ふことはまるで何かの小説からぬき書きした言葉のやうに陽吉には聞えた。

七

陽吉は翌日先輩を訪ねて事情を打ちあけて善後策について相談した。

『それは君があやまつた。』先輩は云つた。

『全く私の不聰明から出來たことです。あまりに重ね〴〵の失態で恥ち入つてしまひます。女の兩親は將來のことは責任を持つと云ふのですが、最初兩親の云つたことが既に事實と相違してゐるのですし、それに女を信ずることが出來ないで女の兩親を信じて結婚したことが大なる私のあやまりだつたんですから……』

『それはかんじんの娘を信ずることが出來なくちや駄目だ……親がいくら自分の娘について保證したつて親と娘とは同體ぢやないからねえ、それに親と云ふものは自分の娘などを見る目は案外あまいものだよ。それに一度しくじりをやつた娘を世間的に緣づけたい心から親だつて自分の娘については好い加減のことを云はねばなるまいから——兎に角、君に結婚してくれと手紙で求めてからもその從兄が暑中休暇で歸省したので逢ひに行つてと云ふんぢや賴もしくないなあ……』

『さうです。私もそれが一番いやに思へるんです……』

『それほどその從兄と離れがたいのにわざ〳〵結婚してくれと君に求めたのは矢張り親に安心させる爲の方便で、矢張り東京へ來て時々從兄ど逢ふつもりだつたのかも知れぬ。今になつてはさうでないと云ひはるだらうが、最初は尠くも彼女の考の中に入つてゐたものと一應は誰だつて想像するよ。かう云ふと變んだが君と結婚してもそのくらゐのことは出來ると甘く見てゐたんだよ――だからいつそ、かうするさ、その從兄と女とを會見させて見るのが好いと思ふ。その際決して女に對して暴行しないことをその從兄に誓はせて、そして君もその場に立ち合ふんだねえ、その場の二人の樣子を君が深く觀察していけないと思つたら、親もとへそのわけを云つて戻すがよからうと思ふ。それとも、そんなことをしなくつても今日まで明かになつた前後の事情から推して女の心が信じられないのならそのまゝ親もとへ戻すも好いさ。わけを云へば親の方だつてどうかう云ひわけは行くまいぢやないか。』

『さうするより外はないと私も思ふんですが……』

八

陽吉が先輩の家へ出かけて行つて不在のところへ昨夜の大學生は二人の友達をつれて訪ねて來たが、玄關の硝子戸は堅く閉まつてゐて開かず、内部から應ずる聲もしないので、三人は手を分け、二人は裏へ廻つて緣側と勝手口とにうろ〳〵してゐた。

内には靜子が一人留守居をしてゐた。彼女は早くもそれを感づいて猫のやうに音を立てずに押入の中へかくれた――

三人の大學生は陽吉の不在を疑ひながら、しばらく家の周圍をうろ〳〵してゐたが、やがて三人共門の外の空地の草むらに腰をおろして煙草を吹かしながら何か話し合つてゐた——。

靜子は押入の裡で小さくなつて、唯顫えてゐた。彼女は不意に彼等が裏と表から押し寄せた時は、もうこれまでと思つた。玄關の硝子戸だけは掛けがねをおろしてあつたが、勝手口も椽側も障子を閉めてあるきりだつたので、彼等にそのまゝ踏みこまれてはかくれる間はなかつたのだ——がさすがに彼等は内へは踏み込まなかつたので彼女は咄嗟の間に押入にかくれることが出來た。押入の襖を開ける時、いくらか音を立てたので彼等がそれを氣づいたに違ひないと思つた。然しそのまゝやがて彼等の足音が門外へ遠ざかつてしまつたので彼女はほつとした。

『乾度今日は亂暴しに來たのだ。今にあの人が外出さきから戻つて來たら、どんなことになるだらう……』と彼女は案じた。

門外の空地のへんで陽吉の歸宅を待ち受けて何かを爲さんと構へてゐる大學生等の姿を彼女は押入の裡で描いた。陽吉が血みどろになつて家に擔ぎこまれて來る有樣をはつきり彼女は描いた——もうかうなつては自分から身を退くより他に途はないと彼女は考へた。そして彼女は今更のやうに自分がまづい道をこれまで踏んで來たことをしみ〴〵後悔した。折角東京へ來て、かうして押入の裡に逃げかくれしなければならぬ自分のあさましい身を深く耻ぢた。同じ女學校時代の友達の中でこのやうな失態を演じたものは自分の他には一人もないであらう……若し此のとが世間に知れたら自分はどんなに……と彼女は思ふ——東京へ緣づいたと云ふことは、多くの同級生の誰彼に強い刺戟を與へ得ると信じ

てゐただけ、それだけ彼女はその身の現狀が一入恥ぢられるのであつた。おう自分は今、あさましい喜劇の女主人公になり果ててしまつてゐる……あゝ此のまゝ死ねるものなら……始めて彼女は自分の運命に對して見透しがついたやうな氣がして慚愧の涙が流れ出た――一時間餘も狹くるしい押入の裡にまるくなつてすゝり泣いてゐるうちに彼女は首や腰の痛みを感じ出し、身を僅かに起こして一方の行李へもたれ直らうとした。此の時、またしても三四人の足音がどかどかと玄關へ近づいて來た。一人の足音は裏の椽側から障子を開けて座敷へ上つて來る……そして玄關の方へ行つて硝子戶の蝶子をはづすのであつた。

『どうぞ　おあがり下さい。』その聲は陽吉であつた。

あの人が歸つて來たのだ……と彼女はいく分氣を落ちつけて、呼吸を殺し、耳をすませた。

二三人は玄關からどや／＼と座敷へあがりこんで來る……。

『や、昨夜は……さあずつとこちらへ……今日はお午からちよつと外出しまして……』

『昨夜は晩くまでお邪魔しまして……此の二人は僕の友人です。今日は僕の爲に一緒に來てくれたやうなわけです。』

それは柴田の聲である。

『僕等は柴田君の友人です。始めて……實は貴男に今日はお願ひがあつて同伴したのです……』

その聲は全く彼女には聞いたことのない聲であつた……。

『昨夜も僕が云つた通りですな、靜子と離婚していたゞきたいのですがねえ、どうでせう、これは貴男として承知出來ませんか……』

それは柴田の聲だ……少し間を置いて陽吉の答へる聲がした。

『離婚をしてくれとかおつしやるのですか。さあ、それは無雜作に今、私には出來かねますがね。』

『ぢや　斷然それは出來ないと云はれるのですか。』

『それを單に私に先づ要求されるのは少々筋が違ひはしませんか、彼女かまたは彼女の兩親へ對して飽くまでおつしやるのが至當だと思ひます。何故ならば最初に私は彼女と貴男との關係が終結してゐるとの保證を得た上で彼女と結婚したんですからね、昨夜も云つた通りです。兩親が彼女を引きとると云ひ、彼女もその氣になるのでしたら、私は何時でも離婚を承知します。それは貴男も分つて下さるでせう。私は貴男に對してもすまぬと云ふ氣持はあります。また私にしたところで、彼女がどんな考へで私と結婚する氣になつたかと云ふことには甚だ疑ふべき點もあるので、此のまゝで行くことは私に出來ないかも知れません――實は今日もそのことについて　先輩を訪ねて相談して歸つて來たところです。此の際私として甚だ迷惑なんですから、どうでせう、貴男と靜子と私と三人が會見して、その上で何とか決定しようぢやありませんか、三人が會見した上で、靜子が貴男に對してどんな風に謝罪をするか、どんな言葉で貴男に答へるか、それによつて、私は私のとるべき途を定めたいと思ふのです。さうしないで、唯單に貴男から離婚を迫られたから、その通りに私が應ずると云ふことになれば甚だ僕は愚劣な男になるわけで、それもまあ構ひませんが、それでは貴男に對して義理が立つか知れませんが、他にいろ〳〵義理が立たぬわけになるので私の立場は結局苦しいわけです。その點は分つて下さらねばなりません。』

『他に義理が立たぬとおつしやるのは、彼女の兩親にですか。』

『まあ、さうです……。』

『いや、僕は靜子と會見するのは御免蒙りませう。一旦貴男と結婚した彼女は明らかに僕に背いたのですから、此の上

貴男に頗ふのです。貴男が彼女と離婚して下されば、僕としてはいくらかでも男が立つのです。』

『三人で會見して見るのも好いぢやないか柴田君。大に面罵してやるさ……』

『いや、却つてあいつの方が僕を侮辱するやうなことを云ふにきまつてるから僕はよさう。僕をなめてるから、僕にならば、どんなひどいことでも云ふ女なんだから……』

三人は笑ひ出してしまつた。

『柴田君と云ふ人は此の通り善良な人なんですよ。僕等友人が憤慨せざるを得ないのはその故なんです。然し女が柴田君を愛してゐることは柴田君のいろ〳〵の打ちあけ話しで充分僕等は認めることが出來るのです。唯女性の弱さにですな、もう一つは今頃の若い女性の通有性とでも云ひませうか――到底兩親の同意が得かたいと見て彼女は柴田君との愛を止むを得ず葬つて貴男と結婚する氣になつたのと、それにですな、僕も一人の女性によつて經驗したことなんですが、女學校時代の友達がどん〳〵嫁に行つてしまふと、女と云ふものは自分の愛する男が大學を卒業するまで待つのがまだるつこく感ずるらしいです。そこはまことに女と云ふやつはあてにならぬものです。彼女もそんな心理から出發して遂に結婚を急いだものと僕は思ひます。それには女學校時代の友達にまけないやうな結婚をしなければならぬので、少々年上でも好い、外部的滿足が得られさうな。例へば名の知れた文士と云つたやう對象を求めることになるんですな。つまり靜子と云ふ女性が柴田君に背いて貴男と結婚したのもさうした心理だらうと僕等は思ふんです。』

隣室の暗い押入の裡で聞いてゐた靜子は『何と云ふ失敬な…』と思つた。その言葉は彼女にとつていくらか正確な批評でもあつたから、それだけ憎くらしかつたのである。

彼女は從兄に對しても云ひ分があると思つた『自分の美貌を信じて私をさん〳〵焦らしたくせに……まだ十六になつ

たばかりの私をあんなことにしてしまつて、それから……そして他の女性と始終文通してゐたのだもの……どんなことをされても私があの人を愛するとあの人は信じきつてゐたのだ……私はさきであの人からさん〴〵焦らされるのが見えすいてしまつたから、私だつて……あの人がほんとに私だけを守つてくれる人だつたら私だつて……』

『私から云ふのは少々へんですが、何故思ひきつて貴男は彼女を東京へ呼びよせて二人で同棲するなりして、彼女の全部を自分のものにしてしまはなかつたのですか、互にそれほど相愛してゐたものなら、彼女の兩親が許すも許さぬもない。二人でその戀を完ふされたらよかつたと僕は貴男に對してさう思ひますよ』

それは陽吉の聲であつた。

『いやそれがです——實にあの女は現金な女でして……』と柴田の聲は續いた『僕が高等學校時代にあの女は僕から棄てられはせぬかとそれを怖れてゐたほどです。兩親は二人の結婚を許しさうもないから一緒に死んでくれと私に幾度か泣いてせがむのでした。さうでなければ兩親の死ぬまで待つてくれとか、一緒に遠くへ逃げてくれとか、隨分熱烈なことを云つたものです。ところが、その以前に僕が商大の入學試驗に二度ほど落第した時分、それは實に冷淡な態度を見せました。その當時はいろ〳〵の男と文通してゐることが分つて隨分私は惱みました。もうお前のやうな女を信ずることは出來ないからどうでもしろ、と云つて一度は僕から突つ放したのですが、いよ〳〵となると、あれの方からどうしても思ひきれないと云つて泣きつくのが癖でした。それから今度私が大學に入學することになつて、あれの態度は全く一變しました。他の男と絶對に結婚しないと云ふ誓書まで自分から進んで僕に送つたりしたのです。そして僕を安心させて置いて、洒々と今度は貴男と結婚したのです……』

『どうでも云ふが好いわ……』と彼女は押入の裡で呟いた『あの人は自分の愚かさを自分で數へあげて話してる……』

『それは、飼猫までがずるくなつて來たと云ふ時代ですからねえ……』それは陽吉の聲であつた。

『僕等も友人同志で云つてるんです。そんな女はさつぱりと斷念してしまへと云つてゐるんです。女はいくらもあるんですからねえ――柴田君もう仕方ないからさつぱり思ひきつてしまへよ。それとも相良さんの云ふ通り三人で會見するかだねえ……』

『それより他に何とも致し方がありません。そのことはまだ靜子には相談してゐませんから、彼女の方で會見してもよいと云ふかどうか、會見するにしても互に罵言や暴力沙汰は絶對に控へて貰ねばなりません……』それは陽吉の聲であつた。

『三人で逢ふだけならば何でもないわ……』靜子はまた押入の裡で呟いた。此の調子なら双方の話しは平穩にすみさうだと彼女は安心した。あまり長つ尻をされては私がたまらない……と彼女は押入の裡でこぼした。彼女は二時間餘も小さくまるまつてゐたのでやりきれなくなつてゐた。膝節がはずれるやうに痛み出してゐた……。

九

彼女の父から長い手紙と共に小包郵便が來た。小包の品は栗だつた。

親愛なる二人よ。その後御身達には何等の異變もなきことゝ信じ居り候。斯く信ずることは決して御身達の上を唯樂觀するが故にあらず候。今回親戚一同は御身達の爲めに一方ならず盡力を致され、柴田に對しては數回書面を以て說得し、遂に事件は解決を見るに到りし故に候。柴田も今は一切を斷念したる旨を確答致し候上は最早何等の懸念を要せざるべしと存じ候。一時恐ろしき勢を以て襲來すべきを豫想せられたる低氣壓も途中方向を轉じて青空を見るを得たるは御身等と共に我等兩親の喜ぶ所に候。

尙ほ下戸塚の松田叔母さんは本件に非常なる盡力を致されたるに依り日曜などには二人同伴にて御挨拶に出向かれよ。同叔母さんは我々の知る範圍に於ては婦人ながら立志傳中の人とも云ふべき女丈夫にて其の生涯は實にそのまゝ立派なる教訓なりと我々はかねがね讃美致し居る次第に候。

裏山の栗、珍らしからず候へ共、少々お送り申し候。栗は『苦離』即ち苦を離れる意味にもならば幸なり。匆々

父より

親愛なる二人へ

此の書面に依ると柴田の方で遂に靜子に對する一切を承知したものであつた。然し陽吉はそれが大して悦ばしいことにも思へなかつた。唯これからはあの大學生がうるさくやつて來ないと云ふことで彼はほつとした。

表面上の解決はついたにしても靜子と此のまゝ同棲を續けて行くことは陽吉にはいろいろの點で不安心でもあり不滿足であつた。むしろ柴田の激烈な抗議の爲に此の結婚が破れて、彼女を兩親の方で引とつてくれた方が氣持はさつぱりしたであらうと彼は思ふのであつた。

『こんないやな結婚をしなくても自分はもつと時機を待つてゐればよかつた……とんでもない女にひつかゝつてしまつた……』と愚痴らしい思ひが時々彼の頭の中でいつぱいになつた。

義妹の登世子は、櫻木町の宿の主人が家事の都合で移轉することになつた爲、自分もよぎなく他に適當の貸間を見つけねばならぬことになり、或る日突然陽吉の家を訪ねて來た。

『栗原先生（國語先生のこと）と二人で二三日前から方々貸間を探し廻つたのですけれど、これはと思ふ貸間がないんですの。私ひとりなら知り合ひの家にも直ぐ置いて貰へるのだけれど、つて栗原先生はおつしやるから。私、三疊の部

屋でも好いと思つて探して見たんですけれど……』登世子は云ふのであつた。
『どうしても部屋が見つからないなら、此所へ來てはどうです。そのうちに適當な部屋が見つかつたら、その方へまた移るとして……』陽吉は氣輕に云つた。
『さうして頂ければほんとに好都合ですけれど……』
『狹いから窮屈でせうけれど、貴女さへよければ。』
『ありがたうございます。ではさうさせて頂きますわ。』
登世子は早速荷物を陽吉のところへ運び込んだ。陽吉には妻と妻の妹と同居することは始めての經驗であつた――然し此の僅の間の同居は陽吉にとつては一層の失敗で夫婦間の感情までその爲折々惡化を激成した。義妹は小姑らしい偏見で陽吉と云ふ人物を評價し、田舍娘らしい獨斷で陽吉の詩人生活を輕蔑した。
『義兄さんは毎日あんな風にしてゐて、どこからお金が入つて來るの姉さん……て登世ちやんは云ふのよ。東京へ來る時、お父さんからどのくらゐお金を貰つて來たの、とかそんなことばかり訊ねるんですの。』靜子は云ふ。
『まるで俺は入婿か何ぞのやうな立場に置かれてしまつたよ……』
『ですから……』と靜子はその言葉にこたへたやうに間を置いて『だから云つたんですわ私、登世ちやんは並の人ぢやないから此處へ同居させるのは考へものですと私は云つたでせう。でもあなたが構はないとおつしやるんですもの…』
『俺もあんなぢやないと思つた。可愛い田舍娘と思つたんだ。』
登世子は食事についても好惡が人以上であつた。肉類には一切箸をつけない女であつた。肉類の好まないのは味覺からでなく聯想からであると云ふのだ。彼女は街の商店の飾窓に等身大の美しい女の人形を見ては叫ぶやうに云ふ『何て

いやらしい、あゝ私、あんな人形を見ると胸が悪くなつてしまふ……』

彼女は女學校の卒業式の時、校長の推選で、優等生を代表して袂別の辭を述べた『――學校は私にとつては、それほどありがたいところではありませんでした。私は多くの知識を學校で得たと思ふことは出來ません。ですから私は先生の御恩と云ふことをそれほど感じません……』――此袂別の辭は式場に居列ぶ教師及びその他の人々をびつくりさせ、校長の顔色を變へた。彼女の母親はその場にゐたまらないほど恐縮した。校長は此のやうな卒業生を出したことは校の名譽問題であり、教育上の重大問題であるとて退校處分をとると云つた……彼女の父親は娘の失言を謝罪の爲、高官や校長を再三訪問してやつと無事にすませたとのことである。

『登世ちやんは屹度あなたから好いて貰へる、可愛がつて貰らへると思つて此所へは喜んで移つて來たのよ。わたし分るわ。』

『俺だつて自分の妹のやうにめんどうを見てやりたいと思つたさ。然し俺と云ふ男もその柄でもないくせにあの人に來て貰つたのが惡かつた。』

『私、あなたに云ふまいかと思つたけれど……』と靜子はためらつて『國の母に長い〳〵手紙を登世ちやんは書いてゐますのよ。まだ出さないで机のひき出しに入れてあつたのを私ちよつと見ましたの。』

靜子は陽吉の前では妹の惡口を云ひ、陽吉から何かすげないことを云はれると直ぐに妹と結びつくのだ。

『登世ちやんはすべての上で姉の私よりもすぐれてやらうと思つてゐた人なんですの。女學校を卒業してから東京の美術學校に入學した時などは、それは隨分私に對して優越感を見せつけましたわ。姉妹中で自分一人がえらくなつて、みんなを征服してやらうと云ふ意氣こみがよく私には分るのでした。いくら姉さんが幸福な結婚をしたつて、會社員か醫

屋でも好いと思つて探して見たんですけれど……』登世子は云ふのであつた。

『どうしても部屋が見つからないなら、此所へ來てはどうです。そのうちに適當な部屋が見つかつたら、その方へまた移るとして……』陽吉は氣輕に云つた。

『さうして頂ければほんとに好都合ですけれど……』

『狹いから窮屈でせうけれど、貴女さへよければ。』

『ありがたうございます。ではさうさせて頂きますわ。』

登世子は早速荷物を陽吉のところへ運び込んだ。陽吉には妻と妻の妹と同居することは始めての經驗であつた——然し此の僅の間の同居は陽吉にとつては一層の失敗で夫婦間の感情までその爲折々惡化を激成した。義妹は小姑らしい偏見で陽吉と云ふ人物を評價し、田舍娘らしい獨斷で陽吉の詩人生活を輕蔑した。

『義兄さんは毎日あんな風にしてゐて、どこからお金が入つて來るの姉さん……て登世ちやんは云ふのよ。東京へ來る時、お父さんからどのくらゐお金を貰つて來たの、とかそんなことばかり訊ねるんですの。』靜子は云ふ。

『まるで俺は入婿か何ぞのやうな立場に置かれてしまつたよ……』

『ですから……』と靜子はその言葉にこたへたやうに間を置いて『だから云つたんですわ私、登世ちやんは並の人ぢやないから此處へ同居させるのは考へものですと私は云つたでせう。でもあなたが構はないとおつしやるんですもの……』

『俺もあんなちやないと思つた。可愛い田舍娘と思つたんだ。』

登世子は食事についても好惡が人以上であつた。肉類には一切箸をつけない女であつた。肉類の好まないのは味覺からでなく聯想からであると云ふのだ。彼女は街の商店の飾窓に等身大の美しい女の人形を見ては叫ぶやうに云ふ『何て

いやらしい、あゝ私、あんな人形を見ると胸が惡くなつてしまふ……』

彼女は女學校の卒業式の時、校長の推選で、優等生を代表して袂別の辭を述べた『――學校は私にとつては、それほどありがたいところではありませんでした。私は多くの知識を學校で得たと思ふことは出來ません。ですから私は先生の御恩と云ふことをそれほど感じません……』――此袂別の辭は式場に居列ぶ教師及びその他の人々をびつくりさせ、校長の顏色を奪つた。彼女の母親はその場にゐたまらないほど恐縮した。校長は此のやうな卒業生を出したことは校の名譽問題であり、教育上の重大問題であるとて退校處分をとると云つた……彼女の父親は娘の失言を謝罪の爲、高官や校長を再三訪問してやつと無事にすませたとのことである。

『登世ちやんは屹度あなたから好いて貰へる、可愛がつて貰らへると思つて此所へは喜んで移つて來たのよ。わたし分るわ。』

『俺だつて自分の妹のやうにめんどうを見てやりたいと思つたさ。然し俺と云ふ男もその柄でもないくせにあの人に來て貰つたのが惡かつた。』

『私、あなたに云ふまいかと思つたけれど……』と靜子はためらつて『國の母に長い〳〵手紙を登世ちやんは書いてゐますのよ。まだ出さないで机のひき出しに入れてあつたのを私ちよつと見ましたの。』

靜子は陽吉の前では妹の惡口を云ひ、陽吉から何かすげないことを云はれると直ぐに妹と結びつくのだ。

『登世ちやんはすべての上で姉の私よりもすぐれてやらうと思つてゐた人なんですの。女學校を卒業してから東京の美術學校に入學した時などは、それは隨分私に對して優越感を見せつけましたわ。姉妹中で自分一人がえらくなつて、みんなを征服してやらうと云ふ意氣こみがよく私には分るのでした。いくら姉さんが幸福な結婚をしたつて、會社員か醫

者以上の良人は持つことは出來ないと高をくゝつてゐたんですのよ。だから、私があなたとかうなつたのを口惜しがつてゐるんですのよ屹度、あの人の一番あこがれてゐた方面のあなたと私が結婚したもんですから……』そして彼女はなほつけ足して云ふのであつた『だから、あなたとの結婚に失敗でもしてごらんなさい、柴田からばかりでなしに、妹からまで私は嘲笑されますわ……』

『それはお前が俺に云ふ言葉だ。登世ちやんは今ぢや俺を心で侮蔑してゐるよ。神經質で、狹量で、愚痴つぽくつて、詩人としての天分も疑はしい小人物ぐらゐに思つてゐるさ。自分の姉の婿としてあきたらなく思つてゐるよ。姉ほどの美くしさと若さとで……姉は村中での美人と云はれてゐたのに、つまらない人と結婚したものだ、と思つてるよ。もつとよい人と結婚が出來たのにと思つてるよ。あの人にとつてお前は自慢の姉らしいよ。俺にはどうも時々さう見えることがある――いつたい、姉が結婚すると妹と云ふやつは妙にひねくれた氣持になるらしいよ。これまで全部が姉であつたのが半ば以上は最早姉ではなく、人妻だと云ふことで、なつかしい姉を奪はれたやうな氣がするんだね。だから、よつぽど甘やかしてゞもくれなきや姉の亭主なんてものに好感が持てないのさ。さう云ふ妹の心理は既に一般的なものさ……』

『妹はあなたに決して不滿なんぞを感じてゐるものですか。それどころぢやありませんわ……矢張性的な意味でやけるんですわ。柴田との場合にだつて隨分さうでしたの……』

『うむ、柴田もさう云つてたよ。妹まで僕にラブしてをつて、姉妹で反目し合つてばかりゐたと云つてたよ。』

『あら、それはあの人の已惚ですのよ。あの人は誰からでも自分はラブされてゐると信じてしまふ人なんですの……』

と彼女は打ち消した『何にしても早く登世ちやんには出て行つて貰ひませうよ――私昨夜も云つたんですの――登世ち

やん、どこかに好い貸間を見つけて早く移つたがよくはない。義兄さんだつて狹いんだからさうして貰ひたいのかも知れないのよ、つて云つたんですの、すると――そんならさうと最初から云つて貰へば私來やしなかつたわ姉さん、義兄さんが來いと云つたから來たんぢやないの、つてふくれるのよ……』

十

登世子は姉夫婦の家にそれから數日ゐて、本郷の方へ貸間を見つけて移つて行つた。彼女は姉夫婦について郷里の兩親宛にかう手紙を書き送つた。『おなつかしき御兩親樣、私はおかげさまで達者で勉强してをります。此の一ケ月の間によぎなく宿所を轉々いたしました。櫻木町のお宿の主人が洋行されますについて、轉宿することになりまして、大へんまごつきました。遂に姉上のお家に一時御厄介になり、更にやつと表記のところに借間することが出來まして、落ちついて勉强することが出來るやうになりましたから、御安心下さいませ。少し暗いお部屋ではありますが、庭には昨今山茶花が美くしく咲き匂ふやうになりました。今年もいよ〳〵暮れに近づいて、私の方の學校も昨日からお休みになりました。故郷の冬はどんなにわびしいことでございませう。私には家にゐた頃のお正月がいとゞなつかしくしのばれます。

私は此の靜かな落ちついた冬休みを得ましたので、御兩親樣に對して、私の今日まで觀察いたしました姉上御夫婦の日常について、そして私の考へさせられたことを御報告いたさねばならぬ任務を感じる次第でございます。

私の觀察いたしました今日までの姉上御夫婦の御生活について、私の申し上げることを都に一應お考へ下さいませ。そして御兩親樣の御意見のあるところをどうぞ私にまで御返事下さいませ。

先づ何よりもさきだつて申し上げますことは、義兄樣の不在の時、姉上と親しくお話ししたそのことでございます。

姉上の申されますには、何時御兩親のもとに自から身を退くことになるか、まことに心もとなき事情に一日〱迫られつゝある。とのことでございます。私はそのやうな姉上の心狀に對してつく〲涙ぐましく存じます。私は一日も早く姉上をかゝる窮境から脫却させて上げたく思ひます。義兄様が姉上をお疑ひになるのは一應御尤もだと私も思ひます。然し姉上は相良様の信頼を得たい爲めに全心を以て忠實に妻たる任務をつくされてゐることを私は認めてをります。それにもかゝはらず、姉上の今日までの行爲に嚴肅を欠くものがあるとて相良様の從弟なる人過日上京せられて、姉上御夫婦に離婚を慫慂されたるばかりでなく姉上に向つて自から身を退くの至當なることを强硬に直言されたとのことでございます。御兩親様は姉上に對して飽くまでも忍耐と誠實とを以て良人につくせよとしば〱御書面でおつしやるさうですが、それは姉上の現在の様子を御存じなきによるものと私は存じます。姉上はいつも御兩親に對しては事實の報告をなるべくさけて、御兩親の御安心遊ばすやうにのみ書き送られるやうでございます。然し私は妹として此のまま無關心でをるわけにはまゐりません。私には、姉上の結婚は此のさき到底幸福に行かないものとはつきり見通しがつくやうな氣がいたしてをります。私として一日も早く姉上が義兄様と離別されることを希望せずにをられません。此の上姉上に忍耐を求めることは姉上に死を求めると同一ではございますまいか。姉上は今は御兩親の手前をのみ氣にして一日〱と最後の日を延ばしてをられます。御兩親から、またも我がまゝが出たとお叱りを受けることを恐れてかくも憂き日を過ごされてゐる姉上を私は心からいた〱しく思はずにをれませぬ。姉上は若し決心を堅めて相良様と別れることになつても國元へは歸らずに東京に止つて私と共に同居しながら何か職業を求めて當分自活すると云つてをられます。けれども私は姉上の爲めにそれには同意出來かねます。離婚と同時に歸國の途につかれて御兩親のもとで、つゝましく日を送らるゝやうにと私はおすゝめ致さねばなりません。東京にそのまゝ止まられては姉上のやうなお方は此のた

いかなる間違を招かれるやも知れないと云ふ不安が私にはございます。私から申しますと姉上は相良様と離婚なされてもそれほど悲観なさることはないと思はれます。まだ姉上は年明けてやつと二十一でございますもの、もう二三年の間、静かにつゝましく御兩親のもとで日を過ごされてゐるうちには、屹度より以上の良縁があり得ると私は信じます。私の此の御報告を何卒々々よくお酌みとり下さいまして御意見をお聞かせ下さいませ。ほんとにかゝる御報告をしなければならぬのは悲しいことでございます。然し今はいたし方ございません。では御兩親さま、これにてペンを措きます。』

すると母からは長い〳〵返事が來た。それには、あまりお前の觀察がこまちやくれてゐます。妹の分際でそんなことを兩親に報告するのは出しやばり過ぎるとお父樣はひどくお腹立ちであるから以後は妹らしく謹しまれよ。いかなる幸福な結婚にも苦痛は伴ふものです。お前はむしろ姉上を勵ましてあげるがよい。姉はお前も知る通り耻づべき過去を持つて相良殿と結婚したのです。私共兩親は相良殿に同情をし甚だ氣の毒にも思つてをります。姉に苦勞があることは親としても充分察してゐます。然し苦みの後には必らず光明が來ます。女は一度結婚した上は死す共忍耐すべきでありまず……云々と書き述べてあつた。

『登世ちやんは何かお父さん達に私のことを云つてやつたのぢやない？……』靜子は妹の宿を訪ねた時訊いた。

『やつたわ。姉さんが私に話した通りに云つてやつたわ。そしてお母さんからさん〳〵お手紙で小言を聞いたの。つまらない、ほんとに私……私姉さんの爲めにいつもつまらない役目を勤めさせられて、馬鹿々々しいと思ふわ……』登世子は頰をふくらして云ふのであつた。

十一

下戸塚の松田叔母さんと云ふのが或る日登世子につれられて陽吉夫婦を訪ねて來た。陽吉はもとより初對面であつた。三十代に良人を失つてから、六十五の今日まで後家で押し通し、手內職や素人下宿屋をしながら二人の息子を養育し、二人共學士にまで仕上げたと云ふしつかり者の老女である。

『もつと早くお訪ねする筈でござんしたが、私も年よりのことで、からだが思ふやうに動きませんでな、ついのび〳〵になつてしまひました。靜さんの兩親から是非一度行つてやつてくれと、いつも手紙で云つて來るもんですから、今日はお天氣も好いので思ひ立つて來ました――今度はいろ〳〵貴男も靜さんについては御心配ぢやつたと云ふことで、私共も案じてをりました。何もかも最初から事情を承知で貰つて下さつたとは云ひながら、さぞあなたも御迷惑でござんしたらう。親達もそのことには大へん感謝してをるやうでござんす。柴田もそのうちに學校でも卒業して嫁でも貰ひましたらすべてを忘れてしまふでせう。靜さんもまだ年が若いですから、何かと行きとどきますまいが、そこはあなたも大目に見てやつて下さいよ。追ひ〳〵氣がつくやうにもなりませうから……』

陽吉もその場にふさはしい言葉で答へた。『お遠いところをわざ〳〵來て下さつて……私共の方から實はお伺ひしなければならぬと申してゐたのでした。が柴田君がお宅へちよい〳〵これまで行つてゐたと聞いたもんですから、ひよつとまた落ち合ふやうなことがあつてはまづいと思つて控へてをつたわけでした。』

『以前はよく來ましたが、もう此の節はあの人も來ませんよ。』

靜子は叔母さんにどんなもてなしをしたらよからうと、陽吉を次の部屋に呼んだ。

『叔母さんにこんなお土産を頂いたんですの……』静子は熨斗のついた箱を陽吉に見せた。

『あの、もうなんにも構つて下さるな。ほんとに、直ぐおいとましなければなりませんから……なんなら、おそばでも一杯御馳走になつて行きませう。おそばを一つとお酒をおちよこで一杯ほどよんで貰へば私は何よりですよ。おそば屋が遠いならのう靜さん、それ、私が持つて來た土産を一つ開けなさい。その方が簡單で好いですよ。私はお話しが大の好物ですから、よそさまへ行つてもお話しさへして貰へば好いんですよ……』老婆は云つた。家が住み勝手よく、小ぢんまりと出來てゐて好い、など、老婆は云つたりした――いろ／＼話してゐるうちに老婆の實家と陽吉の母の實家とは昔二丁とは隔つてゐなかつたことが分つたのである。

『さう／＼、あの妙念寺の筋向へに吉田さんて云ふ家が昔はありましたよ。裏手に蓮堀があつたやうでした――あの吉田さんがあんたのお母さんの里でござんしたか、私の娘時分は毎日妙念寺の前を通つて三味線のお稽古に通うたものでした。あんたのお母さんなら私くらゐの年配でしたらうから、時々はお逢ひしよつたかも知れません。でも隨分古いことで……さうすると唐人町にはあんたのお父さんのお家があつたのですね。』

『さうです。父の家は唐人町にありましたが、今はもう何もありませんが……。』

『唐人町に飯盛と云ふ家がありましたのを御存じでせうな。あの筋向ふに紺屋がありましたでせう、あの紺屋の娘さんと私は三味線のお稽古友達でござんしてな……』

『私の父の家はあの紺屋の南隣でした。丁度青物市場の前でしたが、小さな商家でした……』

老婆はそれから、郵船會社の支店員になつてシヤトルへ行つてゐる次男の話や、來春早々佛蘭西へ行くことに定まつてゐる長男の大學教授の話やをした。

『天文學などゝ云ふ方をやつとりますから一向世間のことは知りませんよ。二三日前も同僚との宴會に行つて、歸りに金入を落したと云ふわけですよ。同僚と別れて一人になつてから氣づいたもんだからさあ歸りの電車賃もないと云ふわけですよ。回數券も金入の中に入れとつたもんですからね、それで、家まで歸りさへすれば現に用金はあると思つて俥やに下戸塚までいくらで行くかと訊ねたところ夜分だから五圓ぐらゐでないと行きませんと云ふさうです。五圓もとられるくらゐなら歩いた方がましだと云ふ氣になつて、のこ〳〵銀座から歩いて、夜の二時頃家へ歸つて來ましてね、家ではいろ〳〵心配しましてね、ひよつと電車か自働車にでも醉つぱらつて轢れたのぢやなからうかと云つて嫁と二人で起きて待つとつたら、歸つて來ました。そしてこれ〳〵だと云ふもんですから嫁が服のポケットをみんな念入りに探してやつたところが外套の内ポケットに金入はあると云ふわけです、二十圓ばかり入つてゐたんですが、俥賃を五圓儲けたので二十五圓だけ儲けたから明日はお母さん、あなたをつれて帝劇へ行きますと云ふわけです。そんならまあ、つれて行つておくれと、私もお前が佛蘭西へ行つてしまへば國へ引つ込んで當分は東京の芝居も見られんから、と云つて嫁も一緒に行きました。』老婆の息子自慢はさうした話しにもちやんと織りこまれてゐた。

靜子は叔母の云ふまゝに貰つた松茸の罐詰と、そばの盛りなどを座敷へ持ち出した。

『靜さん、これはお醬油かソースかをつけて喰べなければ味がついてゐませんよ。ソースがよからう……』

登世子は最初からだまつてゐた。

『今日は登世ちやんのお宿にもちよつと寄つて來ました。矢張田舍から來たばかりの女學生だと云ふと宿の人達からあなどられる氣味もありはせんかと思ひましてな、叔母だと云つて一度でも私が顏出しして置く方がよからうと思つたんですよ。』

靜子は叔母さんにお酌した。

『あんたはお酒はどれくらゐあがりますか。』と老婆は陽吉へ向いて『あれが一月には横濱を出帆しますから、それまでに一度是非お二人で來て下さいよ。ほんとに、今日はあらかじめお約束しときませう。私の方は年内の方が好いですが……』

『是非お立ちになる前に伺ひます。年内にお伺ひしたいと思ひます。』

『あれも一度お顏出しせねばならぬと云つとりますが、洋行前のことでいろ〳〵用が多うございまして、失禮してをります。』

電燈がともると老婆は歸り支度をした。

『何分どうか、いたらぬところは、あんたの思ふやうに云うて聞かせて末永くつれてやつて下さいよ。時にや頰ぺたぐらゐは叩いてくだすつてもよござんすとも。そのくらゐにされても一生つれて貰へれば靜さんの爲には好いんですからら……それでもまた、此のさきへんな間違があるとか、これまでの靜さんの行ひについてどうも一生つれる氣持がしないとか、あなたがいろ〳〵迷はねばならぬやうでしたら、それはもう致し方はございません。親達もさうと知れば、根がさつぱりした人ですから、引きとりもするでせう……』老婆は立ち際に云つた。

十二

『三十日出の御書面遲着、漸く今日拜見、相變らず元氣にお暮しの由當方一同悅び居り候。光陰矢の如し、御身が上京されてから早三ヶ月は過ぎ、當村には初雪を見るの季節とは相成候。山村の冬は御身の知らるゝ如く一入わびしく、殊

に御身が上京されたる爲、此の冬は更にその感深きを覺え候。御身は華やかなる都會にありて今や一家の主婦たるの榮光に救はれたれば我等兩親弟妹をこそ慰藉するの位置にあるものに候。御身の手紙は常に皆々待ち居り候。卓二の成績は少しく下り十六番より三十二番に落ちしが百八十人の生徒の總數より見れば最劣の部とも云ふを得ず候。美智子の成績は相變らず申し分無之、此度も首席を維持し得たり。

新たに御身に報告すべき事は、永らく御身の世話を致しくれし女中のお千代どのも今月限り當家を去ることになりし事、そのあとには虎さんの長女が來てくれることになり、四五日前より見習として働き居る事に候。お千代どのは十年の永きが間我等家族の世話をしてくれし忠實なる女中にて、彼女に去らるることは殘念なれども致し方無之候。

年暮るるにあたりて再びあらためて御身に御願ひ致し置きたき事は、ますます良人に對して忠實と熱誠とをつくされ、良人が何等餘念なくその詩作に熱中し得らるるやう萬事に心をくばりて遺漏なきを期する事に候。御身のこれまでの事柄について良人の疑雲深ければ尙ほのこと、神の如き崇高なる精神を以て仕へらるるこそ道にて候。之に反して若しそれ御身が嫁かれたる爲に良人の詩作生活を亂し、或は良人の疑雲を深めるが如きことありとすれば容易ならぬ事に候。御身が、不遇なる一詩人の生涯を獻身的にいたはり且つその事業を完成せしむることに微力を盡したいとの最初の決心と父母に對する誓願とを破る所以に候へばなり。若し然る場合は御身の自滅を意味するは勿論にて候。それと共に我等兩親が最初に憂ひたる事を眞に事實とならしめたる意味に於て兩親として陽吉氏に對し面目なき次第なり。此の點堅く信念を以て自重ありたきものに候。更に申し聞かせたき事は交友間の文通に候。知友相互間の往來通信は人類の欠くべからざる事にて、共に笑ひ、共に憂ひ、共に勵まし合ふことにこそ、人類の美質は發揮さるるものなり。處女會の人々にも時々音信さるるやうくれぐれも申上げ候――云々」

父より

靜子どの

彼女は翌日長い〳〵返事を父に送つた。

『父上の御書面、身に沁みてありがたく存じました。仰せの通り東京へまゐつてから早三ケ月は經ちました。御兩親様を始め卓ちやん美智ちやん皆々お障りもなきは何より悅ばしく存じ上げます。私事も至極健康で暮してをりますからどうぞ御安心下さいませ。こちらへまゐつてからは夜もよく眠れますし、食慾も大へん進むやうになりました。父上から澤山頂きましたカルモチンも重曹も全く用ひずにすむかと存じます。私は只今のところいと健康にそして幸福に暮してをります。主人は神經質ではありますが善良で正直で親切な人でございます。彼は几帳面できれい好きですから朝ごとの掃除は自分で致します。彼が座敷や玄關の掃除をし家の周圍を掃き清め、植木に水をやつてしまふ頃私は炊事を終つて二人は食事に向ふのでございます。食事がすむと彼は机に向ひます。私はお洗濯やお裁縫にとりかゝるのでございます。お天氣の至極よい日には二人で郊外散歩をいたします。主人は何事も共に樂しむと云ふ方の人でございます。寄席やお芝居にも數回つれて行つて頂きました。父上御安心遊ばせ。私は今、私の主人につくす事以外に何事をも考へません。御兩親様の面目にかかはるやうなことを私は夢にも考へるやうなことがどうして許されませう。その事はいつまでもお誓ひすることが出來ます。どうぞ私をお信じ下さいませ。私は今私の忍耐と誠實とによつて救はれねばならぬことを深く自覺致してをります。

東京の街はもう松飾りが出來ました。昨夜は主人につれられて銀座から日本橋の方へと歩いて歳暮の東京氣分を始めて知ることが出來ました。例年に比べて今年の歳暮は景氣がないと申しますけれど田舍者の私には少しもさうは思はれませんでした。街を歩いてゐる若いハイカラな男女の人々は、歩いてゐると申すよりも踊つてゐると申したいほどでご

さいます。東京人の生活はダンスのやうに私には見えます。それにつけても田舍にわびしく冬季を過ごされ給ふ御兩親樣の御生活が私にはそぞろしのばれて涙ぐましくなるのでございます。何卒々々父上並に母上おすこやかに……』

彼女は兩親に送る手紙はいつでもそのやうに書いた。文章は巧い方であつた。果して樂しく幸福に暮してゐるのか……彼女は親元へやる手紙を書いた時は封筒に納める前に必ず陽吉に見せるのであつた。尤も二人の生活は幸福の摸倣であつた。一緒に寄席へも行き、天氣のよい日は街へ一緒に出て晩餐をもし、表面のすべては幸福な形式にかなつてゐたやうだ。陽吉は彼女を虐使したり、いつもいやな小言をあびせたりはしなかつたが、決して彼女が兩親へ書き送る手紙のやうには平和でなかつたのである。彼女もそれを知つてゐることだ。或る夜は陽吉の從弟にあたる私立大學生が來て彼女を大に詰問したこともあつた。

『僕は貴女にとつてはあまり悅ばしい客ではありません。』と從弟は前置きして彼女に對し『貴女が相良と結婚する氣になられたその動機について私は一應聞いて置きたいのです。僕は貴女の前情人の柴田君をよく知つてゐます。僕はつい此の間柴田君と久しぶりに逢つて初めて此のことを知つたのです。すべてを柴田君から話して貰ひました――僕は短刀直入に云ひますが、どうか相良と別れて下さい。柴田君から聞いたことが全部事實だとすれば貴女は相良を不幸にする爲に相良とかうして結婚されたと思はれるのです。僕は相良の從弟として相良の將來を案じねばなりません。相良は一度結婚に失敗して、いた手を受けた不幸な男です。今度貴女との結婚について僕等親戚の者に相良が一度も相談してもくれなかつたのは非常に相良に對して不滿です。一應事前に僕等が知つたならば飽くまで僕等は反對したに相違ありません。貴女と相良は二十以上も年が異ひます。貴女は何を選んで二十も上の相良に求婚されたのです。僕はそれを正しい意味で解決することが出來ません。相良はこれからどん〳〵老けて行くばかりです。貴女はこれからこそ女ざかりで

す。どうして行く／＼悲劇が起こらずにすみませう——貴女は最愛の柴田君をさへ誓ひを破つて棄てたぢやありませんか。そして相良に結婚を求めてから後も柴田君との關係を續けてゐられたとのことです……』

然し彼女もまけてはゐなかつた。

『貴男がどうあつても別れろとおつしやるなら國元の父に一應相談した上でのことに私はいたします。それは私のいけない點は自分でもよく承知してをります。然し今後のことについてはどんな御誓ひでも私には出來ます。私にだつて父母もあり弟妹もありますから、此の上自分の不名譽なことは出來ません。私は現在眞實相良を愛してをります。柴田のことなどは少しも考へてはゐません。私の方はどこまでも相良を眞の良人として愛しそして服從して行く決心でをります。さきで背いたりするやうなことは到底私には出來ません。そのことなら立派に證文を認めて貴男に差し上げてもよいと思ひます……』

彼女はどこまでも抗辯した。そんなに云はれても涙一滴落しては見せなかつた。唯頰や額が赤味を帶びた。そして涙の代りに鼻の上が汗ばんでゐた……。

二十の女にしては感心な女だと陽吉を思はせるほど家事については爲すだけのことはした。然しその彼女の忠實さが或る時はまた一種の伏線のやうにも陽吉に思はれるのだ。彼女の黑い睫毛に掩はれた目は時々底知れぬ獺の淵のやうに測りがたく陽吉には思はれた。彼女が夜中にそつと陽吉の寢息を窺ふやうにして、そしてくるりとあちら向きになつて陽吉の身體から自分の身體を遠ざけることがしば／＼あるのを陽吉は知つてゐた。彼女が絶對に嘘をつかぬ女でないことをも同棲以來の二三の事實で彼は知り得た。

『彼女は自分と會見する前日でさへも村はづれまで柴田を追ひかけて行つて、藪陰で柴田の胸に顏を投げかけてさめざ

めと泣いたと云ふではないか……』と陽吉は思ふ……云ふまでもなく彼女を信じ得ないと云ふことは彼にとつて一番苦痛であつた。陽吉はいつそ彼女を親元へ送りとゞけてしまひたいと思ふのであつた。

十三

五ケ月は過ぎた——。

或る日陽吉は、彼女が妹の宿へ行つた留守の間に鏡臺のひき出しを開けて小さなノートを見つけた。手にとつて頁をくつて見たが、極く薄つぺらなノートで、女學校時代に何かの本から拔き書きしたやうなもので滿たされてゐた。家庭衞生、などについてのことが書いてある。ちよつとした料理法の記事を新聞から切りとつて貼りつけてある頁もあつた。然し彼は何の氣なしにあらためて最初の頁から一枚宛くり直して見た。すると次のやう文字を發見したのだ。

『Sとの結婚後は卓ちやんを引とつて東京の中學で勉强させることも出來るであらうに、それにもかゝはらず頑固な父上は尠しも私の心を諒解しては下さらぬのだもの。そして私は今宵も父上を怒らせてしまつたのだもの。おう呪はれたる戀よ。』

これは一二年前のことらしいのであつた。女學校卒業後間もない時分の或る夜のことを書いたものと陽吉は想像した——他にまだ何かとのやうなことが書いてはないかと入念に彼は最後まで頁をくつて見たが、彼女自身に關することは唯その一文だけであつた。

Sとは柴田の略に違ひないと思つた。柴田と結婚し、そして東京へ弟を引きとつて中學校へやる……此の數行の文字にもいかに柴田と彼女との戀が根深いものであり、父がそれをいかに頑固に許さなかつたかが想像される。本と一緒に

國を立つ時トランクの底へでも入れて來たのであらう。そして彼女は久しぶりにトランクの底から取り出して、そのまゝうつかり鏡臺のひき出しにしまつたものであらうと陽吉は思つた。

陽吉はかうしたものを發見してもそれほど意外にも今は感じなかつた。かねてから豫想してゐたことの一部分をたしかめ得たと云ふ或るさびしい滿足と不快とを一緒に覺えた。これは既に彼女の過去のことだ……と彼は思つた。彼は彼女の過去のことよりも自分との同棲後に於ける彼女の眞實の記錄はないであらうかと思つて見た。何かさうしたものを發見し得て一擧に彼女の腹裡をたしかめることが出來たら、と思つた。そしたら自分のとるべき最後の所置もはつきり決定するのだと思つた。探して見るのはこんな時だ……と彼はそれから小簞笥の袋戸棚や、彼女の本が入れてある小さな支那カバンを點檢し始めた。諸事控帳、と表紙に書いてある小さなノートをやつと一冊見つけた。

『これだ！……』陽吉はうなづいた。その中程の頁にかう書いてある。

『良人は云ふ。女が未亡人で一生涯を貫すなどは僕には贊成出來ないと、いかゞはしい風評を作るよりも、明らかに再婚するがよしと……云々』次にまた、

『此のたびの私の結婚は狹い村中の噂になつてゐるとのこと、妹のもとへ來たB子さんからの手紙にさう書いてあつたとのこと、それはさうかも知れぬ。一風變つた結婚であつたから村人を刺激したのだ——初めて會つた時の陽吉はどんなに立派な紳士として私に見えたか、村人には無論のこと、彼は河べりの旅館のはなれに宿をとつてゐた。私は朝夕人目をも意とせず彼を訪れた。二人は山峽を走る谷川に沿ふて都會人風の散歩をし、そして劇的な會話でその散歩をみたした。彼は數日してその旅館を引きあげて私の家の客となつた。そして最早その夜から私の兩親は彼にとつても親だつた。然し一方Sに對しては私は淚なしには考へることがどうして出來よう……。

變りもの〻父は結婚披露會に金を費やす代りにと村の處女會へ若干の寄附金をしたのであつた。そして型ばかりの披露會の意味で村の女達や處女會の人々を招いて茶菓を供した。その席での父の諧謔交りの挨拶は一座を笑せた。父は私と相良との戀愛經過を報告した。そして云つた――今日は皆さんをお招きしましたが酒の用意はしませんでした。何の御馳走もありません。これではまるで人を茶菓してゐると云ふことになります。茶や菓子で皆さんをお招きするほどなら、いつそお招きせぬ方がよいと家內は云ひましたが、それではあんまり無茶になると考へましたので……と。

村では仲人無しの結婚、お父さんが仲人役であつた……と云ふのが大評判らしい。

私達はそれから五日目の十三日に乘合自働車で村を出發した。處女會の人々のお見送りを受けた。私達は極めて破天荒な自由結婚の記錄を殘して去つたのだもの。そして神秘なる不幸に强いて幸福の裝ひをして……。』

その次にはかう書いてある――。

『彼は云ふ。お前を信じようとしても僕には不可能であると。無理もなし……。彼は男らしい寬濶さを持つことは出來ないのか。無理もなし……彼は積極的になれないのか。私がSを全然忘れ得るやうにまで彼は私を愛する雅量はないか……私に對する彼は徹頭徹尾消極的である。また無理もなし……』

更に次のやうなことが書いてある――。

『さすがに思ひきつて自から退くの外はないと今日もまた思ふ。いよ〳〵さうなつて兩親のもとへ歸つて行く自分の憐れな姿を描いても見る。村の入口の床屋の前で乘合自働車から一人ぽつんと降りて家の玄關へ行き着いた時の自分の姿をさまざ〳〵と私は描いて見る。父母や弟妹達の心持を一人寃想像する。母は藥局の內から白いエプロンを掛けたまゝ飛び出して來て、しよんぼりと歸つて來た私を悲しく迎へるであらう。幼ない弟妹達にしても子供心に悦ばしくない私の歸

國を直感するであらう……。父は多くを云はぬであらう。そして私には暗い悔恨の日が續くであらう。いや〳〵どうして私は國元へなど歸れよう……。けれども妹は云ふのである。別れてしまつたら姉さんは一應國元へ歸るがよいと、そのまゝ東京にゐてはまた間違ひをひき起こす恐れがあるからと。妹さへも私を信じないのだもの――。』

更に陽吉は次の一文を見て尠からずうんざりした。

『私はSのやさしさをしみ〴〵今は思ふ。一本のバナナを分け合つて喰べたりしたあの當時の二人の下宿ずまひを思ふ。彼は善良で小心で、すべて私の我がまゝを許した。彼は美青年であつた。彼はやがて大學を卒業して新學士として社會へ送り出されるであらう。そして彼が若い美くしい妻を迎へる時、私はそれに無關心でゐられるであらうか……私はもう彼のものであり得ないのであらうか。このまゝでくすぶつてしまふことを私は怖れる。詩人の妻たること所詮かたし。別れるならば姉さん今のうちですと妹は云ふ……。』

陽吉はそこまで讀むとその手帖を放り投げた。

『分つた……これが本音だ……よろしい……』

十四

『では今度までは俺がわびる……俺が云ひ過ぎだつた……俺がわびる……。』

『いえ、もうこれだけ貴男から侮辱されれば私澤山です……』

『ではどうしても出て行くと云ふのだね……』

『これでおいとまいたします。』

『ではよろしい。それだけそつちの決心がつけば俺の心もきまりがつく……』

彼女はどしや降りの朝雨をついて身一つで出て行つてしまつた。無論ひとまづ妹の宿へであらう——。

陽吉は雨にとざされた薄暗い家にひとりぽつねんと殘された。かう云ふ終りが自分を待ち受けてゐたのだ……と彼は呟やいた。

『俺に反省する必要があるものか……』彼は壁に向つて云つた。然し思つたよりも大きな暗い悲しみが寂寥と共に胸に押し寄せた。何でもなく、いつでも別れることが出來ると思つた昨日までの心を以て自分を眺めると、あまりにも意氣地のない自分に驚くのであつた。

『此所で弱味を見せてなるものか……かうなることが自分にとつては好いのだ……』

彼は強い心にならうとした。頭を撫でたり、ちよつと口笛を吹いて見たり、立ちあがつて徒手體操のやうに兩手を動かしたり、机の前に行つて讀みさしの本に向つたりいろ〳〵して見た。然し本の文字は現在の實感とはあまりにかけ隔つてゐるので十分と讀みつゞけることが出來ない。それをしも無理やりに讀んで見る……。

『ほんとに決心して出て行つたのであらうか……今更柴田に戻るわけにも行くまい……然し行くかもしれない……』と彼はいつしか本から離れてそんなことを思つてゐた『信ずるとか信じないとか云つたところで仕方がないところなんだ……一人でゐるよりは、身邊のことをしてくれる女があると云ふだけで俺は滿足してゐられなかつたらうか……』と考へた。

『ひよつとすると歸つて來るかも知れぬ……』と彼は思つて、一縷の望みをそこに置いた。

日はとう〳〵暮れた。彼女は歸つて來さうもない。電燈はどうしてかまだ點かないので、家の中はもうまつ暗であつ

た。雨は小降りになつてゐた。

玄關に足音が止まつた……。

『御免下さい。登世子でございます。』

妹だ……。

『登世ちやん、おあがんなさい。』

『姉さんが行つてくれと云ふからまゐりました。』

妹は陽吉と對座すると同時に心持せき込んで『義兄さんはどうしても姉さんを信ずることは出來ませんか？……』

『信じようと努力して來たのですよ。』

『姉さんは貴男が姉さんに飽きが來たのだらうと云ふのです。』

『違ふ……』

『貴男は姉さんの過去を最初から承知で姉さんと結婚なさつた筈です。』

『承知で？……』と陽吉は否定するやうに云つた『まあ、好いから姉さんをつれて來て下さい。』

『姉さんは門の外まで來てをります。』

『はいれと云つて下さい。』

『姉さんはもう一度貴男とようくお話をして、それから國の父に電報を打つと云つてをるのです。』

『電報を打つのも好いが、出來るだけ兩親に心配させないやうにしたがよくはないですか。』

『姉さんを呼んでまゐります。』

妹は出て行つた。

靜子は妹の後方から入つて來た。

『姉さん、あなたがよくおつしやいよ。』妹は姉を顧みて云つた。

『別れて行くなら行くも好いから、もう少し我慢して貰はう。金の準備が出來次第に僕はお前を國元へつれて行つて兩親によくわけを云つて、そして引きとつて貰ふことにするならしたいと思ふんだ。出來るだけお互にへんな別れ方をせずにだねえ、きまりよくしようじやないか。兩親に電報を打つたりすれば大げさにもなるし、これまで安心させるような手紙ばかり出して置いて、今突然に悦ばしくもない電報を打つのもへんだからねえ……』陽吉は云つた。

今は靜子もそれにはうなづいた。

『姉さんが眞實義兄さんを愛してゐてもいけないのですか……姉さんは眞實義兄さんを愛してゐると云ふのです。それだのに、義兄さんはちつとも、それを分つて下さらないと姉さんは云ふんです。』

『……』

『私は兎に角父に手紙を出します。その返事の來るまでお宅へ置いて下さい。』靜子は云つた。

『それが好い。その方が好い……』と陽吉は同意して『まあ今度の結婚はお互に罪があるんだから、それを反省しようぢやないか。僕だつて相當に年は行つてるし、此のまゝ行けるものなら行きたい。お前と別れてさへしまへば直ぐに幸福な結婚が待つてゐるわけではないんだから……然しお前はさうではないよ。まだ若いから……。』

電燈がやつと點いた。三人で晩餐をすることにした。

陽吉はやつと悲劇を喰い止めた。

十五

『相良陽吉殿、

本月二日附の御書面今日正に拜見仕候。靜子家出については心配無用との御書狀なれど、靜子よりの書面、並に登世子よりの數次の書狀更にまた松田叔母よりの手紙等にて最早充分に承知致し居り候。靜子入籍のことを今日まで貴殿が躊躇されし一事によつても貴殿のお考への那邊にあるかを略ぼ私共は測定し居たる次第にて候、世上の慣例として、將又婦家に對する義禮として苟も一度結婚したる上は速に入籍手續きを了するを當と存じ居り候。然らざる場合は、そは最初より試驗的結婚の意志を含むものと推斷すべきには候はざるや。兎も角私共兩親は貴殿の御迷惑を充分推考して今や詮なき事と斷念するの外無之候。貴殿に一身を献げ一意內助の効を擧げ度き念願を動機として貴殿に御緣を求めたるも如何にせん身不德にして貴殿の信愛を得ること能はざるのみか、却つて貴殿を苦しめるの結果となりしにより、遂に靜子は今回の家出を決したるものと存ぜられ候。親たる私共は貴殿に對して今更申譯なき次第に候へば、むしろ彼女を去らしむるを當然と心得候。實は拙者出京致す筈に候へ共、聊か健康を害し居り安靜を要する狀態に候へば右書面を以て御承認を得度候。靜子にも書面を以て申し送り、自己の不德を謝し良人の快よき承認を得、平和の裡にいとまを乞ふをせめてもの最後の取り柄とせよと訓戒致し置き候次第に候。

たとへ不束なる靜子は貴家を去り候も一度緣を結ぶこれ何等かの約束ごとに候べければ此の上も幾久しく友人として變らざる交誼を相續け度、あらためて私共の希望する所に候。』

彼女は再び飛び出したのである。そして妹の宿から陽吉に宛ててはがきをよこしたりした。陽吉は彼女を親元へ送つ

妹は出て行つた。

靜子は妹の後方から入つて來た。

『姉さん、あなたがよくおつしやいよ。』妹は姉を顧みて云つた。

『別れて行くなら行くも好いから、もう少し我慢して貰はう。金の準備が出來次第に僕はお前を國元へつれて行つて兩親によくわけを云つて、そして引きとつて貰ふことにするならしたいと思ふんだ。出來るだけお互にへんな別れ方をせずにだねえ、きまりよくしようじやないか。兩親に電報を打つたりすれば大げさにもなるし、これまで安心させるような手紙ばかり出して置いて、今突然に悅ばしくもない電報を打つのもへんだからねえ……』陽吉は云つた。

今は靜子もそれにはうなづいた。

『姉さんが眞實義兄さんを愛してゐてもいけないのですか……姉さんは眞實義兄さんを愛してゐると云ふのです。それだのに、義兄さんはちつとも、それを分つて下さらないと姉さんは云ふんです。』

『……』

『私は兎に角父に手紙を出します。その返事の來るまでお宅へ置いて下さい。』靜子は云つた。

『それが好い。その方が好い……』と陽吉は同意して『まあ今度の結婚はお互に罪があるんだから、それを反省しようぢやないか。僕だつて相當に年は行つてるし、此のまゝ行けるものなら行きたい。お前と別れてさへしまへば直ぐに幸福な結婚が待つてゐるわけではないんだから……然しお前はさうではないよ。まだ若いから……。』

電燈がやつと點いた。三人で晩餐をすることにした。

陽吉はやつと悲劇を喰い止めた。

十五

『相良陽吉殿、

本月二日附の御書面今日正に拜見仕候。靜子家出については心配無用との御書狀なれど、靜子よりの書面、並に益世子よりの數次の書狀更にまた松田叔母よりの手紙等にて最早充分に承知致し居り候。靜子入籍のことを今日まで貴殿が躊躇されし一事によつても貴殿のお考への那邊にあるかを略ぼ私共は測定し居たる次第にて候、世上の慣例として、將又婦家に對する義禮として苟も一度結婚したる上は速に入籍手續きを了するを常と存じ居り候。然らざる場合は、それ最初より試驗的結婚の意志を含むものと推斷すべきには候はざるや。兎も角私共兩親は貴殿の御迷惑を充分推考して今や詮なき事と斷念するの外無之候。貴殿に一身を獻げ一意内助の効を擧げ度き念願を動機として貴殿に御緣を求めたるも如何にせん身不德にして貴殿の信愛を得ること能はざるのみか、却つて貴殿を苦しめるの結果となりしにより、遂に靜子は今回の家出を決したるものと存ぜられ候。親たる私共は貴殿に對して今更申譯なき次第に候へば、むしろ彼女を去らしむるを當然と心得候。實は拙者出京致す筈に候へ共、聊か健康を害し居り安靜を要する狀態に候へば右書面を以て御承認を得度候。靜子にも書面を以て申し送り、自己の不德を謝し良人の快よき承認を得、平和の裡にいとまを乞ふをせめてもの最後の取り柄とせよと訓戒致し置き候次第に候。

たとへ不束なる靜子は貴家を去り候も二度緣を結ぶこれ何等かの約束ごとに候べければ此の上も幾久しく友人として變らざる交誼を相續け度、あらためて私共の希望する所に候。』

彼女は再び飛び出したのである。そして妹の宿から陽吉に宛ててはがきをよこしたりした。陽吉は彼女を親元へ送つ

て行く筈であつたがそれも金の準備が不充分で出來ず、よぎなく單獨でひとまづ歸國するやうにと彼女に旅費をくめんしてやつた。そして彼女はとう〳〵歸國した。

無事に鄕里へ着いたとの彼女のはがきと一日おくれて母親からの長い手紙が來た。それには、

『日増しにあたゝかになります。その後は御無沙汰致しまして申しわけもございません。あなた樣にはおさわりもなふゐらせられるとのこと何より嬉しう存じます。さてこのたび靜子事突然歸鄕仕りまことに驚き入りました。實は歸る四五日前にこれまでになきつまらぬ手紙がまゐり、少々心配いたしておりましたところ、あなた樣より、靜子のことについて心配いらぬとの御書面に接してやつと安心しておりましたところ、また〳〵靜子より歸國するとの電報がまゐり、お二人づれであらうも知れぬと嬉しいやら心配やらにて、父は佐賀驛まで迎へに出ましたやうなわけでございました。豫想ははづれて靜子一人しを〳〵と歸つてまゐりましたので私はまことに悲しう存じました。いろ〳〵靜子より承りました私共兩親は彼女の申すことばかりに贊成は致しかねますのは勿論でございます。第一此のたびの緣談はこちらよりお願ひいたせし事、人並ならぬ身をもお許しなされて緣を結び下されたるあなた樣のお心にはひとへに感謝してをりましたところささいの事に靜子は腹を立てて家出いたすなどは以ての外の心得ちがひと申すより外はございません。それも一度ならず二度も家出いたすとは、ほんに〳〵あきれはてた事で何とも親として申しやうもございません。さぞ〳〵おさげすみなされたことゝ存じます。靜子の申しますには、相良さんは私の心中を一向信じて下さらず、常に私が柴田のことを思ひ、いづれはまた柴田へ心を移すものとのみ考へておゐでになるのが、まことに口惜しいさうでございます。然しそれは御身の罪ゆゑ、おうたがひの晴れるやう正しき心を以て從ふこそ道なれば、あくまで辛抱するが御身の爲めであるものをと、くれ〳〵申し聞かせましたところ靜子も今更悔悟いたし、もう一度相良さんのもとへ戻ること

をお許しあるやうに私共兩親よりお願ひしてくれとのことでございます（中略）御不滿でもありませうが何卒〳〵今回までははおゆるし下さいますやう折り入つてお願ひ申します。靜子も折角遠方より歸りましたことゆゑ、せめて一ケ月ぐらゐ滯在いたさせたう存じますが、いかがなものでございませう（中略）申しあげることは澤山ありますなれど筆まはりかね、これにておゆるし下さいませ。時候不順の折柄何卒〳〵御身御大切に遊ばされますやう。先はあら〳〵』

母親から來た手紙は父親からの手紙と趣き異つてゐた。陽吉は重ねてもう一應わびの手紙を母親に書き送ることにした。それには靜子も年が若いことだから、當分はそちらへ止めて置かれた方がよろしいかと思ふ云々と書きそへた。

未來に最早夢を持つことを許されぬ自分の年齡を顧みると彼はさすがに決斷がにぶるのである――自分は常に夢を持ち過ぎる……それ故現在に與へられた幸福に對して評價を誤るのであらうか……それにしても彼女との結婚が幸福と云ひ得るものであつたらうか……彼は見落した過去の中から、きれ〳〵な幸福を拾ひ上げて追憶の篩ひにかけるのであつた。

十六

陽吉は晩酌をひとりでしながら彼女からの手紙を讀み續けた。

『御無沙汰致しました。私はわけもなうあなた樣のこと、あなた樣と同棲中のさま〴〵のことども思ひ出されて唯々なつかしさにたへられません……』

『また、例の紋切形だ……』と陽吉は呟いた。

『――おはがき一本の御返事すらいたゞけませんことも、私の今までの仕打を顧みますれば不平を申すわけにもまゐり

ません……然し私は今日まで例のものが、停滯いたして、折々嘔吐を催すほどでございます……』

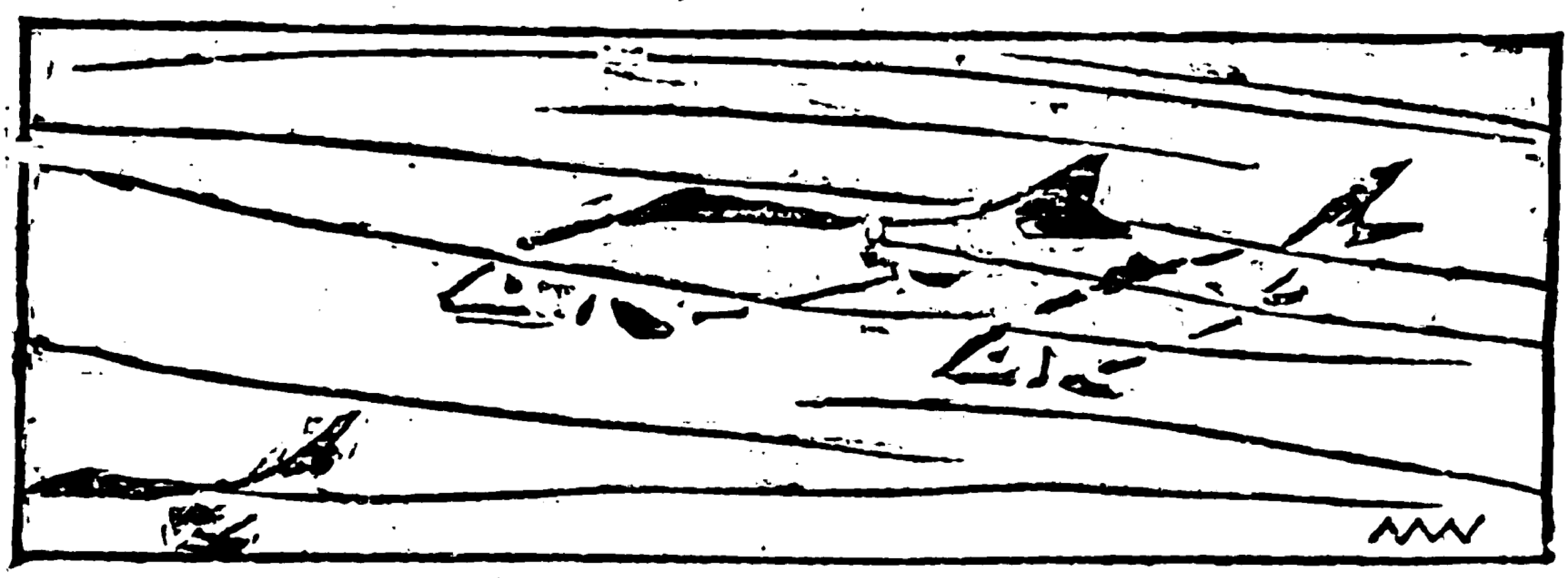
『そんな筈はない……いつかもそんなことを云つて嘘をついたのだ……』と陽吉は氣にとめまいとした。

『――今日當地のあらまきの罐詰二個お送り致して置きましたゆゑお受け下さいませ……若しあなた樣との緣が復活する望みなければ世間態も惡い故私を父の知己である台灣の某氏のところへ托するより外はあるまいと母は申します……』

くどいので陽吉はとび〳〵に讀んで行つた。

『――すべて自ら致した結果とは申しながら晤憺とした前途をどうして悲觀せずにゐられませうか……最後の御挨拶を殘してお別れしましたのは私の一時の强がりに過ぎませんでした……私は時々死について考へます。然し胎兒が確實であるとすれば……愚かしい私如き女がお子を宿したとて、あなた樣はさしてお悅び下さることもあるまいとは存じますが……どうぞ今回まではお怒りのほどもさることながら、すべては因緣と思し召し、且つ子供の幸福の爲に……姙娠が確實で、そして經過が無事でさへありませば四月より通算して來年一月早々お產をすることになります。その點さへ間違ひがございませんでしたら、お疑ひ受けることはあるまいと存じます……私はその點だけは天地に毛頭恥づるところはありますん……』

彼は最後まで讀まずにしまつた。そして側の朝刊新聞をひきよせて、今朝見殘した求緣廣告欄などに目をやつた。獨酒で。



寂しければ

——第六話（完結）——

久保田万太郎

『何か、また、芝居をやつてゐるな。』

すぐにわたしはさう思ひました。——なぜなら、豊島屋さんがさきへ來てゐる場合、わたしのはうから何かいふといふことはいまゝでに嘗て例のないことで、いつのときでも、『遲い〳〵、佐伯さん。』とか、『やア昨晩は……』とか、『どうしました、大將』とか、わたしの顏をみるかみないに、勢よく豊島屋さんの方からさういふのがきまりでした。——それをその日は、入つて行つてもこつちを向かず、『先日は……』と聲をかけても、チラリとみてしるしだけに頭を下げたばかり。——默つて、そのまゝ、まへにつがれてあつた猪口を取上げ、いかにも不味さうに一トくちのみました。

同じテエブルの、片つ方の端に、藤屋さんがいつもの柔和な笑ひがほをみせてゐました。

『……しばらく。』

そつちへわざと、何げなくさういひながらわたしは、五秋さんと一しよに、まるで空いてゐるもう一つのはうのテエブルのまへに腰を下ろしました。——すぐに少婢が膳を持つて來ました。

みると、豐島屋さんのとなりに、み馴れないお客が一人こつちへ顔を見せてゐました。——豐島屋さんの連れでないことは、仔細らしく道行を着て、金ぶちの眼鏡をかけ、指に、印臺の、毒々しい指輪をひけらかしてゐることでわかりました。——銅チリの鍋をひかへて、膳の上に、すでにもう四五本の銚子をならべてゐました。

『これだな、相手は……』

さう思つて、改めて、豐島屋さんのはうをみました。——が、豐島屋さんは、思ひ屈したさまに眼を伏せて、一ト言もやつぱり口をきゝませんでした。——どこか間の抜けた。——といふよりは勝手の違つた、澱んだ、息苦しい氣合がふとわたしに感じられました。

『どうぞ……』

ついて來た銚子を取上げて、わたしは、五秋さんにいひました。

『恐入ります。』

五秋さんは猪口を手に取つて

『ほんの、どうぞ、おしるしだけ……』

『まア……』

『いえ、このごろは、まるでもう頂けませんで……』

『どうなさいました？』

『どういふこともございませんが……』

五秋さんはわらつて

『何にいたしてももう年でございますから……』

『年？』

わたしもわらつて

『そんな心細いことをいまツから……』

『いえ、全くでございます。——幾ら自分ではきかない氣でも、お猪口に三つもいたゞくと、體のネヂがすぐにもう緩んで、何をいたすしがくもつかなくなります。』

どこか奥歯にもの〻挾まつたかたち。——拈華さんに逢へるつもりのおもはくの外れたことも手傳つて、さうした、ついとほりの、何とつかずのとりやりをする外はない羽目に落ちました。——主人は主人で料理場へ入つたきりでした。

と、

『……駄目でございませうか、どうしても？』

急に豊島屋さんはいひました。——弱い、力のない。——だが、いかにも斷念め切れないといつた調子で……

勿論、わたしは、もう一度そつちへ眼を向けました。

『駄目だね。』

づけりと、その、豊島屋さんのとなりの客はいひました。——無下に、膠もなく、冷酷に。……

『…………………………』

豐島屋さんは、また、そのまゝ默りました。

『どうしても出來なかつた。――工面がつかなかつた。――うちへかへつて、正直に、ありのまゝを細君に話すんだね。――話してあやまるんだね。――さうするより外はないよ。』

酷く大風に、愛想つ氣なく、いつそ貶しめるやうにその客は言葉を繼ぎました。

『卦のうへにさう出たんだから仕方がない。』

いひながら、箸を取つて、皿の豆腐を鍋のなかに運びました。

『占者だな、此奴……』

さう思ふとどこかで見たことのある顏でした。

『しかし……』

無理から、また、縋るやうに豐島屋さんはいひました。

『素手ぢやア、今日は、どうしてもかへれないことになつてゐます。――こしらへて來る。――必とこしらへて來てみせる。――立派にさういつて出て來た手前……』

『だからあやまるんだ。――謝つてかへるんだ。』

相手はどこまでも高飛車に、

『立派にさうはいつたが、矢つ張、いけなかつた。――すまない、勘忍してくれ。――これに懲りてもう口幅つたいことはいはない。――さういつて不器用に謝れば、ここは大鮨の情だ、これでもいけない……とは邪道にいふまい。』

『でも、先生。――意地があります。』

『意地？』

『へえ、わたくしにも意地があります。』

急に、相手は、聲をあげてわらひました。

『それは君たちのやうな稼業の人のいふことぢやアない。――もつとまともな手合のいふことだ。』

『まともな……？』

『さうぢやアないか、君。――藝妓屋や待合の亭主にそんなものがあつてどうなるんだ。――内儀さん關白の位と奉つて置かない日には、どうにもみじんまくがつかなくなるんぢやアないか。』

……筋合の知れない相手とみると、「藝妓屋の亭主」と器用に自分からさういつて逃げるのが豐島屋さんのいつもの手といふことはまへにいひました。――さういふと、大ていの相手は、立ちどころにその扱ひをかへて、いまゝでの「あなた」が「君」になり、「旦那」がたちまち「大將」になるといふこともまへにいひました。――つまりはその傳。――いつものその傳で、とぼけた、らちもないことを何かいつて相手を遊んでゐるんだなとははつきり分りました。

『………………』

豐島屋さんは、返す言葉のないやうに、ふかくまた首をうなだれました。

『惡いことはいはないから音無しくかへつたはうがいゝ。――今夜一ト晩中ほツつきあるいたつて、三百兩はおろか、十兩の金だつて出來やアしない。――明日になつて、わたしのいふことに間違ひがなかつたと思つたつてそれはもう遲い……』

『……………』

『熱いところをもう一本も飲んでかへるんだね。——素面でもかへれないだらうが、べろ〳〵に醉つぱらつてかへるのもあんまり恰好はよくない。——そこはほどだ……』

『だが、先生……』

押へるにやうに豊島屋さんはいひました。——急に歯切よく……

『何としてもわたしは口惜しい……』

『いくら口惜しいつたつて仕方がない。』

『いゝえ、内儀さんのことをいふんぢやアありません。』

『……………』

『どうしてあんな奴のところへ頭を下げて行つたんだ？——行く氣になつたんだ？——さう思ふと、いつそ、わが身でわが身が口惜しくなります。』

『貸さないのは、それは、先方の勝手だからね。』

『勝手です。——そのとほりです。——ですが、人情つてものは……』

『……………』

『人情つてものは、先生のまへですが、そんなものぢやアないと思ひます。』

『……………』

『恥をいはれなければ分りませんが、昔からつ、わたくしだつて、……燕枝屋の客ぢやアありません。——……らこそ……へ

ば、これでも、奉公人の十人と十五人つかつた呉服屋。――おはづかしいが呉服屋の主人です。』

『…………』

『それが、おさだまりの、馬鹿といふ馬鹿をしつくした揚句が今日のさまになり。――こんな、いはゞ抜けがら同前の身になつて、面白くも可笑しくもない日々を送つてをります。――だから、もう、昔のことは夢。――みんなもう夢。

――さう思つて眼をつぶつてゐます。』

『…………』

『しかし今日は。――今日といふ今日は全く思案に盡きました。――内儀さんとやり合つて、むしやくしや紛れにうちは飛出したもの丶、さて、どこでどうしようといふあてもありません。――ふいと、そのとき胸に浮んだのが古い馴染。――さうだ、あの男んとこへ行つたら何とか相談にのつてくれるだらう。――あの男なら話も分る。――そのくらゐな、また、義理も知つてゐる。――さう思つて、まア途中で手土産を買ひ、すぐにそこのうちをたづねました。』

『…………』

『といふのが、以前、とりわけてまア眼をかけた幇間。――名前は申しませんが、吉原で、當時賣出しの大したものになつてゐます。――いゝ鹽梅にうちにゐて、これは、旦那、どうなさいました。――始終、うちの奴と、おうはさはいたしてをります。――さア、どうぞ。――さアお上んなすつて。――内儀さんと二人で、それはもう、下にも置かない扱ひ……』

『…………』

『しみ〴〵有難い、と思ひました。――やつぱり本場の藝人は違ふ。――さう思ひました。――ふら〳〵と、つい、そ

れに乘つて、この分ならとばかり、實は、師匠。——わたくしは切り出しました。』
『……………』
『久しぶりで逢つてこんなことのいへるわけぢやアないんだけれど、みかけてたのむ、急場を一つ救つてくれまいか。——と、藪から棒にかういつても納得出來まいが、これだ、この煙草入だ。——さういつて此奴を出しました。』
いひながら、豐島屋さんは、腰から金唐革の筒下げを拔いてテエブルのうへに置きました。
『つまらないもんですけれど、これでも馬鹿をしてゐる時分に五百兩ばかりかけて拵へました。——先方はよくそれを知つてゐます。——だから此奴を出して、どうだらう、これで三百兩だけ都合してもらへまいか？——月うちには必ず請けに來る。——間違ひなく返す。——ことを分けて懇々たのみました。』
『……………』
『と、しばらく考へてゐました。——やがて、ポンと、灰吹を一つ叩くと、持つてゐた煙管を下に置いてニヤリと厭味に笑ひました。——旦那、おからかひになつちやアいけません。——何です、そんな眞面目なお顏をなすつて。——あぶなく、あなた、もうちつとで引つかゝるところ。……』
『……………』
『戯談にして、此方に、二の句をつがせません。』
『……………』
『いゝえ、さうぢやアない、ほんたうのことだ。——眞劍な話だ。——押切つて、わたしは、火の雨のふる内證の苦しい一らつをすつかり並べました。——内儀さんにいひたいこともいはれ、甲斐性なし、いくじなしとまで毒づかれて、

俺も男だ、それつぱかりの金にけじめを食はされてたまるものか。——賣言葉に買言葉。——思はずむら〳〵ッとさういつてうちを出て來た一伍一什を殘らずそこにぶちまけました。——いへば業腹な話です。——が、さうしなければ先方が得心してくれません。——此方にすれば一生懸命です。』

『…………』

『しかし、いへばいふほど先方はゝぐらかします。——わらつてまるでうけつけません。——でも、このごろは、有難いことにわたくしも、以前いろ〳〵と御贔屓になつたおかげには、どうにかまア一人前になつて、人さまに御迷惑をかけないでもやつて行かれるやうになりました。——さうなると、これ、仲間の奴がやつかんで、何のかの、根もないことに枝葉をつけていひ觸らします。——必と、旦那も、それをお聞きになつて、彼奴、このごろ、づのぼせてゐる。——一ついたしめてやれ。——さう思つてそんなことを被仰る。——さうに違ひない。——それに違ひない……』

『…………』

『ねえ、おい、何とかいつてお前からも旦那にお詫してくれ。——よく申上げてくれ。——さういふと內儀さんも出て來て、ほんたうに困つてしまうんでございますよ、うるさくつて。——すこし眼鼻がつくと、世間では、どんなお金持にでもなつたやうに思ひます。——どういたして、あなた、當節柄そんなことにまゐるものでございますか。——一しよになつて、つべこべ、入りもしないことを饒舌ります。』

『…………』

『この內儀さんといふのも、お話しすれば、もと柳橋に出てゐたのをわたしがおせッかいをして、その、一しよにしたので。——藝妓の時分には、やさ形の、小股の切れ上つた、銀杏返しのよく似合ふ意氣な女でしたが、久しく逢はない

うちにぼて〳〵に太り、すつかり世帯染みたことつたら、むかし素足の自慢だつた奴が天鵞絨の別珍足袋を履いてゐます。』

『…………』

『とゞ、何にもございませんが一つ。――横田の不味い酒を飲まされて、あとは、やれ三井さんがどうしたの、岩崎さんがどうしたの、聞きたくもない名前をならべて、以前とは貫祿が違ふといはないばかり……』

『…………』

『ぢり〳〵して來ましたけれど、弱味はこつちにあります。腹は立てられません。――みきりをつけて、汐さきをみてかへらうとすると、旦那、こちらから今度は見かけてお願があります。――その煙草入、うそから出たまことに、わたくしに一つ讓つて下さいませんか？……』

『…………』

『おや？と思ひました。――やつぱり話を分つてくれたのか？――さう思ひました。――と、かぶせてすぐ、古いお附合です。――五十圓でいかゞでせう？……』

『思はず、わたくし、泪を溢しました。――俺といふ奴は何といふ馬鹿なんだ。――こんな桁の外れたいかさま野郎を、たとへ一ッ時にしろ、たよりと思つたばかりに赤ッ恥をかく。――何といふおへねえヒョウタクレだ。』

『…………』

『夢中でわたくしは外へ出ました。――土手から公園まで、どこをどうあるいたかも分らず、空にたゞあるきました。――さぞ、いまごろ、彼奴ら額をみ合はせて舌を出してゐるだらうと思ふと、今の出來ない心配よりそつちの業が煮えて

たまりません。——とてもこのまゝちやア立ち切れない。——自棄だ、飲んでやれ。こゝの暖簾をみると、もう、矢も楯もなくたまらなくなつてとび込みました。』

『で、すなはち、五本がところを並べたわけか。』

不意に、相手は、遮ぎるやうにいひました。

『さうで、さうなんで……』

豊島屋さんはうなづいて、

『いつも二本も飲めばいゝ心もちになるのが、今日は調子の狂つてゐるせゐか、さつぱりまだまはりません。』

『それだけまはつてゐれば澤山だ。』

相手はわらつて煙草入の方に手をのばしました。

『うむ、いゝ煙草入だ。——だが、三百兩にはふめない。』

『姐や、お酒だ。』

豊島屋さんは料理場のはうへ空の銚子をふつてみせました。

『……もう四時か？』

ふと、相手は柱のうへの時計をみて、一人言のやうにさういふと

『姐さん、こつちは勘定だ。』

『もうおかへりでございますか。』

豊島屋さんはいひました。

『これから千住まで行かなければならない。』

『千住…？』

『三時までに行つてやる約束だから行つてゐるだらう。』

改めて帯の間から自前の時計を光らしました。

『火憎でございますが……』

豊島屋さんはハダかつた胸を掻き合せて

『何ほど見料をさし上げませう？』

『見料？』

相手は、眼鏡越しに、ジロリ豊島屋さんの顔をみました。

『へえ。』

『二圓も貰はうか。』

すばりとさういひました。——豊島屋さんはふところから大きな蟇口を出し、小銭にそれだけくるんで叮重にテエブルのうへに置きました。

『有難うございました。』

改めて、一つ、頭を下げました。

『やア。』

大様にうなづいて

『必ず、だが、自棄を起して無暗なことをしちやァいけない。——今夜出來ないといふことは明日出來ないといふことちやァない。——明日になつて、また、どんな風が吹かないとも限らない。』

『…………』

『醉つたまぎれに、今夜、かへつて内儀さんに亂暴な眞似でもするやうなことのあつた分には、來る福運も來なくなる。——つまりはさうなる道理だ。』

『…………』

『幾らあつたか知らないが、とにかく身上をしまつて、藝妓屋へ入りこむやうになるまでにはいろ〱經緯があつたに違ひない。——それを思つたら、まんざら、憎いこともあるまい。』

『戀もなさけも世にあるうち。——伊左工門の言種ぢやァありませんが……』

豐島屋さんは、ふと、沈んだとりなしでいひました。

『女ッくらゐ、先生、たよりにならないものはありません。』

『さうとも決らないさ。』

それを蹴散らして機嫌よく、齒を剝いてわらふと、相手は、袱紗に御大層に包んだ紙入を出して、まづ、見料をしまひ、勘定を拂つてやをら腰かけを立ちました。

『やァ……』

何とつかずの言葉を殘して、そのまゝ、あくまで片附けた恰好でそとへ出て行きました。

『何だい、彼奴は……』

そのあと、おそらくは直ぐさういつて、手を打つて、豐島屋さん、笑ふに違ひないとわたしは思ひました。——それにつれて、藤屋さんも、わたしも、いまゝでの可笑しさを、ともぐ一ツ時にわらふのだらうと思ひました。——が、在りやうは、幾らたつても、豐島屋さん、さうしたけしきをみせませんでした。——みせないばかりでなく、やつぱり下を向いたまゝ、いかにも屈托に縛められたやうに、力なく手を、猪口のはうに運ぶばかりでした。

『はて……?』

笑ひそびれた、拍子抜けのしたわたしは、ぼんやり藤屋さんのはうへ眼を向けました。——同じ思ひに、藤屋さんも、けゞんらしい顔をわたしのはうへみせました。——ふと、白けた、淋しい、よしない心もちがあたりに立迷ひました。

『こゝへ來て何も稼いで行くことはないでせう……』

いつか帳場にかへつてゐた主人が、そのとき、いつもの呼吸で、かけかまひない笑ひ方をしました。

『あれは、しかし……?』

取ッつき端をえてわたしはいひました。

『御存じありませんか?』

『どこかで見た顔とは思ふけれど……』

『新堀の、あれ、潜龍子といふ「白井左近」です。』

『あ、あれが?』

『以前をいへば、辯天山の下の吹きツ晒しに……』

そばから藤屋さんはいひました。

『天神さまのやうな帽子をかぶつて、始終、帽子の山をひねくつてゐたんですが。――ヤマと、ケレンで、すつかりいまのやうに伸しました。』

『よく、しかし、あたるといふぢやアございませんか？』

『あたるさうです。――が、いまのやうなさまをみちやア：』

『でも、感心です。――見料を取つたら急に愛想がよくなりました。』

主人はいひました。――藤屋さんも、わたしも、そこで辛つじわらふことが出來ました。が、それでも豊島屋さんは何ともいひませんでした。耳を藉すけしきもみせませんでした。――すぐ、また、あたりの心もちは、さそはれて縱穂なく白けました。……

『おさきへ………』

ふいと豊島屋さんは立上りました。――さういつて、がくり頭を下げると、急いでテエブルのそばを離れました。

『旦那、煙草入が………』

主人は眼早くみつけていひました。

『有難う。』

ふり向いて、もう一度、頭を下げ、煙草入を取つてそのまゝふところに入れました。――硝子戸をあけて出て行く肩つきの、その日に限つて外套も着てゐないことが、わけもなく心細く、うすら冷たくみえました。――藤屋さんも、わたしも、ともぐ\その後ろつきの、暖簾のかげにかくれるまでうつかりみ送りました。

『大將、大分今日は行つてゐるね。』

藤屋さんは、主人のはうをみてしづかにいひました。

『よつぽど下地のあつた鹽梅ですから……』

『あつたのか、それが？』

『えゝ。——しかし、あんなつてことは珍しいことです。』

『足許がきまらないのは酷い。』

『それと、幾ら醉つたつて、あんなにしゆんでしまふなんてことはいつにもありません。』

『どうしてあんな工合に外れたらう？——はじめは、ちつとも、そんなけぶりはみえなかつたがね。』

『みえませんとも。——いつものとほりでした。——下地があるだけ、どつちかといへば餘計いつもより上機嫌でした。』

『なればこそあんな惡戯も掻い出したんだらうが。』

『さうです。——そのわけなんです。』

『一體、しかし、どういふあれは……？』

わたしは口を挾みました。

『お鷲きでしたらう。あなたは……』

藤屋さんはわらつて

『不意にあのけしきを御覽になつたんだから……』

『何か、また、芝居をやつてゐるな。——さうは思ひました。——が、どこまで行つても眞剣です。——いつもと勝手

が違ひます……』

『それなんです。』

藤屋さんはうなづいて

『芝居にしちやアあんまり叮嚀すぎます。――揚幕へ入つてまで役の性根でゐることはありません。』

『そも〳〵の、しかし、なりたちは……?』

『こちらも、實は、幕のあいてから飛込んだお客で。――そのときは、もう、いつもの手で、大將、藝者屋の亭主になりすましてゐました。』

藤屋さんは、また、主人の方を向いて

『今夜中に金が出來るか出來ないか?――それをみてくれといつたのがつまり取つかゝりかね?』

『さうなんです。――今夜中にどうしても三百圓の金をこしらへなきやアならない。――出來ない日には、女房の手前、うちの閾はまたげない。――これからあるいて出來るだらうか、出來ないだらうか?――それを、一つ、御覧なすつて下さいませんか?――御高名は始終うかゞつてをります。――一度お目にかゝりたいと思つてをりました。――かうしたところで今日お目にかゝれるといふのも何かの御緣でせうから。――さういつたことに器用に持ちかけたもんです。』

『かうまで俺も賣れてるか?――さう思つたらう、先生……』

『それは、もう、すつかり反つくり返つてしまつてあの仕儀です。』

『いつそ愛嬌がある。』

『だけど、また、よくまア旦那も口から出まかせにあんな巧いことがいへたもんだと思ひます。――辻褄がちやアん

合つてゐるから不思議です。』
『藝だよ。――立派な藝だよ。』
『今日のあの幇間を出して來た趣向なんぞは。――さうと知りつゝも、ハテ誰だらう?――誰のことをいつてゐるんだらう?――ついしてさう思ひます。』
『あの幇間は、あれは、この間の天野さんの話から來てゐるのさ。』
『あゝ、あの、氣觸れの……?』
『佐伯さん、お聞きになりましたか?』
『いゝえ。』
『湯屋の着物を脱ぐ籠。――ですが……』
『へえ。』
『あれに櫻川と麗々しく銘をうつた、別誂への、專用のやつを置いとくお大名の幇間がさる土地にゐるさうです。』
『しかし……』
『いゝえ、まさかとお思ひになるにはきまつてゐます。――が、天野さんの、現在、みて來ての話です。』
『……………』
『其奴は、まア、幇間といふ稼業を何と思つていやアがるんだ。――大將、そのとき、聞いただけで大憤り。――このごろの藝人の、無作法で、ものを知らないことを糞味噌にこなしつけました。』
『それから見れば、いまの白井左近なんぞは、罪の、まだ、薄いはうです。』

『強いはうだとも。――あれは、あの、客に突ツかゝるのが手だ。――客を怖えさせるのが仕事だ。――高飛車にあゝやつてごまかすんだ。』

『…………』

『それが、いまの、わたしのいつたヤマとケレンだ。』

『時勢と一しよにいろんな見當の違つた手合があらはれます。』

わたしはわらつていひました。

『實際われ／＼のやうなものからみれば、人の氣嫌氣褄をとる渡世の幇間の所作でもなければ、迷つた人たちを助ける易者のやり方でないと愛想は盡きます。――が、一々それをとり上げて鳶屋の大將のやうに癇にばかり障へてゐたら切りがありません。――時世とあきらめるに如くはありません。』

『…………』

『尤も、大將は、いくら腹を立てたつて、そばにその腹の休め場所がいろ／＼あるんだからいゝ。』

藤屋さんはわらつて

『芳町だの、日本橋だの……』

『ところが、それが、このごろは車がうまくまはりません。――東京の道路が何しろ泥深いんで……』

主人は、いへば淋しくわらひました。

『どうして？』

『日本橋が出來てから芳町とまるで縁切りです。――月々のものを、たゞ、仕送つてゐるといふばかりです。――とい

ふことは日本橋のはうへ入浸り……』

『元木にまさるうら木はなし、か。』

『が、やつぱりいけません。——氣がつくと、さきは、むかしの信夫さんの華魁は華魁でも、目黒の廓はれたさきを旦那戀しく脱け出して來た華魁。——寺島に世帶をもつてともぐ〳〵ミシンの内職をしたときの華魁ぢやアありません。——金のないため泣きの涙で旦那とわかれたときの華魁ぢやアありません。』

『…………』

『まん、と、お金をもつた、東京の眞ん中の、押しも押されもしない料理屋さんの御主人です、いまは。——大ぜいの奉公人を顎でつかつてゐる自分天下のお内儀さんです、いまは。——世間をみる眼も、男をみる眼も、以前とはまるつきり違つて來てゐます。』

『…………』

『いくら旦那がじれつたがつても、すぎた二十年の月日は返りません。』

……豐島屋さんの惱み。——すべての曲つたこと、節の違つたことを目のかたきにする豐島屋さんのそのかげにかくれた悲しみ。——半月ほどまへ、日本橋のその燒木杭の話を聞いて、さうなるのがほんたうだ。——世の中のことがすべてまつとうに行くとすれば、さうなるのが當りまへだ。——豐島屋さんも、相手の人も、つまりはかへりつくところへ兩方が返りついたのだ。……さう思つたわたしです。——眞逆に、そこに、かへりついたそのさきに、さうした鐡の塔の道をふさいでゐようとは夢にもわたしは思ひませんでした。

『女ッくらゐ、先生、たよりにならないものはありません。』

ふと、わたしに、豐島屋さんの先刻いつた一言が思ひ出されました。——同時に、テエブルのうえにふせた、豐島屋さんの、暗い、陰氣なまなざしがわたしにかへつて來ました。——それも、先刻、豐島屋さんのいつた言葉の、うそから出たまことと。——その嘘から出たまことに、惡戯の、かりそめの、金の工面の出來ないその藝妓屋の亭主のなかに、豐島屋さん、ゆくりなく自分のほんたうのすがたを惨めにみ出したのではないでせうか？……

『サア、わたしに一つ、御飯をくれないか。』

最後の一杯を猪口につぐと一しよに藤屋さんはいひました。——どんなことがあつても三本よりうへは飲まないと、藤屋さんは、ふだんから固くさう決めてゐます。

『あい、御飯だよ。』

うしろを向いて、主人は、少婢のはうへ聲をかけました。

『このごろ、しかし……』

そのしほをみてわたしはいひました。

『拈華さん。——長谷川さんはみえませんか？』

『…………？』

主人はわたしの顏をみて

『御存じありませんか、あなた？』

『何を？』

『長谷川さんは東京においでになりません。』

『東京にゐない？』

『十日ほどまへ急に北海道へお立ちになりました。』

『どうして？』

『當分あつちへ行つて何かなさるんださうです。』

『で、お内儀さんも一しよに？』

『いゝえ、お一人で？』

『一人で？』

わたしは、思はず五秋さんと顔をみ合せました。

『兼治の話だからあてにはなりませんが、お内儀さんと、一時、どういふ御都合かおわかれになつたさうです。』

『ものゝ理合の分る人が、一人づゝ、東京から減つて行きます。』

わらつて、藤屋さんは、少婢のもつて來た御飯の茶碗をうけとりました。

それから一時間ほどして「しがらき」を出たとき、曇つた空の下は、どこか冂々と、弱く、濁つたやうに暮れかけてゐました。――どこにもゝう燈火が、濃く、しみ〴〵と瞬きそめてゐました。

灯りて寒き浮世のすがたかな。――ふつと、さうした、いつにも思ひ出したことのない露心堂の宗匠の古い句が胸に浮びました。――みると、五秋さんは、ほんのり顔を染めて、どこか寛いだかたちに、わたしより遅れてぼんやりある

いてゐました。

『寂しいんだ、五秋さんは……』

密とわたしは自分にいひました。

と、拈華さんのこと。――つゞいて豊島屋さんのことが一ぱい眼のさきに擴りました。

『みんな寂しい。……』すぐ、また、わたしはいひました。『たよるものがなくつてみんな寂しいんだ。』

いへば、兼治でも、露心堂の宗匠でも。……

『では、お前は?』

わたしは自分に聞きました。

『…………………』

急に、眼の底に、熱い泪がわいて來ました。――その泪の隙に清一の。――婆アやを相手にひたすらわたしのかへりを待つてゐる清一のすがたがはつきりみえました。……(十四年七月)



窓にうつる風景

尾崎士郎

一

窓をあける。——一つ一つ線のはつきりした白雲が圓錐形の層をつくつて浮んでゐる。空の色は地面に近づくほど鮮かな暗綠色になり、丘の上に竝んだ椎の並木の上に黑い翳を落してゐる。斜面になつた丘の下には雜草の繁つた窪地が橫はり、そのぐるりの畑は、すつかり地ならしが終つてゐる。新しい種が蒔かれたのだ。今に、冬大根の新しい芽が列をつくつて伸びはじめるだらう。

あの丘の向うにある赤い瓦の家には二階の窓が開かれてゐる。青いカーテンが搖れて、ミシンを動かす音が聞えてくるやうな氣がする。そんな筈はない。此處から窪地を越えて一直線に歩いていつても二三町はあるだらう。ミシンの音の聞える筈がない。

私は、あの家の前をよく通るのだ。あのカーテンの下ろしてある二階の室には、若い妻君が朝から晩までミシンを動かしてゐるのだ。青いカーテンの間から、若い

妻君の半身が見えることがある。大きく深呼吸をするやうな恰好をして、左右にひろげた兩手で窓棒をつかんでゐる。あの女も、ときどき寂しくなるのにちがひない。しかし、女の姿はすぐにカーテンのかげにかくれてしまふ。空から、森から、晩秋の自然から、彼女は人世の誘惑を避けて、またもとのミシン臺へ歸つてゆくのだ。

窓から見えるすべての情景が、私の心に、あまりにしつくり調和し過ぎてゐる。こんな景色によつて彩られた田園が世界の何處にあるだらうか。空氣は沈み切つてゐるし地上にある何も彼もが、すつかり落着くところに落ちついてゐるではないか。歪んだ位置に立つてゐるものは一つもないのだ。百年も二百年も、同じやうな靜寂によつてまもられてゐるものゝやうに、私の情感をかきたてるものもなければ、私の野心を揺り醒すものもない。そして、私はほんとに、この馴れついた生活に、すつかり飽いてしまつてゐるのに、私の心は何の變化も望んでゐはしないのだ。ときどき私は一つの仕事を成し遂げてしまつた人間のやうに自分を考へることがある。そんな風に考へる癖がついてしまつたのだ。何故と言へば、私を脅かすものは何者もなくなつてしまつたし、私たち夫婦は、毎日毎日、きまりきつたいさかひを續けながらも、そして、全く何といふ意識作用もなしにこの平凡な土地に何の幸福も豫期しない一つの巣をつくりはじめたのだ。全く違つた二つの個性の對立が、外から來る迫害を失ふことによつて、二つながら萎びかけてゐるといふことは恐しいことではないか！

私の友人たちはすつかり私から離れていつてしまつた。と、いふよりも私が彼等の團集に近づかなくなつてしまつたのだ。それだけのことだ。すべての記憶が段々に遠のいてゆく汽罐の音のやうに、私の頭からうすれていつただけなのだ。

赤い屋根の二階家の窓のカーテンは深くおろされたまゝである。今日はまだ朝から一度も若い妻君の顔を見ない。だが、しかしそんなことを氣にしたつて仕方がない。あの女の囁きが、淀んだ空氣を通りぬけて、私の耳に傳はつたとこ

ろでどうにもしようがないではないか。

二

ある朝、私は、窪地のへりの勾配の急な坂をのぼつて近づいてくる足音を聞いた。その朴柄な駒下駄の音は、さくりさくりと道に敷きつめた小砂利に響いた。朗かな朝である。椎の葉は、水々しい風に煽られて、絶間なく揺れるごとに、孕むやうに受けた朝の陽ざしを断崖の下にゆすぶり落してゐる。こんな朝に、何といふ相應はしい駒下駄の音であらう。だが、その音は段々私の窓に近づいてくる。私は慌てゝ立ちあがつた。これはいけないと思つた。私は私の生活を脅す、かすかな何ものかを感じだしたのだ。

やがて、弓なりに曲つた坂道に黒い帽子が見えた。トンビが見えた。次第にのぼつてくるにつれて手が見え、手にぶらさげた黒い皮鞄が見え、短いトンビの裾が見え、足袋を穿いた足が見えた。その背の低い無恰好な男は、俯きがちに、しかし急ぎ足に、私の家に近づいてくる。

私はあんな男を見たことがない。それに、こんなに朝早く、一體何の用事で訪ねて來たのだらう。

私は無意識に窓から身をひいた。とたんに男がひよいと顔を上げた。硝子窓を隔てゝはゐるが、僅かに五六間足らずの距離のうちに、私の眼は、たしかに彼の視線の中にすべりこんだ。

私は其處に一人の田舎者を見出した。あみだにかぶつた茶色のソフトは、ぺちやんこになつて、全く型を失つてしまつてゐるし、平つぺたく歪んだ色の黒い顔には、人を正視することを恐れるものゝやうに、ぼつぼたい瞼が、しよぼしよぼとうるんでゐる。もう五十に近いであらうか。――尖つた骨組の一つもない平安な顔であつた。

彼は私の家の門の前まで來て立ちどまつた。――門標を探してゐるのにちがひない。だが、門柱のかはりに立てゝある栗の丸太の上に貼りつけておいた名刺は、二三日前の豪雨で流し落されたまゝになつてゐるのだ。

しかし、彼は、四五間離れた窓の中で自分を待ち受けてゐる私を見出すと、急に恐縮したやうに威儀を正した。それから、慌てゝ帽子をとつた。禮儀正しい田舍の人に共通する、ぞんざいな滑稽さが、私の心を晴れやかにし、そして、少しばかり私を得意にした。

帽子をとつてしまふと、此男が私の豫想したよりも老人であることがわかつた。彼は急ぎ足に私の窓の下へ進んでくる。

『あの――失禮で御座んすが、角田さんはこちらで……』

『えゝ、そうです。私が角田です』

『私は、あの――××縣の者ですが、こちらにおせんさんはゐますでせうか?』

『おせん――はあ、ゐます』

この男の唐突な言葉は、すつかり私をどぎまぎさせた。私の期待は見事にひつくり返へされたのだ。この男は、おせんを訪ねてきたのだ。何のために?……………すつかり不用になり、役に立たなくなつてしまつてゐる古い記憶が私の頭に殺到してきた。

『どうぞ、玄關の方へ廻つて下さい!』

私は窓から首を引つこめた。

井戸端で仕事をしてゐたおせんが、庭に面した扉から入つてきた。

『お前のところへお客が來たんだよ』

『わたしのところに？』

妻の顔には明かに鋭い狼狽が流れた。——

『俺は、ちよつと散歩して來よう！』

臺所を合せて僅かに二間しかない私の家では、私は妻の客に對して自分の書齋を提供するよりほかに仕方がなかつた。

『でも、どんな人だかわからないわ。ちよつと會つて見るわ』

彼女は力強く扉をあけて外へ出た。玄關口の格子戸には未だ錠がおろしたまゝになつてゐるので、年とつた闖入者は軒の下に立つてゐなければならなかつた。

だが、おせんはすぐに歸つてきた。

『何でもないのよ。——吉井のお父さんなの。あなたも此處にゐる方がいゝわ』

しかし、おせんの聲は顫へてゐるではないか。何事かゞ起りかけてゐるな！といふ豫感が鋭く私の頭に閃いた。その瞬間、私はもう平然として散歩にゆく勇氣を失つてゐた。

私は默つて庭へ下りた。そして裏口から、臺所に續いた三疊の室へ入つて、そつと音のしないやうに寢そべつた。書齋と臺所との間に挾まれてゐる叩土の上におせんの足音が響いた。間もなく、がちやりと錠が外れて、重い格子戸が烈しく開いた。——

『まあ——』

おせんのつくり聲が、殘滓のやうに私の頭に殘つた。叩土を踏む下駄の音が聞え、やがて書齋の扉が閉ぢられた。

三

もう萬事が過ぎ去つてから一年近く經つてゐるではないか。おせんと私との關係には、すつかり黴が生え、私たちは、それぞれに獨自の運命を疑ふ自由をすらも奪はれかけてゐるのに、——女房の、前の亭主の親父が、此の靜けさの中に、ひよつこり姿を現はしたといふことは一體何を意味するのだ。

だが、何といふ靜けさであらう。家の中は森閑として、ときどき口早に流れるおせんの聲が、四邊の靜けさの中に、ゆるやかな階調を漂はせてゐるだけではないか。——

再び、すべての緊張が私の身體からうすれていつた。何でもないのだ。あの善良な老人は、唯、通りすがりにおせんを訪ねてきたといふだけのことなのだ。あの人に何の企らみがあるものか。——で、私は、たつた今、門の前に立ちどまつて、窓の中の私の顏を見上げた、哀れな老人の眼をおもひだす。私の心はひとりでにくるりとうしろへ向き直つて、もとの平安へ戻つてゆく。そして、私は、あの老人を避けなければならない自分の心に少しの矛盾も感じないし、妻の來客から逃れるといふ奇妙な習慣にも何の疑ひを感じなくなつてゐるのだ。そして、何よりも、萬事があまりに遠く過ぎ去つてゐるではないか。過ぎ去つた回想の上に新しい躍動を持ち來す必要はないのだ。

書齋の扉が開いた。おせんが素足のまゝで叩土を飛び越えて、私のゐる室へ入つてきた。

『びつくりしたわね。何でも無いのよ。』

おせんは私の頭のそばへ坐つた。

『あのね、盛哉さんが行方不明になつちやつたのよ、――奉公先きでは、もうすつかり怒つてゐるんですつて、だから、どうにかして意見しようと思つて探しに來たんですわ』

『だつて、俺のところへ來るのは變ぢやないか？』

『あの人、そんなこと何とも思つてゐやしないわ。――だつて、昔から何でもわたしに賴めばいゝと思つてゐるんですもの。だから、わたし今から、あの人を連れて龜井戸まで行つて來ようと思つてゐるのよ』

『龜井戸――あゝ健ちやんのところかい？』

彼女のこの唐突な計畫は、私を狼狽させた。

彼女の前夫の弟である盛哉といふ青年が、私たちを訪ねなくなつてから、もう半年あまりになる。彼はおせんと吉井一家との關係が形式的に全く絶たれてしまつたあとでも、平氣でおせんのところへ遊びに來てゐた。そして、彼が昔のとほりにおせんを「姉さん！」と呼んでゐたのも彼が少しばかり不良性を帶びた新時代の青年であつたからといふだけではなく、ずるずるに續いて來た關係の中から、急に態度を改めることの出來ない氣弱さからであつた。――半年近く會はないでゐる盛哉を私はほとんど忘れかけてゐたのだ。

『健介にでも聞いてみたらわかるかも知れないわ。こないだも健介の下宿に泊つたんですもの』

『そりやあ、もう三月頃のことぢやないか！』

『だつて――』

おせんは眉をしかめた。私には、おせんの言葉の意味がわかつた。彼女は、老人を、弟の下宿まで連れてゆくことの無駄な努力の中に、老人に對する幾分かの道義的な償ひを見出さうとしてゐるのだ。

『そりやあ、いゝさ。とにかく行つてみるんだね』

私は、すつかり明るい氣持になつてゐた。この空々しい言葉に憤りを感ずるよりも前に、私はおせんの片意地な人情の中から彼女の愛すべき善良さを感じようとした。

間もなく、彼等は出ていつた。おせんの、フエルト草履のあとから、老人の駒下駄の音が砂利の上に大きな響を殘して坂の下へ消えてゆく。

人氣のなくなつたがらんとした家の中で、私は何時ものやうに書齋の窓に凭れかかつた。ぶくぶくとふくれあがつた雲の塊りは、空のムードに定着してしまつたやうに動かなくなり、うるんだやうな太陽の光線が、靜かに底冷えのする大氣を運んできた。

すべてが空虚だ。——窪地を越えた赤い屋根の家では、二階の窓がすつかり明け放たれ、青いカーテンが左右にひろげられてゐるのに、室の中が妙に薄暗く淀んでゐるやうに見える。——

四

私は眼を醒ました。何處かで、豆腐屋のラッパが聞えるのだ。音が次第に遠くかすれてゆく。そのかすかな哀調が、私の頭に幻覺のやうな現實を蘇らせた。もう、夕方であらうか。それとも、まだ晝過ぎたばかりであらうか。

さつきから私は眼をひらいてゐたにちがひない。いや、今やつと眼が醒めたばかりなのかも知れない。

しかし、室の中の空氣が、だんだん暗くなつてくるのがわかる。——

ふと、私の心は妙な回想に囚はれはじめたのだ。晝寢から醒めたあとの憂欝な心に、豆腐屋のラッパが、きれぎれの

記憶を、不可思議な戰慄とともに運んできたのだ。

二年前である。私は郊外のある小さい町におせんと一所に住んでゐたのだ。住んでゐたといふよりも隱れてゐたと言つた方がいゝ。何故かと言へば、露路の隅つこにある、その一軒建の小さい家の中に、おせんと私とは門標も出さずに、朝も夜も戸をしめきつて暮してゐたのだから。まつたく、世間を恐れなければならなかつたし、また世間を憚る心の中に私たちは古風な人情に支配されたい氣持ちになつてゐたのだから。戀愛といふものは闇の中でうごめいてゐなければならないものだ。――

で、薄闇の中に泛んでゐる女の輪廓と向ひ合つてゐるうちに朝はひとりでに夜になつた。何の計畫もない人生の夜と朝！

佗しさが私の頭の中で凝結してしまつた。時計の無い家の中で、私の生活に時の記憶を喚び起させ、外界の刺戟をそりたてるものは豆腐屋のラッパだけだつた。

もう夕方なんだな。――ふと眠りから醒めて私はそう思ふ。おせんが、私のすぐ傍で坐つたまゝ疊に頬をすりつけて眠つてゐる。とぢ合せた瞼の間が少しづゝたるんで、仄白い外光の中に彼女の瞳が光つた。――さつきまで、一寸ばかりあけたまゝになつてゐる雨窓からくるかすかな明るみの中へ顔を俯せて古雜誌の頁をめくつてゐたのだが。起きてゐるのかな。――私は、そつと女の額の上へ掌をあてる。が、瘦せたかまきりのやうな身體は弓なりに曲つたまゝ動かない。

――私はそつと手をはなす。とたんに、おせんが首を左にねち曲げた。そのとき、ぽたりと疊の上に厚みのある音がして、大きな髮の束が私の手の先きにころがつてきた。すると、偏平にゆがんだ彼女の後頭部が私の眼の前に現はれたの

だ。私の心は不意にうすら寒さを感じた。私の眼の前には、おせんの頬の肉が、げつそりと痩せたやうに、耳のぐるりに深い翳が浮き出てゐるのだ。その瞬間、私はすつかり彼女に飽いてゐる自分の心に觸れたのだ。あの細く斜めに伸びてゐる首は、私が兩腕に力を入れて締めつけたら、そのまゝ息が絶えてしまふだらう。私は彈かれるやうに起きあがつた。どうしておれは？私は急に呼吸が忙しくなつてきた。――そのとき、私の眼は闇の中に光つてゐるおせんの眼を見たのだ。二つの眼が私を睨んでゐる。私の胸は、幽暗の底から浮んできたやうな光りに射つけられた。

『おい、――おい』

哀願するやうな私の聲とともに、私の手は無意識にのびておせんの肩にふれた。

その頃のことを、私はひよつこりおもひだしたのだ。窓の外は、もう、すつかり暗くなつてゐる。

私は起ちあがつて電燈のスヰツチをひねつた。それから、空氣を入れかへるために正面の開き窓を左右にひろげた。

一貫張りの机の上にある置時計が、もう二三分で六時にならうとするとき、足早に砂利を踏んでくるらしいおせんの草履の音が周圍の空寂の中から微かに傳はつてきた。その音は非常にしつくりと私の心に迫つてきた。――

五

私は、おせんに對する感情の、さまざまな危機をとほりぬけてきた自分を感じてゐるのだ。彼女から受ける女としての感覺が次第に稀薄になるにつれて、ほとんど致命的に私を苦めた憎しみと敵意とは愛情の變形であるべき約束を避けて、奴隷的な憐愍の方向を選びはじめた。

そういふ私の心に向つての對策は、自らおせんの心のうちにも用意されだした。つまり、正面から睨み合つてゐた私たちの位置は、何時の間にか、ぢりぢりとゐざつて、それぞれに、背中をすり合せたまゝ、顔を反けてしまつたのだ。そうして、私は漸く自分だけの生活に歸りはじめたのだ。

だが、進んで新しい情熱をかき立て、新しい衝動を湧き立たせる必要が何處にあらう。——この靜かな休息の中に、何時かきつと起るであらう、そして起るにきまつてゐる變化を待つて居ればいゝではないか。——

私はそんなことを考へはじめた。その突嗟の間に組みたてられた結論が、急に私を勇氣づけた。

おせんの草履の音は、門の近くで不意にぱたりととまつた。

窓の下までくると、おせんは手を伸して板ガラスの上をこつこつとたゝいた。それから表の方へ廻つて格子戸をあけた。

『あなた、——ほんとにすみませんでしたわね。すつかり遲くなつちやつて——』

彼女は、そう言ひながら、ぐつたりとひよろ長い足を疊の上に投げ出して坐つた。

『あなたお腹が空いたでせう。——わたし、ほんとに困つてしまふわね』

『………さつき喰べたばかりだよ』

私は机の前へごろりと横になつた。私のきげんがよくないのを知ると彼女は默つて立ちあがつて臺所の方へいつた。

井戸端で水を汲む音が聞えた。それから七輪の火を煽いでゐるらしい團扇の音が聞えてきた。

『おいー飯はいゝんだよ。飯は——』

私は甲高い聲で怒鳴つた。私の頭には肩から下が前屈みになつたおせんの背ろ姿が哀れつぽく泛んで來た。そして、傷ついてゐる者はおれだけぢやないんだ、あの女もすつかり疲れてしまつてゐるんだ、といふ考へが私を鋭くとらえた。

何時の間にか平常着に着替へてしまつたおせんが襷がけのまゝで入つてきた。火の傍にゐたせいか頰の色が生々と火照つてゐる。その眼の中にはかすかな反抗も含まれてゐなかつた。

『……あなた、盛哉さんはゐないのよ。まだ大阪にゐるかも知れないつて健介が言つてゐたわ。ひよつとすると不良少年にでもなつてゐるかも知れないわね』

『それで、吉井のお父さんはどうした？』

『品川で別れたの。停車場の近くの宿屋へ泊ると言つてゐたわ。――仕方がないから明日の朝歸るんでせう』

そう言つてから彼女は慌てゝつけ加へるやうに、言つた。

『……でも氣の毒な人だわ。宿屋なんかへ泊らないで家へいらつしやいと言つたんですけれど、あの人、とてもあなたに氣兼ねしてゐるのよ。品川で降りるとき、角田さんによろしくつて、きまりわるさうに言つたわ』

おせんは私の顏を見て笑つた。冷めたい風が私の心の底をすべつていつた。そして、吉井の顏が眼の前へうかんでくるやうな氣がした。一瞬間、すべての原因がおせんにあるのだといふ氣がした。妥協的な和解の上に立つて自分の正しさを主張しやうとするおせんのきもちが私の心に露骨な敵意を湧き立たせた。

私はおせんの顏を睨みつけた。――馬鹿！われわれは敵同志なのだ。吉井とおれとの間には永久に妥協の餘地はないのだ。吉井が若し正しい男だつたらお前から憐みをうけた瞬間に自殺してしまふだらう――。

しかし、私はすぐに顔を反けた。重苦しい塊りのやうなものが窒息しさうになつた私の胸の中を轉がり始めたのだ。

『……おい、蒲團を敷いてくれ。おれは眠くなつたから――』

おせんは默つて立ちあがつた。彼女は夫の唐突な不機嫌が何に原因するかといふことを追求しやうとしなかつた。

『一枚だけでいゝんだよ。すぐ起きるんだから』

私は荒々しく言つた。妻は押入をあけて薄い敷蒲團を敷きはじめた。

六

二日降り續けた雨が、からりと晴れた。私は蒲團の中で、朝の郵便が配達されるのを待つてゐる。私の心は小さい變轉を期待してゐるのだ。

かういふ變轉に對する心の構へは、おせんと二人きりの生活が始まつてから何時とはなしにつくりあげられた。――それは、外界から迫つてくる刺戟によつて、動かない生活の上に、かすかな明暗を期待するといふだけではない。恐しい偶然――それはいまとなつては偶然といふほかはない――が私の立つてゐる現實を滅茶苦茶にたゝきのめしてしまふだらうといふことを、私はひよつこり考へるのだ。すると、もう何年となく匿し了せられた私の心の秘密がむつくりと眼を醒すのだ。

荒々しく砂利道を踏んで足音が近づいてきた。郵便配達にちがひない。

私は慌てゝ起きあがる。弛んだ私の神經が彈かれたやうに跳ね返り、その疑問あり得べからざる變轉に心を構へながら私は正面の開き窓をあける。――

郵便配達の青年は門のところで私に笑ひかけた。彼には、每朝、出窓にもたれかかつて郵便物の來るのを待つてゐる此家の主人の悲壯な表情がいかにも滑稽に見えるのだらう。私は私に近かづいてくる青年の視線の中からおゝ、ゐた、ゐた、やつぱり待つてゐやがるな、とでもいつたやうな好意ともつかず、嘲りともつかぬへんな感じが閃いたのを知つた。

『これだけです』

かう言ひながら彼は、わざと郵便物を、慌てゝ彼の方に差しのばした私の手には渡さないで、出窓の臺の上へ輕く投げるやうに置いた。

之れは、上海にゐる森近から來たものだつた。——これで私の心は、すつかり安らかになり霧のやうな退屈な憂欝が、虛(うろ)になつた胸の中を充たしはじめる。私は再び蒲團の中へもぐりこんで、手紙の封を切つた。——あの男とわかれてから、もう三年になる。その間、私は一度だつてあの男から手紙がくることを想像したこともないのだ。これだけ遠く離れて住んでゐる私に向つて彼が現實の交渉を保つ必要は少しもなかつたし、私の安否に對して彼が世間的な理智を働かす理由もある筈がなかつたのだ。かりに、彼がひよつこり私のことをおもひだしたところで手紙を書かうなどといふ氣持ちにはならないにきまつてゐる。

そう考へることが私の記憶に生きてゐる森近の幻像(イメージ)を一層素晴らしい放浪者につくりあげるのだ。まつたく私は———二年前に彼が、一年近く勤めてゐたN新聞社をやめて、また昔と同じやうに山東方面をぶらついて暮してゐるといふことも、それから半歲ばかり經つて濟南の何處かで知り合ひになつた看護婦と一所に上海の吳淞路で間借りをして佗し

い夫婦暮らしをしてゐるといふことも、上海に住むほかの友人の通知によつて知つただけで、森近からは何の知らせも受けとらなかつたのだ。――

そんな考への中に自分の心を誘ひ入れながら私は、無關心なきもちで五六枚の書簡箋にぎつしり字を詰めて書いた彼の手紙をひろげていつた。

……………前略。數日の後、いやおそらくはこの手紙と前後して君は僕についての異常な事件にぶつかるにちがひない。君の紹介狀を持つてN新聞にやつてきた原田少年は二日前に僕が日本に追ひ返した。萬事は彼の口から聽くことが出來るだらう。僕は何にも言はない。君はこの小さい事件にも、きつと正しい判斷を投げてくれることを信じてゐる。

――いや、實はそんなことは大したことぢやあないのだ。それよりも寒くならないうちに一度妻君同伴で上海へやつて來ないかな。今日も大村君と會ひ君がくればいゝといふ話をしたのだ。實際、秋に入ると夏の殺風景は一變する。上燈節がすむと江南一帶の楊柳が黄ばみ胡弓の哀音に「遊子腸を斷つ」ときがくる。君が來られるなら大村君は赫司克而（ヘスケル）路の住宅に案内すると言つてゐる。例の並木の美しい鞄子（ポーツ）路から一寸はいるとすぐだ。君にはヱランダのついた日本風の部屋を提供すると言つてゐる。愈々實行してほしい。日支聯絡船にのれば長崎から二十二時間目に船は楊子江に入り、あと二時間で滙山碼頭につく。來てしまへばいゝ。旅費だけあれば澤山だ。碼頭には僕と大村君が迎ひにゆくから碼頭から自働車ですぐに自分の室にゆける譯だ。その夜は支那料理だ。老酒と青豆蝦仁に舌皷を打たう。大村君は非常な待ち方だ。是非決行してほしい。云々………

私は一氣に手紙を讀み終つてしまふとそのまゝ枕元へ投げた。――何といふ素的な誘惑だ！　支那で暮してゐた頃の氣輕な自由さが私の頭の中を蠢きはじめた。

七

だが、異常な事件といふのは何のことであらう。私は腹這ひになつて、もう一度手紙を讀み直した。私はその中から、彼が殊更言ふことを避けてゐる事件についての暗示を得なければすまないやうな氣持ちになつてきたのだ。………君の紹介狀をもつてN新聞にやつてきた原田少年は二日前に僕が日本に追ひ返した。……！……私の視線は此一句の上に凝滯してしまつた。この言葉の底には何ものかに對する忌はしい憤りが疊みこまれてゐるではないか。いや、さう考へることは私のひがみであらうか。

事件は森近の身邊に起つたものにちがひない。そして、わざわざ内容を説明することを避けながら、いや大したことぢやあない、と見榮を切らなければならないほど搖り動かされてゐる彼の魂を私は鮮に感じた。

——おゝ、やつぱりさうなのだ。女を奪はれたときほど男が慘めさを感ずることはないのだ。そして、あの男は自分の生活の安定點を失つてしまつたのだ。——

しかし、私はすぐに此獨斷的な解釋をはねつけた。

事件はもつと世俗的な小さいことにちがひない。まさか、原田が森近の生活の攪亂者になるなぞといふことは考へられないことだ。——

いや結局そんなことはどうだつていゝのだ。私に何の關はりがあるものか！だが、私の空想は自由に馳り出したのだ。そして、私の心は一層しつくりと、打消した考の方へひかれていつた。ちやうど、私自身の生活の上に何事かの暗示を投げかけられてゐるやうな、無氣味な佗しさが私の心を壓へつけた。

い夫婦暮らしをしてゐるといふことも、上海に住むほかの友人の通知によつて知つただけで、最近からは何の知らせも受けとらなかつたのだ。――

そんな考への中に自分の心を誘ひ入れながら私は、無關心なきもちで五六枚の書簡箋にぎつしり字を詰めて書いた彼の手紙をひろげていつた。

………前略。數日の後、いやおそらくはこの手紙と前後して君は僕についての異常な事件にぶつかるにちがひない。君の紹介狀を持つてN新聞にやつてきた原田少年は二日前に僕が日本に追ひ返した。萬事は彼の口から聽くことが出來るだらう。僕は何にも言はない。君はこの小さい事件にも、きつと正しい判斷を投げてくれることを信じてゐる。――いや、實はそんなことは大したことぢやあないのだ。それよりも寒くならないうちに一度妻君同伴で上海へやつて來ないかな。今日も大村君と會ひ君がくればいゝといふ話をしたのだ。實際、秋に入ると夏の殺風景は一變する。上燈節がすむと江南一帶の楊柳が黄ばみ胡弓の哀音に「遊子腸を斷つ」ときがくる。君が來られるなら大村君は赫司克而（ヘスケル）路の住宅に案内すると言つてゐる。例の並木の美しい鞄子（ボーツ）路から一寸はいるとすぐだ。君にはヱランダのついた日本風の部屋を提供すると言つてゐる。愈々實行してほしい。日支聯絡船にのれば長崎から二十二時間目に船は楊子江に入り、あと二時間で滙山碼頭につく。來てしまへばいゝ。旅費だけあれば澤山だ。碼頭には僕と大村君が迎ひにゆくから碼頭から自働車ですぐに自分の室にゆける譯だ。その夜は支那料理だ。老酒と靑豆蝦仁に舌鼓を打たう。大村君は非常な待ち方だ。是非決行してほしい。云々………

私は一氣に手紙を讀み終つてしまふとそのまゝ枕元へ投げた。――何といふ素朴な誘惑だ！　支那で暮してゐた頃の氣輕な自由さが私の頭の中を蠢きはじめた。

七

だが、異常な事件といふのは何のことであらう。私は腹違ひになつて、もう一度手紙を讀み直した。私はその中から、彼が殊更言ふことを避けてゐる事件についての暗示を得なければすまないやうな氣持ちになつてきたのだ。………君の紹介狀をもつてN新聞にやつてきた原田少年は二日前に僕が日本に追ひ返した。……!……私の視線は此一句の上に凝滯してしまつた。この言葉の底には何ものかに對する忌はしい憤りが疊みこまれてゐるではないか。いや、そう考へることは私のひがみであらうか。

事件は森近の身邊に起つたものにちがひない。そして、わざわざ內容を說明することを避けながら、いや大したことぢやあない、と見榮を切らなければならないほど搖り動かされてゐる彼の魂を私は鮮に感じた。

――お〻、やつぱりそうなのだ。女を奪はれたときほど男が慘めさを感ずることはないのだ。そして、あの男は自分の生活の安定點を失つてしまつたのだ。――

しかし、私はすぐに此獨斷的な解釋をはねつけた。

事件はもつと世俗的な小さいことにちがひない。まさか、原田が森近の生活の攪亂者になるなぞといふことは考へられないことだ。――

いや結局そんなことはどうだつていゝのだ。私に何の關はりがあるものか!だが、私の空想は自由に馳り出したのだ。そして、私の心は一層しつくりと、打消した考の方へひかれていつた。ちやうど、私自身の生活の上に何事かの暗示を投げかけられてゐるやうな、無氣味な佗しさが私の心を壓へつけた。

第一、原田が日本へ歸つてくるといふことが私を尠からず不安にした。私はあの青年を恐れてゐるのだ。――あの青年が私に對して絶對的な好意を感じてゐるといふことを恐れてゐるのだ。そのために私は彼の純良を信じなければならないし、自ら避けながら、結局彼に對する奴隷的な保護者の位置に立たなければならなくなる自分を覺悟しなければならないのだ。

彼が私を訪ねてきたのは今年の春だつた。最初、大阪から手紙をよこし、それから二三日たつて唐突に私を訪ねてきたのだ。私は彼に返事を出さなかつたし、また來訪を豫期しなかつたので、どぎまぎして彼を迎へなければならなかつた。

机を間に挾んで私と向ひ合つた青年は、むつつりと口を噤んだまゝ進んで話しかけようとしなかつた。しかし、それは彼が私を恐れ自分の地位にひけ目を感じてゐるからではない。彼の眼は自分の權利に安んずるもののやうに悠揚たる落ちつきを示してゐた。その平つぺたくふくらんだ顏には彈力があふれ、艶やかに輝いた皮膚の色は私に老衰を感じさせた。

私は段々此青年に壓倒されてゆく自分を意識してきたのだ。で、私は進んで彼に話しかけなければならなくなり、彼の議論に合槌をうたなければならなくなり、到頭、彼の中の新しい時代に追從してゆくために自分を一層みすぼらしいものにしなければならなくなつた。そして、彼の歸つたあとで、自分の道化た所作を冷笑することが出來なくなるほど心の空虛を感じてしまふのだ。――

青年は二三日經つてまたやつてきた。彼はもう私に對する親しさに安んじ切つてゐた。そして、十年の年長者である

私に對して具體的な權利を要求しはじめた。私は彼の純良と大膽とを疑ふことができなくなり、自分の能力を顧る前に、彼の職業と生活とを保證しなければならなくなつてゐる自分を感じてしまつた。

……どうです。私は支那へゆきたいんですが——彼は、はつきりした口調で命令するやうに言つた。

……そりやあ、いゝね。——私は前に、上海の生活が彼のやうな自由な性格の所有者に、どんなにしつくり合つてゐるか知れないといふことを話したのだ。

その翌日私は、東京にゐる友人に手紙を出し此青年を上海のN新聞社に紹介してくれることを頼んだ。友人は長く上海に住んでゐたので知己も多かつたし、それにN新聞社の社長がちやうどそのとき東京の自宅に來てゐたので話がすぐに纏つた。

……君、上海に行つたらこの男に會ひたまへ。この男はきつと君が好きになつていろいろ世話してくれるから——。

愈々彼が出發する日になつて、私は、もうほとんど私の記憶から消えかかつてゐた森近にあてゝ長い紹介狀を書いたのだ。

八

あの青年が再び日本へ歸つて來る。——そう考へることは、ちよつと堪らないことだつた。私は私の前に傲然として坐つてゐた青年の姿をおもひだすことが苦しくなつてきた。

あの自由な潑剌とした新時代とは、もう交渉がなくなつてゐるのではないか!

私の心は青年の眼が遠くから私を睨みつけてゐるのを感じだした。

次の日、私は青年が長崎から出した手紙を受け取つた。

……おゝ。だんだん近づいて來たな。——私の心は敵に對して武裝しはじめたのだ。手紙はN新聞社の原稿用紙に書いてあつた。

——今日私たちは長崎へ着きました。金がないので汽車に乘れません。出來るならすぐに電報爲替で二三十圓送つて下さい。私は前に私たちと書きました。そうです、二人です。私たちは非常な迫害を受けて上海を逃れてきたのです。云々

私は急に身體が硬ばつてゆくやうな氣がした。やつぱりそうだつたのだ。あの男は女を連れて歸つてきたのだ。若し、その女が森近の妻君であつたら——。

そわそわとした感じが私の胸の中に波打ちはじめた。運命的な豫感が私の頭をかすめて通つた。そして私の最も恐れてゐるものがあの青年によつて、かきたてられやうとしてゐるのを感じた。私が心の底深く匿し終つた呪はしさを彼は傲然として明るみへ引きづり出そうとしてゐるのだ。

瞬間、私の胸に新しい反抗が燃えてきた。彼は森近の妻君を奪ふことに當然の權利を感じてゐたにちがひない。——道徳と人情を蹂躙することに彼は誇らしい自由を感じてゐたにちがひない。

彼は私の心の秘密を白晝にさらけ出してゐるのではないか！私があまりにも自分がみすぼらしい人間にすることによつて漸く盗み得たものをあの男は肩を聳やかして奪ひそして自分を一層正義な人間にしてしまつてゐるのではないか！

私は森近がわざと言葉を避けてゐた氣持をありありと感じ、あの青年の冷笑から逃れることが出來なくなつてゐる自分を意識しなければならなくなつた。そして、私と一所に上海に住んでゐた頃の、垢じみた、だぶだぶのヅボンをはいた森近の無恰好な姿が私の回想の中によろけてきた。あの男が自分の妻君に對して悲しいあきらめを持つてゐたといふ

ことを私はおもひだした。そして、そのあきらめが、あの男の生活に虚無的な色彩を濃くし、あの男を佗しい放浪者にしてしまつたといふことを。――

この古ぼけた放浪者が、四十歳に近くなつてやつとすがりついた幸福を、勇敢な新時代の青年は、彼の置き忘れた帽子をとるよりも容易にかすめ去つてきたのだ。

だが、私が森近の佗しさに同情することが何を意味するのだ。青年が、正當の權利を行使したといふ言葉に何の僞りがあらう。これは正しいことにちがひない。――その重苦しい結論が私の心を壓へつけた。

しかし、ことによるとすべてが私の思ひちがひなのかもしれない。あの男は廣東姉でも盗みだしてきたのぢやないか。桃色の半ズボンをはいた少女を連れて日本へ歸つてくる。いや、あの男にはありさうなことだ。

九

灰色の曇つた空が冬を感じさせる。突ッ風が砂塵を煽り落葉を鳴らして通りすぎてゆく。――あたりの風物が急にそわそわと動きはじめた。

斷崖に沿つて竝んだ椎の並木が風を受けて烈しく前後に搖れることに、私は自分の身體が並木の梢と一所に窪地の中へなぎ倒されてゆくやうな苛立たしさを感じた。

私の頬杖をついてゐる出窓の上には、さらさらとした砂埃りが薄い屑をつくり、閉め切つた開き戸のすき間からは濁つた冷さが流れこんでくる。――

私はもうぢつとして坐つてゐるのが苦しくなつた。朝から吸ひ續けてゐる煙草のために私の頭の中は蒸しあつくな

次の日、私は青年が長崎から出した手紙を受け取つた。

……おゝ。だんだん近づいて來たな。——私の心は敵に對して武裝しはじめたのだ。手紙はN新聞社の原稿用紙に書いてあつた。

——今日私たちは長崎へ着きました。金がないので汽車に乘れません。出來るならすぐに電報爲替で二三十圓送つて下さい。私は前に私たちと書きました。そうです、二人です。私たちは非常な迫害を受けて上海を逃れてきたのです。云々

私は急に身體が硬ばつてゆくやうな氣がした。やつぱりそうだつたのだ。あの男は女を連れて歸つてきたのだ。若し、その女が森近の妻君であつたら——。

そわそわとした感じが私の胸の中に波打ちはじめた。運命的な豫感が私の頭をかすめて通つた。そして私の最も恐れてゐるものがあの青年によつて、かきたてられやうとしてゐるのを感じた。私が心の底深く匿し終つた呪はしさを彼は傲然として明るみへ引きづり出そうとしてゐるのだ。

瞬間、私の胸に新しい反抗が燃えてきた。彼は森近の妻君を奪ふことに當然の權利を感じてゐたにちがひない。——道徳と人情を蹂躙することに彼は誇らましい自由を感じてゐたにちがひない。

彼は私の心の秘密を白晝にさらけ出してゐるのではないか！私があまりにも自分がみすぼらしい人間にすることによつて漸く盜み得たものをあの男は肩を聳やかして奪ひそして自分を一層正義な人間にしてしまつてゐるのではないか！

私は森近がわざと言葉を避けてゐた氣持をありありと感じ、あの青年の冷笑から逃れることが出來なくなつてゐる自分を意識しなければならなくなつた。そして、私と一所に上海に住んでゐた頃の、垢じみた、だぶだぶのヅボンをはいた森近の無恰好な姿が私の回想の中によろけてきた。あの男が自分の容貌に對して寂しいあきらめを持つてゐたといふ

ことを私はおもひだした。そして、そのあきらめが、あの男の生活に虚無的な色彩を濃くし、あの男を佗しい放浪者にしてしまつたといふことを。——

この古ぼけた放浪者が、四十歳に近くなつてやつとすがりついた幸福を、勇敢な新時代の青年は、彼の置き忘れた帽子をとるよりも容易にかすめ去つてきたのだ。

だが、私が森近の佗しさに同情することが何を意味するのだ。青年が、正當の權利を行使したといふ言葉に何の僞りがあらう。これは正しいことにちがひない。——その重苦しい結論が私の心を壓へつけた。

しかし、ことによるとすべてが私の思ひちがひなのかもしれない。あの男は廣東娘でも盗みだしてきたのぢやないか。桃色の半ズボンをはいた少女を連れて日本へ歸つてくる。いや、あの男にはありさうなことだ。

九

灰色の曇つた空が冬を感じさせる。空ツ風が砂塵を煽り落葉を鳴らして通りすぎてゆく。——あたりの風物が急にそわそわと動きはじめた。

斷崖に沿つて竝んだ椎の並木が風を受けて烈しく前後に搖れるごとに、私は自分の身體が並木の梢と一所に窪地の中へなぎ倒されてゆくやうな苛立たしさを感じた。

私の頬杖をついてゐる出窓の上には、さらさらとした砂埃りが薄い層をつくり、閉め切つた開き戸のすき間からは濁つた冷さが流れこんでくる。——

私はもうぢつとして坐つてゐるのが苦しくなつた。朝から吸ひ續けてゐる煙草のために私の頭の中は蒸しあつくな

り、すべての考が蜘蛛の巣のやうな朦朧とした網の中に絡みついて、私の心を益々苛立たせるのだ。それに、もう月末が近づいてゐるし、私はどうしても金をつくらなければならないのに、私の頭の中には一つの纒つた考も浮んで來ないのだ。

私は少し外を歩いて來ようといふ氣持になる。坂の下の小さい林の中の細い道を私は頭の中に描きだした。立木にかこまれた細い道には去年からの落葉が、新しい落葉の下に埋れてゐる。その落葉の上を草履で踏みつけてゆくときのゆとりのある感觸を私はおもひ出したのだ。その道は僅か二三町しかなかつたけれど、深く入つてゆくにつれて道は一層狹くなり、何時も私の心に、妙な奥深いところに入つてしまつたといふ不安を感じさせるのだ。

外へ出ると風はそれほど強くはなかつた。だが、家の中にゐたときよりも大氣が妙に薄暗く、もう日の暮れ方に近づいてゐることを思はせるのだ。――

私は後ろ手をしたまゝ坂の下へおりていつた。道が二つに岐れてゐるところへきて私はちよつと立ちどまつた。私は林の中へ入つてゆくことが急に不安になつてきたのだ。

私は窪地のへりの坂道を眞直ぐに歩き出した。私の眼の前には赤い屋根の家が聳え、道に面した斜面には劃りたてたやうな大根畑の畔がつらなり、此處から窪地を越えて斷崖の上の推並木を見上げると正しい間隔を置いて竝んだ太い幹の行列が私の心を莊嚴な感じに導く。

赤い屋根の家の垣根に近づいたとき、私はふと何ものかゞ私の背ろから迫つてくるのを感じた。私は慌てゝ振り返つたが誰れも私に近づいてくる者はなかつた。しかし、私の耳はたしかに人間の足音を聽いたのだ。それは、下駄でも無

い、靴でもない、………草履で地の上をひきづつてくるやうなかすれた音だ。だが、その音は段々私の耳から遠のいてゆくではないか！私はまた歩きだした。二三歩、歩きだしたとき、私は思はず聲をあげて立ちどまつた。私はまつたく新らしい道を發見したのだ。右手の高臺になつてゐる畑の下に、赤い土肌を露はに出した新らしい道路が出來上つてゐるのだ。――一ト月ばかり前には、こんな道はなかつたし、それに此の高臺は私の家の窓からは見えないので、私は新しい道路工事の始まつたことを知らなかつたのだ。

そのとき、正面の道から轍の音が響いてきた。半町ほどさきの藁圍ひの間から、七つか八つ位に見える子供が三輪車に乘つて近づいてきた。一生懸命に把手(ハンドル)を握つてゐるので兩肘が左右に突つ張り、上體が前屈みになつて、今にも前に倒れさうに見える。子供は私の一間ほど手前までくると急に把手を巧みに左にねぢ曲げた。そのまゝ、ぢりぢりと方向を變へると、背ろ向きになつて走り出した。轍の音は次第に遠くなり、そして寂しい子供の背ろ姿は藁圍ひの前から左手の道に吸ひこまれた。

さつきの足音は此の三輪車の音が風に響いてきたのだ。――するとこの新しい道路は高臺の下を一廻りして藁圍ひの向うの道まで通じてゐるのかも知れないな。――そんな風に考へながら私の心は此の新しい變化の中に未知の人生を見出したやうな氣になつた。

そのとき、赤い屋根の家の臺所口の硝子戸があいた。もう四十恰好に見える背の高い女が出てきた。髪は七三に分けてゐたが、色の淺黑い骨張つた頬が妙に節くれ立つた感じを與へた。女は口を尖らして口笛を吹くやうな恰好をして小走りに門の方へ歩いていつた。女は門のところに立ちどまつて、きよろきよろあたりを見廻はしてゐたが、不意に二三歩私の方に歩いてきた。

子供を探してゐるのにちがひない、——と私の神經はすぐに感じた。しかし、女は私を見ると何か言ひかけそうな表情をして、慌てゝ視線を外らした。

私はほとんど無意識に向きを變へて歩きだした。私はもう此處に長く立つてゐることは出來なかつたし、私の心には一筋の不快な影が射しはじめたのだ。で、私は、懐ろ手をしたまゝ、ゆつくりゆつくりと、のぼつてきた坂道を下りながら、妙にそわそわとした感情に囚へられた。

下女だらうか？下女にしてはあの態度はあまりに落ちつきすぎてゐるではないか！すると、やつぱり、二階の窓から私の方を見下ろしてゐた若い妻君は、あの乾からびた女だつたらうか？

私の心の中に、それぞれの位置を保つて成長してゐた幻想が段々姿勢を崩しはじめた。そして、私は裏切られかけてゐる自分に對して烈しい不安を感じてきた。

坂を下りきつたとき私は振返つて赤い屋根の家を見上げた。二階の窓は硝子戸がすつかりとざされ、灰色の大氣の中に此の暗い家の聳えてゐることが、私を堪らなく不幸にするやうな氣がした。

空氣が惡いのだ。——だが、こんなときによく思ひがけないことがあるものだ！　私の不安はすぐに上海から歸つてきた青年に結びついた。——

十

長崎から出した手紙を私が受け取つてから四日目に、青年は到頭やつてきた。

昔と同じとほりの灰色のルバシカを着た青年の姿が私の室の窓に映つたとき、私は彼に對して好意をもつて迎へなけ

ればならなくなつてゐる自分を感じた。彼は右腕に小さい風呂敷包を抱え、傲然として肩を聳やかしながら近づいてきた。私はもう彼の正視を避けることが出來なかつた。

青年は私を見て笑ひかけた。それから、彼は入口の方へ歩いていつた。

私は以前と同じやうに机を間に挾んで彼と向ひ合つて坐つてゐるのだ。彼に對して懷いてゐた反感はあとかたもなく消えてしまひ、私の心は再び彼の保護者であるといふ自覺に歸りはじめた。——

『長崎から出した手紙は屆いたけれどね。ちようど金が無かつたもんだから………』

私は、もうこんな辯解をやりだしたのだ。

『………一昨はもうすつかり困つちやつたんですけれど、いろいろ都合して歸つてきました』

彼は兩足をだらりと疊の上へ投げ出しながら言つた。それから、足の上で風呂敷包をひろげ、卷煙草の入つた罐をとり出した。

『いや、これはありがとう』

私は"Navy Cut"の罐を自分の方へ引き寄せた。青年が、もう一つの新聞紙にくるんだものをとりだしたとき、おせんがお茶を持つてはいつてきた。

『原田さん——まあ、莫迦にお歸りになるのが早いぢやありませんか?』

青年はその問ひには答へないで、新聞紙にくるんだものをおせんの前に出した。

『これは奥さんに買つてきたんです。——あゝそれから……』

と言ひながら一番底に入れてあつた埃つぽつたい本を机の上へのせた。」

『何か參考になると思つて……』

青いクロースの表紙に手垢ですつかりしみのついてゐる本を私は慌てゝとりあげた。

「支那風俗志」と書いた光澤を失ひかけた金文字が私の眼に映つた。きつと吳淞路あたりの古本屋で探し出してきたのだらう、と思ひながら私の心は少しづつ彼の好意の中に牽きこまれていつた。

『……あの、森近君から手紙は來ませんでしたか？』

「支那風俗志」のざらざらの頁を膝の上でめくりかけたとき、靑年が、響きのある、はつきりした聲で言つた。

『森近、――あゝ、手紙が來た。だけど、君のことは書いてなかつた』

森近君！　と言ひきつた靑年の言葉に私は輕い反感を持つた。……さういふ言ひ方の中に、森近に對して、敵意と憤りとに充ちた姿勢をとつてゐる靑年の心を感じたのだ。

だが、そのとき、私は自分の膝の上にひろげた頁の上に、「上海N新聞社藏書」と楷書で彫つた印判のあとを見出した。――これはどうしたのだ。この本は？――私は、一瞬間、靑年の前に吼え立てやろうといふ衝動に驅られた。……君は、N新聞社の書架の上から盜みとつたこの本を土產にくれようと言ふんだね。――

しかし、私の胸にはすぐに輕い微笑がのぼつてきた。

『……いや、君の說明をきかなくつても、大槪想像はつくがね』

私は、「支那風俗志」をとぢて膝のそばへ置きながら、鋭く靑年の横顏を見た。

『…………』

彼の頬にはぼうつと赤味が流れた。そして、俯むいたまゝ默つてしまつた。——青年の純良さが再び私の心に反射してきた。私は彼が氣の毒になり、彼の心を、もつと自由にしてやらなければならないといふ氣持ちになつた。

『大抵わかつてゐるがね。——だから、君の說明なんか改めて聽かなくつたつていゝんだ。唯、これから、君がどうして生活を立てゝゆくかといふことが問題なんだから——』

『えゝ、これからは、…………』

彼はかう言ひかけてから、慌てゝ言葉を途切らせた。そして、火照つた顏を私の眞正面に向き直した。

『いや、私は、今度のことのために、私に對するあなたの感情が變りやしないかと思つてゐたんです』

『僕の感情？だつて、僕には善いとも惡いとも言へないぢやないか！』

青年は、最早、事件を完全に說明し終つたあとのやうな氣輕い表情を示しだした。

『森近といふ人は、最初、あなたから聞いたとほりの人でした。人間らしい人はあの人だけでした。——それだけに、最後にあんな態度に出られやうとは思つてゐませんでした』

『あんな態度とは？』

『實に卑怯ですね。——そりやあ、あの人の氣持ちもわかりますけれど、——實に非道いです。腕力の強い破戸漢(ゴロツキ)のやうな男をよこして無理に私たちを船に乘せてしまつたんです』

朦朧としたまゝで頭の中に定着してしまつてゐた事件の輪廓が次第に明るい形をとりはじめた。私は森近の手紙をおもひだし、あの男の投げ出された境遇に、ぴつたり吸ひこまれてゆく自分を感じた。しかし、おれに森近の憤りを代表する資格があるものか！おれの場合は違ふんだぞ、と此の青年に向つて言ひきることなぞが出來るものか！

『すると、森近は此の事件が起つてから最後まで、君に對して反感を持ち續けたわけだね』

『えゝ、それが、卑怯なんです。——森近君自身は僕に好意を持つてゐるやうなことを言つてゐるんです。それだのに、わざわざ、へんな男をよこして、君たちがゐると上海の風紀を害するから、明朝の船で歸れ、なぞといふことを言はせるんです』

青年は昂然として言葉を續けた。

『……それに、最初、僕が僕等の氣持ちを打ち明けたときには、あの人はすつかり理解してゐたんです。そして、大部分質に入つてゐる女の着物なぞを出して渡してやると言つたんです。しかし歸るときには、それも實行してくれなかつたんです』

これは何といふことだ。——こんな時代が私の前に近づいてきたのか！私は腹立たしくなるといふよりもむしろ堪らなく、寂しくなつた。

『なるほどね——君は、君の戀愛に忠實だツたといふわけなんだね。だが、若し僕が君の場合だつたら、森近に仰ふことさへ苦しいね。僕にはそういふ場合の自分を、どうしても正しいとは思へないからね』

何氣なしに喋舌り終つてから、私は自分の言葉があまりに鋭く青年の胸に反射してしまつたことを感じた。ほんの二瞬間のうちに、彼の顔は眞赤になり、そして、すぐに眞蒼になつた。

もうこれだけでいゝのだ。私の心は完全に私自身の位置に坐つてしまつたのだから。

數分間、二人は默つたまゝ對坐してゐた。

『僕はもう歸ります』

青年は不意に坐り直した。——それから、忌ま忌ましそうに口をゆがめて、

『……あの、二十圓ばかりほしいんですが最近に出來ないんでせうか？』

口籠るやうに、少しかすれた顫へ聲が、不快な調子をもつて私の耳に響いた。

『金は無いね。——實際、僕自身が生活に困りぬいてゐるんだ。あればいくらでもあげるけれど』

私は輕く突放した。

『おやあ、これで少し出來ないでせうか？』

彼は内懐しの中から一束の原稿をとりだした。私はだまつてそれをうけとつた。

『それは預けておいてもいゝんですから』

青年は勢ひよく立ちあがつた。

『だけど、これは君、金にならないよ。それに僕の紹介なんか通用しないよ』

青年は慌てゝ私の顔を見下ろした。その眼はもうすつかりまづくなつてゐる自分の立場をはつきり意識しかけてゐるではないか！

『ぢやあ、またきます』

『あゝ、もう歸るんだね』

『えゝ』

彼は原稿の束を置いたまゝで歸つていつてしまつた。

今は全く黄昏である。――風が穏かになり周圍の風物がどつしりと沈んだ大氣の中に溶けてゆくのを感ずる。すべてを自然に任せようといふ氣持ちが私の胸の中に伸びあがり、靜かな彈力を湧き立たせてくるのだ。

私は薄暗い室の中に坐つて、窓からくる外光の中に青年の原稿をひろげはじめた。力にまかせて亂雜に書き詰められた行間のあがつた文字が、何とはなしに新鮮な感じを私の胸に運んできた。――おれは段々、かういふ人たちに壓倒されてゆくのではないか？おれはあまりに不要な感情を重んじすぎてきたのではないか？

しかし、さういふ疑ひの中に、私はもう自分が、あの青年の心から遠く遠く離れてゐる人間であるかもしれないといふことを感じた。

――だが、おれはまだ若いのだ――

細々とした聲が私の胸底をとほりぬけた。

十一

私はおせんと口をきかない日が多かつた。毎日、毎日、同じやうな朝から、同じやうな夜にうつつてゆく生活の中で、私たちは機械のやうに心を動かし、顏を見合はせてゐるだけではないか？私たちの話は日常の用事に限られてしまつたし、お互ひに、心の底に潛んでゐる祕密を探り出し、かき立てやうといふ誘惑を何處にも見出すことができなくなつてしまつたのだ。――一つの話題に對して唇だけが動いてゐて、心と心とは同じやうに別々のことを考へてゐるのだ。――かうして、私たちが一年一年と年を重ねて行くといふことは、春が秋になり、秋が冬に變るといふ以外に何を意味するのだ。――

私は、ときどき自分の人生が最早、おしまひに近づいてゐると感ずることがある。何故かと言へば、私は新しい變化が起るといふ豫想の中に、微かな幸福を感じながらも、進んでその中に心を投じようといふ要求を失つてしまつてゐるのだから。

私は明日のことを考へることが出來る。そうだ、今日のやうな明日を。そして、今日のやうな明後日を——。

私は、あまりに多くのものを用意し過ぎた。自分の生活の基礎工事に、私はあまりに周到になり過ぎた。一つの土臺石にも、一本の柱にも私はあまりに丹念な注意を拂ひ過ぎた。かうして、がつしりとした建築が出來上りかけたとき、私は始めて氣がついたのだ。この生活を破壞するためには、今まで自分の積み重ねてきた心の努力の何倍かゞ拂はれなければならないといふことを。——

若し、私がこの生活をぬけ出して、昔のやうに、ゆきあたりばつたりの放浪を始めたとしたら、——おゝ私の人生はどんなに忙しく悲しいものになるだらう。何故ならば、私はこの建築の基礎工事の中に私の心臟を埋めてきてしまつたのだから——。

私はもう、この生活の中でなければ生きてゆくことの出來ない人間になつてしまつてゐるのではないだらうか。私は、自分の過去を飾るために、きれぎれに現はれてくる生活の印象を拾ひあつめなければならなくなつてゐるのだらうか。——過去を飾る。そうだ。私は自分の正しかつたことを知つてゐるのだ。だが、そんなことが何であらう。私はもうすつかり失つてしまつてゐるではないか！

ある朝、私に宛てた二三通の手紙の中に、おせんに宛てゝ來た一枚のハガキが入つてゐた。差出人のところには何

つた文字で、「吉井拜」と書いてあつた。

私は何氣なしにハガキを裏返へした。

拜啓、過日は失禮いたし候。甚だ突然に御座候へども、その節お願ひ申上置き候金子、至急御送附下され度、實は小生も近頃は伜よりの送金無之ため貴女のみをたよりと致し居る次第に候へば、何卒御都合のつくだけにてよろしく候へば御願申上候。何時も無理なことばかり申上げて心苦しく候へども今度だけ是非共御配慮下され度願上候。末筆乍ら角田樣にも宜しく御傳へ下され度候。拜具。――

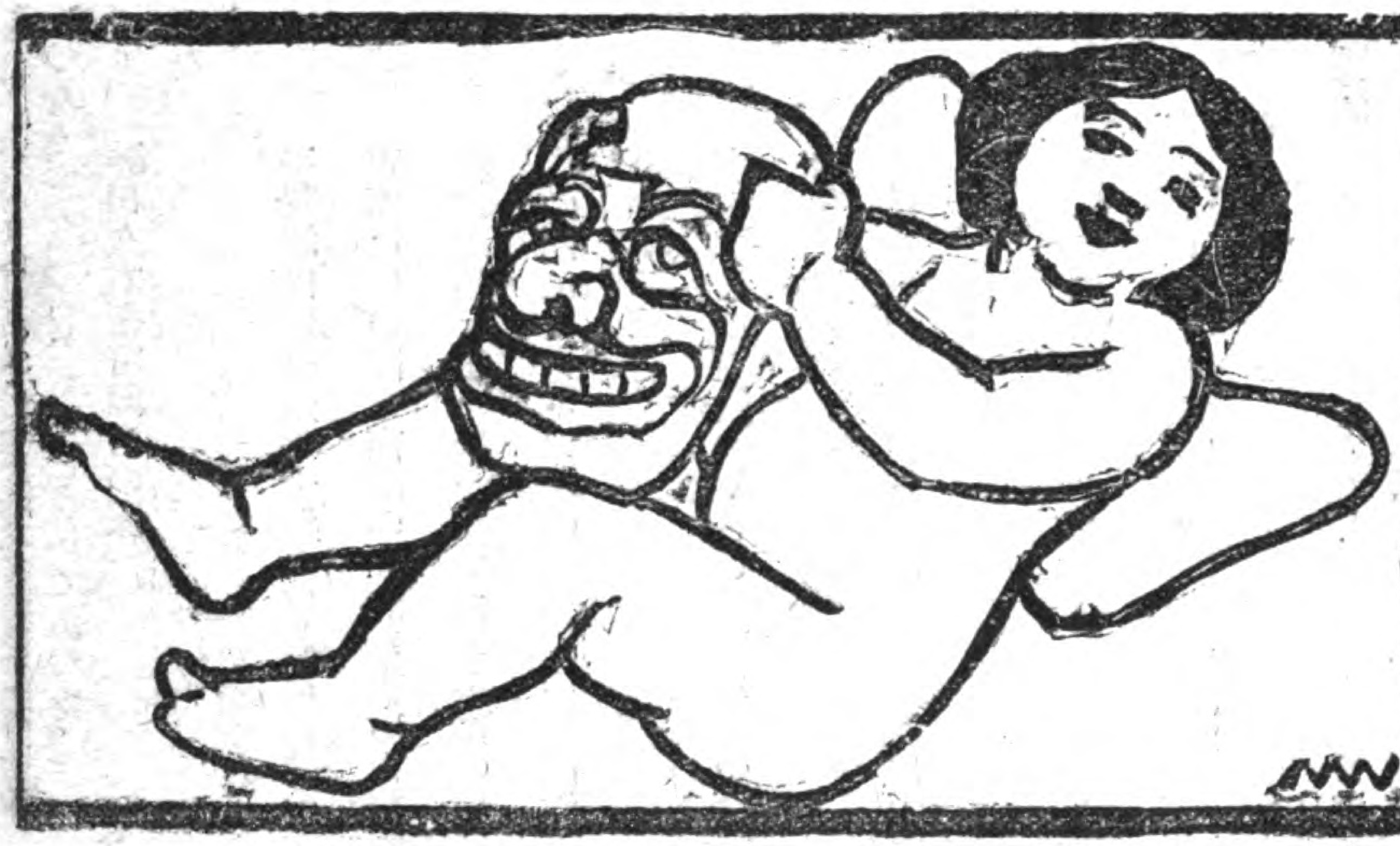
達筆で書き續けられた文字を一つ一つ拾つてゆきながら、私は、何ものかに鞭打たれてゐるやうな氣がした。

空は妙に曇つて、外はもう夕方のやうに暗い。――すべての情景が私の心に冬を感じさせるのだ。

冬になつたところで私の生活が、どう動くものでもない。何も彼もが、盡く窓に映る風景に過ぎないではないか！

私は默つて立ちあがつた。

（了）



平賀源内

吉井勇

人物

平賀源内

東天紅　門生

秋田福之介　同

一瓢　幇間

おやす　元丁字屋雛鶴

平秋東作

門生四五人

時代

安永八年十一月廿一日

つた文字で、「吉井拜」と書いてあつた。

私は何氣なしにハガキを裏返へした。

拜啓、過日は失禮いたし候。甚だ突然に御座候へども、その節お願ひ申上置き候金子、至急御送附下され度、實は小生も近頃は忰よりの送金無之ため貴女のみをたよりと致し居る次第に候へば、何卒御都合のつくだけにてよろしく候へば御願申上候。何時も無理なことばかり申上げて心苦しく候へども今度だけ是非共御配慮下され度願上候。末筆乍ら角田様にも宜しく御傳へ下され度候。拜具。——

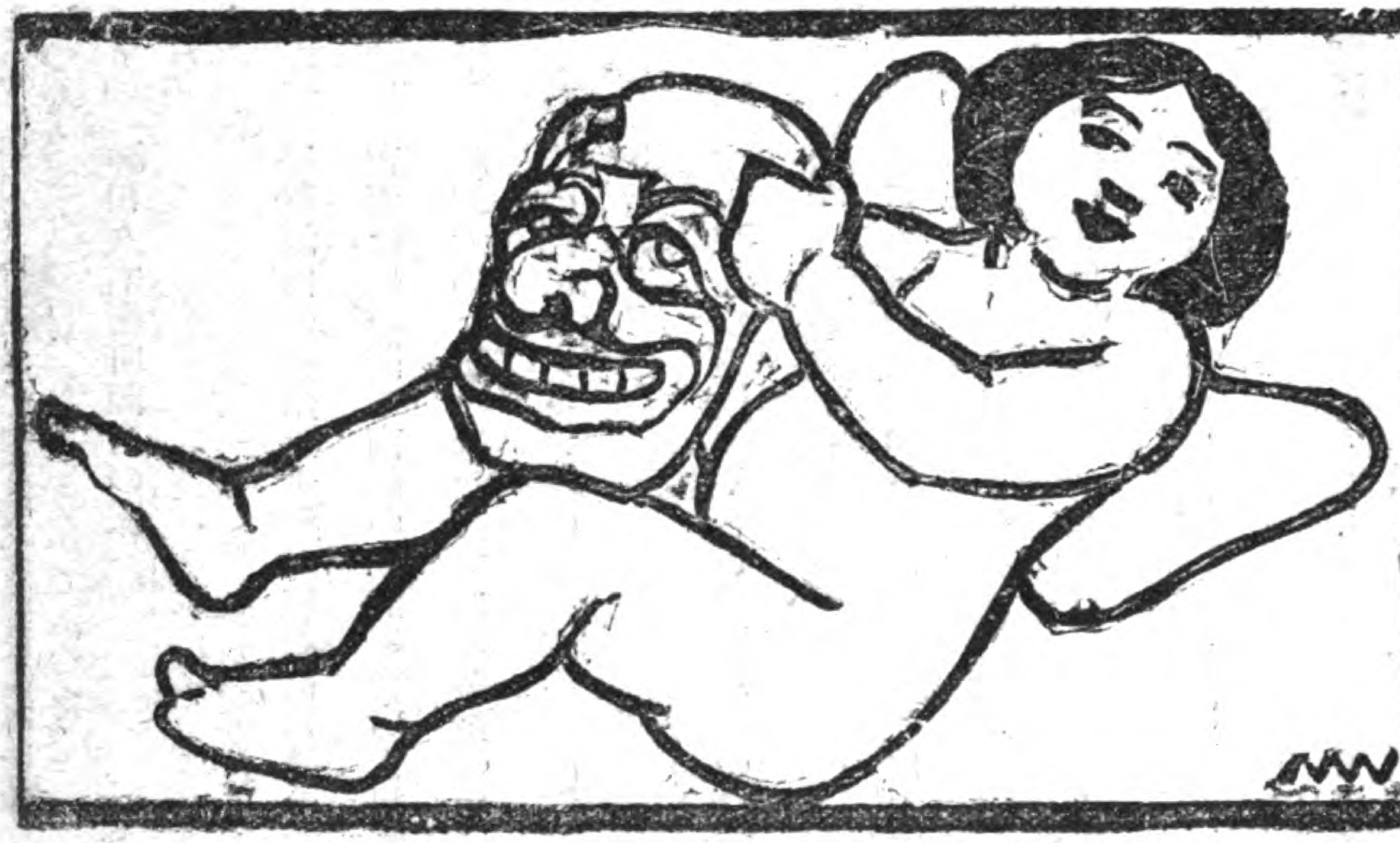
達筆で書き續けられた文字を一つ一つ拾つてゆきながら、私は、何ものかに鞭打たれてゐるやうな氣がした。

空は妙に曇つて、外はもう夕方のやうに暗い。——すべての情景が私の心に冬を感じさせるのだ。

冬になつたところで私の生活が、どう動くものでもない。何も彼もが、盡く窓に映る風景に過ぎないではないか！

私は默つて立ちあがつた。

（了）



平賀源内

吉井勇

人物

平賀源内
東天紅　門生
秋田福之介　同
一瓢　幇間
おやす　元丁字屋雛鶴
平秋東作
門生四五人

時代

安永八年十一月廿一日

場所

神田久右衛町源内の家

平賀源内の書齋。十疊の座敷に六疊の次の間。

正面に床の間。南畝の狂詩を書いた掛物が無造作に懸かつてゐる。

机、本箱などの置かれてゐる書齋の中は、主人の癖が直ぐ分るほど、きちんと片附いてゐる。机の傍に竹鞭、床の間にエレキテルの機械、阿蘭陀渡來の品など。次の間の六疊の正面が襖になつてゐて、そこからみんな出入りをする。

すべて古びた陰氣くさい、町屋風の構造。

午過ぎ。夕暮に近い時刻。

塾長の東天紅が、新しい門生の秋田福之介の肩を摑んで、座敷から次の間の方へ叱りながら押し出してゐる。天紅は三十二三歳位の老書生。福之介は二十歳位の青年。

天紅。何しに先生の書齋へなんぞ入るのだ。先生は書齋へ人が入ることが大嫌ひで、若し入つたことが見付かつたら、どんな酷い目に會ふかも知れん。さあ、出ろ、出ろ。もうこれから決して先生の書齋へは、足を踏み込むことはならんぞ。

福之介。はい、全くわたくしは何にも存ぜずに入つたのでございますから、何卒お許しを願ひます。

天紅。許すも許さんもないよ。誰か入つたことが分つたら、お前ばかりぢやあない、このわしまでが叱られるのだ。殊

にこの四五日來、御機嫌が大分よくないやうだから、うつかりしてゐると酷い目に會ふぞ。

福之介。はい、これからは氣を付けます。

天紅。ほんとに氣を付けて呉れ。門生の中に何か誤ちをしたものがあると、直ぐに天紅、お前の取り締り方が惡いからだと云れるのだ。いや、唯叱られるばかりならいいが、先生は直ぐにいつもの癇癖で、手馴れの竹鞭を持ち出されて、自分で打たれるばかりでなく、わしにも一緒に打てと云はれる。

福之介。先生は直きにそんな折檻をなさるのでございますか。

天紅。（點頭いて）なさるどころか、癇癪が起つたとなると、さう云ふことが度々あるのだ。まるで狂人のやうになつて、あの竹の鞭でぴしぴし打たれる。息が絕え絕えになるか、身動きが出來なくなるかするまで打たれるのだから、全く傍で見てゐても堪らない位だ。

福之助。ほんとにまるで狂人沙汰でございますな。

天紅。（跫音が聽えたので襖の方を振り返つて）しつ、そんな馬鹿聲を出すやつがあるか。若しそんな言葉が先生の耳にでも入つて見ろ。ぴしりぴしりあの竹鞭でやられるのは、いよいよ今度はお前の番だぞ。

福之助。（蒼くなつたが跫音が襖に消えたので安心して）しかしあれほど學問のある、えらい先生が、如何してそんなことをなさるんでせう。

天紅。それもやつぱり不平がおありなさるからだ。先生は如何にかして、この世の中を、もつと幸福なものにしたいと思つて、いろいろの仕事をして來られたのに、世間ではみんな先生を誤解して、やれ大山師だの、法螺吹きだのと云ふ。こんなことが先生には、心外に思はれて堪らないのだ。今の世の中にて十步進んでゐるうちはまだ可い。こ

れがもう百歩進んだとなると、もう世間の人達には、その人の價値が分らなくなつて來るのだ。別に進んでゐるものの目から見れば何でもないことが、世間の人達の目から見ると不思議に見える。何か事業を企てると、直ぐそれを見て山師だと云ふ。ところが先生は百歩どころではない、二百歩も三百歩も進んでゐるのだ。

福之助。成程。それでは不平をお起しになるのも道理ですな。

天紅。わしは先生の御胸中も察してゐるから、癇癪を起されるのも道理だと思つて、手荒なことをなさるのを、お留め申すことが出來ないのだ。（もう一度諷すやうに）それだからお前もこれから氣を付けて、なるべく先生に抗はぬやうにして吳れ。

福之助。はい、承知しました。

天紅。それから……これからは何事があつても、この先生の書齋へだけは入ることはならんよ。

福之助。はい、決して入りません。

天紅。先生は今何か大事なことを研究してをられるのだ。わしにも何とも云はれないが、それではひどく頭を悩ましておゐでの樣子だ。

福之助。（好奇心を起して）さうですか。何を研究してゐらつしやるのでせう。

天紅。何だか分らん。しかしこの間笑ひごとのやうに、わしはもうこんな狹い江戸などに跼蹐々々してゐないで、もつと廣い世界に出ると云つてをられたから、また何か新しい事業をなさるための研究だらうと思ふよ。

福之介。（呟くやうに）廣い世界に……。

天紅。何しろ先生の頭腦は、まるでわれわれとは違つてゐるよ。いつもわし達の夢にも及ばないやうなことを、何でも

ないことのやうに考へ出されるんだから……。（床の間の方を指差して）ほら、あすこに妙な形をした箱のやうなものが置いてあるだらう。

福之介。ええ、あります。あれは一體何んです。

天紅。あれが有名なエレキテルの道具だ。

福之介。ああ、あれが……。ちよつと見たところ鞴のやうな、不思議な形をしてゐるぢやありませんか。

天紅。何しろひとりでに火が出るのだから不思議だよ。（不圖氣付いて）しかし先生の前では、不思議だなぞと云ふてはならんぞ。物理學者の先生の目からは、世の中に不可思議なことの存在してゐることを許されないのだ。現にここの家だつて、盲人の幽靈が出ると云ふ噂があるのを、先生は關はず買はれたのだ。

福之介。ほんとにそんな噂があるんですか。

天紅。（やや聲を低くして）ここはもと神山檢校と云ふ高利座頭の住んでゐた家で、その座頭が死んでから、毎晩盲人の幽靈が出ると云ふのだ。しかしもうここに引つ越してから半年位になるが、そんなものは一度も出ないのだ。先生はそれ見ろと云つて笑つてをられる。

福之介。出ないと聽いて安心致しました。

天紅。いや、わしには幽靈よりも、先生の癇癖の方が怖ろしい。あの癇癖に怖れをなして、幽靈の方が出ないのかも知れんよ。はゝゝゝゝ。

天紅の笑ひ聲を聽き付けたやうに、門生の一人が襖を開けて顏を出す。

門生の一。ああ、東さん。先生のお歸りです。

れがもう百歩進んだとなると、もう世間の人達には、その人の價値(ねうち)が分らなくなつて來るのだ。別に進んでゐるものの目から見れば何でもないことが、世間の人達の目から見ると不思議に見える。何か事業を企てると、直ぐそれを見て山師だと云ふ。ところが先生は百歩どころではない、二百歩も三百歩も進んでゐるのだ。

福之助。成程。それでは不平をお起しになるのも道理(もつとも)ですな。

天紅。わしは先生の御胸中も察してゐるから、癇癪を起されるのも道理だと思つて、手荒なことをなさるのを、お留め申すことが出來ないのだ。(もう一度調すやうに)それだからお前もこれから氣を付けて、なるべく先生に抗はぬやうにして呉れ。

福之助。はい、承知しました。

天紅。それから……これからは何事があつても、この先生の書齋へだけは入ることはならんよ。

福之助。はい、決して入りません。

天紅。先生は今何か大事なことを研究してをられるのだ。わしにも何とも云はれないが、それではひどく頭を惱ましておゐでの樣子だ。

福之助。(好奇心を起して)さうですか。何を研究してゐらつしやるのでせう。

天紅。何だか分らん。しかしこの間笑ひごとのやうに、わしはもうこんな狹い江戸などに愚圖々々してゐないで、もつと廣い世界に出ると云つてをられたから、また何か新しい事業をなさるための研究だらうと思ふよ。

福之介。(呟くやうに)廣い世界に……。

天紅。何しろ先生の頭腦は、まるでわれわれとは違つてゐるよ。いつもわし達の夢にも及ばないやうなことを、何でも

ないことのやうに考へ出されるんだから……。（床の間の方を指差して）ほら、あすこに妙な形をした箱のやうなものが置いてあるだらう。

福之介。ええ、あります。あれは一體何んです。

天紅。あれが有名なエレキテルの道具だ。

福之介。ああ、あれが……。ちよつと見たところ鞴(ふいご)のやうな、不思議な形をしてゐるぢやありませんか。

天紅。何しろひとりでに火が出るのだから不思議だよ。（不圖氣付いて）しかし先生の前では、不思議だなぞと云ふてはならんぞ。物理學者の先生の目からは、世の中に不可思議なことの存在してゐることを許されないのだ。現にここの家だつて、盲人の幽靈が出ると云ふ噂があるのを、先生は關はず買はれたのだ。

福之介。ほんとにそんな噂があるんですか。

天紅。（やや聲を低くして）ここはもと神山檢校と云ふ高利座頭の住んでゐた家で、その座頭が死んでから、毎晩盲人の幽靈が出ると云ふのだ。しかしもうここに引つ越してから半年位になるが、そんなものは一度も出ないのだ。先生はそれ見ろと云つて笑つてをられる。

福之介。出ないと聽いて安心致しました。

天紅。いや、わしには幽靈よりも、先生の癇癖の方が怖ろしい。あの癇癖に怖れをなして、幽靈の方が出ないのかも知れんよ。はゝゝゝゝ。

天紅の笑ひ聲を聽き付けたやうに、門生の一人が襖を開けて顏を出す。

門生の一。ああ、東(あづま)さん。先生のお歸りです。

天紅。ああ、さうか。さあ、みんな早くお出迎ひをしろ、お出迎ひをしろ。

天紅と福之介は急いで出てゆく。四五人の門生が玄關の方へ走つてゆく跫音が聽こえる。——

短い間。平賀源內、襖を開けて入つて來る。五十一歲。半白の髮。色の白い小肥りに肥つた、人品のいい立派な男。

源內。（襖のところで廊下の方を振り返つて）おい、一瓢。何をしてゐるのだ。早く來い早く來い。はゝゝゝゝ、何を馬鹿なことを云つてゐるのだ。飛んだ茶釜の洒落なぞはもう古いぞ。そんなことを云ふとお前の年が知れるばかりだ。

源內はさう云ひ棄てゝ書齋に來て、神經質らしく座敷の中をぢろぢろ見廻はしてから机の前に座る。誰かいぢりはしなかつたかと云ふやうな心持で、机の上に置いてある書きかけの書類を注意深く改めて見てから、ぢつと腕を組んで考へ込む。肩がひとりでにぐつと暗く引き寄せられる。

廊下の方で門生達の笑ひ聲が聽こえたので、源內は急に顏を上げて、忌々しさうにそつちを睨む。

源內。ええ。何が可笑しい。何を笑つてゐるのだ。わしはああ云ふ笑ひ聲を聽くと、何だか胸がむかむかして來る。こんな馬鹿げた世の中に、何の可笑しいことがあるのだ。盲目萬人の世の中だ。目の開いたやつは、唯の一人だつてありはしない。

源內はまた暫くぢつと考へ込んでゐたが、間もなく苛々した心持で立ち上つて、やつぱり腕を組んだまゝ、座敷の中を歩き廻る。不圖足の先に觸つた竹鞭を取り上げて、激しい唸を立てさせながら振る。

ここへ一瓢が襖を開けて、何の氣なしに入つて來て、あぶなく鞭に打たれさうになる。一瓢は五十四歲位の坊主

頭の割間。

一瓢。おつと、あぶない、先生、何をしてゐらつしやるんです。危く頭をぴしりと一打、やられるところでございましたよ。

源内 （笑つて）はゝゝゝ、一瓢か……。望みとあらば御見舞申すぞ。

一瓢。いや、もう、眞つ平々々。この坊主頭にそんなものを御見舞申されたら、もう一たまりでもございません。

源内。それほどやさしい頭でもあるまい。如何だ、ひとつわしにこの鞭でお前の頭を打たせて呉れぬか。

一瓢。いや、それだけはお許しを願ひます。

源内。はゝゝゝ、弱い奴だな。

一瓢。弱い奴と云はれませうが何と云はれませうが、打たれることだけは眞つ平々々……。しかし先生は、如何してそんな鞭などをお持ちなのでございます。

源内。（手の鞭を見て）これか……。わしはこの鞭で、誰でもわしの氣に入らぬことをした奴を打ち敲くのだ。

一瓢。先生にも似合はない、手荒なことをなさいますな。

源内。何が手荒なものか。その位のことは當り前だ。

一瓢。しかしそれで打たれては、どんな男でも堪りますまい。

源内。（快ささうに笑つて）うん、堪るまいよ。しかしわしが心から聲を上げて笑ひたくなるのは、この竹の鞭を手に握つて、ぴしぴし人を打つ時だけだ。その時だけは、わしも始めて生きてゐる人間を相手にしてゐると云ふ氣がして、全く聲を上げて笑ひたくなる位愉快になるのだ。鞭が唸りながら相手の體に飛んでゆく……。ぴしり〳〵と肉に喰

天紅。ああ、さうか。さあ、みんな早くお出迎ひをしろ。お出迎ひをしろ。

天紅と福之介は急いで出てゆく。四五人の門生が玄關の方へ走つてゆく跫音が聽こえる。——

短い間。平賀源內、襖を開けて入つて來る。五十一歲。半白の髮。色の白い小肥りに肥つた、人品のいい立派な男。

源內。（襖のところで廊下の方を振り返つて）おい、一瓢。何をしてゐるのだ。早く來い早く來い。はゝゝゝゝ、何を馬鹿なことを云つてゐるのだ。飛んだ茶釜の洒落なぞはもう古いぞ。そんなことを云ふとお前の年が知れるばかりだ。

源內はさう云ひ棄てゝ書齋に來て、神經質らしく座敷の中をぢろぢろ見廻はしてから机の前に座る。誰かいぢりはしなかつたかと云ふやうな心持で、机の上に置いてある書きかけの書類を注意深く改めて見てから、ぢつと腕を組んで考へ込む。肩がひとりでにぐつと暗く引き寄せられる。

廊下の方で門生達の笑ひ聲が聽こえたので、源內は急に顏を上げて、忌々しさうにそつちを睨む。

源內。ええ。何が可笑しい。何を笑つてゐるのだ。わしはああ云ふ笑ひ聲を聽くと、何だか胸がむかむかして來る。こんな馬鹿げた世の中に、何の可笑しいことがあるのだ。盲目萬人の世の中だ。目の開いたやつは、唯の一人だつてありはしない。

源內はまた暫くぢつと考へ込んでゐたが、間もなく苛々した心持で立ち上つて、やつぱり腕を組んだまゝ、座敷の中を歩き廻る。不圖足の先に觸つた竹鞭を取り上げて、激しい唸を立てさせながら振る。

ここへ一瓢が襖を開けて、何の氣なしに入つて來て、あぶなく頭に打たれさうになる。一瓢は五十四歲位の坊主

頭の割鬪。

一瓢。おつと、あぶない、先生、何をしてゐらつしやるんです。危く頭をぴしりと一打、やられるところでございましたよ。

源 。（笑つて）はゝゝゝ、一瓢か……。望みとあらば御見舞申すぞ。

一瓢。いや、もう、眞つ平々々々。この坊主頭にそんなものを御見舞申されたら、もう一たまりでもございません。

源内。それほどやさしい頭でもあるまい。如何だ、ひとつわしにこの鞭でお前の頭を打たせて見れぬか。

一瓢。いや、それだけはお許しを願ひます。

源内。はゝゝゝ、弱い奴だな。

一瓢。弱い奴と云はれませうが何と云はれませうが、打たれることだけは眞つ平々々……。しかし先生は、如何してそんな鞭などをお持ちなのでございます。

源内。（手の鞭を見て）これか……。わしはこの鞭で、誰でもわしの氣に入らぬことをした奴を打ち敲くのだ。

一瓢。先生にも似合はない、手荒なことをなさいますな。

源内。何が手荒なものか。その位のことは當り前だ。

一瓢。しかしそれで打たれては、どんな男でも堪りますまい。

源内。（快ささうに笑つて）うん、堪るまいよ。しかしわしが心から聲を上げて笑ひたくなるのは、この竹の鞭を手に握つて、ぴしぴし人を打つ時だけだ。その時だけは、わしも始めて生きてゐる人間を相手にしてゐると云ふ氣がして、全く聲を上げて笑ひたくなる位愉快になるのだ。鞭が唸りながら相手の體に飛んでゆく……。ぴしり〱と肉に喰

ひ込むやうな音がひゞく……。皮が破れて血が流れる……。ひいひい云ふ叫び泣の聲が聽える……。さう云ふ時だ、胸の底の方から爆發するやうに、激しい笑ひが込み上げて來るのは。生きてゐる、生きてゐる、こいつだけは生きてゐると思ふと、わしの體は喜びのために慄へて來る。世の中には、死んだ人間ばかりゐるのぢやあない、生きてゐる人間もゐるのだと云ふことは、どの位わしを心丈夫にするか知れやしない。よおし、多くの人達の幸福のために、もう一戰ひしやうと思ふと、急にわしの體には元氣が出て來る。如何だ、一瓢。お前にはわしのこの氣持が分るか。

一瓢。さやうでございますな。

源内。（投げるやうに）分るまい。分るものか。お前ばかりぢやあない、おそらく誰にも分るまいよ。この氣持の分るのはおれ一人だ。源内の氣持は、唯源内一人に分るだけだ。本草を學んだのは誰のためだ。物産會を開いたのは何のためだ。蘭學をやつたのも自分のためぢやあないぞ。わしはみんな世のため、人のためと思つてやつて來たのだ。

一瓢。いや、そのことならばわたくしにはよく分つてをります。

源内。嘘を吐け。胡麻を摺るな。

一瓢。いや、胡麻を摺るなどと云はれては心外でございます。

源内。はゝゝゝ何が心外だ。狸の癖に人並の口を利くなっ（歩き廻りながらエレキテルの道具を指して）見ろ。このエレキテルだつてさうだ。わしが二度目に長崎へ往つた時、大通辭の吉雄幸左衛門と一緒に阿蘭陀屋敷に往つて、見て來たやつを工夫をして、拵へたのがその機械だ。物理の上から考へれば、別に不思議でも何でもないのを、わしがその機械を造つて火を發して見せると、世間の奴等はみんなびつくりしてしまつて、わしを飯綱使ひか何ぞのや

うに云ふ。

一瓢。わたくしも何時だか見せて頂きましたが、全くわたくしのやうなものは、あれにはびつくり致しました。

源内。(點頭して)お前達はびつくりもしやう。しかし見たいと云つて招かれるから、機械を持つて往つて見せてやると、諸大名が揃ひも揃つて、わしを切支丹の術か何かを使ふ、油斷ならぬもののやうに思はれるのには呆れたよ。こんな機械を造つたのも、やつぱり世のため、人のためを思ふからだ。それを人民の上に立つた大名までが、そんなことを思ふやうぢや情ないぢあないか。みんなどいつもこいつも盲目ばかりだ。目が潰れてゐて見えないのならまだいゝが、目が開いてゐてものが見えないのだから始末が惡い。

源内は苛々しながら机の前に來て、机の鞭を荒々しくそこに抛り出して座る。短い間。源内は机の上の書類を、二三度慌ただしげに引つくり返して見る。不圖火鉢に火がないのに氣が付いて、激しく手を鳴らす。

一瓢。何か御用でございますか。

源内。(苛立しげに)火鉢に火がないのだ。

一瓢。ああ、これは氣の付かないことを致しました。早速持つてまゐりませう。

源内。(立ち懸けるのを制して)餘計な世話を燒くな。お前はそこに座つてゐろ。そんなことは門生の役だ。

一瓢。はい、しかし……。

源内。ええ、餘計な世話を燒くなと云ふのに……。(また激しく手を鳴らす)

門生の二、おづおづ襖を開けて入つて來る。

門生の二。先生、お呼びになりましたか。

源内。ああ、呼んだ。火を持つて來い。

門生の二。はい。(愚圖々々してゐる)

源内。(怒鳴り付ける)火鉢の火だ。分らないのか。

　門生の二、直ぐに出てゆく。

　源内は一瓢がそこにゐるのも忘れたやうに、机の上の書類から目を離さずにゐる。

源内。(點頭きながら呟く)うん、如何にしても、このことを田沼様へ……。(不圖一瓢のゐるのに氣づいて)一瓢。お前はわしを狂人だと思ふか。

一瓢。いゝえ、如何致しまして……。狂人などとは飛んでもないことでございます。

源内。しかし世間にはわしのことを、あれは風來ではない瘋癲だなどと申すものがあるさうぢやないか。

一瓢。さうでございますか。怪しからんことを云ふ奴がございますな。わたくしは一向に存じません。

源内。はゝゝゝ、また狸めが空呆けてゐるな。

一瓢。いや、全くこれは存じませんので……。

源内。まあ、知らぬなら知らぬにして置け。しかしな、一瓢。

一瓢。はい。

源内。(無造作に)わしは全く狂人だよ。

一瓢。はゝゝゝ、冗談を仰しやつちやあいけません。先生が狂人なら、世間に狂人でないものは一人もないと云ふことになります。

この話の間に、門生の二、火鉢に火をついで、おづおづと出てゆく。

やや長い間。源内は暫くぢつと頂垂れてゐたが顔を上げる。

源内。しかし、一瓢。わしはほんとは寂しいぞ。女房もなければ、子供もない。が、そんなことは、わしは少しも寂しいとは思はない。太田南畝だの、平秩東作だの、わしには水魚の交をしてゐる友達がある。しかしわしはそれでゐて、何だかひどく寂しいのだ。全く自分でも氣が狂ひはしないかと思はれるほど寂しいのだ。(だんだん感傷的になつて)今日もさうだ。何だか寂しくつて堪らないから朝早くから出懸けたのだ。南畝のところに往かうかと思つたが、あいつは如何も年も違ふし、あんまり氣力がなさ過ぎて、話をしてゐてもむしやくしやして來る。そこになると東作の方が面白いと思つたから、わざわざ四谷まで出懸けて往くと、これが何處へか遊びに往つたと見えて、昨夜から留守だと云ふのだ。

一瓢。それはまた生憎なことでございましたな。

源内。うん、まあ、留守ならば仕方がないと思つて歸つて來ると、丁度柳原の河岸のところで、お前が歩いてゐるのを駕籠の中から見付けたのだ。

一瓢。ああ、さうでございましたか。わたくしまた突然名前を呼ばれたので、どなたかと思ひました。

源内。丁度いいところでお前に會つたのだよ。お前に會はなけりやあおれはほんとに狂人になりさうなところだつた。

一瓢。それでは先生、ひとつ今夜あたり、何處ぞへ氣晴らしにお出懸けになつたら如何でございます。寂しいなぞとお思ひになるのは、家にばかり引つ籠つて、ゐらつしやるからのことでございますよ。ぷうんと五體に染みわたるやうな、伽羅の匂ひでもお嗅ぎになつたら、何のその位の寂しさは、直ぐに消えてなくなります。先生、ひとつ一

肩でぶつ飛ばせやうぢやあございませんか。

源内。(不機嫌に首を振つて) 厭だ。わしは伽羅の匂ひなんか大嫌ひだ。

一瓢。はてな、お嫌ひとあれば致し方ないが……。

源内。(忌々しさうに) 一瓢。お前はわしの寂しさが、伽羅の匂ひ位で消えると思つてゐるのか。そんな生やさしい寂しさなら、わしは狂人にならずとも濟むだらうよ。

源内はまた苛々しながら、机の上の書類を、落ち付かない様子であちこちと讀む。

源内。(つぶやく) さうだ。わしはやつぱりここに往くのだ。ここに新しい領土を開拓するのだ。わしはきつと新しい、立派な世界を造つて見せるぞ。

源内は暫くの間何か空想に耽つてゐるやうな様子で、ぢつと机の上の書類に目を留めてゐる。

廊下の方で跫音が聴こえて、門生の福之介が襖を開けて入つてくる。

源内。(覺えずぎよつとしたやうに書類を隠して) 誰だ。何の用だ。

福之介。はい、わたくしです。

源内。(顔を見て) うん、お前はたしか秋田と云つたな。何だ。何の用だ。

福之介。はい、あのう、お客來でございます。

源内。誰だ。どなただ。

福之介。お内儀風の御婦人の方で、先生にお目に懸かつてお禮を申し上げたいと云ふ口上でございました。

源内。(苛々たしげに) 口上は口上で後でいい。わしは誰だと訊いてゐるのだ。

福之介。はい、あのう、ついまだ……。

源内。たわけめ。そんなうつそりで源内の門生が勤まると思ふか。（一瓢の方を向いて）おい、一瓢。お前ちよつと往つてお取次をして來て呉れ。

一瓢。かしこまりました。

一瓢急いで出てゆく。その後から福之介もすごすご出てゆく。

源内は書類をまた机の上に置いて、ぢつと腕を組んで思ひ沈む。

源内。（切れ切れにつぶやく）小笠原島……新しい領土……新しい自由の國……。

源内の頬に始めて快さそうな微笑が浮ぶ。しかしその笑ひの影もすぐに消える。そこへ一瓢が笑ひながら入つて來る。

一瓢。（浮いた調子で）先生、珍しいお客でございます。まあ、誰だか當てて御覽なさいまし。

源内。（ちよつと考へて）珍しい客と……。誰だらうな。

一瓢。先生もよく御存じなら、わたくしも知つてゐる婦人の客、と申し上げたら大抵お分りになりさうなものでございますが……。

源内。いや、分らんよ。誰だ。

一瓢。あの、丁字屋にゐた雛鶴でございます。

源内。ああ、雛鶴が來たか。年季が開けてから横山町邊の小間物屋に片附いて、大層幸福(しあはせ)に暮してゐるとのことだつたが、どんな樣子だ。

一瓢。はいもうすつかりお內儀風で、わたくしもすつかり見違へました。
源內。さうか。丁度お前がゐていいところだつた。直ぐにここへ通せ。
一瓢。しかし先生のお書齋ではあんまり……。
源內。なあに關はんよ。今では歷とした堅氣の家のお內儀だ。何の遠慮が入るものか。
一瓢。さうでございますか。それでは直ぐに……。
　一瓢急いで出てゆく。
　源內は何となくそわそわして、落ち付かない樣子で、机の上の書類をあちこちと引つくりかへしてゐる。
　一瓢は元吉原の丁字屋で雛鶴と云つて勤めをしてゐた、小間物屋久五郎の女房おやすを連れて入つて來る。おやすは二十三四歲位の美しい女。
一瓢。まあ、雛鶴さん……ではなかつた、おやすさん、どうぞこちらへ……。
おやす。はい、有難うございますが、わたくしはもうこちらの方で……。
源內。まあ、さう遠慮せずと、ずつとこつちに入つたらいいぢやないか。
一瓢。さあ、先生もああ仰しやることだ。關はず入つたり、入つたり……。
おやす。それでは御免蒙りまして……。（座敷の敷居際のところに座つてから源內に）御近所にをりながら御無沙汰ばかり致してをります。先生にもお障りもなくて、まことにお嬉しう存じます。
源內。いや、さう云う堅い挨拶では痛み入るよ。そなたも廓の風俗がすつかり拔けて、お內儀ぶりがよく似合ふぞ。はゝゝゝゝゝ。」

おやす。相變らず先生の面白いことばかり……。いつもよい御機嫌で、結構なことでございますな。

源内。(自ら嘲けるやうに笑つて)はゝゝゝ、全くいつもいい機嫌だ。ところで如何だ。そなた達の夫婦仲はどんな工合だ。

おやす。すぐにそんな御冗談を……。

源内。いや、冗談ではない。わしは眞面目に訊いてゐるのだ。如何だ。御亭主はそなたを可愛がつて呉れるか。

おやす。(默つて俯向いてゐる)

源内。はゝゝゝ、默つてゐては分らんではないか。そなただつて長い間廓にゐたものだ。さう恥かしがることもあるまい。如何だ。まだ夫婦喧嘩は始まらないかな。

おやす。(微かに)はい。

源内。(不快さうに)さうか。それは結構なことだ。

一瓢。ほんとに雛鶴さん……また間違へた……おやすさん御夫婦の仲のいいことは、近所でも評判な位ださうでございます。

源内。(ますます不快さうに)それだからそれはまことに結構なことだと云つてゐるぢやないか。(おやすに)御亭主はいくつだ。

おやす。はい、わたくしより一つ下の、今年二十二になります。至つてお人好しの、働きのない男でございまして……。

源内。さうか。亭主はそなたより一つ下か。年下の亭主は可愛いもんださうだな。如何だ。そなたもやつぱり可愛いだらう。

おやす。如何でございますか存じません。
源内。いや、そなたが存じてゐなくつても、わしがよく存じてゐるよ。なあ、一瓢。世間でよくそんなことを云ふぢやあないか。
一瓢。ええ、申します、申します。それにこちらの御亭主は、わたしも知つてをりますが、そりや中々いい男でございますよ。おやすさんがどんなに可愛がるかつてことは、訊くまでもなく分つてゐます。ねえ、おやすさん。岡惚でせう。
おやす。あら、一瓢さんまで先生と一緒になつて……。もうそんなことを云ふのは止して下さい。そんなことを訊かれては、ほんとに返事に困つてしまひます。
源内。(寂しく笑つて)はゝゝゝ、わしが云ひ出したのだ。許して呉れ。一瓢ももうくだらんことを云ふな。
一瓢。しかしほんとにこちらの御夫婦は……。
源内。(荒々しく)ええ、止めろと云ふのに分らん奴だな。いくら幇間が渡世とは云ひながら、つべこべとうるさい奴だ。少し默つて引つ込んでゐろ。
一瓢。はい、はい。それでは隅の方に……。
源内。はゝゝゝゝ、そんなに怖れ入らなくつてもいいよ。
一瓢。いや、先生の御機嫌を損じて、何かにまた書かれるといけませんからな。
源内。誰がお前のやうな奴のことを、書くやつがあるものか。
一瓢。しかし先生はあの志道軒のことをお書きになつたぢやありませんか。

源内。ありやあ評判にもなつてゐたし、面白い坊主だから書いたのだ。志道軒はわしの師匠なんだよ。

一瓢。へえ、さうですか。先生が志道軒の弟子だつてことは、わたくしはちつとも知りませんでした。

源内。わしは志道軒の弟子で悟道軒と云ふのだ。

一瓢。成程。悟道軒と……。

源内。道を悟ると書くのだけれど、中々まだ悟られないよ。またわしは悟らうともしないのだ。悟りなどと云ふものは、考へて見れば馬鹿々々しいものだからな。

一瓢。（よく分らずに）さうでございますかな。

源内。さうだとも……。人間悟る位つまらんことはないと思ふね。悟られぬうちが人間なのだ。（おやすのゐるのに氣付いて）いや、もうこんな話は止さう。こんな話は客の款待にもなるまいから……。

一瓢。いや、これは氣が付きませんでした。

源内。（不圖おやすの頭の櫛に目を留めて）ほう、そなたはまだあの櫛を挿しておゐでだな。

おやす。はい、この櫛のお蔭で、わたくしも世間で噂されるやうになりましたから、その御恩を忘れぬために挿してをります。

源内。いや、御恩を忘れぬなどと云はれては、かへつてこつちが痛み入る次第だ。そなたが挿して見れたお蔭で、わしは思はぬ金儲けをしましたよ。

一瓢。ほんとに今ぢやこの櫛をささない女は、ないと云つてもいい位でございますな。それに伽羅ばかりでなく、紫檀や黒檀をお使ひになるやうになつたから、また格別の評判だつて云ふぢやございませんか。源内櫛と云ふ名前は、

今ぢやあもう子供でさへ知つてをります。

源內。(點頭いて)さう世間に弘まつたのも、みなこのおやすさんの雛鶴さんが挿して呉れたお蔭だ。考へて見れば今小間物屋に緣付いたと云ふのも、まんざら緣のないことでもないよ。

一瓢。成程、櫛が取り持つ緣だつたかも知れませんぞ。

源內。(苦笑ひをして)さうとすれば、この源內が結ぶの神か。はゝゝゝ。

おやす。ほんとにどうぞそのおつもりで、これから先もお心易くお願ひ致します。

源內。いや、それもこちらから云ひたい言葉だ。横山町と云へば、さう遠くもないところだから、これからもちよくちよく顏を見せて貰ひたい。

おやす。はい、お邪魔でなければ、日々お伺ひ致します。

薄暗くなつたので、門生の三と四が、燭臺を持つて出て來る。それを置いて直ぐに引つ込む。

おやす。(燭臺を見て氣が付いたやうに)ああ、ちよつとお邪魔致すつもりのところが、飛んだ長居を致してしまひました。それではもうお暇を致しませう。

源內。まあ、いい。まあ、いい。そなたの家は直ぐそこだ。日が暮れたら門生どもに送らせて上げやう。

おやす。しかしあんまり遲くなりましても、家で困ると思ひますから……。

源內。(妬ましさうに)まあ、いゝぢやないか。年下の亭主を持つてゐると、そんなに心配になるものかな。

おやす。さう云ふ譯ではございませんけれど……。

源內。それではもう少し悠くりして往つたら如何だ。少し話したいこともある。

一瓢。まあさう急いで歸りなさるにも及びますまい。

おやす。はい、しかし……。

　おやすが逡巡(たゆた)つてゐるところへ、門生の一が襖を開けて入つて來る。

門生の一。先生、あのう、お客來でございます。

源内。うん、どなただ。

門生の一。四谷の稻毛屋樣でございます。

源内。ああ、東作が見えたのか。さつきわしが訪ねたので、それでやつて來たものと見える。(考へて)あつちの座敷にお通し申して置け。

門生の一。はい。

　門生の一直ぐに出てゆく。

源内。(一瓢に向つて)おい、一瓢。お前御苦勞だが暫く東作の相手をしてゐて呉れないか。

一瓢。はい、かしこまりました。

おやす。お客樣ならばわたくしももう……。(立ち上がりかける)

源内。(留めて)まあ、待つて呉れ。話があると云つてゐるではないか。一瓢。何故往かない。早く往け。何を愚圖々々してゐるのだ。

　一瓢急いで襖を開けて出てゆく。

かなり長い間。源内もおやすも無言。微かに雨の音がしとしとと聽こえる。

おやす。(少し氣味が悪くなつて來たやうな樣子で) ああ、雨が降り出して來たやうでございます。あんまり降りの强くならないうちにお暇致しませう。

源內。お暇々々と、二言目には歸り算段、それほどまでに亭主の傍が戀しいのか。

おやす。いえ、さう言ふ譯ではございませんけれど……。

源內。それならもつと落ち付いてゐたらいいぢやあないか。

おやす。はい、しかしさう悠くりもしてゐられません。お話があればどうぞお早く仰しやつて下さいまし。

源內。うん、今言ふから暫く待て。さう急きたてなくつてもいいぢやあないか。

おやす。しかしお客樣が待つてゐるでございませうし……。

源內。(やや皮肉に) うちでは御亭主が待つてゐるか。はゝゝゝゝ仲が好くて羨ましいよ。

おやす。またそんな御冗談を……。

源內。いや、冗談ではない。わたしはほんとうに心から羨ましいと思つてゐるのだ。(苛々しながら) さうだ。羨ましいと言ふよりも妬ましいのだ。妬ましいと言ふよりも恨めしいのだ。

おやす。何を仰しやるのでございます。妬ましいだの、恨めしいだのと……そんな言葉はどうぞもう仰しやらないで下さいまし。

源內。いくら言ふなと云つても、さう言ふ言葉を云はなければ、話をすることが出來ないのだ。

おやす。(ぎよつとしたやうに) それでは話があると仰しやつたのは……。

源內。(むしろ荒々しく) わしはそなたに惚れてゐるのだ。

おやす。(ぎよつとして立ち上がり懸ける)

源内。(傍へ寄つて)何をびつくりしてゐるのだ。何も驚くことはないちやないか。

おやす。はい、しかし……先生の口からそんなことを承はらうとは存じませんでしたので……。

源内。そんなことゝは何だ。何をそんなに慄へてゐるのだ。(手を取る)

おやす。(振り離さうとして)何をなさるんです。どうぞこの手を……。

源内。離すものか。わしは如何してもそなたを連れて往くのだ。(もの狂はしく空想を描きながら)海の彼方だ。眞つ青な廣い海の彼方だ。そこに新しい世界を造るのだ。四時豊かに木の果の熟するところだ。絶えず春のやうに溫かい風の吹くところだ。爭鬪のない平和なところだ。誰もみんな同じやうに耕し、同じやうに漁り、同じやうに食を分つ樂しいところだ。そこにわしはそなたを連れて往かうと思つてゐるのだ。

おやす。厭です。厭です。わたくしはそんなところにまゐりません。

源内。わしは如何しても連れて往く。

おやす。厭です。

源内。(譫言のやうに)わしは如何しても……。

源内はおやすをぐつと引き寄せやうとしたので、おやすはこれに抵抗する。

源内。(目覺めたやうにわれに返つて)それではどうしても……。

おやす。厭です。厭です。

源内。厭でも關はん。

おやす。そんな亂暴な……

源內。ええ、靜かにしろ。

おやす。あゝ、何をなさるんです。

源內。默つてゐろ。

おやす。いいえ、默つてなんぞゐられません。（叫ぶ）ああ、誰か來て下さい……誰か來て下さい。

　跫音が聽えたので、源內は抱きすくめてゐたおやすの體を放して慌たゞしく机の前に坐る。おやすはそこに倒れて咽び泣をしてゐる。

　門生三四人襖を開けたが、中に入りかねて廊下のところに立つてゐる。一瓢門生を搔き分けるやうにして入つて來る。

一瓢。（詰るやうに）先生、何をなすつたんです。

源內。（苦り切つた顏付で）何でもない。一瓢。お前お內儀を送つて往つてやれ。

一瓢。へい、送つて往くことは承知致しましたが、一體先生何をなすつたんでございます。

源內。（怒つて）ええ、うるさい。しちくどく訊くな。（思ひ出したやうに立ち上がつて）ああ、さうだ。東作が待たしてある。ちよつと往つて會つて來やう。

　この聲を聽くと廊下のところに立つてゐた門生達は、逃げるやうにばらばらと往つてしまふ。

　源內はおやすの方を見返りもしずに、ずんずん開け放してある襖のところから出てゆく。荒々しく襖を閉める。

　短い間。雨が大分激しく降り出して來たと見えて、さあつと云ふ音のやうな音が屋根の方で聽こえる。

一瓢。さあ、おやすさん。まゐりませう。

おやす。（起き上がつて）ああ、一瓢さん。如何も御心配をかけて申譯がありません。

一瓢。いや、あたしこそ申し譯のないことをしました。別にお怪我はありませんか。

おやす。ええ、別に怪我などはありませんけれど……。ねえ、一瓢さん。先生は少し氣が變になつてゐらつしやるんぢやあないんですか。

一瓢。さあ、如何も少し狂（ちが）つてゐるんぢやあないかと思ひますねえ。さつき御自分でも、わしは狂人（きちがひ）だよつて云つてゐらつしやいました。

おやす。さうですか。御自分でもそんなことを……。

一瓢。ええ、何しろこの家は御承知の神山檢校の住んでゐた家で、坊主の幽靈が出ると云ふ噂のある家ですから、今に先生のお身の上に凶（わる）いことがなけりやあいいと思つてゐますよ。

おやす。まあ、そんな噂があるんですか。あたしちつとも知りませんでした。さあ、それぢやあ早く歸りませう。そんな話を聽くと氣味が惡くなりました。

一瓢。それぢやあお供致しませう。（耳を澄まして）大分雨が降り出して來ました。

おやすと一瓢は徐かに襖を開けて出てゆく。

暫くの間舞臺が空虛になつてゐる。一時激しかつた雨の音が、だんだんしめやかになつてゆく。

襖をそつと開けて門生の禰之介が忍び足で入つて來る。書齋の方の座敷を覗いて、誰もゐないのが分ると、今度はひどく大膽に、つかつかと机の傍へ近寄る。机の上に置かれてある書類を見付けると、誰か入つて來るのを氣

にしながら中腰のまま急いで讀む。そのうちだんだん書いてあることに、身も魂も引き入れられてゆくやうに、ぢつと机の前に夢中になつて座り込んでしまう。貪るやうに讀んでゐるうちに、だんだん目が喜びに輝いて來る。點頭(ウナヅ)いたり、微笑(ほゝゑ)んだりする。

開け放しになつてゐる襖から、源内は何か取りに來たやうな様子で、慌ただしげに入つて來る。門生の一人が自分の大切な書類を讀んでゐるのを見付けてびつくりする。立つたままぢつと見てゐたが、そのうち憤怒が勃然と胸に込み上げて來る。源内は疊の上に投げ棄ててあつた竹鞭を取り上げて、福之介の背後に近付く。

源内。(叫ぶ) 何をしてゐるのだ。

福之介。(源内を見て) あつ、先生。

源内。貴様は誰に許されてここに入つた。不埒な奴。(鞭が福之介の頰に飛ぶ)

福之介。あつ……。(頰を押へながら) 御免下さいまし……御免下さいまし……。

源内。いや、許さん……。貴様はあれを讀んだらう。

福之介。いいえ、讀みません。

源内。嘘を吐け。白狀をしろ。

福之介。(默つてゐる)

源内。よおし、白狀をしないな。あくまで讀まないと云ひ張る氣だな。(猜疑強く歯嚙みをして) ええ、憎い奴……不埒な奴……不屆きな奴……。

源内は福之介をそこに引き摺り倒して、もの狂ほしく叫びながら、さんざん鞭で打ち續ける。

源内。（鞭打ちながら）さあ、白狀をしろ……。讀んだと云へ……。何とか云はんか……。强情な奴だ……。何故默つてゐる……。泣け、喚け、吼えろ……。ええ、何とか手答へのあるやうな返事をしろ……。

福之介はそこに倒れて、ぴしりぴしり激しく鞭で打たれながらも、强情にぢつと耐へて默つてゐる。源内はこんな男に出會つたのは始めてなので、氣味惡く思ひながらも鞭の手を止めない。

源内。畜生……强情な奴だ。何故泣かない。何故喚かない。何故吼えない。

ぴしりぴしりと肉を破るやうな鞭の音。しかし福之介は呻きもしなければ泣きもしない。

源内。（苛々しながら打ち續けてゐるうちに不圖氣が付いて）さうだ。こんな鞭だから徹へぬのだ。（叫ぶ）おい、天紅……。天紅は如何した。天紅……天紅……。

もの音を聽いて驅け付けて來た門生を押し除けて天紅が出て來る。

天紅。先生、如何も申譯がございません。

源内。申譯などは如何でもいい。木刀を持つて來てこいつを打て。

天紅。ええ、木刀で……。

源内。さうだ。こいつには竹の鞭などでは徹へないのだ。

天紅。しかし、先生……。

源内。何だ。貴樣までわしの云ふことに抗ふのか。

天紅。さう云ふ譯ではありませんけれど……。

源内。それなら早く木刀を持つて來てわしと一緒に打て。

天紅。はい。

天紅は思ひ切つたやうに、廊下の方へ往つて木刀を持つて來る。

源内。さあ、打て。聲を立てるまで打つて呉れ。わしにはこいつの默つてゐるのが氣味が惡いのだ。(顔を反けながら鞭を上げて打つ) ええ、何故泣かない。何故喚かない。何故吼えない。何故さう何時までも默つてゐるのだ。

天紅も源内と一緒に木刀で福之介を打つ。そのうち福之介微かに呻く。

源内。うん、よおし、呻いたな、おのれ……。生きてゐる證據を始めて見せたな。さあ、もつと呻け……。もつと吼えろ……。

ぴしりぴしり肉に喰ひ込むやうな鞭の音。源内はもの狂ほしく、夢中になつて打ち續ける。

そのうち天紅不圖びつくりしたやうに木刀の手を留める。

天紅。(ぢつと福之介の顔を見詰めて) 先生、大變です。

源内。(鞭の手を留めて) 何だ。何が大變なんだ。

天紅。何だか秋田は死んでしまつたやうに思はれます。

源内。(愕然として) 何、死んだ……。(ぢつと福之介の顔を見詰める)

天紅。(福之介の口に手を當てて) 何だか息がないやうです。

源内。(同じやうに口に手を當てて) ああ、これはいかん。さあ、早く氣附の藥だ。(手早く机の抽斗から藥を出して) さあ、早く水を持つて來い、水を持つて來い。

門生の一人、急いで水を取りに往つて來る。藥を飲ませたが、如何しても息を吹き返さない。

源內。（稲之介の體を改めながら）全く打ちどころが惡かつたのだ。もう駄目だ。わしは到頭解死人となつた。

天紅。いいえ、先生。木刀で打ちましたのはわたくしでございます。

源內。打てと吩附けたのはこのわしだ。お前はまあ默つてゐるがいい。

天紅。しかし、先生……。

源內。まあ、いい。心配するな。わしはもうちやんと覺悟を極めてゐるのだ。（門生達の方を向いて）兎に角誰か檢視を願ふやうに申し出て來て呉れ。

門生達は互ひに讓り合つてゐたが、そのうち一人が仕方なしに出てゆく。

源內。（不圖机の上の書類に氣付いて）天紅。その机の上の書きものを、火鉢の中で燃してしまつて呉れ。

天紅。しかし折角お書きになつたものを……。

源內。ええ、燃せと云つたら早く燃してしまはないか。

天紅、書類を破つて火鉢の中に投げ入れる。源內は火の燃え上がるのを默つてぢつと見詰めてゐる。

平秩東作が、びつくりしたやうな顏付で、飄然として入つて來る。四十九歲。洒落なる町人風の男。狂歌師。

東作。如何も飛んだことになつたもんだな。

源內。何とも面目ない次第だ。やはり世間で云つてゐる通り、わしは風來ではなく瘋癲であつたかも知れんと思ふよ。しかしわしをこんな狂人(きちがひ)にしたのも、みんな世間の奴等ぢやあないか。わしは到頭世間の奴等の思ふ壺に嵌つたのだ。世間の奴等はわしが人を殺したのを見て、それ見たことかと云つて笑ふだらう。自分達で狂人(きちがひ)にして置きながら、知らん顏をして嘲けるやうな笑ひ聲を、酷たらしく浴せ懸けるのが世間の奴等だ。しかしみんなが笑ふのも無

理ではないよ。わしは自分でも自分が嘲笑ひたくなる。はゝゝゝ。（寂しく笑ふ）

東作。お祭しするよ。全く源内さん。お前さんの云ふ通りだ。あたしだつて今の世間の奴等には、もう疾うにすつかり愛想を盡かしてゐるのだ。

源内。しかしお前さんはまだわしのやうに、狂人にされてしまはないからいい。

東作。それももうさう長いこともあるまいよ。

源内。いや、しかしお前さんは呑氣だからなあ。

東作。そりやお前さんのやうに、學問がないだけに呑氣なのだ。

源内。呑氣な人は羨ましいよ。わしは生れてから以來、一日も何かしずにはゐられなかつたのだ。しかしもういよいよこれでお終ひだ。（筆を取つて何か書いてから東作に見せる）如何だ、これは。

東作。（ちつと讀んで）珍らしいな。發句だな。乾坤の手をちぢめたる氷かな……。

源内。（寂しく笑つて）はゝゝゝゝゝ、今のわしの心持だ。東作、よくその句を覺えてゐて呉れ。

東作。（涙含みながら點頭いて）うん、覺えてゐるよ。（もう一度讀む）乾坤の手をちぢめたる氷かな……。

源内。（天紅始め門生達の方を向いて）わしもこれから牢に下らなくつてはならんだらうからな。もうこれつきり會へないかも知れない。みんな達者でゐろ。體を大事にしなくてはいかんよ。

門生等言葉なく頭垂れてゐる。

東作もう一度微かに今の句を繰り返してよむ。

雨の音。すすり泣の聲。

――靜かに幕――


マツダランプとサテン色セード
新らしい電燈笠
従来皆様から非常な歓迎を忝なく致して居りましたサテンセードに美しい色を着けたもので御座います。
淡紅、淡黄、淡緑の色合はさよきサテン・色セードは曾てない美しい笠。気持ちよい笠としてきつと皆様の御気に召す事と信じます。
日光色、空色、スミレ色、桃色、草色、白色、
マツダランプ製造元
東京電気株式会社
神奈川県川崎市
WH—BNS—5

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれは一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金　口座番號は東京三三四番　長野三二〇五番なり

一郵劵代用　は謝絕す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるへし、弊社は直ちに其取扱手續をなすへし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらされは雜誌發送せす

一金二圓以上五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委托料及送料共）

一中央公論及婦人公論代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必す返信料を要す

大正十四年七月廿日印刷納本
大正十四年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
發行所　中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

